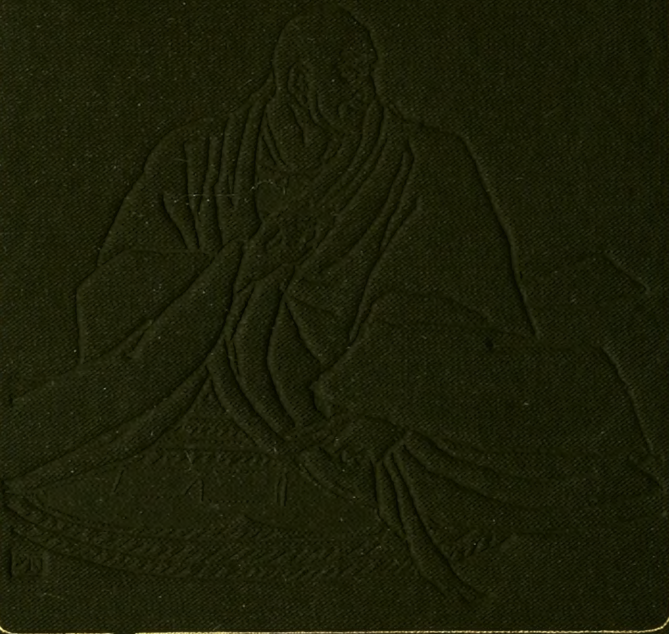
國文註釋全書



東宮侍講　本居豐頴
文學博士　木村正辭　校訂
文學博士　井上頼圀

國文註釋全書

東京
國學院大學出版部刊行

目録

國文注釋全書總序

戰勝の日本、國力發展の日本、しかも文運は武運に伴はずして、大著述の世界に誇示すべきものなしと、これ識者歎息の聲なりとか、實に至當の言なり。然れども大著述は容易に成る者にあらず、必大識力ある學者を待ちて始て成る、而してかゝる學者は、又多くの古人が經營の基礎に立ちて、始めて功を成す。されば一成功者の陰には、多數犧牲の心血の灑がれたるを忘るべからず。此古人心血の凝結せるものを沒却して、徒に後人の成蹟のみに謳歌するは、學者の本意にあるべからず。今源氏物語に就いて言はんに、萩原廣道氏の

評釋は、注釋の大成せるものなり、されども上に玉の小櫛あり、新釋あり、湖月鈔ありて、始めて此を成したるなり。湖月鈔は、又何海、孟津、岷江入楚、花鳥餘情等に賴りて得たる結果なり。凡學海の廣さよりいはば、源語の訓詁の如きは、一粟を散せるに類す、しかも其一粟の上に刻める、古來幾多の學者の精力は甚深なり。然るを古人精力の存する所秘匿せられて。世に顯れざる時は、後人は幾度も幾度も先人の爲せる所を繰返さざることを得ず、實に徒勞の甚しきなり。若この徒勞を省き。一步にても前進せば學界はそれ丈の開拓を遂げたるなり。されば文運を進めて大著述の出現を促さんが爲には、先づ古書の供給を豐にするを急務なりとす、而して又先哲

に報いる所以なり。

出板の不自由なりし時代に於てすら、志ある人々は夙に此に盡したり、佚存叢書、甘雨亭叢書、群書類從の如き是なり。初の二書は大名旗本の有力者の手に企てられたれば格別としても、瞽人の身を以て此大願を起し、毎日天滿宮を拜し、心經を讀誦して、遂に空前の大出板を成功せる塙檢校の如きは、彼の汲古閣本の發願者たる毛晉を凌駕せる者といふべし。此書出板の結果は、國史國文に偉大なる影響を與へて、今に至りて斯道の學者は皆其恵を蒙れり。

今日文明の世の忝さには、出板は自由なり、古書は多く現れたり、此時に當りて此秘藏を開發して、天下の學者に古書の供給を豊にせ

んは、勞少くして功多く、塙檢校の時の如きにはあらず。されば史籍集覽、正續國史大系、正續群書類從、數輯の故實叢書、さては國書刊行會の出板事業等、前後に起りて、識者は歡呼の聲を絕たず。今又室松君の力によりて、國文注釋全書の出板を見る、いかで欣喜せざるべけん、序文の囑、固より快く諾する所なり。然れども近來序文の用、其書の裝飾までに加ふるものあり、價値の保證の爲に加ふるものありて。序文の本旨に遠ざかれる風あり。そは余の屑とせざる所なり。故に余は此序文を利用して、此書の編者と讀者とに對して、一二の注意をなさんと欲す。

國文の注釋に關する書籍は頗多數なり、此一擧に翻刻し盡さんこと

なるべく貴重なるものは、固より不可能なり。故に古書中に就いても、成るべく貴重なるものにして、類本少きものを撰擇すること是一つ。古寫本には類本少きを常とす爲に校正の便を缺くこと多ければども、成るべく博搜して校正を嚴密にせんこと是二つ。近來の翻刻には、やゝもすれば假名遣を變改し、紙數節約の爲に文段を併合し、印刷の便の爲に頭注傍書を省略する類あり。此の如きは古書を戕賊するものなり、愼みて避けざるべからず、是三つ。此三つは重なる者を擧げて、編者に望む所なり。同時に又讀者にも望む所なくんばあらず。古書の校正難は、古人も言へる如く、落葉を掃ふに同じ、隨つて掃へば隨つて來る、これにて十分なりと思ふも、手を換へ目を改むれば、必多少

の失誤を發見すべし。殊に校正は原本より善くならしむるものにあらず、故に未定稿のまゝに傳はれる書の如きは、殊に此困難を感ず、況やそれが一再傳寫を經たるは、更に難事なり。若嚴格に備はらんことを求めて、善美を責めんには、古書はいつまでも出板の機を得べからず。されば余は多數の讀者と共に、幾分の寛恕を豫期して、事業の成功を期待せんと欲す。

余はこれに就て更に感ずる所あり。吾邦人は、戰勝以後清國を輕視すれども、清國が文教奬勵につとむる所は頗感歎に堪へたるものあり。著書によりて位を陞せ功を錄せらるゝは勿論、往々上諭又は御製の序文を賜ひて褒賞を加へ、著者はこれを卷首に朱書して、光榮

を標榜せり。古書を蒐輯校刊して叢書となせるものさへ、往々この優恩を蒙ること少からず。此を以て彼邦叢書の富は前古に比なく、古書は殆遺憾なく世に現はる。これ固より四庫全書の欽定などが模範を示したるにもよるべけれども、此上諭賜序等が、學者に及ぼす影響は至大なりといふべし。本邦に於ては、御製の賜序は僅に一二に止まり、聖諭を冠せるは大日本史の外には見る所なし。彼我國情を異にし、制度も亦同じからざれば、今更に清國に規撫せんことは望むべからずといへども、文運の發展に志ある我國人は、清國の皇室が著述界に對する奬勵の親切なるが如く、成るべく保護推奬して成功を容易ならしめ、かゝる出板事業の續々起りて、古書典籍の板

に上らざるものなきを期せんとす。これ亦文運を進め、光彩ある國力の發揚を謀るの道なり。

明治四十一年三月

文學博士　萩野由之識

緒　言

一太平記抄　著者詳ナラズ、太平記中ノ難字難句ヲ抄出シテ一々之ニ詳細ナル註解ヲ加ヘ、且ツ故事古諺等ニ至ツテハ引例考證細密ヲ極ム、附錄音義ハ太平記中ノ熟字熟語ノ音ト義トヲ列擧シテ讀方ヲ附シ略解ヲ加ヘタルモノ、刊本ナレドモ至ツテ少シ、本書ハ內閣秘庫本ニ據リテ寫本校合セリ、

一太平記賢愚抄　釋乾三ノ著ナリ、コレモ太平記中ノ難語熟語等ヲ取リ出シテ之ニ註解ヲ加ヘ、故事古諺ヲモ明カニセリ、蓋シ太平記抄ハ之ニ倣ヒタルモノカ、本書モ內閣秘庫本ニ據レリ、

一太平記年表　河原貞賴ノ著ナリ、後醍醐天皇ノ天應元年己未ヨリ後光嚴院ノ貞治六年丁未ニ至ル、凡五拾年間ノ治亂ヲ年月日ニ繫ゲテ記セルモノナリ、西村道淦ノ序ニ曰ク、『吾友河原風林子源貞賴嘗考古籍徧鑑歷代茹其英華參以己意詳審精密纂撰一書題曰太平記年表若此書者上揭年月下註事蹟

人物家譜無不目該括於是五十年之理亂興亡一開巻則心目之間而得矣』」。ト云ヘリ。以テ本書ノ內容ヲ窺フニ足ルベシ。本書モ亦內閣秘庫本ニ據レリ。

一太平記系圖　著者詳ナラズ。太平記中ノ帝王及ビ武家ノ系圖地名等ヲ掲ゲ讀方ヲ附シタルモノ。本書ハ黑川家文庫本ニ據レリ。

一南山小譜　赤心居士谷森善臣翁ノ著ナリ。彼ノ野史ノ著者環山樓主人飯田忠彥氏ガ嘗テ集メオカレタルモノヲ編輯增補シテ一巻トセラレタル由自序ニ見エタリ。翁ハ今年九十有三歳ノ高齢ナレドモ矍鑠トシテ朝夕机ニ倚リテ讀書ニ餘念ナシ。本書ヲ本編ニ收メントシテ翁ニ請ヘルニ翁云ヘラク『本書ノ出版ハ嘉永五年頃ト覺ユ。其ノ後誤謬ノ點ヲ見デタレバ訂正セマホシク思ヒナガラ其ノ暇ナクテ止メリ。サレバコノ書ヲ見ン人ノ爲ニ其ノ由一言ヲ書キ添ヘテヨ』ト。本書ハ內閣秘庫本ニ據レリ。此ノ秘庫本ハ刊本ノ誤謬ヲ朱ニテ訂正セルモノナリ。翁マタ南朝ノ事蹟ニ就キテ造詣甚深ク著書多シ。『正平の御はらから』『大塔宮二王子小傳』ノ二書ヲモ請ヒテ本編ノ附錄トセリ。

一問答抄　平家物語、曾我物語、十訓抄、古事談、續古事談、今昔物語、承久記、應仁記、明德記、職人盡歌合、古今著聞集等ノ不審ノ條々ヲ問ヘルニ答ヘタルモノ、伊勢貞丈ノ著ナリト云フ、本書ハ黑川家文庫本ノ寫本ニ據レリ、

一源平盛衰記問答　源平盛衰記一卷ヨリ四拾七卷ニ至ル間ノ、不審ノ箇所ヲ問ヘルニ答ヘタルモノ、著者ハ詳ナラザレドモコレモ伊勢貞丈ナランカト云ヘリ、本書ハ和田英松氏ノ所藏ナル寫本ニ據レリ、

一本編ヲ輯錄スルニ當リ、和田英松、黑川眞道、朝井秀實、山本信哉、和田信二郞等ノ諸氏ヲ煩ハシタルコト頗ル多シ、玆ニ附記シテ感謝ノ意ヲ表ス、

明治四拾一年三月廿五日

室松岩雄識

太平記抄

全

太平記鈔第一卷

惣シテ此一部ノ來歷ヲ明メントナラハ高倉院ノ御代治承四年ニ頼朝卿豆州ニテ義兵ヲ擧テ平家ヲ追討セシヨリ將軍家起リ其ヨリ執柄家九代傳ハリ今相模入道ノ時ニ至リテ此亂出來シケリ然ルニ此高時ト云シ人ハ後二條院ノ御宇嘉應元年癸卯ノ歲誕生メ正和五年ニ十四歲ニシテ將軍家ノ執權ヲウケ文保元年ノ三月ニ十五歲ニテ相模守ニ任ス幼年ト云亡氣ノ仁體ナレハ執權モ叶カタカリケレハ武藏前司泰時ノ時ヨリ代ノ政道正直ニ執行ヒ置タリケレハ彼内ノ官領長崎入道圓喜並ニ高時カ舅秋田城介時顯ナトニ委ク貞時世事ヲ申置ダリケレハ互ニ談合ヲ遂テ形ノコトクハ子細ナクシテ年月ヲ送ケリ然處ニ文保二年ニアタリテ當今花園院御位ヲスヘラセ給テ後宇多院ノ第二ノ御子位ニツカセ給ヒテ先帝ヲハ荻原院ト申シ奉リ當今ハ近比ノ明皇ニテ御座シケル程ニ後三條院ノ延久ノ例ニマカセテ記錄所ヲ置テ直ニ政斷ヲ聞食ス賢王ノ聞ヘ四海ニ彌綸スル故ニ哀レ公家ノ御世ニカヘリ關東ノ正體モナキ政道ヲ改メハヤト諸人申アヘリ爰ニ高時カ官領長崎入道モ老耄ニ依テ子息長崎左衞門尉高資ニ官領ヲ申付タリケレハ高資心ニマカセテ天下ノ事ヲ行フ故ニ萬民ノ歎ツモリ關東ノ侍共ニモ深クウトマレニキ世上ハ終ニハカ〳〵シカラシト申ケリ元亨二年ノ春奥州ニ安藤五郎三郎同又太郎ト云者アリ彼等カ先祖安藤五郎ト云者ハ東夷ノ固メノタメニ義時カ代官トシテ津輕ニ置キタル者ノ末ナリ此兩人相論スル事アリテ高資ニ過分ノ賄賂ヲ出シ下知ヲ待處ニ高資彼財ニフケリ決斷イマダ明カナラサレハ彼等カ方人合戰度々ニ及ヘリコレニ依テ關東打手ヲ下シ多ノ軍勢亡ヒケレトモ年ヲ重テ事ユカス承久三年ヨリ以來關東ノ下知スル事ニヲイテハ少モ背クコトナカリキ賤者マテモ御敎書トダニ云ヘハ是非共ニ從ヒ奉リシニ高資カ政道不當ニ行フニヨリ武威モ輕ク成リ世モ亂レヌル事口惜カリシ事トモ也係ル折ヲ得テ内裏ノ近習ノ月卿雲客時々主上ヲ勸メ申サル、事アリ平氏天下ヲ取テ二十餘年源氏世ヲ治テ實朝卿マテハ三十八年ナリ承久ヨリ前後百七十餘年武家天下ヲ恣ニ執行フコト口惜ク思食サレスヤ關東ノ正體ナキ時節ヲ得給ヒテ公家一統ニ成サセ給テ國土ヲモ

治メ民ヲモ撫育アルヘシト申シケレトモ主上時ノ至ラヌ事ヲトノ給ヒテ許シ給ハサレ共達々申ケレハ思召立ケルトカヤ

一關東將軍次第事

頼朝　治二十年治承四年ヨリ正治元年ニ至ルマテ也正月十三日ニ薨ス五十三歲

頼家　正治元年ヨリ建仁三年ニイタルマテ合テ五年也此年七月二十七日ニ受病ニヨツテ八月二十七日ニ長子一幡君ニ讓レリ時ニ六歲九月七日ニ出家シ元久元年七月十八日ニ修禪寺ニテ實朝ノタメニ誅セラレタリ

實朝　頼朝ノ次男字千幡公承久元年正月二十七日戌刻ニ鶴岡ノ八幡宮ニテ誅セラル頼家ノ子息字ハ善哉別當公曉カ所行ナリ合四十一年

平政子　時政カ女頼朝ノ後室ナリ承久元年ヨリ嘉祿二年七月十一日ニ薨ス六十九歲

頼經　藤原攝政左大臣道家公息也ケルヲ鎌倉ノ將軍ニ備ヘ給フナリ嘉祿二年正月二十七日正五位下兼征夷將軍ニ任シ安貞元年ヨリ寛元二年ニ至ル合十八年ナリ

頼嗣　頼經ノ次男ナリ寛元二年四月二十八日ニ征夷將軍ニ任ス同三年七月五日ニ頼經ハ出家シ給ヒケル此ヲ入道將軍ト申ナリ頼嗣幼稚ノ故ニ出家ノ後モ政ヲ聞給ヘリ建長四年ニ至マテ合十八年頼嗣治メ給ヘリ

宗尊親王　後嵯峨院第四王子中務卿宗尊親王ヲ建長四年四月一日ニ請シ下シ奉リ征夷將軍トス宮ノ將軍ニテ下ラセ給始ナリ文永三年ニ至テ將軍ヲ辭シ上洛シ給フ合三十三年

惟康親王　宗尊親王ノ嫡男ナリ文永三年七月二十四日ニ征夷將軍ニ任ス正應二年ニ至ルマテ合二十六歲

久明親王　御深草院ノ王子御年十六歲ニシテ正應二年十月二十五日ニ御下向アツテ征夷將軍ニ成給フ御息所ニハ前將軍ノ御女ナラセ給ヘリ延慶元年八月二十六日後二條院俄ニ崩御アリシ故ニ同月ニ御上洛アリ

守邦親王　久明親王ノ御子ナリ母ハ惟康親王ノ御女也延慶二年ヨリ元弘三年ニ至ルマテ合三十二年以上治承四年庚子ヨリコヽニ至ルマテ百五十四年ナ

リ

一關東執權次第

時政　北條四郎大夫時家ガ一男ナリ遠江守ニ任ス治承四年ヨリ元久二年閏七月十九日丑刻俄ニ出家ス時ニ年六十八同出家スルモノ其數ヲシラス

義時　時政次男ナリ則二十日ニ執權ノ事ヲ令奉相模守トソ申ヌル元久二年ヨリ元仁元年六月十三日ニ六十三歲ニシテ召使ヒケル小侍ニ害セラレタリ

泰時　義時ノ嫡子ナリ任武藏守元仁元年ヨリ仁治三年五月九日ニ至テ所勞ニ依テ出家ス法名ハ觀阿ト云ケル同六月十七日ニ六十二歲ニシテ薨ス

經時　泰時ノ孫修理亮時氏ノ子ナリ是モ武藏守ニ任ス仁治二年ヨリ寬喜四年閏四月一日薨ス法名ハ安樂年三十三歲

時賴　正五位下相模守ニ任ス時氏ノ二男ナリ建長八年十一月二十三日ニ將軍執權ヲ平政村長時等ニ申シ付ケ落髮セリ年三十歲號最明寺法名道崇又號覺了房出家ノ後モ凡世事ヲハ執行ラレケリ弘長三年庚辰十一月二十二日ニ卒ス時三十七歲

時宗　時賴ノ第三男ナリ文永元年八月十日ニ將軍家ノ執權ス弘安七年甲申四月四日ニ出家ス法名道杲號寶光寺入道時年三十四歲同日酉刻ニ薨セリ

貞時　時宗ノ子也時ニ左馬權頭ナリシ生年十四歲ニシテ同甲申ノ歲七月七日ニ彼跡ヲ繼テ將軍ノ執權シ任相模守正安三年八月二十三日ニ出家ス法名崇演號最勝園寺入道應長元年辛亥十月二十六日ニ薨ス合十一年

高時　貞時ノ嫡男也嘉元々年ニ生レテ當年九歲ナリ此モ左馬權頭ニシテ彼跡ヲ繼キ十五歲ニシテ任相模守嘉曆元年三月十三日ニ所勞ニ依テ出家ス法名ハ宗鑑トソ申ケル時年二十四歲也

一太平記序

太平トハ天下靜謐ノ語ナリ何トテ四海ノ亂逆ナル事ヲ記シテ太平トハ云ヘルソヤ此ハ底ノ意ハ代ノ亂ヲソシリタル義ナリ此レヲ風スルト云ナリ異朝ニモ此ニ似タル事アリ唐ノ玄宗帝ノ時ハ祿山カ亂アリテ四海穩ナラス主上モ蜀ノ國ヘ潜幸アツテ諸人ノ歎キ深カリケレトモ太平天子ナト詩ニモ作レリ是モ底コヽロハ譏タル義ナリ

一蒙竊　東都賦曰蒙竊惑焉注曰蒙謙稱也トアリ童蒙ト云ハ幼少ナル者ノ黑白ヲモ知ラス暗昧ナルヲ云フ故ニ文選第四十二ニ蒙鄙之姿ト云ヘルヲ注スル時キ蒙ハ暗也ト云ヒタリ又五十七卷ノ注ニハ蒙不知貌トモ云タリサル程ニ愚ナルコトヲ指シテ蒙トハ云タリ尚書正義ニハ蒙謂蒙稚卑小之稱トモアリ竊トハ公界ヘ出サルコトヲ云也此モ謙ノ辭ナリ

一古今之變化　古ヨリ今ニイタルマテ世間ノウツリ代ル姿ヲ云ソ安危トハ安樂ト危亡トノ二ヲ合テ云ソ天下モ豐饒ナル時モアリ危險トテアヤウクケハシキ時モアリ來由トハ由來根源ノ事也

一覆而無外等　孝經注曰天覆而無外者天也其德無不在焉載而無棄者地也其物莫不殖焉云云　今ハ此文ヲ據トシテ君ヲハ天ニ比シ臣ヲハ地ニ譬ヘテ云タルナリ

一守社稷　天下ノ王者トシテハ必社稷ノ政ヲ本トスルナリ孝經ニ保其社稷而和其民ト云ヘルカ如シ惣シテ人ハ土ニアラサレハ立タス穀ニ非レハ食ハス地廣ケレハ悉敬ヲ盡スコトアタハス五穀多ケレハ一々ニ祭リ得ス故ニ土ヲ封シテ社ヲ立テ土ノ尊ヲ示シ稷ハ五穀ノ最長ナレハ稷ヲ封シテコレヲ祭ルナリ是併天下萬民ノタメニ求福報功ナリコレニ又天子ノ社稷ニハ大牢ノ備ヲマウケ諸侯ノ社稷ニハ皆少牢ト云事アリ其外具ナルコト白虎通ノ上卷ニ見タリ

一夏桀走南巢　夏ハ國ノ名ニシテ代ノ名ト成レリ史記正義曰夏者帝禹封國號也ト禹王夏國ノ主ト成リ給ヘハ夏禹ト云ナリ夫ヨリ第十七主ニアタレル王ヲ桀ト云ナリ本名ハ履癸ト云タソ桀ハヲクリ名ナリ謚法曰賊人多殺曰桀トアリ南巢ハ正義曰括地志曰廬州樂縣有巢湖此巢湖ヲ南巢ト云ソ尚書ニ成湯

伐桀放於南巢云云　又史記ニハ湯遂率兵以伐夏桀々走鳴條注鳴條南夷名也

一殷紂敗牧野　殷モ地ノ名ニシテ遂ニ代トナレリ索隱曰殷在鄴南遂爲天下號云云　紂ノ本名ハ辛ト云タソ謚法曰殘義損善曰紂アリ史記曰周武王於是遂率諸侯伐紂々亦發兵距之牧野注云鄭玄曰牧野紂南郊地名也尙書正義云戰在平野故言野耳云云　其德缺則雖有位不持ト云コト此ヲモツテ知ルヘシ

一趙高刑咸陽　趙高ハ秦始皇ノ臣下ノ名ナリ權柄ヲ執テ恣ナリケルカ諸臣ノ心ヲ試ンカタメニ鹿ヲ用テ馬ナリト云テ二世王ニ奉リケレハ王ノ玉ハク汝ハ誤リケルカ鹿ヲ指シテ馬ト云フコトハト勅シケレハ諸臣ノ中ニ趙高カ心ヲ恐ルヽ者ノハ默然トシテ居スル者モアリ或ハ主上ノ勅ノ如ク鹿ナリト云ヘル者モアリ其時鹿也ト云ヘル者ヲハ吾ヲ蔑ル氣分アリト心得テ後ニ惡クアタリケリ如此恣ナル事多クシテ終ニ二世王ヲハ望夷宮ト云所ニテ弑シタリシヲ彼王ノ御子ニ子嬰ト申セシカ趙高ヲハ殺シ給ヘル也咸陽トハ郡ノ名ナリ關中記云始皇都咸陽今城南大城是山南曰陽水北亦曰陽其城在渭水北又在九嵕諸山之南故名咸陽

一祿山亡鳳翔　祿山ハ唐ノ玄宗帝ノ寵臣也通鑑綱目四十三云祿山本營州雜胡初名阿犖山母再適安氏冒其姓後其部落破散遂散遂與安氏子思順逃來狡黠善揣人情守珪愛之養之爲子注云犖〔力角切〕阿犖山新舊皆作軋犖山々々々虜所謂鬪戰神也祿山本姓康其母阿史德爲巫居突厥中禱子於軋犖山及生有光照穹廬鳥獸盡鳴望氣者言其祥范陽節度使張仁愿搜廬帳欲殺之匿而免母以神所命遂字軋犖山通鑑父死母攜之再適突厥安延偃會其部落破散與延偃兒子思順俱逃來故冒姓安氏名祿山云云　祿山兵ヲ起シテヨリ以來目モ漸昏クナリテ物ノ善惡ヲモ見ワケエス又疽ヲ病テ本性モ益ス躁暴ナレハ左右近所ニ召使ノ者ノモ意ノ如クナラサレハ動モスレハ箠撻ヲ加ヘ或ハ殺害ヲナス威嚴貴ケレトモ用事ハ萬端愚蒙ノシワサ計ナリ此時ニ契丹ヨリ來レル者ノ十餘歲ニ成レリ名ヲハ猪兒ト云召使レテ黠惠ナリ恒ニ撻レテ剩ヘ劔刄ヲ加ヘラレントス故ニ此者イカニシテカ此害ヲ免ントノ謀ヲナス然ルニ祿山カ嬖妾ノ腹ニ子慶ヲ生ス兒ノ安慶緒ニ代ヘテ恩惠ヲ加ヘケル事

ヲ能ク知テ委ク此由ヲ安慶緒ニ語レリ故ニ彼猪兒ト安慶緒ト云合テ猪兒ハ刀ヲ執テ帳中ニ入テ祿山ガ腹ヲ斬ル祿山ハ枕ノ旁ノ刀ヲ執ントスレトモ取エスシテ遂ニ死シヌ安慶緒ハ帳外ニ兵器ヲ持シテ待居タルカ手モナク祿山ヲ討タル故ニ其マヽ燕王ノ位ニ即キニケリ是ハ其道違則雖有威不久ノ義ヲ引アラハセリ

一後昆　文選ノ注ニ昆ハ明也ト云フ然レハ後代ノ明哲ト云フ意ソ

一既往　ステニ過キ去タル事ソ帝範下云欲悔非於既往唯慎過於將來ト云云　今コヽノ文體モ此等ニ本トツケリ

太平記鈔第一卷

一九十五代帝後醍醐天皇　亦四十九世ト云ヘシ諱ヲハ尊治ト申ス後宇多第二ノ御子御母ハ談天門院藤原子内大臣師繼女也實ニハ入道參議忠繼女也御祖父龜山上皇養ヒ申給ヒキ弘安ニ時移テ龜山後宇多世ヲ知ロシメサス成ニシヲ度々關東ニ仰合シカハ天命ノ理忝ク恐レ思ケルニヤ俄ニ立太子ノ沙汰アリシニ龜山上皇ハ此君ヲ居ヘタテマツラント思食シテ八幡宮ニ告文ヲ納給シカト第一ノ御子ニ差タル故モ無テ捨カタキ御事ニ成ニケレハ後二條ヲ居給ヘリ然ルニ此帝早世シマシ〳〵テ父ノ後宇多上皇歎セ給ヒシ中ニモ萬ツ此君ニソ委付シ申サセ給ケルヤカテ儲君ノ定アリシニ後二條ノ一ノ御子邦良親王居給ヘキカト聞ヘシニ思召ス故有トテ此親王ヲ太子ニ立給フ彼一ノ御子幼ナクマシマセハ御子ノ儀ニテ傳サセ給ヘシ若邦良親王早世ノ御事アラハ此御末繼體タルヘシトソ註シ置レマシ〳〵ケル彼親王鶴膝御病有テ危思食ケル故ナルヘシ三十一歲ニシテ御即位四十四歲ノ時南都ヘ潛幸五十二歲ニシテ崩

一狼煙　前漢書注云邊方備胡寇作高土櫓々上作桔槔頭兜笭以草置其中常低之有寇即火然擧之以相告曰烽又以狼糞積之寇至即然以望其煙蓋狼糞爲煙々氣直上雖風吹不斜故也其煙曰燧晝則擧燧夜則擧烽廣雅曰兜笭籠也

一鯢波　鯢ハ雌鯨トテメクシラノ事也海底ノ穴ニ出入スル時ニ潮カ盛ニ成テ大ニ水聲カアル是ヲ軍勢ノトキノ聲ニ比ス事苑四云常以五月就岸生數萬子至八月引子還海鼓浪成雷噴水成雨云云

一富春秋　資治通鑑第五云史記齊悼惠王世家注云春秋富年少也比之於財方未匱竭故謂之春秋富トアリ稚キ者ハ年歲ヲ多タクハヱ持タル意ナレハ春秋富ト云タソ山谷詩ニ吾子富秋春ト云注モコレニ同シ今コヽニ云ヘルニ富貴安穩ナルコトニ用タリ

一無所措手足　論語ニ刑罰不中則民無所措手足トアリ文選五十一卷ノ王子淵カ書タル四子講德論百姓恇惚無所措其手足ト云タソ措ハ置也ト注シタリ少モ安堵ノナキ姿ナリ

一濫觴　惣シテ物ノハシメノ事ニ用ル辭ソ家語ニ江

始出岷山其源可以濫觴及至江津不舫楫不可以涉ト
アルソ又山谷詩曰泯江始濫濫入楚乃無底ト云云
一一朝一夕之故　周易ノ語ソ意ハ由來ノ久キ事ヲ云
ソ故ニ易ノ次ノ句ニ其所由來者漸矣トアルソ
一將軍　崇神天皇十年命四道將遣四方將軍之號正起
於此歟古來ヨリ最モ重職タリ武略ノ器ノニアラサ
レハ其任ニアタラス
一征夷將軍　征夷ノコトハ大日武尊東夷征罰アリシ
ヨリ始レリ其後ハ嵯峨天皇ノ御時ニ文屋ノ綿丸ヨ
リ以來此號ハアルトナリ
一公曉　鎌倉ノ鶴岡ノ別當ニ任シタル人ナリ
一權柄　又ハ權威トモ云タソ文選五十卷ニコレヲ權
柄威力也ト注シタリ治國ハカリコトソ柄ハ器物ノ
エソ柄カナケレハ道具ノ取アツカイハ成ヌコトク
國ヲ治ルニモ指アタリテ取所カアルソ周禮天官志
ニハ八柄ト云コトヲ載タソ其名ヲハカリ示スニ一
曰爵二曰祿三曰予四曰置五曰生六曰奪七曰廢八曰
誅一々ニ理カ有レトモ略スルソ
一承久亂　承久三年六月ニ後鳥羽院ト並ニ順德院ト
御意ヲ一ニセサセ玉ヒテ鎌倉ノ執柄左京ノ大夫義
時ヲ亡ントシ玉フ故義時諸卒ヲ引卒シテ宇治勢多
ヨリ京都ヘ亂入テ遂後鳥羽院ヲハ隱岐國ヘ移シ奉
リ順德院ヲハ佐渡國ヘ配流シタテマツル是ヲ承久
ノ亂トハ云ナリ
一八荒　文選ノ四十七注ニ八荒八方也杜詩一云八荒
開壽域
一己ヲ責　論語ノ語ソ但シ尅己ノ字ニ作也
一高シト云ヘ共危カラス滿テリト云ヘ共溢　孝經ノ
文也
一旌旗　共ニハタトヨムナリ但周禮ニ折羽爲旌トア
リ羽ヲハタノサキニ置ソ又釋名ニハ熊虎爲旗トア
リクマ虎ヲ作リテ著ソ
一貴族ヲ一人鎌倉ヘ申シ下シ奉　尊宗親王ヲ建長四
年ノ四月ニ請シ下シ奉ル事也
一拜趨ノ禮　禮拜ノ品ニ上中下ノ三段アリ事林廣記
ニ詳ナリ趨ハワシルトヨムナリ禮記曲禮曰遭先生
於道趨而進正立拱手トアリ意ハ吾ヨリ上タル人ニ
路ニ値フ時ハツル〳〵ト貴人ノ前ヘワシリヨリテ
手ヲツカネテ立テ居ル事ナリ
一警衛　ツヽシミマモルトヨムナリ

一永仁元年　伏見院ノ年號ナリ
一異賊襲來　異國ノ凶賊ト云義也襲ハ入也ト注シタホトニ入來ト云義モアルソ又掩其不備ト注シタ時ハ用心ヲセヌ所ヘ攻入ル意モアリ
一朝陽　史記序注云朝陽日也トアサヒトヨム也尙書正義云釋山云山東曰朝陽李巡曰山東朝乃見日故云朝陽又爾雅注ニハ旦卽見日又正義ニハ日卽陽ナリトアリ
一朝議　内裏朝廷ノ政ヲサシテ云ソ
一陵廢　高キ處カクツレタル義ナリ釋名ニハ陵ハ隆也ト注シタリソレ〳〵ノ道ノスタレタル事ソ
一宸襟　宸ハ廣韻ニハ天子之居ト云ヘリ賈逵ハ後人指帝居曰宸ト注セリ天子ノ御事ヲ直ニサシテハイワヌ程ニ居所ヲ呼出シテ天子ノ御事ヲハ申ス物ナリ襟ハモノオモヒト讀ナリ然レハ天子ノ御モノ思ヲ宸襟トハ申ナリ
一天地命ヲ革　周易革卦曰天地革而四時成湯武革命順乎天云云　此語ヲ取ルト見タリ文選第一東都賦曰且夫建武之元天地革命ト云ヘリ古今不變ノ天地ナリト云ヘトモ時ノ主人ノ善惡ニヨリテ改テ善クモ惡クモ成ルナリ文選ハ光武ノ德ノ勝タル義ヲ云ソタメニ書タル語ソ
一逸遊　逸ハ縱也ト注スル也ホシイマヽトヨムナリ
一前烈　烈祖トテ先祖ノ事ヲ云也文選第十四ニモ如此注ス
一地下ニ羞　地下トハ黃泉ト云義ソ先祖死シテ黃泉ニ趣タル人達ニ羞ヲアタユルト云意也
一衛ノ懿公カ鶴ヲ乘セシ　衛ハ國ノ名也懿公字ハ赤ト云フ史記衛世家曰懿公卽位好鶴淫樂奢侈九年翟伐衛懿公欲發兵々或畔大臣言曰君好鶴々可令擊翟々於是遂入殺懿公正義曰左傳云衛懿公好鶴有乘軒者狄伐衛公欲戰國人受甲者皆曰使鶴々實有祿位余焉能戰此意ハ鶴ヲ愛シテアマリノ事ニ軒ニ乘セテ連レテアリキ玉ヘリ代ヲタモツテ九年過テ北狄亂ヲ起シテ衛ノ國ヘ入ル時ニ彼王戰ントスレハ兵ノ云ヘルハ常ニ鶴計ヲ愛シテ我等ニハ疎ナリシヲハ忘レ玉ヒタルカ只今モ鶴ニ軍ヲサセ玉ヘト云テ悉王ニ背ケリ故ニ遂ニ王ヲ敵カ殺シテ其肉ヲ悉食シタリトソ通鑑集覽二十二卷ニモ載タソ左傳第四閔公二年傳並ニ韓詩外傳第七卷ニモ出タリ

一秦ノ李斯カ犬ヲ牽シ恨　秦ノ始皇ノ子二世王ノ臣下李斯ト云フ者楚國ノ上蔡ト云フ所ノ者ナリ趙高ト傍輩ニテ剩ヘ秀タル人ナリ李斯カ謀叛ヲ企ルヨシヲ趙高カサヽエテ李斯カ子李由ト二人ヲ獄ニ入タソ李斯訔ヲ用テ種々ニ理リヲ申シタレトモ趙高カワサトシテ二世王ヘ奏達セス終ニ親子ヲ引出シテ斬セタソ其時ニ李斯子ニ向テ云セヤウニハ一度ヒ申ヒラヒテ吾在所ヘ歸汝ト黃犬ヲヒイテ兎ヲナリトモ取ラセテ居ントト思タレトモカクノ如ク力ォヨハヌ體ニナリテ刑罰ニアフ事ヨト云テ共ニ淚ヲ流シテ死タソ此事ヲ史記列傳二十七曰李斯出獄與其中子俱執顧謂其中子曰吾欲與若復牽黃犬俱出上蔡東門逐狡兎豈可得乎遂父子相哭而夷三族云云　文選第十ニモ黃犬何可復牽ト云タソ東坡詩ニモ上蔡公子牽黃狗ト作タリ又胡曾詩ノ中ニモ上蔡東門狡兎肥李斯何事忘南歸ト作タリ楚國ノ上蔡ハ南方ニアタル所ナレハソ

一談天門院　藤原內大臣師繼女也實ニハ入道參議忠繼女ナリ

一御年三十一ノ時御位ニ卽ケ奉　文保二年三月廿九日ノ御卽位也三綱トハ白虎通下云三綱者何謂也謂君臣父子夫婦

一萬機百司　尙書皐陶謨云一日二日萬機ト云云　蔡氏カ注ニハ萬幾者言其幾事之至多也トアリ文選ノ第三ニハ言機微之事日有萬種ト注セリ又四十三ニモ萬機萬事也ト云タソ何レモ王者ノ政ニ事ノ多キ姿ヲ云ナリ百司トハ百官ノ司ル道々ノ事ソ

一四境七道　日本ノ都ノ四方ト七海道ノ事也非常ノ誡トハ常ノ往來ニアラサル者ヲ聊爾ニ帝都ヘ入レサラシメントナリ

一國ノ大禁　孟子ニ云始至於境問國之大禁然後敢入ルト其國ニヨリテ樣々ノ大禁アルヘケレハナリ曲禮ニモ必ス諱ヲ問ヘシトアルソ國主ノ諱ヲォカサヌヤウ禮義ナリ此氣ツカヒヲ當ニ作スヘシ他國ヨリ來入ノ者ニモ又此大禁ヲ敎ヘシトソ

一龍斷ノ利　孟子第四云有賤大夫焉必求龍斷而登之以左右望而罔市利云云　此レハ市ノ奉行ナトカ利欲カ深フテ市中ノ高所ヘ登リ居テ左右ヲヨク見回テ何ニテモ所望ノ物ヲ取ルヲ龍斷ノ利トハ云也注ニ龍斷謂堁斷而高者也左右皆望見市中有利罔羅而取

之皆賤其貪也
一商賣　或本ニハ賣ヲ賈ニ作周禮鄭玄注曰通物曰商坐賈曰賣又白虎通云商之爲言商々其遠近度其有亡通四方之物故謂之商也賈之爲言固々有其用物以待民來以求其利者也世上ヲ往覆シテアキナウヲ商ト云ヒ居ナカラニスルヲ賣ト云ソ
一赤土　白氏文集云雨飛蠶食千里間不見青苗空赤土云云 集覽九云赤地空盡無物曰赤滅宮傳注ニ赤地言在地之物皆盡也
一田服　田ノ字ハ非也甸ノ字ナルヘシ尙書ノ禹貢ニ五百里甸服ト云ヘリ王城ノ外ノ四面ノ五百里ナリ甸ハ田ノ事也服ハ事也ト注セリ天子ノ御タメニ田賦ノ事ヲスルヲ甸服ト云ナリ今コヽニ外百里ト云事ハ尙書ニモ史記ノ夏本紀ニモ五百里甸服百里賦納總トアルヲ見テ云ヘル歟唯タ甸服ノ間ト計云フヘシ
一餓莩野ニ滿　孟子惠王篇曰野有餓莩注ニ餓死者曰莩粟トハ玉篇ニ穀粟ノ實ヲ米ト云フ然レハ米ヲ粟ト云フ
一朕不德アラハ天予一人ヲ罪スヘシ　朕トハ天子自御身ヲサシテ仰アル辭也秦ノ始皇帝ヨリ定メラレタリ貞觀政要六云關中旱大饑太宗謂侍臣曰水旱不調皆爲人君失德朕德之不修天當責朕百姓何罪而多遭困窮云云 此文體ニ據テ云ナラシ
一黎民　黎里色也謂民之首黑也千字文ニハ黎首レイシユノタミト讀メリ或ハ黎ハ衆也ト注セリ
一供御　御ノ字ハ多ノ義アリ食事ノ時ニハ食ノ事也禮記御食於君ト云フ文選第七子虛賦ニ勺藥之和具而後御之ト云注ニ御食也トアリ或ハ乘物ノ時ニハ乘ル事ナリ
一撿非違使　非義ヲカマヘ禮節ニ違背スルコトアレハ往テ追罰スル故ニ非違ヲ撿ト云意ヲ用テ名トスルソ天長七年ニ此局ヲ置ケリ
一九年ノ畜　禮記第四王制篇曰國無九年之蓄曰不足無六年之蓄曰急無三年之蓄曰國非其國也三年耕必有一年之食九年耕必有三年之食已上シカレハ三十年耕ニテ九年ノ畜アル也詮ハ富祐ノ義ヲ云
一虞芮ノ訴　家語曰虞芮二國爭田而訟連年不決乃相謂曰西伯仁也盍往質之入其境則耕者讓畔行者讓路入其朝士讓爲大夫々々讓于卿虞芮之君曰嘻吾儕小

人也不可以入君子之朝遂自相與而退咸以所爭之田爲閑田矣云云　毛詩十六卷其外史記ニモ之ヲ載タソ

一刑鞭モ朽ハテ諫鼓モ撃人無　刑鞭ハ罪ヲ罰スル鞭ナリ蒲ヲ以作ルソ然ルニ治タル世ニハ罪ヲナス人モナケレハ刑鞭モ打ステ置ホトニ朽テ螢ト化シテ去ルソ螢ヲ火蟲腐草化スト注シタソ月令ニモ季夏腐草爲螢トアリ文選三十六云立諫鼓設謗木注曰立鼓於朝有欲諫君撃之設謗木於闕有誹謗使人撃之善曰鄧析子曰堯置欲諫之鼓舜立謗誹之木云云　上古明王ノ世ニモ矯レル臣アッテ民ノ害ヲナス民コレヲ訴訟スレトモ正直ニ奏問マウサヌホトニ堯ノ時ハ門外ニ鼓ヲコシラヘ諫メ訴ント思者アラハ此鼓ヲウッヘシ即諫ヲ聞ヘキトナリ舜ノ時ハアシキ事アッテ誹謗スヘキコト有ラハ此木ニ書ツケヨトテ其木ヲコシラヘテ置ナリ朗詠ニ形鞭蒲朽螢空去諫鼓苔深鳥不驚シカルニ誹謗ノ木ノ形ハイカ樣ナルソト云ニ古今注ニハ即華表也以横木交柱頭如華形如桔槹大路交衢悉設焉或謂表木以表王者納諫

一理世安民　世ヲオサメ民ヲ安穩ニスル事ソ

一命世亞聖ノ才　命ハ名也ト注セリ世ニ名ヲ得タルヲ命世ト云ソ亞ハ次也聖人ニ相ヒ次ノ義ナリ孟子ヲ美タ時ノ辭ナリ趙岐曰名世次聖之才云云　又史記序ニモ信命世之宏才トアルソ

一齊桓覇ヲ行　齊ノ桓公ナリ字ハ小白ト云フ權威謀計ヲモッテ國ヲ取ルヲ覇者ノ道ト云フ王道ノ上ニハキラウ事ナリ論語ニモ桓公ノ九タヒ諸侯ヲ合セラレタヲモ善道トハセヌソ覇ハ把也ト注スルソ

一楚人弓ヲ遺　家語第二云楚恭王出遊亡烏嘷之弓左右請求之王曰止楚王失弓楚人得之又何求之孔子聞之曰惜乎其不大也不曰人遺弓人得之而已何必楚也云云　意ハ楚王ノ意タテハ形ノコトクヨケレトモ少シ狹キソ廣大ナル云ヒヤウニテハ無シ注曰但言人失弓人得之足矣又何用言楚也ト云云　說苑第十四卷ニモ載タリ

一草創雖並一天　此ハ後醍醐天皇ノ王道ヲ忘レ覇王ノ道ヲ行テ一亂ヲ興行アリテ一天下ヲ併セ把リ玉フト云ヘトモ遂ニ三載ヲコヘスシテ又亂トナル事ヲ諷メ云ヒ辭ソ草創トハ始メル義ナリ

一守文　漢書外戚傳云守文之君顏師古曰守文言遵成法不用武功也又文選四十九卷晉紀惣論曰守文之王

李善注曰公羊傳曰繼文王之體守王之法度云云 此皆繼體ノ君位ヲ守文ト云也武功ハ成スニ及ハス偏ニ文道ヲ用テ四海ヲ治ル意ナリサル程ニ初ノ太祖ハ草創ノ功アリ次ノ君位ヲ守文ト云是ハ大段ノ分ケヤウ也又草創ノ太祖一人上ニテモ初メ武德ヲ以テ一天ヲ併呑スルハ草創ナリ靜謐統御ノ絕ルヿナキハ守文ノ義ナリ唐太宗帝アル時ニ侍臣ニ對シテ帝王之業草創與守文孰難トノ玉ヘリ房玄齡カ言サク草創爲難ト魏徵ハイヤ〳〵守文ノ功難シト其故ハ帝王ノ起ルコトハ必前代ノ衰亂ヲウケテ彼愚蒙惡逆ヲ改ム故ニ百姓ハ喜ヲ作シ天道モ力ヲ加故ニ早ク命ニ歸ス然ルニ四海ステニ得テ後ハ必志シ憍高フリ徭役不休百姓モ靜ナラントスレトモ侈務ヤムコトナシ國ノ衰弊此ヨリ起ルホトニ守文ハ難ヒ事ト答タリ太宗ノ玉ハク玄齡ハ此已前我ニ從テ合戰ヲシテ度々艱苦ニアフタレハ草創ノ難ヲ知レリ魏徵ハ天下ノ治タル上ニ驕逸ノ端ノ起ルヲ見テ守文ノ難キコトヲ云フ何レモ其謂アリ去レトモ草創ノ難キコトハ既過タリ今ヨリハ守文ノ難コトヲ愼ミ思フヘシトナリ貞觀政要ニ詳ニアリ

一後西園寺太政大臣實兼公 當家ノ初通季其子 公通 實宗 公經 實氏 公相ノ子實兼ヲ後西園寺ト號スルナリ通季ヨリ第七代ノ孫ナリ

一金雞障 白氏文集胡旋女曰金鷄障下養爲兒又通鑑綱目四十三云設金雞障注障坐障也畫金雞爲飾也云云金雞ヲエカイテ餝タル障子ノコトナリ

一夭桃ノ春ヲ傷ル粧 毛詩第一桃夭篇云桃之夭々傳云夭々其少壯也ト婦人ノ年少ク盛ナルヲ桃ノ花ニ比シタソ今春ヲ傷ルト云タハ不審ナリ春ニ綻フナト云ハヽ聞ヨカラン乎

一毛嬙西施 文選第十九卷神女賦曰毛嬙鄣袂不足程式西施掩面比之無色ト注ニ毛嬙西施皆古之美女也ト云ヘリ又莊子第二卷ニハ毛嬙麗姬人之所美也疏曰毛嬙越王嬖妾也トアリ西施カコトハ處々ニ多ク記シタホトニ畧スルナリ

一絳樹青琴モ鏡ヲ掩 遊仙窟云絳樹青琴對之羞死注魏文帝與繁欽書曰今之妙舞莫過絳樹孟献忠文場秀句曰絳樹者古美妾也トアリ太平御覽婦人部ニモ此文帝ノ文ヲ載タリ少モ違コトナシ青琴ハ文選第八卷司馬相如上林園賦ニ若夫青琴宓妃之徒トアルヲ

注ニ青琴宓妃皆神女也容色異於人俗言粃飾衣服美
麗面纖弱伏儼曰青琴古神女也
一君恩ハ葉ヨリモ薄　恩澤ヲエス寵愛ノナキ義ナリ
王昭君カ怨ニモ自是君恩薄如紙ト云タリ
一皎々タル殘燈　是ハ白氏文集ノ上陽白髮人ニアル
語ソ耿々殘燈背影蕭々暗雨打窓聲耿々ハ明ナル貌
ナリ韻府ニハ光也トアリ蕭々ハ風吹聲ト注シタソ
一人生勿作婦人身　是モ白氏文集第三大行路ニアル
語ソ又事文類聚續集ノ第三ニモアリ同シ事ソ婦人
ノ身ノ自由ナラサル事ヲ恨ル意也
一三千寵愛在一身　長恨歌ノ辭ソ寵ハ重也又ハ崇尊
ノ義ニモ用タソ毛詩ノ注ニ見タソ
一六宮粉黛無顏色　是モ長恨歌ニアルソ周禮云天子
后立六宮
一三夫人等　コレヨリハ長恨歌傳ノ語也文選四十九
彼漢書皇后紀論ニ周禮ヲ擧テ委ク書タルソ后正位
宮闈同體天王夫人坐論婦禮九嬪掌敎四德卅婦主知
喪祭賓客女御序于王之燕寢頒官分務各有典司云云
此中ニ四德ヲ敎トハ婦德婦言婦容婦功ノ四ソ此所
ニモ又毛詩ニモカヤウニ注シタソ

一夫子顧盼　文選三十一ニ顧盼恩惠也ト注シタソ
一殊艷尤態　艷ノ字ハミヤヒヤカトヨムナリ態ハ佛
經ノ中ニモ女ニ八十四態ト云事ヲ說タリ女ノ身モ
チ心タテヲ束テ態ト云ヘリ
一善巧便佞　是マテ長恨歌ノ傳ノ辭ナリ便佞トハ論
語ニ口才也ト注セリ世話ニ便口ナト云義ナリ
一駕スレハ輦ヲ共ニシ席ヲ專ニス　此モ傳ノ意ソ輦
ハテクルマ也力展切說文云人輓車也在車前人引之
也鄉大夫亦乘輦自漢以來天子乘之
一是ヨリ君王等　長恨歌曰從此君王不早朝
一元妃　左傳ニ曰惠公元妃トアリ元ハ大也ト注スル
故太后ト云ト同シ
一光彩ノ始等　可憐光彩生門戶遂令天下父母心不重
生男重生女
一關雎樂而不淫等　論語八佾篇語ナリ關雎ハ毛詩ノ
第一ノ篇ノ名也文王ノキサキ后妃ノ德ヲホメタル
辭ナリ后妃ノ意ニ恒ニ善キ女子ヲアツメ文王ノ助
ケニナシ度ク思玉ヘルヲ不淫ト云タソ
一傾城傾國　前漢書李延年歌曰北方有佳人絕世而獨
立一顧傾人城再顧傾人國寧知傾城國佳人不再得

一螽斯ノ化　是モ周南國風ノ篇ノ名ナリ后妃ノ意ニ妬忌ノ義カ無イ程ニ文王ノ子孫カ衆多ナルヲ螽斯ニ比シテ云タソ螽斯ハイナコト云蟲ノ事也新註ニハ蝗屬ト注シタソ此ハ聚リ居テ和一ニシテ卵育スルコト蕃ナル物ソ毛詩小序云螽斯后妃子孫衆多也言若螽斯不妬忌則子孫衆多也此イナコハ股ヲ以テ聲ヲ作スソ一タヒニ九十九子ヲ生スルナリ

一御子左爲世　御堂關白道長公六男長家大納言正二位忠家大納言正二位俊忠權中納言從三俊成正三定家中納言正三爲家大納言正三爲氏大納言正二爲世大納言正二新後撰集續千載集撰者也御子左流又號二條

一吉田內大臣定房　閑院太政大臣冬嗣公七男良門十五世之孫中納言爲經ノ子息權大納言經長ノ一男也此吉田ヲ今ハ甘露寺ト號ス

一志學ノ歲　論語ニ十有五而志學ト又文選四十六注ニ翰曰志學年十五時也ト

一六義ノ道　毛詩序云詩有六義焉一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌云云　文選序注ニ張銑曰六義者謂歌事曰風布義曰賦取類曰比感物曰興政事曰雅成功曰頌各隨作者之志名也日本ノ歌ノ道モ此六ノ義ハアルトソ

一淺香山　淺香山陰サヘミユル山ノ井ノ淺クハ人ヲ思フモノカハ　此ハ歌ノ母トナシ

一第二宮同御腹　第八ノ宮尊澄コソ同母ニシテ妙法院ノ御弟子ナリ

一總角　童ノツノマキノ時ノ間ヲ云ナリ毛詩ニ惣角丱兮ト云ヘリ文選四十七注ニ總角童子髻也トアリ杜子美注ニハ聚兩髻也トアリ

一瑜伽三密　瑜伽論第一卷音義云此譯云相應此ニ付テ境相應行相應果相應ナトヽテ深義アリ三密トハ身ト口ト意ノ三ニ秘密ノ大事アリ密宗ニカキラス宗宗ニ沙汰アル事ナリ

一高祖大師　傳敎ヲサシテ云ナリ宗々ノ最初第一ノ祖師ヲ其門弟トシテハ何ヲモ高祖ト云ナリ又ハ鼻祖トモ云ナリ

一慈鎭和尙　法性寺關白忠道公ノ御子ナリ山門六十二代座主云云　文壽二年乙亥四月十五日誕生ナリ始ノ諱ハ道快ト云ケル養和元年ニ慈圓ト改名アリ喜祿元年九月二十五日ニ入滅ス時ニ七十一歲ナリ嘉

禎三年ニ慈鎭ト諡號アリ東山ノ吉水ニ住シ玉フ間吉水ノ和尚トモ云ケリ今ノ丸山ト云所ナリ

一春宮　天子ニ成玉フヘキ人春宮ニ立セ玉フナリ離騷經曰溘吾遊此春宮兮王逸注曰春宮東方青帝舍也ト云云 又陳情表ニモ東宮即太子宮也ト注セリ貞觀政要二卷ニモ太宗入春宮注ニ東宮也太宗初爲皇太子ト云東ハ方ノ始也天子トシテ四海ヲ統御シ玉ハントノ首ニ先ツ太子ハ東宮ニ居シ玉フナリ日本紀ニハ所々ニ春宮ヲミコノミヤトヨメリ

一事小大トナク　秦本紀云天下之事無小大皆決於上又出師表ニハ營中之事々無大小トアリ無小大トアルヲハナニトナクト讀ト聞傳タリ

一一ヲ聞テ十ヲ悟　論語ニ回也聞一以知十賜也聞一以知二此辭ニ依ルナリ利根聰明ナル義ナリ

一一實圓頓　法華ハ諸法實相ノ旨ヲ明シ理智トモニ圓滿ノ妙法ニシテ速疾頓成ノ實敎ナレハナリ

一荊溪　晉陵ト云所ニアリ妙樂大師コヽニ居住シ玉フ故ニ門弟ノ者其道ヲ尊テ荊溪尊者ト云ヒケリ

一三諦即是　空諦假諦中道諦ノ三ツハ而モ一ニシテ空モ空ニアラス即是假ナリ假モ即是中道ナリ中道モ即是空也ト云一ニシテ而モ三々ニシテ而モ一ナリト談ス譬ハ明ト鏡トノ三ハ暫時モ離ルヽコト無カ如クナリ是ヲ明喩即空像喩即假鏡喩即中トハ釋セリ天台一家ノ一大事ト云ハ此段ニ極レリ輙ク知ル義ニアラス

一玉泉　荊州ニアリ天台智者大師隋ノ開皇十四年ノ四月ヨリ一夏ノ間此所ニ住シ摩訶止觀ノ一念三千ノ法門ヲ談シ給フナリ初ハ一音寺ト云タレトモ其寺ニ清潔ナル玉泉アルホトニ改テ名トスル也

一第四宮同御腹　是モ第四ハ成良親王ト申ス母ハ准后ニシテ第二ノ宮ニ同シ然レハ少相違ソ

一記別　聲聞緣覺ニカキラス假令龍畜ノ倫ナリトモ得益果ノ者ニ未來ノ體タラクヲ委ク記シ玉フヲ授記別ト云ナリ十輪經第一卷音義云佛受記分別其事也ト云云 授記ニ付テ授ノ字ト受ノ字ニ意アリ

一慈尊　彌勒佛ノ事也彼佛ノ出世ノ時ハ慈氏ト名ヲ云ナリ今ノ佛ヲ釋氏ト云フカ如シ

一儲君　ヒツキノキミト讀ナリ徐晃曰太子副君故謂之儲也又王文憲集序注曰儲謂太子也李善曰漢書疏廣曰太子國儲副君云云 貞觀政要四云儲音除副也太

子君之副故謂之儲君
一竹園　親王ノ唐名ヲ云フトソ
一寶祚　祚ハ尙書ノ注ニ位也ト云フ寶位ト云カ如
一私曰多ノ本ヲ見ルニ儲王ノ次第相違セリ故此中ニ或ハ第一宮或ハ第二等云ヘトモ委シカラス故竊ニ帝王系圖ヲ以テ一二ノ次第ヲ載ス若シ相違ノコトアラハ重テ尋申スヘシ第一ニハ尊良親王中務卿母贈從三位爲子權大納言爲世女於金崎城御自害次世良親王二字略之母參議實俊女也三恒良母准后四成良母同前五義良鎭守府將軍母同前於南朝稱帝號後村上六護良兵部卿母民部卿三位也大納言師親女大塔門主號尊雲於關東被誅七靜尊母同世良聖護院門主後改忠尊八尊澄母同尊良妙法院門主配流讃州此外皇子九人皇女十九人不備書
一法勝寺　六勝寺ノ中ノ一寺ナリ白河ニアリ承曆元年十二月十八日供養アリ帝ノ行幸アリ
一樣々ノ大法　或人云山門四箇大法安鎭熾盛光七佛藥師ノ法ハ山門獨修之普賢延命ハ東寺ニ兼テ修之東寺ノ大法ハ孔雀經仁王經請雨經三井ノ大法ハ尊星王法華ノ法金剛童子ナリ

一烏芻沙摩　大威力烏樞瑟摩明王經上卷音義云烏樞瑟摩次音昌朱反梵語也或云烏芻沙摩此云穢跡舊翻爲不淨潔皆謬新翻爲除穢忿怒尊也文俗ニハ雪隱ノ神ト云是ナリ
一護摩　六波羅密經第三卷音義云或云呼麼梵語也唐云火祭如此方燔柴已上禮記郊特性ニ大子四方ニ巡行アリテ天ヲ祭リ玉フ時東ノ方岱山ニ至テ柴ヲ燒テ其上ニ牲ヲ加テヤキ玉ヒテ此所ニ至レルコトヲ告ルコトアリ
一日野中納言資朝　右大臣内麻呂公　一男眞夏卿十六代孫中納言資宣男俊光大納言正三位一男資名日野流在子孫　二男資朝權中納言從三　三男資明權大納言正二柳原流ナリ
一藏人右少辨俊基　太政大臣爲光從一位號法住寺謚曰恒德公第十代之孫大内記文章博士種範正四位下息ナリ是モ大内記ナリ
一四條中納言隆資　魚名公九代孫隆經男　顯季第七代孫隆親權大納言正二位子　兄ハ隆顯　次ハ房名是則四條流祖ナリ　三ハ隆良是レハ鷲尾流也隆顯ノ子隆實其子隆資也公卿補任ニハ隆顯ノ子トアリ

一尹大納言師賢　尹トハ彈正尹ノ事也職原鈔ニモ納言以上兼之勅任之官也トアリ師賢公男左大臣從一位家忠號花山院此第六代師繼堀川内大臣ト云フ其子師信ノ子ナリ正二位云云
一平宰相成輔　葛原親王息兄ハ平高棟弟ハ高見王也高棟第十八代孫也參議正三位西洞院流ナリ
一足助二郎重成　此人ノ隱謀ノ張本也トテ六條河原ニテ首ヲ斬レタリ然レハ成ノ字ハ誤レリ政ニ作ルヘシ第四巻ニハ重範ニ作ル是モ惡シ惣シテ此系圖ハ六孫王經基公ノ息鎭府守將軍治部少輔村岡大夫ト號ス第五代鳥羽院武者所佐渡源太重實ヲ八島冠者ト第ス此ヨリ四代ノ孫賀茂六郎右兵衞尉重長ヲ始テ足助ト號ス其子ハ重秀ヲモ又足助冠者ト云テ三河國ニ住ス其子重朝々ノ子重方々ノ子佐渡六郎賴方々ノ子貞親々ノ子重範々ノ子重政也但シ重成ト云モアリ重秀ノ子ナリコレハ承久ノ亂ノ時京ノ方トシテ討レ畢ヌ百年計リモ已前ノ事也重方ノ子ニ重連々ノ子ニ孫三郎重成ト云アリ是ハ元弘三年ニ京方ヲシテ鎌倉ノ前ノ濱ニテ討死ス此等ヲ用テヨク知ルヘシ

一顯職　是ハ外記官務式部民部丞等ノ衆ナリ
一官蘭臺ニ至　辨官ノ唐名ナリ此官ノ人ハ御前近フ召仕ル故ニ身ヲ淸ク香シクスルナリ職原鈔云口含雞舌香手握蘭故此云握蘭之職也漢官儀曰漢尙書郎懷香握蘭含雞舌香奏事
一欵狀　上ハクワンノ音ナレトモクワト讀トナリ欵誠也至也字林曰意有所欲禁中ヘ官位ナトノ望ヲ申ス時誠ノ道ヲ盡シテ書スル狀トソ
一楞嚴院　横川ニアリ九條殿建立惠心院高光少將如覺住此ニ又惠心僧都源信モ住セル故楞嚴院ノ先德トモ名タリ
一洞院左衞門督實世　西園寺大相國公經男實雄山階左大臣公守洞院大相國　其子實泰後ニ山本左大臣ト號ス　其子公賢中園相國ト云ナリ　其子實世ナリ　中納言左衞督ノ官ナリ早世ス
一大掖芙蓉　長恨歌ニ大液芙蓉未央柳太液池ニ芙蓉ヲ殖ラレタソ芙蓉ハ蓮ノコトナリ近比ハ木芙蓉計ヲ芙蓉ト云ツケタリ
一旨酒　毛詩第十二正月篇云彼有旨酒注ニ旨美也ト故ニ旨酒ヲウマキサケトヨメリ

一昌黎文集　韓退之ヲ昌黎先生ト云フナリ彼文集ヲ韓文ト云也

一晩唐　唐詩正音云自武德至天寶末爲盛唐自天寶至元和間爲中唐自元和至唐末爲晩唐然ルニ盛唐ノ詩人六十五人中唐ノ詩人四十八人晩唐ノ詩人四十九人合テ百六十二人ヲ擧タル中ニモ又天隱ノ履歴ニ百六十七人載タル中ニモ韓退之ヲハ載サルソ去レトモ憲宗ノ朝ニ仕ヘタル者ナレハ中唐ニ出ルト云ヘキ學者仰之如泰山北斗云レタル名人ナリ

一傑出　スクレタル貌也白虎通下云五人曰茂十人曰選百人曰俊千人曰英倍英曰賢萬人曰傑萬傑曰聖又荀子ノ注ニハ倍萬人曰傑也

一昌黎カ猶子韓湘　詩人玉屑第二十曰韓湘字淸夫文公猶子也落魄不羈云云　猶子トハ禮記注云兄弟之子比己之子故曰猶子ト當代ノ世俗ハ養子ヲ猶子ト云ハ誤也

一逍遙　多義アリ或ハ自適之貌トモ云タソ吾カ心ニカナウヤウニシテ物ニカヽワラヌヲ自適ト云也適ハカナフトヨムカ親キソ或ハ逍消也遙遠也消盡有爲累遠見無爲理等云タソ

一優遊　曲禮注曰優遊自得之貌也トアリ自得ト云モ底ハ自適ト意同シ

一眞宰ノ臂　無爲眞宰ハ共ニ道士ノ極理ノ境界ソ無形ノ理ニ形ノ名ヲ付ケ臂ト云タリ實ニ臂ハアルニ非ス杜子美第五ニ呑聲勿復道ヲ眞宰意茫々又莊子ニ云若有眞宰特不得其眹

一壷中ニ天地ヲ藏　玉屑二十卷ニハ一瓢藏世界トアリ

一古人ノ糟粕　齊ノ桓公アル時堂上ニテ書ヲ讀テ居ラレタレハ車ノ輪ヲ造ル輪扁ト云者カ問ヤウハ其讀物ハ何ソト云タソ公曰聖人之言也ト答ラレタレハ今聖人カ在ルヤト問タソ公曰已死矣ト其時ニ輪扁カ曰然則君之所讀者古人之糟粕已矣トソ酒ノカスヲ糟ト云ヒ漬ヲ粕ト云フトアリ莊子天道篇ニ出タリ

一區々ノ中ニ誤　禮記注ニハ小貌也トアリ或ハ小室ノ名トモ又小庵屋之類トモアルソ然レハ昌黎ヲ小室ニ居テ小見ニ滯リ大道ノ本分ヲシラヌト譏リタル義ソ

一今則造化ノ工ヲ奪事ヲ得ンヤ　意ハ萬物ハ造物者

トテ造化スル本主カアルソ汝アマリニ利口スルホトニ造物者ノ工ヲ奪テ汝作ンヤト云テ理局ヲ詰ントシタソ昌黎集十云湘公姪落魄不覊公勉之學乃笑作詩有能開頃刻花之句公曰汝能奪造化開花乎湘遂聚土覆盆良久曰花已發矣擧盆乃碧花二朶葉間有小金字乃詩一聯云雲横秦嶺家何在雪擁藍關馬不前公未曉詩意湘曰事久方驗公後貶潮陽途有一人冒雪而來乃湘也湘曰憶向花上之句乎公詢地名即藍關嗟嘆命筆續成全篇廼此詩也

一昌黎佛法ヲ破テ儒教ヲ貴ヘキ奏狀ヲ奉等　祖庭事苑第四云憲宗元和十四年正月丁亥迎鳳翔法門寺佛骨至京師留禁中三日乃送諸寺王公士庶奔走舍施如不及愈上佛骨論極言其弊憲宗怒甚閒一日出疏示宰臣將加極法裴度等諫言愈罪大重乃貶潮州刺史

一謫居　科ニ依テ主上ノ責ヲ蒙テ流レテ居ルヲ云也謫ハ說文ニハ罰也廣韻ニハ責也

一勃然　勃然ハ色ヲ變スル姿ソ然レハ今ノ句ツヽキニハ親カラサル歟渤然ハ興起貌ト注スルソ孟子ニモ渤然興之矣トアリ湘公カ忽ニ興起シタト云義ナルヘシ

一左遷　通鑑集覽五云諸侯王表左官之律韋昭以爲左猶下也漢法地道尊右故謂貶秩爲左遷又漢書音義曰人道尙右故降秩爲左遷捨天子仕諸侯爲左官

一一封朝奏九重天　第一ノ句ハ佛骨論ヲ製シテ天子ヘ奏シケルヲ云フ二句ニ夕貶等云ハ忽ニ罪科ニ處セラレテ潮州ヘ流サルヽ事ヲ云ソ三句ニ欲爲等ヲ云ハ聖明ノ憲宗ノタメニモ所用モナキ異國ノ佛舍利ヲ尊敬アルハ弊ノ事ナルホトニト思フテ此弊事ヲ除ントシテ表ヲ上タソ第四句ハ如此流人ト成ルトモハヤ年齡モ過衰朽ノ姿ト成タレハ殘年ヲ惜シトモ思ハヌソ第七句汝幸ニ遠ク來タルモ我ヲ不便ニ思意アリテコソ來ルラン第八句ハ別シテノ芳志ニハ吾骨ヲ收テ給ハルレトソ

一癡人面前不說夢　無門關鬍子無鬚ニ癡人面前不可說夢トアリ夢ハアワセヤウニ依テ色々ニ成物也癡人ハ左モナキ事ヲ夢ノ告ト思ソ又本則ノ意ハ此ヤウナ事テハ無イトソ本分ノ心地カ有ルトソ

一土岐左近藏人賴員　土岐ノ系圖ニハ員ノ字ヲ春ニ作レリ美濃國土岐ノ祖ヲハ左衞門大夫藏光衡ト云フ其子左衞門尉光行ハ後鳥羽院ノ西面ニシテ淺野

判官ト號ス從五位下ナリ後ニ出羽守ニ任ス此ニ數多ノ子アリ一ヲハ太郎國衡ト云フ是モ淺野ト名ク次ハ二郎光俊第三ハ五郎光定コレカ土岐ノ惣領トナル惡黨ヲ追捕テ進スル賞ニ依テ隱岐守ニ任從五位下ナリ此子隱岐孫二郎賴貞法名救孝ハカクレモナキ歌人也其弟右將監賴重ノ子左近藏人賴春法名ハ春蓮ト云フ此人カ妻女ト物語シテ隱謀露顯スルナリ

一無端　無道モ無狀モアシキナシト讀メリ日本紀ニ出タリ

一穴賢　下學集曰穴賢上古時倭漢兩國未知家人居土窠恙蟲螫人故本朝書札末相勸曰穴賢言土窠之穴賢閉塞可防恙蟲

一石ヲ抱テ淵ニ入　說苑第十六云君子愼言出已負石赴淵行之難者也已上　佛名經第十八卷云抱石沈淵求出良難

一四十八箇所篝　上代ニハ帝都ノ警固ノタメニ置タリト云人アリ慥說ヲシラス

一土岐十郎　山本九郞ニ討レタルハ賴貞ニテハナシ此人ノ第十子ニ十郞賴兼ト云人ナリ賴遠ノ弟ナリ今ノ書ヤウハ妻ニ語タル者モ又討レタル者伯耆十郎賴貞モ同シヤウニ見ヘタル歟左ニテハナシ

一元德元年　帝笠置ヘ潛幸アリシ二年前也

一鼽鼿　鼽ハ玉篇ニハ傍孝切面瘡也トアリ但鼽鼿トツヽケレハ鼻息也ト注シタソ

一胡簶　韻會ニ箭室也ト注セリ或ハ簶ヲ籠ニモ作ル同シキソ

一櫓　集覽十三云城上白露屋名之曰櫓又戰陣高巢車亦謂之櫓

一肥馬ノ塵ヲ望殘盃ノ冷隨　杜子美第一云朝扣富兒門暮隨肥馬塵殘盃與冷炙到處潛悲辛

一不義而富　論語述而篇云不義而富且貴於我如浮雲注曰富貴而不以義者於我如浮雲非己之有也此意ハ道ニアラスシテ富貴ナルハ我物ニアラス浮ル雲ノ如シ

一牽牛織女　事林廣記云續齊諧記曰桂陽城武丁有仙道忽謂其弟曰七月七日織女當渡河吾向已被召弟問織女何事渡河答曰暫詣牽牛世人至今云織女嫁牽牛也魏文帝燕歌行曰牽牛織女遙相望注曰牽牛織女二星名隔天河相望婦人自恨與夫離絕故問此星何辜復

如此矣牽牛星河鼓星是也李善曰史記曰牽牛爲犧牲其北織女々々天女孫也曹植九詠注曰牽牛爲夫織女爲婦織女牽牛之星各處一旁七月七日得一會同矣

一烏鵲橋ヲ渡　淮南子曰烏鵲塡河成橋度織女

一竹竿ニ願絲ヲ懸　白樂天詩云憶得少年長乞巧竹竿頭上願絲多シ二星ヲ祭ルコトハ稚ナキ女ノマツルコトナレハ少年ト云フ竹竿ニ絲ヲカケテ我心ニ思コトヲ星ニ願ソサルホトニ願絲トハ云ナリ荊楚歳時記云七夕女人結綵縷穿七孔針或以金銀鍮石爲針陳瓜果於庭中以乞巧有蟢子羅於瓜果上則以爲得巧

一騷人　騷人墨客ト云テ詩歌ヲモテアソフ風流ナル人ヲ云也玉屑ニハ騷翁墨客トモアルソ

一伶倫　文選第三十五注云伶倫古之善音者又ハ倫人トモ云フ樂人ノ惣名ト成レリ

一月卿雲客　公卿ノ衆ヲ月卿ト云フ大納言已上ノ人ヲ公卿ト云フナリ殿上人ヲ雲客ト云フ

一中夏　都ヲ云也說文云夏中國之人也尙書舜典云蠻夷猾夏蔡氏注云猾亂夏明而大也曾氏曰中國文明之地故曰華夏四時之夏疑亦取此義也

一塗炭　西征賦注云塗炭如布炭火於地而不避也又尙書仲虺之誥云有夏昏德民墜塗炭注夏桀闇亂不恤下民々之危險若陷泥墜火無救之者此注ノ意ナレハ塗ハ泥ニモタセ炭ハ火ニアテタルソ前ノ注ニハ只火ヲヒロケタルニ計用タソ

一罪ノ疑ヲ輕シテ　尙書太禹謨云罪疑惟輕功疑惟重注ノ意ハ罪ヲナス者ニ刑罰ヲハイカ程ニスヘキソト疑シクハ輕クオコナヘ又勳功アル者ニ恩賞ヲハ如何程ニアルヘキソト疑シクハ思ノ外ニ重賞ヲ與ヘヨト也說苑第十六云明君之制賞從重罰從輕云云

一死罪一等　等ハシナトヨム禮記ニ出タリ然レハ一等トハ一段ト云義ナリ後漢書ニモ蔡邑上疏シテ減死一等與家屬髡鉗徙朔方ニトアリ

一萬里小路大納言宣房卿　閑院太政大臣冬嗣公七男内舍人良門第十二代ノ孫ヲ經房ト云是ヲ吉田ト號ス其子定經々々ノ子資經々々ノ子三人兄ハ爲經次ハ經俊是ハ坊城ト勸修寺ト中御門等ノ先祖ナリ其第三ハ資通是レ則萬里小路ノ初ナリ其子宣房其子ニ兄ハ藤房コレハ子孫ナシ弟ハ參議大辨從三位季房ナリ其子ハ仲房

太平記鈔第二卷

一廷尉ニ成テ橋ヲ渡ス　廷尉ハ九卿ノ中ノ其一ナリ今云意ハ奉行ノ義ニモタセテ云フ也後漢ノ光武紀曰廷尉秦官聽獄必質於朝廷與衆共之尉平也故通稱廷尉

一三公　周ニハ太師太傅太保ヲ三公トシ漢ノ末ニハ太司馬太司徒太司空ヲ三公トス東漢ニハ太尉司徒司空ヲ三公トス本朝ニハ太政大臣ト左右ノ大臣是也

一九卿　儀禮疏云漢置十二卿正卿九太常光祿衞尉太僕廷尉鴻臚宗正少府司農晉百官志曰古者天子諸侯皆名執政大臣曰正卿自周後始有三公九卿之號九卿本無卿字至梁始加卿晉書乃唐初重撰或有如卿字者又秦漢以來君呼臣以卿凡敵體相呼亦爲卿盖貴之也云云　本朝ニハ八卿アリ中務式部治部兵部刑部大藏宮内是也是ヲ八省ノ官トモ云ナリ去レトモ漢朝ニナソラヘテ九卿ト云タルナルヘシ

一閻浮　須彌山ノ南ノ方ニ有國ナリ閻浮檀ト云金ノ出ル所ナレハ洲ノ名トスルナリ

一盧舍那　天竺ノ語也此ニハ光明遍照ト云フ也此照ニ二義アリ内ノ智光ヲモツテ眞如法界ノ理ヲ照ス義ナリ又外ニ身ノ光明ヲ放チ諸ノ大小ノ根機ニ應同スル邊ヲ日光ニ類ス或ハ又淨滿トモ翻スルナリ諸惡ヲ盡スヲ淨ト云ヒ衆德ヲ普ク備ヲ滿ト云也此外種々ノ義アレトモ佛法ハ廣ク云ホト聞ヘカヌルホトニ略ス

一淡海公　天兒屋根尊十八世孫常磐大連方子大連御食子大連大織冠鎌足公ノ子息右大臣不比等也淡海公ハ謚號也和銅三年三月ニ和州平城ニ大殿ヲ建立ス即興福寺也像ハ大織冠ノ所造也ト云云

一一人出給事容易カラス　白氏文集ニ吾君不遊有深意一人出兮不容易六宮從兮百司備八十一車千萬騎此意ニ據テ書ケル歟

一絕タルヲ繼廢タルヲ興　論語ノ語ソ

一萬歲ヲ呼　漢武帝西華山ノ神ヲ祭ントテ路次ノ中嵩山ニ一宿アリシニ五色ノ駮ナル野獸ヲ見其外奇特ナル物ヲ見給ヒテ心ニ喜悅ヲ作シ明日嵩山ヘ登リ給ヘリ史卒ソノ事ヲ聞テ三タヒ萬歲ヲ呼タリソレヨリ天下ノ祝ノ辭トナレリ

一深草天皇　仁明帝ヲハ深草ノ山陵ニ葬リタテマツル故ニ即御名トスルナリ

一大日遍照　毘盧遮那佛ノ實體ヲ譬ヲ取テ大日ト云也常ニ大日經ト云モ本題號ハ大毘盧遮那神變加持經ト云ヲモツテ知ルヘシ不空三藏ノ仁王經儀軌云此云遍照亦云大日如世間日唯照一邊不照一邊照晝不照夜照一世界不照餘世界但得名日不得名大毘盧遮那名大日者色身法身普周法界十方世界悉皆照曜

一尊澄法親王　第八ノ宮也後ニ讃州ヘ配流アリ

一大塔尊雲親王　第六ノ宮也始ハ護良ト申シ大塔ノ門主トシテハ尊雲ト申ケリ關東ニテ誅戮セラレ給ヒシ也

一鷲峯　天竺靈鷲山ソ山形鷲ニ似タリトテ名トスル也天台法華文句云山峯似鷲將峯名山

一歌唄頌德　法華音義云歌唄蒲芥反梵言婆師此言讃歎或言唄匿文梁高僧傳十三云奏歌於金石謂之以爲樂設讃於管絃則稱之以爲唄云云　佛ノ萬德萬善ヲ稱美スルヲ頌德ト云フ嗟歎之不足故永歌之ト云カコトク佛ノ德ヲ歎スルニ足ラサル故ニ引聲シテ歎スルソ

一魚山ノ嵐　釋氏要覽云昔魏陳思王曹子建游魚山忽聞空中梵天之音清響哀婉其聲動心獨聽良久乃模其節寫爲梵唄撰文制音傳爲後式梵音玆爲始也文魚ノ字ヲ或ハ漁ニモ作レリ世間ノ聲明ハ此ヨリ始

一遏雲ノ曲　委ハ列子ニアリ又文選第十三注云薛談學謳於秦青辭歸青餞於郊衢撫節悲歌聲震林下響遏行雲文遏ハ止也ト注ス

一回雪ノ袖　洛神賦云若流風之廻雪コレハ神女ノ舞ノ袖ノ光彩ノ妙ナル事ヲ云ヘリ

一百獸モ率舞　高僧傳十三云擊石拊石則百獸率舞簫韶九成則鳳凰來儀トアリ尙書ノ語ヲ取ルト見タリ然ニ曇憑ト云人カ聲明ヲセラレタレハ鳥馬悲鳴行途住足トアルソ又僧辨ト云人カ夜ル經ヲ誦セラレシニハ忽ニ有群鶴下集階前トノセタリ尙書ニハ舜ノ德ニ化セラレテ簫韶ノ樂ヲ奏スル時ニ百獸モ鳳凰モ來儀スルコトヲ明シタリ高僧傳ニアルハ佛經ノ德ヲ云ハントテ載タリ

一我立杣　傳教大師ノ歌　アノク多羅三藐三菩提ノ佛タチ我タツソマニ冥加アラセ給ヘ

一主憖臣辱　越世家云主憂則臣辱主辱則臣死

一江都カ輕捷　朗詠云江都之好勁捷也七尺屛風其徒高葛三品カ作ナリ江都王カ早ワサヲシタルコトソ漢書述曰江都輕訬薄爲也高誘淮南子注曰訬輕利急疾也訬音眇

一子房カ兵法　張良字子房ト云也一卷ノ書トハ異說ハアレトモ三畧ヲ云ソ

一義眞和尙　傳敎大師ノ弟子也相模國ノ人ナリ傳敎ニ從テ入唐シテ和漢ノ通辭シ給ヒ天台ノ敎法ヲ受得シテ歸朝ノ後弘仁十四年四月ニ始根本中堂ニシテ戒壇ヲ建テ大乘戒ヲ行ヒ給ヘリ

一事ノ漏易キハ禍ヲ招　謀欲密ト云テイカニモ漏ヌヤウニスル事肝要也ト又三畧云謀泄則軍無勢

一龍顏　高祖本紀云高祖爲人隆準而龍顏注ニ高祖感龍而生故其顏貌似龍長頸而高鼻文是ヨリイツレノ王ノ御顏ヲモ龍顏ト云也咫トハ八寸ノ長ケヲ云ソ韓信傳ニ咫尺之書注正義曰咫尺八寸トアリ然レハ何ニモ近クツカヘ奉ル義也

一二條中將爲明卿　爲世卿一男爲通二男爲藤ノ息也新拾遺集ノ撰者也但不終篇薨去其後頓阿法師終篇也

一鑊湯爐壇　壇ノ字ハ炭ニ作ルヘシ是則地獄ノ事也故大法炬經第十四卷云又復覩見鑊湯鑪炭炎熾猛火山河灰糞皆悉充滿ト云云　是皆地獄ノコトヲ說ケル也

一烈々　火ノ盛ナル貌也

一朝夕　テウシヤク二字倶ニニゴリテヨム奉行衆ノ下使ノ者也

一四重　佛敎ノ中ニ小乘ノ意罪ニ輕重アリ殺生偸盜邪婬妄語ノ四ヲハ四重ト云ナリ此四ヲ犯ス者ヲハ天竺ノ語ニハ波羅夷罪ト云也此ニハ斷頭罪ト云也譬ヘハ人ノ頭ヲキレハ更蘇生スルコトノナキカ如ク此ノ四ヲ犯セハ必地獄ニ入ルト說レタリ

一五逆　殺父ト殺母ト殺阿羅漢ト破和合僧ト出佛身血ノ五ノ逆罪也僧中ノ和合シタルヲ云隔テヽ中ヲ惡クスルヲ破和合僧ト云ナリ

一燋熱大燋熱　八大地獄ノ中ノ第六第七ノ名也此二ヲ倶舍論ニハ炎熱極炎熱トモ宣タソ罪人ノ身ノ内ヨリモ猛火ヲ出シ又外ノ器物ナトヨリモ倶ニ火ヲ出シ互ニ相燒害スル所ノ地獄ナリ

一牛頭馬頭　地獄ニテ罪人ヲ呵責スル有情ノ事也

一物類相感　孝經序云物之相感有自然者ト譬ヘハ周易ノ辭ニモ同聲相應同氣相求水流濕火就燥雲從龍風從虎ト云ヘルカコトシ是皆自然ノ道理ナリ

一天地ヲ動シ目ニ見ヘヌ鬼神ヲモ哀ト　毛詩序曰動天地感鬼神莫近於詩云云　此意ヲ古今ノ假名序ニモ書ケルトソ

一十題判談　論議ノ文題多ケレトモ一人シテ判談スル事ハ學者ノ規模也登科トハ第一ノ科ニ登ト云意也然レハ諸人ニ秀タル姿ナリ

一阿闍梨　善見律家第一音義云譯云正行又言阿遮利耶此云軌範舊云於善法中教授令知名阿闍梨也

一四種三密　四種ノ曼荼羅ト云コト眞言家ニ沙汰アリ弘法大師ノ十住心論第十卷ニモ胎藏海會曼荼羅金剛界會曼荼羅金剛頂十八會曼荼羅ニ各ノ四種ノ曼荼羅アリ其四種ト云ハ摩訶三昧耶達磨羯磨是也ト云フ具ニハ云ヒ盡シカタシ三密トハ身口意ノ三ニ秘密神妙ノ悟ノ沙汰アリ顯密二宗イツレモ存スル事ナリ紙面ニ載セカタシ

一澆漓　上ハ公堯變薄也

一上慢ノ幢　弘決第十云竪我慢幢云云　是ハ外道ノ見計ノ高キコトヲ云ナリ

一三衣　一ニハ僧伽梨即大衣也二欝多羅僧即七條也三ニハ安陀會即五條也又慧上菩薩經云五條名中著衣七條名上衣大衣名衆集時衣文此衣ノ沙汰モ多クノ子細アリ今ハ名ヲ云計也

一一鉢　天竺ニハ鉢多羅ト云フ此ニハ應器ト云フ也天竺ノ語ノ上ニ略シテ鉢ト云ナリ資身要急之物ト云テイカナル上根ナルモ此鉢ト云物カナケレハ佛道修行モナラヌ也身ヲ資クル肝要ノ具ナリ

一德不孤必有隣　論語ノ辭也陰德アレハ必陽德アリ是隣アル義ナリ其外道德身ニ備レハ必其德タヽナラヌ物ナリ是ヲ必隣アリト云フ

一三聚淨戒　即大乘菩薩戒也一ニハ攝律儀戒一切ノ惡ヲ離レ心ヲ放逸ニセサル戒ナリ二ニハ攝善法戒是ハ諸善ヲ積ミ六度萬行ヲ修スルヲ云ソ三ニハ攝衆生戒是ヲ又ハ饒益有情戒トモ名ルナリ大慈大悲ヲ起シテ一切衆生ヲ利益スルヲ云ナリ莊嚴論云初一戒以禁防爲體後二戒以勤勇爲體云云

一逆旅　僖公二年傳云逆旅客舍也タヒノヤトリト云義ソ

一不動明王　秘密ノ正體也普賢幷ニ金剛薩埵大日如來イツレモ一體ト習ナリ

一肇法師カ刑戮ノ中ニ苦　肇法師ト云ニ二人アル歟羅什三藏ノ上足弟子四人アリ生肇融叡是也然ニ此中ノ僧肇ハ晉義熈十年ニ長安城ニテ卒ス春秋三十有一矣ト梁高僧傳第六卷ニノセタリ刑戮ノコト曾テ諸傳ニナシ然ルニ傳燈錄第二十七卷ニ遭秦王難臨就刑說偈曰四大元無主五陰本來空將頭當白刄猶似斬春風トアリ又禪林類聚第十三卷ニモ出タリ刑戮ノ事疑所ニ非スサルホトニ二人アル歟ト覺タリ

一一行阿闍梨ノ火羅國ニ流　佛祖統紀第三十卷云一行張公謹之孫也初從普寂落髮開元三年詔入見咨出世法及安國撫民之道時號天師云云　火羅國ヘ流サレタルコトハ多傳ヲ見ルニイマタ考ス編年通論第十五卷ニハ開元十五年十一月己丑禪師一行寢疾于華嚴寺帝親候問遂沐浴端坐而逝春秋四十有五トアリ帝哭之哀甚輟朝三日ト見タリコレホトニ尊敬アリシ一行何ノ故ニ遠流ノコトヲシラス但又諸典ヲ校ヘ見ヘシ但シ盛衰記五ニハ一行阿闍梨ハ無實ノ讒訴ニ依テ火羅國ヘ流サレ給フト云云　本據コソ有ラメソ

一火羅國　西域記ニハ覩貨羅國ト云ナリ慈恩傳第一卷ニハ出鐵門至覩貨羅國舊曰吐火羅訛也トアリ大唐ヨリ西北ノ方ニアタリタル國ナリ國俗語言マテ具ニ西域記ノ第一卷ニ載タリ

一大權ノ聖者　權化トテ本地ハ佛菩薩ナレトモ權ニ此世界ニ生ル丶人ヲ云ナリ

一昔天竺ノ波羅奈國ニ　賢愚因緣經第四卷云過去世時此閻浮提有一國王名曰曇摩慈提好喜布施持戒聞法有慈悲心性不暴惡不傷物命王相具足正法治國滿二十年事間閑暇共人博戲時有一人犯法殺人諸臣白王外有一人犯於王法云何治罪王時慕戲脫荅之言隨國法治即按限律殺人應死尋殺此人王博戲已問諸臣言向者罪人今何所在我欲斷決臣白王言隨國法治今已殺竟王聞是語悶絕避地諸臣左右冷水灑面良久乃蘇垂泣而言宮人妓女象馬七寶悉何處在唯我一人獨地獄中受諸苦痛我本未爲王時而此宮中亦有王治我不久死此中亦當續有王治我名爲王而害人命當知便是旃陀羅王不知世々當何所趣我今決定不須爲王即捨王位入山自守時王命終生大海中作摩竭魚云云　此

中ニ旃陀羅ト云ハ天竺ニハ人ヲ殺ス役人ヲ云ナリ
摩竭魚トハ大魚ト云事也此經ノ意ヲ取テ語ヲカサ
リテ書ケリト知ルヘシ
一行死定テ後三奏スト　通鑑集覽四十一卷云覆者反
覆推訊如是者三然後奏裁此已著之爲令矣太宗貞觀
五年既斬張蘊古悔之因詔死刑雖令即決皆三覆奏久
之又曰自今宜三白五覆奏諸州死罪三覆奏又貞觀政
要第八卷ニ詳ニアリ
一波羅奈國　名義集三云婆沙云有河名波羅奈去其不
遠造立王城或翻江遶城
一三族　張晏曰父母兄弟妻子也如淳曰父族母族妻族
也
一再犯不赦　弘決第四云初已蒙赦再犯難容
一相坂ノ關ノ清水
相坂ノ關ノ清水ニ影ミエテ今ヤヒクラシモチ月
ノ駒
一打出ノ濱　志賀ニアリ天智天皇此所ニ五六年ホト
都シ給ヘリ
一近江路ヤ世ノウネノ野　古歌ニ
近江路ヲ朝立クレハウネノ、ニ田鶴ソ鳴ナル明ヌ
此夜ハ　宇禰野ハ野路ノホトリ也
一時雨モイタク　古今貫之歌ニ
白露モ時雨モイタクモリ山ノ下葉ノコラス色ツキ
ニケリ
一鏡山　古今大伴黒主歌ニ
鏡山イサ立ヨリテ見テユカン年ヘヌル身ハ老ヤ
シヌルト
一老蘇森　或ハ曾ノ字ヲモ書江州ノ名所
一不破ノ關屋　新古今家隆歌ニ　人スマヌ不破ノ關
屋ノ板ヒサシアレニシ後ハタヽ秋ノ風　美濃ノ
名所
一鳴海瀉　尾張ノ名所
小夜千鳥聲コソチカク鳴海瀉傾ク月ニシホヤミ
ツラン
一濱名ノ橋　元慶八年始テ設ケ作タル也長五十六丈
廣二丈三尺高一丈六尺ト扶桑記ニ見タリ遠州ノ名
所
一元暦元年ノ比カトヨ重衡中將ノ東夷ノ爲ニ囚レ
此事不審ナリ盛衰記云池田宿ノ長庚ニ今夜ハ是ニ
宿ヲ取侍從ト云遊君アリ情深キ女ニテ終夜旅ヲソ

奉慰内大臣ハ憂身ノ旅ノ空ナレハ目ニモ懸給ハネ共女ハ前ナル疊ニ副臥シテ明シケリ侍從暇申テ歸ルトテ

東路ノハニフノ小屋ノイフセサニ故郷イカニ戀シカルラン

内大臣優ニ思召テ

故郷モ戀シクモナシ旅ノ空都モツヰノ栖ナラネハ

侍從ト云遊君ハ此宿ノ長者湯谷カ女也内ニ入テ今夜ノ御有サマ歌ノ返事マテ細ヤカニ語ケレハ母湯谷哀ニ思テ紅梅檀紙ヲ引重文ヲ書テ奉ル右衞門督取次キテ父ニ奉レハ是披キ見給フニ一首アリ

モロ共ニ思合セテシホルラン東路ニタツコロモハカリソ

大臣是ニヤ慰給ケン返事アリ

東路ニ思立ヌル旅コロモ涙ニ袖ハカハクマソナキ

右ノコトクナレハ今重衡ト云ヘル事ハ相違ニテヤ有ラシ長者ノ女トハ侍從カ事ナリ

一雞鳴テ曉ヲ催　山谷詩晨鷄催不起擁被聽松風

一匹馬風ニ嘶　三體詩官柳青々匹馬嘶

一サヨノ中山　新古今西行歌ニ

年タケテ又越ヘキト思ヒキヤ命ナリケリサヨノ中山

一隙行駒　史記列傳第三十魏豹傳云人生一世間如白駒過隙耳索隱曰小顏云白駒謂日影也隙壁隙也以言速疾若日影過壁隙也

一亭午　杜詩ニ亭午頗和煖又第十九ニ疾風颯々昏亭午トアリ東坡詩ニ日輪亭午汗珠融注曰在午曰亭午トアリ

一光親卿關東ヘ召下サレシカ此宿ニテ誅セラル　此事不審ナリ此宿ニテ誅セラレシ人ハ別人ナリ東鑑第二十五云承久三年七月十日中御門入道前中納言相伴小山左衞門尉朝長下向今日宿于遠江國菊河驛終夜不能眠獨向閑窓讀誦法華經又有書付旅店之柱事

昔南陽縣菊水　汲下流而延齡

今東海道菊河　宿西岸而失命云云

又光親ノ事ヲハ次下ニ又云十二日按察使卿光親去日出家法名西觀爲武田五郎信光之預下向而鎌倉使

相逢于駿河國車返邊依觸可誅之由於加古坂梟之訖時年四十六云云　此卿爲無雙寵臣又家門貫首宏才優長也トアリ

一昔南陽縣菊水　詩學大成云南陽酈縣有甘谷々中水甘美上有大菊落水從山流下得其滋液谷中人家飲此水上壽百二三十其中百餘歲

一龍頭鷁首　謝靈運會吟行曰鷁首戲淸沚注銑曰鷁首舟名善曰淮南子曰龍舟鷁首云云　高誘カ淮南子注鷁水鳥也畫其象著船首以禦水患トアリ此鳥カ水ノ上ノ難ヲ避故ニ天子ノメス龍舟ニハ畫ニカク也江東ニハ天子ニ限ラス貴人ハ何レモ此船ニ乘ル也鷁ハ青雀ノ像トアルソ又龍舟ヲ龍頭トモ云ソ龍モ船ニ造ルソ水ヲ得タル者ナルホトニ龍ヲ造ル也

一宇都ノ山　伊勢物語歌ニ
駿河ナル宇都ノ山邊ノウツヽニモ夢ニモ人ニアワヌ成ケリ

一富士ノ高峯　新古今歌ニ　家隆
富士ノネノ煙ハナヲソ立ノホル上ナキモノハ思ヒ成ケリ

一十王ノ廳　異朝ノ風說ニ唐代ノ道明和上神遊地府シテ十王ノ死亡ノ人ヲ分治スルヲ見來レリ其ヨリ世間ニ十王ノ名流布セリ秦廣王初江王宋帝王五官王閻羅王變成王泰山王平等王都市王轉輪王ナリサレトモ一切經藏ノ中ニ方々取合テ六王ノ名ハ有之閻羅ト五官トハ提謂經ニ出タリ平等王ハ華嚴感應傳ニ見タリ郭神亮使者トシテ平等王ノ所ニ至リ華嚴經ノ四句偈ヲ誦シテ放回ヲ得タリ泰山王ハ譯經圖紀ニ法炬譯金貢泰山贖罪經ノ中ニ見タリ秦廣王ト初江王ハ夷堅志ニアリ已上佛祖統紀第三十四卷ニ載タリ

一頸械手杻　クヒカセトナラハ械字ハ誤ナリ地藏十輪經第一卷音義曰在手曰杻在足曰械ト云云　佛本行集經音義ニ枷ノ字穿木加頸令不得自在矣トアリ枷ノ字ヲクヒカセトヨム

一青女房　アヲ女房トヨムソ青侍モ當省衆ノ召使ノ人々ヲモ云ナリ

一五噫ヲウタウ　蒙求ニモ梁鴻五噫ト云フ梁鴻カ京師ヲ過トテ五噫ノ歌ヲ作テ曰陟彼北芒兮噫顧覽帝京兮噫宮室崔嵬兮噫人之劬勞兮噫遼々未央兮噫トアリ噫ハ於其切痛傷也ト注ス

一執事　文撰三十七注ニ翰曰執事君之左右也トアリ

一亂ヲ撥テ治ヲ致ハ武一徳　第十二卷ニ至テ注ス

一累葉　毛詩ノ注ニ葉世也ト云フ累代ト云カ如シ

一君雖不君　孝經序ニアリ曰君雖不君臣不可以不臣父雖不父子不可以不子

一戰國ノ時　周ノ代ハ文道ヲ以テ天下治マルト云ヘトモ平王ノ時ヨリ周道オトロヘ威烈王ノ末年ニ成テイヨイヨ諸侯力ヲ以爭ヒ戰ケルヲ戰國ト云也孔孟ノ文道ヲモ用サル代ト成レリ上代トイヘトモ早ク文道ハ衰ヘタル哉ト思ヘハウラメシト上古ニモ云タソ

一文王武王　周ノ文王崩シ給ヒテ武王既立テ太公望ヲ以テ師トシ周公旦ヲ輔トシテ孟津ト云河ヲ渡テ陣ヲ取リ給ヘハ諸侯ノ衆ニ兼約モナカリシカトモ八萬騎マテ集タソ殷ノ紂ハ牧野ニ出テヽ兵ヲ遣シテ拒キ戰ト云ヘトモ何レモ戰心ナク前勢ノ衆カ戈ヲ倒テ居ホトニ紂王ノ軍敗北スル故ニ紂王ハ鹿臺ト云臺ニ登テ自焚シテ死シタリ是時ニ諸侯ノ衆皆武王ヲ尊テ天子トシ給ヘリ

一義時　時政ノ嫡男相摸守ソ泰時ハ義時嫡子ソ武藏守ニ任ス

一古典ニ君視臣如土芥則臣視君如寇讎　孟子第八卷離婁章ニ出タリ

一源中納言具行　北畠雅家權大納言正二位師親正二位子師重正二位子親房一品准大臣正二位第一男顯家鎭守府將軍權中納言從二位次男顯信三男顯能以上兄弟三人於南朝任槐タリ師親弟師行右中將從三位子具行權中納言從二位ナリイツレモ是レ村上源氏ナリ

一頭燃ヲ拂カ如　天台三大部補注第十四云譬如男女有火燒頭救令速滅云云

一綿密　他念ヲ絶シテ唯一心ニ工夫ヲシタル體ナリ

一五蘊　色ト受ト想ト行ト識トノ五ツ也蘊ノ字ハ積聚ノ義ト釋セリ此五ハ我等カ色法ト心法トノ二也故ニ一色四心ト習ナリ初ノ色蘊ト云ハ五體ノ身骨也殘ル四ハ心法ナリ其中ニモ第五ノ識蘊カ心ノ正體ナリ受想行ノ三ハ心所ト名目ヲ使フナリ舊譯ノ經論ニハ五陰ト云也

一四大　定タルコトク地水火風ノ四ナリ是レカ合聚テ一身ト成ソ是レカ第一ノ色蘊ニアタルソ

一一陣風　陣ハツラナルトヨムソ風カ一片颯ト吹ク
ホトノ我身ト觀シタ意ソ白及刀劍之屬ト文選第二
十八ニ注スルソ
一蛾ト云蟲　韻會曰蛾善拂燈火夜飛謂之飛蛾一名慕
光又山谷詩云飄如赴燭蛾
一薄伽梵　ハカホン三字トモニ濁ル又ハカハン是モ
共ニニゴルソ佛ノ事ナリ六波羅密經音義云翻經沙
門慧琳云古譯爲世尊謂世出世間咸尊重故大智度論
云如來尊號有無量名略言六種謂自在熾盛端嚴名稱
吉祥尊貴今言薄伽梵具此六義故
一明王ノ本誓　五大尊ハ共ニ明王ナレトモ中央不動
明王ヲ主トスルナリ不動ハ寂ノ義ナリ明王ハ照ノ
義ナリ寂照同時ノ體ト談スルナリ然レハ止觀不二
ノ實義トモ云也
一金剛童子　矜迦羅制多伽コンカラ中一字ニゴル也
或ハコウキヤラトモ云是ハ忿怒ヲ面テトシテ魔ヲ
降伏スルナリセイタカハ善ヲツカサドリ上ニ隨テ
慈悲ヲ起ス
一八大龍王　法華經ノ說ナリ一ニハ難陀二跋難陀三
ニハ娑伽羅四ニハ和修吉五ニハ德叉迦六ニハ阿那
婆達多七ニハ摩那斯八ニハ優鉢羅也
一掲焉　イチシルシトヨム明ナル貌ソ
一一樹ノ陰ニ宿リ一河ノ流ヲ汲　一樹ノ陰ニヤトリ
一河ノ流ヲ汲モ皆是他生ノ緣トハ昔白拍子ノウタ
ヒタル謠ナリト云ヒ傳タリ
一嘉暦　後醍醐ノ年號ソ元弘モ同帝ノ年號也
一確執　韻會ニ確堅也廣韻ニハ固也
一灰燼　杜預左傳注云燼火餘木也トアリモエクイノ
事也
一大龜ヲ燒テ占　龜トトテ龜ヲ燒テ占フ事異朝本朝
ニ上代ニハ有リト也
一踵ヲ回スヘカラス　常ニハ旋踵ト書ソ集覽五云旋
回轉也踵足根也云云私ニ云立タル足ヲ其マヽサシ
向フ意ソ遲々ノナキヲ云ナリ
一國家ノ安危只此一擧ニアリ　是ハ項羽本紀ニアル
語也
一萬里小路宣房　一卷ニ注ス藤房秀房ノ親ナリ
一重耳ハ翟ニ奔　晉献公ノ子也驪姫カ讒ヲモツテノ
故ニ献公重耳ヲ殺ントシケルヲ垣ヲ踰テ逐ケル履
鞮ト云官者カ寄テ斬ントシタレトモ重耳ノ身ハア

タラスシテ終ニ母ノ本國ノ翟ヘニゲタソ史記ノ晉世家ニハ時ニ重耳年四十三ト載タソ後ニハ晉ノ文公ト云天下ノ五覇ノ其隨一ノ人ソ末ニ詳ニアルホトニ略スルソ

一大王ハ豳ニ行　大王ハ古公ノ事ソ後ニ尊ンテ大王ト云タソ子ハ季歴々ノ子ハ文王ナリ狄戎カ種々ノ事ヲ云テ所望スル程ニ大王ノマシマセシ豳ト云國ヲ去テ岐山ノ下ヘ移テ居シ給フ然シテ後ニ遂ニ子孫繁昌シテ周ノ代ト成ルコ大王ノ仁德ヨリ始タソ孟子ニ云昔者大王居豳狄人侵之去之岐山之下居焉

一陽明門　五間戸三間ナリ兵衞御門ト號ス東面ノ北ノ端也

一行啓　春宮並ニ后等ニ皆行啓ト云フナリ

一按察大納言公敏　中園相國公賢卿舍弟ニシテ實世ノ叔父ナリ

一六條少將忠顯　具平親王七代之孫土御門内大臣通親公男通光是レ久我流ナリ此子通有正四位下其子有房六條内大臣其子有忠正二位其子忠顯左中將是ヲ千種ト號ス

一駕輿丁　天子ノ瑤輿ヲ舁役人ナリ

一七大寺　東大寺聖武帝神龜五年始造之　興福寺不比等和銅三年造山階寺是也　元興寺推古天皇崇峻天皇元年始造之飛鳥寺本法興寺　大安寺皇極天皇元年始造之蘇我馬子大臣造之和銅三年遷造之本名百濟寺　藥師寺天武天智天皇元年造之　西大寺高倉天皇天平勝寶元年創之至天平神護元年十七年造畢　法隆寺聖德太子號伊香留香寺

一皇居　文選三十七注曰皇居謂天子省閤也

一要害　文選三云要害險固注ニ劉曰要害地險隘也

一袞龍　周禮ニ袞龍衣也衣五章裳四章凡九皆絺繡而畫以爲袞

一中院左中將貞平　貞ノ字ニテハナシ定ノ字ナリ具平親王第八代孫定成任陸奥守其子ナリ本名ハ良定ト云ケルヲ改名セリ其子定清ハ戰場ニテ落命ス

一八王子　比叡山ノ東ニツヽキテ小山アリ此峯ニ金石トテ石アル上ヘ天照太神ノ御子五男三女ノ神アマクタリマシマスヲ八王子ト申ス也

一解脫同相ノ御衣　生死ノキツナヲ解イテ佛果同體ノ相ヲ顯シタル衣ト云事ナリ此ハ常ノ衣ノコトニハ非ス袈裟ヲ云ナリ

一堅甲利兵　孟子ニ出タル語ナリ甲ノ字ハヨロヒトヨム常ニカフト丶ヨム誤ナリ

一垂迹和光　佛ハ本地神ハ垂迹ト云ハ佛家ヨリ云義也神ハ本地佛ハ垂迹トハ神道ヨリ云義ナリ和光トハ佛ノ光ヲ和テ神トアラハレ衆生利益スル姿ナリ

一扣　ヒカヘル說文曰牽馬也从手口トアリ

一萬死ヲ出一生ニ合　貞觀政要一云大宗曰玄齡昔從我定天下備嘗艱苦出萬死而遇一生云云　文選四十一曰夫人臣出萬死不顧一生之計

一野心ノ者　文選四十二云北狄野心翰曰野心謂野獸之心善曰左氏傳令尹子文曰諺云狼子野心

一諸司格勤　諸司ハ百司ト云カコトシ夫々ノツカサ也格ハ致也勤ハツトムル也役々ヲイタシ作ス事也格ヲ或ハ格ニ作ル其トキハツ丶シムト讀ソ史記ノ周本紀ニモ朝夕恪勤トアリ

一須臾　中庸曰道也者不可須臾離也シハラクトヨム又佛說ニハ一日一夜ヲ三十ニ分ケテ其一分ヲ須臾ト云ナリ

一竹園　親王ノ御事也連枝トハ千字文新註云父母如樹兄弟如枝同受父母之氣故曰連枝也

一仙蹕　漢書曰出稱警入言蹕顏師古曰警戒肅也蹕止行人也今モ公方ナトノ出御ノ時ニ先奉行御伴ノ衆御ナリ〳〵ト云テ往行ノ者ヲモ止メヌルソ潘安仁籍田賦云正設門閭之蹕注ニ鄭司農曰蹕謂止行者淸道トアリ

一天狗　杜子美天狗賦云上揚雲旓兮下列猛獸云云　但是ハ魔道ノ天狗ノコトニテハ無キカト思ソ其故ハ此賦ノ中ニ天狗嶙峋氣獨神秀色似狻猊小如猿狖トカケリ然レハ唯畜類ニアルヲ斯ハ云ヒタリ

一强秦　秦始皇ヲサシテ云ソ暴虎ノ秦ト云タモ秦ヲ怖レテ云ソ次ノ高祖項羽ノ戰ノ事ハ末ニ別シテアル程ニコ丶ニハ略スルソ

一紀信ト云ケル兵高祖ニ向テ申　史記本紀七曰漢將紀信說漢王曰事已急矣請爲王誑楚爲王々可以間出於是漢王夜出女子滎陽東門被甲二千人楚兵四面擊漢王亦與數千騎從城西門出走成皐項王見紀信問漢王安在信曰漢王已出矣項王燒殺紀信

一黃屋ノ車　史正義曰李斐云天子車以黃繒爲蓋裏

一左纛　史注云李斐曰纛毛羽幢也蔡邕曰以犛牛尾爲

之師古云纛音毒又徒倒反タウノ音ヲ用ヒテヨシ犛ハ黑色ノ牛也
一成皐　正義曰成皐故縣在洛州汜水縣西南二里
一烏江　正義曰括地志云烏江亭即和州烏江縣是臣瓚ハ牛渚ト云所ニアルト云タリ委クハ末ニ至テ注ス
一千載一遇　得賢臣頌ニハ千載一會トカケルモ同シコトソ希ナルコトヲ云ハントノ辭ソ

太平記鈔第三卷

一笠置　此寺ハ天武天皇第三皇子大津皇子本願トシテ立給ヘリ
一紫宸殿　俗是ヲ南殿ト云也九間四面
一玉扆　文選第三注扆屏風樹之坐後也又三禮圖云扆従廣八尺トアリ樹ハタツルトヨムナリ又第四十卷注ニ　扆屏風也天子所居後有屏風トモ云ヘリ
一南面ノ德　禮記曰君之南嚮答陽之義也臣之北面答君之義也
一橘諸兄公　敏達天皇ノ御子難波皇子ノ其子ニ大俊王其子栗隈王其子美奴王ノ子ナリ井手ノ左大臣ト云正二位ニテマシマスソ
一志貴ノ毘沙門　河内信貴毘沙門ハ明蓮上人建之ト拾芥抄ニアリ
一多聞　毘沙門ニ祈テ生タル故ニソ惣シテ毘沙門ト云ハ天竺ノ語也此ニハ多聞ト翻シタソ福德之名聞四方故ト注シタソ
一回天ノ力　通鑑集覽第十一云文帝時張公謹論事有回天之力云云　天ヲ回ストハ人間ノ成スワサテハ無ソ
一流鏑　文選二十七注云鏑箭也
一攀折　ツヾラオリト讀也
一十善ノ君殺　生偷盜邪婬ノ三ハ身業ノ罪也妄語綺語惡口兩說ノ四ハ口業ノ罪ナリ貪欲嗔恚愚癡ノ三ハ意ノ上ノ罪ナリ此十惡ヲ翻シテ再ヒ犯サヾルヲ十善ト云フ此十善ニ上中下ノ三品アリ下ノ十善ノ報ハ修羅道ノ報ヲ得中品ノ十善ニテハ人間ノ大國ノ王ト成リ上品ノ十善ノ功德ニヨリテハ天上ノ報ヲ得ル也故ニ天子ヲハ十善ノ君ト申シヌル
一坤軸　春秋括地象云地有三千六百之軸コヽノ意ハ地ハ此ノ軸ニテサヽヘタルニ軸カ折レテ地モ沈ムホトニ士卒モ沈ト思タソ
一般若寺　醍醐ノ觀賢僧正ノ建立ナリ
一偏衫　褊ノ字ハ誤レリ竺道祖魏錄云魏宮人見僧祖一肘不以爲善乃作偏袒縫於僧祇支上相從因名偏衫トアリ
一須彌八萬由旬　須彌ハ具ニハ蘇迷盧ト云フ此ニハ好光山トモ亦ハ妙高山トモ云ナリ高サ八萬四千由旬アリ由旬ハ異說カ多ソ或ハ十六里或ハ三十里ヲ

一由旬ト云フ
一殷ノ湯夏臺ニ囚レ　史記ニ云夏桀不務徳而武傷百姓々々弗堪迺召湯而囚之夏臺　夏ノ桀カ無道不徳ニシテ湯ヲ夏臺ト云牢獄ヘオシコメテ置タソ正義ニモ夏臺ハ獄名也トアリ獄トハ此邊ノ籠ノ事ソ然ルニ湯ハ獄ヨリ出テ仁道ヲ修メラレシニ依テ諸侯悉湯ニ歸伏シケリ故ニ遂ニ兵ヲ率シテ夏桀ヲ伐テ天子ノ位ニ登リ代ヲ殷ト云ヘリ
一越王會稽ニ降　末ニ呉越ノ戰ノ事アリ故畧ス
一分野　弘決第一ニハ其地分野トアリ其時モアリサマト讀來レリ惣シテ天官書ナトニ多ク國々ノ分野ト云事アリ夫ハアリサマト云事ニテハナシ
一繼體ノ君位　文選四十七注云繼體謂後主也又漢書師古注ニモ繼體謂嗣位也トアリ
一天上ノ五衰　大論云諸天命欲終時五死相現一華冠萎二腋下汗出三蠅來著身四見更有天坐已坐處五自不樂本座文又倶舍論云復有五種大衰相現一衣染塵埃二華鬘萎悴三兩腋汗出四臭氣入身五不樂本坐此五相現必定當死
一人間ノ一炊　邯鄲ノ黍一炊ノ古事ヲ云ナリ火ヲ吹テ飯ヲカシク間ヨリモ人間ハ墓ナキ物ナリトソ
一長講堂　天子御代々ノ過去帳ヲ置レシ所トソコレニ依寺領等數十箇所ヲ付ケラレテ古ハ繁昌ノ寺ソ
一非常ヲ誡　周禮註云天子行在所至清道以虞非常コレハ常式ニナキ不慮ノ事ノアランヲ能ク用心ヲスル也
一窮達時ヲ替　窮ハ困窮ノ義ナリ達ハ榮達ソ
一策ヲ帷幄ノ中ニ運シ等　張良カ傳ノ辭ソ常ノ事ナレハ注セス
一陳平張良カ肺肝ノ間ヨリ流出
一役ノ優婆塞　元亨釋書第十五云役小角者賀茂役公氏今之高賀茂者也和州葛木上郡茆原村人少敏悟博學兼郷佛乘年三十二棄家入葛木山居巖窟者三十餘歳云云　大方ハコヽニ書ルカ如シ或時攝州ノ箕面山ニ在リシニ山ニ瀧アリ小角ノ夢ニ瀧口ニ入テ龍樹菩薩ニ對談スト思ヘリ夢覺テ後ニ則伽藍ヲ建立シテ箕面寺ト號セリ奇特ノ事多カリシ也
一孔雀明王ノ神咒　佛在世ノ時ニ一リノ年少比丘アリ名ヲ吉祥ト云フ此人出家シテ後上首ノタメニ洗浴ヲ用意スルトテ薪ヲ破ル時ニ異木ノ下ヨリ一ノ

黑蛇來テ比丘ノ足指ヲサス毒氣身ニ遍シテ悶絶シ口中煦沫シ兩目翻上セリソノ時阿難彼比丘ヲ見テ驚キ即佛所ニ詣テカクト申ス佛其時ニ大孔雀王咒ヲ誦持セシメヌレハ苦痛忽ニ消除ス云云　大金色孔雀王咒經云佛告阿難往昔於雪山王南有一金色孔王雀佛住其中彼以大孔雀王咒經朝説自護晝則平安暮説自護夜則安穩云云　此經文ニ見タルカ如ク過去ノ孔雀王佛ノ所説ノ神咒ナリ

一彼神ヲ縛シ谷ノ底ヘソ投入　岩橋ノヨルノ契モ絶ヌヘシ明ル侘シキカツラキノ神

太平記鈔第四卷

一楚ノ囚人　楚ヨリ鄭ヲ伐チシ時ニ晉齊宋衞ナトノ諸侯カ鄭ヲ救タルニ依テ鄭ハ力ヲ得テ戰テ楚ノ鍾儀ヲ虜ニシテ晉ノ景公ニ獻シタリ一兩年過テ晉公軍ノ藏府ヲ見ラレケルニ楚國ノ冠ヲ著タル者カ繩ニツナカレテ居タル者アリ汝ハ誰ソト問ハレケリ有司對曰鄭人所獻楚囚也ト景公驚サテモ久シク窮屈シタリトテ縲ヲ解カシメ勞ハリタソ鍾儀悅ヒ極リナクシテ再拜稽首シタソ景公汝ハ楚ニテハ何タル族ソト問ハレタレハ某ハ伶人樂官ノ者也ト答タソサラハ樂ヲナセト仰ラレタホトニ楚風ノ樂ヲ奏スルナリ仁君ノ德アル者トテ晉ヨリ楚ヘ歸ヘサレタソ楚モ外聞旁過分ノ義ナリトテ公子辰ト云フ者ヲ使ハシテ禮ヲ云ヒ遂ニ晉ト和睦セラレタソ左傳成公九年ニ詳ナリ趙嘏詩ニ空戴南冠學楚囚ト作ルモ此古事ソ

一尋桃源跡　是ハ元來仙境ノ事ナリ晉太元年中ノ事ナルニ武陵ト云所ノ者カ魚ヲ濟捕(スクヒト)ルトテ溪ヲ行ク時還ル路ヲ忘テ彼方此方ヘタトリ行トテ忽ニ桃花ノ林ヲ見付ケテサテハ此邊ニ人家アラント悅ケルニ遂ニ男女ノ怡然トタノシミ居タルニ逢フ數日ヲ經テ還リヌ武陵桃源ト云ハ是也今云ヘル意ハ浮世ヲステヽ隱居ノ方ニ取成テ云ナリ

一懷首陽愁　伯夷叔齊カ彼ノ首陽山ヘ隱レ居テ薇ヲ折テ飢ヲタスケタソ今モ官職ヲ停メラレテ飢ニ望メル愁アル事ヲ云ソ

一運通塞時否泰　共ニ周易ノ語ソ通ト泰トハ一對ソ塞ト否トハ共ニフサカルトヨム文選三十七ノ注ニモ否塞泰通トアルソ

一逍遙生死　逍遙ハ自然無爲ノ境界ヲ云ソ生死ノ二法ハ共ニ自然ノ理ヨリ起ソ乍出乍沒誰カナスワサテモ無イソト見タル語ソ天地洞然トハ仁王經下卷ノ四無常ノ偈ニ劫燒終訖乾坤洞然須彌巨海都爲灰揚ト說カレタソ文ニ見タルカ如ク世間有爲ノ諸法天地ヲ始メ須彌大海何レモ殘リナク終訖ト成ルソ此意ヲ思ヒツメテ天地洞然ト云ハレタソ奇特ノ心カケナルヘシ

一普天之下　毛詩第十三卷北山篇曰溥天之下莫非王土率土之濱莫非王臣云云　普モ溥モ同シ

一官軍　通鑑集覽三十二云官者猶稱天子也不敢斥言
天子故稱曰官又有稱家者又有兼稱官家者
一敗北　資治通鑑第三注服虔曰人好湯而惡陰北方幽
陰之地故軍敗曰北死ハ陰生ハ陽ナリシカレハ幽陰
ノ死ヲ敗テ生ノ陽ニ向フ義ナリ
一杜少陵　排韻曰杜甫字子美襄州人少貧舉進士不第
困長安天寶末奏賦三篇帝奇之
一路經灎澦等　杜子詩集十卷ニアリ將赴荊南寄別李
劔州弟題ノ詩也灎澦ハ水ノ名也在瞿唐峽口云云
一小野篁　道風カ子ナリ
海原ヤ八十島カケテ漕出ヌト人ニハツケヨ海ノツ
リ舟　承和六年ニ隱岐ヘ配流セラレ仁壽二年十二
月二十三日ニ卒セリ
一主憂則臣辱等　前ニ注ス又周書ニモ君憂臣勞主辱
臣死ストアリ
一骨ヲ醢ニセラレ　集覽三云反者被誅爲葅醢鄭玄曰
切之四寸爲葅莝肉爲醢戰國策不避葅醢之誅高誘注
言剉斮之如此耳
一身ヲ車サキニセラル　釋名ニハ車裂曰轘トアリ
一年未滿强仕　曲禮上曰四十曰强而仕サルホトニ强
仕ハ四十ノ年ノ名ニスルソ
一桑門人　ヨステヒトト讀ナリ集覽第九曰桑門即沙
門也袁宏曰沙門漢言息也息意去欲而歸于無爲也
一圓寂　天竺ニテ般涅槃ト云ヲ此ニハ圓寂ト云也眞
如法性ノ覺ヲ云フ然ルニ我等死シテ眞實ノ覺ノ臺
ニ還ル故ニ死スルヲ圓寂トハ云フナリ
一東宮大進　東宮春宮ハ一體ナリ唐名ヲ龍樓又鶴禁
ト云又ハ銀榜ト云トアリ儲王ノマシマス所ナリ大
進職原下云名家五位任之尤可擇其人也大進奉行官
中諸公事如禁中職事仍非器用者不任之
一立部袖　立部ト座部ノ二ツアリ白氏詩集第三ニ立
部伎ト云アリ堂上者座堂下立トアリ
一梨園弟子　長恨歌注曰唐禮樂志初隋有法曲其聲清
新而近雅也玄宗酷愛法曲選座部伎弟子三百人教於
梨園謂之梨園弟子
一玲瓏　甘泉賦ニハ和氏玲瓏トアルヲ晉灼カ注ニハ
明貌トアリ祖庭事苑ニハ風吹聲トモノセタソ
一青海波　盤渉調ノ樂ナリ
一間關タル鶯ノ語ハ花下ニ滑　琵琶行ニアリ間關即
鳥聲也又間關崎嶇屈轉貌トアリ鶯ノ聲カ高ク鳴キ

又種々ノ音曲ノアルヲ屈轉ト云タソ
一幽咽セル泉ノ流　幽咽泉流氷下難水ノ流ルヤウナル聲モアリ流トヨミタルカ又ハラリト流カ如クナル聲モアリ
一四絃一聲如裂帛　四ノ絃ヲ一聲シラヘタルハス丶シノ絹ヲ引サクカ如シト
一露ノカコト　カコトカコツケノ心モアリ亦契ノ心モアリ
一戎衣　軍中ノ武具ヲモチ甲ヲ著ル姿ナリ
一爲君一日恩誤妾百年身　白氏文集第三ニ井底引銀瓶ト云所ニアル語ソ次句ニ云ク寄言癡小人家女愼而將身輕許人イツレモ是ハ女ノ身ノ一日ノ君恩ニヒカレテ一生空ク過シヌル事ヲ云タソ故ニ少キ女ナトハ輕シク人ニ吾身ヲ許スヘカラスト言ヲ寄セタソ
一能因法師　在俗ノ時ハ永愷ト云ケリ備前守元愷カ子ナリ
一最勝寺　東山六勝寺ノ中ノ一ツナリ尊勝寺ノ東ニアリ文永元年十月二十七日ニ供養スト
一情動于中言呈於外　毛詩序云情動於中而形於言トアリ文選第一ノ注ニハ凡作詩者言其志情發於内必見於言ト云云
一龍門原上ノ苔ニ埋　朗詠ニ龍門原上土埋骨不埋名云云　是ハ題元少尹集白樂カ作ナリ龍門ハ季奇云禹鑿通河水處廣八十歩三秦記云龍門水懸船而行兩旁有山龜魚倶集其下而不得上得上則爲龍
一瘴海ノ氣　瘴ハ癘也ト云フ廣韻ニハ熱病也ト云ヘリ然レハ此字ハ誤ナリ嶂ニ改ムヘシ山ノ屛風障子ヲ立タル如キナルヲ嶂ト云ナリ
一天ニ二ノ日無國ニ二ノ王　内外典倶ニ此義ヲ立タリ世無二佛國無二主ト云或ハ增一阿含經第三十二云一國之中亦無二王一佛境界無二尊號ト說ケリ
一蘭臺金馬　蘭臺ハ近代ハ辨官ヲ云フ金馬ハ書林廣記一云金馬門宦者署在未央宮云云　東方朔主父偃嚴安徐樂階待詔金馬門即此
一得々來　碧巖一云達磨遙觀此土有大乘根器遂泛海得々而來單傳心印云云　天下ヲ我物ニシタル貌ソ東坡十四云知是多情得々來注ニ僧貫休詩一缾一鉢垂々老萬水千山得々來
一雖有亢龍悔　周易云上九曰亢龍有悔何謂也子曰貴

而無位高而無民賢人在下位而無輔是以動而有悔也
亢苦浪反子夏傳云極也廣雅云高也龍モアマリニ極テ高クアカリ過レハ悔カアルナリ
一九五ノ帝位　總シテ六十四卦トモニ九五ノ位ヲハ君位ト定ムルソ中ニモ乾ノ九五ハ飛龍在天利見大人トアリ
一秋ノ夜ノ千夜ヲ一夜ニナソラヘテ　伊勢物語ノ歌ソ
一強顏見ヘシ　アリ明ノツレナク見ヘシ別ヨリ曉ハカリウキ物ハナシ　通鑑第四十九ニ強顏猶言顏厚也ト云フ
一天子行在　書林廣記一云行在天子所居所至處曰行在所蔡邕獨斷天子以天下爲家不以京師居處爲常則當乘車輿以行天下車輿所至奏事處皆曰行在云云　梁琛曰行曰乘輿止曰行在
一雞唱抹過茅店月　温庭筠カ商山早行詩ニ晨起動征鐸客行悲故鄉雞聲茅店月人迹板橋霜
一揚義兵　吳子曰救亂誅暴謂之義兵
一志士仁人等　論語八衞靈公篇云子曰志士仁人無求生以害仁已上　志士トハ仁ニ志スト云事也仁人トハ仁ヲ安スル人ナリ
一昔衞懿公カ北狄ノタメニ殺サレテ有リシヲ　韓詩外傳第七卷云衞懿公之時有臣曰弘演者受命而使未反而狄人攻衞於是懿公欲興師迎之其民皆曰君之所貴而有祿位者鶴也所愛者宮人也亦使鶴與宮人戰余安能戰遂潰而皆去狄人至攻懿公於熒澤殺之盡食其肉獨舍其肝弘演至報使於肝辭畢呼天而號哀止曰若臣者獨死可耳於是遂自刳出腹實内懿公之肝乃死
一見義不爲無勇　論語ノ語ソ
一微服潛行　何ニモイヤシキ服ヲ著ヒソカニ忍テ行クソ
一共ニ天ヲ戴ク事ヲ耻ツ　禮記曲禮曰父之讎弗與共戴天トアリ父ハ子ノタメニハ天也然ヲ父ノ讎ヲ復セスシテ何ソ共ニ天ヲ仰キ視ルヘキヤトソ
一或時越王范蠡ヲ召テ宣ケルハ　是義ナレハ越王ノ方カラ恨ヲ舍テ吳ヲ親ノカタキト云タル體也左ニテハ非ズ吳王夫差ノ親ヲハ闔廬ト云フ越王勾踐ノ親ヲハ允常ト云ケリ此兩人相戰フ事年久シ然ルニ允常ハ病死シテ勾踐即位セルヲ闔廬ヨキ折節ト思テ軍ヲ取カケラレタレハ吳郡ノ嘉興縣ト云所ノ南

ニアタリテ檇李ト云所ニテ射ニ當テ薨去ステニ近シ其時ニ太子ノ夫差ニ遺言シケルハ如此矢ニアタリテ死スル事生前ノ遺恨コレニ過キス我カ言忘ルルコト無クハ必越王勾踐ヲ伐給ヘト云ヒ置ケリ故ニ夫差軍兵ヲ催シ手ツカイノ事用意シケレハ越王サキタツテ呉國ヘ一戰ヲ取カケント云ケルヲ范蠡ハ重々ニ諫ヲナシテ止メタク思ソ然レハ越國ヨリ呉王ヲ親ノカタキト書ケルハ倒事也

一中國ニ臨テ南面シテ孤ト稱　曲禮曰庶方小侯入天子之國曰某人於外曰子自稱曰孤トアリ此意ハ小國ノ君ハ天子ノ國ニ入テハイカニモ早下シテ吾カ名モ官モイワヌソ又天子ノ國ナラテ餘ノ所ニテハ吾カ官爵ヲ云ソ子官カ伯官カ公官アルヲ云ソ又縱他國ニテ有ラウトマヽ吾カ臣民ニ對シテモノ云フ時ハ孤ト稱スルソ孤トハ特立無德ノ名ソ今世ニ吾身ヲ愚ナト云ト同シ然ルヲ南面シテ孤ト稱セヨト云ハ天子ノ國ヘ入テノ時ニ聞ユルソ是ハ少シ違ソ

一天ノ時ハ不如地利　孟子第四ニ出タリ末ニ至テ注ス

一先則制人等　史記本紀七ニ吾聞先即制人後則爲人所制トアリ索隱曰謂先擧兵能制得人後則爲人所制

一越王十一年二月上旬　史記ニハ越王元年トアリ

一夫椒縣　杜預曰夫椒在呉郡呉縣大湖中椒山是也索隱曰夫音符椒音焦王鼫與索隱曰鼫音石與音餘

一三途ノ露　三途トハ一ニハ火途コレハ地獄ノ事也二ニハ血途コレハ畜生道ノ事也畜生ハ互ニ血ヲ飮ミ肉ヲクラウ故也三ニハ刀途コレハ餓鬼道ノ事也餓鬼ハ瓜刀ノコトクニ成テ互ニキリ裂スル故也四解脱經ノ說也

一大夫種　索隱曰大夫官種名也

一敗軍之將再不謀　此次句ニ亡國之大夫不可以圖存ト史記ノ九十一ノ語也

一轅門　張晏曰軍行以車爲陣轅相向爲門故曰轅門

一陪臣　論語朱熹注云陪臣家臣也左傳注諸侯之臣曰陪臣

一膝行　ヒサニテハイテ行ヲ云フ今モ御前ニテハ膝行スルナリ二字ヲイサルトヨム

一將軍ト交ヲ結フコト膠漆ヨリモ堅　后漢雷義字仲公豫章人也陳重與雷爲友於情如兄弟時人語曰膠漆雖堅不如陳與雷二人幷爲群守

一窮鼠却嚙猫　抱朴子ニ出タリト余未見本文

一根ヲ深蔕ヲ固　老子徳經云深根固蔕注乃長生久視之道也

一璽綬　韋昭云天子印稱璽應劭漢官儀曰綬長一丈二尺法十二月廣三尺法天地人此佩印之組也

一一驛　説文ニハ置騎也ト注ス馬ヤトリノ事也傳舍也トモアリ十里一驛ト云ソ

一君子ハ不近刑人　禮記曲禮云刑人不在君側注爲怨恨爲害也王制曰古者公家不畜刑人公羊傳襄二十九年云君子不近刑人近刑人則輕死之道也注云刑人不自賴也疏云猶言不自重似若世人名輕賤之物云非可賴也

一姑蘇城　方輿勝覧ニ云姑蘇城山在呉縣西三十里或曰姑胥或曰姑餘　越絶書闔閭就山起臺三年聚材五年乃成高見三百里

一屢身　屢ノ字ハ誤ナリ褰ノ字ニ作ルヘシヤツストヨムナリ

一羑里　地名在河内蕩陰羑水出焉前漢書地理志在亳州一曰殷名獄曰羑里云云　史記牖里ニ作ルソ或牖城トモアリ崇侯虎カ讒ニヨッテ西伯ヲ羑里ニ囚セラレタソ美女奇物善馬ヲ求メテ紂ニ献シタレハ赦シタソ羑音酉

一天與不取却得其咎　是ハ伍子胥カ辭ニ非ス越王ノ呉王ヲ救ケテ置ントアリシヲ范蠡越王ニ對シテ云タルソ史記云范蠡曰會稽之事天以越賜呉不取今天以呉賜越々其可逆天乎且夫君王蚤朝晏罷非爲呉邪謀之二十二年一旦而棄之可乎且夫天與弗取反受其咎伐柯者其則不遠君忘會稽之厄乎

一蛙其數ヲシラス飛來　史記ニモ呉越春秋ニモ見ヘス太平御覧九百四十九巻ニ出タリト　貞觀政要第九云勾踐軾蛙卒成覇業注云勾踐越王名越王既爲呉所敗修徳治兵謀雪呉耻見蛙下車拜之左右怪問越王曰彼亦有氣者云云

一梟鳴松桂之枝狐藏蘭菊之叢　白氏詩集一巻凶宅ノ所ニ出タリ

一梨花一枝　長恨歌梨花一枝春帶雨

一輕軒　クルマナリ聲類ニハ安軍（車カ）也ト云紫陌ハ都ノ道ソ韻會東西曰陌トアリ

一丹墀　左太冲魏都賦注云丹墀以丹蔣離合用塗地也漢典職儀曰以丹漆塗地故稱丹墀

一展轉ノ思　毛詩關雎篇ニ展轉反側トアリ物ヲ思テ身コロヒマロフ體ナリ車輪ノ廻ルニ比シタソ

一小鹿ノ角ノツカノ間　短ク手一束ホトナルヲ云ヘル歟

一樓臺ヲ造ル此ヲ姑蘇臺ト名ク　夫差ノ造レルニハ非ス闔閭ノ時ニ造レリ前ニ云カ如シ

一妲己　紂伐有蘇氏トキニ彼所ヨリ妲己女ヲ奉リテ降ス紂王深ク寵愛ニフケリ惡事ヲ多ク作テ遂ニ代ヲ亡セリ皇甫謐曰有蘇氏美女索隱曰國語有鐘氏女妲字己姓也

一幽王ハ褒姒ヲ愛　幽王ノ名ハ官涅ト云フ褒國ヨリ上ル女ナレハ則褒姒ト名ヲ付タルソ昔夏代ノ衰テ亡ントスル時ニ褒人ノ神カ化シテ二龍トナレリ王ノ庭ヲ伺テ云余褒ノ二君也ト夏帝是ヲトシテ殺シ其龍ノ吐所ノ沫ヲ藏ニ納テオキ遂ニ殷ノ代ニモヒラカス又周ノ代ノ厲王ノ末ニ始テヒライタレハ彼龍ノ沫カ庭ヘ流出テ忽ニ大ナル黿ニ成レリ此黿ニ少キ女カ値タレハ則孕ミタリ時ニ一リノ女ヲ生ミ出タヲ恐シク思棄タレトモ遂ニ褒ノ國ヘ往テ居タソ是ヲ幽王ヘ上テ褒姒ト云タリ此化モノ如ノ女ナレハ國ヲ亂ス本トナレリ

一荊棘ノ露モ瀼々　朗詠云强呉滅兮有荊棘姑蘇臺之露瀼々毛詩第十蓼蕭篇云蓼蕭斯零露瀼々注露蕃貌トアリ

一青蛇劒　萬花谷三十三云龜文龍藻白虹青蛇屢鏤步光皆劒名云云　但此中ノ屢ノ字ハ不審ナリ他所ニハ屬ノ字ナリ

一忠言逆耳　家語云孔子曰良藥口苦而利於病忠言逆耳而利於行

一呉東門ノ幢ノ上ニ掛　呉王怒リテ伍子胥ニ屬鏤ノ劒ヲ賜テ自殺セシメタソ其尸ヲ取テ鴟夷ノ革ニ入レテ江中ニ流サレタソ呉人カ是ヲ憐テ子胥カタメニ祠ヲ江ノホトリニ立テ置タソ則胥山ト名ヲ付タソ説苑第九ニモ詳ニアルソ

一越王ニ使者ヲ立テ、曰　呉ノ大夫ノ官公孫雄ト云者ヲ使ハシタソ勾踐ハ夫差ノ命ヲ救ント思シヲ范蠡頻ニ異見ヲ云タレハ勾踐ハ呉ノ使者ニ對シテ左樣ノ事ヲハ云ヒ得マシト云ハレタソサラハ返事ヲハイカヤウニモ仰ラレヨ吾ハ兵ヲ進ント云タソ呉ノ使者ハ泣々還タソ勾踐ハアマリニ痛シク思テ人

ヲ使ハシテ呉王ヘ云ヒ給フヤウハ角東ト云所ニ百家ホトアルホトニ其ノ君ニナシテ置ントアリシヲ呉王謝曰吾老矣不能事君王遂自殺云云 人ノ手ニハカヽラレヌソ

一玉趾　足ナリ易曰賁其趾々則足也又此ヲ脚ト云フ玉ハ尊テ云辭ナリ

一伐柄其規未遠　斧ノ柄ヲ作ルトキニ手本ハ別ニハナキソ今木ヲキル所ノ斧ノ柄カ手本ソト云義也毛詩第八伐柯篇ニハ伐柯々々其則未遠トアルソ

一面縛　柳文三十九面縛乞身注ニ面縛者謂縛手於後唯見其面トアリ索隱ニモ縛手於背而面向前云云同シ義ナリ

一諺曰　文選四十八注ニ諺謂傳言也トアリ世ニ言ヒ傳タル言ナリ

一大名ノ下ニハ久不可居　越世家云范蠡以爲大名之下難以久居

一功成名遂身退　老子經云功成名遂身退天之道注言人所爲功成事立名跡稱遂不退身避位則遇於害此乃天之常道也

一遂姓名ヲ替ヘ陶朱公ト呼　越世家ニモ浮海出齊變姓名自謂鴟夷子皮索隱曰范蠡自謂也蓋以呉王殺子胥而盛以鴟夷今蠡自以有罪故爲號也云云 列仙傳云范蠡字少伯徐人也事周師太公望好服桂飲水爲越大夫佐勾踐破呉後乘輕舟入海變名姓適齊爲鴟夷子更後百餘年見於陶爲陶朱君財累億萬號陶朱公復棄之蘭陵賣藥後人世々識見之然ルニ越呉ヲ滅シタルハ周元王三年ニアタルソ范蠡カ太公望ヲ師トシタルハ六百四五十年前ノ事也サテコソ列仙ノ中ニハ入タレ

一五湖ト云所　此ニハ異説カ多アリ張勃カ呉錄ニハ五湖者太湖之別名ト云タソ五湖ト云所ト云モ諸レアリ去レトモ方輿勝覽二云五湖舊經謂貢湖遊長塘湖上湖射貴湖滆湖與太湖而五韋昭云胥湖蠡湖洮湖滆湖就太湖而五虞仲翔云太湖之水通五道謂之五湖

一迢々　高キカタチ也或ハハルカニ遠キ貌ソ杜子美三詩云五城何迢々迢々隔河水

一雞人曉ヲ唱シ聲　朗詠云雞人曉唱聲驚明王之眠是ハ漏刻策文ソ都良香ノ作ナリ雞人トハ鳥カフトヲミ著タル役人ヲ云

一夜ノ殿　ヨンノヲトヽト讀ム四方ニ妻戸アリ南ハ

大妻戸一間也帳同シ清涼殿東枕ニ御座敷也
一萩戸　禁秘抄云常御所也
一巫山ノ雲雨　文選第十九ニ宋玉カ高唐賦ニアル事也昔楚ノ襄王ト宋玉ト雲夢ノ澤ニ遊ヒシ時上ニ雲氣アリテ忽ニ容ヲ改メ變化シテ山ノヤウニ成タリ此レハ何ニ事ソト王ノ問給ヘハ宋玉カ云ヤウハ是ハ朝雲ト云ト答タレハ又朝雲トハ何ナルコトソト問フ宋玉カ云昔楚ノ懐王ノアル時ニ高唐ニ遊ヒ疲レテ晝寢シ給ヘハ夢ニ一リノ婦人ヲ見ル彼婦人カ云ク吾ハ巫山ノ女也君コヽニ遊ヒ給フホトニ願ハ枕席ヲ進ントテ來タリト王一入ノ事ト思召シテ慰ミ給ヘハ彼婦人ヤカテ暇ヲ申シ歸ル時ニ王ニ對シテ曰妾在巫山之陽高丘之岨且爲朝雲暮爲行雨朝々暮々陽臺之下ト云タソ夢サメテ後ニ朝ニ見レハ言タ如ク雲雨ノ形カ有タホトニ奇特ト思ヒ神女ノタメニ廟ヲ立テヽ則名ヲ朝雲ト付テアリ此レカ只今又見ヘ來レリト襄王ヘ申シケリ巫山ハ漢書ノ注ニ南郡巫縣ニアリト云タソ李善曰朝雲行雨神女之美也

太平記鈔第五巻

一竹内左大臣公衡　竹内ト云ハ誤ナリ後西園寺相國實兼ノ息ヲ竹林院左大臣公衡ト云ナリ光嚴院御母廣義門院ト申ハ此大臣ノ御女ナリ菊亭乃祖今出河兼季公モ此大臣ノ弟也

一大嘗會　御即位アリテ後ニ執リ行ハルヽ事也末ニ至テ注ス

一梶井ノ二品法親王尊胤　後伏見院ノ御子也光嚴院光明院兩帝ノ御弟也

一比極　天子ニ比シ奉ルソ或ハ比辰ナト云モ同

一今上皇帝　光嚴院殿ナリ

一犯嚴顏　舞賦注曰嚴顏君王嚴整之顏云云　イカニモ正シキ貌ヲ云ソ

一事君之禮　コレヨリ奸人也ト云マテハ孝經ノ諫諍篇ノ注ナリ姦人在朝賢者不進

一三諫等　禮記曲禮ニモ三諫而不聽則逃之ト云云

一阿順之徒　徒ノ字ハ誤ナリ従ノ字ナルヘシ理局ニオヨハス曲テ主命ニ従フ義也毛詩注云阿曲也ヲモネルトヨム也貞觀政要第二曰又無匡諫苟阿順事皆稱美則君爲暗主臣爲諛臣君暗臣諛危亡不遠

一尸位　尸ハツカサトルナリ空ク位計ヲツカサトリテ其實ノナキヲ尸位ト云ナリ又尸祿トモ云ソ政要第二注云尸祿謂尸位而竊祿云云

一事二君　文選卅八云忠臣不事二君貞女不更二夫

一百里奚　排韻曰秦大夫百里奚其先虞人家于百里因氏焉トアリ

一二仕秦穆公　百里奚ハ元來虞國ノ臣下ナルヲ晉献公ノ時虞ト虢トヲ滅シテ虞君ヲモ百里奚ヲモ虜ニセラレタソ百里奚ハ秦ノ國ヘ迯行タレトモ事ノ子細アリテ又逃テ宛縣ト云所ヘ行トテ楚國ノ鄙人カ執ヘテ推籠テ置タルヲ秦ノ穆公彼賢ナルヲ聞及テ楚人ニ五羖羊皮ヲ賜テモラワレタルソ其時年已七十餘ソ穆公國ノ治メヤウヲ尋ラレタレハ吾ハ亡國ノ臣下タルホトニカヤウノ御尋ハ却テ迷惑也ト辭シタソ穆公ノ義ニハイヤ其方ノ業ニテハナシ虞君ノ暗昧ヨリ起テ國ハ亡ヒタリト强テ云ハレタ故ニ力オヨハス三日ノ間雜談ヲ申シタレハ穆公ノ意ニ合テ悦ハレタソ遂ニ國政ヲ授テ五羖大夫ト名ヲツケテ奔走アツタソ此ヲ二タヒ仕トハ云ソ史記ノ

本紀第五ニ詳載リタソ
一管夷吾　史記列傳二云管仲夷吾者潁上人少時常與鮑叔牙游鮑叔知其賢管仲貧困常欺鮑叔々々終善遇之不以爲言已而鮑叔事齊小白管仲事公子糾及小白立爲桓公々子糾死管仲囚焉鮑叔遂進管仲
一翻佐齊桓公　桓公ノ名ハ小白ト云ソ公子糾ハ小白ノ兄ナリ齊襄公即位ノ後無道ノ事多クアリケル間鮑叔牙ハ此國ハヤカテ亂逆ナラント思ヒ小白ヲ引取テ莒國ヘ奔リ行タソ案ノ如ク襄公ノイトコニ公孫無知ト云人襄公ヲ弑シテ國ヲ亂タソ管仲ト召忽ト云者トハ公子糾ヲ連レテ魯國ヘノカレタソ其後齊國ノ衆卒カ寄合テ彼公孫無知ヲ殺テ國ニハ君主モナキ體ニ成リタルニ依テ莒ヨリ軍勢ヲ催シテ小白ヲ入レテ即位セシメム是ヲ桓公ト云タソ魯國ヨリハ公子糾ヲ入レテ齊王ニセントシタルヲ莒ノ人衆ト幷ニ小白トハ元ヨリ一味ナレハ魯ト一戰ニ及テ結句ニ公子糾ヲ討殺シタソ其時ニ召忽ハ倶ニ死シタレトモ管仲ハ死セスシテ殘リ魯國ヘ使ヲ遣ハシテ云樣ハ公子糾ヲ齊ヘ送ルコト六日遲テハヤ小白カ齊君ト成ラレタ程ニ力及ハヌト云タソ其後又齊ヨリ魯ヘ取カケテ先ツ管仲ヲ殺ソト云ヘルヲ鮑叔牙カ桓公ヘ諫ヲ申スヤウハ君且欲覇王非管夷吾不可夷吾所居國々重不可失也ト云タソ此時桓公ヨリ管仲ヲ召出シテ對面シ禮ヲ厚クシテ遂ニ大夫ノ官ニ進メラレタソ史記世家ニ見タリ子路カ桓公殺公子糾召忽死之管仲不死ト云テアルモ此事ナリ
一九合朝諸侯　論語七云桓公九合諸侯不以兵車管仲之力也トアリ史記云兵車之會三正義曰左傳云魯莊十三年會北杏以平宋亂僖四年侵蔡遂伐楚六年伐鄭圍新城也乘車之會六正義曰左傳云魯莊十四年會于鄄十五年。又會鄄十六年同盟于幽僖五年會首止八年盟于兆九年會葵丘是也天下ノ諸侯ヲ引合テ隨意ノ義ヲセラレタルトカト思ヘハ左ハナクテ天子ノ御タメデ有ルソ論語ノ馬融カ注ニモ天子微弱桓公帥諸侯以尊周室一正天下トアリ
一無以道射鉤之罪　魯ヨリ齊ヘ入ルトキノ戰ニ管仲カ射ケル箭ニテ桓公ノ帶レタル鉤ヘ射アテタレハ桓公ハソラ死ヲシテ居ラレタソサレトモ後ニ大夫ニ用ラル丶時少モ管仲カ科トハ云ワレヌソ史記魯聞無知死亦發兵送公子糾而使管仲別將兵遮莒道

射中小白帶鈎小白佯死云云

一世皆不奈羈皮之耻　百里奚カ羖羊五枚ニカワレタ耻ノ事ヲ誰モ云ワヌトソ羈ハ通志ニ賣也ト注ス韻會ニハ羈ト賣トハ同字ト見タリ羖ハ公戸切牡羊曰羖

一許由巣父　蒙求上云逸士傳許由隱箕山無盃器以手捧水飲之人遺一瓢得以操飲々訖掛於木上風吹瀝々有聲由以爲煩遂去之又文選第三十四注云琴操曰堯大許由之志禪爲天子由以其不善乃臨河而洗耳又皇甫謐逸士傳曰巣父者堯時隱人常山居以樹爲巣而寢其上時人號曰巣父也又許由ト巣父ト一人ノ事ト云説モアリ珍義也文選四十二云山父不貪天下之樂注曰山父即巣父也譙周古考史曰許由夏常居巣故一號巣父琴操曰許由夏則巣居冬則穴處飢則乃山而食渴則仍河而飲堯大其志禪爲天子由曰放髮優游所以安已不懼非以貪天下也又莊子曰堯以天下讓巣父々曰君之牧天下亦猶予之牧孤犢焉用惴々然以所牧而與予々無用天下爲也牽犢而去

一與鳥獸同羣孔子所不執　論語微子篇曰鳥獸不可與同羣孔安國曰隱居山林是與鳥獸同羣コレハ必ス人跡ヲ絶シ世塵ヲハナレタルヲ計リ道ノヤウニ思ハ惡シト也

一以罪棄生則違古賢夕改之勸註曰古君子朝有過而夕改今欲以罪棄生則違此義

一忍垢苟全則犯詩人胡顏之譏　註曰胡何也言何顏居代也若忍穢且全其生則犯當時之譏也詩無此句今言詩者誤也善曰胡何也毛詩曰何顏而不速死也殷仲文表曰胡顏之厚義出於此云云　是皆曹子建上責躬詩ノ文也文選第二十卷ニ出タリ

一油錠　大論音義云有足名錠無足曰燈コレハ然燈佛ヲ又錠光佛ト名ルニ付テノ義也燈モ錠モ足ノ有無ノ不同ニシテ器財ニ用タルホトニアブラツキト讀ムヘキ也

一四十有餘ノ古入道　高時崇鑑入道ハ嘉元々年癸卯歳誕生ニシテ正慶二年ニ自殺ス三十一歳ナリ四十有餘ト云ヘカラス但醉狂ノ義ヲ云ハントテ古入道ト云ナルヘシ

一未然　文選二十八云君子防未然李善曰言小人近情苦自信而遇禍君子遠慮防未然而蒙福物ノアラハレサル前ヲ云ナリ

一正税　斂也ト註ス賦斂トテ年貢ヲ云

一郊原ニ尸ヲ爭　暮爲白骨朽郊原　野外曰郊々外曰原

一天道ハ必盈ヲ虧　易謙卦云天道虧盈而益謙

一辨才天　略シテハ大辨天トモ云ナリ信スル者必ス樂説辨才ヲ得ルナリ具ニハ最勝王經散脂品并大辯品功德品ニ説レタリ以智慧爲正見タリ諸天傳讃曰大辨才天智慧主於説法人與摠持云云

一虎ノ尾ヲ履　周易履卦ノ辭也今ハ危キ事ヲ云也

一大般若　六百卷唐ノ玄奘三藏ノ翻譯也

一隱形ノ咒　天竺ノ龍樹菩薩イマタ出家シ給ハサル時此法ヲ行テ王宮ヘ忍入リ后ト密通アリシナリ龍樹菩薩傳トテ藏經ノ中ニアリ其傳ニ見タリ

一玄奘三藏　河南洛陽ノ人ナリ俗姓ハ陳氏穎川ノ陳仲弓カ後胤也渡天シテ十三年ノ間ニ百三十餘國ヲ周遊シ貞觀十九年ニ歸唐シケレハ太宗勅シテ弘福寺ニシテ翻經セシメ給ヘリ

一摩利支天　是ハ梵語ナリ此ニハ陽炎ト譯ス此天ニ依テハ見ルヘクシテ捉ルヘキヤウモナシ火モ燒コトアタワス水モ漂スコトナシ陽炎ノ如ナル故也一切經ノ中ニモ摩利支天經一卷大摩里支菩薩經七卷アリ廣略ノ不同ニシテ此天ノ神用ヲ明レタルニ異コトナシ文云佛言有菩薩名摩里支恒行日月之前日月之不能得見亦不能捉不能禁縛又金光明經鬼神品云能令有情隱身於路或水火王難盜賊軍陣皆可隱身令不得便ト云ヘリ其外彼天ノ形相等ノ事廣文ナレハ略ス

一十六善神　十六唐士ハ經論ニ見タリ壒囊集ニ十六善神ノ事ヲ載タレトモ本據タシカナラス

一柿ノ衣　赤色無文ノ衣ナリ正先達ノ位ニ至テ是ヲ著ス是則肉身ヲ轉セスシテ本有舍那ノ極位ナル姿ヲ表スル也

一笈ヲ掛　山伏道ニハ緣笈ヲフチヲイトヨム傳記曰山伏笈者像悲母體相也故於是有皮肉骨謂以皮裹之皮也中心穀味者肉也笈板者骨也

一頭巾　巾ノ字ヲ襟ノ字ニ作ヘシ傳記曰頭襟者衆生所生頂上襟者衆生能生妄想也十二襵者表衆生所具十二因緣其色黑色顯最初無明前八分著之示不動頂上八葉在頭襟之内

一曲浦　曲ノ字誤ナリ楚辭云望涔陽兮極浦王逸曰

極遠也浦涯水也

一南無歸命　南無ハ天竺ノ語ナリ此ニハ歸ト云フ故今ハ梵漢ヲ取合セテ云タルソ

一分段同居　天台大師諸經論ノ意ヲ明シ給ヒテ四土ト云事ヲ立テリ一ニハ同居二ニハ方便三ニハ實報四ニハ寂光ナリ是即迷悟ノ次第ヲタヽミ上タル姿也初ニ同居土トハ凡聖雜居故云同居ト釋シテ凡夫モ佛モ菩薩聖衆モ時ニ依テ倶ニ同ク居スル所ナレハ同居ト云ナリ然レハ此娑婆モ同居土ナリ又除所ノ世界ニモアルヘシ此同居ノ生ヲ受ルモノハ人ハ人一分ノ生畜類ハ畜類一分ノ生ナレハ分々段々ノ各別ノ姿ナレハ分段トハ云ナリ成唯識論第八卷云分段生死謂諸有漏善不善業由煩惱障緣助勢力所感三界麁異熟果身命短長隨因緣力有定齊限故名分段ト云リ身命ノ短長モ貧福貴賤モ苦樂得失モ皆分々段々ノ業ヲ感得スルト云カ肝要ナリ

一苗裔　集覽二十三云離騷經帝高陽之苗裔兮晦庵集註苗裔謂遠孫也苗者草之莖葉根所生也裔者衣裾之末衣之餘也故以爲遠末子孫之稱也

一萬仞　孔安國ハ八尺曰仞鄭玄ハ七尺四仞トアリ

一碧潭藍ニ染　朗詠曰水復水誰家染出碧潭之色云云潭ハフチトヨムナリ

一千手陀羅尼　一卷アリ小經ナリ

一尾籠　緩怠ノ義ニ用ル辭ナリ蹲踞トハウヅクマルトヨムソ字林ニハ謂垂足實坐也トアリ

一移木信　帝範下卷ニハ移木無欺トアリ史記第六十八卷云商君立三丈之木於國都市南門募民有能徙置北門者豫十金民怪之莫敢徙復曰能徙者豫五十金有一人徙之輙豫五十金以明不欺卒下令々行於民云云故ニ移木ト云ヒ或ハ徙木ト云フ同シ事ニシテ倶ニ本文モアリ

一獻芹ノ賂　文選四十三云美芹子者欲獻之至尊注云昔人有美戎菽甘枲莖芹萍子對鄉豪稱之鄉豪取嘗之蜇於口慘於腹衆哂之又翰墨全書丙集第十云野人食芹美欲獻之至尊イツレモ同事也又書言故事ノ第五ニモ出タリ

一紀信ハ詐テ敵ニ降ル　第二ノ卷ニアリ魏豹ハ留テ等ラ云ハ史記列傳第三十云漢王令豹守滎陽楚圍之急周苛遂殺魏豹

一股肱　尙書大傳云股肱惟臣

一孟施舎　孟子三云孟施舎守約也註曰孟姓舎名也施發音也　陳丞相カ謀ヲ得トハ陳平ハ高祖ノ臣トシテ張良ニ肩ヲナラヘタリ

一北宮黝カ勢　孟子云北宮黝之養勇也不膚橈不目逃アリ註ニ人刺其肌膚不爲橈却刺其目々不轉睛逃避之矣

一三傑　漢ノ三傑ニ比シテ云ソ張良ト蕭何ト韓信ト也此三人者皆人傑也トアリ

一樵夫　廣韻ニハ柴也漢書音義ニハ樵取薪者也

一芻蕘　孟子二注云芻蕘者取芻薪之賤人也

一死セル孔明生ケル仲達ヲ走ラシム　蜀志曰諸葛亮字孔明瑯琊陽都人躬耕隴畝云云　蜀ノ劉備ノ臣也蜀ノ章武元年ニ丞相ノ官ニ居セリ十二年甲寅歳ニ司馬懿ト對シテ五丈原ト云所ニ陣ヲ取ルコト百餘日ナリ是非共ニ一戰シテ實否ヲツケントスレトモ司馬懿カ出テ合ハス故ニ孔明カ方ヨリ婦人ノ喪服ヲ用テ送レリ是ハ敵ヲ侮テ丈夫ノ心ハナイト云意也故ニ司馬懿モ怒ヲ成テ諸軍ヲ觸テ合戰スヘシト云タソ孔明カ思ヤウハイヤ〳〵彼ハ何トシテモ一戰スヘキ者ニアラス唯諸軍ヘノ聞ヘ計ナルヘシトテ又使ヲ遣ハシテ戰ノ定日ヲキワメント云タレハ使ニ對シテ其返事ヲハ云ハスシテ孔明ノ常ノ所行ト食事ハイカホト進ルソト尋ラレタソ使者カ云事ハ孔明ハ夙興夜寢テ萬事ヲ見計ラヒ又食モ一日ニハ數升ニハ過キスト語タレハサテハ孔明ハ氣ヲイリ死ニセン人ソト心エテ彌ヨヒカヘテ戰ハセヌソ去レハ案ノ如ク其軍中ニテ病氣重シテ已ニ死シタリ孔明カ代官ニ楊儀ト云者カ諸ノ軍兵ヲ卒シテ打出テ孔明カ死ヲハ隱密シタルヲ百姓ノ中ヨリ司馬懿ニ告タソ其時ニヨキ事ヨト思ヒ多勢ヲ用テ戰テ楊儀ヲ追タソ孔明カ衆ニ姜維ト云者カ楊儀ニ力ヲ付テ取テカエサセタレハ孔明カ死タト云ハ僞ナリ只今居レハコソ斯手ハシカク取テ返スラメトテ司馬懿ハ諸軍ヲ引カセテ敗軍ノ色ヲ見セタソ今云タル語ハ其時ノ辭ソ綱鑑紀要第八巻云百姓爲之諺曰死諸葛走生仲達云云　仲達ハ司馬懿カ字ソ此惡ル口ヲ聞テ懿笑曰吾能料生不能料死故也ト生トシイケル者ハ死ヲイヤカレトモ此仲達ハ餘ニ比與ナル語ヲハ使タソ

太平記鈔第六卷

一年光不停等　朝詠曰奔箭易迷猶成誤於下流之水急江相公ノ作ナリ月日ノ早ク立ツヲ奔箭ニ比シタソ又水ノ急流ノ如クトモ見タソ翰墨全書ニモ光陰如箭言速也トアルソ同義ソ

一御撫物　日本紀云使太玉命以弱肩被太手襁而代御手以祭此神者始於此云云　太手襁ト云ハ神ヲ祭ルトキ肩ニカクル物ナリユウタスキノ事ナリ釋門ニシテハ袈裟ナリ祈禱ノ時撫物ト云ハ此ヨリ起レリ

一一夜松　天暦九年三月十二日ニ菅丞相ノ神託云北野右近ノ馬場ニ一夜ニ松千本生スヘシト果シテ其言ノコトク也此ヲ一夜松ト云

一アルシ忘レヌ梅

コチ吹ハ匂ヲコセヨ梅ノ花アルシナシトテ春ヲ忘ルナ

一昌泰ノ年　醍醐天皇ノ年號ソ

一鳩ノ杖　白氏六帖云老人刻杖爲鳩取鳩食不咽

一天滿天神ノ垂迹　コレハソケノ聞ヘヌ義ナリ本地ハ觀音ソト云コトハ薩天錫カ詩ヨリ云ヒ來レルソ薩天錫詩集ハ唯一卷アリ其集ノ末ニ天滿宮ト題シテ無常說法現神通千里飛梅一夜松萬事夢醒雲吐月觀音寺裏一聲鐘ト作タソ

一悉地　一切ノ事ノ極メヲ云フ也悉トハ一切ト云事也地トハ極地ナリ大日經等ニ出タリ

一風聞　此二字ヲトリキクトヨムヘキナリ賈逵國語註云風采也采聽商旅之言也云云　風聞ハ常ニ云コトナレトモ此注ハ珍ク思テ注スソ

一周章　楚辭云聊翺翔兮周章王逸曰周章周流也謂周流往來也

一驟　文選ノ注ニ舉也トアリ

一魚鱗鶴翼　常範上云夕對魚麗之陣朝臨鶴翼之圍注ニ左傳桓公五年云司馬法車戰二十五乘爲偏五人爲伍以車居前以伍居後也以伍承偏之隙而彌縫其闕漏也此蓋魚麗陣法トアリ又鶴翼陣名出八陣圖ト注セリ魚鱗ノ陣ハ先ホソニ中フトニ魚ノ鱗ヲ並タルヤウニ馬ノ鼻ヲ立並フ鶴翼ノ陣ハ鶴ノ羽ヲヒロケタルカ如クニ勢ヲアハラニ立ヒロケテ小勢ヲ中ニ取籠ル支度也

一蜂起　項籍本紀註云如淳曰蜂起猶言蜂午也衆蜂

飛起交横若午言其多也索隱曰凡物交横爲午言蜂之起交横屯聚也故劉向傳註云蜂午雜沓也鄭玄云一縱一横爲午

一上宮太子　聖德太子ノ御事也

一神代ヨリ始テ持統天皇御宇ニ至ルマテ記サレタル書三十卷云云　是レハ相違也此書ヲハ日本書紀ト名ク人皇四十四代元正天皇ノ御宇養老年中ニ舍人親王ト太ノ安麻呂ト二人勅ヲ奉テ撰ス

一前代舊事本紀　此ハ十卷アリ用明天皇ノ御宇ニ聖德太子ト蘇我馬子宿禰ト二人コレヲ撰ス

一持統天皇　天智御女ナリ御母ハ越智娘蘇我山田石川丸ノ大臣ノ女ナリ天武天皇太子ニテマシ〳〵シ時ヨリ妃トシ給フ太子草壁王早隱レ給シカハ此皇后臨朝給フナリ

一文質三統　論語云子曰殷因於夏禮所損益可知也周因於殷禮所損益可知也注馬融曰所因謂三綱五常所損益謂文質三統新注云文質謂夏尚忠商尚質周尚文三統謂夏正建寅爲人統商正建丑爲地統周正建子爲天統云云　白虎通下云尚書大傳曰王者一質一文據天地之道禮三正記曰質法天文法地也帝王始起先質後文者順天下之道本末之義先後之序也云云　三統トハ天地人ノ三ツニ配スレトモ先ツハ三微ノ月ノ事ソ三微ノ月トハ十一月建丑ト十二月建子ト十三月建寅トナリ是ヲ天地人ノ三統ニアテ、文質ノ義ヲ分ケタソ錦繍萬花谷後集第四云正朔有三本天之三統謂之三微月也三微者何謂也陽氣始施黃泉萬物始動微而未著

一具平親王六代ノ苗裔赤松入道圓心　具平親王ハ村上帝ノ御子六條宮ト申ス中務卿ニ任シ給ヒキ是ヨリ先ニ兼明親王名譽ヲハシキ是ヲ中書王ト申セシ故ニ具平ヲハ後中書王ト申ナリ賢才文藝諸道ニ明ニ佛法ノ方マテ暗カラサルソ此親王昇殿シ給ヒシ日清涼殿ニテ所貴是賢才ト云題ニテ韻ヲ探テ作文有リ中殿作文ト云コト是ヨリ始レリ然ルニ今六代ノ孫トハ云ヘトモ是モ少シ違セリ具平親王師房土御門右大臣　顯房六條右大臣　久我中院等之先祖也其男雅兼中納言　定房大納言　定忠右少將此息ニ兄ヲハ家定ト號ス弟ハ師季侍從季方是ヲ始テ赤松ト名クシカレハ師季ハ第七代季方ハ第八代ナリ是ヨリ又第八代ヲ赤松次郎則村ト云入道シ

テ法名ヲ圓心ト云フ此子ニ兄ヲハ範資攝津國守護ナリ弟ハ帥律師則祐ト云實名ヲ妙善ト云フ此子兄ハ左近將監義則弟ハ將則ト云フ明德二年十二月三十日ニ山名氏淸叛逆ノ時京中合戰ノ日討死ス

一讖文　韻會曰說文驗也徐曰凡讖緯皆言將來之驗也後ニアラン事ヲ兼テヨリ云置ク文ヲ云ナリ

一令旨　リヤウジ丶ノ字ハ濁リテヨム文選三十六注云秦法皇后太子稱令々命也ト又通鑑綱目第三曰張晏曰太子稱家故曰令又三十八云太子之命謂之令

一陳勝カ蒼頭ニシテ大澤ニ起　前漢書列傳一云陳勝字涉陽城人也勝少時嘗與人畔耕之壟悵然甚久曰苟富貴無相忘傭者笑而應曰若爲傭耕何富貴也勝太息曰嗟呼燕雀安知鴻鵠之志哉秦二世元年秋七月發閭左戍漁陽九百人勝廣皆爲屯長行至蘄大澤鄕云云此中ニ勝廣ト云陳勝ト吳廣ト二人ソ大澤ハ徐曰在沛郡蘄縣第三十九卷ニ具ニ云フ故ニ今ハ略ス

一蒼頭　應劭カ注ニハ赤眉カ黃巾ノ如ク靑キ物ヲ頭ニ著他ノ軍ニ相別ツ故ト云タレトモ蕭望之カ傳ノ注ニハ漢ニハ奴ヲ名テ蒼頭ト云トアリ今ハ是レカ親シキソ

一天道缺盈　易謙卦云天道虧盈而益謙地道變盈而流謙云云 山カ地ノ下ヘ入テ居ルヤウナルヲ謙ト云フ也是ニテ萬ノコトヲ知ヘシ

一積惡豈果シテ其身ヲ滅サヽランヤ繫辭云惡不積不足以滅身積惡ノ者ハ必身ヲ滅ストナリ

一石ノ鳥居　鎌倉ノ極樂寺ノ忍性ノ建立ナリ高二丈五尺アリ

一中有ノ途　俱舍論第八云死生二有中五蘊名中有ト頌セリ此身ハ死シテ未來ノ生ヲハイマタ受サル間ニ人ハ人ノ形ヲ受クルヲ中有トハ云ナリ但シ是ハ有マシキ事ト云說モアリ先ツ有ルニ決スルナリ又極惡極善ニ中有ナシト定タソタトヘハ地獄ヘ落ツル者ト上天ノ果報ヲ受ル者ノトハ中有ノ間カナイソ

一黃壤一堆　壤ハツチクレトヨム惣シテ地ノ名也天地ノ事ヲ穹壤ト使ソ黃ハ地ノ本色ナリ山谷詩ニ眼看白璧埋黃壤作タソ

一九天　二義アリ淮南子云中央曰鈞天東方曰蒼天東北旻天北方玄天西北幽天西方皓天西南朱天南方炎天東南陽天是爲九天也又太玄經云一中天二羨天

三從天四更天五臘天六廣天七咸天八沈天九成天云云史紀封禪書ノ中ニハ少シ字カ違セリ

一石碑　死シタル人ノ德ヲ擧ケ石ニ書キ刊テ其人ヲ悲ミ哀ムヲ石碑ト云ナリ字書ニ碑悲也ト注シタソ說文ニハ竪石紀功德ト云ヘリ但シ天子ハ大木ヲ用テ碑ヲツクル此ヲ豐碑ト云ト喪大記ノ注ニ見タリ

一本領安堵　通鑑集覽四十五曰將士皆安然如墻堵之不遷動云云

太平記鈔第七卷

一菜摘川　夏箕トモ夏身トモ書ナリ菜摘トハ不審也吉野ニアル名所ナリ

一川淀　河ノヨトミタル所ヲ云ナリ新古今ニ湯原王吉野ナルナツミノ川ノ河ヨトニ鴨ソナクナル山カケニシテ

一雲歟花歟ト怪ル

一金峯山　義楚六帖第十一卷云日本國都城南五百餘里有金峯山頂上有金剛藏王菩薩第一靈異山有松檜名花軟草大小寺數百節行高道者居之不曾有女人得上至今男子欲上三月斷酒肉欲色所求皆遂云菩薩是彌勒化身如五臺文殊

一閧　韻會ニ閧胡貢反鬪聲也ト注スト キノコヱトヨム

一勝手明神　神書ノ中ニモ垂跡ノ號バカリ有テ御實名ハ所見ナシ

一戈鋋　呂延濟カ注ニハ矛稍也ト云說文ニハ小矛トアリ

一天帝ノ身ニハ近カテ　天ノ帝釋ヲサシテ天帝ト云ソ涅槃經第二十卷云釋提桓因不與鬼住云云　自然ニ敵カ近カヌ事ヲ說ケリ

一漢楚ノ鴻門ニ會セシ　漢ハ高祖ナリ楚ハ項羽ナリ末ニ至テアルホトニ略ス鴻門ハ所ノ名ナリ通鑑一云鴻門地名在戯西續漢志云新豐東十里舊大道北下坂口名也

一天ノ河　テンノカワ辨才天ノマシマストヤラン

一道ノ要　集覽第十云要遮也孟子使數人要於路サエキルトヨム也

一虎口ニ死遁　桓溫薦譙元彥表曰身寄虎吻危同朝露注ニ吻口也李善曰莊子孔子曰丘幾不免虎口云云危キ所ヲノカルト云ナリ

一天魔　天竺ノ語ニハ磨羅ト云譯シテ殺者ト云ナリ善事ヲ打殺シ或ハ智慧ノ命ヲ殺故ニシカ云ナリ一切經音義第六卷云梵言磨羅此云殺者斷慧命故名爲魔也又大菩薩藏經第一卷音義云此翻名障能爲修道作障礙故亦言殺者常行放逸斷慧命故

一波句　法華音義云正言波早夜此云惡者謂常有惡意成就惡法也

一魯般カ雲梯　魯般トハ公輸子ト云タル者ノ事也楚ヨリ宋ヲ攻ントスル時ニ天下第一ノ巧匠ナル魯般ニ命シテ雲ニモ昇ルヘキホトノ高キ梯ヲ用意セラレタレ共宋ニ墨子ト云者カ有テ遂ニ其戰ニハ負ナンタソ蒙求ナトニ有事ソ集覧三十七云雲梯以木爲之可階而登城也索隱曰案梯構木瞰高也雲者言其升高若入雲然

一八大地獄　一等活二黑繩三衆合四叫喚五大叫喚六焦熱七大焦熱八無間ナリ

一新田新貞ト申ハ義家十七代ノ後胤　七ノ字ハ剩ルナリ只十代ト云ヘシ義家ノ第一子義國其子ニ兄ヲハ義康コレハ足利ノ先祖ナリ弟ハ義重是則新田流ノ乃祖ナリ是ヨリ義貞マテハ八代ニアタレリ

一不肖　文選四十一云不肖之才カ注云不肖謂不才也善曰禮記曰某之子不肖應劭風俗通曰生子不似父母曰不肖云云

一門楣　釋名楣眉也近前若面之有眉也當家ニテ面テ立タル者ト云義ソ

一令旨ニハアラテ　右ニ云カコトク令旨ハ親王ノ命ヲ云綸旨ハ主上ノ命也禮記曰王言如絲其出如綸

一撥亂　撥ハオサムルトモ又ハラウトモヨム也亂ノ字ヲモ馬融カ注ニハ治也ト云タソ荀子ニモ治亂謂之亂トアリ故ニオサムルトヨムソ但シ亂ノ字ハ古治字也シカルヲ誤テ亂ノ字ニ作ルト云義モアリ

一斑足王　仁王經賢愚經幷ニ大論等ニ出タリ此王ハ身ニ羽翼生シ脚ハ鹿足ノコトクアリテ飛行自在ノ人ナリ惡人ノ教ニ依テ一切ノ血肉ヲ食ス中ニモ人ノ血肉ヲ專トセシホトニ朝暮ノ供膳ニモ備フヘキ由シ勅アレトモ左ヤウニ人ノ血肉ヲ上ルニ足ラス厨ヤノ者モ調法ニ及ハサル間手カラ自ラ飛行シテ人ヲ捕ヘ食セリト師子素駄王經ト云一卷ノ小經ノ中ニ説レタリ仁王經ニハ是ト少シ違シタリ經云昔有天羅國王有一太子欲登王位一名班足太子爲外道羅陀師受教應取千王頭以祭塚神云云

一龍伯公カ力　高下圍三萬里ノ山ヲ以テ一ノ鼇頭ノイタヽク所ナリ而ニ此六鼇合タルヲ一釣ノ所用トス龍伯國ノ人ハ能ク是ヲ合セテ負テ飛行スルナリ山海經云東海之外大荒之中有大人之國河圖王板曰從崑崙以北九萬里得龍伯之國人長四十丈生萬八千歳始死云云　列子第五卷湯問篇云龍伯之國有大人

擧足不盈數步而暨五山之所一釣連六鼇合負而趣歸其國

一地ヲ略スル　集覽一注云畧謂行而取之用功力不多也トアリ手間モイレスシテ敵地ヲ取ル謀ナリ

一纜ヲ解　文選三十一云解纜候前侶注ニ纜纖船索也トアリツナデトヨム

太平記鈔第八巻

一無恙　ツヽカナシ又ハウレイナシトモ云ヘシ韻會曰恙餘亮切一曰蟲入腹食人心古者草居多被此毒故相問無恙乎又神異經北方獸曰㺜々恙也黄帝殺之由是無憂疾謂之無恙云云　爾雅曰恙憂也

一丁狀　尙書正義ニ丁ハ二十歳ヲ云ヒ壯ハ三十ヲ云トアリ又唐天寶三載ニ初令百姓十八爲中二十三成丁云云　舊制十六爲中二十爲丁今ハ歳ニハカマワス唯軍卒ノ事ソ

一離宮　集覽一云離宮天子出遊之宮云云　内裏ヲハナレテ有ル宮ナレハソ

一太公カ兵道ノ詞　六韜第一ノ末ノ辭ナリ不意ヲ擊トハ敵ノ思ヒヨラヌ事ヲセヨト云義ナリ

一辟易　集覽第五十二云辟易驚却貌漢書項籍傳揚喜追羽々瞋目叱之人馬倶驚辟易數里師古曰辟頻亦反辟易謂開張而易其舊處トアリ今マテ居タル所ヲ立チサル義ソ

一大三災一時ニ起　此世界ノ滅スル時ニ先ツ天ニ七ノ日輪出テヽ大海ノ水モ一滴モ殘ラス成リ遂ニ地獄ヨリ燒上テ此大地モ山河草木悉ク燒テ天上マテヤケ上ルヲ火災ト云ナリ其後ニ天ヨリ洪雨フリテ世界悉ク流レ盡ルヲ水災ト云フ其後ニ毗藍風ト云フ大風カ吹テ色界天マテ過半吹破ル是ヲ風災ト云ナリ

一日野中納言資名同資明　兄弟ナリ資明ハ柳原流ノ先祖ナリ

一勾當ノ内侍　長橋殿ヲ云ナリ

一卿相雲客　卿ハ公卿大納言已上ソ相トハ三大臣ヲ云ナリ四位以下ヲ雲客ト殿上人ト云也夕拜郎ト云

一警蹕　集覽三法師古曰天子出則稱警示戒肅也入則言蹕所以止行人清道也劉貢父曰言出入者互文耳出亦有蹕トアリ

一蓮華王院　後白河院ノ御願治承二年十月二十七日ニ供養アリ千手觀音一千一體ナリ新千體ト號ス

一四武衝陣　六韜四云武王問太公曰敵人圍我斷我前後絶我糧道爲之奈何太公曰此天下之困兵也暴用之則勝徐用之則敗如此者爲四武衝陣四方ヘ武者ヲ自由ニ使ヤウニシテ敵陣ヘツイテカヽル義ソ衝ノ字ツクトヨムソ

一牒使　韻會曰達協切說文札也徐曰議政未定短牒謂謀曰牒增韻官府移文謂之牒又訟辭亦曰牒

一止觀窓前　止觀ノ法門ハ天台大師ノ自解發明ノ事ナレハ前代未聞ノ深旨ナリ故ニ輙ク云ヘキ道ニアラス法性寂然名止寂而常照名觀

一天眞獨朗　三千事々ノ諸法本有常住覺體ハタレガ造リ始メタルニモ非ス唯不思議ノ妙理ナル所ヲ天眞ト云也此覺體ニ至ル所ノ智慧ハ他人ノ示ス所ニモ非ス獨リ妙境ノ了達ナレハ獨朗ト云ナリ輔行ニ釋シテ云理非造作故曰天眞證智圓明故云獨朗

一忍辱衣　法華經云柔和忍辱衣

一帶魔障降伏之秋霜　秋霜トハ利劍ヲサス歟又荀悅申鑒曰人主怒如秋霜トアリ今ノ意ハ柔和ノ衣ノ上ニ怒ノ姿ヲ顯ハシテ利劍ヲ帶ストソ

一妖孽　祖庭事苑第五云上於喬切下魚列切說文云衣服歌謠草木怪謂之妖禽獸蟲蝗之怪謂之孽

一山王須有非三非一之深理　山王ノ二字ヲ佛法ニアテヽ云フ時山ノ字ハ横ノ一點ト竪ノ三點ナリ王ノ字ハ横ノ三點ト竪ノ一點ナリ法華圓實ノ極說ノ三諦ハ而モ一諦ニシテ三ノ異ヲ立テス一諦不思議ノ妙法ト云ヘトモ而モ三諦ノ實ヲノツカラ備レリ謂ヘハ鏡ト明ト像ノ三ハ其差ハアレトモ然モ暫クモ離ル時ナシ三ニモ非ス又一ニモ非ス是ヲ非三非一ノ深理ト云ナリ山王ノ二字モ自ラ是ヲ以テ其實義ヲ知ヘキ也

一王事靡盬　毛詩第十三卷ノ文也王事ハ一大事ナレハ輕クハ無シトソ盬不堅固也ト注セリモロシトヨムソ

一出塵之徒　北山移文ニモ出塵之想ト書ケリ出家ハ世俗ノ風塵ヲ出離スル身ナレハカク云タソ

一甲冑　甲ハ鎧ヲ云冑ハカフト也日本ニハ只ヨロイト計リ思歟ソ

一時ヲトツト作ル　軍神勸請シタテマツル音ヲハ時ツクルト云フ敵軍ヲ推破テ勝軍サノ時勸請ノ神ヲ送リ奉ル音ヲハ勝時ト名ツクルナリ然ハカリソメニモ妄ニ時ガシラヲアゲザル也ト

一孫子カ千變ノ謀　孫子ニハ九變ノ術ト云事アリ但シ千變ト云タルハ奇兵正兵ノ千變萬化ナルコトヲ云ナルヘシ

一吳子カ八陣ノ法　吳子ノ上卷ニ凡料敵有不ト而與

之戰者八トカケリ一々ニ長篇ナレハ略ス但シ孔明カ八陣ノ圖ノヤウニハ無ソ文選四十一云擄八陣之列注曰擄布也八陣謂孫呉兵法善曰雜兵曰八陣一曰方陣二曰圓陣三曰牝陣四曰牡陣五曰衝陣六曰輪陣七曰浮沮陣八曰雁行陣

一佛生日　東京夢華錄云四月八日佛生日十大禪院有浴佛齋會乃煎香藥糖水相遺謂之浴佛水本朝ニモ推古天皇ノ御代ヨリ此會ヲ始マリヌソ

一灌佛ノ水　異朝ニモ佛生日ニハ衆ノ香ヲ集テ五色ノ水ニナソラヘ佛ノ頂ニ灌ケリ事林廣記ニモ詳ニ見タリ本朝ニモ行ルレトモ萬一此比ニ神事ニアタレハ行ハレヌトソ

一孔子ノ言　論語ニアリ

一江南橘　周禮曰橘踰淮而化爲枳此地氣然淮南子曰夫橘樹之江北化而爲橙云云　ハヤマタナバナトヨム也

一高山寺　法相宗ノ寺ナリ昔ハ學者モ多クアリケルトソ

一延朗上人　元亨釋書十二ニ釋延朗姓源氏但州養父郡人大將軍義家四世之孫也トアリ此師ノ行德多端ナリ谷堂ノ寺號ハ最福寺ト云也

一六根清淨　我等カ肉身ノ六根カ大方佛ノ六根ノヤウニ似テ少ツヽ神力ナドモアルヲ云ナリ日本ノ性空上人ヤ明慧上人ナトモ此ヤウナル位ニ至リ給ヘルトナリ

一總角　幼稚ノモノヽ髮カラワニユツタルヲ云也又ハツノマキトモ云

一護法　佛法守護ノ天人等也ゴヲウトヨムトソ

一轉法輪ノ相　佛ノ出世ニハ必ス八相ト云コトアリ其中ノ一相ナリ佛ノ說法ヲ云ナリ一代藏經ハ七千餘卷アレハ輪藏カアレハ則チ轉法輪ノ相ナリトソ

一都率ノ內院　佛說ノ意ハ今コヽヨリ見ユル天ヲハ四王天ト云イ其上ニ次第ニ忉利天夜摩天都率天ト云フト也此界へ出世シ給ヘル佛ノ先ツ必ス此天ヘ出テ久ク住シ給ヘル所ヲ內院トハ云ナリ此內院ノ外ヲハ外院ト云ナリ

一四十九院　當時ノ諸宗イツレモ專四十九院ノ事ヲ沙汰セリ剩院々ノ號ヲタシカナルヤウニ云ヘル事サリトテハ不審ナリ一代說敎ノ中ニ慥ナル本據イマタ見ス但大乘心地觀經第三卷云從初發心不食肉

以是因緣名慈氏爲欲成熟諸衆生處於第四兜率天四十九重如意殿晝夜恒說不退行トハ說レタレトモ是ニモ別ニ具ナル事ナシ無動寺ノ相應和尙ノ夢中ニ都率天ニ上リ一々ノ院號ヲ見レルト云ヒ傳タリ左ニテモヤ有ルランソ

一四衆ノ佛弟子比丘ト比丘尼ト俗男是ヲ優婆塞ト云フ俗女是ヲ優婆夷ト云フ合テ四衆ナリ

一韋馱天　金光明經鬼神品ノ中ニ韋馱天神アリ是ハ梵語ナリ此ニハ智論ト翻ス靈感要畧曰天神姓韋諱琨南方天王八將之一臣也四王合三十二將而爲其首生知聰慧早離塵欲淸淨梵行修童眞業面受佛囑外護在懷用統三州住持爲最云云　佛法ノ世界ニ流傳シ退轉ナキヤウニ守護アル天ソ

一道宣律師　佛祖統紀第三十云道宣京兆錢氏母夢梵僧語之曰仁者所懷梁僧祐律師也處胎彌十二月而生九歲徧覽群書十二善習文黑十五師日嚴顗公十六誦法華兩旬而徹十七落髮云云　元照律師ト云人律宗ノ九祖ト云事ヲ立タリ此宣律師ヲハ第九祖トスサレトモ唐律宗ト云フコトハ此師ヲ以テ初歩トス

一偉哉　大也奇也ト注セリ

一積惡ノ家ニハ必有餘殃　周易云積不善之家必有餘殃トアリ意同シ

太平記鈔第九巻

一父ノ喪ニ居テ　増韻ニ喪死也ト註シタソ親ノ死去ノ時ハ其ノ禮法ヲナシテ居ル事也白虎通上云喪者何謂也喪者亡人死謂之喪言其亡不可復得見也

一負薪ノ憂　禮記曲禮曰君使士射不能則辭以疾言曰某有負薪之憂トアリ主君ヨリ命シテ弓ヲ射サセラルヽ時射エマシキニ依テタヽハイヤト云ハスシテ此間ハ少シ疾アリ故ニ負薪ノヤウナル事タニモ仕得スト申ナリ孟子ニハ採薪ノ憂ト書ケリ

一王氏出テヽ不遠　足利高氏清和天皇第十六代之後裔ナレナリ

一牲ヲ殺シ血ヲ啜　具ニハ左傳襄公十一年ノ傳ニモ見タリ周禮ニハ春官詛祝シテ作盟詛之載辭ヲ云タルモ此事也禮記涖牲曰盟ト云ヘリ所詮ハ盟ノ字ハチキリトヨム也日本テハ萬ツ談合ヲシテ云堅タル義ナリ其シ様ハ先ツ定ル事ドモヲ云ヒ立テヽ此等ノ事ヲ犯シタラハ科ニヲトサレテカクノ如クナラントテ牲牛ノ左ノ耳ヲサイテ珠ノ盤ヲ用テ牛ノ血ヲ入テ其血ニテ定タル事ヲ書立テヽ各其血ヲスヽリ飲テ後ニ穴ヲ堀テ牛ヲモ血ニテ書タル物ヲモ俱ニ埋ミテ置ナリ禮記註疏曰凡盟者既詛而割牲左耳以珠盤玉敦盛血爲載書々成諸侯共歃血讀書主盟者執牛耳然後堀坎埋牲加載書而埋之言使背盟者如此牛也

一野心　文選四十三云北狄野心注曰野心謂如野獸之心善曰左氏傳令尹子文曰諺云狼子野心

一欝陶　尚書五子之歌曰欝陶乎予心注ニ哀思也トアリ

一大行不顧細瑾　史紀項羽本記ニ出タリ樊噲カ沛公ヘ異見ヲ云時ノ語ソ大行不顧細瑾大禮不辭小讓トアルソ沛公ヲ殺ントスルホトニ義理ヲ闕テナリトモ逃ケ去テ然ル可トソ

一大行之路能摧車等　白氏文集第三巻ニ出タリ大行ト云ハ所ノ名巫峡トハ峡トハ山ノ間ニ水アル所ヲ云也山夾水曰峡トアリ

一千種頭中將　具平親王ノ末孫權中納言有忠ノ息忠顯ノ事ナリ上ニ書スルカ如ク

一鬼丸　劔ノ名ナリ

一三台九卿槐棘　三台ハ三公ヲ天ノ三台星ニ象ル也

九卿トハ太常卿司農卿太府卿光祿卿鴻臚卿宗卿衛尉卿太僕卿大理卿ナリ三槐九棘トワケテ云ヘトモ通シテ意得ヘキ者ナリ千字文ノ新注ニ槐者謂公卿ノ位有槐棘也言槐則其棘可知矣言卿則其公可知矣トアリ集覽十四云樹棘以爲位者取其赤心而外刺象以赤心三刺也槐之言懷也懷來人於此欲與之謀一說槐者取其黃中之美暢於四支棘取能制禦於外周ヨリ已來三公九卿ノ號ハアレトモ九卿ハ多ハ秦漢ノ官也但シ漢世ニハ九卿トハ號スレトモ其官ニ卿ノ字ナシ梁ニ至始テ卿ノ字ヲ加ル也

一三家　閑院花山院中院コレヲ英雄ノ三家ト云ナリ又此三家ニ一々ニ家々有之閑院トハ九條右丞相師輔公ノ男閑院太政大臣公季公ノ流ナリ此下ニ三條西園寺德大寺コレヲ閑院ノ三家ト云ナリ花山院關白內大臣賴通公男京極師實公ノ流ナリ此下ニ大炊御門洞院ノ二家分レタリ洞院ハ今ハナシ中院ハ村上天皇ノ王子具平親王ノ流ナリ此親王ヲ後中書王ト申ス名譽ノ王子ナリ此下ニ久我堀河土御門三條ノ四家分レタリ此ヲ村上源氏ト云ナリ

一行宮　文選ノ五ニ吳都賦注云行宮天子行幸所止處也又李善カ注モ同シ

一天子四海ヲ以爲家　高祖紀ニ蕭何曰天下方未定故可因遂就宮室且夫天子以四海爲家非壯麗無以重威云云　蕭何未央宮ヲ作テアマリニ壯麗ナルヲ高祖怒リ給ヘルコト甚シ此時ニ申シタル辭ナリ

一怪力亂神　論語ノ語ナリ怪異トテアヤシキ事ナリ力トハ譬ハ寡カ舟ヲ盪ス或ハ烏獲カ千鈞ノ鼎ヲアゲタヤウナル力タテノ事ナリ亂トハ臣トシテ君ヲ弑スル或ハ子トシテ父ヲ殺ス事ナリ神トハ人ハ死シテ神トナルナトノ義ヲハ多ク言テ所用ナシトテ孔子ハ仰ラレタソ

一國津御神　下界ノ諸神ヲ云也祓ノコトハニモアリ

一撥刺ノ　魚跳撥刺タリトアルソ不順ノ名ト注シタソ然レハ魚カ己カマヽニ遊泳スル意ナルヘシ

一御生所　ミアレ賀茂明神御誕生所ヲ御アレ所ト申也葵ノ祭ヲモ此所ニテトリ行フトナリ葵ノマツリヲ申也四月也

一銀面雲珠　月ト星トノ事ナルヘシ斯ル時代ハ三光ノ威德モ失ハテヽ塵埃ニ埋沒シテコソアルラメト

歎キタル語ソ
一豐年ニモ不増　禮記第四卷王制篇云祭豐年不奢凶年不儉トアル
一雲南萬里ノ軍戸ニ有三丁　水經注雲南郡本雲山縣地也蜀劉氏建興二年置郡自唐戎州開邊縣而南七十里至西州又二千五百里至雲南城云云　三丁トハ古ハ十六ヲ中トシテ二十歲ヲ丁トス唐ノ天寶三年ニハ十八ヲ爲中二十三成丁ト定メタリ
一禍既蕭墻ノ中ヨリ出　論語ノ季氏篇ノ辭ナリ意ハ禍ハヨソヨリハ來ラス唯タ吾常ノ所ヨリ出ルトソ鄭玄曰蕭之言蕭也蕭墻謂屛也君臣相見之禮至屛而加蕭敬焉是以謂之蕭墻ト胡曾詩ニモ不知禍起蕭墻內ト云タソ
一昆明池　千字文注曰長安城西有昆明池漢武帝時南夷有昆明國地方三百里居水之中能水戰武帝毎伐之不得乃設計據長安城西二千里穿一池四方四千里池水滿中造船於上敎水戰遂破彼國置爲昆州便號其池曰昆明池
一濟淪　隱淪ニ作ルヘシ文選三十一隱倫謂絕迹也ト注セリ深キ委也

一鹽州ノ受降城　白氏文集第三卷ニモ出タリ前漢太初元年ニ此城ヲ築ト見タリ匈奴カアマリ殺ヲ好ミ闘ヲ伐ソ故ニ左大都尉カ漢ヘ降シテ參セント思ヘトモ路カ遠ケレハ成ラヌホトニ漢ヨリ出テヽ城ヲコシラヘ給ヘ匈奴ヲ殺シテ其マヽ逃入ラント約束シテ築セタル城ナレハ降人ヲ受ト云フ義ヲ以テ名トスルナリ西中東ノ三受降城アリト見タリ
一劍閣雖嶮等　左太冲カ魏都賦ノ辭也文選第六卷ニノセタリ劍閣ハ蜀ノ境ニアリ其峯カ劍ノコトク其勢閣ノコトクナレハ名トスルナリ小劍大劍ノ二ノ峯アリ其間タ三十里計ナリ猶委クハ張孟陽カ劍閣賦ニ見タリ文選第五十六卷ニ載タリ
一深根固蔕　老子曰有國之母可以長久是謂深根固蔕
一洞庭雖濬等　注曰濬深負恃也言雖爲深阻無德而恃之者必見奔北軍敗曰北善曰洞庭吳境也史記吳起曰三苗氏左洞庭而右彭蠡恃此險也禹伐之
一糧ヲ捨テ舟ヲ沈ル謀　項羽二萬人ノ士卒ヲ將ヒテ漳水ト云フ大河ヲ渡テ皆舟ヲ沈メ釜甑ヲ破リ棄テ盧舍ヲ悉ク燒拂テ唯三日ノ糧ヲ持テ士卒ニ再ヒ還ルコトナキ心ヲ示シテ遂ニ秦ノ將蘇角ヲ殺シタル

ソ
一故柳踈槐　陰森古柳踈槐無春色公乘億カ詩ソ
一影ノ風　ホノカ　首途カトテ
一叢祠　高誘注戰國策云神祠叢樹也
一賽　カヘリマウシ封禪書曰晉先代反賽謂報神福
也
一未遑顧匪躬　易蹇卦ニ王臣蹇々匪躬之故注ニ執心
不回志匡王室者也劉氏云匪躬之故謂非私其一身之
事故也匪躬ノ字ハミニアラストヨムナリ私一身ノ
遺恨ニアラス偏ニ朝家ヲ守ルトノ意也
一將以魚肉菲　コレハ高氏ノ卑下ノ辭ナリ菲ハ薄也
ト注セリ
一旅トハ　軍旅ト云事ナリ五百人ヲ旅ト云ナリ又ハ
衆也ト云タソ夫モ軍衆ト云意ナリ軍衆ハ必ス他國
ヘ打出ル者ナレハ旅ノ字ヲタヒトヨムナリ故ニ衆
出則旅寓故謂在外爲旅也ト云タソ
一函蓋相應　大智度論九云函大蓋大トアリコレ相應
ノ義也
一石馬之汗　韻府曰石馬霍去病冢前有石人馬本傳注
云云

一金鼠ノ咀　太宋高僧傳第一云天寶中西蕃大石康三
國帥兵圍西涼府詔空入帝御于道場空秉香鑪誦仁王
密語二七徧帝見神兵可五百員在于殿庭驚問空空曰
毗沙門天王子領兵救安西請急設食發遣四月二十日
果奏云二月十一日城東北三十里許雲霧間見神兵長
偉鼓角諠鳴山地崩震蕃部驚潰彼營壘中有鼠金色咋
弓弩弦皆絶云云　玄宗ノ時天竺ヨリ不空三藏來レル
ヲ尊敬シテ國師トシ給ヘリ然レハ種々ノ神變トモ
アリケルソ
一德風加草　論語ノ意ナリ
一利仁將軍　仁明帝ノ御宇大織冠後胤河邊左大臣與
石公四代左衞門督藤嗣三代越前守高房山蔭中納言
弟時長嫡男也
一七縱八横　碧巖ニ出タル辭ナリ
一金谷園　酈元水經注曰金谷水出河南大白原東南流
歷金谷謂之金谷水東南流經石崇故居云云　石崇カ事
ハ後ニ至テシルス
一四面ニシテ皆楚歌ス　楚歌ト云ニ異說カアルソ先
一義ニハ楚ノ項羽ヲ漢兵カ四面ヲ取マハシテアル
時楚國ノ風俗ノ歌ヲ一同ニウタウタルホトニ項羽

ノ心ニモサテハ我國ノ者モ敵ト心ヲ合セタト知ラレタソ又一義ニ應邵曰楚歌者謂雞鳴歌也漢已略得其地故楚歌者多雞鳴時歌也

一帳中ニ入リ其婦人虞氏ニ向テ慕　前漢書第一卷曰漢師諸侯兵圍之數重羽夜聞漢軍四面皆楚歌廼驚曰漢皆已得楚乎是何楚人多也起飲帳中有美人姓虞氏常幸從駿馬名騅常騎廼悲歌忼慨自爲歌詩曰力拔山兮氣蓋世時不利兮騅不逝騅不逝兮可奈何虞兮虞兮奈若何歌數曲美人和之羽泣下數行左右皆泣莫能仰視　忼慨トハ大息ヲツキテ歎ク貌ソ忼ノ字ハ壯士ノ志ヲエヌ貌ト注シタソ

一向漢ノ將軍三人カ首ヲ取　史記ニハ遂斬漢一將ヲトアリ

一苦隨滅道　タヽメチ或クスメチ洛陽東山ノ清水寺ノ南清閑寺ノフモトニアリ

一劍閣ノ遠キ昔　安祿山カ亂ニヨリ玄宗帝ハ長安ノ舊都ヲ離レサセ給ヒテ蜀ノ嶮難ノ道ニ赴カセ給ヒシコトヲ指シテ云フナルヘシ劍閣ハ蜀ノ境ニアル嶮シキ路ナリ

一壽永ノ亂　壽永ハ安德天皇ノ年號也二年七月二十四日ニ平家ノ一族等帝王ヲ奉シテ都ヲ出テ西海ニ赴テ遂長州赤間カ關ニテ滅沒シ給フ事ナリ

一叡襟　天子ノ御物思ヲ申スナリ

一神龍忽鈎者ノ綱ニカヽル　說苑第九卷曰吳王欲從民飮酒伍子胥諫曰不可白龍下淸冷之淵化爲魚漁者豫且射中其目白龍上訴天帝曰當是之時若安置而形白龍對曰我下淸冷之淵化爲魚天帝曰魚固人之所射也若是豫且何罪夫白龍天帝貴訴也豫且宋國賤臣也白龍不化豫且不射今棄萬乘之位而從布衣之士飮酒臣恐其有豫且之患矣王乃止コノ故事ナルヘシ

一樵蘇　樵ハ前ニ云ヘルカ如クキコリ蘇ハクサカリトヨム也韓信カ傳ニ樵蘇後爨トアルニ蘇取草也ト注シタソ或ハ蘇草曰蘇トモ云ヘルソ

一仙蹕　天子ノ出御ヲ警ト云還入ヲ蹕ト號スト云フ是ハ一往ノ義出入トモニ警蹕ト申スヘシト見タリ

一鸞輿　鸞ト云鳥ヲ輿ニツクリテ餝ル故ナリ

一千戶侯　是ハ家千間バカリノツカサトル侯也

一屠所ノ肉　屠殺也裂也牛馬ヲ殺シ肉ヲ割ヲ云フ佛經ニハ屠所ノ羊ト云フコトアリ

一彼已亥ノ年五千貂錦胡塵ニ亡

一潼關ノ戰ニ百萬ノ士卒河水ニ溺　潼關ニシテ大ナル戰ノコトハ度々也漢ノ末ニ張魯ト云モノ潼關ニ至テ陣ヲハリタルヲ魏ノ曹操トリカケラレタ時ニモ互ニ數萬ノ人討レタリ又玄宗皇帝ノ時高仙芝ト云者カ此所ニ居テ祿山ト戰タルモ互ニ多死スト見タリ集覽十四云潼關在華州華陰縣杜佑通典曰潼關元名衝關言河自龍門南流衝激華山而東也後因關之西一里有潼水遂名潼關云云杜詩三云哀哉桃林戰百萬化爲魚夢弼注云潼關又名桃林シカルニ今河水ニ溺ルト云モ玄宗ノ時ノ事ヲサスナリ

一長光寺　武作寺ノ事ナリ此緣起ハ第三十二卷ノ中ニ盛衰記ニ見ヘタル分ヲ書ノセタリ

一三種神器　纂疏云三種神器者神書之肝心王法之樞機也三器次第玉一鏡二劒三此則出生之次如此云云此三ハ大事ノ重寶ナレハ其德ヲタヤスク云ヘキニ非ス所詮ハ三種ノ靈寶胷中ニ收テアリ人々己々ノ境界ニ沙汰スルコト別シテアリカタキコト也トソ

一玄象　或抄云玄上累代寶物也根源様人不知之掃部頭貞敏渡唐之時所渡琵琶二面其一歟云體云聲不可說未曾有物也爲靈物也或云玄象呑青鉢之水所謂號玄象又玄上宰相献延喜帝仍號玄上兩說也云云ケンシヤウ上下共ニ濁ルヨシ

一下濃　スソコ但不知何物追而可尋

一二間御本尊　或抄云二間敷疊二帖此間向妻戸敷阿闍梨座半疊一南間ハ如御講之時懸本尊寄障子也

一秦ノ子嬰漢祖ノタメニ被亡等　史記本紀八云漢元年十月沛公兵遂先諸侯至霸上秦王子嬰素車白馬繫頸以組封皇帝璽符節降軹道旁索隱曰韋昭云天子印稱璽又獨以王符發兵符也索隱曰軹音只漢書宮殿䟽云軹道亭東去霸城觀四里觀東去霸水百步蘇林云在長安東十三里

一四句ノ偈ヲ唱　流轉三界中恩愛不能斷棄恩入無爲眞實報恩者コレヲ云ナリ

一汝是畜生發菩提心　是ハ梵網經云若見牛馬猪羊一切畜生應心念口言汝是畜生發菩提心コレハ菩薩ノ行ヲオコシ戒法ヲ行スル者ノハ畜類ヲ見テモ菩提ノ心ヲスヽメテ發サシムル義也今聖モ少シ此意ヲ知テ云ツラウナレトモ正ク資名卿ニ對シテ汝ハコレ畜生ナリト云ヒタルハ無下ニ咲シキ事ナリ

太平記鈔第十卷

一生品明神　イクシナ鎭座ノ神ハイツレト云事ヲシラス

一笠懸野　新田邊ニアリ前橋ヘ行クミチ也

一藩屏ノ中　文選第六十卷注廣樹藩屏謂封子弟爲諸侯王云云今ノ意モ一族ノ中ト云義ナルヘシ又義ニハ藩屏トハ家ナラハカキトヘイトノ二ツソ餘所ヨリハ作スニハアラスソ垣ノ中ヨリ狼藉ヲスルト云義ソ

一秋津島　神武帝始テ此國ノ名トシ給ヘリ蜻蛉ヲアキツト云也此國ノ形チ此ノ蟲ノ形ニ似タル故ニ名トスル也

一譴責　玉篇曰譴詰戰切責也譎問也

一蟷蜋カ遮車　文選第四十卷云欲以螗蜋之斧禦隆車之隧注曰螗蜋蟲也前有兩足擧之如執斧之象也隧猶轍也言此蟲擧斧禦大車之轍善曰莊子遽伯玉謂顏闔曰汝不知大蟷蜋乎怒其臂以當車轍不知其不勝任也

一精衞塡海　文選第六卷左太冲魏都賦曰精衞銜木註ニ曰海經曰發鳩之山有鳥狀如烏而文首白喙赤足名曰精衞赤帝之女名女娃遊於海溺而不反精衞常取西山之木石以堙東海焉或又阮步兵カ詠懷ノ語ニモ精衞銜木石誰能測幽微ト云タルモ此コトナリ

一伍子胥カ呉王夫差ヲ諫シニ　越ハ腹心ノ病コノ意ハ呉王夫差アルトキ齊ノ國ヲ伐ント用意シタルヲ子胥カ諫タル語也病ノ腹心ニアルハ大事也瘡痔ハ癬痕也ト註セリ齊ニ比シタリ春秋國語ニ出タリ今晉ノ國ト云タルハ不審ナリ

一黃石公カ虎ヲ縛スル乎

一張子房カ鬼ヲ拉術

一新開　石橋山ノ合戰ノ亂レニ兵衞佐殿臥木ノ中ニ隱レ給フ時ニ相從テ山ニ籠リケル者六人アリ新開次郎忠氏其一人也彼レカ末孫ナリ

一雷光ノ如激　イカツチノ俄ニ鳴タツハ是ニ似タル故ハ爾カ云文選ニ激ハ疾波也アラ波ノアカル聲也

一昔秦ト楚ト國ヲ爭　史記第七卷ニ出タリ秦ハ徐廣曰此時二世之二年六月ト云リ楚トハ孫心ト云タル人民間ニオチテ牧羊シテ居ラレタルヲ立テヽ楚ノ懷王ト云ヒタリ武信君トハ項羽ノ季父項梁ノ事也史記ニ項梁自號爲武信君トアリ

一李由　應劭曰由李斯子也
一宋義ト云ケル兵是ヲ見テ戰ニ勝テ將驕等　史記本紀七云楚項梁使沛公及項羽別攻城陽屠之西破秦軍濮陽東秦兵收入濮陽沛公項羽乃攻定陶々々未下去西略地至雝丘大破秦軍斬李由還攻外黃未下項梁起東阿西北至定陶再破秦軍項羽等又斬李由益輕秦有驕色宋義乃諫項梁曰戰勝而將驕卒惰者敗今卒少惰矣秦兵日益臣爲君畏之項梁弗聽乃使宋義使於齊道遇齊使者高陵君顯曰公將見武信君乎曰然曰臣論武信君軍必敗公徐行即免死疾行則及禍秦果悉起兵益章邯擊楚軍大破之定陶項梁死
一一業所感　佛敎ノ意ハ善惡ノ業ニヨツテ又善惡ノ報ヲ感得スルヲ云ナリ倶舍論ニ一業一引生ト云ヘルモ此事ナリ
一古諺ニ見子不如父　日本紀第十四卷雄略紀曰古人有言知臣莫若君知子莫若父貞觀政要三云魏徵上疏曰臣聞知臣莫若君知子莫若父々不能知其子則無以睦一家
一庭訓　孔子ノ子鯉魚ノ事ヨリ作レリ論語ニ出タリ
一裨將軍　裨音皮將之編副也トアリ

一漁陽鼙鼓動地來驚破霓裳羽衣曲　長恨歌ニアリ漁陽ハ所名ナリ鼙鼓ハフリツヽミノヤウナル貌也軍ノ時ニ兵ヲスヽムルトテ擊ツ周禮ニ旅帥執鼙トアリ先儒ノ義ニ鼓有柄曰鞀大鞀曰鞞步西反或音皮
一戎翟　翟ヲ又ハ狄ニ作ル同シ字ナリ韻會ニ狄之爲言淫辟也其行跡カ邪辟ナルニヨリテ狄トハ云ナリ嫂叔モ同穴シ父子モ別ナクシテ妄ナル體ソ周ノ代ニ北方ノエビス節々ニ中國ヘ取リカケテ軍ヲ起シケルソ幽王ノ滅亡ノ事ハ右ニアリ
一漢楚八年ノ戰　漢ハ高祖ソ楚ハ項羽ソ史記曰項王謂其騎曰吾起兵至今八歲矣身七十餘戰
一烏江　九江ノ中ノ一ソ
一項王被亡　本紀七曰項王已死徐廣曰漢五年之十二月也項王以始皇十五年己巳歲生死時年三十一
一彼田廣先生ハ燕丹ニ被語　史記八十六刺客傳曰田光曰吾聞之長者爲行不使人疑之今太子告光曰所言者國之大事也願先生勿泄是太子疑光也夫爲行而使人疑之非節俠也欲自殺以激荊卿曰願足下急過太子言光已死明不言也因遂自刎而死
一三軍ヲハ可奪師　論語ニ出タル語ソ千五百人ヲ一

軍ト云ゾ三軍ノイキヲヒヲハ奪フトモ匹夫ノ志ノ深ヲハ奪フコトハ成マシイトゾ

一以德報怨　論語七云或曰以德報怨何如子曰何以報德云云　老子經云報怨以德註修道行善絕禍於未生也

一斧鉞　毛詩ニテハ戚揚ト云タリ斧鉞ノ別名ナリ戚ヲ斧トシ揚ヲ鉞トス此方ニテハオノマサカリト云物ゾ斧ハ小ニ鉞ハ大ナリ

一內海外海　須彌山ノマワリニ八海アリ內ノ七海ト最外ノ海ノ事也

一龍神八部　八部ト云ニハ二說アリ一ニハ天二ニハ龍三ニハ夜叉四ニハ乾闥婆五ニハ修羅六ニハ迦樓羅七ニハ緊那羅八ニハ摩睺羅ナリ是ハ通途ノ說ナリ又立世阿毗曇論第四卷ノ音義ニハ四天王ノ一々ニ二部ノ鬼ヲ領スルヲ八部ト云ナリ

一後漢ノ貳師將軍　李廣カ事也集覽六云李廣利爲貳師將軍文選四十卷注曰貳師將軍拔佩刀刺山飛泉湧出飛泉トハ瀧ノコト也

一神功皇后ハ新羅ヲ責給シ時　日本紀第九卷ニ神功皇后ノ傳アリ

一執事　文選三十七注曰執事君之左右

一傍若無人　資治通鑑第二十卷云北海王猛少好倜儻有大志不屑細務人皆輕之猛悠然自得隱居華陰聞溫入關披褐詣之捫虱而談當世之務旁若無人溫異之問曰吾奉天子之命將銳兵十萬爲百姓除殘賊而三秦豪傑未有至者何也猛曰公不遠數千里深入敵境今長安咫尺而不度灞水百姓未知公心所以不至溫嘿然無以應又史記ノ荊軻傳ニモアリ可知

一帝釋宮ノ戰ニ修羅ノ眷屬共天帝ノ爲ニ被罰テ劔戟ノ上ニ倒　觀佛三昧經第一卷云時虛空中有四大刀輪自然而下當阿修羅耳鼻手足一時墮落云ヘリ長阿含經第二十卷ノ意ハ羅呵阿修羅ト云者カ住處ハ八萬由旬ノ廣サニシテ金城銀門アリ園池清凉ニシテ衆鳥モ和鳴シ衣服モ鮮明ナリ日月ノ天ニ行リ光明等アルヲ怒テ日月ヲ取テ吾カ耳璫ニセント誓ヘリ日月モ又帝釋ノ臣ナレハ帝釋ト戰ヲナサント思ヒ立ツ所ノ合戰也トアリ是モ一說ナリ又妻ヲ諍ヒ娶ントテ起ス戰トモ見タリ

一虎韜ニ別テハ追靡　六韜ノ中ノ一ツノ軍法ナリ

一死出ノ山路　佛說ニハアラス去レトモ歌道ナトニハ云ヒ來レルトゾ

一蓬　キタナシ　顔延年カ北使洛曰蓬心既已矣注曰
郭象曰蓬非直達者トアリ莊子ニモ猶有蓬之心也ト
云ヘリ直達ノ心ナキハキタナキ義也
一提持吹毛等　吹毛トハ劔ノ名ナリ形モナキ虚空ヲ
截斷スト云事眼ノアルコトナリ大火聚ノ中ニイカ
ニモ涼シキ風カアルト云モ意旨ハ上ノ句ト同シ至
タル位ナリ初心ノ者ノシル事ニ非ス
一大厦高墻　厦ハ大屋ヲ云ナリ毛詩ニ厦屋渠々トア
リ釋名曰墻障也所以自障蔽也
一栴檀ノ林ニ入ル者等　觀佛三昧經第一巻曰開牛頭
栴檀上妙之香永無伊蘭臭惡之氣云ヘリ伊蘭ハ臭惡
ノ草也栴檀ハ其華紅色甚可愛樂ト說レタリ摩黎山
ニ生スト見タリ此山ヲ牛頭山トモ云故ニ則牛頭栴
檀トモ名アリ
一王陵ト云者　蒙求曰前漢書曰王陵沛人高祖起陵亦
聚黨數千人及高祖擊項羽廼以兵屬漢羽取陵母置軍
中陵使至則東向坐陵母以招陵々母私送使者泣曰爲
妾語陵善事漢王漢王長者毋以老妾故持二心妾以死
送使者遂伏劔而死
一昔齊ノ襄公無道ナリシカハ　史記齊世家曰初襄公
之醉殺魯桓公通其夫人殺誅數不當淫於婦　數欺大
臣群弟恐禍及故次弟糾奔魯其母魯女也管仲召忽傅
之次第小白奔莒鮑叔傅之小白母衞女也有寵於釐公
小白自少好善大夫高傒及雍林人殺無知議立君高國
先陰召小白於莒魯聞無知死亦發兵送公子糾而使管
仲別將兵遮莒道體中小白帶鉤小白佯死管仲使人馳
報魯々送糾者行益遲六日至齊則小白已入高傒立之
是爲桓公
一襁　ムツキ　魯世家曰成王少在强葆之中索隱曰强
葆即襁褓古字小假借用之正義强闊八寸長八尺用約
小兒於背而負行葆小兒被也
一劫畧　劫ノ字ヲ强取也ト注スルソ增韻ニハ奪去也
トアルソ人ノ物ヲ力ヲ以理不盡ニ取ルヲ云ソ略ト
ハ集覽ニ略謂行而取之用功力不多也トアルソ
一四隊　隊ヲハ群隊也ト注スルソ又聚ノ字ノ意モア
リ一群乃至四群ト云義ソ
一崇壽寺長老南山和尙
一室　サヤ　史記荊軻傳曰劍長操其室索隱曰室謂鞘
也トソノ外莊子ナトニテモヨム
一前ニ有ル歟トスレハ忽焉トシテ後ヘニアリ　論語

子罕篇ニ瞻之在前忽焉在後トアリ是ヲ假テ云ナリ

一模糊ス　糊ハ黏也ト說文ニアリネヤスト讀ム杜詩ニ子璋髑髏血模糊ト作ルナリ又模糊漫貌トモアリ

一項王カ漢ノ三將ヲ靡　項王ノ戰ヲ手ラアリシ事ハ度度ナレトモ最後ノ垓下ノ時コソ手ヲクタキタル合戰ナリ漢ノ大將灌嬰ト云フ者五千騎ニテ項羽ヲ追カケタレトモ手痛ク戰テアル故ニ討トメ得ス赤泉侯モ又騎將トシテ項羽ヲ追タレハ目ヲ瞋ラシテ取テ還シタレハ人馬倶ニ驚テ逃去ルコト六七里チヤク其後ニモ又漢ノ一リノ都尉ノ官ノ者ヲ討チ其外數多ク殺サレタソ其時ニ項羽ノ人數ハ唯二十八騎アツタソ

一魯陽カ日ヲ三舍ニ返ス文選第二十一卷云愧無魯陽德廻日今三舍注魯陽公與韓遘難戰酣日暮援戈而麾之日爲之反三舍二十八宿一宿爲一舍トアリ又史記封禪書注索隱曰晉灼云淮南子云魯揚公與韓搆戰戰酣日暮援戈麾之日爲却三舍豈其然乎ト云ヘリコノ義ナレハ淮南子ノ說ヲハ破シタル也是モ理リ也日ヲ招キカヘスナト云事ノアルヘキニハ非ジ

太平記鈔第十一巻

一五大院　傳說ニ五大ト訓ヨミテ院ノ字ヲハヨマヌトソ

一賺　事苑五云賺當作詀直陷切被誑也韻會ニハ廣雅賣也廣韻重買也又市物ヲ失實也賺ヲハスカスト讀也ウルトモヨムホトニ今ハ是レカ親シカルヘキ歟ソ

一顧命　尚書孔安國注ニ臨終之命故曰顧命正義ニハ臨將死去廻顧而爲語也トアリ鄭玄云回首曰顧臨死回顧而發令也ト云云然レハ今コヽノ文體ハ惡シ源氏ノ恩命ニ隨フト云タラハ可然乎

一程嬰カ我子ヲ殺シテ幼稚ノ主ノ命ニカヘ　此スヱニアル故ニ略ス

一豫讓カ己カ貌ヲ變舊君ノ恩ヲ報　此卷ノ末ニ注スルカ故ニ今ハ略之

一梟惡　柳文第三十九ノ注ニ孟康曰梟鳥名食母トアリ不孝ノ惡鳥ナレハ爾云也

一伊賀判官光季　東鑑ニ武藏守秀鄕ノ後胤伊賀守朝光ノ息ナリ關東ノ代官トシテ在京シケルヲ承久三年五月十五日ニ後鳥羽院ヨリ官兵ヲ推ヨセ討給ヒケリ

一君子不近刑人　公羊傳襄公二十九年君子不近刑人近刑人則輕死之道也注云刑人不自賴也疏曰猶言不自重似若世人名輕賤之物云非可賴也ト云ヘリ或又禮記曲禮曰刑人不在君王側注爲怨恨爲害也

一蓍筮　メトノ占ノ事也蓍ハ千歲ヲ經レハ則一本ニ百莖アルソ其下ニハ必神靈ノ龜カアッテ是ヲ守ルソ去ホトニ蓍木ヲ捜テ占ヲスレソ

一戎衣　戎ハツハモノト讀也甲冑ヲ帶シタル者ノ事也毛詩ノ小戎ハ秦ノ襄公ヲ美タル篇ソ其所ニモ備其甲兵以討西戎トアルソ

一六軍　唐書百官志曰左右龍武左右神武左右神策號六軍千萬人アリトモ策テ六軍ト云ソ

一雨師道ヲ淸等　東都賦ニハ雨師泛灑風伯淸塵注ニ雨師畢星精風伯箕星精云云畢箕ハ風雨ヲ作ス星ナレハソ文選第四十二風伯掃途雨師灑道注曰風伯雨師致風雨以掃灑道路者也トアリ山谷第三ニ雨師灑道塵香注云唐史天子之行風伯淸塵雨師灑道トアリ

一紫微北辰ノ洪陣　倶ニ北斗ノ事ソ洪陣トハ何ソヤ

一ニキワウ民ノ　タカキ屋ノ御製ノ歌ノ意ナルヘシ
一書寫山　圓敎寺ト云ナリ
一巡禮　天竺ヨリアル事也釋尊ノ誕生ノ所ト得道轉法輪入涅槃ノ所ナト八所ヲ巡禮スト金剛頂經ニ說レタリ是ヲ巡八聖跡ト云也
一開山性空上人　元亨釋書十一釋性空平安城人大中大夫橘善根之子也
一開結二經　無量義經ヲ法華開經ト云フ也法華ヲ說給ハントテ大カタノ事ヲ粗ヒラキ顯シタル故ニ爾カ云也普賢觀經ヲ法華ノ結經ト云フ惣シテ結經ト云ハ正說ノ本經ヲ修行スル體ヲ說キ給ヘルヲ云也サル程ニ多分ハ戒法ナトノ樣ヲ說カレタル也
一寂寞ノ扉　寂ハ說文ニハ無人聲也ト注スルソ廣韻ニハ靜也トアリ楚辭云野寂漠其無人云云漠ハ爾雅ニハ淨定也ト
一第八冥官　十王ノ中ノ第八ノ王岐王之ヲ云歟不審ノ事也
一乙護法　性空ノ行法ヲ感シテ神童二人常ニ給仕セリ一ヲハ乙ト云二ヲハ若ト云フ護法トハ佛法守護スルト云義也護法ヲハコヲフトヨムトソ

一天竺無熱池　香山ト雪山トノ間ニアリ周迴八百里アルソ此池ニ住メル龍ニハ熱惱カナケレハ無熱池トハ名タリ出西域記
一生木化佛　元亨釋書第二十八曰性空法師庵居之初傍有櫻桃樹一日天人降來禮樹作偈曰稽首生木如意輪能滿有情福壽願亦滿往生極樂願一切衆生心所念空斬其枝就其根株造如意輪大悲像長一尺五寸命安鎭行者刻之云云今百千俱胝等云ハ異說歟去レトモ俱胝ト云コトハ俱舍ノ意ハ千萬ノ算ヲ云リ
一吠首羯磨　順正理論第十二卷音義云此云工業案西國工巧者多祭此天云云　天帝釋ノ工匠也
一五大尊　不動　降三世　軍荼利　大威德　金剛夜叉ヲ云ナリ又五大力菩薩ト云コトアリ仁王經下卷受持品云若未來世有諸國王受持三寶者使五大力菩薩往護其國一金剛吼菩薩手持千寶相輪二龍王吼菩薩手持金輪燈三無畏十力吼菩薩手持金剛杵四雷電吼菩薩手持千寶羅網五無量力吼菩薩手持五千劍輪往護彼國ト云ヘリ
一如來唄　聲明ノ事也コレヲ貝ト云事魏陳思王曹植遊魚山時ニ忽ニ巖岫ニ誦經ノ聲アリ清婉微妙ナリ

其聲ニ擬シテ梵唄ヲ製セラレタリ具ニ高僧傳等ノ
如シ梵音ト云モ聲明ノ事也コレニハ多子細アリ

一儲餉　餉ハ式亮切饋也ト注セリ毛詩ニテモカレイヲクルト讀メリ食物ヲ贈ルコトソ

一禁門　蔡邕曰禁門天子所居門閤有禁非侍御之臣不得妄入

一羽書　文選二十一曰羽書時斷絕注曰羽書徵兵檄也又ハ羽檄トモ云也故ニ又二十八注云漢書高祖曰吾以羽檄徵天下兵魏ノ武帝ノ時ニ事ヲ奏スル者ニ勑シテノ玉ハク急ナルトキハ鷄ノ羽ヲサシハサミテ奏セヨト是ヨリ定テ羽檄ト云ソ鳥ノ羽ノ疾キ義ヲ取ルナリ

一猶豫　疑ノ事也嵇康養生論云內懷猶豫注善曰心猶豫而狐疑尸子曰五尺犬爲豫說文云隴西謂犬子爲猶顏師古以爲人將犬行豫在人前待人不得又來迎候如此往還至于終日斯乃豫之所以爲未定也

一聖文神武ノ德　諡法ニハ揚善賦簡曰聖敬賓厚禮曰聖經緯天地曰文道德博聞曰文ト云ヘリコレハ人ノ名ニ付ル時ナレトモ先ツ字ノ意ハ如此ソ或ハ尙書ニ堯ヲ美ル時ノ辭ニ乃聖乃神乃武乃文トアルソ孔安國傳ニハ聖無所不通神妙無方文經緯天地武定禍亂ト云ヘリ又班孟堅述高紀曰寔天生德聰明神武ト書ケリ注ニ機謀暗合曰神伐無不尅曰武項岱曰聽於無聞曰聰照臨四方曰明以內知外曰神尅定禍亂鬪士片彊曰武ト云ヘリ今モ同クハ聰明神武ト云タラハ可然乎具ニハ文選第五十卷ニ出タリ

一干戈戚揚　毛詩十七卷公劉篇曰弓矢斯張干戈戚揚アリト干ハ楯ノ事也戈ハ戟也長六尺六寸アリコレハ鄭玄カ注ノ意也戚ハ斧ノコト揚ハ鉞也毛萇カ注ニアリ鉞ハ大ナルマサカリ斧ハ小ナリ貌ハ同シモノナリ

一五雲　五色ノ雲ト云義也周禮ノ注ニモ見タソ今ノ意ハ五色雲車駕六龍トアルホトニ天子ノ御乘モノヲ云ハントテ五雲閑ニ幸スト云タソ

一八座七辨　職原抄云八座者異朝八座其各別也本朝聖武天皇天平三年置參議大同御宇罷參議置五畿七道觀察使合八人弘仁御宇罷觀察使皆爲參議云云八人自此而始依之有八座之號七辨ハ左右ニ大中少ノ三ツヽノ辨ニ權ノ辨ヲ加テ七ツソ

一醫陰兩道　醫博士ハ相當正七位下ナリ侍醫ハ正六

位下ナリ常ニ禁中ニ伺候スル役ナリ陰陽道ニモ暦道ハ賀茂流ヲ本トシ天文道ハ安部流ヲ本トスル等ノコトアリ

一輦輅　釋名云天子所乘曰玉輅以玉飾車也輅亦車也謂之輅者言行於道路也又周禮ニハタヽ路ノ字ニ書テ玉輅ニ用タソ

一洋々トシテ耳ニ盈　論語第四孔子衛ヨリ魯ニ反リテ樂ヲ正ス樂師ニ摯ト云者カ關雎ノ末章ヲ作シタルヲ孔子聞キ給ヒテ歎美アル時ノ語ハソ洋々ハ美盛意ト新注ニアルソ

一小水ノ魚　出曜經第二云是日已過命則隨減如小水魚斯有何樂ト云ヘリ宮字函ニアリ

一三衣　僧伽梨衣コレハ大衣ト云フ九條已上ノ大衣也鬱多羅僧コレハ七條ノ袈裟ナリ安陀會コレハ五條ナリ重々ノ取沙汰カ有テ輙ク記シカタシ故ニ略ス

一一鉢　天竺ニハ鉢多羅ト云也此ニハ應器ト云フ今ハ天竺ノ語ヲ略シテ鉢ト云ナリ三衣ニ鉢ト座具ト水嚢ト加テ六物ト云ナリ僧ノ所持ノ具ナリ

一縲紲　論語新註曰縲黑索也紲攣也古者獄中以黑索拘攣罪人ト云ヘリ黑白陰陽ノ二ツ也生ハ陽死ハ陰ナリ罪人ヲハ死ニタトフ故ニ黑索ヲ用ルナリ

一王昭君カ恨　王昭君ハ歸州秭歸縣ノ王攘カ女也漢元帝ノ禁中ニ入リテ御寵愛アリ竟寧元年ニ胡國ノ王ニ呼韓單于ト云者ノ漢ト親ミヲ成ントテ漢ノ婿ニナラント云タソ元帝宮挺掖ニ人カ多ク有テ御覧スルコトモナキ故ニ毛延壽ト云畫カキニ宮女ヲ畫ニカヽセ其内ニ形ノ惡ヲ胡國ヘ遣ハサレントノ義ソ其時宮女多ク毛延壽ニ賂ヲ出シテヨク書セタソ昭君ハ生付ノ美人ナレハソレヲ頼ニシテ賂ヲセヌソ故ニ惡ク畫ニカキタルニ依テ胡國ヘツカハサレタソコレホトノ怨ミハ又類モコトナルヘシ白氏文集ニモ昭君怨ト題シテ見疎從道迷圖畫知屈那敎配虜庭自是君恩薄如紙不須一向恨丹青トアルソ

一禁錮　廣韻曰禁錮重繫也

一黃頭郎カ夢ニ　土ハヨク水ニ勝ツ物ナレハ船ヲ刺ス郎ニハ必黃帽ヲ著スルナリ前漢鄧通蜀郡僑陽人以擢船爲黃頭郎文帝夢欲上天不能有一黃頭郎推上天顧見其衣尻帶後穿覺而之漸臺見通其衣後穿夢中所見也甚說尊幸之賞賜金鉅萬使善相者相通曰當貧

餓死上曰能富通者在我遂賜蜀道銅山得自鑄錢鄧氏錢布天下後景帝時通竟餓死云云一旦ニ富祐ノ身ト成リシカトモ遂ニ貧餓スルコトヲ云也

一短褐　鄭玄毛詩箋曰褐毛布也

一天道ノ盈テルヲ缺　周易謙卦曰天道虧盈而益謙

一義ヲ金石ニ類　曹子建與楊德祖書云流金石之功濟曰金石言堅不朽也

一專諸荆卿　朗詠云專諸荆卿之感激侯生豫子之投身心爲恩使命依義輕云云專諸ハ吳ノ堂邑ト云處ノ人也其比ノ吳王ヲ壽夢ト云ノ四子アリ一ハ諸樊次ハ餘祭次ハ餘眛或曰夷眛次ハ季札ト云ソ壽夢ノ意ニハ季札ニ賢德ノアリケル程ニ國ノ嗣トセント思ハレケレトモ季札辭退シテ遂ニ惣領ノ諸樊ヲ立テヽ王トセラレタソ諸樊モ季札ヲ立テ王トセント思テ兼テ定メヲカレタルヤウハ吾死シタラハ次第ニ弟ヲ立ツヘシト是ハ季札ヲ立ントノ底意也餘祭卒シテ餘眛立チ餘眛卒シテ後季札ニアタリタル時ニ季札ハ他國ヘ逃去ラレタソ力及ハスシテ餘眛ノ子ニ僚ヲ立テヽ王トシタソ此時ニ嫡子諸樊ノ子ニ光ト云カアリケルカ吾ハ當國ノ嫡々ナリ吾父モ季札ヲ立ントテコソ餘祭餘眛ヲハ立タレ孫ニ於テハ吾コソ嫡孫ナレトテ專諸ヲ語ラヒ王僚ヲ討ント擬セラレタリ專諸カ謀ヲ以テ王僚ヲ光カ家ヘ請待シテ其上ニ何トソ路次ニテナリトモ或ハ酒ノ上ニテナリトモ計フヘシト思テアレハ王僚ハイカニモ用心ヲセラレテ兵ヲ我カ宮室ヨリ光ノ所マテ打連レテ劔戟ヲモタセ前後左右ヲ衞ケレハ何トモ計リエス其後大燕醉ノ半ハニ光ト爲テ足シニ疾カアルトテ内ヘ引籠テ居ラレタル間ニ大魚ノアフリモノヽ腹中ニ匕首ノ劔ヲ入テ置テ王僚ノ前ヘ專諸カ持テ出テ包丁ヲスル由ヲシテ其マヽ王僚ヲ刺害シタソ故ニ僚カ親戚ノ前後ノ兵カ忽ニ專諸ヲ殺シタソ光ハ又以軍兵僚カ殘黨ヲ攻盡シテ遂ニ王トナラレタソ是ヲ闔閭ト云タソ夫差ノ父ニテアルヲ史記列傳廿六四月光伏甲士於窟室中而具酒請王僚々々使兵陳自宮至光之家門戶階左右皆王僚之親戚也酒既酣公子光詳爲足疾入窟室中使專諸置匕首魚炙之腹中而進之旣至王前專諸擘魚因以匕首刺王僚々々立死左右亦殺專諸王人擾亂公子光出其伏甲以攻王僚之徒盡滅之遂自立爲王是爲闔閭云云　但シ王僚ハ誰レカ子

ト云コトニ異說多シ今ハ史記ニ據テ注ス
一荆卿　史記列傳二十六曰荆軻者衞人也其先乃齊人徙於衞々人謂之慶卿而之燕々人謂之荆卿云云荆軻奉樊於期頭函而秦舞陽奉地圖匣以吹進至陛秦舞陽色變振恐群臣怪之荆軻顧笑舞陽前謝曰北蕃蠻夷之鄙人未嘗見天子故振慴願大王少假借之使得畢事於前秦王謂軻曰取舞陽所持地圖軻旣取圖而奏之秦王發圖々窮而匕首見因左手把秦王之袖而右手持匕首揕之未至身秦王驚自引而起袖絕拔劒々長操其室時惶急劒堅故不可立拔荆軻逐秦王々々環柱而走群臣皆愕卒起不意盡失其度而秦法群臣侍殿上者不得持尺寸之兵諸郞中執兵皆陳殿下非有詔召不得上方急時不及召下兵以故荆軻乃逐秦王而卒惶急無以擊軻而以手共搏之是時侍醫夏無且以其所奉藥囊提荆軻也秦王方環柱走卒惶急不知所爲左右乃曰王負劒負劒遂拔以擊荆軻斷其左股荆軻廢乃引其匕首以擿秦王不中々桐柱秦王復擊軻々被八創軻自知事不就倚柱而笑箕倨以罵曰事所以不成者以欲生刧之必得約契以報太子也於是左右旣前殺軻云云荆軻カ秦王ノ袖ヲ把テ引留テ置タル時ニ宮女カ琴ヲ鼓ス琴聲曰羅縠單衣可裂而絕八尺屛風可超而越鹿盧之劒可負而拔王於是奮袖超屛風走之
一侯生　梁ニ侯瑱ト云者アリ討侯景ヲ大功アリ又唐大宗ノ朝ニ侯君集ト云者アリ太宗ニ從テ征伐ニ功アリ遂凌煙閣ニ圖セラレタリ此二人ノ中歟シラス
一豫子　豫讓カ事蒙求云豫讓晉大夫事智伯趙襄子殺智伯以頭爲飮器讓乃變姓名入塗厠中欲爲智伯報讎以刺襄子々々如厠心動搜得赦之後又漆身爲癩吞炭爲啞使形狀不可知伏於橋下襄子至橋馬驚曰此必豫讓乃搜得問曰子事范中行氏不爲報讎反臣智伯々々死何報之深讓曰中行以衆人遇我我故以衆人報之智伯以國士遇我故國士報之願請君之衣以致報讎之意襄子持衣與之乃拔劒三躍而擊曰可以地下報智伯矣遂伏劒而死出史記列傳二十六
一行路難　白氏文集第三ニ出タリ
一極浦ノ浪　楚辭曰望涔陽兮極浦王逸注云極遠也浦涯水也
一心ヲ涇津波　心ヲ置クト云ハントソ澳ニタツ波ナリ
一天道謙ニ祐シテ　周易ノ謙ノ卦ノ意ソ

一同穴ノ契　毛詩第四大車篇云穀則異室死則同穴傳云穀生也イケルトヨムソ生在於室則外內異死則神合同爲一也箋云穴謂塚壙中也　白氏文集一云生爲同室親死爲同穴塵文死シテ後ニハ同穴ニ入ルヘキト深ク契ヲ結タル事也

一極樂淨土ノ八功德池　稱讚淨土經云八功德者輕淸冷軟美不臭飲時調適飲已無患淨土ニカキラス此界ニ內外海トテ八ノ海アリ前ノ七ヲハ內海ト云フ今見ル海ヲハ外海ト云フ其內海ノ水モ八功德アル也倶舍論十一云有八海前七名爲內七中皆具八功德水一甘二冷三耎四輕五淸淨六不臭七飲時不損喉八飲已不傷腹

一隔生即忘　法華玄義第六卷ニ名字觀行益隔生即忘或者有不忘ト云ヘリ佛法ノ名字ヲ聞ク分ノ位ヒ又觀念心地ノ修行ヲスルホトノ者モ生ヲ隔ツレハ其前生ノ事ヲハ忘ル丶カ大方ソ又不忘者ノモアルトソ

一奈利　二字トモニ非ナリ泥犁ニ作ヘシ地獄ノ惣名也無間ノ廣サハ八萬由旬ナレハ如此云ナリ

一放生津　ハウシツト云

一偕老ノ契　毛詩第三ニ君子偕老ト云フ篇アリ偕ハトモトヨム也夫婦倶ニ老期マテ違フコトナカラン・ト誓ル意ソ

一逢フニカヘント歎　新古今業平歌
思フニハ忍フル事ソマケニケル逢ニシカヘハサモアラハアレ

一天ノ羽衣撫盡ス　本業瓔珞經下卷ニ磨石刧ト云事アリ四十里ノ石ヲ天人ノ羽衣ノ輕ヲ以テ三年ニ一度ツヽ石ヲナテヽ其ノ石ノ撫盡ヲ一刧ト云也

一本ノシツク末ノ露　新古今哀傷歌僧正遍照
末ノ露モトノシツクヤ世中ノヲクレサキタツタメシナルラン

一松浦サヨ姫　歌林良曰材欽明天皇ノ御時大伴佐堤比右ト云モノ遣唐使ニテモロコシヘ渡リケル時ソノ妻佐用姫名殘ヲ惜ミテ松浦山ニ上リテ絹ノヒレヲフリ其船ヲ招キシニヨリテ夫ヨリ其山ヲヒレフル山ト名ツケ侍リ肥前國ニアリ
トヲツ人松浦サヨ姫妻戀ニヒレフリシヨリヲヘル山ノ名山ノ名トイヒツケトカモ佐用姫カ此山ノヘニヒレヲフリケン

一宇治ノ橋姫　又曰宇治ノ橋姫トハ姫大明神トテ宇治ノ橋ノ下ニオハスル神也其御モトヘ宇治橋ノ北ニオハスル離宮ト申神ノ夜コトニ通給フトテ曉コトニヲヒタヽシク浪ノタツ音ノスルトナン彼邊ノ土民ハ申ナラハセリ

サムシロニ衣カタシキ今夜モヤ我ヲ待ラン宇治ノ橋姫

此歌ハ離宮ノ御歌ト申ス又隆源阿闍梨ト申ス者ハ住吉大明神ノ宇治ノ橋姫ノ神ニ通ヒ玉フト申故ニ此歌ハ住吉明神ノ御歌ト云ヘリ

一天竺ノ術婆伽ハ后ヲ戀テ思ノ炎ニ身ヲ焦ス　此ハ源ト出大智度論第十四卷也經律異相第三十四引大智度論云國王有女名曰狗頭有捕魚師名述婆伽隨道而行遙見王女在高樓上窓中見面想像染著心不暫捨彌歷日月不能飲食母問其故以情答母我見王女心不能忘母抑喩言汝是土人王女尊貴不可得也兒言我心願樂不能暫忘若不如意不能活也母爲子故入王宮中常送肥魚肥肉以遺王女而不取價王女怪問汝欲求何母白王女願却左右當以情告我唯有一子敬慕王女情結成病命不云遠願垂愍念賜其生命王女言曰汝月十五日於某甲天祠中住天像母還語子　汝願已得告之如上沐浴新衣在天像後住王女至時白其父王我有不吉須至天祠以求吉福王言大善即嚴車五百乘出至天祠既到勅諸從者齊門而止獨入天祠天神思惟此不應爾王爲施主不可令此小人毀辱王女即厭此人令睡不覺王女既入見其睡重推之不寤即以瓔珞直十萬兩金遺之而去々後此人得覺見有瓔珞又問衆人知王女來情願不遂憂恨懊惱婬火內發自燒而死以是證故知女人之心不擇貴賤唯欲是從文術述ト通用ス

太平記第十二卷

一廢帝　光嚴院殿ヲサス

一率俗歸風等　帝範下卷務農篇曰惠可懷也則殊俗歸風若披霜而照春日威可懼也則中華懾軌若履氷而戴雷霆文懾徒頰反爾雅曰懼也云云今ハ此本文ヲ略シテ云フ霆ハイカツチト讀メリ

一偃七德之餘威成九功之大化　是帝範下卷崇文篇ノ全文也但シ成ノ字ヲ敷ノ字ニ作タル也注曰左傳宣十二年曰禁暴戢兵保大定功安民和衆豐財尚書大禹謨曰金木水火土穀敷德利用厚生トアリ左傳ニ杜預カ注ニハ此武七德也トアリ今ノ代モ若武威ノ德ナクハ尚モ暴逆甲兵ノ亂アルヘキニ武威ヲ恐ルカ故ニ萬民マテ安穩ノ地ニ住スト思ヘハ偏ニ難有コト也文選三十二卷離騷經注曰左傳曰六府三事謂之九功九功之德皆可歌也謂之九歌水火金木土穀謂之六府正德利用厚生謂之三事云云尚書ノ六府ノ下ノ注ニ養民之本在先修六府矣トアリ三事ノ下ノ注ニ正德以率下利用以阜財厚生以養民三者和所謂善政トアリ

一休明德　尚書ニ大禹謨云戒之用休注ニ休美也トアリ明德トハ三綱領ノ第一ノ明德ヲ明ニスル事也明德ト云フコトハ上一人ヨリ下萬民マテ此一德肝要也又潘安仁カ書ケル楊仲武誄曰德之休明靡幽不喬注云左氏傳王孫滿曰德之休明

一虎賁　文選三十五注ニハ虎賁壯勇人也ト曰ヘリ集覽八云賁舊作奔言其勇猛如虎之奔騰也王莽以古有勇士孟賁故名虎賁

一折伏攝受　今コヽニ云ヘル分ハ共ニ形相ニ付テ二ヲ云タソ天台ノ止觀ニハ夫佛兩說一攝二折ト釋シテ經說ノ上マテモ此二義カアル也若修練行シテ修攝其心スルヲ攝受ト云ヒ順逆二緣ニ對シテ縱ヒ杖木ノ難ニ值テナリトモ佛法ノ實義ヲ云ヒ聞カスルヲ折伏ト云ソ天台曰法華折伏破權門理涅槃攝受更許權門ト云ヘリ如此諸經論ニ亘テ折伏ヲ本トスルモアリ攝受ヲ正意トスルモアリ弘決十云一切經論不出此二文正意々々カアルソ

一賈島浪仙　天隱履歷曰賈島字浪仙范陽人來洛陽韓愈教爲文初爲浮屠名無本後去浮屠舉進士累舉不中文宗時爲病蟬詩刺公卿或奏賈島與平曾爲十惡太中

未授遂州長江主簿會昌初以普州司倉參軍遷司戶未授命以啖牛肉得疾卒年六十五云云又才子傳第五卷ニ詳ナリ

一天武孝謙替法體　天武ハ舒明ノ御子ニシテ天智帝ノ御弟也天智即位十年ノ冬篤キ御惱ナリシカハ此帝イマタ大海太子ニテマシ〳〵シ時ニ呼ヒ近ケ奉テ皇位ヲ讓リ給ヘトモ多病ニシテ任ヘカタシ願クハ天智帝ノ御タメニ出家修道セント勅答ナサレテ則落髮アリテ遂ニ吉野ノ山中ニ入リ給ヘル時百官公卿トモニ送リマイラセケリ其ノ後天智ノ御子大友皇子太政大臣ノ位ニ上リ萬機ノ政ニ臨ミ給ヘルカ大海皇子ノ吉野ニマシマス事ヲ猶危ヤ思ハレケン兵ヲ聚メ芳野ヲオソハントシ給ヘリ故ニ竊ニ伊勢美濃ヘ越シ軍勢ヲ聚メ給ヒシカハ國々皆著キ隨ヒ參ルホトニ則不破關ノ軍ニ打勝チ近江ノ瀨多ニ著キ合戰アリ皇子ノ軍敗レテ殺サレ給ヒヌ遂ニ即位シ淨御原ノ宮ニ御座ス此朝ニ法度多ク定メラレニケリ治天下十五年壽ハ七十三歳ニソ成リ給ヒヌ

一孝謙　聖武ノ御女也御母ノ皇后光明子ハ淡海公不比等大臣女也聖武ノ皇子安積親王天平十六年閏正月ニ十七歳ニシテ薨シ給ヒテ別ニ男子マシマサス依之立此皇女給ヒキ治天下十年天武ノ御孫舍人親王ノ御子大炊王ヲ養子トシテ皇太子トス禪位太上天皇ト申ス天平寶字六年ニ落髮出家ナラセ給ヒテ御名ヲ法基ト申シタテマツル有故帝ヲ淡路國ヘ遷シ自ラ重祚シ給ヒテ稱德天皇ト申シ天平神護ト改元アリケリ又治天下五年也

一幕府　將軍ノ異名ナリ馮異字公孫後漢ノ光武ノ輔佐ノ臣トシテ中興ノ功將ナリシカレトモ元來謙退ノ仁者ニシテ諸將各ノ功ヲ爭ヒシカハ獨リ退テ居樹下故ニ軍中ニ號シテ大樹將軍トスコレヨリ大樹ト云モ將軍ノ唐名ニスル也

一中院中將定平　貞ノ字ニハ非ス六條右大臣顯房公第七代孫南朝ニ伺候シ元弘以來軍忠ハ他ニ異ナリ終遁世ス子息定清ハ戰場ニシテ落命ス

一天下壯觀　東京賦曰天子乃以三揖之禮々之穆々焉皇々焉濟々焉將々焉信天下之壯觀也注曰壯觀言天下之人壯大觀覽也

一介　ヨロイ毛詩嗟々保介注ニ保車右也介甲也トアリ

一蟄懐　蟄藏也冬ノ間ハ蟲類モ地中ニ藏レテ居ルソ
杜詩云蟄龍三冬臥老鶴萬里心云云

一媚奥求竈　室ノ西南ノ隅ヲ爲奥常尊ノ所ナリ竈ハ卑賤ノ所ナリ論語八佾篇云王孫賈問曰與其媚於奥寧媚於竈何謂也云云常尊ノ處ノ奥ヲハ君ニ比シ用事ノ處ノ竈ヲハ賈ミツカラ權勢ニ喩テ云タソ新注媚親順ナリトアリ親近也順從也近之而不從末是媚從之而不近亦末是媚從之而不近亦末是媚既親且順所以爲媚注セリ當時世俗ノ語ニコヒヘツラウト云フ義此注ニテ知ルヘシ

一安堵ヲ賜　集覽四十五云按堵將士皆安然如牆堵之不遷動

一郢曲妓女　郢以井切故楚都也此所ノ曲ヲウツシテ云フナリ

一立錐ノ地　繼陽上書諌吳王曰舜無立錐之地以有天下注ニ云韓子曰舜無置錐之地於後世而德結云云又曹元首六代論曰子弟無尺寸之封功臣無立錐之土注云莊子曰堯舜有天下子孫無置錐之地コレミナ俗語ニ針ホトノ所モナシト云カ如ク

一無偏ノ恩化　偏頗ノ意ナシトノ義ソ

一紀傳明法外記　賦原曰紀傳明經明法算道謂之四道云云紀傳道ニハ史記文選前後漢書ヲ面トシテ十三經ヲ裏トス明經道ハ十三經ヲ面トシテ史記等ヲハ裏ニス清家中原家ニ專ラトスル也明法道ハ法度ヲ知ル家ソ坂上中原ノ兩流ヲ法家トス算道ハ或ハ諸國ノミツキ物ノ算勘スルナリ小槻氏此職ニ居ストソ

一四箇大寺　東大寺　興福寺　延暦寺　園城寺也

一鳳闕　關中記曰一名別風闕以別四方之風西京賦云閶闔之内別風嶕嶢是也三輔胡事云北有圜闕高二十丈上有銅鳳凰故曰鳳闕

一咸陽宮　關中記曰秦孝公都咸陽今渭城是始皇都咸陽今城南大城是山南曰陽水北亦曰陽其城在渭水北又在九嵏諸山之南故名咸陽コノ處ニ於テ阿房宮ヲ作レリ東西五百歩南北五十丈上可以坐萬人下可以建五丈旗トアリ

一梨壺　仁壽殿ノ東方ニ

一桐壺　桐近年不見但荒廢之間毎庭有桐樹云云

一藤壺　藤桃手ノ木ニカヽルト上古ハ桃手ノ木ニ非ル歟

一梅壺　梅西ハ白梅東ハ紅梅ナル由清少納言カ記ニ見タリ

一雷鳴ノ壺　上古ハ上卿召兵衞佐令候御前諸衞警固次諸陣見參令給祿近代如藏人持瀧口弓候御縁若瀧口少々召御壺令鳴弦處也

一萩戸　萩ニカキラス色々ノ秋ノ花ヲ植ラルト也

一兵衞ノ陣　左ハ宣陽門三間コレヲ左兵衞陣ト云フ右ハ陰明門是モ三間右兵衞陣ト云フ

一神今食　二季ノ月次ニ一日ヨリ至十一日也十二日ノ朝解齋ト云々

一右近ノ陣ノ橘　遷都已前ノ人ノ家ノ橘也康保二年正月二十七日仰左右近府被移

一竹ノ臺　中殿東庭竹臺二ツアリト云云

一在原中將ノ弓胡籙ヲ身ニ添テ　伊勢物語ノ第六段ニ雨モイタウ降ケレハアハラナルクラニ女ヲハオクニ入テ男ハ弓ヤナクヒヲヽヒテ戸口ニオリトアリ

一官ノ廳ノ八神殿　八神ノ名ハ神秘ナレハ具ニ云ハス事代主神ハ此第八ノ神トソ

一光源氏ノ大將ノシク物モナシト詠シヲホロ月夜ニアコカレ花ノエンニ源氏ノ君ヱヒ心チニミスクシカタクオホエ給ケレハウヘノ人々モウチヤスミテカヤウニ思ヒカケヌ程ニモシサリヌヘキヒマモヤアルト藤壺ワタリヲワリナウ忍テウカヽヒアリケトカタラフヘキ戸口モサシテケレハウチナケキテナヲアラシニ弘徽殿ノホソトノニ立ヨリ給ヘレハ三ノ口アキタリ女御ハウヘノ御ツホネニヤカテマウノホリ給ヒニケレハ人スクニナルケハイナリオクノクルヽトモアキテ人ヲトモセスカヤウニテ世中ノアヤマチハスルソカシト思ヒテヤヲラノホリテノソキ給人ハミナネタルヘシイトワカウオカシケナル聲ノナヘテノ人トハ聞エヌオホロ月夜ニ似ル物ソナキトウチスシテコナタサマニクルモノカイト嬉クテフト袖ヲトラヘ給

一江相公　前途程遠馳思於鴈山之暮雲後會期遙霑纓於鴻臚之曉涙云云異朝ノ人來ル時此館ニテ會スル也餞北客序也大江ノ音人ヲ江相公ト云フ此人ノ子ニ千枝千里玉淵ナトアリ玉淵ノ子ニ朝綱コレヲ後江相公ト云ソ

一鬼間　清涼殿ノ東南ノ角ニアル間ナリ

一直廬　何レノ所トテ定レルコトハ無シ假令ヘハ關白ノ參內アルトキ此度ハ長橋殿ヲ直廬ニナサルル又此度ハイツレノ所ヲ直廬ニ構ヘラルト云カ如シ直衣ヲナサルヽ所ト云フ義ナルヘシ

一鈴ノ繩　是ハ少納言ノ役トソ大臣ナトノ參內ノ時ニ鈴ヲ鳴スコトノアルトソ今ハカヤウノコトモタマサカノ義ナレハ詳ナラサルソ

一馬周　字賓王ト云フ唐太宗貞觀十八年ニ拜中書令タリ帝嘗賜書曰鸞鳳冲宵必假羽翼股肱之寄要在忠力トノ玉ヘリ忝キ鳳文ノ趣キナリ

一房玄齡　字喬幼警敏年十八擧進士タリ太宗卽位ノ後ニ決勝アルヲ以テ社稷ヲ定ル時ニモ勳功第一ニ居セリ太宗イマタ秦王ニテマシマス時キ天下ノ文學ニ名ヲ得タル者ヲ室ニ記サルヽ時ニ十八學士アリ其中ニモ入タリ杜如回虞世南モ其衆ソ

一杜如回　字ハ克明少シテ人ニ勝タル德行ノ人也王佐ノ才トテ天子ノ輔弼トモナルヘキ器量アルソ房ハ善謀杜ハ善斷ト云テ物ノラチヲ明ケタル人ナリ

一魏徵　字玄成太宗貞觀ノ初年ニ諫議大夫ノ官ニ擧シテ臥內マテ召寄セ天下ノ事ヲ御尋アリケルソ是ホトニアリツル故ニ自然太宗ノ叡慮闕タル事有レハ諫言ヲナシ奏スルコト凡二百餘奏ト載タソ如此ノ故ニ凌煙閣ニ形ヲ圖シテ遺風ヲ忘サルコトヲ示シ玉ヘルソ

一諸葛亮　字ハ孔明蜀劉備ノ臣トシテ魏操公ナトヽ度々合戰シタ人ソ

一蕭何　漢高祖ノ臣トシテ帝業ヲ成ス功第一ト云ハレタ人ソ

一蘧伯玉　名ハ瑗ト云フ衞ノ人孔子ノ弟子ソ淮南子云蘧伯玉年五十而知四十九年之非ト云〻吾身ノ非ヲ知ルコト大切ナ事ト見ヘタソ

一張子房　張良字子房ハ漢高祖ヲ佐テ籌ヲ帷幄ノ中ニ運ラシテ勝ツコトヲ千里ノ外ニ決シタリ蕭何ト韓信ト張良ノ三人ヲ漢ノ三傑ト云タソ

一第五倫　第五ハ姓ナリ倫ハ名ソ漢肅宗立テ司空ノ官ニヲカレタソ峭直無私ト云テ少シモ人ノ氣ヲカネスシテ質直ナルコト計リ有タソ

一管仲　名夷吾少ヨリ鮑叔牙ト云人ト知音シタソ叔牙カ彼人ノ賢ナルコトヲ知齊桓公ニスヽメテ輔相ト成シタリ九タヒ諸侯ヲ合セ一タヒ天下ヲ匡シタ

ルモ管仲ガ力ナリサル程ニ桓公モ仲父ト云ハレタ
ソ管子八十六篇アリ此人ノ撰ナリ
一劉禹錫　字夢得ソ漢景帝子勝中山王ノ子孫ソ會昌
ノ初ニ檢校禮部尙書ニ加フ七十二歲ニテ卒
一子產　索隱曰鄭卿公孫僑字子產云々鄭ノ臣ナリ諸
公子寵ヲ爭テ相殺ス又欲殺子產公子或諫曰子產仁
人鄭所以存者子產也勿殺乃止
一伊尹　殷ノ湯王立テヽ師トセリ
一傅說　殷ノ高宗ノ夢ニコレヲ見テ後圖シテ天下ニ
求メ遂ニ得テ用テ輔相トス尙書云若濟巨川用汝作
舟揖若歲大旱用汝作霖雨若作酒醴爾惟麴蘗若作和
羹爾惟鹽梅カクノコトクノ賢君明臣ハ上古ニモ類
ヲ絕シタルトソ莊子太宗師ニ詳ナリ
一太公望　周ノ文王狩リニ出玉ヒテ渭水ニテ此人ニ
値テ天下ヲ治ル大道ノアルコトヲ聞テ輿ニノセテ
俱ニ歸リ立テヽ師トシテ文道ヲ得玉ヘリ武王成王
マテニ至テ王道ノ佐トナリテ終ニ齊ノ國ニ封セラ
レタリ
一仲山甫　周ノ宣王ノ卿士ナリ毛詩十八ニ人亦有言
柔則茹之剛則吐之維仲山甫柔亦不茹剛亦不吐不侮
矜寡不畏彊禦ト云ヘリカクノコトク柔弱剛强ノ德
ヲ能ク備ヘタル人ハ古今稀ナルコトナルヘシ
一李勣　字ハ懋功唐ノ太宗ノ臣下ナリ貞觀年中ニ幷
州ノ都督ニナサル白居易ガ七德舞曰剪鬚燒藥賜功
臣李勣嗚咽思殺身云々注ノ意ハ李勣アル時キ暴ニ
病ヒキ醫者ノ曰ヒヤウニハ龍鬚ノ灰ヲ用テ治スヘ
シト太宗即手ラ御鬚ヲ剪リテ藥ニ加ヘテ治セシム
此時李勣ハ淚ヲ流シテ身ヲ殺テモ惜シカラヌ御情
ナリト云テ忝ナク思タソ唐制改惣官曰都督
一虞世南　字伯施元來ノ生レツキニ外ニハ謹ヲナシ
懦弱トテ憶病ノ體ヲシテ內ニハ抗烈トテ高上ノ氣
ヲ以テ勇猛ノ人ニテアルソ五絕トテ人ニ勝レタ事
ガ大段ニ五ツアリケルソ一德行二忠直三博學四文
詞五書翰ソ此中一ツモアリタキ事也太宗アル時キ
他所ヘ幸ナルトキニ奉行衆ノ者ノ書典ヲ持セマイ
ラスヘキヤト申シケレハ虞世南ガ御伴ナルホトニ
無用也ト仰ラルヽ程ノ人體ナリ名譽ノ事共ナリ
一杜預　字元凱南宋ノ明帝ノ泰始年中ニ河南ノ尹ニ
ナサレタソ博學ノ人ナレハ京田舍ノ者トモ杜武庫
ト云タソ庫ニ萬ノ物ノアル如ク此杜預殿ノ胷ノ中

ニハ經典詩文ナキ物ハナシト云意ソ學文者ニモ似アハス武邊モヨカリツルソ度々ノ高名ヲシテ諸將モ及ハヌソ功成ノ後春秋左傳ノ集解ヲシタソ今天下流布ノ本ソ

一張華　字茂先晉ノ武帝ノ朝ニ中書ノ官ニオカレタソ是モ博物洽聞ノ人ソ博物志十篇ヲ撰シテ今世間ニ流布シケリ或時ニ此人居ヲ徙スニ書物ヲ車三十輛ニノセテ運タソソレヲモ殘ラス誦シ覺タトアルソ今時ノ學者ハ此影モアルマシキソ

一羊祜　字叔子ト云タソ羊續カ孫蔡邕カ外孫ソコレモ晉武帝ノ朝臣ソ吾カ前生ノコトヲ覺タ人ナリ死シタ後マテモ人ニ思レテ庿ニ碑ヲ建テアリシカ望見ル者ノ涙ヲ流サヌハナカリキ依之杜預ハ此ヲ墮涙碑ト名ケタリ

一揚雄　字子雲ソ少キヨリ好學嶓山ノ側ニ田一所宅ヲ一區作テ居タソ甘泉河東校獵長揚ノ四賦ヲ作リ太玄經并法言ナトヲ作タ名人ソ後ニ王莽ニ仕テ大夫ニ成リケルソ

一陳寔　字仲弓漢桓帝ノ時ノ人ナリ少モ偏頗ノ私ナク爭訟ノコトアレハ正路ニ判談シタ人ソサル程ニ郷閭ノ者モスコシ見カキラレテハ大事ト云タソ

一班固　字孟堅後漢ノ明帝永平年中ニ秘書監ニナリタソ漢書ヲ作テ章帝ノ建初四年ニ滿作シタソ前後二十餘年ノ間ソ今二十餘年ノ間ニ一人シテ寫ストモ成ルヘキ事ニ非ス況制作ヲヤ其外詩賦文記等四十二篇ノ作カ有ルソ委ク注スニ及ハス

一桓榮　字春卿コレモ同ク明帝ノ朝臣ソ帝ヨリ車馬ヲ賜テ禁中ヘマイリテ諸儒者ト文道ヲ談シタソ其時ノ語ニ今日所蒙稽古力也ト云タソ積功累德ハ必スソノ驗シアルヘキ事ソ

一鄭玄　字康成後漢靈帝ノ時ノ人ソ毛詩尙書周易禮記儀禮論語孝經等ニ註ヲスルコト凡百餘萬言トアリ

一蘇武　字子卿漢武帝ノ天漢元年以中郎持節使匈奴嚙雪咽旃杖節牧羝居沙漠十九年トアリ昭帝ノ始元六年ニ鴈帛書ノ詭ニヨリテ漢ニ還リケリ李陵カ別シ時詩ヲ以テ送ル雙鳧倶北飛一鳧獨南翔ト云フ五言ノ詩ハ初テ起ルト是ヲ蘇李體ト名ケルトソ

一倪寛　コレモ漢武帝時人ナリ束髮修學家貧ニシテ學業ナラス故ニ賃ヲ取テ農作ヲシ經書ヲ帶シテ讀

見シテ文法ヲ習ヒ明シテ經術ヲモツテ官ニ居セリ
一董仲舒　少シテ春秋ヲ治メ三年ノ間後園ヲモ不見學業ニ勤タル人ソ王佐ノ才有リ伊尹無以加管晏殆不及ト劉向カ嘆タソ
一文翁　前漢景帝ノ時蜀郡ノ太守ト成リタソ學官ヲ蜀成都ノ市中ニ起テ、學業ヲ起ス郡國ニ學校ヲ立コトハ文翁ヨリ始レリ
一賈誼　字子休洛陽ノ人ナリ年十八ニシテ能詩書ヲ讀テ文道ノ名譽ヲ得タソ漢文帝コレヲ悅テ恒ニ御座ヲ近シテ物ヲ問玉ヘリ或時鬼神ノ本ヲ尋ネ夜半ニ及ヘリ理學既ニ明ナレハ拜シテ梁ノ大夫トシ玉ヘリ
一叔孫通　秦ノ時博士也漢ニ歸シテ高祖ヲ佐ク
一金岡　一條院ノ時ノ畵工ナリ姓ハ巨勢氏官ハ大納言ニ至レリ
一小野道風　寛平九年丁巳奉勅書賢佐像行狀トアリ道風ハ寛平五年ニ誕生シテ村上天皇ノ康保元年十一月卒七十一歲河海云木工頭小野道風正四位下參議峯守孫大宰大貳葛絃男トアリ然ラハ寛平九年ニ奉勅ノ說非乎

一鳳甍翔天　西京賦曰鳳騫翥於甍標注云甍棟也謂作鐵鳳皇令張兩翼又向曰甍簷也ト此ノ時ハノキノ事ナリ
一虹梁　西京賦ニ亘雄虹之長梁
一回祿　左傳二十四昭十八年傳曰禳火于玄冥回祿注玄冥水神回祿火神シカレハ火事ノ事ヲ云ナリ柳文ニ云回祿煽怒而贓牙韓曰回祿火神也
一茆茨不翦　六韜ノ辭ナリ又史記列傳二十七曰李斯曰吾有私議而有所聞於韓子也曰堯之有天下也堂高三尺采椽不斲徐廣曰采一名櫟一作柞索隱曰采木名即今之櫟木也茅茨不翦雖逆旅之宿不勤於此矣或又墨子ニハ茅茨不翦謂以茅覆屋不取整齊ト云云
一風月ノ本主　嘯月吟風ト云ヘル義也山谷云試問淮南風月主注云江山風月本無常主閑者便是主人
一盛唐　唐ニ盛中晚ノ三時ヲ立ルニハ第一代高祖武德年中ヨリ第七代玄宗ノ天寶年中マテヲ盛唐トス天寶末ヨリ第十二代憲宗ノ元和ノ比マテヲ中唐ト云フ元和ノ末ヨリ唐末マテヲ晚唐ト云フ是ハ唐詩正音ノ一說也
一七步才　排韻云曹植字子建魏文帝忌其才欲害之令

作詩限七步成植應聲曰煑豆然豆萁豆在釜中泣本是同根生相煎何大急

一噉漢魏芳潤　陸士衡文賦曰傾群言之瀝液漱六藝之芳潤注云漱蕩其芳香潤澤以成之也

一對策及第　總シテ及第ト云ハ第一ノ才ニ及フト云義ナリ對策ト云ハ諸儒ト對論スル義ナリ射策ト云ハ書典ヲ數多積ミ置テ箭ヲ射テアタリ次第ニ取テ談論スルヲ云ソ

一折桂　古註蒙求云晉郄詵字廣基擧賢良對策爲天下第一文帝問卿才如何詵曰猶桂林一枝崑山片玉帝笑之今試場折桂始於此也

一都良香　元亨釋書十八云都良香者京兆人也文才冠世仕到著作郎菅丞相又良香之諸生也菅公階爵日加良香不及怒棄官入山修練不知所終後百餘年或見大峯山窟中顏色不衰云已上但又百練集云天慶四年文章博士兼行大內記越前權介都朝臣良香卒年四十六有集六卷云云然レハ終ル所モ知レタル乎

一學窻ニ聚螢　晉車胤字武子河東人博學多通家貧不常得油夏夜則練囊以盛數千螢火照書以夜繼日終至吏部尙書也

一盺シヲリ　躝折枝折トカクト也

一五善何モ遑ク　論語ニ子曰射不主皮馬融曰射有吾善焉一曰和志體和二曰和容有容儀三曰主皮能中質四曰和頌合雅頌五曰興武與舞同

一五度ノ十　十ノ字ヲツヽトヨムソ

一季嶠　字巨山兒時夢人遺雙筆自是文辭大進張說論云嶠文如良金美玉無施不可武后朝爲鳳閣舍人出排韶唐ノ武后ノ神龍二年ニ中書令ニ拜セラルト集覽ナトニモ載タリ今漢朝ト云ヘルハ總シテ云ツケテノ義ソ

一幕府　文選五十七注云幕府謂大將軍府也善曰漢書音義曰衞靑征匈奴大克獲帝就拜大將軍於幕中因曰幕府

一昭宣公　宣ノ字ヲ濁　鎌足大織冠　不比等諡淡海公　房前贈太政大臣　眞楯大納言正三位　內麻呂右大臣　冬嗣贈太政大臣　良房攝政太政大臣從一位諡忠仁公號染殿此子基經攝關昭宣公ナリ實ニハ良房公ノ甥ナリ

一誰知僞言巧似簧勸君掩鼻君莫掩使君夫婦爲參商請君掇蜂君莫掇使君母子成豺狼　白氏文集第三全文

也簧ハ笙ノ中ノ金葉ヲ云ナリ笙ニハ十三簧アルソ調子ニヨリテイツレノ簧ニモ移ルソ然レハ僞言モ巧ニシテ何ノ事ニ成サンモ候者ノマヽニ成ルソ左樣トハ誰モ知ラサルソ毛詩第十二ニ巧言如簧ト云タモ虚僞ノ人ヲソシリタル詩ソ

一掩鼻　魏王ヘ楚國ノ美人ヲ媒シテ奉タルニ寵幸タヽナラサレトモ又王ノ元來ノ寵愛アリケル鄭褎夫人ノ御心ノ底モ計カタキカ故ニ魏王モ大方ナルフリヲシテ有リケルカ案ニ相違シテ鄭褎ノ馳走斜ナラス去程ニ初メテ參タル美人モ自餘ニ混セス喜ヒ且ハタノモシク思ヒ入レタリ如何ニモヨク心ヲ打トケテ彼ノ楚ノ美人ニ鄭褎異見ヲ申サレタルヤウハ其方ヲ魏王ノ寵愛タヽナラス我サヘ貴方ヲハ別シテ思ヒ入タル風情ナリ然ルニ其方ノ鼻ノ體カ見苦シキ由ヲ折々ニ王ノ玉ヘリ自然王ニ見ヘ申サン時ニハ鼻ヲ掩ヒカクシテ見エヌヤウニセラレタラハ行末マテモ然ルヘク候ト云ハレケル故ニ彼美人實ニモト思テ王ノ御前ニテハ必鼻ヲ扇ヤ衣裳ノ袖ナトニテ掩ラレタリ如此仕リ來リタレハ魏王モ不審ニ思召シテ鄭褎ニ其故ヲ御尋アリケレハ對テ曰ヤウハ王ノ御身又息ナト臭キ由ヲ彼美人カ申ツルトヤラン承リタルカサテハ實ニ左樣ニモ致シ候カト申シタレハ王逆鱗アツテ彼鼻ヲキリテ放チ玉フトソ鄭褎カ前後ノ心ノ底譬ヘテ云ヘキ方モナキ事也韻府去聲鼻字ニ魏王遺楚美人夫人鄭褎愛之甚於王鄭知王以已爲不妬因謂美人曰王惡子之鼻見王必掩之美人從之王謂鄭曰美人見我必掩鼻何也對曰似惡聞王之臭王劓其鼻

一參商　二ツノ星ノ名ナリ其相去コト隔遠不近也杜詩第三云人生不相見動如參與商又云各在天一涯又如參與商昭元年傳云昔高辛氏有二子伯曰閼伯季曰實沈居于曠林不相能也曰尋干戈以相征討后帝不臧遷閼伯于商丘主辰商人是因故辰爲商星遷實沈于大夏主參云々又云實沈參神也今云意ハ僞言ノ者ノワサトシテ夫婦ノ間モ參商ノ相ヒ遠ルカ如ニ遠ク成ストソ

一掇蜂　韻府蜂字尹伯奇母取蜂去毒繫衣上伯奇前欲去之母大呼曰伯奇牽我父吉甫見疑伯奇自死出列女傳此中ニハ只母トアル故ニイカナリトモ實子ナラハ如此ノ無實ハアルマシイト思ソ文選第二十八陸

士衡樂府曰掇蜂滅天道拾塵惑孔顏注曰尹吉甫前妻子伯奇後妻子伯封後妻欲其子爲太子言於吉甫曰伯奇好妾若不信王上臺觀之後母取蜂除其毒而置於衣領之中使伯奇視而殺之吉甫使讓伯奇使者見袖有死蜂以白吉甫々々使追之以投于河矣掇拾也父子之道天性之常由此而滅之已上 憂タテノ繼母ノ巧ヤソ無衣無履踐霜挽車トアルカヽル極眞ノ子ニツラクモアタリタ事ソ父ノ尹吉甫ハ周ノ卿士ニシテ隱ナキ人ナルカ繼母カ所行ヲハ知ラテ居タル歟不審ナソ韓退之モ伯奇ヲ思フ爲ニ履霜操ヲ作テ悲ミタルソ

一犲狼　犲ハ說文狼屬也トアリ犲ニ二類アリ大ナルヲ犲郎ト云ヒ少ナルヲ犲奴ト云フ常ニ山谷ニ遊ニモ犲奴カ先ヘ行テ禽鹿ヲ取テ守リ居テ少モ不食シテ犲郎ヲ待ツソ時ニ後ヨリ犲郎カ行テ猪鹿等ノ肉ヲ食テ飽テ殘スヲ彼犲奴カ餕ト見タリ大寶積經第十五卷音義ニ出タリ禮記月令ニ季秋之月霜降之日犲乃祭獸即其候也猛獸ナレトモ義ヲ知リ道ヲ存スルコト不思議ナリ今云タルハ唯タ母子ノ間タモアシクスレハ犲狼ノ志ニ成ルトソ

一亭子院　七條坊門北西洞院西二町寬平法皇御所ナリ元ハ東七條后也

一甘寧錦纜　蒙求曰甘寧奢豪呉志曰甘寧字興霸巴郡人性奢豪以繒錦維舟先則棄之カヽル者ノナレトモ孫權ノ良將トシテ計略モアリ武邊モタキツテ已ニ魏曹公ト云フ隱ナキ人ト烏林ト云所ニテ合戰ヲシテ勝テ曹公ヲ追立タソ江表ノ虎臣トテ名ヲ得タ者ソ隋煬帝モ錦纜ヲセラレタソ

一蘭橈桂檝　朗詠曰蕙帶蘿衣抽簪於北山之北蘭橈桂檝鼓舷於東海之東江相公ノ作也此語ノ趣ヲトルソ

一生ノ松　筑前ノ名所ナリ

一トコトハニ　常住ト云意ナリ

一都府樓　朗詠曰都府樓纔看瓦色觀音寺只聽鐘聲菅丞相鎭西ニテ作ス都府樓トハ大宰府ノ樓ナリ觀世音寺ハ天智帝ノ草創ナリ

一法性坊尊意　元亨釋書十云釋尊意姓丹生氏平安城人其先應神天皇之胤也云云

一十乘　天台摩訶止觀ノ正觀ノ實行也十乘トハ一ニハ觀不思議境二ニハ起慈悲心三巧安止觀四破法遍五識通塞六修道品七對治助開八知次位九能安忍十

無法愛云云此コトハ天台一家ノ法要ナレハ輙ク云ヒ立ルコト難シ故ニ略ス

一劫火　此世界カ悉ク燒ケ滅スル時ノ事也

一惣持法驗　大唐ノ語ソ天竺ニハ陀羅尼ト云也惣持トハ神呪トモ又明咒トモ眞言トモ云フ今ノ意ハ此法ノ驗ナラテハ奇特ハ希ナリト云コトソ

一師資ノ義　師弟ノ事也老子經曰善人不善人之師不善人善人之資也コレヨリ起ル辭ソ

一其時定テ御山門　元亨釋書云延長八年六月戸部尚書藤淸貫尙書右中丞平希世二人於淸凉殿逢雷震死皇帝惶怖玉體不豫乃移常寧殿召意宿禁中持念初意在叡山一日菅丞相化來語曰我已得梵釋許與欲償夙懟願師道力勿拒我也意曰然々率土者皆王民也我若承皇詔何所辭乎菅作色適薦柘榴菅吐哺而起化作焔坊戸煙騰意結瀉水印擬之其火則滅燒痕尙在焉已

一淨藏貴所　釋所十云淨藏洛城人諫議大夫殿中監善淸行之第八子也母弘仁帝孫女夢天人入臥內因而娠寛平三年生聰敏無双四歲讀千字文聞一知二七歲求出家天曆中藏寓八坂寺時縉紳多集見塔曰塔之傾斜也其方有凶今是塔傾向王城爲之若何藏曰我又思之早可修治群公以爲捨財也其夜藏坐露地向塔持念已還房弟子仁墻偶出庭微風自西北來塔婆少搖寶鐸作聲朝見之塔婆端直都人走詣隨喜嘆嗟ス

一宮毗羅大將　藥師十二神將ノ第一也

一魯般カ斧　楚ヨリ宋ノ城ヲ攻ル時城ツヨク又ハ高シテ攻ニサルホトニ楚王魯般ハ天下一ノ巧匠ナルホトニ雲梯ヲ作ラセテ攻ントテ則作ラシメタソ淮南子ニ出タソ

一馬ヲ不放花山野　尙書六武城篇曰歸馬于花山之陽放牛于桃林之野示天下弗服　桃林ハ花山ノ東ニアリ今華陰縣ト潼關云所ナリ武王既殷ニ勝テ馬ヲ花山ノ陽ニ放散シテ復乘ラサンコトヲ示シ牛ヲ桃林ノ野ニ放遣テ復タ服セサランコトヲ顯スソ正義曰花山之旁尤乏水草非長養牛馬之地欲使自生自死巳上孔安國カ註モ同之諍謐ノ體ソ

一嚬眉　祖庭事苑曰嚬眉笑也

一誇陶朱之富貴　賈誼過秦論曰陶朱猗頓之富注向曰陶朱公猗頓皆富人也言涉不賢又不富善曰史記曰范蠡之陶爲朱公以爲陶天下之中者諸侯四通貨物所交易也乃治産積十九年之間三致千金

一飽鄭白之衣食　班孟堅兩都賦曰下有鄭白之沃衣食之源注銑曰鄭國韓水工爲秦決涇水漑田名曰鄭渠趙大夫白公穿渠引涇水漑田名曰白渠人賴此以爲衣食已上李善カ注ニ詳ナレトモ廣博ナル故不記

一賤服貴服　孝經卿大夫章ノ注ナリ僭上爲不忠トアリ不忠ハ國ノ凶賊ナリ

一三密瑜伽　第一卷ニアリ

一廬山惠遠禪師　祖庭事苑四云遠法師鴈門人年二十一聞道安講般若豁然大悟乃嘆曰儒道九流皆糠粃爾遂與弟惠持投簪落髮常以大法爲已任後之廬山西林之側山神闢地運木建寺居之於是謹律之侶絶塵之客不期而至所謂宗雷等一十八人同修淨土影迹不至塵俗毎送客以虎溪爲界年八十三順寂于寺

一十八賢聖ヲ結　惠遠惠永慧持道生曇順僧叡曇恒道昺曇詵道敬覺明覺賢劉程之張野周續之張詮宗炳雷次宗一々ノ傳ハ佛祖統紀二十七ニ詳也

一大梅常和尚　五燈會元三卷云明州大梅山法常禪師者襄陽人也姓鄭氏幼歲從師於荊州玉泉寺初參大寂問如何是佛寂曰即心是佛師即大悟遂之四明梅子眞舊隱縛茆燕處剛被世人知住處又移茅舍入深居云云

一解脱上人　釋書五云貞慶藤給事之孫尚書左丞貞憲之子也母夢高僧來宅自稱曰貞慶言已入懷自是而孕投興福寺出家有才譽云云母鈴ヲ呑ノコトハ別傳ニアル歟シラス

一大隱ハ必シモ市朝　文選二十二云小隱々陵藪大隱々朝市

一五濁塵　一劫濁時代ノ惡ク成ル義ソ煩惱濁衆生ノ意カ貪欲嗔恚愚癡ノ三毒ヲ强ク起ス義ソ三衆生濁惡人ノ義ソ四見濁惡見ヲ起スソ五命濁ハ壽命モ漸々ニ縮ル姿ソ

一抖擻　一切經音義第十七卷云抖擻上得口反下桑厚反抖擻者振衣也説文上擧振之也從手斗聲梵云杜多或云頭陀唐云抖擻沙門釋子行遠離行少欲知足不貪不著節身苦行也

一カタソキモソラス　形祖木ト云云神ノ社ノツマニ刀ノヤウナル木也又ハ千木トモ云也新古今ノ神祇ノ部ニ住吉ノ御歌トテ

夜ヤサムキ衣ヤ薄キカタソキノユキアヒノマヨリ霜ヤ置ラン

一南贍部州　一切經音義云水底南岸下有贍部黄金古名閻浮檀金是也樹因金而立名州因樹而得號

一後漢光武　名ハ秀字文叔長沙定王之後景帝之孫也莽末起兵復興帝室誅莽滅郎乃有天下在位三十三年壽六十一

一王莽　孝元后之姪也初封新都侯弑平帝簒漢天下建國號新僭位十八年漢兵弑之

一堯ノ代ニ九ノ日出　淮南子曰堯時十日並出草木焦枯堯命羿仰中其九烏皆死墮羽翼

一前陸奥守義家　清和帝ニハ四代ノ孫多田新發意滿仲カ三代ノ後胤伊豫守頼義入道カ嫡男也

一鈴間　清涼殿ノ

一蚊ノ睫ニ巣クウナル蟭螟　張茂先鷦鷯賦曰鷦螟巣於蚊睫注蟭螟微蟲也巣於蚊子之睫善曰晏子春秋景公曰天下有極細者乎對曰有東海有蟲巣於蚊睫再飛而蚊不爲驚又祖庭事苑七云音焦冥細蟲江浦之間有麼蟲曰蟭螟集於蚊睫而弗相觸栖宿往來而蚊未之覺以言其細也

一周文王靈囿　孟子一卷云王在靈囿云云毛詩大雅ノ靈臺篇ニ出タリ

一高野大師　在泉州槙尾山寺初名敎海後自改如空延曆十有四年登東大寺壇受具足戒又改空海延喜十一年十月賜謚弘法大師

一周敏　周字誤也可作守字詳出元亨釋書第一空海傳

一馬鳴褰帷鬼神去閉口　西域記第八云建擊揵稚窣堵波北有故基昔鬼辯婆羅門所居處也初此城中有婆羅門葺宇荒藪不交世路祠鬼求福魑魅相依高論劇談雅辭響應人或激難垂帷以對舊學高才無出其右士庶翕然仰之猶聖有馬鳴菩薩者智周萬物道播三乘每謂人曰此婆羅門學不師受藝無稽古屏居幽寂獨擅高名將非神鬼相依妖魅所附何能若是者乎夫辯資鬼授言不對人辭說一聞莫能再述吾今往彼觀其擧措遂即其廬而謂之曰仰欽盛德爲日已久幸願褰帷敢申宿志而婆羅門居然簡傲垂帷以對終不面談馬鳴心知鬼魅情甚自負辭畢而退謂諸人曰吾已知矣摧彼必矣尋往白王唯願垂許與彼居士較論劇談王聞駭曰斯何人哉若不證三明具六通何能與彼論乎命駕躬臨詳鑒辯論是時馬鳴論三藏微言述五明大義妙辯縱橫高論清遠而婆羅門既述辭已馬鳴叱曰何不釋難所事鬼魅宜速授辭疾褰其帷視占其怪婆羅門惶遽而曰止々馬鳴退而言曰

此子今晨聲問失墜虛名非久斯之謂也
一栴檀禮塔支提破顯尸　付法藏因緣傳第五卷云月支國主威德熾盛名曰栴檀罽昵旺王志氣雄猛勇健超世所可討罰無不摧靡王於後時在路遊行見外道塔七寶莊嚴便大歡喜謂如來塔前禮稽首至心恭敬應時寶塔分散崩落王見驚怖而作是言我於今者福將欲盡失王位乎何故我適禮此寶塔而便頹毀有人語言王所禮者是外道塔以其威德微末尠少不堪受王福德人禮是故爾耳即發塔下得尼乾屍衆人歎曰奇哉大王德力深厚禮此邪塔令其毀壞云云飛字函ニアリ此中ニ尼乾ト云ハ外道ノ惣名ナリ支提ト云モ塔ノ別名ナリ
一大雪山ノ北ニ無熱池　俱舍論疏十一云雪北香南有大池水名無熱惱文長阿含經十八云閻浮提諸龍有三患一熱風二惡風三金翅鳥怖此池無三患故名無熱惱池也取意
一守敏ヨリ上位ノ薩埵　法華文句二云本住歡喜地云云大論ニ菩薩以願力故化生龍王トアリ此等ノ意ヲ云ヘル也
一油然　孟子一云油然作雲注ニ油然與雲之貌トアリ
一軍茶利夜叉　頭ハ一ニテ八臂アリ本地ハ虛空藏也諸ノ鬼神ナトノ障ヲ拂所ノ役者ナリ
一大威德明王　本地ハ一切怨魔菩薩也毗沙門ナトヲ眷屬トシテ人ヲ守護シ玉フ也已上二箇條ハ仁王經儀軌ノ説也
一龍華下生三會　祖庭事苑七云龍華三會龍華樹也其樹有華々形如龍故名龍華當來導師彌勒佛ノ出世ノ時キ龍華樹ノ下ニシテ生シ玉ヒシ前後合テ但タ三會ノ説法ソ彌勒下生經ニ云當來彌勒於此樹下説法度人而有三會初會先度釋迦所未度者次ニハ度其餘凡六十八億人第二會六十六億第三會六十四億
一請雨經ノ法　大雲請雨經二卷アリ天竺人ニ那連提耶舍カ譯スル也
一凉燠　スヽシイアツシ一年ノ事ヲ云ソ寒暑ト云ト同シ
一尺鐵之資　文選四十一李少卿答蘇武書云兵盡矢窮人無尺鐵注尺鐵兵器
一践虎尾　周易履卦曰履虎尾尙書曰若蹈虎尾涉于春氷注心懷危懼也
一扶蘇刑而秦世傾　扶蘇ハ始皇ノ長子ニシテ帝位ヲモ讓ントテ書ヲ賜タレトモ趙高ト李斯ト計ニテ結

句ニ始皇ノ遺勅ニテアリケリ自殺シ玉ヘトテ殺シタソ胡亥モ兄ヲ廢シテ弟ノ立ツ事ハ不義也トテ辭退セラレタレトモ父皇詔ヲ違スルハ不孝也ト云テ遂ニ即位セシメタソ然シテ天下ヲ漢ニ奪ハレタソ

一浸潤之譖膚受之愬　第十四卷ノ中ニ注ス

一晉獻公　武公ノ子字ハ詭諸ト云タソ即位五年ニ驪戎ヲ伐テ其ヨリ得タル夫人ナレハ驪姫ト云タソ十二年ニ奚齊ヲ生レタソ其時ヨリハヤ太子ヲ廢セント思フ意カ有タソ故ニ曲沃ト云所ヘ遣ハシテオカレタソ重耳ハ蒲ト云所ニ夷吾ヲハ屈ト云所ニ居ヘラレタソ晉ノ國ヲハ奚齊ニ讓ント思フ故ソ彼子カ八歳ニ成タ時ニ人ノ知ラヌヤウニシテ早ヤ言ニ出シテ心中ノ體ヲ驪姫ニ語ラレタソ其時キ意ニハ嬉シク思テソラ泣ヲシテ斟酌ノ由ヲ云タレハ獻公ノ彌ヨホレラレタソ

一胙　ヒモロギ也祭ノ福肉ソ

一曲沃　索隱曰河東之縣名

一雞ト犬ト　雞トハナシ一番ニ地ニ祭リタレハ地カムクリト起タソ次ニ犬ニ與タレハ犬モ死タソ其次ニ小臣ニ與タレハ小臣モ死シタリトアリ

一其弟重耳夷吾二人共ニ他國ヘ逃　他國テハ無シテ前ヨリ持チ來レル面々ノ居城ヘ引籠タヲ士卒ヲ遣シテ戰ヲシタレ共堅固ニシテ落城ハセヌソ其後ニ重耳ハ翟ヘ奔ル翟ハ母ノ國ナリ夷吾ハ梁ヘ奔ラレタソ

一獻公奚齊共ニ里克ニ討ル　夏獻公ハ病死セラレタソ荀息ト云臣下ニ奚齊カ事ヲ返々賴ム由云置カレタソ獻公ノ葬ヲモセヌ内ニハヤ里克ト邳鄭ト云者カ荀息カ所ヘ使ヲ立タルヤウハ申生兄弟三人ノ軍兵カ是非ニ重耳ヲ取立テ國主ニ成ント云ホトニ一味セラレヨト云タソ荀息カ返事ニハ先君ト堅ク約諾シテ今更違變ハナラヌト云タソサラハト云テ十月ニ里克カ奚齊ヲ殺タソ荀息ハ面目ナシトテ將死ント云タレ共或人カ異見ニ奚齊カ弟悼子ト云カアル程ニ夫ヲ取立テヽコソ忠節ナルヘシト云タレハ尤ト合點シテ主ニ立テヽ獻公ノ葬ヲ調タソ然ルニ十一月ニ又悼子ヲモ里克カ殺シタホトニ荀息モ其時ニ死シタソ列女傳ニハ驪姫ヲハ市中ヘツレテ出テ鞭ヲ用テタヽキ殺シタトアルソ如此シテ重耳ノ迎ヲ使ハシタレハ辭退シテ國ヘ還ラレタソ禮ノ道

アリケル故ソ又夷吾ノ迎ヲ遣シタルニ是モ義理ヲ立テ、合點ナカリケルヲ隣國ノ衆カ寄合テ無理成シニ晉公ニ居タソ是ヲ惠公ト云タソ重耳ハ遙後ニ王ニ成リ王ヘルソ是ヲ文公ト云タソ

一干戈ヲヲサメ弓矢ヲフクロニス　史記四云載戢干戈載櫜弓矢櫜ハ韜也

一牝鷄晨タニスルハ家ノ盡　尙書第六曰古人有言曰牝鷄無晨牝鷄之晨惟家之索注索盡也喩婦人知外事雌代雄鳴則家盡婦奪夫政則國亡上已惣シテ雌雄ヲ牝牡ト云フ又牝ハ畜母也ト注ス鳥ナレハメントリヲ云フ獸ヲモ此ヲ用テ知ルヘシ所詮ハメントリノ雞カ鳴クハ物怪ニ取ルナリ

太平記鈔第十三卷

一龍馬　顏延年赭白馬賦曰馬以龍名注翰曰馬之大者名之爲龍周禮曰凡馬八尺已上爲龍

一骨擧筋太　事林廣記曰骨細筋粗節要擴豪筋大小須勻壯

一頸ハ雞ノ如ニシテ　頂長如鳳須彎曲

一兩ノ耳　耳如楊葉刀批竹又杜愚得第一云相馬經云耳欲銳而小如削筒

一雙ヘル眼　便似垂鈴紫色鮮

一半漢　文選三曰天馬半漢注半漢天馬貌　イサメリトヨム

一彫梁　彫字誤也莊子一云東西跳梁不避高下注云跳梁猶走躑也又秋水篇曰井蛙跳梁井幹之上云云又漢書蕭望之傳ニモ小夷跳梁於山谷間　ヲドリアカルトヨム

一屈產ノ乘　左傳五注屈地生良馬又史記世家注何休曰屈產出名馬之地乘備駟也屈トハ屈支國ノコトソ又ハ丘茲トモ龜茲トモ云タソ龍馬ノ出ル國トアルソ孔雀モ多ヒ所ソ長安城ヲ去テ西ノ方七千五百里ヲヘタテタソ文獻通考ノ第三百三十三卷ニ詳ナリ屈音居勿反ニ用ルソ

一項羽カ騅　蒼黑馬也項羽傳ニ時不利兮騅不逝トアルソ

一虞舜ノ代ニ鳳凰來　尚書ニ曰簫韶九成鳳凰來儀

一孔子ノ時麒麟出　左傳三十卷經十有四年春西狩獲麟注麟者仁獸聖王之嘉瑞也時無明王出而遇獲仲尼傷周道之不興感嘉瑞之無應故因魯春秋而修中興之敎絕筆於獲麟之一句所感而作固所以爲終也魯ノ大夫ニ叔孫氏ト云フ有リ其下人ノ車ヲ御スル者ニ子鉏商ト云者アリ薪ヲ採リニ大野中ニ行タレハ麒麟カ出タルヲ見テ麟ト云モノヲ知ラサレハ麟ヲ追イマワシテ遂ニ前ノ左ノ足ヲ打折テ載セテ以テ歸タソ叔孫モコレヲ見テ知ラヌ物ヲ持來レリイカサマ不吉ノ事ト思テ遠ク城郭ノ外ヘステサセタソ此事ヲ孔子ノ聞及ヒテ彼所ヘ往キ見テ何トテ只今出テテカヤウノ痛ハシキ事ニハ遇ケルソト袂ヲ袂面ニアテ悲泣シ給ヘリ叔孫ハ又コレヲ聞キサテモサヤツニ仔細ノアリケル物歟トテ又取テ歸シ置タソ其時ニ子貢カ孔子ニ問ハク何トテ深ク泣歎玉フソト

云ヘハ孔子曰麟之至爲明王也出非其時而見害吾是以傷焉ト云云家語第四辯物篇ニ見タリ

一周ノ穆王ノ時　出列子穆王篇又白氏文集ニ八駿ノ辯アリ祖庭事苑三云王子年拾遺云周穆王即位三十二年巡行天下取八龍之駿一名絶地足不踐土二名翻羽行越飛禽三名奔宵夜行萬里四名越影逐日而行五名踰輝毛色炳燿六名超光二形十影七名霧騰乘雲而趨八名挾翼身有肉翅徧而翻焉

一舍衛國ノ三億　此云聞物寶物多出此城已上惣シテ舍衛ニハ九億ノ家アリ其中ニ三億ノ家ノ人ハ佛ヲ見タテマツレリ三億ノ衆ハ聞キ及ヒ殘ル衆ハ曾テシラス天台ノ止觀四云舍衛三億不聞不見ト釋スル此事也

一四要品　方便安樂壽量普門ノ四品ヲ法華ノ肝要ノ品ト云也

一慈童　此人未タ本據ヲシラス

一酈縣　本草南陽酈縣菊最多史記高祖紀ニハ折酈トアル注ニハ折屬弘農酈屬南陽トアルソ詩學大成云南陽酈縣有甘谷々中水甘美上有大菊落水从山流下得其滋液谷中人家飲此水上壽百二三十其中百餘歲

一換骨羽化　此辭ハ白氏文集ノ第三ニ見タリ通鑑集覽五十云道士以爲換骨胡氏曰方士之言殺人者有五曰辟穀曰去血曰換骨曰出神曰蛻形又詩學大成十七云漢武帝求王母度世之術母曰子但愛精閉氣行之不倦一年易氣二年易血三年易脉四年易肉五年易髓六年易筋七年易骨八年易髮九年易形變化則成道云云羽化トハ翼ノ生シテ飛行スルホトノ仙ソ換ハ易也ト玉篇ニアルホトニ七年易骨ト云ニアタルソ

一魏ノ文帝ノ時彭祖　文帝ノ時ノ彭祖ト云者ノ事イマタ不知本據列仙傳上云彭祖者殷大夫也姓籛名鏗帝顓頊之孫陸終氏之中子歷夏至殷末八百餘歲常食桂芝善導引行氣歷陽有彭祖仙室云々莊子第六太宗師篇云彭祖得之上及有虞下及五伯疏曰彭祖帝顓頊之玄孫也封於彭城其道可祖故稱彭祖善養性得道者也上至有虞下及殷周凡八百年也錦繡萬花谷第三十云彭祖喪四十九妻失五十四子重陽ノ晏ノ事ハ魏文帝書云歲往月來忽復九月九日九爲陽數其日與月並應故曰重陽云云事林廣記後集云仙書云茱萸爲辟邪翁菊花爲延壽客故假此二物以消陽九之厄爾已上

一當途王經　法華文句第十云此品是當途王經講者甚

桑文補注十云文句云當途王經等途道也亦世也王尊也大也統攝自在最爲尊大也意言此是流通中當世尊大之經也

一穆王天馬　文選三十五注劉梁七擧曰天馬之號出自西域

一漢文帝ノ時一日ニ千里行馬　貞觀政要第二納諫篇云昔漢文帝有獻千里馬者曰吾吉行日三十凶行日五十鸞輿在前屬車在後吾獨乘千里馬將安之乎乃償其道里所費而返之又光武有獻千里馬及寶劍者馬以駕鼓車劍以賜騎士云云此所ヲヤハラケテ書タル也吉行謂巡幸祭祀也凶行謂出兵行師也ト注セリ屬車トハ秦制ニ大車八十一乘相屬也文選注ニハ屬車天子後車也

一造父ヲ御タラシメ　史趙世家云皐狼生衡父云云生造父トアリ列子云穆王大悦不恤國事不樂臣妾肆意遠遊命駕八駿之乘主車則造父遂宿于崑崙之阿赤水之陽別昇崑崙之丘以觀黄帝之宮而封之以詒後世遂賓于西王母觴于瑤池之上西王母爲王謠王和之其辭哀焉云云穆王ノコト又趙世家ニモ載タリ

一哺ヲ吐ク　周公旦ノ常ノ行跡ノ事ヲ云タソ右ニ注スルカ如シ

一百辟　百官ノ意ソ論語ニ辟公ト云タルハ諸侯ヲ云タソ

一群臣ハ旨阿　旨ハ意也阿ハ曲也主君ノ惡シキ事ヲモ諫メ改ル義ハナクシテ曲ケ尤モニテ候ト云ソ貞觀政要二云苟在阿順事皆稱美則君爲暗主臣爲匡臣君暗臣諛危亡不遠

一虞芮並諫鼓　第一卷ニ云カ如シ

一雍齒カ功ヲ先　蒙求ニ雍齒先侯前漢高祖居洛陽從復道望見諸將往々偶語上問張良々曰陛下起布衣與此屬定天下今爲天子所封皆蕭曹故人親愛所誅皆平生仇怨此屬見疑故相聚謀反爾上曰爲之奈如何雍齒與我有故怨我欲殺之爲功多不忍良曰今急先封齒則人々自堅矣於是置酒封爲十萬戸侯羣臣皆喜曰雍齒且侯我屬無患

一韓信　淮陰人ナリ初ハ項羽ニツカヘタルカ恒ニ我カ策ヲ項羽カ不用コトヲ見限テ居タルヲ蕭何カ才覺シテ高祖ニカクノ如キノ者ノハ國ニ雙ヒナシ故ニ禮ヲタヽシテ招寄セラレ候ヘト云タレハ設壇具禮拜シテ爲大將トソ

一彭越　昌邑ノ人ナリ字仲ト云タソ項羽ヲ討テ後ニ梁王ト成シタソ

一曹參　蕭何ト同起テ漢祖ヲ佐タソ元功ヲ定ル十八人ノ中ソ封平陽侯ソ魏徵已下ハ賢聖ノ障子ノ所ニアル故ニ畧ス

一賞中其功則有忠之者進罰當其罪則有咎之者退

一郵ヲ置テ命ヲ傳　孟子第三云孔子曰德之流行速於置郵而傳命朱熹注ニ置驛也郵馹也所以傳命也或ハ步遞曰郵

一身ヲ奉シ退ニハ不如　孝經注云事君之禮値其有非犯嚴顏以道諫爭三諫不納奉身以退云云

一致仕　曲禮曰大夫七十而致事トアリ事ト仕ト同シ

一龍逢　莊子人間世云桀殺關龍逢注姓關字龍逢夏桀之賢臣盡誠而遭斬首

一比干　紂王ノ諸父ニシテ紂ヲ諫メタレトモ不用シテ殺ス論語ニモ出タリ史記本紀ニ云比干曰爲人臣者不得不以死爭迺强諫紂々怒曰吾聞聖人心有七竅剖比干觀其心云云莊子注疏ニハ紂カ庶叔トアリヲヂノ事也

一行脚　アンキヤトヨム也祖庭事苑八云行脚者謂遠離鄕里脚行天下脫情捐累尋訪師友求法證悟也出家ノ學ニハ常ノ師トカワルソ多ク遍歷シテ人ニ値ヘハ自然ニ得道ノ義カ出來スルホト行脚ヲスルソ

一棄恩入無爲眞實報恩者　此ノ次上ニ流轉三界中恩愛不能斷ト二句ヲソエテ四句ノ偈トテ受戒スル時ニ受ル文ナリ斷ノ字ヲ諸經要集十一ニハ脫ノ字ニモ替タソ

一白頭望斷　黃蘗題大義渡頌ソ祖苑聯芳第三ニ出タリ

一散聖ノ道人　淨土家ニ定善散善ト云義ヲ談ス定善ニ日想觀等ノ十三觀アリ散善ニ三福九品ノ善アリ皆貴キ善ナリト云ヘトモ唯以念佛一行付囑流通ノ至極トスル也云云其中ノ散善ノ道人ト云意ソ

一五部ノ大乘經　一ニハ舊譯華嚴經六十卷二ニハ方等大集經三十卷是ニ日藏經十卷月藏經十卷合テ五十卷三ニハ大品般若經三十卷四ニハ法華經開結二經合十卷或除二經五ニハ涅槃經四十卷ナリ

一悉地　悉ハ一切ノ義ナリ地トハ至リ極ル處ヲサス然レハ一切至極ノ事ヲ云ナリ

一一子出家　心地觀經第四云一日一夜出家修道二百

萬劫不墮惡趣常生善處文是ハ自身得益ノ分也盂蘭盆經云乙願使使現在父母壽命百年無病無一切苦惱之患乃至七世父母離餓鬼苦得生天人中福樂無極已上七世父母マテ離苦得脫スルト也

一微子去殷ノ代傾　帝乙ニ三子アリ長ハ微子啓次ハ中衍季ハ受辛ナリ是即紂也謚法ニ殘義損善曰紂アリ紂ハ尚幼少ナレハ帝乙モ及后モ微子ヲ立ント思ハレタソ太史官ノ者ノ云フヤウハ有妻之子不可立妾之子コレカ大法也如何ント云ヒ張リタル故ニ微子ハ兄ナレトモ傍腹ナレハ遂ニ紂カ立タルソ紂惡逆ヲ行フ故ニ微子ハ他國ヘ去タソ其後ニ殷ハ亡タソ

一范增被罪　項羽ト范增ト諸卒ヲ用テ高祖ヲ榮陽ニ圍ム時陳平カ計ヲモツテ項羽ニ懇望シテ食物ヲ得ント云タレハ項羽ヨリ大牢ノ具ヲ遣サレタソ其時ニ僞テ肝ヲツフシ驚ク顏ヲシテ范增殿ヨリ給ヘルト思フタレハサテハ項羽ノ御使歟其ナラハ曾テ受ケマシキ由ヲ云テ返シタソ使者則項羽ニ具ニ樣子ヲ申シ上タホトニサテハ范增ハ高祖ト內通ノ義カ有ルト疑ハレタソ去程ニ范增大ニ怒テコレ程天下ノ一大事ノ時ニカクノ如ク思ル丶コトハ滅亡ノ義ハ大ニ定タソサラハ暇ヲ給ヒ候ヘト云タレハ項羽尤ト云テイトマヲ出サレタソ故ニイマタ彭城ト云所ヘ行ツカサル前ニ疽ト云腫物カ背ニ發シテ死シタソ

一流泉　盛衰記三十一曰抑流泉曲トハ都率內院ノ秘曲ナリ菩提樂トハ此樂也漢武帝ヘ仙ヲ求給シ時內院ノ聖衆天降テ泉底ニ隱居テ此ヲ聽聞セシカハ庭上ニ泉流テ滿タリシヨリ此曲ヲ流泉ト名タリ我朝ニハ延喜第四王子會坂ノ蟬丸天人ヨリ傳ラレタリシヲ博雅三位三年ノ程夜々ニ關屋ニ通ツ丶傳受シタリトソ

一啄木ト　此曲モ天人ノ樂也本名ハ解脫樂ト云此曲ヲ聞者ハ生死解脫ノ心アリトソ震旦ノ商山ニ仙人多ク集テ偷ニ此曲ヲ彈ケルニ山神蟲ニ變シテ木ヲ啄ヤウニモテナシテ此ヲ聞ヨリ啄木トハ申也

一梟ノ聲ケフトケニ　氣疎トカクナリ

一弄璋ノ御慶　毛詩第十一斯干篇ニ云乃生男子載寢之牀載衣之裳載弄之璋已上男子生スレハ床ノ上ニネサセテ置ソ尊敬ノ義ナリ衣裳ノカサリニスル璋ノ

タマヲモテアソヒ物ニソナヘ置クソ又女子生スレハ地ニ臥スルソ卑ム姿ナリ裼トテカタキヌホトノ踈相ナル物ヲ置キ又瓦ニテ作タル物ヲモテアソヒ道具ニオクソ此方ノ綿ヲツムヤウナル物ニテコソアルランソ毛詩云乃生女子載寢之地載衣之裼載拝之瓦ト云云

一桑ノ弓蓬矢　禮記第八內則云以桑弧蓬矢六射天地四方

一形見コソ　伊勢物語第百二十二ノ段ナリアタノタノ字ヲ濁テヨムヘシトソ

一玉樹三女序　三體詩云玉樹歌殘王氣終注陳後主作玉樹後庭花曲王氣終謂隋並陳南朝至此而滅也又秦淮詩曰商女不知亡國恨隔江猶唱後庭花注陳後主作玉樹後庭花之曲聞者泣下後爲隋所滅淵泉說云隋亡有伴侶曲陳亡有後庭花皆亡國音也云云又帝鑑圖說陳ノ後主ノ所ニアリ

一第一第二絃　白氏文集第三ニアリ又朗詠下卷管絃ノ所ニアリ

一嬰兒モ起　孝經序曰黃老之彈嬰兒起舞

一晉ノ平公濮水ノ邊　通鑑集覽六云昔殷紂使師延作靡々之樂武王伐紂師延將樂器投濮水而死後晉平公皷之師曠曰亡國之音也得此必於桑間濮上乎已上王仲宣登樓賦注曰韓子曰衛靈公泊濮水夜分而聞有鼓琴者云云異說歟

一貞敏　承和二年ニ勅ヲ蒙テ渡唐シテ廉承武ニ謁シテ秘曲ヲ傳タルハ玄象青山ノ二曲也トソ

一鄭聲雅ヲ破ル　禮記第十一卷樂記云魏文侯曰敢問溺音何從出也子夏對曰鄭音好濫淫志衛音趨數煩志皆淫於色而害於德是以祭禮弗用也注趨數音促速正義曰鄭衛之音即靡々之樂ト云ヘリ論語陽貨ニ惡鄭聲之亂雅樂也

一一唱三嘆　禮記ニ出タル辭ソ夫レヨリ諸文ニ用ルソ

一音與政通　禮記樂器云治世之音安以樂其政和亂世之音怨以怒其政乖亡國之音哀以思其民困聲音之道與政通矣

一寰中　都ヲサシテ云ソ祖庭事苑一云寰中猶寰內天子畿內也

一楚王ノ夫人　祖庭事苑第三云楚王夫人嘗夏乘涼抱鐵柱感孕後產一鐵楚王令干將鑄以爲劒三年乃成雙

劍一雌一雄干將密留雄以進雌於楚王々閟於匣中常聞悲鳴王問羣臣臣曰劍有雌雄鳴者憶雄耳王大怒即段干將殺之干將知其應乃以劍藏屋柱中因囑妻莫耶曰日出北戶南山其松々生於石劍在其中妻後生男眉間尺年十五問母曰父何在母乃述前事久思惟剖柱得劍日夜欲報楚王々亦慕覓其人宣言有得眉間尺者厚賞之尺遂逃俄有客曰子得非眉間尺耶曰然客曰吾甑山人也能爲子報父讎尺曰父昔無辜枉被荼毒君今惠念何所須耶客曰當得子頭並子劍尺乃與劍幷頭客得之進於楚王々大喜客曰願烹之王遂投於鼎客紿於王曰其首不爛王方臨視客於後以劍擬王頭墮鼎中於是二首相齧客恐尺不勝乃自刎以助之三頭相齧尋亦俱爛見孝子傳給音待欺也云云シカルニ此干將鏌耶ト云ニ付テ紛ルコトアリ人ノ名ト劍ノ名トカアル也所詮ハ干將鏌耶カ造タル二ノ劍ナレハ即チ劍ノ名トモスルナリ呉越春秋曰干將呉人也與歐冶子同師闔閭使造劍二枚一曰干將二曰鏌耶々々干將妻名干將作劍金鐵之精未肯流夫妻乃翦髮斷指投之鑪中金鐵乃濡遂以成劍陽曰干將而作龜文陰曰鏌耶而作漫理干將而匿其陽出其陰獻之出闔閭

一三寸ノ劍ノ鋒燕ノ國ニ留　此說イマタ見ス可尋

一或時天ニ一ツノ惡星出　此ハ諸文ノ中ニハ惡星トハナシ異氣トアリ常ニ紫色ノ氣カ起ルナリ

一張華　字ハ茂先ト云タソ彼紫氣ヲ見テ雷煥ヲ呼ヒヨセテ何ナル氣ソト尋タレハ寳劍ノ精上テ天ニ徹スルト答タソ夫ハ何クノ地ニ當ルソト尋タレハ豫章ノ豐城ニ當ルト答フサラハ堀ラセテ見ントテ雷煥ヲ豐城ノ宰主トシテ獄屋ノ墓ヲ堀タレハ地ニ入ルコト四丈餘ニシテ一ノ石凾ヲエタリ光焔常ニ達シテ雙ノ劍アリ一ニハ龍泉二ニハ太阿ト云銘アリ此則干將莫耶ノ二劍ナリ其中ヲ一劍ヲハ干將張華ニ送リ一劍ヲハ留テ自ラ佩タリ張華對雷煥云ハク送ル所ノ劍ノ文ハ干將也何ソ莫耶ハ至ラサルト云タレハ神異ノ寳物ハ一度ハ合フ物ソト云テ各別ニシテ置タソ後ニ張華モ誅セラレテ劍ノ在ル所ヲ人モシラス雷煥モ卒シタホトニ子ニ雷華ト云者ノカ親ノ劍ヲ持テ延平津ヲ通ル時ニ腰間ヨリ劍忽ニ躍リ出テ水ニ墮テ兩龍ト成テワタカマリ居タソ太平記ニハ少シ違ヘテ書タソ蒙求ト胡曾詩延平津ノ詩ニ詳ナルソ

一天子ノ御諱　尊治ト申セシナリ

一先スル時ハ人ヲ制　左傳ニ軍志有之先人有奪人之心後人有待其衰云云

一六韜十四變ニ　第六卷武鋒ノ所ニ武王曰十四變可得聞乎太公曰敵人新集可擊人馬未食可擊天時不順可擊地形未得可擊奔走可擊不戒可擊疲勞可擊將離士卒可擊涉長路可擊濟水可擊不暇可擊阻難狹路可擊亂行可擊心怖可擊　コレヲ十四變ト云也

太平記鈔第十四巻

一確執　口角切堅固也
一倒戈　尙書武成篇云前徒倒戈殷ノ紂王ノ前兵カ取テ返後衆ヘ向テ戰タホトニ造作ナク武王ハ軍ニ勝チ玉ヘルソ
一雞肋之貪心　肋ト勒トハ通スルナリ魯德反脇骨也雞肋ハ喫フコトモナラス又棄ルモ惜シヽサレトモ拾ヒテハ不叶ソ韻府ニ魏王討劉備不得進欲弃之發令云雞肋王脩曰雞肋棄之可惜喫之無所得王遂還山谷第十七ニ恐似曹瞞說雞肋ト云タモ此事ソ
一烏使　烏ノ字ハ誤ナリ鳧使ト云ヘシ魏ニハ走使ノ者ヲ鳧鴨ト云フ也迅速ノ義ヲ以テ云ソ又花鳥使ト云ハ別ノ事ナリ匂府ノ使ノ字ニ
一魚麗　陳ノ名ナリ桓公五年傳云爲魚麗之陳先偏後伍々承彌縫杜預曰司馬法車戰二十五乘爲偏以車居前以伍次之承偏之隙而彌縫闕漏也五人爲伍此蓋魚麗陳法
一窮鼠却嚙猫　此二句ハ葛公カ抱朴子ニアリトソ
一囊沙背水　韓信カシタルコト也末ニアル故ニ不記
一蠹害　杜ヲクラウ蟲ノコトソ
一趙高　秦ノ佞臣ソ李斯ヲ誅シテ乃趙高ヲ拜シテ中丞相トス萬事皆此臣ノ前ニテ決セリ章邯モ秦臣ナリ
一撥亂　毛詩曰撥亂之志注云猶治也故ニ貞觀政要ナトニテモ亂ヲヲサムトヨメリ
一從四位上　位ニ付テ行ト兼ト二ノ意ヲ知ルヘシ種々ノ異義カアルソ詮ハ拾芥抄ニ選叙令云凡任兩官以上者一爲正餘皆爲兼又云凡任內外文武官者而本位者高下者職事卑爲行高爲守又云官位相當之時先書官次書位官高位卑之時先書位注守字位高官卑之時先書位注行字
一徇天下　徇似閏反順也天下ヲ王化ニ順ハシメントノ義也
一經緯　天經地緯トツカフソタテヌキト讀ム也星ノ中ニテハ動クヲハ緯トシ不動ヲ經ト云ソ祖庭事苑第三文能經天武能緯地有武無文無以懷遠有文無武無以禦亂
一三五　夏禹ト殷湯ト周文ヲ三トサス五トハ五帝

ソ
一散木　不能ノ義ナリ材ニ成ラヌ木ヲ云ソ莊子ニ見タリ
一青雲　朝廷ヲ云ソ
一虎窺　易曰虎視眈々タリ
一乘鷸蚌之弊　法華文句九云鷸蚌相拒我乘其弊文春秋後語第三十卷云趙將伐燕蘇代爲燕說趙王曰臣從外來見水蚌出暴而鷸啄其肉蚌合而夾其喙鷸曰今日不雨明日不雨必見蚌脯蚌亦謂鷸曰今日不出明日不出必見死鷸兩者不捨漁父得之今趙伐燕燕趙相支以弊其衆臣恐强秦爲漁父也已上拒相持也弊者困也鷸ハ燕ニ似タリ鬱林ト云所ニ生スルトアリ知天將雨ナリ
一狼狽　韻會云狼狽屬生子欠一足二足相附而行離故猝遽謂之狼狽神異經云狽無前足附狼而行已上杜愚得第三云酉陽雜俎云狼狽是兩物狽前足絕短每行駕兩狼失狼則不能動故世事乖者稱狼狽
一浸潤之譖　論語六云子曰浸潤之譖膚受之愬不行焉可謂明也已矣
一愬　蘇故切訴ト同シ注鄭玄曰譖人之言如水之浸潤以漸成人之禍馬融曰膚受皮膚外語非其內實
一殿攻　軍ノ後ヘニアルヲ殿ト云
一參差　シンシトカタチカイトヨムソ毛詩一ニ參差荇菜云云
一柳營　前漢文帝ノ臣周亞夫將軍ト成テ居タル所ノ名ナリ史記第十索隱曰按三輔故事細柳在直城門外阿房宮西維已上此故事ヨリ起テ將軍ノ居所ノ名トスル也今ハ太塔宮ノ將軍ト成リ玉ヘルヲ鎌倉ヘ下シ玉ヘルヲ塞外ニ苦シムト云タソ祖庭事苑一云塞外塞隔也謂隔塞於他邦
一螳蜋忿　文選四十四注云善曰莊子蘧伯玉謂顏闔曰汝不知大螳蜋乎怒其臂以當車轍不知其不勝任也云云陸佃云有斧蟲ナリト或ハ拒斧トモ名ケタソ
一傳萬乘　天子ノ御事ヲサシテ云孟子ニ曰萬乘之國注云萬乘謂天子也
一武丁於桐宮　此言ハ誤ナリ武丁ハ殷第二十主ニシテ中興ノ明王ナリ故ニ高宗ト云タリ史記本紀曰帝太甲既立三年不明暴虐不遵湯法亂德於是伊尹放之於桐宮注孔安國曰湯葬地鄭玄曰地名也又尙書第四太甲篇モ同シ意ナリ

一囹圄　説文所以拘罪人也トアリ籠獄ノ事也廣韻ニハ周ノ獄名ト云タソ月令注疏曰圄止也所以止出入罪人於舍初學記ニハ囹領也圄禦也言コヽロハ籠獄ニ入リタル者ヲヨク錄シテ禁御シ出入ヲサセヌト云義ソ

一是可忍也　論語八佾篇ノ辭ナリ

一四維八柱　四維ハ四方ノ隅ヲ云ナリ八柱トハ楚詞曰八柱何當東南虧王逸注曰言天有八山爲柱也

一噬臍　左傳三卷莊公六年傳云若不早圖後君噬臍注若齧腹齊喩不可及云云後悔スルトモ叶マシキトソ

一付驥尾　史記列傳伯夷傳云顏淵雖篤學附驥尾而行益顯注索隱曰蒼蠅附驥尾而致千里云云山谷詩ニ氣陵千里蠅附驥ト云モ此事也

一控彈丸　弓ノ事ナリ殺籠鳥意ハ殺シ易キ義ソ魯氏ノ功ハ小シト云ハントソ

一勾萠　司馬相如カ大人賦曰使句芒將行注張揖曰東方青帝之佐ト云云

一昆吾劔　韻府ニ列子ニ西海上多昆吾石冶鐵作劔切玉如泥列子第五湯問篇云周穆王大征西戎西戎獻錕鋙之劔其劔長尺有咫練鋼赤刄用之切玉如泥焉注云昆吾龍劔也河圖曰瀛州多積石名昆吾可爲劔尸子云昆吾之劔可切玉

一獄訟　喜雨亭記云獄訟繁興而盜賊玆熾廣韻ニハ爭罪曰獄爭賊曰訟

一天慶承平　二ツトモニ朱雀院ノ年號ナリ將門誅セラルヽ時ノ例ナリ

一嘉承三年　堀河院年號也三ノ字誤レリ二年丁亥歲也八幡太郎義家ノ子對馬守義親ソ

一堀口美濃守貞滿　新田次郎義兼ノ曾孫次郎家貞ヲ堀口ト號ス此人ノ孫美濃守貞義子也大炊助ト云フ

一里見伊賀守　新田太郎義重第二男義俊々ノ子義成ヲ伊賀守ニ任ス里見冠者ト云フ當家ノ祖ナリ但シ今ハ此人ノコトナルラン未勘

一桃井遠江守　足利三郎兵衛義兼第四男近江守義胤ヲ桃井ト云此孫ニ胤氏ト云フ桃井ノ中興ナリ

一鳥山修理亮　里見伊賀守義成ノ第二子ハ伊賀藏人義繼ト云フ此第一男ハ大井田三郎氏繼ト云次男ハ大島修理亮時繼ト云フコレヨリ分レタル大島ノ祖

ナリ鳥山三郎時成ハ義繼ノ弟ナリ
一大島讃岐守　義政ト云フ建武ノ武者所ナリ時繼カ第四代ナリ
一一井兵部大輔ハ堀口家貞カ二男ナリ民部權大輔貞政ト云フ建武四年ニ越前金崎ニテ討タレタリ子息左將監政家モ父ト同時ニ討タル
一江田修理亮　得川四郎義季ノ孫江田三郎滿氏カ一族ナリ或ハ云義季ノ子世良田賴氏ノ孫ヲ兵部少輔行義ト云ナリ然ハ滿氏ノタメニハ甥ナリ
一細川陸奥守顯氏　新後拾拜新續古今等ノ作者也法號ハ勝園寺ト云フ賴春トハイトコナリ繫氏ハ顯氏ノ子ナリ
一仁木太郎賴章　是ヲハ丹波仁木ト云次郎四郎義長ハ伊勢仁木ト云ナリ
一今川修理亮　伊豆守貞世法名ハ了俊ト云名譽ノ人ノ弟ナリ後ニ蒲原ト云フ改名シテ直世ト云タリ
一畠山左京大夫國清　義康公第三男足利三郎兵衞義兼ノ一男足利太郎義純ヲ畠山ト號ス其子三郎泰國々ノ子時國々ノ子貞國々ノ子家國々ノ子也關東ノ執事ナリ法名道誓

一岩松禪師賴有　畠山義純ノ第三男時兼ヲ岩松藏人太郎ト云フ曾孫ニ賴圓禪師ト云アリ有ノ字ハ誤ナルヘシ
一佐竹左馬頭義敦　篤ノ字ナリ佐竹ハ新羅三郎義光ノ第一男進士判官義業ノ子昌義母ハ常陸國住人清幹カ女也故ニ所緣ヲ以常陸國ニ住ス此子隆義々ノ子秀義佐竹別當ニシテ美濃國山田郷地頭職始テ拜領ス此ヨリ第七代ノ孫ナリ舍弟義春ハ常陸介ト云フ
一香象　義楚六帖第十二卷云香象皆爲象名也如此方馬有多名也
一照射　トモシト讀ム
一陸沈　史記東方朔傳云陸沈於俗索隱曰司馬彪云謂無水而沈之
一綸言汗ノ如　周易渙卦曰九五渙汗其大號朱氏附錄曰號令當散如汗之出千毛百竅中迸散出來這箇物出不會反
一河伯　水神也抱朴子云河伯是華陰人以八月上庚日渡河溺死天帝補署爲河伯故今庚辰日不治舡渡河
一龍門三級　龍門河水所下之口在今絳州龍門縣龍門

水險不通魚鼈屬莫能上江海大魚集龍門下者數千不得上々即爲龍

一高櫓　集覽十三云高櫓城上白露屋名之曰櫓又戰陣高巢車亦謂之櫓

一天竺ノ石橋　竺ノ字ハ誤ナリ台ニ作ルヘシ方輿勝覽八卷云石橋在天台縣北五十里即五百應眞之境相傳在方廣寺有石梁架兩崖間龍形龜背廣不盈咫其上雙澗合流洩爲瀑布梁既峭危且多蘚苔甚滑下臨絶澗過者心悸石罅有木瓜華時有蛇盤糾至實落供大士乃去號爲護聖瓜

一蜀川繩橋　杜子美十云繩橋戰勝遲注唐志注唐興有羊灌田明笮繩橋三守捉城今指繩橋蓋三城之一非謂𣃁江以竹繩爲橋也又白氏文集第三ニモ見タリ

一筒井淨妙　三井寺ノ中衆ナリ淨妙實名ハ明春ト云フ一來ハ下法師ナリ其時ハ十七歲ニ成リタルソ普通ノ人ヨリモ長ヒキク勢チサケレトモ肝神ハ太キコト萬人ニモ勝タリ

一矢切ノ但馬　圓萬院ノ但馬明禪ト云フ者ナリ敵ノ射ル矢ヲ切リ落ス故ニ異名ニシタソ

一二間ノ御本尊　二間ノ供ハ仁壽殿ノ觀音供ノ事也是モ大師ノ奏聞ニ依テ承和元年ヨリ始也東寺ノ長者コレヲ勤ム其後永長元年正月ヨリ此供ヲ淸涼殿ニ置ルトソ二間ト云事ハ第九卷ニアリ玄象モ同前

一牧馬　盛衰記三十一云靑山ト云琵琶ノ造樣紫藤ノ槽ニ枝ノ腹花梨木ノ頭ニ同天首黃楊ノハシ首ニ同撥白心ノフクシユニ虎ノ皮ノ撥面落帶ナリ撥面ノ繪ニハ夏山ノ碧ノ空ニ有明ノ月出タル樣ヲ書タレハ靑山共名付タリ譬ハ撥面ニ牧ノ馬ト書タレハ彼琵琶ヲ牧馬ト云カ如ク也

一翠花ニ隨　ハタノ事也上林賦云建翠華之旗注向曰翠旗以翠羽飾旗善曰翠華以翠羽爲葆也

一劍閣　張孟陽劍閣銘云帷蜀之門作固作鎭是曰劍閣壁立千仞注言其峯如劍其勢如閣善曰酈元水經注曰小劍戍北去大劍三十里連山絶嶮飛閣相通故謂之劍閣也

一勅使川原　テシカハラト讀ム

一彼岸所　中方ノ衆集會シテ法談シ勸衆涅槃ノ岸ニ到ラシムル所ヲ云也坂本ニハ所々ニアリ

一波止土濃　末ニアル故ニ不注

太平記第十五卷

一三摩耶　般若理趣釋上云三摩耶者名爲本誓亦名時亦名期契亦爲曼荼羅之異名云云不空三藏ノ譯也

一智證大師　元亨釋書三云圓珍姓和氏讃州那珂郡人父宅成母佐氏弘法之姪也寛平四年十月二十九日逝延長五年十二月賜謚智證大師

一慈覺　圓仁姓壬生氏野之下州都賀郡人也昔祟神天皇第一皇子豊城入彦節察東壌其次子留爲郷人仁其胤也延暦十三年生焉貞觀六年正月十三日七十一歳逝矣同八年七月賜謚慈覺大師

一智證門徒三井寺ニ移　圓融院ノ御宇天元四年ノ事也

一敎待　釋書第十五卷ニモ不知何許人久居園城寺清水寺ノ行叡居士ト心友ニテ有ケルトソ彌勒菩薩ノ化身ト云也

一梵席　惣シテ天竺ヲ指テ梵ト云事ハ刧初ニ梵天ノ下テ言語等ノ事ヲ敎ヘ初メラル丶コト天竺ニテノ事ソト見タリ故ニ彼ヲ梵トハ云フ也サレ共梵ハ淨也ト字義ヲ注シテ世塵ヲ絕シテ清淨ノ方ヲ云ト意得ヘシ

一新羅明神　コ丶ニハ渡唐ノ時ノヤウニアリ元亨釋書云新羅明神者天安二年圓珍師泛船自唐歸洋中忽有老翁現船舷曰我是新羅國之神也誓護持師敎法至慈氏下生語已不見

一卓犖　漢書張東之有卓犖奇材注卓犖有材辨也或超絕也犖音力角反

一菩薩ノ大乘戒　南都法相宗ノ護命僧正等ハ戒ニハ全權實大小ノ不同ナシ聲聞戒ヲ受クルト云ヘトモ四弘誓願ヲ發シ無上佛果ヲ期スル是菩薩ノ大僧也云云傳敎大師ハ此事ヲ破シ玉フ顯戒論ヲ作テ圓宗戒アルヘキ旨ヲ奏聞ヲ經テ遂ニ戒壇ヲ立玉ヘリ是則法華實大乘ノ戒ナリ又ハ佛性常住金剛寶戒ト名ケ亦ハ中道第一義戒ト名ク一度受得スレハ盡未來際マテ失スルコトナシ故ニ一得永不失ノ戒ト名ルナリ其戒相ノ所詮ハ一心三觀ノ妙理ナリ故ニ一心三觀傳於一言菩薩圓戒授於始心ト云云此ニモ又一言口決ト云事アリ止觀四云中道妙觀戒之正體上品清淨究竟持戒云云聲聞小乘戒ト云ハ常ニ云所ノ五戒八戒ヲサスソ但シ是等ノ義ニ付テ多ノ仔細アリ

筆ヲ勞サス

一三摩耶戒　三昧耶トモ云フ也禪定ノ事也散亂ノ心地ヲ除テ寂靜ノ意地ニ住スルヲ云フサレトモ一邊ニカクノ如クニテハ無之顯密ノ二教ノ意共ニ一度ヒ受戒受得シヌレハ必ス身口意ノ三業カ無上佛果ノ極理ニ相應シテ起ツモ居ルモ動クモ悉ク禪定三昧ノ境界ヲ離レヌ道理ナルヲ大乘ノ三摩耶戒ト云フナリ是ヲ三密瑜伽トモ云ソ瑜伽トハ相應ト云事ナリ

一三井寺ノ明尊僧正　圓滿院ノ法務ナリ後一條院長元六年冬僧正ニ成ラレタソ

一彼寺ノ本主　此ヨリ下ハ皆三井ハ山門ノ末寺ト云處ノ文證支證ヲ出タソ

一只可任冥慮トテ自告文ヲ被遊　後朱雀院長暦三年八月ニ御宸筆ノ祭文ヲアソハシテ三井ノ貫主教圓ニ登山ヲ進メ七箇日ノ御祈誓アリ教圓ハ長元七年ニ阿闍梨ニ成ラレタリ此官ハ教圓ヨリ始タソ其詞ニ云クトハ帝告文ノ詞ソ廣文ハ盛衰記第十卷ニ見タリ

一赤山大明神　セキサントヨムナリ赤山大明神ト申ハ慈覺大師渡唐ノ時清涼山ノ引聲ノ念佛ヲ傳玉ヒシニ此念佛ヲ守護ノタメトテ大師ニ芳契ヲ成シ玉ヒ忽ニ異朝ノ雲ヲ出テ正ニ叡山ノ月ニ住玉フサレハ大師歸朝ノ時ニ惡風ニ遭テ其船アヤウカリケレハ本山ノ三寶ヲ念シ給ケルニ不動毗沙門ハ艫舳ニ現シ玉ヘリ此明神ハ又赤衣ニ白羽ノ矢負ツヽ船ノ上ニ現シ玉ヒツヽ大師ヲ守護シケリ山王ハ東ノ麓ヲ守玉ヘ我ハ西ノフモトニ侍ラン閑ナル所ヲ好ム也トソ仰ラレケル赤山トハ震旦ノ山ノ名ナリ彼山ニ住神ナレハ赤山明神ト申ニヤ本地虚空藏菩薩ナリ是ハ盛衰記ニ載タル分ナリ

一御藏　ヲンカクレ但日本紀ニハ死ノ字ヲヨミタリ藏ハアテ字ナルヘシ頼豪カ怨靈ヲ宥ントテ近江國野洲栗太兩郡ニ六十町ノ田代ヲ實相坊領ニ寄附セラル智證ノ門徒一乘寺三室戸ナト云貴僧ニ仰テ御祈禱隙ナカリケレトモ遂ニ承暦元年八月六日御歳四歳ニテ隱レサセ給ニケリ敦文親王トハ此皇ノ御事也

一座主良信　其時ハイマタ圓融坊ノ大僧都ニテ類イナキ貴人也

一始承暦年中　白河院ノ年號也五年ハ永保元年ナリ此年ニ三井ヲ燒カレタリ文保元年花園院ノ年號也都合二百三十九年アリ

一芋洗　一口トカクトソ

一聖女　山門ノ慶圓大僧正ハ姓ハ藤氏播州ノ大守尹文ノ子ナリ初ハ淨土寺ノ別當ニテ常ニ稻荷ノ社ヘ詣リ法味ヲ手向玉ヒシニ後ニハ叡山ニ登テ三昧ノ喜慶ト云人ニツカヘテ密教ヲ傳受シケリ境遙ナルニ依テ參詣シ給ハス或時稻荷ヘ參リ給ヒタリシ時御託宣ニ曰君日比ハ近憐テ常ニ甚深ノ法味ヲ捧玉ヒシニ今ハ遙ナル故ニ一乘ノ法水タエテ三熱ノ苦堪カタシト仰ラレケレハ涙ヲ流シ法施ヲ奉ントテ坂本ニ勸請シ給フ此ヲ聖女御前ト云ナリ

一大館左馬助　新田次郎義兼ノ曾孫家氏初テ大館次郎ト云其孫ニ又二郎宗氏カタメニハ子氏明ト云也

一軍起不意　六韜ノ意モ不意トハ敵ノ意カケヌ所ヲナスヲ軍ノ肝要トス

一源中納言顯家　北畠准后入道親房卿第一男ナリ鎭守府將軍ニ任

一細川卿律師定禪　八郎四郎頼貞ノ第三男若宮別當宮內卿權少輔律師定禪ナリ顯氏ノ舍弟繁氏ノタメニハ叔父也

一卒都婆ヲ立ルモ橋ヲ渡スモ功德ハ同シ　世話ニ勢至菩薩ハ堂ヲコホチテ橋ニカケヨト仰ラレシト云云一代經ノ中ニカクノ如キノ事ハ見ス但シ陀羅尼雜集經第三卷ニ大勢至ノ四願ノ中ノ第二ニ於沒溺處設大橋船運度衆生無有疲厭ト說レタリ此等ヲ證據トヤ申スヘキ啓字函ニ入ル

一烏獲　文選ニ云烏獲扛鼎注曰烏獲秦之壯士扛舉也楊子曰烏獲任鄙扛鼎拚牛ト大力ノ者ナリ

一樊噲　排韻云樊噲沛人以屠狗爲事從沛公見羽鴻門羽曰壯士

一和泉小次郎　和田ト同心シテ謀叛ヲス六孫王經基王ノ第四男下野守滿快第五代林源太公扶カヒマコ泉次郎公衡カ子親衡カ事也建暦ノ隱謀專一追討ノ時行方シラス大力ノ譽アリ

一淺井那　三郎義秀ト云ナリ父ハ和田左衛門母ハ友繪ナリ木曾討死ノ後ニ和田ニ嫁シテ生メリ

一八相成道　何レノ佛モ此界ヘ出玉フ時ニハ必八相ト云コトアリ一ニハ生天都率天ヘ生テ下界ノ樣子

ヲヨク鑒玉フヲ云二ニハ下天詫胎三ニハ出胎四ニハ出家五ニハ降魔六ニハ成道七ニハ轉法輪八ニハ入滅也

一阿逸多　祖庭事苑五云此云無能勝彌勒姓也

一鼂鐘　詩學大成二十五云鼂氏作鐘周禮考工記ニ出タリ

一俵藤太秀郷　盛衰記ニ鎭守府將軍從四位下號俵藤太大織冠鎌足公十八世孫也四條家ノ餘流也任下野守西行法師ハ此第九代ノ人ナリ

一善盡美盡　論語ノ辭ソ

一百足　ムカデト云ヒ傳タリ蜈蚣ノ字ヲヨムナリ十誦律云無足者千頭羅蟲也多足者蜈蚣也百足者蛣蜣也本草注云百足蟲甚多トアリ馬蚿百足蟲ト云フ時蚿ハムカデ也然レハ百足ヲモムカデト可讀

一九牛カ一毛　文選四十一卷伏法受誅若九牛亡一毛些少ノコトヲ云也

一梅酸ノ渴ヲソ止　祖庭事苑五云梅林止渴魏武帝與軍士失道大渴而無水遂令曰前有梅林結子甘酸可以止渴士卒聞之口中水出遂得及前源

一瑕瑾　玉ノキズヲ云ソ人ノ耻ヲモコレニ比シタソ

一旅ヲ屯ス　軍ノ五百人ヲ旅ト云ナリ

一五刑　尙書呂刑篇注云刻其顙而涅之曰墨截鼻曰劓刖足曰剕宮淫刑男子割勢婦人幽閉次死之刑大辟死刑也云云額ヲキサミテスミヲイル丶ヲ墨ト云ヒ鼻ヲソクヲ劓ト云フ足ノスチヲタツヲ剕ト云男ハ勢ヲサキ女ハ根門ヲヌイスフルヲ宮ト云フ大辟ハ死刑ノ事ソ是ハ大方ソ細ニ分テ云ヘハ墨ノタクヒニ一千ト劓ニ一千ト剕ニ五百ト宮ニ三百ト大辟ニ二百トノ品々カアルソ是ヲ五刑之屬三千トハ云タソ

一被養深窓ニアリ　長恨歌ニアリ貴妃カ少キ時ノ事ソ

一巫山ノ神女雲ト成シ夢　楚ノ襄王ト屈原カ弟子ノ宋玉ト雲夢臺ニ游テ高唐ト云所ヲ望ミ見テアレハ雲氣カアツテ須臾ノ間ニ無窮ニ變化セシ故ニ王ノ宋玉ニ對シテ此ノ變化シテ見ユルハ何ノ氣ソト尋玉ヒケレハ對テ云フヤウハ是ハ朝雲ト云モノ也ト云タソ又王曰ク朝雲トハ何ヲカ云フト王カ曰ク昔先王ニ懷王ト申セシカ彼高唐ニ游ヒ玉ヒシ時少シマトロミ玉フ中ニ夢ニ一リノ婦人ヲ見ルニ貴所ハ誰レソト尋タレハ妾ハ巫山ノ女也ト申シタソ王曰

ク願クハ枕席ヲ進メヨトテ親昵ヲ求ントシ玉フ妾ハ辭シ去ルトテ申シヤウハ妾在巫山之陽高丘之岨旦爲朝雲暮爲行雨朝々暮々陽臺之下ト云タソ故ニ重テコレヲ覩ルニ言タル如クナリシ故ニ廟ヲ立テ朝雲ト名ケタリト楚襄王此事ヲ聽テサラハ此事ヲ賦セヨト仰ラレタル故宋玉カ高唐賦ヲ書タソ出文選十九卷已上漁隱叢話第五十卷ニ云漫叟詩話云高唐事乃楚懷王非襄王也トアリ勿論文選ニモ左ヤウニ見ヘタソ

一太眞院ハ　貴妃ヲ方士カ尋ニ行テアレハ此額カ門ニアルヲ見テサテハ此内ニ貴妃カアルラント思タ所ソ太眞ハ貴妃ノ名也玄宗ノ女官ニシテツカハント仰ラル時ノ名ナリ

一アテヤカニ﨟タシト　多意アリト第一ニハ上﨟ヒレタコトソ又イタワルノ義モアルトソ

一露ノカコト　カコツケノ心モアリ又契ノ義モアルトソ

一千束ニ餘ルホト也

錦木ハ千束ニ成ヌ今コソハ人ニシラレヌネヤノウチ見メ

一母ナン藤原ナリケレハ　伊勢物語ニ

太平記鈔第十六卷

一轍魚ノ泥ニ吻　轍ハ車ノワタチ也車ノメクル跡ノ小水ニ住メル魚ヲ云
一醒蒼　アヲサメニ物スコキ體也
一宗像　神名帳云筑前國宗像郡宗像神社三座是也云云或ハ胷肩トモ書也田心姫ナリ
一非想非々想天　色界ノ十八天ノ最上ノ天ノ名也大方外道モ此天ヲ至極ト思フナリ
一蚍蜉ノ大樹ヲ動　韓退之カ詩ニ蚍蜉撼大樹トアリ爾雅釋蟲郭璞注ニ俗呼爲馬蚍蜉トアリ同キ疏ニハ蟷通名也其大者別名蚍蜉トアリ朝ニ生シテ暮ニ死スル小蟲也爾雅ニモシカアルソ
一杉山ノ合戰ニハ僅ニ七騎　土肥次郎實平同男遠平新開次郎忠氏土屋三郎宗遠岡崎四郎義實藤九郎盛長也佐兵衛頼朝上下七人ナリ
一歌舒翰與安祿山兵崔乾祐潼關ニテ戰　此戰ノ事ハ資治通鑑第四十五卷ニノセタソ石人ノ戰タルコト未考重テ尋ヘシ歌舒翰ハ祿山ト中カ惡ルノ人ナリ玄宗ノ色々ニオ覺アツテ和睦セシメタレトモ底心ハトケヌソ春秋ヲ讀テ大義ヲ知タ人ソ戰ニ出ルコトニ半段ノ槍ヲ持テ向所ヲ披キナヒタケソ
一君カ代ハ二萬ノ里人　周防ノ内侍カ讀タリシ云云
一王事無盬　毛詩第九卷四牡篇ノ語ソ盬ハ注ニ不堅固也トアリ意ハ公義ト云コトハ大事ノ物ナルヲ輕ク思ハ曲コトソ鄭玄カ注ニモ君子不以私害公不以家事辭王事トアルソ
一趙王カ秦ノ兵ニ四　趙ノ王名ハ遷ト云ソ秦始皇十九年ニ王翦ト云臣ヲ使ハシテ趙ノ地ニ東陽ト云所ニテ趙王ヲ虜ニシタソ趙ノ公子ニ嘉ト云人カ又自立シテ王ト成ラレタルヲ始皇二十五年ニ又王賁ト云者ヲ使ハシテ趙王嘉ヲ虜ニシテ此年ニ趙ハ滅ヒタソ項羽カ釜甑ヲ燒キ捨タル事ハ末ニ注スヘキソ甑ハコシキト云物ソ
一天下ノ成功只此一擧ニ有　項羽カ楚ノ宋義ヲ殺サントセシ時ニ國家安危在此一擧ト云ハレタソ此語ヲ取タソ
一函蓋相應　ハコトフタト能相應スルトソ大智度論ニ出タ語ソ
一圓通大士　觀音ノ事ナリ

一吉備津ノ宮　備前備中備後ノ三國トモニアリ
一師子子ヲ産テ石壁ヨリ擲ル　此本說未撿
一養由カ矢サキ　淮南子云養由基楚人楚將善射去楊葉百歩射之百發百中云云紀信カ忠ノ事ハ前ニモアリ
一百里奚孟明視ニ向テ今ヲ限リ別ヲ悲　秦本紀曰發兵使百里傒子孟明視蹇叔子西乞術及白乙丙將兵行日百里傒蹇叔二人哭之繆公聞怒曰孤發兵而子沮哭吾軍何也二老曰臣非敢沮君軍々行臣子與往臣老遲還恐不相見故哭耳二老退謂其子曰汝軍即敗必於殽阨矣云云此事ヲフマヘテ云ヘルナルヘシ
一前聖後聖　孟子ノ語ソ
一衆愚之愕々不如　愕ノ字ハ此所ニハ親シカラス諤ノ字ヨシ韻會ニ諤々直言也トアリ言ヲ巧ニセスシテアリ體ヲ直ニ言フ義也或又鄂ノ字ニモ作レリ晉ノ趙簡子ニ臣アリ名ヲ周舍ト云フ直諫ヲ好ミテ每ニ浮言ヲ嫌ヘリ此人死シテ後ニ餘ノ臣下共ノ言ヘル事カ少シモ簡子カ機ニ入ラス諸臣迷惑シテ云ヤウハ吾等ニ何ノ惡シキ義ノ候ヘハ御意ニ入ラヌソト申シタレハ簡子ノ曰ク其方タチニ別ニ罪ハナケレトモ吾カ云フ事ヲ最ト計云テ別ノ異見ヲセヌ程ニ主君ノタメニ所用ナキ者チヤト云タ其時ノ語ニ諸大夫朝徒聞唯々不聞周舍之愕々是以憂也トアリ唯々トハ應辭也ト云テマツ左樣ナト云意ナリ周舍カ簡子ニ剛異見ヲシタル事ヲ韓詩外傳曰周舍立於門下三日三夜簡子使問之曰子欲見寡人何事對曰願爲愕々之臣墨筆操牘從君之過而日有記月有成歲有效也云云史記ノ趙世家ニ見タリ家語中云湯武以諤々而昌桀紂以唯々而亡云云
一暴虎憑河　論語ノ述而篇云暴虎憑河死而無悔者吾不與也孔安國曰暴虎徒搏憑河徒渉云云空手ニシテ執ルヲ徒搏ト云フト郭璞ハ注セリ又舟楫ナラスシテ只渉ルヲ徒渉ト云トアリ憑ハ音平トアレトモヘイノ音ニハヨマヌナリ毛詩傳ニハ馮ハ陵也ト注セリ河ヲシノクト云義ニテ馮河トハ云ナリ
一赤壁ノ戰　赤壁ト云所ハ愕州ト黃州ト二所ニアルソ今ハ愕州ニアルヲ云タソ資治通鑑第十三ニハ江漢ノ間ニ五ツ所ニアルト載タソ夫モ入サル事也後漢ノ獻帝建安十三ノ十月ニ呉ノ孫權ノ臣周瑜ト云者カ魏ノ曹操ト赤壁ニテ戰フ時ニ江ヲヘタテ曹公

ハ江北ニ陣ヲトリ瑜ハ南岸ニ居テ日々ニ戰タソ瑜カ陣中ニ黄蓋ト云フ者カ云ク敵ハ多人衆ナリ此方ハ少勢ナリ久對軍ハ成シカタシ曹カ軍ハ船ヲ連ネテ相接シテ居ルホトニ燒拂タラハ然ルヘシト云タレハ瑜モ同心ヲシタソサラハ先ツ降參セント云フ僞ノ書ヲ遣シタレハ曹公實ト思テイラレタソ其時船ニ薪ヲ積油ヲソヽイテ其上ニ帷幔ヲハリ旗ヲタテ行タレハ曹公カ軍士ハ皆頭ヲノヘテ見物シテ黄蓋カ降人ニ成テ來ルソトテ喜タルヲ船ヲ近クヨセテ一同ニ火ヲカケテ東南ノ大風ニ任セテ吹付テ樣モナク敵ノ兵船ヲ燒拂テ岸上ノ陣屋マテ燒ケテ人馬共ニ大半燒ケ又溺レテ死シタルソ曹公モタマリ得スシテ南郡ヘ敗北セラレタリ又胡曾詩下卷ニモ具ニアリ

一大元宋朝ヲ滅　末ニ至テ在之

一大敵ヲ見テハ欺キ　資治通鑑八云劉秀自將歩騎千餘爲前鋒去大軍四五里而陣尋邑亦遣兵數千合戰秀犇之斬首數十級諸將喜曰劉將軍平生見小敵怯今見大敵勇甚可怪也且復居前請助將軍秀復進尋邑兵却諸部共乘之斬首數百千級云云世宗ト云タルハ後漢ノ太祖ト云意ナルヘシ

一智仁勇ノ三ノ德　中庸曰智仁勇三者天下之達德也注三者之外更別無誠トアリ

一捷疾鬼　亦ハ速疾鬼トモ云ナリ

一上ヲ犯ント好　論語云孝悌而好犯上者鮮矣不好犯上而好作亂者未之有也云云

一二儀已分　天地ノ二ヲ云ナリ三才トハ天地人ノ三ナリ

一塵々刹土　塵々トハ多キ貌チナリ刹土トハ淨刹ノ土ト云事ヲ略シテ云ナリ華嚴經ニ出タリ

一迹高本下　コレニ付テ佛家ト神道トノ義各別ナリ神道ヨリハ神ハ本地佛ハ垂迹ト取ルナリサレトモ佛ノ垂迹ノ方ハ威儀堂々ノ高上ノ姿ヲ顯シ神ハ和光同塵シテ下劣ノ體ヲ示スホトニ迹高本下ト云ナリ佛家ニハ佛ハ本地神ハ垂迹ト云フ故ニ法華經ニモ諸佛救世者住於大神通爲悅衆生故現無量神力ト說レタリ佛ノ高上ノ內證ヨリ神ト垂迹示現スルヲ本高迹下トハ取ルナリ惣シテ此辭ハ天台ノ淨名䟽ヨリ出タリ廣ナル事ナレハ筆墨ヲ煩クセス

一神日本磐余彥天皇　カミヤマトイハアレヒコノス

メラミコト神武天皇ノ御事ナリ鸕鷀草葺不合尊ノ第四ノ子母ハ玉依姫ナリ然ルニ今コヽニ天平四年トコトハ大ナル誤也是レハ聖武帝ノ年號也神武天皇ノ時ナトニハ年號ノコトハ中々ニ沙汰モナシサテ日本紀ニハ己未年春二月壬辰朔辛亥ニ命諸將練士卒トアリ神武ハ辛酉ニ即位アリ已未ノ歳ハ即位ノ二年前ニアタレリ壬辰ノ朔ニシテ辛亥ノ日ナレハ二十日ニアタルソ日本紀云是時層富縣波哆丘岬有新城戸畔者又和珥坂下有居勢祝者臍見長柄丘岬有猪祝者此三處土蜘蛛並恃其勇不肯來庭天皇乃分遣偏師皆誅之云云

層富縣波哆丘岬ハソフノコホリハタノヲカサキトヨム所ノ名ナリ　新城戸畔トハニヨキノトヘトヨムナリ人ノ名ト聞タリ　和珥坂下ハワニサカモトトヨムナリ是モ所ノ名ナリ居勢祝ハフセハウリトヨムナリ人ノ名ナリ　臍見長柄丘岬ハホソミノナカラノヲカサキトヨム所ノ名也　猪祝ハヰハウリトヨム人ノ名ナリ今名草ノ群ト云フコト不審ナリ神武紀ニハ名草ノ軍サハ別ノ事ニシテ土蜘蛛ノコトニハ非ス又云又高尾張邑有土蜘蛛其人也身短而手足長與侏儒相類皇軍結葛網而掩襲殺之因改號其邑曰葛城云云高尾張邑ハタカヲハリノムラトヨムナリ此ニハ土蜘蛛トハ云ヘトモ其人ト云ナレハ前ノ土蜘蛛ト云タモ實ニハ人ニテモアルランソ去レトモ網ヲ結テ殺シタト云ヘハ又蜘蛛ニテモアルランソ又太平記ニハ鐵ノ網ト云タルモ紀ニハ葛網トアルソ土蜘蛛ノ事神武紀ニアリ

一藤原千方　日本紀ニ見ヘス但或系圖ヲ見レハ秀郷ノ子千常カ弟トアリ慥ニシラス

一承平五年將門　上總介高望ノ孫前將軍平良持カ子ナリ桓武四代ノ苗裔也トソ執政ノ家ニ事マツリケルニ使宣旨ヲ望申ケリ不許ニ依テ憤ヲナシ東國ニ下向シテ叛逆ヲ與シテ先ツ伯父常陸國ノ大掾國香ヲ攻シカハ國香ハ自殺シヌ是ヨリ坂東ヲ推シ下總國相馬郡ニ居所ヲトシテ都ト名自ラモ平親王ト稱シ官爵ヲ成シ與ヘケリ天下騷動ニ依テ參議民部卿兼右衛門督藤原忠文朝臣ヲ征東大將軍トシ清和帝源經基六孫王ト號ス忠文ノ弟藤原仲舒トヲ副將軍トメ差遣サル國香子平貞盛ト藤原秀郷等心ヲ一ニメ將門ヲ滅シテ其首ヲ奉リシカハ諸將ハ道ヨリ還

リキ天慶三年二月十四日ニ伏誅ト元釋亨書ニアリ

一鐵四天ヲ鑄比叡山ニ安置　八坂寺ノ淨藏ハ横川ニ大威德ノ法ヲ行ハレテ將門ヲ降伏セラタレハ正ク將門ハ弓矢ヲ帶シ燈焰ノ上ニ立チ顯タルヲ伴僧トモ悉見タソ暫クシテ流鏑ノ聲アツテ東ヲ指テ去タソ奇特ノ事ナリ其後ニ將門京ヘ上ルト云テ擾動シタルヲ淨藏ノ云ハレ樣ニハ一身ニテハ有マシ只頭ハカリナルヘシト云タレハ案ノ如ク首ヲ持チ來ルソ又明達ト云フ僧ニ仰セ付ラレテ美州ノ中山ノ神宮寺ニテ降伏ノ法ヲ修セシメラレタソ一度ニ奇特カ有ケルナリ

一大石山丸　此ハ不知也大山王子ハ應神帝ノ第二ノ子ナリ

一大友眞鳥　天智ノ御子ナリ

一守屋　弓削ノ姓ナリ聖德太子ニ逆叛シテ遂ニ誅セラル

一蘇我入鹿　蘇我馬子カ孫蝦夷大臣カ子ナリ朝權ヲ專ニシテ皇家ヲ侮ル心アリテ其家ヲ宮門ト云ヒ諸子ヲ王子ナント云ヘリ上古ヨリノ國記重寶ハ皆私ノ家ニ運ヒ置ケリ中ニモ入鹿悖逆ノ心甚シ聖德太子ノ御子タチノ科モナク御子タチヲモ悉亡シ奉ル爰ニ皇子中ノ山背大兄ト申ハ舒明ノ御子ナリケルカ中臣鎌足連ト云人ト心ヲ一ニシテ入鹿ヲ殺シテ父蝦夷モ家ニ火ヲ付テ燒失ス國記重寶ハ此時ニ悉失ニケリ

一豐浦　コレハ蝦夷カ事也ト盛衰記ニ書ケリ

一山田石川大臣　是モ蘇我ヲ姓トセリ持統天皇ノ御母ヲハ遠智娘ト申シタソ則其父ニテヲハシケルソ入鹿カ誅セラルヽ時ハ大兄皇子ト心ヲ通シ申シケレハ遁テ滅ヒサリケリト

一長屋大臣豐成　天武帝ノ孫高市皇子ノ御子ナリ左大臣正二位天平元年二月十四日ニ謀叛ノ讒言ニ依テ聖武天皇ニ誅セラレテ自殺ス

一伊豫親王　光仁帝ノ孫早良親王ノ御子ナリ坐セラル事アリテ河原寺ニテ餓死シ玉ヘリ盛衰記ニハ平城帝ニ討ルトアリ又桓武ノ御子ニモ同名カアルソ夫ニテハ無キソ大同二年十一月中務卿伊豫親王謀叛ノ事聞ヘ御母共ニ死寺ニ入ラレ玉ヒシカ自食毒失玉ヒヌト云云御靈八所ノ其一也

一氷上川繼　延暦元年ニ謀叛ス

一橘逸勢　淳和御孫恒貞親王ノ子也承和元年ニ謀叛ニ依廢セラレタリ御靈ノ一ナリ

一文屋宮田丸　淡海公不比等ニ四人ノ子ヲワシキ是ヲ四門ト云一門ハ武智丸ノ流南家ト云二門ハ參議中衛大將房前ノ流北家ト云今ノ執政大臣及藤原ノ人々ハ皆此末ナルヘシ三門ハ式部卿宇合ノ流レ式家ト云四門ハ左京大夫麻呂ノ流京家ト云ソ然ルニ此文屋ノ宮田丸ハ宇合第一ノ子也御靈八所ノ其一也大宰少貳廣繼モ兄弟ナリトソ

一江美押勝　稱德帝ノ時ニ藤原仲麻呂ト云人オハシキ武智丸ノ第二子ナリト寵臣ニテ我一人ト世ヲ押ヘ行テ是ニ勝者ナカリケレハ御門是ヲ押勝ト付セラレタリ官ハ大師ニ至レリシカハスソロニ笑シク思召トテ藤原ニ二字ヲ加テ惠美ノ姓ヲ玉ヒキ後ニ道鏡ヲ寵幸アルニ依押勝恐ヲ成シテ廢帝ヲ勸メ申シテ上皇后ヲ傾ントセシ事顯テ天平神護元年ニ誅セントス押勝ハ近州高島郡ヘ逃走ルヲ涼大將軍向テ竹生島ノ神ニ誓テ曰ク普天ノ下王土ニアラスト云事ナシ今名山大川モ皆神アリテ王國ヲ守護シ玉ヘリ島神若靈異アラハ此度ニ皇威ヲ助玉ヘト祈リタレハ俄ニ東風吹來テ惠美カ舟ヲ高島ノ濱ヘ着テ逐ニ誅セラレタリ

一井上皇后　聖武ノ御女ナリ光仁ノ御子他戶太子ヲ養子ニシテ故アリテ禁籠セラル逐ニ獄中ニテ死セリ他戶太子ハ寶龜二年ニ立太子同三年ニ彼事ニ値テ廢セラレタリ

一早良太子　コレモ光仁ノ御子ナリ神護景雲二年ニ東大寺等定大僧都ヲ請シテ師トシ事ヘ出家入道シ玉ヘリ十一年後ニ彼寺ニ移リ住セリ然ルニ此太子ト中納言藤原種繼ト初ヨリ遺恨ノ事アリシニ延暦四年八月ニ桓武帝伊勢ノ齋宮ニ幸キシ玉フ故ニ種繼ヲ召シテ守宮ニ置キ給ヘルヲ太子ノ計トシテ人ヲ頼ミ種繼ノ燈燭ノ下ニ居ラレタリシヲ射殺サセ玉ヘリ此事顯十月ニ太子ヲ廢拭セントテ淡路國ヘ配流セリ太子海上ニテ火醬ノ具ヲ斷シテ途中ニテ薨シ玉ヘリ其靈祟頻リニアリケレハ同十九年七月ニ追號シテ崇道天皇トソ申シケリ是則御靈八所ノ其一ナリ

一大友皇子　本名ハ伊賀ト申タリトソ天智帝ノ御子ナリ天智十年正月五日ニ太政大臣ニ任ス本朝ノ此

官ハ是ヨリ始ルト也同十二月三日帝崩ノ後ニ天武ノイマダ皇太子タリシヲ閣テ帝位ニ即キ玉フ天武元年七月謀叛ニ依テ誅セラレ玉ヘリ

一藤原仲成　平城天皇此平安城ニ御座シ天下ヲ治玉フコト四年アリテ御位ヲ大弟ニユヅリ大上皇ト申シ平城ノ舊都ニ還リ住給ヒケリ時ニ尙侍藤原ノ藥子ヲ寵幸シマシケル其弟參議右衞門督仲成等帝ヲ申勸メテ逆亂ノ事アリコレニ依テ田村丸ヲ大將トシテ追討アリシニ平城ノ軍破レテ上皇ハ出家セサセ給ヒ御子春宮高岳親王モ捨ラレテ同出家シ弘法ノ弟子ニ成リテ眞如親王ト申ハ是ナリ貞觀四年ニ入唐アルトテ道ニテ失セ玉ヒヌ斯ル事アルニ依テ藥子モ仲成等ハ誅セラレタリ

一天慶純友　天慶ハ朱雀院ノ年號ソ藤原純友ハ伊豫掾ニ任ス彼將門ニ同意シテ西國ニテ謀叛セラレケレハ少將小野ノ好古ヲ遣シテ追討アリ周防伊豫西國ノ軍アリ誅ス此時モ彼明達ニ勅シテ住吉神宮寺ニテ降伏ノ法ヲ修セラレケリ此法驗ニヤ．

一康和ノ義親　堀河院ノ年號也鎭守府將軍八幡太郞義家ノ子對馬守義親康和二年ニ勅宣ニ違背スル故ニ同三年ニ出雲國ヘ配流セラル永久元年十二月ニ流人對治ノタメニ因幡守平正盛以下宣旨ニ依テ彼國ニ下向シテ追討ス天仁元年ニ義親首幷ニ郞從四人首上洛ス

一宇治惡左府　賴長ト云知足院ノ入道前關白ノ次男ナリ保元ノ亂ノ張本也

一六條判官爲義　義親ノ子ナリ伊豫介義春ノ弟也父滅亡ノ後幼稚孤露也

一惡右衞門督信賴　關白道隆公八代孫ナリ平治ノ亂ヲ起セル人也

一安倍貞任　陸奧ノ住人安大夫安倍賴良カ子厨河次郞大夫貞任ト云フ者ナリ後冷泉院ノ御宇永承五年ニ詔シテ伊豫入道源賴義コレヲ討ツナリ

一宗任　貞任カ舍弟ナリ富海三郞ト云ヒキ是モ同御宇天喜五年ニ賴義ノ討タリトソ

一淸原家衡　是モ同國北山ノ住人將軍三郞淸原武衡ト云タ人ソ八幡太郞源義家ニ討レタソ淸盛義仲ノ事ヲハ記サス

一阿佐原八郞　甲斐國住人小笠原一族ニ源爲賴ト云者也所領ナントモ得替シテ强弓大力也ケレハ諸國

ニテ悪黨狼籍ヲ致ス何クニテモ見合ハン所ニテ可誅ヨシ諸國ヘ觸ラル叶カタキニ依テ如何ナル企ニヤ有ケン伏見院ノ御時内裏ヘ參テ夜半ニ紫宸殿ニ籠リケリ近キアタリノ武士等責ケレハ父子腹ヲ切畢ヌ其時射出シタリケル矢驗ニ太政大臣源爲頼ト書タリケリ不思議ノ企哉ト覺ユ三條宰相中將實盛同意ノ由聞ヘテ六波羅ニ召渡セサセ畢ヌ

太平記鈔第十七巻

一山王大師　今ハ山王ト大師ト二ツニ分テヨムヘシ一人ノヤウニ思フヘカラズ

一武七書言　三略上略ノ語ナリ

一三止三觀　三止トハ止息止停止々不止々ノ三ヲ云フ貫穿觀々達觀不觀々ノ三ヲ云ナリ此ノ義理ハ天台ノ學道ニ眼ヲサラサネバ明ニ知ルコト難シ故ニ今ハ筆墨ヲ費サズ具ニハ止觀三巻ノコトシ

一色一香　是ハ源ト大品般若經ノ文ナルヲ天台モ處々ニ引用アリ圓頓者ノ中ニモ此文ヲ擧ケタリ所詮ハ六根六塵ノ境界ニフルヽ當體モ自ラ中道實相ノ悟ナリト見立ツルコトヲ云ナリ

一八識五重之明鏡　八識トハ眼識耳識等ヲ云テ六根ノ識ヲ六ツトス是ヲバ染識ト云ヒ事識トモ云フ惡業煩惱ノ事相ニソメラル事ヲ云ナリ凡夫ノ意ヲ云ソ又此染識ヲ離タルヲ清淨識ト云ナリ此染ト淨トノ間ニ染淨ヲ含メルヲ又一識トス前ノ六識ト後ノ二識ヲ取リ合テ八識ト云ナリ是ニ付テ法相ノ所立ト天台ノ立義ト各別ナリ法相家ニハ只八識マテヲ立ルソ天台ニハ此上ニ庵摩羅識ト云ヲ立テヽ九識ト云ナリ諸經論ノ意廣博ニ沙汰ノアル義ナリ

一五重トハ　諸法ヲ唯タ心識ノ法ナリト立ルニ付テ五種ノ義カアルソ第一ニ遣虛存實識二ニ捨濫留純識三ニ接末歸本識四隱劣顯勝識五ニハ遣相證性識ナリ法相宗ノ沙汰アル事ナリ其道ニ入ラズンバ知カタシ

一四教三觀　四教トハ三藏教通教別教圓教ヲ云ナリ天台家ニハ此四ヲ以テ一代說相ヲ分別シテ相ヒ極タル所ヲバ法華圓教ヲモツテ最極トスルナリ三觀トハ空ト假ト中道トヲ云ナリ是ヲ觀法ノ所詮トスルナリ

一酋長　韻會ニハ酋長魁師之名トアリイクサノサキカケノ中ノヲトナシヤカナル者ヲ云ソ然レバ今ハ尊氏ヲ足カルニ比シタ義ナリ

一貪天功而爲己力咎犯之所耻　咎犯トハ晉文公ノ舅ノ名ソ孤偃字子犯ト云ソ文公ノ牢人ノ間ニ付順テ居タ者也咎ノ字ヲ禮記檀弓ノ下ニハ舅ノ字ニ作タソ所詮今コヽノ文章ハ誤リソ介推カ所耻ト書ヘキ義ソ左傳六巻僖公二十四年曰晉侯賞從亡者介之推

不言祿々亦弗及介推文公微臣之語助推曰獻公之子九人唯君在矣惠懷無親外内棄之天未絶晉必將有主々晉祀者非君而誰天實置之而二三子以爲己力不亦誣乎竊人之財猶謂之盜況貪天之功以爲己力乎云云史記世家九卷モ全同シ文ノアヤマリ知ヘシ

一假朝籍而擧逆謀劉備之所亡也

一甚於燎原　尙書五盤庚篇云若火之燎于原不可嚮邇云云浮言トテ人ノ虚言ヲ云フハ原ニ火ノ付タルヤウナ物ソ一ノ木草ニツケハ其次ニワタリ付ソ一人云ヒ出セバ萬人ヘワタルソ怖シキ事ナリ

一紅爐之消雪　紅ノ字ヲ或ハ烘ノ字ニモ作リタソ火ノ赤キ貌ニ用タソ爐中ヘ雪ヲ入ルニ消ヤスキ如ク軍ノ敗北シヤスキソ韻府ニ某甲所見如紅爐上點雪トモ云タソ

一圍石壓卵　五代ノ中ノ周世宗帝河東ヲ征伐シ玉フ時ニ臣ニ劉晏ト云フ者カ曰ク若遇我師如山壓卵ト云タソ今コヽモ其ニ同義ソ

一晉之祈八公也　秦ノ符堅軍兵ヲ擧テ晉ヲ伐ツ時ニ壽陽城ヲ攻メ落シタル處ニ晉謝石謝玄ナト云者カ計ヲ以テ悉ク又勝利ヲ得タソ秦符堅カ步騎ノ衆敗北シテ淮水ヘ逃入リ死セルモノ一萬五千人ホト有リ晉ノ兵ハ水陸ノ二道ヨリ追テ行タソ其時ハ秦王符堅ト陽平ノ公融ト折角シテ壽陽城ヘ登テ敵ノ人衆ヲ望ミ見タレバ晉ノ軍兵之嚴密ナル衆力ミチミチテ有ルヲ見テ手ヲ失フタソ又八公山ヲ見上ケタレバ草木マテモ皆人形ノヤウニ見ヘテ晉ノ軍兵ソト思タソ集覽第二十一云八公山在安豐壽春縣北四里云云　符堅ハ略陽氐人ナリ晉ノ康帝永和七年ニ符建長安ニ據テ前秦ト號シテ立テリ捷死シテ符生立ツ符堅又生ヲ殺シテ立ツ

一唐之威四王也　編年通論第十六卷云唐天寶十二年西蕃冦圍涼州帝命三藏不空祈陰兵救之空誦仁王密語數番有神介冑而至帝親見之問曰神謂誰空曰北方毘沙門天王長子也空誦密語遣之數日涼州據報有神兵至威武雄盛賊畏懼卷甲而去帝悦詔天下軍壘皆立毘沙門天王祠云云　僧史略下云不空嘗誦此經中咒感天下子領神兵解安西城羌胡之圍云云

一吐蕃　集覽三十九云本西羌屬姓勃窣野居折支水西・在吐谷渾西南

一攙槍　祖庭事苑六云上楚銜切下初唐切天文志云攙

搶掊彗其殃一也爲有破國亂軍伏死其辜餘殃不盡爲旱凶飢暴疾漢書音義曰妖星曰孛星彗星長星亦曰攙槍絶跡而去曰飛星光跡相連曰流星

一窺覦　劉琨勸進表曰狄寇窺覦左氏傳師服曰民服其上下無覬覦𧮫與覦同

一觀行五品　天台一家ニハ衆生ト佛トノ位ヲ立ルニ六重アリ是ヲ六即ト云一ニハ理即鳥獸等ノ上マテモ乃至ハ我等凡夫ノ佛トモ法トモ知ラヌ者ノ位ナリ二ニハ名字即佛法ノ名ヲモ聞キ妙法ノ實體ナトト云事ヲ聞分齊ヲ云フ三ニハ觀行即コレハ佛法ノ妙理ヲ觀念シ修行スルヲ云フ但シ此位ニテ細カニ又分テ五品ヲ立ルナリ故ニ第三觀行ニテ五重ヲ立ルト知ルヘシ第四ニ相似即我等カ六根ノ體カイカニモ淸淨ニ成リテ世界國土ヲモ見トホスヤウニ成ルホトニ佛ニモ相似タリ衆生ニモ似タリトテ相似即ト云フ第五ニ分眞即眞實ノ悟カ佛ノホトニコソ極マラネ當分ニハ眞實ノ悟ヲ得タル意ヲ云フナリ第六ニ究竟即コレハ悟カ極タル位ヲ云ナリ此六即ヲシラサレバ觀行五品ト云コトハ知ラレヌ程ニ具ニ云ソ

一等覺無垢　右ノ第五ノ分眞ノ覺ハ佛ノ覺ニモ一段ヘタテコソアレ大方ハ等シキ覺ナレバ等覺ト云ナリ無垢トハ煩惱ノ垢ナシトゾ

一了義　大乘至極ノ經ヲサスソ涅槃經四云依了義經不依不了義經ト說レタソ

一印度　天竺ヲ云ソ一切經音義第十八云天竺或言身毒或言賢豆皆訛也正言印度々々名月々有千名斯一稱也

一隋高祖崇玄文　楊帝天台大師ニ法華玄文ノ講ヲ受ケ玉ヘル義也

一玉泉　荊州ニアル寺ソ天台ノ摩訶止觀ヲ說玉ヘル所ソ

一唐文皇　太宗皇帝ハ御製聖敎序ヲアソハシ武后ハ華嚴敎ノ序ヲ製シ中宗モ叡宗モ代宗モ何レモ文筆ヲ以テ經論ノ極理ヲ述玉ヒタルヲ廣ク文皇トハ云ヘルナルベシ一帝ノ御名ニハ非ルナリ神藻トハ文選四十二ノ注ニハ藻文也ト注セリ

一一夏敷揚　止觀一ニ玉泉寺ニテ一夏ノ間一夏敷揚二時慈霔トアリ止觀ヲ宣タルヲ云フ

一犬鷹之才　文選四十四ニ陳謂其鷹犬之才爪牙可任

トアリ鷹ハ爪カ肝要ナリ犬ハ牙カ有テ威ヲナス者也爪牙トハ選ノ五十六注ニハ濟曰爪牙謂爲將軍トアリ今ハ尊氏ノ將軍ノ位ヲ笑フ辭ソ

一討楊氏兮爲辭　安祿山カ唐帝ヲ犯シ天下ヲ奪ンカタメニ揚國忠ハ胡虜ト云合テ謀叛ヲ致ス是レ禍ノ根元ナルホトニト玄宗帝ヘ云ヒカケテ則國忠幷ニ韓國夫人秦國夫人ヲモ忽ニ殺害セリ憲法ヲサハク體ニシテ底ハ天下ヲ奪ハンタメナリオソロシキ所存ナリ尊氏ヲコレニ比シテ云タソ

一軼赤眉之入咸陽　軼ハ過ノ字ト意同シ王莽カ地皇三年ニ樊崇ト云人兵ヲ起ス自ラ赤眉ト名ケタソ資治通鑑八云初樊崇等衆既寖盛乃相與爲約殺人者死傷人者償創莽遣太師王匡更始將軍廉丹討之崇等恐其衆與莽兵亂乃皆朱眉以相識別由是號曰赤眉云云咸陽ニハ非ス洛陽ト改ムヘシ

一黃巾寇河北　後漢靈帝中平元年二月ニ黃巾ノ賊張角等カ亂ヲ起セリ初メ此張角ト云者ハ鉅鹿ト云所ノ者ナルカ老子ノ道ヲ專トシテ妖術ヲ以萬民ニ敎授ケ太平道ト云ヒ自ラ大賢良師ト云テ種々ニ人ヲ欺誑セリ水ヲ咒符シテ萬病ヲ療シ病者ノ拜跪ヲ受タリ弟子ヲ四方ヘ遣シテ轉展シテ相誑誘スルコト十餘年ノ間ニ其徒黨ノ衆カ四十萬人ホト出來シケリ靑徐幽冀荊揚兗豫ノ八箇國カ何レモ彼ノ者ニ心ヲヨセヌハナカリケリ張角今ハカウヨト思ヒ遂ニ三十六ノ將軍ヲコシラヘテ大將軍ニハ萬餘人ヲ付ケ小將軍ニハ六七千ツヽ付テ各ニ足カルヲ添タリ訛リテ云ヒ出シ事ニハ甲子ノ歲ハ天下大吉ナリ上下萬民トモニ門々ニ白土ヲ以テ甲子ト云字ヲ書ケ若書スハ大ヒナル災アルヘシト云ヒ出タソ是モ我カ云事ヲ人カ用ル歟否事ヲ知ンカ爲ナルヘシ彼大將軍ニ馬元義ト云者先ツ荊州揚州ヲ請取テ數萬人ヲ用意シケレハ譜徐奉ナト云者ハ右ノ兩國ヘノ內ヘノ引手ニ成テ來ル三月五日ニハ必內外一同ニ起ント云內通約諾ヲ堅メタリ此時ニ張角カ弟子ニ唐周ト云者カ返忠ヲシテ靈帝ヘ聞タルニ依マツ馬元義ヲ捕ヘテ車サキニセラレタリ官人宮省ノ中ニモ此張角ニ馴順タル者ノ士民百姓ニ至ルマテ悉ク捕ヘテ誅殺セラルコト千餘人ナリ故張角ハ早一大事カ身ノ上ニカヽル事ヲ思テ諸大將軍ニ云ヒ付テ俱起リ自餘ノ衆ニマキレシカタメニ黃巾ヲ著テシル

シトセリ是ヲ黄巾ノ賊トハ云也サテ角ハ自ラ天公將軍ト名ケ弟ノ張寶ヲハ地公將軍ト云ヒ又張梁ヲハ人公將軍ト云テ一天下ヲ覆サントシケリサレトモ四五月ノ間ニ悉誅セラレタリ魏志ニハ青州一所ノ黄巾サヘ百餘萬人ト載タリ

一濫吹　ミタリニ吹クトソ齊宣王人ヲシテ竽ヲ吹シメタリ南郭處士ト云者王ノタメニ竽ヲ吹ケリ一段叡感アツテ粟ヲ三百給レリ宣王薨シテ文王即位ノ時ニ彼ノ者ヲ召テ吹サシメントアレハ悉ク逃散スルソ宣王ハ無案内ニテマシマセシ故ニ恣ニ吹タリ今其シラヘノ有ンコトヲ恐ル故ニ去リキ仍虚言ノコトヲ濫吹トハ云ナリ韓子ニ出タリ

一鋤耰棘矜　賈誼過秦論曰鋤耰棘矜不銛於鉤戟長鎩也濟カ注ニ鋤耰柄也棘矜戟也トアリ以鋤柄爲之ナリ孟康カ注モコレニ同シ爾雅ニハ棘戟也ト注セリ今コヽノ文ハ劒戟ヲ以テ帝都ヲ犯シタルコトヲ云ナリ

一孟津再駕之役　文選四十一云文王有退修之軍孟津有再駕之役注善曰尚書曰惟十有一年武王克殷又曰一月戊午師渡孟津云云武王孟津ヲ渡ルコトハ第二度ナリ

一城濮三舍之謀　左氏傳僖公二十八年曰晉侯及楚人戰于城濮楚人敗績スト周襄王ノ時ニ楚カ王命ニ叛ケリ故ニ晉侯ニ命シテ楚ト戰ハシメタリ其時ニ衞ノ國ニ城濮ト云所アリケルニ晉宋ノ衆カ陣取シテ居タリ楚ハ嶮難ノ處テ何トモ討カタキソ晉ノ子犯カ謀ニテ遂ニ勝タソ三舍ノ事ハ前ニアルソ

一猶溪　猶ノ字不審ナリ柳文二云譬之猶谿天淵而覆原燎

一彼代宗之屯長安　代宗初ハ廣平王俶ト云ヒキ肅宗ノ朝至德二年ニ王俶ト葉護ト兄弟ノ契約ヲシテ互ニ用ニ立タント云ハレタソ故ニ葉護カ力ヲ合セテ西京ヘモ行テ戰タソ資治通鑑集覽四十七云廣平王與葉護約爲兄弟至長安城西陳於香積寺北灃水之東云又杜愚得三云廣平王叔爲元帥司空郭子儀副之將朔方等軍及回紇西域之衆發鳳翔至長安城西陳於香積寺之北灃水之東與賊戰斬々首六萬賊大潰王維詩ニ不知香積寺數里入雲峯ト作タルモ此寺ソ

一勾戰之在會稽也　天台山ノ北ニ兵ヲ陳セラレタ事ハ本據シラヌソ

一禍在蕭牆之下　此辭ハ源ト論語ニアリ憂フル所ハ彼ニハアラス此ニアリト云テ禍ハ他所ヨリハ來ラヌソ牆ノ中ヨリ出ルソ也集覽五云鄭氏曰蕭之言肅也牆屏也人臣至此加肅敬焉爾雅翼云周人炳蕭使臭陽達墻屋故曰蕭墻胡曾詩ニモ不知禍起蕭墻內ト云ヘリ

一前對燕然之虜　綱鑑紀要七云竇憲耿秉出朔方塞與北單于戰於稽落山大破之出塞三千里登燕然山命中護軍班固刻石勒功紀漢威德而還云云稽落山ハ燕然山ノ南ニアリ匈奴ノ中ノ山ナリ

一有宛城之軍　是ハ光武ノ兵ヲ宛城ニ起リタルソ正義曰大宛在長安西萬二千五百餘里云云

一萬死ヲ出一生ニ逢　文選四十一云夫人臣出萬死不顧一生之計注新序昭奚恤曰使皆赴湯火蹈白刃出萬死不顧一生

一檀度　六度ノ第一ナリ布施ノ事也

一錦ヲ着テ古郷ヘ歸ル　漢書ニ富貴不歸故鄉如衣錦夜行ト云ヘリ

一逆旅　僖公二年傳云逆旅客舍也

一南翔北向　朗詠下卷九條右丞報吳越王之書云云

一淚ヲ犬羊ノ天ニ淋　山谷ノ一云前鮮卑隔在漁北犬羊爲羣トアルハ夷狄ハ犬羊ト交リ居ル卑賤ノ義ソサレトモ文選第三十七ニ逆胡劉曜縱逸西都敢肆犬羊ト云タルヲ注ニ犬羊喩劉曜トシタソ然レバ今モ敵ノ虐逆ノワサヲサシテ犬羊ト云タル歟天ノ字ハ文章ノツヽキニ云タ計ソ又文選五十七注云犬羊謂賊也

一顏子カ一瓢　論語ニアリ

一相如カ四壁　相如傳ニ家徒四壁立ト云ヘリ貧ナル姿ヲ云フ

一五衰退沒　前ニ云ヘルカ如シ天上ノ快樂ヲ退沒シテ下界ヘ生スルナリ法華ニ諸天衆咸少死多墮惡道ト說ク哀ナル事也

一大梵高臺　大梵天王ハ帝釋天ヨリ尙高上ノ天ナリ初禪天ノ王ナリ

一叫喚大叫喚　八熱地獄ノ內ナリ俱舍論疏云衆苦所逼異類悲號發怨叫聲名號叫劇苦所逼發大哭聲悲叫稱怨故名大號叫タ此中ニ異類トハ罪人ノ事ナリ

一紅蓮大紅蓮　八寒ノ中也身寒赤色似紅蓮華故也ト註セリ又寒之更甚身色彌紅也トアリ

一深山寺　ミヤマテラ所アリ寺ハ今ハナシ昔ハアリコソスラメト彼國人云ヘリ

一金鷄三唱　金ノ字ヲ改テ天ノ字ニ作スベシ淮南子曰桃都山大樹曰桃都有天鷄日出即鳴天下鷄皆鳴已上祖庭事苑五云人間本無金鷄之名以應天上金雞星故也天上金雞鳴則人間亦鳴

一箏ノ笛　コレハ知ラスト今世上ニ弄フ十三絃ノ琴ヲコソ箏ノ琴トコソ云ナレ

一萬壽樂ノ破　以上二ツハ盤渉調ノ曲ナリ

一繁絃急管　白氏文集ノ三ノ文ナリ

一融々洩々　是モ文集ノ三ニアリ左傳一ノ註融々和樂也洩々舒散也

一正始ノ音　毛詩ニ四始ト云事アリ國風ノ始ハ關雎ナルカ如ク小雅ト大雅ト魯頌トノ四ノ始ヲ云ナリ其正德ヲアラハシタルヲハ正始ト云フ也是ニ付テ又邪德ノ義ヲモ云ヒ明タソ故ニ文選四十五ニ毛詩序ヲ載テ此義ヲ明シタソ註曰四始風也小雅也大雅也頌也始者王道興衰之始也ト云タソ

一簫韶九奏鳳舞魚躍　尙書第二ニ簫韶九成鳳皇來儀ノ意ソ簫韶トハ舜ノ樂ノ名ナリ簫ノ字ヲ付タルコトハ細器ノ備タルコトヲ示ス故ナリ本經ニハ九成トアレトモ註ニハ九奏トシタソ周禮ニハ九變ト云タモ實ニハ一義ナリ詩學大成琴詩ニハ流水嘉魚躍叢臺舞鳳鸞ト作タルソ

一周武王孟津ヲ渡ル時白魚舟ニ入　史記周本紀云武王渡河中流白魚躍入王舟中武王俯取以祭注馬融曰魚者介鱗之物兵象也白者殷家之正色言殷之兵衆與周之家也已上又曰諸侯不期而會盟津者八百諸侯々々皆曰紂可伐矣

一屠人　包丁人ノ意ソ屠ハホフルトヨム也魚鳥等ヲキリサクヲ云

一胙　祭ノ餘肉ヲ云ソ

一鳴咽　又イエツ咽ムセフトヨム

太平記鈔第十八卷

一霜ニ響遠寺鐘　山海經云豐嶺九鐘霜降自鳴

一楓橋夜泊　月落烏啼霜滿天方輿勝覽二云楓橋寺在吳縣西十里云云其寺甚小シト或人言傳フレタソ楓樹カ多クアル故ニ寺ノ名トセリ此外ニ張繼此所ニ夜泊シテ月落烏啼ノ詩ヲ作レリ

一梁園ノ御遊　梁園竹園等ハ親王ノ御事ナリ但梁ノ孝王ハ宮室苑囿ノ遊樂ヲ好ミ玉ヘリ西京雜記ニ見ヘタリ今ハ此ニ依テ云ナルヘシ

一寬平ノ遠キ跡　五十九代宇多帝ハ昌泰二年ニ御落餝ナリ

一花山ノ近キ例　六十五代冷泉ノ御子治天下二年ニシテ俄ニ發心アリテ花山寺ニテ出家ナサレキ今モカヤウニ御出家ヲモヤト思召ス事ヲ云ケリ

一謳歌ノ說　巷說ト云モ同シ意ナリ誰レカ云フトモ正體ノナキ說ナリ又孟子ニ堯ノ子ニハ謳歌セストハ別ノ義ナリ

一野老　薢ノ異名也

一春雷一動蟄蟲蒴蘇　動萬物者莫疾乎雷呂氏春秋云開春始雷則蟄蟲動矣

一以忍辱衣トス　法華云柔和忍辱衣ト云ヘリ嗔心ヲモオコサスコラユルヲ忍辱ト云

一覺鑁　元亨釋書云覺鑁姓平氏肥之前州人將門之屬胤也康治二年十二月十二日卒年四十九已上傳法院ト密嚴院ト二ツヲ造立アリ

一四曼不離　四種ノ曼荼羅ヲ略シテ云フ曼荼羅トハ密宗ノ意輪圓具足トテ闕ルコトナキヲ云ナリ其四曼ト云フハ一ニハ大曼茶羅ハ人ノ五大ノ當體ヲサシテ云フナリ二ニハ三摩耶曼トハ輪法刀劍ノソレソレノ持物カ則三摩耶也三ニハ法曼トハ眞言ノ文字カ一字一句モ皆悟ノ體ナルヲ云四ニハ羯摩曼トハ諸佛菩薩ノ尊形ヲ書タルヲ云ナリ此四ツカ身ニ常ニハナレス備リテアルヲ不離トハ云ナリ

一有漏身　漏トハ煩惱ノコトナリ煩惱ニヒカレテ生死海ニ漏落スル故ソ父母所生ノ身ハイマタ煩惱ノ有ル身ナレハ有漏身トハ云ナリ

一求聞持法　虛空藏菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法トテ一切經ノ中ニ一卷アリ經云諸有善願無不滿足一切苦患皆悉銷除常生人天不墮惡趣云云羔字

函ニ入レリ
一一印一明　印トハ印契トテ手ヲ以テ行フ是レ身密ナリ明トハ諸佛菩薩等ノ神咒ヲ云ナリ故ニ又ハ大明咒トモ云也是ハ口密ナリ身口ノ二ノワサハ心地ヨリ起ル物ナルホトニ自ラ意密モ備ルナリ常ニ三密四曼ハ不離ノ法ナリ
一自然智　又ハ無師智トモ云ナリ佛ノ無師獨悟ノ智ヲ云ナリ
一慈尊出世五十六億七千萬歳　當來出世ノ時分ニ付テ諸經ノ說明多ク異ナリ其中ニ菩薩處胎經第二卷三世等品ノ中ニ此五十六億七千萬歳ノ數ヲ擧タリ餘ノ經ニ明セル數ヲハ世間ニモ云ハス是計リヲ云傳タルモ奇特ノ義ト思フナリ欲字函ニアリ
一那羅延力　天帝釋ノ第二ノ大臣ノ名也其身堅剛ニシテ研刺スルトモ不破
一好堅樹ハ地ノ底ニ有　大論第十云譬如有樹名爲好堅是樹在地中百歳枝葉具足一日出生高百丈是樹出已欲求大樹以蔭其身是時林中有神語好堅樹言世中無大汝者諸樹皆當在汝蔭中
一頻伽鳥　大論七十八云如歌羅頻伽鳥在𣫍中未發聲已能勝諸鳥已上法華文句十云好堅處地芽已百圍頻伽在𣫍聲勝衆鳥文右ノ大論ノ二文ヲ受テ天台ハカクノ如ク釋セリ
一昔秦ノ世ニ　コレハ誤ナリ代ハ周ノ定王八年カ晋ノ景公繻元年ナリ此故事ノ中大方ハヨキ樣ナレトモ語已下敵味方カ紛レテ何レモ誤レリ故ニ史記ノ大體ヲ注ス處也晋獻公ノ時ニ趙衰子ト云者ノアリ驪姬カ事ニ依テ重耳ハ翟ト云所ヘ逃テ行カレタ時ニ趙衰モ從テ往タソ翟主二リノ息女ヲモテルヲ少ヲハ重耳ニアワセ長ヲハ趙衰ニアワセタレハ則趙盾ヲマウケタリ初晋ニ居タ時モハヤ趙同趙括趙嬰ト云フ子共ヲ持タソ後重耳ハ晋ニ歸リテ文公ト云ケリ趙衰モ共ニ晋ニ歸テ多ノ計策ヲナシ國政ヲ專ニセリ其時ニ翟ニテ生タル盾ヲ迎ヘ越シテ嫡子ト定メ置テ其身ハ遂ニ死去シタリ彼嫡子趙盾又父ノ代官ヲシテ國政ヲ事トセリ其比ノ晋ノ國主ハ襄公ト云ヒケルカ是モ薨セラレタリ太子夷皐ト名ケルカ未タ幼少ニシテ國政ヲ取ルニ足ラザル故ニ趙盾カ計ヒトシテ襄公ノ弟ニ雍ト申セシヲ立テヽ即位セシメントス太子ノ母此事ヲ迷惑シテ日夜啼泣シ

テ太子ヲ立ント望マレタリ趙盾モ力ラ及ハスシテ遂ニ彼太子ヲ立テヽ即位セシメテ靈公ト申シタソ此時モ趙盾彌ヨ國事ヲ專ニセリ十四五年ヲ過テ靈公益驕ルニ依趙盾ハ屢諫メタレトモ少シモ聞キ入レラレス剩少シノ事ヲ以御膳ノ宰人ヲ殺シテ其尸ヲ持出シ庭前ニサラシタソ趙盾コレヲ見テ王業ニアラサル事ヲ恐レリ此ヨリシテ結句趙盾カ心中ヲ恐ルヽ故ニ盾ヲ殺ント企巧ミケリサル者カ盾ニ聞セタレハ國中ヲ逃ル由ヲシテ境ヲハ越スシテ隱レ居タル間ニ趙穿ト云フ者カ靈公ヲ殺シテ襄公ノ弟ニ黑臀ト云ケルヲ立テ即成公ト申シタリ然レハ靈公ハ死去ナリケル程ニ趙盾モ心安ク國ニ歸又國權ヲ執テ居タルヲ世上ノ衆ノ云ヒヤウニハ靈公ヲハ此趙盾カ殺サシタト云ソ迷惑ナカラ年ヲ送テ居タリ其後成公ノ子景公ノ時ニ至テ盾ハ死タリ子ニ趙朔ト云カ又權柄ヲトツテ居テ成公ノ姉ムコニ成タソ景公ノタメニハ姨ムコソ景公即位三年ニ大夫屠岸賈ト云フ者カアリ前ノ靈公ノ御恩ヲ得タル者也閑ニ晉ノ國ノ體ヲ見ルニ代々趙氏ノ者トモカ權柄ヲ執來ル故ニ忝モ臣ノ身トシテ靈公ヲ殺スコト實以無念ノ義ナレハ此度ニ趙氏カ種族ヲ絕ントス第一ニ趙盾ハシラサル顏ヲシテ靈公ヲ殺ス大罪ノ第一ノ張本也靈公ノ幼少ノ時カラ主君ニスヘマシキ由ヲ云フヲ以テ萬事カ計知レタリトテ色ニ出テヽ謀亂ヲ興行シテ趙朔ヲ始トシテ朔カ三人ノ舅ヲモ悉ク殺シスマセリ趙朔カ妻ハ一子ヲ孕ナカラ禁中ハ元來親類ノ事ナレハ走リ入テ隱レ居タソ其時趙朔カ存生ノ時ノ客人ニ杵臼ト云者アリ又朔カ友人ニ程嬰ト云者ノヽアリケルニ向テ云フヤウハ汝ハ朔カ殺サレタル時何ソ死セサルヤト云ヒタソ程嬰カ曰ク朔カ婦人此比懷姙セラレタリ若此子カ男子ナラハ取立テヽ奉公シテ親ノカタキヲ取テ本意ヲ達サシメンソ若女子ヲ產シタラハ夫ハ用ニモ立ツマシキホトニ其時ハ死ナント思フト答タソ兎角シテ彼婦人ハ玉ノ如クナル男子ヲ誕生シタリ此由ヲ屠岸賈慥ニ聞テ朔カ子ヲモ殺ントテ宮中ヲ探シニ往タソ宮中ノ夫人達アマリニ不便ニ思ヒ生レ兒ヲ袴ノ中ニ包ミ置テ祝シテ云ヒヤウニハ趙氏ノ種ヲ滅セントナラハ汝モ啼ケ若シ趙氏ヲ二度タテントナラハ會テ啼クナ聲ハシ立テナト云テ置タレバ居

岸賈カ還ルマテニ少シモ聲ヲ立テナンタソ諸人ハ手ヲ握リ汗ヲカイテ悲ミ居タルニ遂ニ泣キモセサル故ニ喜ヒ類モナカリキ其時ニ程嬰杵臼ニ對シテ曰ク今一度コソハ鰐ノ口ヲ脱レタレトモ遂ニハ叶ヒカタシ如何トシテ此ノ難ヲノカレント云フ杵臼カ曰此孤ヲ取立ルト吾ガ身ノ死スルトハ何レカ成難ク何レカ易カラント云タソ程嬰曰死ハ易ク孤ヲ立ルコトハ難ト曰フ杵臼カ曰ク朔ハ貴方ニ深ク懇志アリシホトニ成カタキ事ヲセヨ吾ハ成易キ事ヲシテ先死セント云フ兩人ノ者深ク談合ヲシテ他人ノ生レ子ヲ取テ負テ着ル物ニハムツキノ樣ナルヲキセテ深山中ニカクレタソ月日ヲ經テ程嬰ハ又山中ヲ出テヽ屠岸賈カ諸將ニ向テ云ヤウハ趙朔カ子ヲ取立ント思フ志アリテ一端山中ニハ隱レタレトモ不肖ノ身ナレハ末ヲ遂ルコトハ難シ誰ナリトモ憐レ我ニ金千兩與タラハ趙氏カ孤ノ隱レ處ヲ告ケ知セント云タソ諸將コレヲ聞テ喜テサラハ千金ヲ與ントテ程嬰ヲ先立テヽ杵臼ヲ攻メタリ杵臼カ曰クサテモ程嬰ハ比興ナル者哉朔カ時ニ死セサルサヘ恥辱ナルニ又二人深謀テ趙氏カ孤ヲカクシ置ント堅約シケルニ今更ニ我等ヲ賣テ千金ヲ取ルナトハ言語道斷ナリト云ヒ又彼兒孤ヲ抱テ高聲ニ云フコトハサテモ天乎天乎運命ノ盡タルコトヨト歎キ又敵ノ大將ニ向テ云ヤウハ生レヌ前ノ親ノ罪カ何ソ此孤兒ニハカヽルヘキ唯我ヲ殺シテ孤ヲハ活シテ玉ヒ候ハヽ別ノ芳情タルヘシト云タレトモ諸將カ聞入スシテ遂ニ杵臼ヲモ孤ヲモ殺シタソ如此天下ノ者ニ趙氏ハ滅シハテタリト知ラセテサテ彼眞子ヲハ程嬰カ養育シテ此上マテモ山中ニカクシ置クコト十五年ナリ其比晉景公ハ以ノ外ニ疾アリ占テ見タレハ忠臣ノ末ノ祟ナリト云タソ不審ニ思テ韓厥ト云者ニ御尋アルヤウハ趙氏カ子孫ハ悉ク種ヲ斷チハテタルヤトアレハ韓厥ハ元來趙氏ニ所縁ノ者ナレハ始終ノ事ヲ能知タル故ニ具ニ景公ヘ申上タレハ早々使ヲ遣シテヒソカニ召シ寄セヨトテ宮中ニ隱シテ趙朔カ子ヲ置キ玉フソ景公ノ御煩ヒヲ見廻ニ各ノ參シタ時ニ韓厥カ人數ヲ今ノ孤ニ相加ヘテ一度ニトツト云テ庭中ニ云フヤウハ面々ヨク聞ケ屠岸賈ニ與シテ我等カ一門ヲ悉ク滅シヌルコト遺恨ナリ只今一人モノカサス打ハタスヘシト

云タレバ諸人ノ曰ク屠岸賈僞テ君命ト云ケルニ依テコソ一端ハ順ヒキ何トテ趙氏ニ對シテ私ノ遺恨ハ候ヘシト申シテ各罪ヲ謝ス其時彼子ヲハ趙武ト名ヲ付テ悉ク却テ屠岸賈ヲ攻テ思フマヽニ從類一族ノ跡ヲケツリテ滅シケリ趙武ハ昔ノコトクニ知行ヲモ納テ威勢モアリケルニ程嬰ハ暇ヲ乞テ泉下ノ趙氏ニマミエントテ遂ニ自殺シタソ趙武モ彼重恩ノホトヲ感シテ三年ノ喪ヲ成シ春秋ノ祠ヲ世々マテニ絶ヘセス祭リケルト見タリ已上史記ノ趙世家ニ見ヘタリ太平記ノ相違ヲハ是レ等ニテ知ルヘシ

一兵粮ニ迫リテ馬ヲハシ食ラン　孫子云殺馬肉食者軍無糧也ト云云此ノ孫子ノ行軍ノ篇ニハ敵ノ所行ヲ見テ兎アラン角アラント云事ヲ知ルヤウヲ載タリ

一叫喚求食　法華ニハ喚ノ字ヲ呼ノ字ニ作レリ

一啾々　杜詩云天陰雨濕聲啾々

一以我元首トシ以汝爲股肱　文選五十一四子講德論云君爲元首臣爲股肱明其一體相待而成有君而無臣春秋刺焉

一誓掃匈奴不顧身　隴西行詩誓掃匈奴不顧身五千貂錦喪胡塵可憐無定河邊骨猶是春閨夢裏人

一漢李夫人　漢書九十七外戚傳云李夫人少而蚤卒上憐閔焉圖畫其形於甘泉宮云云夫人ニ別テ後四年ヲ經テ武帝モ崩シ玉フナリ

一返魂香ヲ燒シニ　十洲記云聚窟州在西海中洲也此上有九樹似此國楓香聞數百里名爲反魂樹伐取其樹於玉釜中煑取汁更以微火熟煎之如黑錫令可丸名火驚精香亦名震靈丸亦名反生香亦名人鳥精亦名却死香凡有五名燒之香氣遠聞死尸在地聞香仍活漢延和三年武帝行幸安定宮西國月支王遣使獻反魂香四兩集絃膠神猛獸黃色其小威伏百邪之魍魎帝親試之皆有驗矣帝輕之於後不覺失其使者及獸等莫知所之潛歸西國已上萬花谷後集三十四云司天主簿徐肇遇蘇氏子德歌者自言善合返魂香手持香爐懷中取一貼如白檀之香未撮於爐中煙氣裊々直上甚於龍腦德歌微吟曰東海徐肇欲見先靈願此香煙用爲引導盡見其父母曾高德歌曰但死經八十年以上則不可返矣

一李夫人ノ面影煙ノ中ニ見タリ　漢書云上思李夫人不已方士少翁言能致其神迺夜張燈燭設帷帳陳酒肉

而令上居他張遙望見云云 但シ此中ニ反魂香ヲタクト云事ハナシ白氏文集第四ニ九華張中夜悄々反魂香降夫人魂夫人之魂在何許香煙引到焚香處
一不言不笑 白氏詩集第四卷李夫人ノ所ニアリ
一業平カ戀セシミソキセシ
戀セシト御手水川ニセシミソキ神ハ受ケスモ成ニケル哉
一青海波 盤渉調ノ樂ナリ
一鐵碎珊瑚一兩曲水氷玉盤千萬聲 白氏文集ノ第三ニハ碎ヲ擊トアルソ又詩學大成第二十五卷ノ琴ノ處ニ此詩カアルソ盤ノ字ヲ壺ニ作タソ
一御隔子進スル 夜ハ下スヲ云フ朝ハ上ヲ申スナリ
一コユルキノ急キアリテ 敏行
玉タレノコカメヤイツラコユルキノ礒ノ波ワケ澳津出ケリ
一八聲ノ鳥 夜ル八ツ打テ必鳴ホトニ云也八時ハ丑ノ時ソ
一千束ニモ成ヌト
思ヒカネケフ立ソムル錦木ノ千束モマタテ値フヨシモ哉
一ノホレハ下ル
最上川ノホレハ下ルイナ舟ノイナニハアラスコノ月ハカリ
一唐太宗鄭仁基カ女ヲ 貞觀政要第二卷直諫篇ニ云鄭仁基女年十六七容色絕殊當時云云
一百夜ノ榻ノ端書 歌林良材云榻ト云フ物アリ車ノ具ニテ是ヲ用テオリノホリヲスル物ナリ昔男ノヨハヒケル女ノ有ケルカ百夜カノ榻ノ上ニフシタラハ逢ヘキニ契タル故ニ夜コトニ來テシチノ上ニマロネヲシテ九十九夜マテハ數ヲトリテ榻ノハシニ數カキタル事ヲ云也
曉ノシチノハシカキ百夜カキ君カコヌ夜ハ我ソ數カク
一鬼ヲ一事ニ載 朗詠下云載鬼一車何足畏掉巫三峽未爲危感懷詩ナリ前中書王ノ作ナリ
一早離速離 出所ヲイマタ知ラス但盛衰記ニハ何トモナク詳ニカケリ
一物故 前漢書蘇武傳物故師古曰物故謂死也言其同於鬼物而故也一說不欲斥言死但云其所服用之物皆已故耳索隱曰魏臺訪問物故之義於高堂隆答曰聞之

先師云物無故事也言死者無所復能於事也
一王質カ仙ヨリ出　述異記曰晉曰質伐木至信安郡石室山見數童子圍棊與質一物如棗核含之不飢局未終斧柯爛盡既歸無復時人
一方士　術道ノアル士ヲ云也文選三十一注ニモ方士ハ術士也ト云フ李善曰道人方術之士ソ
一第九減劫　人壽八萬歲ヨリ百年一ツヽ減シテ人壽十歲ニ成ルヲ一減ト云ソ又十歲ヨリ百年ニ一ツヽ增シテ八萬歲ニイタルヲ一增ト云フ此一減ト一增トヲ合セテ一少劫ト取ル也只今ハ早ヤ八少劫ヲ過テ第九ノ減ノ時ニアタルト云事也迦葉佛モ釋迦モ皆第九ノ減ノ時ナリ
一摩竭陀國　此ニハ不害ト云フ劫初ヨリ已來刑害ノ義ナシ
一寂場樹下　石上ト作スヘシ寂場トハ佛ケ正ク成道シ玉フ處ノ名ナリ
一頓大三七日　佛成道シ玉ヒテ時ヲ移サス頓ニ大乘ノ法界圓融ノ法ヲ說玉フ事三七日ノ間ナリ是則華嚴經ノ事ナリ法華經ニハ於三七日中思惟如是事トアルハ此コト也
一偏小十二年　阿含經ト云ハ偏ニ小乘小機ニ對シテ說玉フ也其時刻ハ十二年ナリ
一盪淨虛融　盪トハ一切諸法ト云ト同シ然レハ諸法淸淨ノ妙理ト談シタル義ナリ虛融トハ物ニ實體ナク白キヲ黑シト云テモ道理カヨク通シ衆生ヲ佛ト云テモ其義カ聞ユル樣ニアリ色卽是空々卽是色ト談スル意ナリ又染淨虛融トモ云タソ染ハ迷ノコト淨ハ悟也迷悟不二ト見タルヲ云ナリ是ハ方等經ノ說ナリ三十年ト云ヘバ般若經ヲ打合セテ云タ意ソ山門ニハカクノ如ク立ツルソ三井ニハ方等經ハ十六年ノ說般若經ハ十四年ト各別ニ立ツルソ何レモ仔細カアリ
一一實無相ノ開顯八箇年　是ハ法華ノ不思議ノ妙理ヲサシテ云ソ開顯トハ藏ノ戶ヲ開テ寶ヲ取出シ顯スカコトク佛出世ノ本意ノ珠ヲ初テ法華ニテ開キ顯サシ玉ヘルソ八箇年ノ間ノ說ナリ
一跋提河　有金河ト翻ス一切經音義第一卷ニ出タリ
一雙林樹　具ニハ娑羅林ト云フ此方ニハ高遠ト翻スルナリ其林木ハ餘ノ林ヨリ高上ナレハ遠ヨリ能ク見ル程ニ爾カ云タソ或ハ堅固林トモ云ソ常ニハ枯

ルト云事ハナキソ佛ノ入滅ノ時ニ初テ八本ノ木カ
四枯四榮シタソ此枯營ノ木カ雙ヒタホトニ則雙林
ト云ソ此涅盤ノ年ハ地神第五代ノ八十三萬五千七
百五十四年ニアタルソ
一日光月光　天ノ日月ノ事ニテハナキソ藥師如來ノ
弟子ノ菩薩ナリ彌陀ノ觀音勢至ノアルカ如クソ藥
師經云有二菩薩一名日光二名月光於彼無量無數諸
菩薩衆最爲上首已上
一十二願主　藥師如來ヲ云ナリ十二願ト云ハ
一我成佛時一切衆生我得三十二相　二身如瑠璃內
外明徹　三不令衆生有所乏少　四悉令有情安住道
場　五無諸疾苦各修梵行　六不犯禁戒皆悉淸淨
七衆病逼者悉得滅除　八厭女身者便得男身　九墮
邪見者便得正見　十有遭苦難皆得解脫　十一飢渴
所惱妙飮食足　十二無衣服者花鬘滿足

太平記鈔第十九卷

一藤原ノ繼縄　寶龜十一年延暦十五年丙子右大臣正二位七月十六日薨贈從一位號桃園右大臣右大臣豐成二男母從五位上路眞人山麻呂女也豐成ハ南家祖武智麻呂之長男也

一藤原小里丸　小黒丸ト云アリ大納言正二位母大伴道定女也房前ノ子鳥養其子小黒丸ナリ里ノ字ハ誤歟

一大伴家持　中納言兼春宮大夫大納言旅人卿息也延暦四年八月薨六十八歳也旅人又名多比等云云寶龜十一年參議延暦二年七月中納言云云

一紀古佐美　正六位上宿奈麻呂之子延暦八年征夷大將軍同十六年四月四日　六十五歳

一大伴乙丸　非參議從三位大同四年五月癸酉薨七十歳從三位慈斐男散位從三位大伴宿禰古慈斐飛鳥朝臣常道贈大錦中小吹眉之孫

一文屋綿丸　屋ノ字ヲ系圖ニハ室字ニ作レリ正四位上大同五年九月十一日依田村丸奏叙之十六日兼大藏卿陸奥出羽按察使大納言智怒王之孫從四位下勳三等又異本ニ天武天皇長屋皇子栗栖王長田王廣川王大原王綿丸ト次第シ來レリ

一藤原忠文　參議從四位上枝良三男母息長氏天慶三年征夷大將軍天暦元年六月廿六日薨七十五歳

一象外ノ選ニ當　朗詠下云昇殿是象外選也俗骨不可以蹈蓬萊之雲尚書亦天下之望也庸才不可以攀臺閣之月

一五馬忽　遁齋閑覽云漢制大守駟馬其加秩中二千石乃右驂故以五馬爲貴云云藩子眞詩話曰漢朝臣出使爲大守増一馬故爲五馬云云二説何レモ其義同ジ大守ハ駟馬ナレトモ一位ヲ増スル時ハ右ニソヘムマヲ連ルヲ五馬ト云ナリ然ルニ位官ヲ早ク進ミタルホドニ重山ノ雲等ヲ云ソ

一名家儒林　日野家勸修家ヲ名家ト云也菅家江家ナドヲ儒林ト云ナリ惣別儒林ト云コトヲ文選四十五注ニ謂列洪儒之林言文儒多如林木故名林

一龍鱗ニ付キ鳳翼ヲ攀　杜子美五云攀龍附鳳勢莫當注楊子曰攀龍鱗附鳳翼又文選三十七卷注ニモ見ヘタリ

一周勃　漢高祖ノ重臣ナリ安劉氏者必勃也ト云ハレ

タ名譽ノ者也
一八億四千念　貪欲瞋恚愚癡ノ三毒ト又三毒等分トヲ合テ四ツニ二億一千ノ念々アリ合テ八億四千ノ念ナリ
一一念惡ヲ發セバ一生ノ惡身ヲ得　法苑珠林第二十三擧淨度三昧經云一念受一身善念受天上人中身惡念受三惡道身百念受百身千念受千身一日一夜種生死根後當受八億五千萬雜類之身
一籠鳥ノ雲ヲコイ　文選二十一ニ習々籠中鳥
一涸魚　又四十二云川涸者魚遊逝注謂死也涸トハカルヽトヨムナリ川水ノカレタル處ニ住ム魚ナリ
一鴆毒　此鳥大サ鶚ノ如シ紫綠ノ色ニシテ頸ノ長サ十八寸常ニ蛇蝮ヲ食ス故ニ毒氣甚深シ其毛羽ヲ以テ飮食ノ物ニ歷レハ忽ニ人ヲ殺スナリ左傳ニ管敬仲ガ齊侯ニ對シテ云ハク宴安鴆毒不可懷也トアルモ是ナリ
一尸鳩樹頭ノ花　毛詩七云鳲鳩在乘其子在梅鳲鳩ハハトノ事ソ鳩ハ子ヲ養ニ朝ハ上ヨリ下ニ次第ヲ追テハコクミ暮ニハ下ヨリ上ヘ次第ニ養テ少シモ違ハヌソ樹頭ノ花トハ此鳩ノ居ル樹ノ花ソ鳩サヘ平均如一ナルニ人ハナト前後別離ノ愁ガアルソト云意ナルヘシ
一鶺鴒原上草　毛詩九云常棣篇云脊令在原兄弟急難此篇ハ兄弟ノ親シキコト至テ深ヲ云也脊令ハ飛トキハ鳴キ行トキハ搖キ自ラ舍ツルコトハナキソ兄弟ノ互ニ思相テ少モ離レヌ義ニ比ヘタソ高峯錄六ニモ鶺鴒原上悲無侶鴻鴈雲中痛斷行ト云タソ鳲鳩ノ對ハ無キソ連枝同根何レモ兄弟ノ事ソ
一轍魚雨ヲ得噞喁脣ヲ温　書言ノ第五噞魚口ノ水ヨリ出タル貌ナリ司馬相如傳延頸擧踵喁々然師古曰衆口向上也水ガニコレハ必魚カ口ヲ上ヘ向ルソ
一天跼地蹐　詩十二正月篇云謂天蓋高不敢不局謂地蓋厚不敢不蹐注局曲蹐累足也
一思ヲ荷　選三十一ニ既荷主人恩注荷負也
一不義ノ父ヲ誅シ忠功ノ子ヲ仕例ニ異國ニハ趙盾靈公ヲハ趙穿カ殺シタレドモ世上ニテハ趙盾カ殺シタト云ヒタリ趙世家ニアル也
一弛張有時　禮記曰一張一弛文武之道也又毛詩ニモ有張有弛
一犂牛ノタトヘ　論語ニ子謂仲弓曰犂牛之子騂且角

雖欲勿用山川其舍諸

一蟷螂蟬ヲ伺ヘハ　莊子第二十曰莊周遊乎雕陵之樊覩異鵲執彈留去之一蟬方得美蔭而忘其身蟷螂執翳而搏之見得而忘其形異鵲從而利之見利而忘其眞是ハ第二十卷山木篇ニアリ長キ故ニ意ヲ取テ書ス然ルニ今人間世篇ト云事不審ナリ　說苑第九正諫篇曰吳王欲伐荊告其左右曰敢有諫者死舍人有少孺子者欲諫不敢則懷操彈於後園露沾其衣如是者三旦吳王曰子來何苦沾衣如此對曰園中有樹其上有蟬々高居悲鳴飲露不知蟷螂在其後也蟷螂委身曲附而欲取蟬而不知黃雀在其傍也黃雀延頸欲啄蟷螂而不知彈丸在其下也此三者皆務欲得其前利而不顧其後之患也吳王曰善哉乃罷其兵

一楚ノ宋義カ蚊ヲ殺ニハ馬ヲ擊ス　項羽ハ本來ハ秦ノ懷王ノ臣ソ秦ノ二世王ノ時キニ章邯ト云兵ヲ使シテ楚ヲ圍マレタリ項羽ノ計ニハ只今ヨキ折節ナルホトニ楚ヨリ秦軍ヘ取カケタラハ趙ハ便ヲ得テ內ヨリ衝テ出ツヘキソ然ラハ前後ヨリ取ツヽミタラハ秦軍ハ必ス敗北スヘシト云ハレタレハ宋義カ云ヒヤウニハ其義然ルヘカラス牛ヲ食フ虻ヲ打ニハ蟣虱ヲ破セスト云事アリ是ハ先ツ指アタリタル事ヲセスシテ微細ノ事ニ貪著スルハ所用ナシト云義ソケニケニ秦ヲ討タクハ其時ノ事ナルヘシ今章邯ナトヲ相手ニスルコトハ無用ト云タソ秦本紀云項羽曰吾聞秦軍圍趙王鉅鹿疾引兵渡河楚擊其外趙應其內破秦軍必矣宋義曰不然夫搏牛之虻不可以破蟣虱注如淳曰用力多而不可以破蟣虱猶言欲以大力伐秦而不可以救趙也索隱曰韋昭云虻大在外虱小在內故顏師古言以手擊牛可以殺其上虻而不能破其內虱喩方欲滅秦不可與章邯即戰也鄒氏言虻之搏牛本不擬破其上之蟣虱以言志在大不在小云云コヽニ馬ト云ヘルハ非ナリ

一毗嵐斷ヘテ　瑜伽論第二十七音義云舊經中或作毗嵐婆或作鞞藍亦作隨藍皆梵之楚夏耳此云迅猛風已上此世界ヲ持所ノ大風ナリ無間モ此風カ持タルナリ然レハ文ノ面理カ聞ヘヌソ水輪ヲモ此風カ持タソ有頂天トハ色界天ノ頂上ソ

一囊沙背水　千字文註ニ具ニ見ヘタリ

太平記鈔第二十卷

一烹鮮　老子德經云治大國若烹小鮮注鮮魚也烹小魚不去腸不去鱗不敢撓恐其糜也治國煩則下亂治身煩則精氣散去也已上國主ノ異名ト思フヘシ

一靈神爲怒則災害滿歧　貞觀政要一云人怨則神怒云云則災害必生災害既生則禍亂必作云云　此文體ニ據テ云ヘルナルヘシ

一根ヲ深シ蔕ヲ固　老子經云深根固蔕注樹根不深則拔蔕不堅則落

一式竊觀素昔眇聞玄風　文選序曰式觀元始眇覿玄風云云此文ニ本クト見ヘタリ張銑曰式用也眇遠也覿見也言用視太初遠見玄風云云玄風トハハルカ上古ノ風ト云義也

一菱里之囚　囚本紀云帝紂乃囚西伯於菱里已上文選四十一注云紂以甚賢畏之拘囚於菱里獄名

一掃四明之雲　叡山ハ源天台智者大師ノ餘流也ト云ヘトモ天台ノ第十七祖法智尊者智禮法師ハ四明ノ金氏カ子ニシテ天台ノ教法ヲ通達ノ人也故ニ日本國ヨリ寂照ヲ遣ハシテ惠心僧都ノ問目二十七箇條ヲ尋ラル此時ヨリ別シテ通用ノ義アリシ故ニ叡山ヲモ則ォノツカラ四時トモ云ナリ

一蘇思　蘇ハ休也ト云タソ

一駈金牛開路　蜀記曰昔蜀中無路入秦々惠王聞蜀有五丁力士壯勇乃以鐵作牛五頭詐稱其牛毎日糞金三斗蜀候聞之乃使五丁開山作路入秦取牛五丁既入秦得視之果知糞金之事爲詐然其路亦通矣後五十死秦惠王乃遣張儀將兵伐蜀々遂滅者也

一飛火雞劫城　晋江逌字道載將軍殷浩請爲參軍時羌叛姚襄結營逼浩々令逌擊之逌曰當以計破之乃取數千雞以繩連之繫火於足駭散飛集襄營火發因亂之擊之襄遂大敗也

一疇昔　宣二年傳注云疇昔猶前日也

一范蠡鬪黄池　越世家云勾踐召范蠡曰吳已殺子胥導諛者衆可乎對曰未可至明年春吳王北會諸侯於黄池吳國精兵從王惟獨老弱與太子留守勾踐復問范蠡々曰可矣乃發習流二千教士四萬人君子六千人諸御千人伐吳々師敗遂殺吳太子

一周郎挑赤壁　前ニ云ヘルカ如シ

一否泰　周易ノ二ノ卦ノ名ナリ否ハ塞ノ義ナリ泰ハ

通ノ義ナリ
一卓犖　文選ノ注ニ超絶貌トアリ
一承和修大威德法　承和ハ仁明帝即位ノ時ノ年號也大威德ノ法ヲ修メ次君即位シ玉フコトハ文德帝ノ天安元年三月ニ惟高惟仁ノ位諍ノ時キ山門ノ惠亮和尚此法ヲ修シテ終ニ惟仁御位ニツキ玉ヘリ是ヲ淸和天皇ト申ス然レハ今承和ト云フハ誤ナリ
一承平安四天王之像　是ハ第十六卷ニ注スルソ
一寶祚　祚位也周易云聖人之大寶曰位
一妖孼　祖庭事苑五云上於裔切下魚列切說文云衣服歌謠草木之恠謂之妖禽獸蟲蝗之怪謂之孼
一線縷　線モ縷モトモニイトスヂトヨムナリ
一孟軻有言　第二卷梁惠王篇曰曾子曰戒之戒之出乎爾者反乎爾者也
一項羽拔山之力　本記曰項王乃悲歌慷慨自爲詩曰力山ヲ拔キ兮氣蓋世
一投靑鳥　漢武故事云七月七日忽有靑鳥飛集殿前東方朔曰此西王母欲來有頃王母至二靑鳥夾侍王母傍已上集覽ノ七ニアリ云云然レハ使ノ事ニモ書簡ノ義ニモ用タリ

一惣持ノ扉　惣持トハ陀羅尼ノコトナリ又ハ遮惡持善トモ云ナリ
一劉備ハ王氏ヲ出テ遠カラス　字ハ玄德涿郡人漢景帝子中山靖王之後也孫權ノ妹ヲ妻トセリ
一吳孫權　元來ノ昔ノ姓ハ周文子第八子ヲ衞ニ封セラレテ武公子惠孫ヲ衞ノ上卿トシテヨリ孫ヲ姓トスル也姓孫名ハ權字ハ仲謀ト云フ孫堅ト云人四子ヲ生セリ一ハ策二ハ權三ハ翊四ハ匡ナリ策ハ年十餘歲ニシテ人ニ知レタルソ十七歲ノ時ハ軍兵卒シテ隱レモナキ武邊ヲセラレタルカ早死セラレタソ
一曹操　字孟德小字阿瞞漢ノ曹參カ後胤ナリ
一鼎ノコトク峙　漢書ニ蒯通カ韓信ニ對シテ云ハク方今足下三分天下鼎足而居
一里中有三墳　田開彊古冶子公孫捷ノ三人カ墳ソ
一二桃殺三士　齊景公ニ猛烈ノ士三人アリ右ノ田開彊等ソ己カ勢ヲ專トシテ曾テ上下ノ禮儀モナシ或時ニ大夫晏子カ朝廷ニ參タルニ閣上ニ傲[illegible]シテ居テ起テ禮ヲモセヌソ晏子怒テ其方タチハ何者ナレハ慮外ノ振舞ヲスルト云タレハ我等ヲ御存知ナキカ國中ニ隱レモナキ勳功ノ者トモナリ貴方ツレニ

何ソ起ンヤト云フ晏子ハ語ハナクシテ只今ノ樣ヲ景公ニ申シタリ景公モ彼者トモノ事常ニ法外ノ儀クセコト丶思フト云ヘトモ何トモスヘキ樣ナシト仰セラル晏子カ曰吾一ノ計ヲ用テ寸兵尺刄モ用ヒス彼三人ヲ自殺セシメント云フ景公尤然ルヘシト勅ス晏子曰大王三顆ノ美桃ヲ取テ案上置テ三人ヲ召シ寄セテ宣玉フヘシ此桃ハ外國ヨリ進メタリ一顆ヲハ自ラ食セン殘二顆ヲハ卿三人ニ給ソ各日比ノ功ヲ云ヒテ一顆ヲ食セヨ功ノ劣サルモノハ定テ耻カシク思フ故ニ死セント仰タラハ必二人ナカラ又自殺セント申シタソ景公晏子カ申スコトクシ玉フニ先田開強力マイリテ勅定ノ旨ヲ聞テ劍ヲ拔テ向ヒ前テ云臣カ大王ニ從テ游獵ノ御伴仕リシ時ニ猛虎豺狼カ來テ大王ノ前後ヲ圍ミテ奔走セン所モナカリシヲ某弓ヲヒイテ射倒シテ御命ヲ救ケ奉レリ功コレニハ過シトテ一顆ヲ食シタリ又古冶子カ曰サク大王昔東海ニ遊ヒ玉ヒシ時蛟龍出テ丶王ノ御船ヲ呑ントセシヲ某走岸ニ出テ丶王ノ船ヲ挽寄テ御命ヲ救ヒ申スコトソ類ナク存スル者也トテ一顆ノ桃ヲ食シタリ次ニ公孫捷カ食スヘキ桃ハナシ捷カ曰ク此已前ニ楚國ト一戰ノ時ニ齊軍敗レテ敵ノ百萬ノ衆カ大王ヲ圍テ奔走スルニ路フサカリタルヲ某劍ヲ拔戟ヲ持テ左蕩右突シテ楚ノ兵ヲ斬殺テ大王ヲ救助ケ申ス恐クハ三人カ中ニ最勝タリト存スレトモ食スヘキ桃モナクテ面目ヲ失申スコト無念也トテ自ラ首ヲ刎テ死セリカカル處ニ彼兩ノ者コレヲ見彼理ヲ聞キ我二人カ功ハ小事ナリ然ルヲ桃ヲ食シ又彼者自殺セシムル事偏ニ二人カ耻辱ナリ生キテ人ニ見ヘンモ耻シトテ各劍ヲ拔首ヲ刎テ死ス此謀ハ晏子カシタルソ千字文ノ注ニ殆辱近耻ノ注ニ詳ニ見タソ孔明カ梁甫吟ト云フハ此ナリ詩曰梁甫吟成恨有餘云云

一溝壑　溝水瀆也廣四尺深四尺爾雅曰流水深則成壑

一殘ニ勝チ殺ヲスツ　論語七子曰善人爲邦百年亦可以勝殘去殺矣注云尹氏曰勝殘去殺不爲惡而已

一石ヲ枕ニシ泉ニ漱　晉孫楚字子荊少時欲隱居謂王濟曰當欲漱石枕流濟曰流非可枕石非可漱楚曰所以枕流欲洗其耳所以漱石欲礪其齒

一朕有孔明　蒙求ニアリ

一諸葛孔明　三國志并資治通鑑第十五卷ニ詳ナリ今

コヽニ載タルト大方同シ殊ニ第五卷ニモ注セル故ニ筆ヲ費サス

一或夜兩陣ノ間ニ客星　晉陽春秋云有星赤而芒角自東北西南流亮營中三投再還往大還小俄而亮卒

一蜀先ツ亡ヒ呉後ニ亡　蜀ハ二主合四十三年ニシテ亡フ呉ハ四主ニシテ合六十年ニシテ晉ヨリ倂セ取ルソ

一千鈞弩　千鈞之弩不爲鼷鼠發機萬石之鐘不以莛橦起音注　鼷音奚小鼠也狀如小狐伯勞化地中行食爠火螫毒及人鳥獸皆不痛今之廿日鼠云云鈞トハ三十斤ノ重サ也孟康曰一萬一千五百二十銖

一目禮　目ノ字アシヽ默ノ字ナルヘシ

一漢高祖黥布ヲ討シ時流矢ニ當　通鑑三云上擊黥布時爲流矢所中行道疾甚呂后迎良醫入見曰疾可治上嫚罵之曰吾以布衣提三尺取天下此非天命乎命乃在天雖扁鵲何益罷之

一齊宣王ハ自楚ノ短兵ト戰　齊宣王ノ戰ノコトハ本傳ナシ但周宣王ハ杜伯カタメニ射殺サレタル事ハ周本記ニ見タリ

一龍常保深淵　說苑九云昔白龍下淸冷之淵化爲魚漁者豫且射中其目白龍上訴天帝々々曰當是之時若安置而形白龍對曰我下淸冷之淵化爲魚天帝曰魚固人之所射也若是豫且何罪夫白龍天帝貴訴也豫且宋國賤臣也白龍不化豫且不射

一悲聲呦々　毛詩第九鹿鳴篇云呦々鹿鳴

一羅綺ニタモ堪ス　長恨歌ノ傳辭ナリ華淸宮ノ溫湯ヨリ出テヽ力ノナクシテメヨ〳〵シタル貌ナリ

一叔景舍　東ニアリ麗景殿ノ東ナリ南北ノ舍ナリ五間四面アリ

一ヲキモセス　古今業平歌
オキモセスネモセテ夜ヲアカシテハ春ノ物トテ詠メクラシツ

一忘草ノヲフト云浦
忘草オフル野ヘトハミルラメトコハ忍フナリ後モタノマン　忘草ウヽトタニ聞物ナラハ思ヒケリトハシリモシナマシ

一サソフ水アラハ　古今小町歌
侘ヌレハ身ヲ浮草ノネヲタエテサソフ水アラハイナントソ思大江ノ惟明カ心カハリセシホトニ世ノ中物ウカリシニ文屋ノヤスヒテカ三河守ニ成テ下

シ時田舎ニテ心ヲモ慰メヨカシト我ヲサソヒシ程ニヨミタル歌ナリ

一太宗ノ魏徵ニ哭　魏徵俄ニ病床ニ臥ス其時マテ宅内ニ曾テ正堂トテ常ニ主人ノ居スル所ナシ此事ヲ太宗キコシメサレテ御自分ニ小殿ヲ營作シ玉ハントテ材木ヲ聚メ置玉ヒシヲ止メテ魏徵カ正堂ニ作ラシメントテ則材木ヲ賜フ魏徵ハ忝ク存シ頂戴ハ仕リタレトモ同クハ布被素褥トテイカニモ卑シキ體ニナサレテ下タサレヨト望ヲ申シタル程ニソレニ任テ置キ玉ヘルソ其後數日シテ薨シタレハ太宗ハミツカラ其所ヘ臨幸アリテ慟哭シ玉フソ

一行脚　祖庭事苑八云行脚者遠離鄕曲脚行天下脫情捐累尋訪師友求法證悟也

一庖人　今ノ俗ニ云庖丁人ノ事也

一且過　東坂云身是雲堂且過僧ニ云旅僧ノ一宿ノ所ヲ云ナリ

一鸞刀　春骨云ト注セリ力兗切

一牛頭馬頭　地獄ノ罪人ヲ呵責スル時ノ化現ノ有情ソ

一一日經ヲ書　頓寫トテ多勢相集テ一部ヲ書タツルヲ云ソ多分ハ法華ノ頓寫ヲ以テ本トスルソ

一若有聞法者　法華經第一卷ノ文也法華ノ功德ニヨリテイカナル惡人モ殘リナク佛果ヲ得ルト云文ナリ難有コトナリ

太平記鈔第二十一卷

一時勢粧　イマヤウスカタトヨム白氏文集第四卷ニ時勢妝歌アリ

一暦應元年　戊寅歳ナリ光明院年號ナリ

一四夷八蠻　漢書師古注ニハ蠻夷狄戎四方總稱ト云タソ夷トハ東夷トテ唐カラハ日本ナドヲサシテ云タソ西戎南蠻北狄ト定メタルモ唐ヲ中央ニシテ云タソ此四方ニモ多ノシナカアルソ是ヲ九夷七戎六蠻八狄ト分タソ又風俗通ニハ南蠻ノ類ニ八種アリト云タホトニ今モ八蠻ト云タルモ苦シカラヌソ所詮今ハ唯タ四方ヨリ敵カ起ルト云ハンカタメニ四夷等云タソ

一猛虎檻ニ籠　文選四十一卷云猛虎在深山百獸震恐及在檻穽之中搖尾而求食注銑曰檻圈也穽穿地爲坑以取猛獸也搖尾求食謂求矜以自免也已上圈ハヲリトヨムナリ地ヲホリテ穴ト成シテ猛獸ヲトルナリ

一窮鳥ノ翅ヲ鎩レ　窮ノ字ハ穴ヲ上ニ書キ躬ヲ下ニカケリ鳥ノ網ニカヽリ獸ノオトシ穴ニ入ル姿ナリ極テ困シキコトヲ顯シタル字ナリ故ニ說文ニ極也ト注セリ徐曰入于穴是極也トモ注セリ去ルホトニワナニカヽリタル鳥ノ剩翅ヲソカレタラハ爲方タ爲カルヘシ文選二十一曰戀翮有時鎩注鎩翮不能飛淮南子曰飛鳥鎩羽許眞曰鎩殘羽也トアリ柳文四十二卷ニモ鎩羽ト載タルソ

一涙眼空ク百歩ノ威ヲ閣　此レハ前ノ所ヲ云タル辭ソ虎ハ一目ハ光ヲ放チ一目ニテハ物ヲ看ト云事ヲ挌物論ニノセタソサレトモ檻ニ落タル虎ナラハ涙眼ニシテ光ヲ放ツ威勢ハアルマシキソ閣ハ門扇也ト注ス扉ヲ云ソサルホトニトツルト讀ソ

一歸心遠ク九霄ノ雲ヲ望　此レハ窮鳥ノ志ヲ云タソ九霄トハ天ノ事ソ一聲々觀人歸去啼血江南幾樹花ト杜鵑ノ詩ニ作ルソ籠鳥ノ志シ思ヒヤラレテ哀ナルソ

一諸司恪勤　百司諸職ヲツヽシミツトムルト云義ナリ禁中ノ役者ノ事也

一三家ノ台輔　三家ハ閑院花山院中院ヲ云ナリ台ハ三台ノコトソ輔ハ帝業ヲ輔佐スル義ソ

一五門曲阜　五攝家ヲサシテ云歟曲阜トハ攝政ノ位ノ居所ヲ指テ云ソ周公旦ヲ魯國ニ封シタレハ曲阜

ニ居ラタソ周公カ攝政ノ初ナレハ今ニ至テ用ルソ

一步ヲ失　何ニトモ落付ヌ事ヲ云ソ祖庭事苑二曰按莊子注壽陵燕之邑邯鄲趙之都弱齡未壯謂之餘子猶孺子也趙郡之地其俗能行故燕國少年來學步既乖本性未得趙國之能舍已効人失壽陵之故是以用手踞地匍匐而還也

一霜葉紅於二月花　杜牧之カ詩也

一面縛　前ニ度々ニ注ス

一贔負　ヒイキトチカラヲコシテトカタチヨミニスルナリ文選第二曰巨靈贔負ト云ヘリ翰曰作力之貌也トアリ

一死罪一等ヲ減シテ遠流ニ處　等ノ字ハ禮記ニテハシナト讀メリ伊豆安房常陸佐渡隱岐土佐已上遠流也信濃伊勢已上中流也越前安藝已上近流也神龜元年六月三日定之云云延喜式刑部式ニ出タリ式外ニ近代遣國ノ事上總下總陸奥越後出雲周防阿波已上拾芥抄ニ出タリ又流スト云事ハ堯舜ノ時ヨリ始レリ尚書第二云流共工于幽州蔡氏注曰流遣而遠去如水之流也放置之於此不得他適也云云今モ流人ヲ自由ニ行カサルヤウニスルハ古來ヨリノ大法ナリ

一鬱陶　文選三十一卷注哀思也トアリ尚書五子之歌曰鬱陶乎予心注言哀思也

一治承ニハ新大納言成親卿　中御門也平家物語ニ

一西光西景　小納言入道信西ニ師光成景ト云者アリ成景ハ都ノ者也師光ハ阿波國ノ者也信西平治ノ亂ニ討レシ時二人共ニ出家シテ師光ハ西光ト云ヒ成景ハ西景トソ申ケル成親卿謀叛ノ時ハ西光ハ切ラレケリ

一康和ニハ後二條關白　康和ハ堀河院ノ年號也後二條關白師通公ノコトナリ

一法勝寺　白河ニ六勝寺トテ勝ノ字ノ付タル寺六所アリ是其内ノ一ナリ承曆元年十二月二十八日ニ供養アリ白河天皇ノ御造立ナリ

一非想天　欲界ノ六欲天ヲ打過テ色界ニ十八ノ天アリ其上ニ無色界ノ四空所トテ四天アル其最上ノ極ノ天ノ名ナリ

一金輪際　此大地ノ厚ヲ大寶積經第七十三卷云此大地厚一百六十萬由旬ト說キ善見寺毗婆沙律第四卷ニハ地厚四那由他二萬由旬ト宣タリ此大地ノソコヲ金輪際ト云ソ

一金峯山　本朝ノ五ノ奇山ノ第一也大和國ニアリ彌勒出世ノ處ト云得タリ此山ノ土石ハ能金トナルヘキ故ニ則山ノ名トスル也義楚六帖第十一卷云日本國都城南五百餘里有金峯山頂上有金剛藏王菩薩第一靈異山有松檜名華軟草大小寺數百節行高道者居之カヤウニ異國マテモ委ク聞ヘテ知タル名山トハ日本ニハ尙知ル者ノハ希ナリ

一金剛九會曼荼羅　九會トハ一印會理趣會降三世會降三世三昧會成身會羯磨會微細會供養會四印會也曼荼羅トハ輪圓具足トテ缺タル事ナキヲ云ナリ是等ハ何モ眞言家ノ所談ナリ

一崔嵬　毛詩ニ云陟彼崔嵬注陟升也崔嵬土山戴石者云云張平子カ南都賦ニハ崔嵬ノ字ヲサイクワイトタカクサカシトヨメリ去レトモ今奇麗ナル事ニ云付タルハイカン但シ奇麗ニシテ剩極メテタカシト意得タル乎

一鴈塔　沈佺期遊少林寺詩曰鴈塔風霜古注佛前西域有比丘見群鴈飛乃曰可充我食鷹即墮地佛曰此鴈王也不可食乃立鴈塔

一天竺ノ無熱池　阿耨達ト云フ唐ニテハ無熱惱ト云ナリ周リ八百里アリ此池中ニ住メル龍王ニハ熱惱ナキカ故ニ即名トスル也上位ノ菩薩願力ヲ以テ化シテ龍王トナリテ世ヲ救ルト見タリ大智度論ニ出タリ

一震旦ノ昆明池　此池ノコトハ第九卷ニ注スル故略ス

一先帝崩御　後醍醐天皇ヲサスナリ

一南朝ノ年號ハ延元三年　此歲ハ北朝光明院ノ暦應元年戊寅ナリ

一不豫　尙書ニハ弗豫トアリ但不ト弗ト同シキ故也天子ノ御惱ノ事也尙書正義曰何休云天子曰不豫儲侯曰負玆大夫曰犬馬士曰負薪

一醫王善逝　醫王トハ藥師ヲサスソ無量義經ニハ釋迦ヲ醫王大醫王トアルソ善逝トハ佛ニハ十號カアル其內ノ一ノ名也瑜伽論第三十八卷ニハ上昇最極永不退還故名善逝ト宣ヘ成實論第一卷ニハ佛有正道行施等行故名善逝ト明セリ

一耆婆　翻譯名義集ニ云耆婆或云耆域或名時縛迦此云能活又云故活影堅王之子善見庶兄奈女所生出胎即持針筒藥囊其母惡之即以白衣裹之棄于巷中時無

畏王乘車遙見乃問之有人答曰此小兒也又問死活耶答云故活王即勅人乳而養之後還其母四分律云耆婆初諸得叉尸羅國姓阿提黎字賓迦羅而學醫道經于七年其師即便以一籠器及掘草之具令其於得叉尸羅國面一由旬求覓諸草有不是藥者持來耆婆如教即於國內面一由旬周竟求覓所見草木盡皆分別無有草木非是藥者師言汝今可去醫道已成我若死後次即有汝耆婆經云耆婆童子於貨柴人所大柴束中見有一木光明徹照名爲藥王倚病人身照見身中一切諸病

一扁鵲　史記列傳四十五曰扁鵲者勃海郡鄭人也姓秦氏名越人少時爲人舍長舍客長桑君過扁鵲獨奇之常謹遇之長桑君亦知扁鵲非常人也出入十餘年乃呼扁鵲私坐間與語曰我有禁方年老欲傳與公公毋泄扁鵲曰敬諾乃出其懷中藥予扁鵲飲是以上池之水三十日當知物矣乃悉取其禁方書盡與扁鵲忽然不見殆非人也扁鵲以其言飲藥三十日視見垣一方人以此視病盡見五藏癥結特以診脉爲名耳已上　又八十一難經序曰秦越人與軒轅時扁鵲相類故仍號扁鵲シカレハ上古ト合テ二人アリ

一晏駕　天子ノ崩御ノ事也　齊竟陵文宣王行狀曰武皇晏駕注向曰晏駕謂天子崩又應劭曰天子當晏起早作如方崩殞故稱晏駕韋昭曰凡初崩爲晏駕者臣子之心猶謂宮車當駕而晩出

一神地山　地ノ字ヲ路ニ改ムヘキ乎伊勢ノ外宮ノアタリノ山ヲ云フ名所ナリ新古今大神宮ノ歌　太上天皇ナカメハヤ神路ノ山ニ雲消テタヘノ空ニ出シ月カケ

一三明ノ覺路　三明トハ一ニハ宿住智證明此レハ過去ノ八萬劫ノ事ヲ明了ニ知ナリ二ニハ天眼知證明コレハ未來八萬劫ノ事マテヲ衆生ノ死此生彼ノスカタ業ノ因緣等ヲ具ニ知ナリ三ニ漏盡知證明コレハ現在十方漫々ノ事ヲ悉ク知見シ又見惑思惑ヲ斷盡スル知ナリ何モ明了ノ覺ナレハ三明等ヲ云ナリ

一妻子珍寶及王位臨命終時不隨者持戒慚愧不放逸今世後世爲伴侶　是ハ大集經第十四卷虛空藏菩薩品ノ文也此文ヲ仰テ信シ思フヘシ凡ソ此界ニ生ヲ受ル者ハ悉ク過去ノ業因ニヨリテ貴賤貧福苦樂得失ハアルソカシ今ヨリ云ヘハコソ過去ナレハ未來ノ生ヲ受ケナハ今モ又タ過去ノ業因トコソナルヘケレ因果ヲ思フホトノ人是ヲヨク心得ヘキ者也千歲

ヲ期スル命モハヤク過キ一期ヲハカラウ策コトモ既ニ臨命終ノ砌リニ所詮モナクシテ罪業ト共ニ打ツレテ冥途ニ趣ン時ニハ佛ノ金言ノコトク妻子珍寶モ却テ後世ノ苦報ノ種ト成リ長劫ノ生ヲ牽ク縁ト計成リテ得脱ノナカタチトハ成リカタシ天台止觀第七卷云四方馳求貯積聚斂聚未足溘然長往所有產貨徒爲他有冥々獨逝誰訪是非ト云ヘリ但シカヤウニ云ヘトモ心ヨリ起ルニアラス一端ニ思ヒアタリタル計リニシテ是非コレヲ勤ントスル事モナシ恥カマシキ事トモナリ去レトモ上代ト云大唐ノ歷々ノ時代ナリケレトモ此道ハ深ク思ヒ入ルコト難シト見タリ故ニ止觀第七云或出家人智解溢智或精進滅火而不悟無常諺云可怜無五媚精進無道心此之謂也ト云云 此ヤウノ事ハ此注ニ云ヘキコトナラサレトモ常ニ思フ事ナレハ筆ヲ馳ス見ン人ハ所用ナシト思ハンモ最不義ナキ者也

一心ニ甘　或本ニ甘ヲ有ニ作ル其義モ不苦乎甘心ト云ニ二義アリ毛詩ニ甘心首疾ト註ニ甘ハ厭也トイトウトヨム此時ハ心ニキラウ義ソ又箋云心不能已如人心嗜欲所貪口味不能絕也ト云フ心ハ味ノヨキ物ヲ食シテヤムコトヲエス望ヲ作ス義ト註スコレハ心ニ合フ事ソ史記封禪書ニモ莫不甘心焉索隱曰謂心甘羨也云云

一秦穆公カ三良ヲ埋　史記秦本紀云秦繆公卒葬雍從死者百七十七人秦之良臣子與氏三人名曰奄息仲行鍼虎亦在從死之中應劭云秦穆公與群臣飲酒酣公曰生共此樂死共此哀於是三人許諾及公薨皆從死杜預云此以人葬爲殉也云云 曹子建カ三良詩云秦穆先下三臣皆自殘生時等榮樂既沒同憂患誰言捐軀易殺身誠獨難攬涕登君墓臨穴仰天歎長夜何冥々一往不復還黃鳥爲悲鳴哀哉傷肺肝

一始皇帝ノ寶玉ヲ隨シ　始皇即位三十七年ノ七月ニ砂丘ニテ崩シケルヲ九月ニ驪山ヘ葬ケリ此時ニ奇器珍怪ノ物共ヲ悉ク冢中ヘ埋ミ入タソ匠人ヲシテ作ラセテ弩矢ナトモ入タソ其外カ後宮ノ中ニ子ノ無者ヲ集テ死ニ從ヘタソ始皇本紀曰九月葬始皇驪山而致椁宮觀百官奇器珍怪徙藏滿之正義曰言冢內作宮觀及百官位次奇器珍怪徙滿冢中トアリ皇覽曰墳高五十餘丈周廻五里餘

一九原ノ旅　柳文第四十二卷曰九原猶寄若堂封注韓

曰記檀弓文子曰武也得從先大夫於九原注晉卿大夫之墓地在九原ト云ヘリ

一雲ノ如　毛詩ニ齊子歸止其從如雲注衆多也

一無常ノ敵　止觀第七云無常殺鬼不擇豪賢危脆不堅難可恃怙　コレモ無常ノ敵ノ事ヲ云ナリ

一中流ニ舟ヲ覆テ一壺ノ浪ニ漂　東坡第九巻註遯齋閑覽曰傳云中流失船一壺千金今所謂浮環者凡渡江海必預備浮環以虞風覆濤溺之患其形如環而空中用帛爲滯挂之頸上出兩手以按之則浮而不溺可以待救至今浙人呼爲壺

一終焉　程子曰君子曰終小人曰死

一棺槨ヲ厚シ　白虎通上云棺之爲言完也所以藏尸令完全也槨之爲言廓也所以開廓辟土無令迫棺也此棺ヲ厚クスルニ付テ位ニヨッテ違ルナリ禮記王制ニハ天子棺槨九重衣衾百二十トアリ下位コレヲ略ス

一圓丘　惣シテ圓丘トハ仙境ノ山ノ名ニシテ凡俗ノ到ル所ニ非故ニ天子ノ御廟ノ事ニ用ルナリ文選二十一遊仙詩曰圓丘有奇草鍾山出靈液注向曰圓丘山名奇草芝草也善曰外國圖曰圓丘有不死樹食之乃壽

一鼎湖雲　朗詠下云秋風帳望鼎湖雲史記封禪書曰黃帝采首山銅鑄鼎於荊山下鼎既成有龍垂胡髯下迎黃帝々々上騎群臣後宮從上者七十餘人龍乃上去餘小臣不得上乃悉持龍髯々々拔墮々黃帝之弓百姓仰望黃帝既上天乃抱其弓與胡髯號故後世因名其處曰鼎湖其弓曰烏號

一覇陵ノ風　何トモシラス但義推スルニ前漢ノ李廣ハ覇陵ノ舊將軍ナリシカ事ノ仔細アツテ庶人ト成テ藍田ノ南山ノ中ニ居シテ射獵シテ年月ヲ送レリ今後醍醐天皇ヲモ是ニ比シタルナラン夙夜トハ晝夜ト云カ如シ

一末法ノ風俗　末法トハ佛經ヨリ出タル語ナリ釋尊二月十五日ニ涅槃ニ入リ給ヒテヨリ已後一千年ノ間ヲハ正法ト云フ其後ノ千年ノ間ヲハ像法ト云フ合テ二千年ヲ過テ後ノ一萬年ノ間ヲ末法ト云ナリ慈恩大師ノ注ニモ末ハ無也ト云ヘリ佛ノ敎モ唯名ノミ殘リテ更ニ修行スル人モ無ク元ヨリ現ニ悟ヲ得シ者モ無キ時分ナレハ末法ト云ソト也然ルニ佛法王法ハ一具ノ物ナレハ天下モ久亂ル、コト偏ニ末法ノシルシ也

一御裳濯河ノ流　倭姫命伊勢ヘ御下向ノ時ニモスソ

ヲ瀝玉フソレヨリミモスソ河ト申ス也神慮ノメクミ絶ヘサルヲ河ノ流ニ比シタルソ

一筑波山ノ陰　常陸國ノ名所ナリ君ノメクミノ深ヲツクハ山ノ陰ノ深キニ比ヘタリ　古今歌

筑波ネノコノモカ　ニ陰ハアレト君カミカケニマス陰ハナシ

同カナ序ニツクハ山ニカケテ君ヲネカヒトモ書ケリ

一仲連カ跡ヲ尋　戰國策　曰齊人魯仲連遊於趙聞魏新垣衍勸趙尊秦爲帝於是連見衍曰彼秦者棄禮義而上首功之國也彼即肆然爲帝則連有赴東海而死耳云云委ハ列傳第二十三ニ出タリ

一寗戚カ行ヲ學　三齊略記云寗戚候齊桓公出扣牛角歌曰南山粲々白石爛々中有鯉魚長尺有半生不遭堯與舜禪短布單衣纔至骭從昏飲牛至夜半長夜漫々何時旦桓公召之因以以爲相也云云　仲連カ事ヲ云タルハ無威無德ノ主ヲ諂テ奉公スル義ハイヤト云意ソ又寗戚カコトヲ云タルハ有德ノ主人モアラハ罷出テヽ奉公ヲモ仕ラント望ミ思フ義ソ

一文王草昧ノ主　草昧トハ初ノ事也周易屯卦云天造草昧注造物之始々於冥昧故曰草昧也

一孝景　高祖ノ太子也景ノ字ハ誤レリ惠ニ改ムヘシ名ハ盈ト云タソ在位七年壽二十四ニテ崩ス

一義心金石ノ如　文選四十二卷曰金石之功注濟曰金石言堅不朽也

一同十月三日　延元三年也

一繼體　索隱曰謂非創業之主而是適子繼先帝之正體而立者也

一登極　人世ノ極位ニ登ト云義也天子ノ御位ノ事也日本紀第二十九卷ニハ騰極トモ書ケリ此二字ヲヒツキトヨメル

一國郡卜定　此來歷ハ陰陽ノ兩神天ノミハシラヲメクリテミトノマクハイシテ國土海山萬物ヲウマントテ時日ヲト定シアマクタリ給フ是此濫觴ナリ又地神第三代瓊々杵尊木花開姫ト契テ日向ノタカヤト云所ニテ御子タチヲ生玉フ時ウラヲシテ田地ヲ定テ其田ノ稻ヲ以テ酒ニ作リ飯ニ炊テ嘗玉ヒシヨリ起レリ今ノ世マテモ國郡卜定ノウラニアタリタル郡内ニ勝地ヲヱラヒテ田ヲ點スル事是也國ハ上古ハ定事ナシ延喜以後近江ヲ以テ悠紀トシ丹波備中ヲ以テカハル〳〵主基トス但冷泉院ハ播磨ヲモ

ヲ主基トシ郡ハト定ニヨルナリ國郡ト定ハ二月ヨリ九月マテ八箇月ノ中ハ毎月其例アリ多分ハ四月中ニ行ルヽ也皆御即位以後ノ事也但御即位以前又其例アリ悠紀ハ天ノ神ヲマツリ主基ハ地ノ神ヲマツルナリ

一御禊　大嘗會ノ御前齋也來歷ハ陰神伊弉冊ノ崩御ナリシヲ陽神伊弉諾慕テ黄泉マテ尋入タマヒテ其御貌ヲ見タマヘハアサマシク我思ハスキタナキ所ニ來ニケリ我身ノケカラハシキヲ洗ヒステントノ玉ヒテ橘ノ小戸ノ檍原ト云所ニテミソキハラヘシ給フヨリ起ルナリ

一拔穗　國郡ノ田地ヲト定テ神田ヲ作テ其年ノ十月ニ勅使ヲ下シテ其稻ヲ取ル此ヲ拔穗使ト云ナリ其稻ヲ用十一月ノ中ノ卯ノ日官廳ニ於テ天子手ヲ自ラ此新米ヲ供進シマシマスヲ大嘗會ト申也

一龍尾堂　禁中ニアリ昌福堂ノ近所ソ

一伶倫　選三十五注云伶倫古之善音者也今ハ樂人ノ惣名トナレリ

一正始ノ曲ヲ調　毛詩序曰周南召南正始之道王化之基云云　文選第四十五卷毛詩序注曰正始之道謂正王道之始也ト云ヘリ李善曰始者謂王道興衰之所由也ト云ヘリ關雎ハ樂テ淫セサル等ノ事ミナ正始ノ義也

一雅音ヲ奏ス　毛詩序曰雅者正也言王政之所由廢與也注云政則正也言正天下之事トアリ鄭衞ノ樂ニアラスシテ安國理民ノ樂ヲ雅音トハ云ナリ

一ヲミノ衣　小忌ノ裝束アリ

一五節ノ宴醉　清見原天皇ヨリ起レリ常ノ沙汰ノ如シ

一風教　君德ノ風儀ヤ敎化ノ事ソ或ハ又尙書ニハ風敎也ト注シテ同シク敎ニ計ニ用タソ

一百官冢宰ニ任テ　論語憲問篇云子張曰書云高宗諒陰三年不言何謂也子曰何必高宗古之人皆然君薨百官總巳以聽於冢宰三年云云　冢宰トハ天官佐王治者ナリ百官モ悉ク冢宰ニ諸職ノ事ヲ聽テ天子ハ三年ノ間ハ諸篇聽玉ハヌソ

一惘龍　惘ハ失意貌ト注セリホルヽトヨム韻會ニハ通シテ作罔トアリ是則罔々然無知ト注ス龍ノ字ハ不審ナリ聾ノ字ナルヘキカ

一御國忌　天子ノ御忌ノ事ソ今ハ帝ノ御中陰ノ間ヲ

サス
一御中陰　此生ノ後又他生ノ前ニアル五陰ヲ中陰ト云也此間ニシテ亡者ノタメニ修善スレハ必ス善處ニ生シ或ハ成佛スト定ム其作法ノ事灌頂經第十一巻幷無常經等ニ詳ニ說レタリ
一藤壺　女御更衣參上ノ所也近代ハ爲御所
一淺香ノ沼ノアヤメ
陸奥ノ淺香ノ沼ノ花カツミカツミル人ニ戀渡ルラン
一玉顏寂莫涙欄干　長恨歌ニアルソ心ノ中ニ思テ聲ニハ出サス涙ヲ流シタル體ソ寂莫トハ人聲ノナキヲ云ソ欄干トハ涙ノタラ〳〵ト垂貌ソ
一本アラノ小萩
我宿ノ本アラノ小萩サキシヨリヨナ〳〵月ノ影ソウツロウ
一井テノ山フキ
蛙ナク井テノ山フキ散ニケリ花ノサカリニアワマシ物ヲ
一遍照　大納言良峯安世男嘉祥元年三月二十一日天王崩曰出家俗名宗貞號華山僧正

一我落ニキト
名ニメテヽ折レル許ソ女郎花我オチニキト人ニ語ソ
一光源氏ノ大將ノ白クサケルハナ　源氏物語ノ夕顏巻ニ五條ワタリシツカ家ノ軒ニ白花サク隨身シテ何條花トヽヒ玉ヘハ云云
一芙蓉ノ瞼　瞼ハ頰也ト注スホウツラヲ云也
一笙ノ岩屋　吉野ノ奥ニアリ行人ノ籠リヰテ薰修ノ奇特ヲ顯ハス所也
一王昭君　石季倫カ王明君辭序曰王明君者本爲王昭君以觸文帝諱改之匈奴盛請婿於漢元帝以後宮良家子明君配焉注李善曰琴操曰王昭君者齊國王襄女也年十七献元帝單于遣使請一女子帝以昭君賜單于
一安濃カ浦ニ引網
伊勢ノ海ヤアコキカ浦ニ引アミノタヒ重ナレハ顯ニケリ
一錦木ノ千策ヲ重シ　歌林良林云錦木ハ一說ニ云オクノ夷ノ男女ヨハントテ文ヲヤル事ハナクテ一尺計ノ木ヲマタラニ色トリテ其女ノ門ニ立レハアハント思フ時ハ千策ニ成テ取入ナリアハシト思フ人

ニハトリ入サルニヨリテ千策ニナリテ朽ヨシヨメル也

錦木ハ千策ニナリヌ今コソハ人ニシラレヌネヤノ中ミメ

錦木ハタテナカラコソ朽ニケレケフノ細布ムネアハスシテ

一コカレタル　薫物ヲタキシメシタルヲ云

一新古今ノ十戒ノ歌　第二十卷十戒ノ歌ニ四首アリ是ハ不邪婬戒ノ歌ナリ

一三途　火途血途刀途ヲ云ナリコレカ地獄畜生餓鬼トニアタルナリ四解脱經ニ說レタリ右ニモ云カ如ク死出ノ山ハ佛說ニハアラス故ニ出所ヲハシラヌソ

一見スモアラス見モセヌ　伊勢物語ニ昔右近ノ馬場ノヒオリノ日向ヒニ立タリケル車ニ女ノカホノ下簾ヨリホノカニ見エケレハ中將ナリケル男ヨミテヤリケル

見スモアラス見モセヌ人ノ戀クハアヤナクケフヤ詠メクラサン

一鬪　ウカヽウ山谷一云結髮鬪儒鬪音及甚切字書注云馬出門貌

一巫女廟ノ花　朗詠曰巫女廟花紅似粉昭君村柳翠於眉

一晉ノ石季倫カ綠珠カ故ニ亡サレ　胡曾詩云晉石崇致富好色不量有別館在河陽金谷時趙王倫專權崇有妾云綠珠美而艶善吹笛孫秀使人求之崇時在金谷盡出其妾數十人示是云惟所擇使者云吾奉命索綠珠崇云綠珠吾所愛不可得也秀怒乃勸倫誅崇々正宴於樓上倫使者到門崇謂綠珠云我今爲爾得罪綠珠泣云當致死於君前因自投于樓下而死乃車載崇詣東市崇嘆云奴輩利吾財刑者云知財致害何早不散崇不能答崇母兄妻子俱害已上晉書云石崇字季倫渤海南皮人早有智慧稍遷至衞國卿云云

一金谷ノ花　文選二十卷金谷集注善曰酈元水經注曰金谷水出河南太白原東南流歷金谷謂之金谷水東南流經石崇故居

太平記鈔第二十二卷

一造父カ御ヲ取テ千里ニ不疲　史記第五秦本紀云造父以善御幸於周穆王得驥溫驪驊騮騄耳之駟西巡狩樂而忘歸徐偃王作亂造父爲穆王御長驅歸周以救亂穆王以趙城封造父云々周ノ穆王ノ西域ニ行玉フコト又列子第三卷ニモ見ヘタリ

一馮夷カ道　河神ノコトナリ文選十三卷雪賦注曰莊子曰夫道馮夷得之以遊大川抱朴子釋鬼篇曰馮夷華陰人以八月上庚日度河溺死天帝署爲河伯トアリ莊子第六太宗伯疏云姓馮名夷弘農華陰潼鄕提首里人也

一驪龍頷下ノ珠　止觀一云明月神珠在九重淵內驪龍頷下輔行云驪龍者黑色無角雌龍也云云　又莊子ニ出タリ

一弓ハ養由カ跡ヲ追　祖庭事苑二云養由基善射趙恭王出遊見猿在樹左右射之猿巧能接箭々莫能中王乃命由基射之基調弓矯矢未發猿乃抱樹以號云云　今コヽニ云フモ皆コレヲ取レルナリ

一缺唇　イクチトヨムナリ

一昔周ノ世衰ヘントセシ時戎國亂　周ノ代ノ事ニテハアラス上古ノ事ナリ戎國トハ一國ノ名ニアラズ西戎トテ漢地ヨリ西ニアル國ヲ云ソ事文類聚第四十卷云昔高辛氏有犬戎之冠帝患其侵暴而征伐不克乃訪募天下有能得犬戎之將吳將軍者賜黃金千鎰邑萬家又妻以少婦有畜狗其毛五彩名曰槃瓠下令之後槃瓠俄銜人頭詣闕下群臣怪而診之乃吳將軍首也帝大喜且謂槃瓠不可妻之以女又無封爵之道議以報之而未知所宜女聞以爲皇帝下令不可違信因請行帝不得已以女妻槃瓠々々得女負而走入南山石室中險絕人跡不至經三年生六男六女槃瓠因自夫妻好色不服製裁皆有尾其世後以狀白帝於是迎諸子衣裳斕斑言語侏㒧好入山壑不樂平曠帝順其意賜以名山廣澤其後滋蔓號曰蠻夷今長沙武陵蠻是也出後漢南蠻傳

一輪寶ノ山ヲ崩　人壽八萬歲ノ時轉輪王世ニ出現ノ時ニ七寶自ラ至ル七寶ノ中ニ輪寶アリ其德用ニヨリテ山川モ俱ニ平等ニ成テ自在ノ義ヲアラハス也

一累石ノ卵ヲ壓ス　韻府云五代周世宗征河東劉旻曰若遇我師如山壓卵云云　或本ニハ磊石ニ作ル

一膚不撓其目不瞬　孟子第三云北宮黝之養勇也膚撓

撓不目逃云ヘリ注曰北宮姓黝名也人刺其肌膚不爲撓劫刺其目々不轉睛逃避之矣

一羿控弓　論語羿善射又史記夏本記ニ具ニノセタリ帝羿ハ有窮氏ナリ其ノ已前ノ本姓ハシラレス五帝ノ時ノ帝嚳ノ時ヨリ世々相ツイテ射業ヲ本トセリ其レヨリ后羿ト云ト見タリ夏代ノ羿ヨリ吉甫ト云者ニ射ヲ學ヒタリ臂カ長テ善ク射タル故ニ別シテ名ヲ得タリ夏第六代帝相ノ時ニ至テ權威ヲ專ニシテ剩帝相ヲ商丘ト云所ヘ遷シ恣ニ田狩ヲ事シテ又寒浞ト云者ヲ臣下トセリ然ルニ寒浞又惡人ナレハ羿ヲ桃梧ト云所ニテ殺シ結句夏代ヲ奪テ帝位ニ至リ羿カ妻ヲ密通シテ奡ト豷ト二人ノ子ヲ生シタリ正義曰帝王紀云帝羿有窮氏未聞其姓何先帝嚳以上世掌射正至嚳賜以彤弓素矢封之鉏爲帝司射歷虞夏羿學射於吉甫其臂長故以善射聞及夏之衰自鉏遷于窮石因夏民以代夏簒帝相徙于商丘而信寒浞以爲已相寒浞殺羿於桃梧浞遂代夏立爲帝寒浞襲有窮之號因羿之室生梟及豷多力能陸地行舟云云　又論語曰羿善射奡盪舟孔安國曰羿有窮之君簒夏后相之位其臣寒浞殺之因其室而生奡々多力能陸地行舟己上　又左傳襄公四年ニモ詳ニアリ浞ハ士角反ソ豷音戯ソ

一天ニ懸ル九ノ日ヲ射テ落　右ニ云ヘルカ如ク五帝ノ帝嚳ノ時ヨリ射ル者ヲ羿ト云ケレハ打嗣テ代々ニ羿ト云者アリ天ノ九ノ日ヲ射ケルハ又堯ノ時ノ事ナリシカルヲ今ハ夏ノ代ノ羿カヤウニ書ケリ左ニテハ無シト思フヘシ淮南子曰堯時十日並出草木燋枯堯命羿仰射中九烏皆死墮羽翼

一其臣寒浞ニ被殺　羿カ殺サレタル事也奡ハ寒浞カ子ナリ羿カ威勢ヲモツテ帝相ヲ商丘ト云所ヘウツシ置ク時ニ斟灌斟鄩ト云者トモカ帝相ノ一族ノ衆ナレハ馳走シ奉リケルヲ寒浞カ時ニ至テ奡ニ云ヒツケテ軍ヲ起シテ此者トモヲ滅ホシ遂ニ帝相ヲモ殺サシメタルソ史記正義曰使梟帥師滅斟灌斟鄩殺夏帝相封奡於過封豷於戈云云　過モ戈モ所ノ名ナリ

一或ハ夏后小康ニ討タレ　少康ハ帝相ノ子ナリ遂ニハ寒浞モ奡モ豷モ悉ク殺サレタソ其由來何事ソナレハ帝相ノ后キハ有仍國ノ君ノムスメ也此少康ヲ孕テ本國ヘ逃テ行テサテ少康ヲ誕生セリ然ルニ帝相ノ根本ノ貳ナキ臣下ニ靡ト云者アリ羿カ亂ノ時ハ力オヨハスシテ羿ニ仕ヘテ居ケルカ少康ノ母ノ

國ニシテ生玉ヒ成人シ玉フト聞テ彼斟灌斟鄩カ討モラサレノ人衆ヲ集テ軍ヲ起シ寒浞ヲ殺シテ有仍國ヘ迎ヲツカハシテ少康ヲ立テ天下ノ帝王ト成シ奉ケリサテ過國ヘ軍ヲ取リカケ羿ヲモ殺シ少康子帝杼ノ時戈國ヘ軍ヲ起シテ豷ヲモ殺シテ夏代ヲ中興セリ具ニ史記ニ出タリ

一開元ノ宰相宗開府　開元ハ玄宗ノ時ノ年號也其比ノ宰相モ多アレトモ別シテ宋璟ト云フ者ヲ賢臣トテ歎タソ開府儀同三司ハ官ソ范華陽曰宋璟可爲賢相見其始而知其終沮其勝而憂其敗明皇牽以讒武至於大亂何其智之明歟眞可謂賢相矣シカレハ宗ノ字ハ誤レリ宋ノ字ニ作ルヘシ

一幼君ノ爲ニ等　此文體ノコトクナレハ宋開府カ幼君ノタメニ惡シキ政ヲシタルヤウニ聞ルソ左ニテハ無シ玄宗ノ初ヨリ武功ヲコノミ開元十九年ニハ太公望ノ廟ヲ置テ張良ヲ以テ配享シ古ノ名將ヲ選テ十哲ニ備ヘ祭ヲ致スコト孔子ノコトクセリ劉友益曰帝事邊功故有此令而以白起輩爲十哲帝之將以兵終其兆見矣カヤウニ玄宗ノ武功ヲケカシ遂ニ祿山カ亂ニアハレシ事ヲ諸儒ソシリタリ宋開府ハ開元二十一年ニ致仕シテ東都ニ還二十五年ノ十月ニ卒セリ天下ノ諸人モコレヲ深ク惜ミ哀タソ文貞公ト諡セリ

一以管窺天　史記索隱曰按東方朔云以管窺天以蠡測海皆喩小也然此語本出莊子文云云　莊子秋水篇云用管闚天用錐指地

一听途説巷　論語第九云道聽而塗說德之棄也コレヲ本トシテ云ヘルナルヘシ

一周ノ末戰國ノ時　史學提要云戰國之世合爲七雄注自元王以後爲戰國トアリ七雄トハ秦魏趙韓齊楚燕ヲ云ナリ呉王闔閭ハ夫差ノ父也

一孫子ト云ケル勇士　史記列傳第五卷ニ見タリ孫子ハ齊人也呉王ノタメニ兵法十三篇ヲ著セリ本文ハ長篇ナリ大方ハ今コヽニ見タルカ如シ

一夫以不敎之民戰ルコト是ヲ棄ヨト云　論語第七ノ文也孫子カ語ニハ非サレトモ今作者カ引テ云タルソ

一宮中ノ美人三千人ヲ南庭ニ出　史記ニハ出宮中美女得百八十人孫子分爲二隊以王之寵姬二人各爲隊長皆令持戟云云　隊トハ一手々々ニ分タル體ソ

一美人三人ヲ忽ニ斬テ捨　史云遂斬隊長二人以徇用其次爲隊長一方ノオトナト云意ソ

一立將兵法　六韜第三卷ニ出タリ直解曰立將者建立大將也武王問立將故以名篇

一授斧鉞等　講義曰操鉞授柄者取其有所執也

一操斧等　講曰操斧授及取其有所斷也

一小豆島　日本紀ニモ沙汰アル島ナリ

一ヒク手アマタ　古今歌

オホヌサノ引手アマタニ成ヌレハ思ヘトエコソタノマサリケレ

一源氏ノ雨夜ノ物語　源氏帚木ノ卷ニアリ一條院ニテ頭中將式部右馬頭諸人ノ善惡ノ品ヲ定メシヲ雨夜ノシナ定メト云ナリ

一頭中將指ヲクヒ切タリシ　頭中將指ヲクイ切ニハアラス帚木ニ女モエオサメヌスヂニテヲヨヒヽトツヲヒキヨセテクイテ侍シヲオトロ〳〵シクカコチテカヽルキスサヘツキヌレハイヨ〳〵マシラヒヲスヘキニモアラスハツカシメ給ヌルト云

一逢坂ノ關ノ岩カト踏鳴　拾遺第三　大貳高遠

逢坂ノ關ノイハカトフミナラシ山タチイツルキリ原ノ駒

高遠ハ公任卿ノ一門ノ衆ナリト云

一千佛ノ座　過去ノ莊嚴劫ノ千佛現在ニモ賢劫ノ千佛出現シ玉フト定メタリ弘法大師ノ入定モ當來ノ彌勒佛ノ出世ヲ期ストノ玉ヘハ千佛ト云モ賢劫ノ千佛ノ事ヲ云ナルヘシ千佛ノ第一ハ拘那含佛ト云ヒ最後ノ佛ヲハ樓至佛ト云ナリ三千佛名經ニ見タリ已字函ニ入タソ

一無漏　漏落生死故名爲漏ト釋シテ生死流轉ノ身ヲ受クル事ハ業煩惱ノワサナリ故ニ煩惱妄想ヲサシテ漏トハ云ナリ然ルニ佛法三昧ニ住シテ有爲ノ妄法ヲ打拂テ一點ノケカレモナキ重ヲ無漏トハ云ナリ

一三會曉　彌勒下生經ノ說相ナリ廣文ヲハ引クニ及ハス佛祖統紀第三十一卷云世尊初會於金剛座上說法九十六億人得阿羅漢二會於城外華林園說法九十四億人得阿羅漢三會復在華林園說法九十二億人得阿羅漢ト云ヘリ曉ト云字ヲ加フル意ハ今釋迦ノ佛日ハ涅槃ノ雲ニ隱レ玉ヒテ後ニ彌勒佛世ニ出玉フホトニ日ノ西山ニ隱テ又曉東岱ニ光ヲ示スカ如ナ

レハナリ其上又下生經ニモ當其夜半彌勒出家即於其夜成無上道ト說カレタレハ曉ノ字ヲ置クコト聞タリ

一念佛三昧　凡佛法修行ノ人ニハ必ス六念ト云事ヲ勤修セシムル也夫ト云ハ念佛念法念僧念戒念天念施ノ六ナリ諸佛ノ行因得果ノ功德ヲ念スルヲ念佛ト云ナリ念佛トタニ云ヘハ彌陀念佛ト計ニ用ルハ一邊ノ意ナリ三昧トハ唯一心不亂ノ義ナリ翻名ニ多ノ義アレトモ略ス

一飛行ノ三鈷　弘法大師ノ行狀記ニ詳ニアリ明州ノ津ニテ投玉ヘル三鈷忽ニ雲ニ入リ吾朝ノ紀州高野山ニ止マレリト

一瀧口入道　齋藤左衞門大夫茂賴カ子ニ瀧口時賴入道ト云者アリ小松大臣殿ニ候ケルカ高倉院御在位ノ時建禮門院ノ后宮ニテ渡セ給ケルニ二人ノハシタ物ノアリ橫笛刈萱トソ云ヒケル時賴此橫笛ニ忍通テ互ノ契イト深カリシヲ親ノ茂賴コレヲ聞キ深イマシメヲナシ若親ノ命ニシタカハスハ不孝ノ者タルヘシト云ケレハ時賴ハ孝義ヲ思カ故ニ生年十八歲ニシテ菩提心ヲ發シツヽ嵯峨ノ奥ノ法輪寺ニシテ出家シ法名ヲ阿淨ト付テ行ヒスマシテ居タリケルカ後ニ高野ニ登リ寶幢院ノ梨坊ニソ住ケリ五六年ニソ成ケルニ三位中將維盛ノ高野參詣ノ時ニ計ラス會談セリ

一西行法師　四條家ノ人ナリ鳥羽院ノ北面ニ佐藤兵衞尉義清ト云シ者發道心シ出家入道シテ西行ト云ケルカ大法房圓意ト改名シテ仁安二年ノ比諸國修行ニ赴ケリ

一海底ノ魚腹ニシテ葬ラルヽトモ　漁父辭曰寧赴湘流葬於江魚腹中　此語ニ本ツケリ

一十死一生ノ日　酉巳丑々々々ト正月ヨリ次第ニ十二月マテニ當ツル也又萬死一生ノ日ハ戌酉申未午巳辰卯寅丑子亥ト正月ヨリ十二月マテニアツルナリ

太平記鈔第二十三卷

一血氣ノ勇者　孟子ニ云ヘルカ如シ前ニ注ス

一遐齡　カレイ遐ハ遠也ト注セリ廣雅ニハ齡年也ト云

一羅綺ニタモ不勝　長恨歌ニアリ羅綺トハイロトリタルウスキヌソ揚貴妃カ華淸宮ノ溫泉ヨリ出テ、力ノナクタヨ〳〵トシタル姿タソ

一便ナフ　源氏物語ニ多クアル辭ソ

一白玉カ何ソト問シ　伊勢物語ニ
　白玉カ何ソト人ノトヒシ時露トコタヘテケナマシ物ヲ

一江豚ト云魚　イルカノ魚ナリ許渾詩曰江豚吹浪夜還風ト又南越志云江豚似猪居水中

一六道四生　地獄餓鬼畜生修羅人間天上ヲ六道ト云此中ニ胎生卵生濕生化生トテ生ヲ受ルニ四ノシナカ有ルヲ四生ト云ナリ

一摩醯首羅　色界ノ第十八天ノ主ノ名也新華嚴經第十五卷音義云正云摩醯濕伐羅言摩醯者此云大也濕伐羅者自在也謂此天王於大千世界中得自在故也

一欲界ノ六天　四在王天忉利天夜摩天都率天樂變化天他化自在天ナリ飲食婬欲等ノ有ル所ナレハ欲界トハ云ナリ但上天ハ次第々々ニ欲ハ薄少ナルソ

一千頭王　身ハ一ニシテ首ヲ千アル姿ナリ此例經論ニ多シ

一扈從　韻會ニハ後從曰扈トアリ從ハ隨行也

一一翳在眼空花亂墜　禪錄乎莊子天運篇十四云老聃曰夫播糠眯目則天地四方易位矣イツレモ是語ト同シ云云

一帝釋ト修羅ト　觀佛三昧經第一卷曰帝釋宮有神白天王言過去佛說般若波羅蜜咒王當持鬼兵自碎時天帝釋於善法殿集衆燒名香發大誓願般若波羅蜜是大明咒是無上咒是無等々咒審實不虛我持此法此法當成佛道令阿修羅自然退散作是語時虛空中有四大刀輪自然而下當阿修羅耳鼻手足一時墮落令大海水赤如絳珠時阿修羅即大驚怖遁走無處入藕孔中

一善法堂　忉利天ノ喜見城ノ西南ニアルナリ俱舍論ニハ西南善法堂ト頌シタソ忉利天ノ衆此堂ニテ如法不如法ノ事ヲ評論アル所ナリ

一天竺ノ班足王等　仁王經ノ下卷ニ出タリ仁王經ノ

功德ト云コトハ誤ナリ普明王ト云シ王ノ不妄語戒ヲ持テル功德ニテ四無常ノ偈ヲ説タルヲ聞テ班足王ノ惡心ヲ攻テ善心ニ移レルナリ
一三毒　貪欲ト嗔恚ト愚癡ヲ云ナリ
一泰山府君　陰陽師家ニ云ハク是ハ祭ノ名ナリ閻羅天子五道大神泰山府君天宮地宮水宮司命司祿本命神開路將軍土地靈祇家親丈人此十二神ヲ祭ルナリ一々ニ備物相サタマレリ
一倉公　史記列傳四十五云太倉公者齊太倉長臨菑人也姓淳于氏名意少而喜醫方術高后八年更受師同郡元里公乘陽慶々年七十餘無子使意盡去其故方更悉次禁方子之傳黃帝扁鵲之脉書五色診病知人死生決嫌疑定可治及藥論甚精受之三年爲人治病決死生多驗云云　此中ニ公乘ト云ハ人ノ名ニハ非ス官爵トシルヘシ
一華他　字元化魏沛國譙人也一名專遊學徐土兼通數經曉養性之術年且百歲而猶有壯容時人以爲仙
一爪牙ノ良將　索隱曰虎以爪牙爲兵而自利於防身也劉伯莊曰虎之爪牙如兵之利及在身文選五十六曰晉之爪牙濟曰爪牙謂爲將軍トアリ或ハ又爪牙猶英雄人也トモアリ
一股肱之賢弼　尙書第五說命下曰股肱惟人良臣惟聖注手足具乃成人有良臣乃成聖
一巨川之濟涉　又云若濟巨川用汝作舟イツレモ傳說ヲサシテ云ナリ
一沃眇身之心　冊魏公九錫文曰朕以眇身託于兆人之上注良曰眇小也帝自謙也善曰漢書宣帝詔曰朕以眇身永祖宗云ヘリ尙書曰啓乃心沃朕心此トキハ沃ノ字ヲイル丶トヨメリ蔡氏カ注ニハ沃灌漑也トシタホトニソヽクト讀ヘキ也
一無聊　賈逵國語注ニハ聊賴也ト云ヘリ無聊ハタノモシケナシトヨム也文選四十一云與子別後益復無聊
一幽陵　幽玄ノ山陵ト云義也又幽魂ノ意モアリ
一懇棘　棘ハスミヤカトヨム也毛詩第九采薇篇曰玁狁孔棘ト云注ニ孔甚棘急也トアリ然レハ懇誠無二ナル所ヲ云歟
一彌天之碩才　天下ニミチワタルト云義也碩ハ大也ト注ス晉代ニ四海習鑿齒ト云ヒタレハ彌天釋道安ト滑稽ヲ云タソ

一尊勝供　尊勝陀羅尼ノ供養ト云事也

一華夏　都之事也中華大夏ト云義也

一純熙　緝ノ字ニ作ルヘシ兩都賦曰揚緝熙宣皇風注緝熙光明也毛詩曰維清緝熙シカレハ今ノ意ハ病患平癒セハ天下花洛ニ安清ニシテ帝德ノ威光モ日ニ增益セント云義也

一周公旦天ニ祈テ命ニ替ントシ玉フ　尙書第七曰旣克商二年王有疾弗豫ト云　武王御不豫ナリシカハ周公アマリニ歎キ玉ヒテ策書ヲカイテ武王ノ命ヲ請シ櫃ニヲサメテ金ヲ用テ能堅クツヽミテ人ノ開キ見サルヤウニシテ大王々季文王ノ三王ノ壇ヲアラタニ作テ其南方ニ又新ク壇ヲ作リ自身其上ニ立テ祝辭ヲ伸テ若爾三王是有丕子之責于天以旦代某之身トノ玉ヒタソ尙書正義曰武王有疾周公作策書告神請代武王死事畢納書於金縢之櫃遂作金縢トアリ

一追賁　賁ノ字ニハ多ノ意アレトモ今ハカサルト讀テ然ルヘシ周易ノ賁卦ノ意也

一栖墀　墀ノ字ヲ遲ニ作ルヘシ毛詩ニ衡門之下可以栖遲トアリ爾雅ニハ棲遲游息也ト注セリ又文選第五十二卷ニハ謂優遊也ト云ヘリ俗ニ遊山休息ノ所ト云意ナルヘシ墀ハ坪ノ字ノ意ナリニハトヨム故ニ親シカラス

一富樓那　此ニハ滿願ト云ナリ父梵天ニ祈テ求得タル子ナレハ其故ヲ即名ニアラハシタル也說法第一ノ譽ヲ取レリ

一虛穹　穹ハ爾雅ニ穹蒼々天トアリソラノ事也郭璞注ニ天形穹窿然ト云フ穹ソラ窿サカシトヨム

一竹林院中納言公重　西園寺流ナリ後西園寺宰相國實兼ノ子息竹林院左大臣公衡其子今出川内大臣正二位實衡ノ子息ナリ後ニハ相國ニ登リ從一位ナリ此朝臣ノ弟ハ春宮大夫正二位公宗ナリ

一三十輻　ミソノヤ老子經注云古者車三十輻法日數也又集覽ニ云輻輪轑也凡輪有三十輻云云　車ノ輪ノ中ニ細長キ木三十本アルソコレヲ云ソ

一僣上　下モトシテ上ヲ輕シテ蔑ルヲ云ソ

一三族　集覽ニ云張晏曰父母兄弟妻子盡誅滅之也如淳曰三族父母妻族也師古曰如淳說是也

一車裂　クルマサキノ事也異朝ニモ重罪ヲ責ル時ニ用ル也釋名第八ニハ車裂曰轘々散也肢體分散也

一土岐少弼賴遠　伯耆守賴貞ノ第二男土岐七郎ト云タ人ソ此弟ニ兵庫頭賴明遁世シテ周濟房ト號ス

一醢　ヒシヒシホ集覽三曰反者被誅爲葅醢鄭玄曰切之四寸爲葅坐肉爲醢戰國策不避葅醢之誅高誘注言剉斮之如此耳

一弘安ノ格式　近キ比マテ此格式ヲ用テ本トセシトソ

一前覆　曹元首六代論曰視前車之傾覆而不改其轍迹注李善曰晏子曰諺曰前車覆後車戒也

太平記鈔第二十四卷

一國衙　韻會曰唐制天子居曰衙此時ハ都ヲ云ソサレトモ古ハ軍行スルニ其軍ニテ尊長ノ人ノ在所ヲ衙ト云タルニヨッテ後人自ラ我治ムル所ノ地ヲ衙ト云タソ又衙集也ト注シタソ此ニテモ知レタコトソ其國々ノ主人ノ居住ノ所ヘハ多人衆カ集ル物ナリシカレハ國府ヲ云トソ

一正税　シヤウセイ　税ハ斂也ト注シテ年貢ヲ收ルコトソ

一狼戾　孟子五卷云樂粒米狼戾注樂歲豐年狼戾猶狼籍也コレハ多事ヲ云ナリ今ノ義ニシタシカラス廣韻ニハ狼戾ト云フ狼ノ字ヲハ說文ニハ不聽從也ト注セリ人ニ同セサル義ナリ故ニ項羽傳ニモ狼如羊々愈牽愈不進トアリ戾ノ字ハ曲也ト云ヘリ犬カイカニモ狹ク卑キクアル戶口ヲ身ヲ曲テ出ル體ソ然レハ狼戾ノ二字ハ人ニ己カ身ヲハ卑下スル顏ヲシテ心中ニ邪義ヲサシハサメルヲ云也又今ノ文章ニハ唯公家ノ衰微ノ體ニ用タル義ハ何トモ意得カタキソ

一土炭　土ノ字誤レリ塗ニ作ルヘシ

一年中行事　公事根源抄トテ一卷アリ詳ニ載タソ故ニ今ハ彼抄ノ意ヲ取テ略シテ書ス下凡ノ者ノ我等式ノ知ル事ニハ非ス自然ノ違ヒアリトモ咎ヲハ彼書ニユツリ玉フヘシ

一四方拜　元正ノ寅ノ時ニ天子ミツカラ天地四方山陵ヲ拜シ玉ヒテ年災ヲハラヒ寶祚ヲモ祈玉フコトアリ仁和五年ノ正月ニ始レル由シ宇多天皇ノ御記ニ載玉ヒタレトモ濫觴トハミエス皇極帝ノ時ニ雨ヲ祈玉フトテ南淵河上ニ行幸アリテ四方ヲ跪拜シ玉ヘハ雨五日マテフリケルヨシ日本紀ニ見タリ是ナトヲヤ始トモ申ヘキ但シ是ハ八月ノ朔ナリ私云日本紀第二十四ニ見タリ

一屠蘇白散　三箇日ノ間ニ此事アリ藥子トテ少女ノイマタ嫁セサルヲ求メテコレヲ用フ一獻ニマツ屠蘇ヲ酒ニ入テ藥子ニノマシム次ニ銀器ニ入テ配膳ニツタフ後ニ主上ヘ奉ル一日ハ四位二日ハ五位三日ハ六位藏人ノ役也サテ二獻ニ神明白散ヲ供シ三獻ニ廣障散ヲ供ス此儀式ハ弘仁年中ニ始ラルトナリ私云異朝ノ來由ヲ云ハヽ歲華記曰屠蘇酒昔人居

草庵除夕遺里人藥分囊浸井中元日取水置酒樽名屠蘇飲之不疫云云

一朝賀　朝拜トモ申スナリ辰時ニ主上大極殿ニ行幸アリテ行ハセ玉フナリ群臣悉ク禮服ヲ着シテサナカラ御即位ノ儀式ニヲナシク群臣再拜ス奏嘉奏瑞トテ二人ノ者庭ニ進テ祝シ申事アリ此ハ去年ノメテタキ嘉瑞共ノアルヲ國々ヨリ申セハソレヲ記シテ今日奏スルナリ神武天皇元年正月一日橿原ノ宮ニ都ヲ立テ始テ位ニツカセ給ケル時宇摩志摩治命天瑞ヲ奏セルヨシ日本紀ニミヘタリ此ナトヲヤ始ト申スヘキ一條院ノ正曆ヨリ後ハ此事ナシトソ

一小朝拜　コテウハイ臣下トシテ元日ニテマシマセハ天子ヲ拜シ奉ルヘキ由ヲ申ウケテ行ル丶公事也朝拜ヲ略シテ行ハル丶故小朝拜トハ申スナリ朝賀ノアル時ハ行ハレス群臣ノ私ノ禮義ナル故也ト

一七曜ノ御曆　中務省ヨリ奉ル日月火水木金土ノ七曜ヲ注タルヨノツネノコヨミナリ

一氷ノ樣　ヒノタメシ此ハ宮内省ヨリ奉ル也去年ノ氷ヲオサメ置タル所々ノヤウヲ今日節會ノ次テニ奏スル也厚サ薄サイカ程ノ寸法ナト細ニ奏スルソ氷ノ多ク井ルハ聖代ノシルシ氷ノキヌハ凶年ニテ侍レハ氷ノ御祈トテ大法秘法ヲ行レケルトカヤ仁德天皇六十二年ヨリ氷室ノ古事起レリ私云日本紀第十一卷ニ見タリ

一腹赤ノ御贄　ハラカノミニエ魚ヲ筑紫ヨリ奉ルナリ昔ハヤカテ節會ニ供シケルニヤ鱒ト申ス魚ナリ其腹赤キニ依テカク云ヘリ景行天皇ノ御時肥後國宇土郡長濱ニテ海人釣テ奉リシヨリ始マルトソ若遲參ナレハ七日ニモ奉ルトソ

一立春ノ日主水司水ヲ献　去年ノ御生氣ノ方ノ井ヲ點シテフタヲシテ人ニ汲セス立春ノ日此水ヲ汲テ主水司奉レハ朝餉ニテ是ヲキコシメス也年中ノ邪氣ヲ除ト云本文アレハナリ

一子日若菜　内藏寮ナラヒニ内膳司ヨリ正月上ノ子日此ヲ奉ル寛平年中ヨリ始マル事ニヤ延喜十一年正月七日丹後院ヨリ七種ノ若菜ヲ供シ尋常ノ七種ノ菜ハセリハコヘラナツナ菁御形スウシロ佛ノ座ナリ

一卯日ノ御杖　持統天皇三年正月ノ上ノ卯ノ日大學寮ヨリ奉ルヨシ日本紀ニアリ仁壽二年正月ニ諸衛

祝杖ヲ獻シテ精魅ヲオフト見タリ延喜式ニハ正月ノ卯ノ日兵衛督以下マイリテ御杖ヲ奏スル儀アリ色々ノ木ヲ五尺三寸ツヽニキリテ二束三束ニ結テ奉レリト也

一視告朔　アウサク是ハ正月二日也名ハ異朝ヨリ起ヌル間論語ニモアレトモ本朝ノ儀ハ少シ差別アリトソ此ハ百官ノ行事ト一日ヲ注シテ毎月天子ノ御覽スルナリ天武天皇五年九月ニハ雨ニヨリテ告朔ナシト日本紀ニアルハ此時ヨリ先ニ始リヌト知リヌヘシ一日ニアリ又四日ナトニモアルナリ視告朔トカキテ只カウサクト二字ニヨム口傳ニテ侍ルヨシアリコクサクトヨムヘカラス毎朔ニアル事ナレ共正月ハ事多ク故ニ二日ニ行ルヽトナリ餘月ハ必ス朔日ナルヘシ

一中春兩宮ノ御拜賀　二三兩日ノ間ナリ中宮大饗玄耀門ノ廊ニテ行ルヽナリ春宮ハ儲君ノ御座所ヲサシテ云ソ

一五日ハ東寺ノ國忌　正月四日ハ村上天皇ノ母后ノ御國忌也天曆九年ノ正月ニ御門宸筆ヲソメラレ法華經ヲアソハシテ弘徽殿ニテ御八講ノ儀侍リキト私云國忌ニハ定レル日ハアルヘカラサル歟先皇等ノ崩薨ノ日ニヨル事ナルヘシ殊ニ東寺ト云語不審ナリ重テ尋ネ申ヘシ

一叙位ノ議白　五日ニ大臣已下左近ノ座ニツキテ先ツ事ヲ催シ行フ次ニ藏人シテ諸卿ヲ召ス公卿射場殿ニテハコ文ヲ取リテ次第ニ御前ノ座ニツク關白並ニ執筆メシニ依テ同座ニツク推古天皇十一年十二月ニ始テ十二階ノ官位ヲ置カル天智天皇十四年正月ニ諸王諸臣ニ爵位ヲ玉フト見タリ主上或ハ執事ナトノ衰日ニアタレハ六日ニ行ルヽ事モ常ノコト也

一七日兵部省御弓ノ奏　兵部ノ省ヨリ奉ル御弓奏ハカリヲ内辨モ奏スルナリ天竺ノ具多羅葉ハ長七尺八寸也弓ノ長ケモ七尺五寸ナル故ニ是ヲタヲラシトハ申ニヤ

一白馬ノ節會　大方ハ元日ナトニ同シ或ハ靑馬ノ節トモ申也馬ハ陽ノ獸也靑ハ春ノ色ナリ正月七日靑馬ヲ見レハ年中ノ邪氣ヲ除ト云フ本文アリ天武天皇十年正月七日ニ小安殿ニオハシマシテ宴會ノ儀アリ靑馬ヲ見玉フヨシ日本紀第三十九卷ニ出タリ

コレヤ節會ノ始ナルヘシ仁明ノ御門ハ豐樂院ニ在マシテ見玉フトアリ今ノ節會ニハ馬ノ數三七二十一匹ヲ牽ル、ナリ三ハ三才ニ象ッ七ハ七日ニアヘルヨシ寛平ノ御記ニノセ玉ヘルト也白馬ヲアヲムマトヨム

一御齋會　是ハ大極殿ニテ八日ヨリ十四日マテ七箇日ノ間最勝王經ヲ講セシメテ朝家ヲ祈申シ玉ヘル也天武天皇九年ノ五月ニ始テ金光明經ヲ宮幷諸司マテ講セラル是ナントヲ始トハ申ヘキカ延曆二十一年正月ヨリ常式トハ成リヌトソ

一眞言院御修法　弘法大師大唐ノ内道場ニ准シテ此院ヲ宮中ニ申立テ、承和元年ヨリ自ラ行ル、也今年金剛界ナレハ明年ハ胎藏界ニシテ年々ニカハルナリ是等ハ皆息災ノ爲ナリ御修法ヲミシホトヨム

一太元ノ法　治部省ニテ七日行ハル藏人内藏人ヲモツテ御衣ヲ玉ヒテ壇所ニ送ル結願ノ日ハ御衣ヲモトノ如ク返上スルナリ小栗栖ノ常曉律師承和五年ニ入唐シテ華林寺ノ元照ト云人ニ値テ相傳シ歸朝シテ小栗栖ノ法琳寺ト云所ニテ修シケル也ソレヨリ始レルトソ

一女叙位　是モ八日ニ行ル、也女房ノ位階ヲ叙セラル、事ニテ隔年ニヲコナハル、其儀式大方ハ叙位ニ同シ毎年申文ヲイタシテ必ス五位ノ位ヲ玉フナリ

一外官ノ除目　外官トハ諸國ノツカサニテ侍ル田舍ヲアカタト申也外國ノ人ヲ召テ任官ヲ授ケラルレハカヤウニ名ルニヤ大方節會官奏叙位除目ヲハ四箇ノ大事トテ有識家ニハ特ニ沙汰アルナルヘシ京官ノ除目ト申ハ京ニアル諸司ヲ宗ト任セラル、也是ハ宗ト田舍ノ人ニ官ヲ給ヘル也除目チモクトヨム

一殿上ノ内論議　十四日ハ御齋會ノ結願ナリ内論議ハ御殿ニテ行ル、御物忌ノ時ハ南殿ニテアリ問者講師ナトアリテ御前ニテ論議スル故ニ内論議トハ申ス也

一七種ノ御粥　白穀豆赤豆粟栗柿小豆ヲ七クサト云也是粥ヲ食スレハ年中邪氣ヲ除ト云本說アリ寛平ノ比ヨリ毎年ニ此ヲ奉ルトナリ

一宮内省ノ御薪　ミカマキトヨム百官悉薪ヲ奉テ宮内省ニ收ラルナリ天武天皇白鳳二年正月十五日百

寮諸人薪ヲ奉ル事アリ是ヤ始ナルヘシ

一蹈歌節會　十四日ニハ男蹈歌ナリ近比ハ行レス十六日ハ女蹈歌ナリ京中ノ遊士ノ聲ヨク物ウタウヲソロヘテ年始ノ祝詞作テ舞ヲマワセナトセラレ侍リシ故蹈歌トハ申ナンメリアラレハシリノトヨノアカリトモ申ニヤ或ハアラレマシリト宣命ノ譜ニハヨメリト也

一射禮　是ハ十七日ニ建禮門院ニテ行ヒ侍ルコト也十五日ニ先ッ兵部省ノ手ツカヒト云事アリテ射手ヲ調ヘ定ル儀式アリ正月ナケレハ三月ニモ行ル丶也若三月ナレハ日次ハ十三日ナルヘシ天智天皇九年正月ニ大夫士ニ詔アリテ宮門ノ外ニ大射ストアリ是ヤ始ナラン又一說ニ天平二年正月十四日ニ始レリト何レカ正ナルラン

一賭弓　ノリユミ正月十八日也貞觀二年正月十八日ニ幸於豐樂院コレヲ觀玉フト云云是ハ左右近衛左右ノ兵衛ノ四府ノ舍人トモ射トナリ左右大將射手ヲ奏セラル勝ノ方ハマケノ方ニ罰酒ヲ行フ又勝ノ方ハ舞樂ヲ奏ス大方近衛ノ官領ニテアレハ事ハテテ後大將射手ニ饗ヲ給也是ヲカヘリアルシト云也返アルシオコナハヌ大將ハ左右ナク參內セヌ事ニテ每度召ニ付テ參スルトカヤ

一神祇官ノ御麻晦日ニハ御巫御贖ヲ奉ル　是ハ每月ノ晦日ニ奉ル御麻ヲモ同ク供スアル物ハ身ノ殃ヲアカナフ物ト云心ナリ人形ヲ作テ身ノ代トスル事同シ心ナルニヤ古事記ニ仲哀天皇ノ豐島宮ニオハシマス時始テ御アカ物ヲ供スト見タリ又多ノ由來アレトモ記ニヲヨハス御麻オウヌサ御巫ミカンノコ御贖ミアカモノ

一院ノ尊勝陁羅尼供　是ハ吉日ヲ撰テアル行ヒナレハ定日ヲノセス

一釋奠　二月ノ上ノ丁日必行ル也若日蝕國忌祈年ノ祭ナトニアタレハ中ノ丁ニアリ大學寮ニテ孔子幷ニ顏回ナトヲ祭ル事也文章博士題ヲ出ス孝經並五經ノ內ヲメクリ用テ講ス文武帝大寶元年二月ニ始ル由續日本紀第二卷ニ見タリ釋奠ト云フ事ハ禮記王制ノ篇ニ出タリ釋采奠弊禮先師トアリ秋ハ八月ノ上丁日ニアリ別ノコトナシ

一春日ノ祭　二月十一日上申日行ハル先ツ未日使タツ近衛中將少將ツトム大方賀茂ノ祭ノコトシ清和

天皇貞觀元年十一月九日ニ始レリ
一率川　イサカハ　上ノ酉日ナリ春日祭ノアクル日行ル、也藤氏南家ノ口傳ニ率川社ハ右大臣是公ノ建立ト云ヘルコトアリ大和ニアリ
一大原野祭　上卯日ナリ是モ年ニ二度ナリ此神社ハ后宮ノマイラセ玉ハンタメ春日ノ本社ハ遠キニヨツテ都近キ所ニ移奉ラルサレハ太原野行啓ナト申事侍リ仁壽元年二月ヨリ始メテ行ル、也
一イサカハ　此ノ四ノ字ハ今刪ルソ
一祈年ノ祭　トシコヒノマツリトヨム也豐年ヲ求ル也ト周禮ニ見タリ二月四日ニ神祇官ニテ太神宮以下ノ三千七百三十二座ヲ祭ラセ玉フ也辨カネテヨリ諸國ノ召物モヨホシ調フ白猪白雞ヤウノ物也天武天皇四年二月ニ始テ祭アリ
一列見　十一日ニト或説ニハ吉日撰フト公卿辨少納言外記ナトマイリテ太政官ニテ行ヘル公事也六位已下ノ藝能アル者ヲ撰テ式部兵部衞ノ二省ヨリ率シテマイレルヲ上卿ノ夫ヲ召ヨセテ器量ヲミル義ナリ
一位祿　是ハ奉公ノ勞ニ依テ群官百寮ニ祿ヲ玉フ事ナリ大寶元年八月ニ五位以下皆大藏省ニ至マテ祿ヲ受トアリ是ソ始トヤ申スヘキ
一季ノ御讀經　ミトツキヤウ二八月春秋二季ニ大般若經ヲ講セラル四箇日ノ事ニテ第二日ニハ引茶トテ僧ニ茶ヲ玉フ事アリ天平元年ヨリ始レリ貞觀ノ比ハ毎季ニ行レケルトカヤ
一仁王會　吉日ヲ撰テ行ハル或ハ三月ナリ仁王經ヲ講シ偏ニ朝家ノ御祈ノタメ也
一三月三日御節供　是ハ公卿ナトマイリテ御前ニテ詩ヲ作リ文ヲアラハシ文人ミナ水ノ岸ニ並居テ水上ヨリ盃ヲ流シ我前ヲスキサルサキニ詩ヲ作リ其盃ヲトリテ飲ケルナリ雄略天皇元年三月上巳ノ日清苑ニ幸シテメクリ水ノトヨノアカリキコシメスト日本紀ニアリ曲水宴トハ此事也異朝ノ古事アリト云ヘトモ記サス
一御燈　是モ三日ニアリ天子ノ北斗ニ燈明ヲ奉玉フ也昔ハ北山靈岩ト云所ノ高峯ニテ火ヲトモシテ北辰ニ供セラレケル由一條院ノ御記ニモ見タルト也延暦十五年三月ニ始テ祭ラル、トソ
一藥師寺最勝會　天長七年ヨリ此寺ニテ毎年七箇日

最勝王經ヲ講セラル此寺ハ天武帝ノ御願ナリ十五
大寺ノ中一也
一石清水ノ臨時ノ祭　二月ノ中ノ午日也天暦五年四
月二十七日ニ始テ此臨時ノ祭ハアリキ是ハ將門カ
亂逆ノ事アリシ時祈リ申サレシニ八幡大菩薩自ラ
彼將門カ首ヲキリ玉ヒケル報祭也天祿二年三月ヨ
リ毎年ノ事ニ成リ侍ルトナリ
一東大寺華嚴會ノ授戒　孝謙天皇ノ天平勝寶六年ニ
唐ノ鑒眞和尚筑紫ノ大宰府ニ渡リ著シカハ東大寺
ニ戒壇ヲ建テヽ天子以下菩薩戒受玉ヒキ是ヨリ始
レル也
一鎭花祭　コレハ大神狭井ノ二祭ヲ云ト神祇令ニ載
タル由アリ春花ノトヒカフ比ハ疫神分散シテ人ヲ
惱スカ故彼ヲシツメンタメニ此祭ハアリ
一座ヲ徹ス　徹ストハヤムルト云意或ハ去ルト云義
モアリ直列切徹字訓去云云
一主水司始氷ヲ獻　四月一日ヨリ九日晝マテ是ヲ奉
ル其仔細ハ氷樣ノトコロニテ知ルヘシ
一山科祭　上ノ巳日也此社ハ宮道氏ノ祖神也寛平十
年ヨリ始マル祭ナリ

一平野　上ノ申日也延暦ニ此神社ヲハ造立アリテ貞
觀ニ彼祭禮ヲハ始行セラル上卿辨内侍ムカフ近衞
ノセウムカヒテ見參ヲ取テ内ニマイリテ奏ス臨時
ノ祭アリ五位ノ殿上人使ヲツトム近衞舞人シタカ
フ使アリ此臨時ノ祭ハ寛和元年正月十日ヨリハシ
メラル彼ノ時ノ使ハ左衞門權佐藤原惟成也定メカ
タシ第一ノ御殿ハ源氏第二ハ平氏第三ハ高階氏第
四ハ大江氏スヘテ八姓ノ祖神ニテマシマスナルヘ
シ但シ又神體ニ神秘アリト云云
一松尾祭　此マツリモ貞觀年中ニ始マル大寶元年ニ
秦ノ都理ト云人ハシメテ神殿ヲ建立シケルトカヤ
大山咋神ノ御事也ト承ル
一杜本　モリモト　河内國ニアル神社ナリ午日使タ
ツ仁和五年四月ニ祭ハ始マル
一當麻　タイマ大和國ニアリ是モ午ノ日祭使タツ
一當宗祭　上酉日也是ハ河内國ニアリ午日使タツ杜
本當宗ハ程近キ故ニ一人ノ使兩社ノ祭ノタメニ下
向ス宇多天皇ノ御外祖父ハ當宗氏ナルニ依テ仁和
五年四月十四日祭ヲハ始行セラル
一梅宮　承和ノ比ヨリ此祭ハ始マル永延以後毎年ノ

事ニハ成タリ其已前ハ行ル丶時モアリ止メラル丶年モ侍リキ此社ハ仁明帝ノ御母堂橘太后ノ祖神ナリ承和年中ニ始テ御門ヨリ祭ヲ奉ラル橘氏ノ祖神ナルヘシ

一大神　三輪ノ大明神ノ祭ナリ大物主神事也オウワトヨム

一廣瀬立田　両社ハ大和國ニアリ祭ノ日ハ廢務ナリ風水ノ難ヲ除テ年穀ノ豐ナル事ヲ祈申ル丶ニヤ天武天皇四年四月ニ始ル由日本紀ニ見ヘタリ神代卷ニ伊弉諾伊弉冊尊ノ朝霧ヲ吹ハラヒ玉ヒシ神噴氣ノ化シテ神ト成タルヲ風ノ神ト申ヨシ見ヘタリ

一擬階ノ奏　二月ノ列見ノ時ノ成選短冊ヲ二省ヨリ用テマイルヲ大臣ノ奏聞スル儀アリ列見延引ノ時ハコレモ延ル也事ハテヌレハ短冊ヲモトノ如クヒツニ入テカキテ退出スサシタル事ハナシ

一灌佛　神事ニアタル日ハ行ハレス灌佛アル時ハ九日ヨリ御神事ヲ始メラル御殿ノモヤノ御簾ヲ垂テ日ノ御座ヲ點シテ其アトニ山カタヲ奉ル佛ノ生レ玉フ景色ヲ作テイトニテ瀧ヲオトシ色々ノ作リ物アリ北ノ方ニ机ヲ立テ鉢五ニ五色ノ水ヲ入ラル公卿マイリテ殿上ニサフラウ女房ノ布施トモ色々ニ結ヒタル花ニ付テ風流ナトアルヲ衣箱ノ蓋ニ入テ臺盤所ヨリ出サルレハ藏人取テ殿上ノ臺盤ノウヘニ置ク上達部ワカ布施ノフナツ丶ミヲモチテ御殿ノナケシノ上ナル白木ノ机ニ置テ次第ニ座ニツク御祈ノ御布施御フセハカミヲヌカル不參ノ人ノフセ藏人ヲク御導師ノ僧サウノホリテ佛前ノ作法ヲハリテ鉢ノ水ヲ一二汲合テ先ツ御導師灌佛ス公卿次第ニ進ミテ笏ヲサシ膝行シテヒサコヲ取テ水ヲ汲テ灌佛シテ後禮佛ス導師フセ給テ退ク此佛生會ハ推古天皇ヨリ始マル釋迦如來ノ迦毗羅城ニテ生玉ヒケル天龍下テ水ヲソ丶キテ太子ニアフセ奉リシ事ヲ申スナリ

一齋内親王ノ御禊　齋云ニ付テ賀茂ト伊勢トノ二ツアリ齋宮ニ備リ玉フ事已上三年ノ御神也其中ニ三度ノ御禊アリ初齋院へ入玉ハントテ御ハラヘアリ明年野宮へ入リ玉ハントテアリ又アクル年伊勢へ下リ玉ハントテ御ハラヘアル也野宮ヲ賀茂ニテハ齋院ト號ス嵯峨ト伊勢ニテハ齋宮ト申ス但イツレヲモイツキノ宮ト申也

一國祭　是ハ賀茂ノ本祭ナリ欽明帝ノ御宇四月ニ吉日ヲ選テ祭ラルヽ由所見アリ又和銅ニ詔アリテ山城ノ國司コレヲ檢察スト見ヘタリ

一關白ノ賀茂詣　初度ニハ日次ヲエラヒテ此事アリ天祿二年九月二十六日攝政太政大臣謙德公伊尹カリ詣ノ事アリコレ攝關ノ人賀茂詣ノ始ナルヘキソ此事ハ必賀茂祭ノ三ノ日アルコト也

一中ノ酉日賀茂ノ祭　未ノ日マツ上卿陣ニ着テ六府ヲ召テ警固ノ由ヲ仰當日ノ使ハ近衞ノ中ツトム昔夢ノ告侍リシヨリケフ人々アフヒ桂ノ縵ヲカクル也賀茂松尾ノ社司前ノ日ヨリ然ルヘキ所々ヘ奉ル欽明帝ノ御宇ヨリ祭リ始マル下賀茂御祖上賀茂別當二ノ神祭也此御祖ノ神ヲハ玉依姫ト申ス賀茂建角身命ノムスメ也或時セミノオ川ノ邊ニ遊ヒケルニ河上ヨリ丹塗ノ矢一スヂ流レクル玉依姫此矢ヲ取テ我家ノヤネニサシハサム夫ヨリシテ程ナク姙ミテ男子ヲ生ム然レトモ父ヲ誰トモ知ラサリキ或時ニ計コトニ酒モリヲシテ今ノ兒ニ盃ヲモタセテ汝ガ父ニサセト敎ヘケレハ兒ソノ盃ヲハ虛空ニナケテ家ノヤネヲ踏破リテ我ハ天神ノ御子也トテ天上ヲサシテソ上リケル則別雷命是也今ノ丹塗矢ハ松尾ノ大明神ト後ニアラハレ玉フニヤ

一下ノ子日吉田ノ宮祭　子ノ日三アレハ中ノ子日也中納言山蔭卿貞觀ノ比ヲヒ建立シテ一條院永延元年ヨリ始テ官幣ヲ奉ラセ玉フ春日ノ社ト同體ナリ奈良ノ京ノ時ハ春日社長岡ノ京ノ時ハ大原野今平安城ノ時ハ吉田社也皆帝都チカキ所ヲトテ御門ヲ守奉ラセ玉フニヤ

一駒牽　二十八日ナリ八月モアレトモ意ハカワレリ天子武德殿ニ出御アリテ叡覽アリ來月騎射ノ馬射手人ナトヲ今日御覽セラルヽ氣色ナリ是モ貞觀ノ比ヨリ始メラル小ノ月ハ二十七日ナリ延長五年ニハ五月三日ニ駒引アリト見ヘタリ

一神衣　カンミソ　是ハ神祇令ニ載タリ伊勢神宮祭ヲ云神服部潔齋シテ三川ノ赤引ノ神調ノイトヲ用テ神衣ヲ織ル又麻續ノ連ト云氏人麻ヲウミテ敷和衣ヲ織テ神明ニ奉ルヲ神ミソノ祭トハ申ス也

一三枝祭　率川祭ヲ云ヨシ神祇令ニノセタリ三枝ノ花ヲ折テ酒樽ヲカサル故ニ三枝ノ祭トハ申ス也三枝ト書テ爰ニハミクサトヨムヘシトソ大和ノ率川

社ノ南ニアリ又播州ニ三枝ト云所アリ是ヲハサイクサトヨム混スヘカラス

一六衞府菖蒲幷ニ花ヲ獻ル　六府アヤメノ輿ヲ南殿ノハシノ東西ニタツ又時ノ花ヲ折ソヘテ同ク置ク四日ハ朝カレイノ庭ニ是ヲタツ主殿寮所々ニ菖蒲ヲフク天平十九年五月ヨリ詔アリテ百官諸人悉ク菖蒲ノ縵ヲカクヘシカケサラン者ハ宮中ニ入ヘカラスト定メラル弘仁式ニモ菖蒲ヨモキ花ナト丶見タリトソ

一四日ハ走馬ノ結番　三日ハ左近ノ荒手結四日ハ右近ノ荒手結ナリ

一五日端午ノ祭　天皇武德殿ニ出御ナリテ宴會ヲ行ハレ群臣ニ酒ヲ玉フナリ人々皆アヤメノカツラヲカク群臣ニ藥玉ヲ給フ五色ノ糸ヲ用テ臂ニカクレハ惡鬼ヲ拂ト申本文侍ルニヤ後ニ騎射ノ事アリ大將射手ノ奏ヲトル左近衞馬ニ乘リテ弓ヲイル是ヲムマユミトモ云ヘリ推古天皇ノ御宇ヨリ始ル今ハ絕テイク代ニカ成リヌラン

一日吉ノ祭　是ハ四月ノ中ノ申日ナリ五月ノ中ニアルヘカラサル歟此社ハ松尾ノ社ト同體也長久四年六月八日ニ始テ二十二社ノ內ニ加ハル延久四年四月二十三日ニ祭ヲハシメラル

一最勝講　先ツ兼テ日次ヲ定メラル東大寺興福寺延暦寺園城寺ノ中ニ稽古ノ聞ヘアル仁ヲヱラヒテ論議講師聽衆ナトアリ最勝王經ヲ清涼殿ニテ講セラル丶也一條院寬弘ノ比ヨリ始ル或ハ長保四年ヨリ始ルトモ申也後朱雀院ノ御時ニヤ生身四天王道場ニ現セサセ玉ヒケルヨリ必ス四天王ノ座ヲシカレケリ五日ノ間ノ儀式日コトニ同シ

一六月ニハ內膳司忌火ノ御飯ヲ供ス　內膳司ヨリ奉レルヲ大床子ノ御座ニテ供スルナリ景行天皇ノ御時ヨリ始マル忌火トハ火ヲイム事也神事ナトノ時ハ不淨ノ火ヲ打カフルコトニヤ

一中務省御曆ヲ奏ス　是ハ十一月ニ奏スル事ナルヲ當月ニテ云ハ誤タル歟中務省ヨリ明年ノ曆ヲ奉ル昔ハ主上南殿出御ナリテ御覽アリ出御ナキ時ハ內侍所ニツク

一造酒司醴酒　一夜サケトハケフ作レハアスハ供スルナリ又ハコサケトモ式文ニ侍リ七月晦日マテ毎日ニ奉ル也應神天皇ノ御時ヨリ始マル

一御體ノ御占　コタイ　神祇官人一日ヨリ本官ニコモリテ是ヲトトフ主上ノ玉體ニ御愼アラン事ヲトヒ奏スル儀也白鳳四年ニ始行セラル

一月次神今食　此御神事ハ一日ヨリ十一日ニイタル十二日ノ朝解齋ナリ眞實ニ御ミツカラノ潔齋ハ十日ヨリアル也伊勢天照太神ヲ勸請申サレテ天子御ミツカラ神饌ヲ供セサセ玉フトソ靈龜年二年六月ヨリ始レリト私云月次ト云ヘハ年中每月ノヤウナレトモシカラス二季ノ月次トテ六月ト十二月ト計リアリ唯二度アリト知ルヘシ

一道饗　晦日ニアリ疫神ノ祭也卜部ノ人京城ノ四角ノ路ニテ鬼魅ノ他方ヨリ來ルヲ京城ニ入サラシメンタメニ路上ニ供物ソナヘテ祭ナリ鎭火道饗ノマツリヲハ四角四堺ノ祭トモ申ス也

一鎭火　卜部氏ノ人火ヲウチテ宮城ノ四ノ角ニテ祭コトアリ火災ヲフセカンノ爲トナリ已上ノ二ノマツリハ六月十二月ト二季ニアリ

一荒世ノ御贖ヲ奏ス　是モ晦日ノ夜御アカ物マイルアラ世ニコ世ノ御裝束二間ニ御屛風タテヽ御座ヲシク御ケイノ御座ノ如シ晦日ノ夜ヨヲリノ時ニアルソ

一東西ノ文部　東西ノ二字ヲヤマトカワチトヨムナリ文部フンヒトヘトヨムナリ

一節折　節折ノ命婦竹ヲ持テマイリテ御タケヨリ始テ所々ノ寸法ヲ取ハテヽ宮主ニキリアテカハセテ御秡ヲツトムル也アラタヘニコタヘトテ二度アリ二度ハテヽ祿ヲタマウ節折ヲハヨヲリト云フ竹ニテ御タケノ寸法ヲ取テ其ホトニ折アテカヘハナリ

一大秡　大ハラヘト云ハ百官悉ク朱雀門ニアツマリテ秡ヲシ侍ル也六月十二月二度ナリ天武天皇ノ御時ヨリ始マル解除ハ觸穢ナトノ時モアリ神事ヲ行フ時ハ臨時ニモ常ニアレトモ此秡ハ百官一同ニアツマリテ秡ヲスル也又今日ハ家々ニ輪ヲ越ル事アリ

ミナ月ノ名コシノハラヘスル人ハチトセノ壽ノフト云ナリ此歌ヲトナフルトソ申傳ヘ侍ル然ニ法性寺關白ノ記ニハ「思コトミナツキネトテアサノ葉ヲキリニキリテモハラヘツル哉」

一祇園ノ祭　十四日ナリ禁中ハコトナル事ハナシ祇園ノ社ハ貞觀十一年詑宣ノ事アリテ山城國ニハ移

シ奉シニヤ縁起ハ別紙ニアリ臨時ノ祭ハ十五日ナリ

一七月告朔廣瀨龍田ノ祭　四月ニ同

一乞巧奠　異朝ノ來歷ハ記スニ及ハス七日ノ夜ニ入テ行ヒアリ御殿ノ庭ニ机四脚タテヽ燈臺九本各ノ燈アリ机ノ上ニ色々ノ物スヘタリ箏ノ琴コトチタテヽ置ク机ノ上火トリニ夜モスカラソラタキ物アリタライニ水ヲ入テ大虛ノ星ヲ移ス香花ヲ備ヘ供具ヲ調テ庭上ニ文ヲ置竿ノハシニ五色ノ糸ヲカケテ一事ヲ祈ルニ三年ノ中ニ必叶ト云ヘリ此故ニ乞巧ト申也タナハタノ祭トモ申ス也

一八日ノ文殊會　是ハ東寺西寺ニテ行ハル仁明天皇天長十年七月ニ大法師泰善始テ行ル毎年ニ此會アルヘキ由格ニ定ラル

一盂蘭盆　內藏寮御盆供ヲソナフ晝御座ノ南ノ間菅ノ圓座一枚ヲシキテ主上コヽニテ御拜アリ幼主ノ時ハナシ天平五年七月ニ始テ盂蘭盆ヲ大膳職ニ備ト見タリ昔齊明帝ノ御時ハ飛鳥寺ニシテ須彌山ノ形ヲ作リ盂蘭盆會ヲ設ケラレケルトカヤ惣テ諸寺ニテ行ルヽ事ナルヘシ

一相撲節會　是ハ諸國ノ供御人ヲ召アツメテ七月相撲節ト云テ天子ノ御覽アル事也先ツ十六七日ノ間ニ召仰アリ上卿勅ヲ奉テ左右ノ次將ニ相撲アルヘキ由ヲメシ仰ラル左右ノ近衞方ヲ分テ國々ヘ使ヲ下シテ相撲ヲ召ス是ヲ萬葉ニハコトリ使ト申スト也二十六日ニ內取ト云事アリ主上仁壽殿ニ出御ナル二十八日ニ召合アリ天皇南殿ニ出御ナリ神龜三年ニ始メテ諸國ヨリ召ノホセラルヽ寬平七年ニハ童相撲ヲ御覽アリキ

一四日北野祭　北野ノ天神ノ御事ハ人皆シレル事ニテ侍レトアラ〳〵記シ申サハ延喜ノ聖ノ御門ニ右大臣從二位菅原朝臣トテツカウマツラセ玉フ御父ハ參議從三位是善卿ト申シ侍リキ昌泰四年正月二十五日左大臣時平公ノ讒ニヨツテ太宰帥ニウツサレ玉フ其外十二人同キ二十七日ニ左遷セラル延喜四年二月二十五日ニ配所ニシテ終カクレタマウ其後天滿天神ト申奉リテ天下コソリテ崇メ奉ル延喜ノ御時ヨリ漸ク天神ノ御靈トテ世中ニ怖シキ事トモ出來シカハ延喜二十三年四月三十日ニ又宣命ヲ下テ贈官贈位ナトノ事アリテ昌泰四年ノ宣命ヲハ

ヤキステラル天暦元年七月ニ詫宣アリテ右近馬場ニ跡ヲ垂玉フ今日ハ一條院ノ御時ヨリ始ラル官幣ナト祇園ニ同シ

一十一日定考　是ハ昔六位已上ノ加階スル人ハ彼藝能行跡ヲヱラヒテ榮爵ヲ玉ヒケル階也上卿已下花ヲカサシテ冠ニサス此人々ヲヱラヒ出メ官爵ヲ定メ侍ルヲ定考トハ云ナリ然レトモ打カヘシテ考定トヨミ侍ル口傳ノ由アリ大方ノ儀式ハ二月ノ列見ニ同シ十二日ニハ小定考トテ大辨已下ノ人東ニ廳ニ著テ行フ事アリト也

一八幡放生會　禁中ニテハ殊ナル儀ハナシ上卿宰相辨衞府ナト男山ニ向フ宣命内藏寮ノ使ニ玉フ八幡ノ縁起ハ別條ノ事ナレハ記スニ及ハス

一駒牽　今日ハ信濃ノ勅旨牧馬ヲ六十匹奉ル也モトハ十五日ナレトモ朱雀院ノ御國忌ニアタルニ依テ今日十六日成サル天皇南殿ニ出御ナリテ御馬ヲ叡覽アリ十七日ニハ又甲斐國ノ御馬ヲヒカル二十日ニ武藏國小野御馬四十匹秩父ノ御馬二十匹立野御馬十五匹奉ル二十三日ニハ信濃望月ノ御馬二十匹二十八日ニハ上野勅使御馬五十匹ヒカルサシタ事ハナシ

一季御讀經　二月ニ同シ

一九月九日重陽宴　九ヲハ陽數ト云ナリ月モ日モ九ナレハ重陽ト云ナリ羣臣ニ菊酒ヲ玉ヘル大方五日ノ節會ニ同シトナリ

一十一日伊勢ノ例幣　一日ヨリ今日ニ至マテ僧尼重輕服ノ人參內セス大神事ナル故也伊勢太神宮ヘ御幣ヲ奉ラセ玉フ毎年ノ事ナレハ例幣トハ申也昔ハ神祇官ヘ行幸ナリテ此ヲ行ルト也

一年終斷罪ノ文　十月二十日以前ニコレヲ奏スルナリ

一猪ノ子　上ノ亥日ヨリ次々ノ亥モ同シ内藏寮ヨリ餅ヲソナヘ奉ル朝カレイニテキコシメストナリ此日餅ヲ食スレハ病ナシト云本説アリト此事イツ比ヨリ始マルトモミエス延喜式ニノセタレハ往古ヨリハヤアリケル事ナランカシ承安四年ニサタアリテ大外記師尚ナト勘文ヲマイラスソレモ本朝ノ起リヲハ慥ニモ申サス皆本書本説ヲノセタリ

一射場始　公卿以下束帶ニテ弓場ニシテ射ルヲ主上弓場殿ニ出サセ給ヒテ御覽スル也又天子モ弓矢ヲ

御座ノ左右ノワキニ立ラル文武二ノ道ハ一モカクヘカラサルノ姿也口傳ニ射場始ナクハ賭弓アルヘカラス賭弓ナクハ相撲節アルヘカラスト申也

一維摩會　十日ヨリ十六日ニ至マテ七箇日ノ間ニ興福寺ニテ維摩經ヲ講セラル十六日ヨリ大織冠ノ御忌日ナル故也此大織冠病惱ノ時百濟國ノ法明比丘尼來テ申サク我乘經ヲ持誦ス維摩經ト名ク若是ヲ讀誦シ玉ハヽ御病ハ愈ヘシト申ス即誦スルニイマタ終ラサルニ御病平愈アリキ是ヨリ敬心止スシテ合掌シテ生々世世大乘ニ歸依セント誓玉フ故ニ每年絕ルコトナク行ハレ玉フ會也北野天神ノ御詩ニ名聞三國會留興福朝之爲朝蓋是會力ト作リ玉ヒケルトナン

一競馬負方獻物　二十一日ニアリ大歌所始モ同日也

一十一月朔忌火ノ御飯　六月ニオナシ

一御暦ヲ奏　右ニ注スルカ如シ多分ハ內侍所ニ付ルト也此ヨリ以下山科平野等ノ祭ノコト前ニ違コトナシ

一新嘗會　中ノ卯日ナリ此方ハ神今食ニ同シ今年ノ初稻ヲ神ニ奉ラセ玉フ儀ナリ代ノ始ニ大嘗會ト云ヒ年コトノヲハ新嘗會ト云ナリ用明天皇二年四月ヨリ始ルトソ大方ハ神代ヨリ事起レリ日本紀ニモ天照大神ニハナヒキコメスト見タリ

一賀茂ノ臨時ノ祭　下酉日ナリ此マツリノ起リハ宇多帝イマタ王侍從ト申奉リシ時狩シ玉ヒケルニ賀茂ノ大明神現シ玉ヒテ臨時ノマツリヲ給フヘキ由申サレキ我ハ左樣ノ事シリ侍ラス御門ヘ申サセ玉ヘトアリケレハヤウアリテ申也トテ上ラセ給ヒケルカ幾程ナク思召シヨラセテ位ニ即セ玉ヒケレハ寬平元年十一月ヨリ臨時ノ祭ヲ奉ラセ玉フ其時ノ使ハ本院ノ大臣時平ハイマタ右中將ニテツトメ給ヒケルトナン

一十二月忌火ノ御飯ヲ供　常ノ如シ此本ニ朔日ヨリ十八日マテトアルハ不審ナリ

一御體ノ御占　六月ニ同シ明年ノ六月マテノ申ヲトテ其方ノ神タヽリアラハ祈申ヘキ由ナトスル也

一荷前ノ使　十三日ニ司々ヲ兼テ定ル吉日ヲエラヒテアリ荷前トハ十陵九墓ノオハリニ幣帛ヲ奉セ玉フナリ五日ニ定メラル先十陵ノ第一ニハ天智天皇ノ御サヽキ山城國山階ニアリ二ニ光仁帝ノ陵ハ田

原ニアリ桓武帝ハ伏見山ニアリ東ノ邊ニ町ハカリ入テ稲荷南野ナリ云云

一御佛名　十九日ヨリ二十一日マテ三日ノ間ニアリ三世ノ諸佛ノ名號ヲ唱テ六根ノ罪ヲ滅スル意ナリ誠ニ佛名經ニ説ル、所ノ功徳ハ計ナキニヤ寶龜五年十二月ヨリ始ル承和ノ比ハ毎年アリ佛名三箇日ノ間ハ諸國マテモ殺生禁斷ノ由格ニモ見タリ

一土牛ノ童子　大寒ノ日夜半ニ陰陽師土牛ノ童子ノ像ヲ門々ニタツ東ノ陽明待賢門ニハ青色ヲタツ美福朱雀門ニハ赤色談天藻壁ニハ白色安嘉偉鑑門ニハ黒色ナリ郁芳皇嘉殷富達智ノ四門ニハ黄色ヲタツ慶雲二年天下疫病サカリニシテ百姓ヲヽク失シカハ土牛ヲ作リツイナト御云事始リキ

一大祓　是モ六月ニ同

一御髪上　下ノ午日藏人御クシノ梳クツヲ賜テ主殿寮ニ向テ燒也此外コトナル事ナシ

一金吾四隊ニ列　王建宮詞曰金吾除夜追儺名畫袴朱衣四隊行院々燒燈如白日沈香火底坐吹笙金吾ハ官ナリ應劭曰吾禦也執金革以禦非常又顔師古カ義ニハ金吾トハ鳥ナリ此鳥ノ象ヲトル故ニ官ノ名ニシタト云ソ四隊トハ四手ニワケタ意ソ隊ハ部ト云ニ同シ部ト云モ分ツ義ソ字書ニ左ヤウニ注シタソ

一追儺ノ節會　ヲニヤラウ夜ナレハ殿上ノ侍臣桃ノ弓葦ノ矢ヲ以御殿ノ方ニ立テ射ルナリ四目アル怖シキ面ヲ著テ手ニタテホコヲ用又侲子トテ二十人紺ノ布衣キタル者ヲ卒シテ内裏ノ四門ヲ廻ル也慶雲二年ヨリ始トソ又巽朝ノ來歴ヲ云ハヽ漢舊儀曰昔顓頊氏之有三子已而爲疫鬼一居江水爲瘧鬼一居若水爲罔兩蜮鬼一居人宮室區隅善驚人爲小鬼於是以歳十二月使方相氏蒙虎皮黄金四目玄衣丹裳執戈持盾師百隷及童子而時儺以索室中而歐疫鬼也云云文選注云儺逐疫鬼也

一樞機　肝要ト云意ナリ樞ハクルヽ木ナリ機トハ弓射ル時矢ヲハナツ氣幾微ヲ云ナリ周易云樞機一發榮辱之主韓康伯云制動之主也

一蒸民　蒸ハ衆也ト注セリ萬民ト云ニ同シ

一八珍　牛羊麋鹿麕豕狗狼也又淳熬淳毋炮豚炮牂擣珍漬熬肝膋也

一檀林皇后　嵯峨天皇ノ后橘皇后ト申セシ寺ヲ嵯峨ニ建玉フヲ檀林寺ト名ル故ニヤカテ后ヲハ檀林皇

后ト名ケ奉ルナリ梅宮明神是ナリ
一讃岐院　崇徳院トモ又ハ六條院トモ追謚シ奉レリ是ハ今ハ申ス者ナシ・
一隱岐院　初ハ顯德院ト申セシカトモ後ニハ改名アリテ今ハ後鳥羽院ト申ヌル
一煙幛　幛ハ山峯ノ屏風障子ヲ立タル如クナルヲ云
一風濤　風ヲ濤ノ聲ニ比スル也松聲ヲ十里風濤ナト云ヘルカ如シ
一惠崇カ煙雨　錦繡萬花谷前集三十三云惠崇建陽人工畫鵝鴈鷗鷺尤工小景煙汀霧渚虛曠之象
一葦偃カ山水　又曰朱景玄畫斷云葦偃伯父工龍馬父鑾工山水松石偃又工仙僧老松異石人知其善畫馬不知松石更工
一成風ノ功　未ニアリ莊子ニ運斧成風ト云フヨリ起レリ風ノ字ヲカセトハヨマスシテヲト、讀ムソ
一宋朝ノ幼帝尊崇禪宗　宋ノ第八主端宗ハ十一歲ニシテ崩シ昺帝ハ八歲ニシテ崩シ玉フコレヲヲコソ幼帝トハ云ヒケン此間ニ禪宗ヲ尊敬シケル故ニ代ヲ失トハ本據ヲ未タ考ス
一奪世於蒙古　元ノ太祖名ハ鐵木眞ト云蒙古部人也宋ノ寧宗ノ開禧二年ニ立テ第五代世祖ノ時ニ至テ始テ年號ヲ立テ中統元年ト云ヒ四年ヲ過テ至元ト改元ヲシテ至元八年ニ始テ國號ヲ立テ、元ト名ケタリ至元十六年ニ宋朝ノ祀絶テ一天下ヲ統御セリ此時ハ宋ノ端宗等ノ幼主ニテアリケリ
一犬神人　イヌシニント云フ祇園ノ召使ノ者ナリ俗語ニツルメサウト云フ者ノ事也
一一實圓頓　法華ハ諸法實相ノ深理圓融無礙ノ正體速疾頓成ノ極談ナル事ヲ略シテ云フ語ソ
一四漫相即　前ニ云ヘルカ如シ
一建仁之義在前　榮西國師東山ニ禪寺ヲ建立セラル、時山門ノ訴訟ニヨッテ台密禪ノ一寺ニ置ル故ニ建立ヲ許セリ元亨釋書ニ詳ナリ
一嘉元之例在後　嘉元ハ後二條院ノ年號也大應國師嘉元寺ヲ立ラル時山門コレヲ押ヘタリ
一食柱蠹害　蠹ハ木中ノ蟲ナリ
一射人含沙　博物志云江南射工蟲長一二寸口有弩形氣射人影左傳第三莊公十八年傳云有蜮爲災也疏云含沙射人影也云云　三體詩注曰廣州志水弩蟲自四月一日上弩射人影八月後御弩春秋有蜮詩爲蜮即含沙

射人影者名射影
一蒙袞向壁　達磨ノ九年面壁ノ義ヲフマヘテ云フナリ文選四十一云僕以爲戴盆何以望人ト云ニホトキトハ瓶ノ類ソ是ヲイタヽキ是ヲカフリテハ人ヲ望ミ見ルコトナシ是ハ世塵ニ目ヲ著スシテ心地ヲ一面目ニツクル義ソ
一緘石爲金　荀子云宋之愚人得燕石而藏之以爲寶周客聞而觀焉掩口笑曰與瓦甓不殊此ノ古事ニ依テ云ヘルナルヘシ
一調達萃衆　調達トハ提婆カ事也象頭山ニ居テ佛ノ弟子衆ヲカトハシ集メテ釋尊ノ敵ヲナス是ヲ五逆ノ中ノ破和合僧ト云ナリ諸經論ニ處々ニ說カレタル事ナレハ筆墨ヲ費サス
一提羅貪供而開利門　具ニハ扇提羅ト云也名義集二云扇提羅此云石女無男女根故ト云ヘリ輔行一云未曾有經下卷云昔五比丘嬾墮懈怠不修經書時世穀貴爲人所輕不供養之五人議曰夫人生計隨其形儀人命至重不可守死各共乞求辨貝繩床坐曠野中掃灑莊嚴依次而坐外形似禪內思邪濁見者謂聖因此招供飽足有餘等云云　此五比丘カ利養ヲムサホル罪ニ依テ五人ノ扇提羅ト生レタリ故ニ弘決第一ニモ無德受供養如彼提羅行ト云ヘルモ是也
一岩捿礀飮　出家ノ佛道修行ノ法軌ナルヘシ其外隱士ノ行跡モ尙以テカクノ如クアルソカシ
一山楄藻棁　論語ニ出タル語ソ山楄トハ包氏カ注ニハ栭也ト云タソ新注ニハ柱頭斗栱也トアリ柱ヲ彩色シテ山ノ形ナトヲシタ貌ソ棁トハ梁上ノ楹ソツカハシラト云ヤウナル物ソ藻トハ水草ソ
一踰牆之人　孟子六云鑽穴隙相窺踰牆相從トアリ是ハ女子ノ父母ノ命ヲモ待タスシテ牆ヲコヘテ妄ナルフルマイヲ作ス事ヲ云タソ今ハ其語ヲ借テ云ヘル也
一執鞭之士　論語ノ辭ソ賤者ノ事也次ニ雷同ト云一同スル義也上ニ出ス故ニ記セス
一昨木　莊子山水篇曰莊子曰昨日山中之木以不材得終其天年云云　莊子カ或トキ山中ヲ行クニ大木ノ枝葉盛ニ茂ルヲ見ル木ヲ伐者ノ其旁ニ止テ此木ヲ伐ラス莊子其故ヲ問ニ此木ハ用ニタヽサルホトニ取ラス故ニカヤウニ大木ニ成タリト云フ莊子其夜人ノ家ニ休息ス其知音ノ人奴僕ニ云ヒ付テ鴈ヲ殺サ

セテ莊子ニモテナス奴ノ曰一ノ鴈ハ善鳴ケリ一ノ鴈カ鳴カス何レヲ殺ント尋タレハ鳴サルヲ殺セト云タソ莊子カ弟子是ヲ聞テ明クル日云タ事ナリ昨日ノ木ハ用ニタヽサルヲ以大木ト成リ今ノ鴈ハ鳴サルヲ以殺サルハイカント云タソ大事ノ位ソコヽニテ莊子カ心底ヲ云ヒアラハシタソ

一成風ノ斧　莊子曰莊子過惠子之墓謂從者曰郢人堊漫其鼻端若蠅翼使匠石斲之匠石運斤成風聽而斲之盡堊而鼻不傷郢人立不失容宋元君聞之召匠石嘗試爲我爲之匠石曰臣則嘗能斲之雖然臣質死久矣自夫子之死也吾無以爲質矣

一犢牛前身之僧界　禪祖前身ハ犢牛ナリケル本據ヲシラス

一四莘敷台嶺　四莘トハ天台ノ四敎ノ法門ヲ稱美シテ云ヘルカ禪宗ノ五派ノ類トハ思フヘカラス

一五葉爲叢林　祖庭事苑一云五葉達磨傳法偈曰吾本來玆土傳法救迷情一花開五葉結果自然成云云　遂ニ臨濟曹洞雲門潙仰法眼ノ五派トナレリ

一法滅盡經文曰　一卷小經也經云吾涅槃後法欲滅時五逆濁世魔道興盛魔作沙門壞亂吾道著俗衣裳樂好袈裟五色之服飲酒噉肉殺生貪味無有慈心更相憎嫉

○但貪財物積聚不散不作福德

一急斷葛藤　葛藟ノ連ナルト云ヲ與黨ノ義ニ比シタソ然レハ今モ負最黨類ヲ斷絕シテト云義ナルヘシ

一後五百歲　佛ノ滅度ノ後ヲ五箇ノ五百歲ニ分テ云タソ大集月藏經ノ第九卷ニ出タルソ第四ノ五百歲ハ第二千年ニアルソ次ニ最後ノ五百歲ト云ハ第二千一百年ヨリ始テ取ルソ

一勸修寺大納言經顯　俊定大納言正二位　子定資權中納言　子息兄ハ俊實權中納言從二位是ヲ坊城ト云フ弟ハ經顯從一位此時ニ始テ勸修寺ト號セリ又芝山内大臣トモ云ヒキ

一梁武帝對達磨聞無功德話　碧巖云達磨初見武帝帝問朕起寺度僧有何功德磨云無功德早是惡水驀頭澆若透得這箇無功德話許儞親見達磨且道起寺度僧爲什麼都無功德此意在什麼處

一天子武ヲ諱トシ玉フ時ハ不謂武名　武ノ名ニ限ラス何レヲモ天子ノ御名ヲイミ云ハサル也左傳第二ニ晉ノ僖侯ノ名ヲ司徒ト云タレハ司徒ノ官ヲ改テ中軍トカヘ宋ノ武公ノ名ヲ司空ト云タレハ是モ司

空ノ官ヲ止メテ司城ト云タソ又魯ノ獻公ノ名ヲ具ト云ヒ武公ノ名ヲ敖ト云タホトニ魯國ニ具山敖山ト云フ山ノ名ヲモ替テ云ハヌソ此類ノ事ハ多キソ顏子家訓云桓公名白傳有五皓之稱厲王名長琴有修短之目云云

一日本開闢ハ自天台山起　此ハキコヘサル文體ナリ又佛法ノ開ケル初ト云ハントスレハ上古ヨリ佛法アリ如何トシタル云ヒヤウナルラン知ラス下句ハ理局ハ聞ヘタリ

一元久三年源空念佛敷演ノ時山門訴　山門申狀云永尊竪者狀云彈選擇等被上送之後被披露于山上於彈選擇者每人翫之顯選擇者諸人謗之法然上人之墓所仰付感神院犬神人令破却畢其後及奏聞蒙裁許畢七月上旬法勝寺御八講之次自山門相觸南都淸水寺祇園邊爲南都山門之末寺處專修之輩容身草庵悉令破却畢仰使廳被搦取之間禮讃之聲黑衣之色京洛之中都以止畢張本三人雖被定遠流逐電之間末向配所山門于今訴申候也此十一日僉議云法然房所造選擇者謗法書也天下不可止置之仍在々所々所持幷其印板大講恩堂取上爲報三世佛恩然可燒失之由奏聞仕候畢定被仰下度歟

嘉祿三年十月十五日

一建久年中榮西　元亨釋書二云榮西號明庵備之中州吉備津宮人其先賀陽氏薩州刺史貞政曾孫也母田氏懷孕八月而誕母無困惱永治元年四月二十日明星出時也建保三年七月五日逝年七十五

又云元久二年春三月畿甸大風都人謠言比來西師新唱禪要其徒衣服異製伽梨博幅直裰大袖行道之時多含飈風今巽二作災恐基於西乎巷謳甚喧達天聽詔有司驅西出都遂不出云云　宗旨建立ノ始ハイツレモカヤウノ大難トモ有ルソ

一能忍　文治五年己酉歲攝州三寶寺ノ祖能忍ト云人宋國ニ禪宗門盛ナルヲ聞及ビテ其徒衆ヲ遣ハシテ育王山ノ佛照光禪師ニ法事ヲ問フ照光其志ノ異域ニモアル事ヲ感シテ法衣及ヒ達磨ノ像ニ贊シテ能忍ヘ遣ハサレタレハ專ラ禪宗ノ頓悟ノ心印ヲ得タリト云テ士庶人ニ示シキ榮西歸朝ノ後ニ心宗ヲ弘ラルニ都人ノ貴賤能忍ト打混シテ擯出セント云タソ其比又筑前筥崎ニ良辯ト云者アリ榮西ノ禪行ヲ嫉テ則叡山ノ學匠衆ヲ誘引シ朝廷ニ訴テ逐電セシ

メント興行セルソ
一此平安城ヲ福原ヘ遷セシ時ニ山門捧奏狀　新舊二京ノ利害ヲ十七箇條アケテ本都ハ安穩ノ地新京ハ凶險ノ處ナル事ヲ申サレタリ此ニヨツテ十一月二十三日ニ鳳輦ヲ福原ヨリ還シ玉ヘリ
一摩訶迦羅天　大黑天神ノ事也新譯仁王護國經下卷音義云摩訶此云大迦羅此云黑經云摩訶迦羅大黑天神唐梵雙擧也此神青黑雲色壽無量歲八臂各執異杖貫穿髑髏以爲瓔珞作大忿怒形足下有地神女天以兩手承足者也　私云此音義ノ如クナレハ大黑ノ形像世間ニ流布スルトハ違セリ南海寄歸傳第一云又復西方諸大寺處咸於食厨柱側或在大庫門前彫木表形或二尺三尺爲神王狀坐把金嚢却踞小牀一脚垂地毎將油拭黑色爲形號曰莫訶歌羅即大黑神也古代相承云是大天之部屬性愛三寶護持五衆使無損耗求者稱情但至食時厨家毎薦香火所有飲食隨列於前云云　此ノ文ノコトクナレハ當時各ノ用ル所ノ大黑ノ姿ナリ
一住持ヲ望ム　世俗ノ人偏ニ名聞ノ意ヲ用住持ヲ望ト云コトハ深意ヲシラサル者ノ僻事也住持ト云フ事ハ佛法ヲ傳持シテ衆生ニ敎ヘ授テ如來ノ心印ヲ世界ニ住止セシムルコトハ最モ知識ノ住持スルニヨル者ナリ祖庭事苑第八卷云子潜子云敎謂住持者何謂也住持也者謂籍人持其法使之求住而不泯也夫戒定慧者持法之具也僧園物務者持法之資也法也者大聖人之道也資與具待其人而後擧善其具而不善其資不可也善其資而不善其具不可也皆善可以持而住之也昔靈山住持以大迦葉統之竹林住持以身子尸之故聖人之敎盛聖人之法長存
一君子耻其言等　論語第七卷ニ出タリ
一所得ノ施物罪業ナリ　止觀一云虛受信施後爲肉山云云　諸經論ニ多ク此罪業ノ相ヲ明ニセリ
一人我無相　此一句大事ナリ先ハ他人ト自身ヲ相對シテ人我ト云フ眞實本有無作ノ妙理ヨリ立テ見レハ自ト云物モナク元ヨリ他ト云事モナシ但一法性ノ體相ヨリ諸法ハ緣起緣生スルナリ但シ是ハ天台ノ法性緣起ノ法門ノ姿ナリ法相家ニハ諸法ハ無明緣起ノ義ヲ立タリヨシヨシ法性緣起ニテモアレ無明緣起ニテモアレカシ實ニ一物ヨリ生シタレハ諸法ノ差ハ多ク分レタレトモ終ニハ自他彼此ト云フ

コトハ無キ物ソ大海ノ一ノ水カ千波萬波トタテトモ假リニ形ヲ分タルマテ也終ニハ一ノ水ナルカ如シ又譬ヘハ一ノ風カ吹ケトモ觸ル所ノ緣ニ隨テ色々ノ聲ヲ出スサレトモ唯一ノ風ナルカ如シカヤウニ云ハ自他ヲ立テ、人我ト云事ヲ沙汰スル姿ナリ又一重ニハ人我トハ但一人ノ上ニ我相ヲ立ツルヲ人我ト云ナリ此人我ノ見ヨリシテ我慢偏執ノ心モアリ愛欲著心モアル也故ニ無我ノ極理ヲ知ル所カ佛教ノ所詮ニシテ佛法ヲ悟ルニヤスシト云事ヲ便則一切解一切法無我若人學此義彼時習一句悟佛不難ト月燈三昧經第七卷ニ說レタリ

一慙愧　涅槃經第十七卷云慚者自不作罪愧者不敎他作慚者內自羞恥愧者發露向人慚者羞人愧者羞天云云 諸ノ惡事ヲハチテ我モ作サス人ニモ作ナセサルヲ云ナリ

一懺悔　世話ニモ云ヒツケテ人ノ知タル事ナレトモ殊外ニ云ヒ分ケカタキ事ナリ天台ノ金光明經中ノ懺悔品ト云ヲ釋アル時ニ詳ニ理リカ有リ所詮ハ今マテ作シ來タル惡事ヲ人ノ敎ニヨツテ後悔ノ心カ出來テ重テ其惡ヲモ成サヌヲ云ナリ故ニ彼疏云正順道理不致作非故名懺悔此モ一義也又懺名修來悔名改往々日所作不善法鄙而惡之故名爲悔往日所棄一切善法今日已去誓願勤修故名爲懺云云

一有所得ノ心　佛經ニ深クキラウ事也一切ノ法ハ皆自性ノ本體ハ無キ物ナルヲ妄ニ著心著欲ニホタサレ無自性ノ處ヲケカスナリ縱善根ニ赴ケトモ希望ノ心ハ絕ヘスシテ此修善ノ功ニ依テ行者ノ意ニ種々ノ所得有ンコトヲ思フ夫ハ全體少財ヲモツテ廣大ノ利ヲ得ント思フカコトシ此一類ハ救ヒカタク悟ヲ得カタシト見ヘタリ大般若經三百七十三云諸有情類具斷常見住有所得難可調伏愚癡頑例難可解脫云云

一昔摩訶陀國ノ城中ニ云云　此事ヲハ三國傳記ニモ書タルホトニ本據コソアルラメト思テ予嘗多クノ書ヲ尋見タレトモ疎見ノ故ニヤ遂ニ尋ネアタラサルソ但予カ見サルヲ以テ正トハスヘカラス

一練若　天竺ニテハ阿蘭若ト云ヲ唐ニハ無諍ト翻スルソ薩婆多論ニハ閑諍處ト云大智度論ニハ遠離處トモ云タソ諸ノ忩務ヲハナレタル所ヲ云ソ蘭ヲ練ノ字ニモ代テ用ヒタルソ今ハ寺ノコトヲ云也杜甫

カ大覺高僧蘭若ノ詩注ニモ寺也トアリ
一言之者無咎等　毛詩序曰言之者無罪聞之者足以自戒故曰風云云　惣別ニ人ノ惡キコトヲサシツメテ云ヘハ腹立スル故ニ或ハ餘ノ事ニナソラヘ或ハ譬ヲ取テ言ヘハトカニナラヌト云義ソ天下時代ノ事ハ中ニモ風シテ云物ソ
一賢愚因緣經　一部十三卷アリ宋朝ニ惠覺ト威德ト二人ノ譯ナリ今此ノ所說ハ第九卷須達起精舍緣品ト云ニアリ
一波斯匿王　此ニハ勝軍王ト云ナリ誕生ノ時ニ勝軍アリシカハ父ノ王喜ノアマリニ則太子ノ名トセリ
一祇陀　波斯匿王ノ太子ナリ
一八十頃　六尺ヲ步トス百步ヲ一畝トス百畝ヲ一ツノ夫トスルソ又百畝ヲ一ノ頃トスルソ然レハ一夫ト一頃トハ同シホトソ
一食言　虛言ノ事ナリ尙書曰朕不食言注ニ妄言也ト又左傳云孟武伯惡郭重曰何肥也哀公曰是食言多矣能無肥乎モノヲ食シ盡シテ無ニ成ルコトヲ言ヒ出シタルコトニ其驗モ無キヲ食言ト云ナリ
一六師外道　此名ニ經論ノ異說カアルソ今ハ名義集ニ依テ註スソ一ニハ富蘭那迦葉二ニハ末迦黎拘賒黎三ニハ刪闍夜毗羅胝四阿耆多翅舍欽婆羅五ニハ迦羅鳩駄迦旃延六ニハ尼犍陀若提子ナリ又大敎王經ニハ少シ名カ違タソ故ニ一邊ヲ執シテ諍ヲナスコトナカレ
一瞿曇沙門　釋迦尊ヲサシテ云タソ法華文句曰瞿曇此云純淑應法師音義ニハ地最勝ト翻シタソ天ヲ除テ外カ人類ノ中ニ此釋氏ホト最勝ナルハ曾テナシ地上ノ最勝ト云事ソ
一舍衞ノ三億　舍衞國ニハ九億ノ家アリ其中ニ三億ノ衆ハ佛ノ出世ト云事ヲモ聞オヨハス三億ノ衆ハ耳ニ聞計ナリ殘ル三億ノ衆ハ佛ニ値ヒ奉テ法ヲ聞キ信敬尊重ス此ヲサシテ云ソ大智度論第九卷ニ詳ニ出タリ摩訶止觀第四ニ舍衞三億不聞不見ト釋スルモ此事ナリ
一尼師壇　名義集第七云或尼師但那此名坐具或云隨坐衣
一勞度差　賢愚經云六師衆中有一弟子名勞度差善知幻術
一百圍　徑一尺ナルヲ圍ト云フ百圍ハ十丈ニアタル

ソ
一旋嵐風　此方ニテツチカセト云フ猛風ナリ
一三ノ大山百餘丈ノ木　經ニハ一山トアリ又百餘丈トモナシ
一十八變ヲ現シ　一ニハ右脇出水二左脇出火三左出水四左出火身上下出水火ヲ四トス前ニ合テ八ツナリ九ニハ履水如地十履地如水十一從空中沒而復現地十二ニハ此沒而現空中々々ニシテ行住臥スルヲ四トス合テ十六ナリ十七ニ或現大身滿虚空中十八ニハ大復現小云云
一一生補處菩薩　穢土出世ノ佛一期化度ノ緣盡テ涅槃ニ入玉フ其當來何々ト云所ノ佛出テ玉ハンソ其佛ハ今コヽニテハ此菩薩ナリト定メヲカルヽ菩薩ヲ一生補處トハ云ナリ譬ヘハ當來ノ導師彌勒佛ナリ今ハ彌勒菩薩ト云カ如シサレハ釋迦ノ補處ハ彌勒ナリカヤウナル故ヲ以出家ノ人ノ跡繼ヲハ何モ補處ト云ソ
一後漢ノ顯宗帝永平十四年　顯宗ヲハ又ハ明帝ト申ス也光武ノ第四ノ子ナリ明帝ノ夢ノ事ハ一天下ニ隱レモナキ事ナレトモ如何ナル故ニヤ年代ニ異說カアルソ譯經圖紀第一ニハ三年ト云編年通論幷僧史略ニハ永平七年トアルソ去レトモ永平四年ト云ヲ正說トスヘキ者也十四年ノ義用ユルニタラス
一傅毅　字ハ武仲ト云フ班固ト肩ヲ比タル文人ナリ後漢ノ章帝ノ朝ニ蘭臺令史トナレリ
一摩騰　中天竺ノ人ナリ大小乘ノ經ヲ解シ誓テ身命ヲ忘テ衆ヲ利益セントス漢土ニ來ル時ハ永平八年ナリ四十二章經一部ヲ譯ス時ニ同第十年也
一竺法蘭　同中天竺人ナリ經論數萬章ヲ誦シ覺テ天竺學者ノ師ト成レリ十住斷結經佛本生經法海藏經佛本行經ヲ譯シ出ス時ニ十三年庚午ノ歲ナリ
一豫參ノ日ヲソ定ラル　漢法本內傳云永平十四年正月一日五岳諸山道士朝正之次自相命曰天子棄我道法遠求胡教今因朝集可以表抗之等云云
一道士三千七百人　法本內傳云南岳道士褚善信華岳道士劉正念恒岳道士桓文度岱岳道士焦得心嵩岳道士呂惠通霍山天目五臺白鹿等十八山道士祁文信等都合六百九十人各賚靈寶眞文太上玉訣三元符錄等五百九十卷置於西壇茅成子許成子黃子老子等二十七家子書有百三十五卷置於中壇饌食奠祀百神置於

東壇云云　文選二十一注云向曰道士有道者也
一胡床　韻府曰胡床隋改曰交牀唐穆改曰繩床
一上天入地擘山握月術ヲ可致宜下セラル　法本内傳云帝時御行殿在寺南門以佛舍利經像置於道西西十五日齋訖道士等以柴荻和壇沈香爲炬遶子經而泣曰臣等上啓太極大道元始天尊衆仙百靈今亂中夏人主信邪正敎失蹤玄風墜緒臣等敢置經壇上以火取驗欲使開示群心得辨眞僞便縱火焚經々從火化悉成灰燼道士等相顧失色大生怖懼將欲昇天隱形者無力可能禁郊鬼神者呼策不應各懷愧惡南岳道士費叔才自感而死太傅張衍語褚信曰卿等所試無驗即是虚妄宜就西來眞法
一玉晨君　黄庭經云太上天道玉注大士之尊也黄老君ノ號ナリ
一向鯢桓審　莊子應帝王云鯢桓之審爲淵止水之審爲淵流水之審爲淵此レハ譬ナリ水ハ常ニ無心ニシテ物ニ隨テ居ルソ鯨鯢ノ盤桓シ或ハ蛟龍ノ騰躍スル淵モアリ又止水トテタマリ水ノ淵或ハ流水ノ淵モアリテ多不同ナレトモ水體ノ靜默ナルハ異ナルコトハナシ是ハ道士ノ觀念ノ心地ヲアラハス也莊子疏云鯢大魚也桓盤也審聚也夫水體無心動止隨物云云　列子第二卷黄帝篇ニハ鯢旋之潘トアリ
一摩騰法師玉ノ寶瓶ニ佛舍利ヲ入等　法本内傳云時佛舍利光明五色直上空中旋環如蓋遍覆大衆映蔽日光摩騰法師踊身高飛坐臥空中廣現神變于時天雨寶華在佛僧上又聞天樂感動人情大衆感悦歎未曾有皆繞法蘭請説法要蘭乃出大梵音歎佛功徳亦令大衆稱揚三寶
一三千七百餘人出家ス　法本内傳云時有司空陽城侯劉峻與諸官人士庶等千餘人出家及四岳諸山道士呂惠通等六百二十八人出家陰夫人王婕妤等與諸宮人婦女等二百三十人出家至月末已來日々供設種々行施法衣瓶器並出所司便立十寺七寺安僧在城邑外三寺安尼在雒城内漢與佛法自此始焉
一白馬寺ヲ建テ佛法弘通　高僧傳一云有記云騰譯四十二章經一卷初緘在蘭臺石室第十四間中騰所住處今雒陽城西雍門外白四馬寺是也相傳云外國々王嘗毀破諸寺唯招提寺未及毀壞夜有一白馬繞塔悲鳴即以啓王王即停壞諸寺因改招提以爲白馬故諸寺立名多取則焉云云　又貞元録第一云摩騰所將佛經及獲畫

馱以白馬同到洛陽因起伽藍名白馬寺諸州競立報白馬恩

一慈恵僧正　釋書四云良源姓木津氏近州淺井郡人也母物氏夢坐海中向天上日光來入懷中覺而孕延喜十二年九月三日生焉　永觀三年正月三日唱彌陁而滅年七十四時紫雲垂庭賜謚慈恵

一松室忠算　釋書ニモ何許人ヤラ知ヌトアリ容晴法師カ興福寺ノ門ノ邊ニテ六七歳ハカリノ時ニ拾ハレタソ後ニ南都第一ノ法才ト成ラレタリ安和二年ニ熊野山那智ノ瀧下ニテ般若心經ヲ講シテ岩上ニ昇ト見テヨリ後ハ行所ヲ知ヌトソ然レハ唯化現ノ人ニテソアルラン

一師子座ヲ布　佛ノ説法ヲ師子吼ト云ヒ所座ヲ師子座ト云事仔細アリ大智度論第七云問曰何以名師子座爲佛化作師子爲實師子來爲金銀木石作師子耶又師子非善獸故佛所不須亦無因緣故不應來答曰是號名師子非實師子也佛爲人中師子佛所座處若牀若地皆名師子座四足獸中獨歩無畏能伏一切佛亦如是於九十六種道中一切降伏無畏故名人師子文佛座ニナソラヘテ今モ法座ヲ師子座ト云ナリ

一黈纊　大戴禮曰孔子曰古者絻而前旒所以蔽明也黈纊塞耳所以掩聰也絻古冕字絖古纊字音義並同濟曰旒以蔽視纊以塞聽　天子ノ道其外大人ノ心モチハ穩便ナルヲ面トス故ニ旒ヲカケテ視タ事ヲモ見ヌ顔ヲシ聽クコトヲモ聞サル體ヲセントソ

一冠冕　冕モ説文ニハ大夫以上冠也トアリ黄帝ノ時ニ初メテ作リ玉ヘルソ胡氏曰冠者首服之惣名冕者冠中之別號

一草木成佛　天台一家ノ極談コレニ過ス一礫一塵マテ性具ノ三千ト云事ヲ談シテ草木成佛ノ義ヲ募ルナリ今引所ノ圓覺經ハ下卷ノ文ナリ其外湛然大師ハ木石無心出于小宗ト云テ唯色唯心非色非心ノ眼開テ見レハ草木成佛ノ義至極ノ道理ナリ

一五性各別ノ理　法相宗ノ意ハ本來五性アリ一佛性ト云ハ方便ナリト云フ五性ト云ハ解深密經楞伽經等ニ詳ニ明セリ慈恩大師ノ法華玄賛云楞伽經中佛告大惠有五種性一聲聞乘性二支佛乘性三如來乘性四不定乘性五無性謂一闡提文聲聞ノ中ニ決定性ト不定性ト二ツアリ有情ノ中ニ有佛性ノ有情ト無佛性ノ有情ト二ツアリサル程ニ決定性ノ聲聞ト無佛

性ノ有情トハ永ク成佛ノ義ナシト立ルナリ天台ノ意ハ五性ノ談ハ悉法華已前ノ方便ノ説相ナリ法華ノ諸法實相ノ實義顯レテ見レハ一佛性ナリト立ル也故ニ一機一物トシテ成佛セサルモノハナシト一代經論モ過半ハ此ノ諍論ノ事ナレハ輙ク云ヘキニ非ス

一赫奕　上ハ亨格切廣雅赫明也説文ニハ大赤貌トアリ下羊益切毛詩傳奕炎大貌也

一華藏世界　具ニハ蓮華藏ト云也新華嚴經第八卷ニハ蓮華藏世界品ト云アリ委ク世界ノ體ヲ説レタリ此外梵網經ナトニモ大方ニ明サレタリ

一如意　釋氏要覽云梵云阿那律秦言如意指歸云古之爪柄可長三尺許或脊有痒手所不到用以搔抓如人之意故曰如意又云今講僧尙執之多私記節文祝辭於柄備於忽忘要時手執目對如人之意故名如意

一止々不須説等　法華經ノ文也言辭ノ相寂滅セル重ヲ云タソ深キ意アリ筆ヲ費スニアタハス

一雲間ノ陸士龍日下ノ荀鳴鶴　晉陸雲字士龍與荀隱字鳴鶴未相識嘗會張華坐華以其並有大才謂曰今日相遇可勿爲常雲談因抗手曰雲間陸士龍隱曰日下荀鳴鶴コレラハ皆滑稽ト云モノナリ

一天台ノ血脈ハ至師子尊者絶　天台ニハ金口相承今師相承トテ二流アリ金口相承トハ釋尊兼テ付法ノ次第ヲ説置キ玉ヘルヲ云也嫡々相承シテ二十三祖アリ一切經ノ中ニ付法藏因縁經トテ六卷アリ則此事也天台ニ限ラス禪家ニモ是ヲ用フ二十三祖トハ

迦葉　阿難　商那和修　優婆毱多　提迦多　彌遮迦　佛駄難提　佛駄蜜多　脇比丘　富那奢　馬鳴　毗羅　龍樹　提婆　羅睺　僧佉難提　僧佉耶奢　鳩摩羅駄　闍夜那　槃駄　摩奴羅　鶴勒夜駄那　師子云云　禪錄ニハ婆須密多ヲ加テ二十四祖トシテ又婆舍斯多　不如密多　般若多羅　菩提達磨ヲ加テ西天ノ二十八祖ト立タリ正ク金口ノ相承ハ二十三祖ナリ師子尊者ハ檀彌羅王ニ斬ラレテ涅槃ニ入リ玉ヘリ此時ニ付法相承ハ絶タリ佛モカクノ如ク絶ンコトヲ記シ玉ヘリ

一唐朝ノ大師南岳天台　北齊ノ惠文梁ノ南岳惠思大師ト次第シテ天台智顗禪師ヘ傳ルソ天台ハ自解佛乘ノ徳ヲ用テ法華三昧ヲ得玉ヘリ如此嫡々スルヲ今師相承ト云テナリ

一章安　所ノ名ナリ實名ハ灌頂字法雲ト云タソ生レテ三月ヲ經テ早ヤ三寶ノ名ヲ稱シ玉フ年二十ニシテ具戒ヲ受ケ修禪寺ニオイテ觀法ヲ受テ頓ニ印可ヲ蒙リテ歲二十七歲ニシテ金陵ニシテ法華ノ講ヲ聽キ三十三歲ニシテ法華玄義ヲ受タリ隋開皇十四年ニ荊州玉泉寺ニテ圓頓止觀ヲ受玉ヘリ

一妙樂　天台ノ第六祖ナリ名ハ湛然ト云フ一宗ノ中興ノ師也晉陵ノ荊溪ト云所ニ居ス時人尊テ所ヲ名トシテ呼ヒタリ吳越王錢俶ハ諡シテ圓通尊者ト號ス

一自解佛乘　天台ニ十德アリ其第一ノ德ナリ無師獨悟ノ重ヲサシテ云フ妙樂云佛乘者即是今典ト云云法華ノ實義ヲ自ラ解リタル事ソト

一於忉利天法ヲ說玉ヒシ時　此前後ノ語ツヽキ何レモ誤レリ諸錄ニモ皆世尊在靈山會上拈華示衆トアリ

一大梵天王問佛決疑經　開元釋教錄第十八卷ノ中ニ疑惑再詳錄或ハ僞妄亂眞錄ナトヲ擧テアル中ニ此經ハ無シ況ヤ藏經ノ眞錄ニハ曾テ入サル經ナリ

一宋朝ノ舒王翰林學士タリシ時秘官庫收メシ後此經失タリト申　王安石字ハ介甫ト云タル人ソ後ニ荊公トモ半山老人トモ云タソ人天眼目序ニ此經ハ官庫ニ收テアルヲ我曾テ見タリキ世人ハ知ルヘカラスト云タソ荊公ハ一僻アル人ナルホトニ何事ヲ云タルヤヲ計定メカタキソ但又宗門雜錄去舒王々荊公云問蔣山佛慧泉禪師禪家所謂世尊拈華出自何典泉云大藏所不載王云余頃在翰林偶見大梵天王問佛決疑經三卷因閱之經中所載甚詳云梵王至靈山會上以金色波羅花献佛捨身爲牀坐請佛爲衆生說法世尊登座拈花示衆人天百萬悉罔措獨有金色頭陀破顏微笑世尊云吾有正法眼藏涅槃妙心實相無相分付摩訶大迦葉此經多談帝王事佛請問所以秘藏世無聞者佛惠泉歎其博究云云

一師子吼無畏　長阿含經第十六云如來於大衆中勇悍無畏爲師子吼又大智度論二十五云師子吼者如師子王淸淨種中生深山大谷中往復次二十事故佛語名師子吼云云二十事ハ廣ナル故ニ略ス

一天台ハ唯授一人ノ口決　傳教云一乘獨圓動靜無礙鏡像圓融三諦非口決有難知師資相承良有以也

一禪家ハ沒滋味手段　敎家ノコトク美キ物ヲ能調ヘ

ルヤウニハ無ソコレヲ沒滋味ト云ソ唯タ文句ノ吟味ニヨツテ其手段カアルソ手段トハテタテソ

一堅石白馬ノ論　源莊子齊物論ニ出タソ又資治通鑑集覽第二卷云林希逸口義云堅白注家以爲堅石白馬之辯蓋曰堅則爲石言石不必言堅白則爲馬言馬不必言白亦猶黃馬驪牛三也蘇秦傳注又曰龍泉水淬刀劍特堅利故有堅白之論云黃所以爲堅白所以爲利齊辯之曰白所以爲不堅黃所以爲不利二說雖殊皆辯者之事耳黃馬驪牛三見莊子天下篇白馬非馬見列子仲尼篇又莊子胠篋篇頡滑堅白解垢同異之變多則俗惑於辯矣又秋水篇公孫龍問魏牟曰龍少學先王之道長而明仁義之行合同異離堅白然不然可不可注公孫龍當時辨者之名也成玄英疏云公孫龍著守白論行於世堅白即守白也言堅執其說而守之云云　倩當代ノ宗々ノ學解ヲ聞ク悉ク堅石白馬ノ論也上代モ此請ヲノカレス況當時ニ於テヲヤトハ思ヘトモアマリニ堅執ノ局情ニ落タル事悲ムヘキ事ニヤ

一西天ニ護法清辯トテ二人　護法ハ西域記第五卷ニ詳ニアリサレトモ廣ナレハ今ハ略文ニヨル也名義集一云西域記云達磨波羅唐言護法神負遠遁因即出家清辯論師外示僧佉之服内弘龍猛之學聞護法菩薩在菩提樹宣揚法教乃命門人往問訊曰仰德虛心爲日久矣然以宿願未果遂乖禮謁菩提樹者誓不空見見當有證稱天人師護法菩薩謂其使曰人世如幻身命若浮未遑談議竟不會見

一清辯　西域記第九卷ニ出タリ名義集一云波毗吠伽唐言清辯靜而思曰非慈氏成佛誰決我疑遂於觀音菩薩像前誦隨心陀羅尼經涉三年菩薩現身謂論師曰何所志乎對曰願留此身待見慈氏菩薩曰人命難保宜修勝善生覩史天乃見慈氏對曰志不可奪也菩薩又云若其然者宜往馱那羯磔國城南山巖執金剛神所志誠誦持執金剛陀羅尼者當遂此願論師於是往而誦焉三載之後神出問云伊何所願論師對曰願留此身待見慈氏神又謂曰此巖石内有修羅宮如法行請石壁當開々即入中可以見也神又謂曰慈氏出世我當相報矣論師受命專精誦持又經三載乃呪芥子以擊石壁々々乃開論師乃與六人入石壁裏入已石壁仍復如故

一第一義天　實相眞如ノ全體ヲサシテ云ナリ湛然ノ釋ニハ以中道爲第一義ト云ヘリ第二ニ對シタル第一ニテハナシ東坡詩ニ車騎滿山谷願聞第一義注云

云第一義謂無上法也無盡藏海トハ華嚴經ニ明セリ一塵含法界ノ道理ヲサシテ云ナリ又普賢圓融ノ法門トモ云ナリ

一遐邇　遐之言遠也邇之言近也ト注セリ

一匪懈　毛詩烝民詩云夙夜匪懈　少モ如在ノナキ事ヲ云ナリ

一暗證之朋黨　天台ノ摩訶止觀ニ暗證ト誦文ト二ノ師ヲ立タリ謂已均佛トテ上慢ノ見ニ落テナマシイノ觀解ハカリニ著スルヲ暗證ノ人ト簡タリ又觀解ノ眼ハ一分モナクシテ唯一邊ニ苦修練行ヲ本トシテ自心是佛ノ至理ヲ得サル輩ヲハ誦文ノ師ト破シタリ盲跛師徒ニ倶墮落スト云事アリ誦文ノ類ハ修行ノ足ハアレトモ智惠ノ眼ナケレハ盲人ニ比シ暗證ノ輩ハ少智惠ノ眼ヲハ具シタルトモ修行ノ足カナエタルホトニ行キ所ヘ往得サルソ

一滔夫　尙書一云象恭滔天注漫也ト云フ天ニハヒコレリトヨムソ是ハ舜ノ弟ノ象カ形ハ恭シク慇懃ナルカヲ、シテ心ノ慠慢ナルヲ云タソ

一焔火不消　莊子曰日月出矣曰爝火不息云云　玉篇ニハ炬火小光也トアリ

一燎原　前ニ注スルカ如ク尙書ノ中ニモ見タリ燎放火也ト玉篇ニ注ス野原ヘ火ヲハナチタル貌ソ

一煙焞　勃ノ字ニ作ルヘシ廣雅ニハ盛也ト注セリ焞ニ作ルハ非也ト經ノ音義ニアリフスホルトヨム

一睛　マナシリ晴ノ字ニ混スヘカラス

一和州片岡ノ達磨寺　推古天皇二十一年癸酉ニ達磨日本ニ來レリ聖德太子十二月朔日和州ノ片崗ヲ通リ玉フ時達磨ハ飢人ト成リ路ノ側ニアリ太子コレヲ見テ姓名ヲ尋玉ヒケレトモ答ヘス太子和歌ヲモッテ問玉ヘハ和歌ヲ以答フ太子飲食ヲアタヘ亦衣ヲ脫テ與ヘ玉ヒテ後ニ人ヲ遣ハシテ見セシムルニ彼飢人ハ死テ見ヘス太子其所ニ墓ヲ築テ置玉ヘリ

一兄弟鬩墻之爭　毛詩第九卷常棣篇云兄弟鬩于牆外禦其務注鬩狠也箋云禦禁務侮也兄弟雖內鬩而外禦侮也又左傳第六卷ニ右ノ詩ヲ引テ注スル時ニ鬩說爭貌言內雖不和猶宜外扞異族之侵侮トアリ兄弟ツネニ中ヲ違テ居ルトモ他人カ其兄弟ノ事ヲアナトラハ夫ヲ聞テヲメ／＼トシテ居ハ比興ナリ隨分他人ニハ侮ラセサル事カ道也

一楚越同舟　韻府引易略例曰同舟而濟胡越何患乎異心也
一八葉ノ車　大八葉小八葉ナトヽテアリケリト平家物語ニモアリ
一卷纓老懸　ケンエイト云ハ纓ノ端ヲモトノ方ヘ結フヲ卷クト云ソ柳ノ木ヲ割テハサム流アルトソ老懸トハ下々ノ鍋トリト云フヤウノ物ソ
一佐竹掃部助師義　新羅三郎義光ノ孫昌義ヲ佐竹ト號シ常陸ノ國ニ住ス其子隆義ヲ常陸介ト云其子秀義ヲ美濃國山田郷地頭職始テ拜領ス夫ヨリ六代孫上總介貞義ノ子ナリ
一如木ノ雜色　如木シヨホクト上ハニコリテヨム下ハスムソ拜賀ノ時ニ群臣ノ前キヘアリキテヤヲ〳〵トヤラ云テ鼻ニノセテ聞ワケラレヌ樣テ行ク者ソ雨ノ手ヲヒロケテ笑シキ姿ナリ白色ノ物ヲキタル常ノ雜色ソ
一雲立涌　クモタテワキ關白ノ御裝束ナリ
一竹林院大納言公重　第五卷ニモアル竹林院公衡ノ子ハ實衡今出川内大臣其子ソ是モ相國從一位ソ
一三條帥公季　季ハ誤ナリ秀ニ作ルヘシ崇光院後光嚴院兩帝ノ御母陽祿門院ノ父也
一隆蔭　隆衡ヨリ第四代隆政ノ子ナリ但シ今ノ四條家ニハアラス
一春宮大夫實夏　實世卿ノ弟ナリ後山階内大臣ト云タルソ
一國師　祖庭事苑七云西域之法推重其人外内攸同邪正俱有擧國歸依乃彰斯號聲敎東漸唯北齊高僧法常齊主崇爲國師々々之號自常公始陳隋之代天台智顗爲陳宣隋煬菩薩戒師故時號國師則天朝神秀召入京師及中叡玄凡四朝皆號爲國師
一萬秋樂ノ破　盛衰記十五卷云抑萬秋樂ト云曲ハ本ハ都率天上ノ樂也是則彌勒ノ內院ノ秘密灌頂ノ陀羅尼也釋迦如來忉利ノ雲上ニシテ彌勒ニ袈裟ヲ付屬シ玉ヒシ時彼天ノ萬秋樂ト云木下ニテ天衆菩薩此樂ヲ奏シテ如來ヲ供養シ奉シカハ萬秋樂ト名タリト云　私ニオモワク此說ハ定テ明匠ノ言ヒツタヘシ事ナルラン去レトモ信用ニタラス故ニ彼ヲ書シテ予カ管見ヲアラハス者也
一南禪寺ノ長老　智明ハ祖圓ノ的傳ソ蒙山ト云ケルソ友梅ハ南禪一山國師ノ的傳ソ雪村ト云タソ一葦

宗派ニハ天龍寺固山一鞏トアリ別ニアルヤラ知ラス

一江湖ノ龍象　祖庭事苑ニ云智度論云言其力大龍水行中力象陸行中力大

一釋尊ノ十大弟子　頭陀第一迦葉　多聞第一阿難　智恵第一舍利弗　解空第一須菩提　説法第一富樓那　神通力第一目連　論議第一迦旃延　天眼第一阿那律　持律第一優婆離　密行第一羅睺羅

一扈從　後從曰扈トアリ人ニ從テ行ヲ云ソ

一蘇合　盤渉調ノ樂ナリ古鳥ハ高麗一越調

一陵王　沙陀調壹越調ノ內ノ樂ナリ

一納蘇利　ナウソリ　拍杵コマホコ以上ノ二ツハ高麗一越調ノ樂ナリ

一一瓣香　韻府曰后山詩向來一瓣香敬爲曾南豐諸禪開堂至第三瓣香推本其得法所自則云此一瓣香敬爲其人后山師南豐故云又祖庭事苑第八云古今尊宿拈香多云一瓣々皮莧切爪瓣也以香似之故稱焉

一王舍城ノ昔年五百ノ車ニ珍貨ヲ積テ佛ニ奉　摩訶陁國ノ城ナリ昔民ノ屋度々ニ燒テ七度ニ及フト云ヘトモ王ノ宮殿ハ少シモ燒ケス王道ノ威德ノ天地ニ覆フ事ヲ感シテ其城ヲ即チ王舍ト名タルヨリ遂ニ燒ルコト止レリ其外王舍ニ付種々ノ仔細アリ廣ク大智度論第卷ニ見タリ然ルニ阿闍世王ハ此城ノ王ナリ日々ニ五百乘ノ車ニ五百釜ノ飲食ヲ送テ提婆達多並ニ其門弟ヲ供養ス此時ニ阿闍世ノ父ヲハ頻婆沙羅王トモ或ハ瓶沙王トモ云ケルカ阿闍世ノ毎日ノ供養ノ樣ヲ聞及ヒ益シテ毎日ニ七百乘車ニ七百釜ノ飲食ヲ佛ニ贈リ供養シキ詳ニハ四分律第四卷ニ見タリ和ノ字ノ函ニアリ此等ノ事ヲヤ指シテ云ナラン

一朕建寺事一千七百箇所　五燈會元ニ云大通元年十月二日達磨至金陵帝問曰朕即位已來造寺寫經度僧不可勝紀有何功德祖曰並無功德帝曰何以無功德祖曰此但人天小果有漏之因如影隨形雖有非實帝曰如何是眞功德一曰淨智妙圓體自空寂云云　義楚六帖第十一寺舍塔殿部ニハ西晉ヨリ後代々ニ建立スル寺ノ數ヲ擧ル時キ梁二千八百四十六寺トアリ去レトモ是ハ武帝ノ一代ニ立タルニハ非ス法苑珠琳第一百卷ニモ代々ノ興福部ヲ擧中ニ梁時合寺二千八百四十六所譯經二百四十八部僧尼八萬二千七百人

トアリ今一千七百箇所ト云タハ陳朝ニ至テ新寺ヲ造立スルヲカヤウニ記シタソ夫ナラハ梁武帝ノ時ノ事テハナシ

一行基菩薩　姓ハ高志氏ニシテ泉州大鳥郡人ナリ本來百濟國ノ王ノ後胤也天智帝即位七年ニ生ス誕生ノ時胞衣ヲ身ニ纏テ出ツ母コレヲ忌テ棄テ樹枝ニカケテ置ク一夜ヲ經テ後ニ往テ見レハ胞ヲ出テソノマヽ能モノイフ父母大悦テ養育セリ幼童ノ時兒輩ト遊フヤヽモスレハ佛乘ヲ稱嘆セリ十五歳ニシテ出家シ藥師寺ニ居シテ唯識論等ヲ新羅ノ惠基ニ從テ學セリ精舍ヲ建ルコト四十九所ナリ聖武天皇甚タ敬重シ玉ヘリ天平二十一年ニ菩薩號ヲ賜フ二月二日菅原寺ノ東南院ニテ入寂アリキ時ニ八十二歳也

一天竺婆羅門僧正　釋書十五云釋菩提南天竺國婆羅門種也遙聞支那五臺山文殊師利靈應發本國鴐小舟入唐即登五臺山中逢一老翁問曰法師何之提曰山頂拜文殊翁曰文殊不在也見託生日本國語已翁不見提乃赴本朝天平八年七月行基法師奏曰當迎聖僧聖武帝詔禮部鴻臚雅樂三僚向難波津基率一百沙門共宮僚於海濱調音樂莊儀仗待之須臾西海波面小舟泛々漸近有二梵僧基迎笑執提手共語如舊識始梵言基能應後和語提亦和甚歎密勅舘大安寺東坊十月賜時服天平勝寶元年東大寺銅像成詔提爲開眼導師三年四月爲僧正時號婆羅門僧正天平寶字四年二月二十五日化此中ニ二梵僧ト云ハ菩提ト佛哲トノ事也佛哲ハ林邑國ノ人ナリ

一二十餘年內ニ三度マテ燒ル　延文三年戊戌正月四日夜燒貞治六年丁未五月二十九日夜ト應安六年癸巳九月二十八日夜共ニ三度ナリ

一牛頭栴檀　天竺ニ摩黎山ト云フ山アリ又ハ離垢山トモ云峯狀牛頭ニ似タリ故ニ牛頭山トモ云ナリ此山ヨリ出ル栴檀香也名義集三云此方無故不翻或云義翻與樂能除病故云云　白檀ハ熱病ヲ治シ赤檀ハ風腫ヲ去ルト見ヘタリ

太平記鈔第二十五卷

一後伏見院御孫　御子ハ光嚴院殿ナリ其長子崇光院殿ノ事ナリ諱ハ興仁母ハ陽祿門院三條准大臣公秀ノ女也在位三年ナリ

一萩原法皇　華園院ト申ス也伏見院第二ノ王子也

一軒廊　コンラウ紫宸殿ノ西ノ地ノ間ノ廊ヲ云ナリ

一國郡ト定　是ハ多分ハ四月ニ行ハル也國郡ノ田地ヲ何レノ所カ宗廟ニ奉ントト定アツテ神田ヲ作リ其年ノ十月ニ勅使ヲ下シテ其稻ヲ取ルヲ拔穗ノ使ト云フナリ其稻ヲ以テ十一月ノ中ノ卯日官廳ニテ天子手ヲ自ラ新米ヲ供進マシマスヲ大嘗會ト云フ但是ハ御一代ノ始メ唯一度也又國郡ノ田地ハ御一代カハラヌトソ今但波トアル定メテ其時ノト定ニテコソアルラメソ

一御隔子進　ミカウシマイラス御隔ヲアクルヲモ又ヲロスヲモ進スト云ナリ

一觸穢　シヨクエ是ニハ重々ノ次第カアル事也カヤウノ義ハ五體不具ノケカレトテ深ク忌ニ成ル也頭ニハ五藏カアルホトニ三十日ノ忌ト云也

一凡一陽分レテ　具ニハ一陰一陽ト云ヘシ

一施行　シキヤウ　施ノ字モオコナウト云義ニ用ヘシ

一責ハタル　重言歟責ノ字ヲハタルトヨム

一夜痛ク深テ　甚ノ字ヲイタクトヨムソ去レトモ痛ノ字モ通用スルソ

一榻　シヂ車ニノホリオル丶時用ル物ナリ

一天狗苦日二三度　二時ハカリシテ蘇生スルコト三度ナレハ一日六時ハ皆死シテハタス歟ソ

一和氣　和氣ハ清麻呂三代ノ後時雨天曆十一年正月二十一日ニ典藥頭ニ任ス六代ノ後定成昇殿正四位下文治四年四月二十日卒ス

一丹波　丹波氏ハ後漢靈帝ヨリ延王石秋王阿智王高貴王始爲本朝來客志拏直於本朝書生住丹波國賜坂上姓五代後康賴始賜丹波宿禰姓丹波矢田郡人醫術通神譽溢天下針博士醫博士左衛門佐從五位上永觀二年十一月醫心方三十卷撰之二代之後雅忠昇殿正四位下丹波守侍從聽禁色雜袍右衛門佐號日本扁鵲

一俞山人降氣湯　和劑方曰俞山人降氣湯治上盛下虛痰氣壅盛或喘或滿咽乾不利並治脚氣上攻煩渴引飲

一蓬矢ノ慶賀　翰墨全書戊集一云男子生以桑弧蓬矢六射天地四方示男子之所事也禮記第八内則ノ篇ニ出タリ又左傳ニハ桃弧棘矢以除其災トモアリ棘ノ字ヲモ此時ハヨモキト讀メリ漢舊儀ニハ葦矢トモアルソ

一赤松信濃守範資　圓心ノ子則祐ノ兄ナリ

一筑前守範貞　悞レリ貞範ナリ

一明月ニ當テ光ヲ含ム犀角カ　敬宗寶暦初南昌國献夜明犀夜有光可照百歩上令解爲腰帯毎遊獵夜則不施蠟燭有如晝日

一珊瑚樹枝　外國傳曰大秦西南漲海中可七八百里到珊瑚洲々底盤石珊瑚生其上人以鐵網取之云云　任昉述異記曰珊瑚樹碧色生海底一株數十枝々間無葉大者高五六尺小者尺餘

一思フコトナト問人ノナカルランアフケハ空ニ月ソサヤケキ新古今集ニ入タリ慈鎮和尚

一畫工鬪牛ノ尾ヲ誤テ牧童ニ笑ハル　萬花谷第三十三曰有藏戴崧牛鬪與客觀旁有一牧童曰牛鬪力在前尾入兩股間今尾棹何也出仇池筆記

一天浮橋　虚空ヲサシテ云ナリ神通自在ノコトワサ是ヨリ起レリタトヘハ水上ハ虚空ト同シ其上ニ橋ヲカケテ不通ヲ通スル事此二神ノ通力ヨリ心ヲ得テ橋ト云事ハ出來タリサレハ行幸御幸ノ時道ニ必浮橋ヲカクル事此因縁ナリ夫婦ノ道タカイニ志ヲ通スル事虚空ニ橋ヲカケタルカ如シ今丹後國天橋立トハ天ヨリ降テ此浦ニ跡ヲ止メケル也

一天ノ瓊鉾　アマノサカホコ疏云天神之寶戈也瓊美稱也不必以瓊玉之飾也云云　此矛ヲ天逆戈トモ又天魔返矛トモ云ヘリ

一ヲノコロ島トナル　磤馭盧島ト書也ヲノレトコリタル島ト云義也僅ニ一念動スル處ニシテ自然ニ一島ヲ生スル也人々己々ノ上ニテ計リ知ルコトアリ秘説アリ

一鶺鴒　ニハクナフリ　ツヽナハシラ　ツヽナハセトリ　トツキトリ　トツキヲシヘトリ已上五説アリ世俗ニイシクナキト云フ歌道ニハイナヲウセトリト云トソ纂疏云鶺鴒鳥名飛則鳴行則搖首尾蓋二神睠空自在如鳥之飛唱和之言如其鳴於是見搖首尾得交感之術

一喜哉遇可美小男　アナウレシヱヤアイヌウマシヲ

トコトヨム或ハアナニヘヤウマシヲトコト云云
メノミコト是ハ夏ノ天ヲツカサトリマシマスニ親
司リマス三ニハ天照大日靈貴アマテラスヲホヒル
ハ天照大神アマテラスヲホンカミ是ハ春秋ノ天ヲ
ルメノムチ是ハ冬ノ天ヲ司リマシマスニ親シ二ニ
一日神　三ノ御名アリ一ニハ大日靈貴ト申　ヲホヒ
シ

一月神　又三ノ御名マシマスナリ一ニハ月弓尊ツキユミノミコト上絃下絃ノ二夜ヲ司リマシマス二ニハ月夜見尊　ツキヨミノミコト是ハ十四五六夜ニアタリテ望ノ名アリ日ノ如ク圓滿シタマヒテ其光ウルハシキカ故ニ見ノ字ヲ加テ云ナリ三ニハ月讀尊ツキヨミノミコト是ハ晦日ノ月ノ御名ナリ晦中ニ日數ヲカソヘテヨミテ晦ト知ル故ニ讀ノ字ヲ以テ御名トスルナリ

一カソイロハ　父母ノ二字ヲヨムナリ此歌ハ古今集ニアリ大江ノ匡衡ノ歌ナリ

一イハクス船　磐櫲樟船ト書ナリ磐ハ堅確ノ義櫲樟木名生七年而乃可知　クスノ木ニテ作タ舟ト云ヘトモクスハコスナリカキクケコ相通也天ヲコシテハナツタト見也

一素戔烏　ソサノヲ或ハ作進雄　スサノヲトヨム疏云蓋暴惡之義也神性暴惡故曰神素戔嗚又爲速疾故曰速戔嗚也

一小蠅　蠅聲トアリサワエナストヨムソ邪神ナトノ事ソ

一天香久山　疏云天香山者按風土記謂天上有山分而墮地一片爲伊豫國之天山一片爲大和國之香山今謂在天之時香山カコカク濁ハ冷泉家ノ説ナリト又カコカク淸ムハ二條家ノ説也ト云云　近代淸濁互ニ通シテ用ルト也

一日前宮　疏云日神未出窟之前造之故名曰日前云云紀伊國ナリ

一手力雄　タチカラヲ思兼神ノ子也

一八咫鏡　纂疏ノ意ハ八寸曰咫又中婦人ノ手長八寸謂之咫故八咫之義八寸者八之也鏡徑二尺一寸三分餘三之則其圍六尺四寸是謂八咫云云　八々六尺四寸ノ義ニハアラス唯八寸ノ義ヲ正説トスルト云云

一千劔破　チハヤフル或ハ千磐破ト或ハ千葉破或ハ襅襷振ト書ク字ニ心ハナシ語ヲ借ル計也只神ト云

ハンタメナリ一義ニ千磐破ト書ハ神ノ力ノ强クテ千々ノ磐ヲ打ワルト云ヒ又襌ト云物ヲキテ袖ヲフルヲチハヤフルト云此兩說ハ定家卿モ取タマハヌト見タリ

一淸地鄕　スカニノサト吾心淸々トハ心モ淸淨ニナレリト云淸地ヲ素鵝ノ音ニヨフナリ

一簸川　䟽云簸川者水名也又安藝國可愛之川上ト云異說モアリ

一脚摩乳　アシナツチ䟽云因其子而得名蓋父母撫摩其子之手脚而乳養故也

一八岐蛇　ヤマタノヲロチ䟽云釋名曰物兩爲岐大蛇首尾各八故曰八岐因亦吞却八箇少女也　大蛇ヲロチ　ヲホヲロチ　ハ、三ノ訓點アリ

一湯津ノ爪櫛　䟽云湯津者猶言湯也津語助湯者淸潔之義水能洗滌不淨故曰湯也爪櫛者梳形似爪甲

一八雲立出雲八重垣等　此歌ニ字妙句妙意妙始終妙ト云秘訣アリト云云　予曾テ歌道ヲシラサル故ニ深クシルサス

一日本武尊　景行帝ノ御子ナリ母ヲハ日葉洲媛命ト云フ一日ニ二男ヲ生ス第一ヲハ大碓皇子第二ヲハ小碓尊ト云フ是小碓尊ヲ日本武ト名ケリ身ノ長一丈力能扛鼎焉

一愼テ勿懈　是ハ倭姬ノ辭也景行ノ御妹日本武ノ姑ナリ此征伐之時ニ吉備武彥大伴武日ヲ左右ノ將軍トシテ遣ハサル駿河ノ國ノ大野ニテ賊徒火ヲ放云云但古語拾遺ニハ相模國トアリ此本ニ武藏野ト書タルハ不覺ノ義ナリ

一十束ノ劔　日本紀ニハ十握ト書タリ

一朱鳥元年　天武帝即位第十五年ニ和洲ヨリ赤雉ヲ獻スル故ニ朱鳥ノ年號ヲ成セリ丙戌ノ歲ソ

一蓬蓽　翰墨全集甲集第十卷曰自稱居處曰蓬蓽蓬陋蓽室云云　卑下ノ辭ナリ

一般々　毛詩憂心般々トアリサレトモ今ノ所ニハ親カラス說文ニハ作樂之盛稱般ト云フ或ハ鐘ノ響ヲモ般々ト云フシカレハ法樂ノ聲ヲサシテ云ナルヘシ

一本地三身　前ニモ云フコトク佛ヲ本地ト取ル邊モアリ佛家ト神道トノ義不同ナリ多分ハ佛ヲ本地ト沙汰スルナリ三身トハ法身報身應身ナリ此三身ハ即一身ナリト云天台ノ所談ナリ法華圓敎ノ實說ナ

リ
一垂迹ノ五能　神ノ上ニ五能ト云コト知ラス
一蘋蘩薀藻ノ禮　左傳一云澗谿沼沚之毛蘋蘩薀之菜杜預曰蘋大萍也蘩皤蒿薀藻聚藻也カヤウノ清潔ノ物ヲハ鬼神ニモ薦メ王公ニモ進メツヘキ具ソ
一龍尾堂　禁中ニアルソ
一直任僧都　一段ノ規模ナリ下位ヲ歴スシテ直ニ任ス
一周ノ代ニ寶鼎ヲ掘　鼎ヲ掘得タルコトハ知ラス武王商ニ克テ後ニ九鼎ヲ洛邑ニ遷サレタレハ義士カ誇タル事ハ左傳ニ見エタリ但又述異記曰廬山上有康王谷巓有一城號爲劉城天毎欲雨輙聞山上鼓角笳簫之聲々漸至城而風雨晦合時人以爲常候傳云此周康王之城康王愛奇好異巡歷名山不遠而至城中毎得古器大鼎及弓弩金之屬知非常人之所處也已上　意ニヲモハクコレハ又別段ノコトナリト
一夏ノ時ニ河ヨリ圖ヲ出ス　繫辭云河出圖洛出書云孔安國曰河圖者伏羲氏王天下龍馬負圖出河遂則其文以畫八卦夏ノ時ハ洛水ヨリ神龍アリテ文ヲ負テ出タルヲ禹王ノ見玉ヒテ九疇ヲ成シ玉ヘルソ然レハ是モ今云所ハ違タソ
一黃粱夢　杜詩云手扶紅日名獨在身就黃粱夢不醒
一邯鄲ノ旅亭ニ等　今此書ヤウハ呂翁ヲ呂洞賓カ事ニシタソ呂ノ字カアルトテ同シ人トハ云ハレマシイカソ覺束ナシ先呂翁カ事ヲハ山谷一注曰按異聞集道者呂翁經邯鄲道士邸舍中有少年盧生自歎其貧困言訖思寐時主人方炊黃粱爲饌翁乃探懷中枕以授生枕兩端有竅生夢中自竅入其家見其身富貴五十年老病而卒欠伸而悟顧呂翁在傍主人炊黃粱尙未熟云云次ニ呂洞賓カ事ヲハ錄ニモ載セ其外處々ニ其沙汰アリ佛祖統紀第四十二云唐呂巖字洞賓三擧進士不第於長安酒肆遇雲房將洞賓入終南山授靈寶畢云云注呂仙遊行人間自唐及宋事迹非一トアリ然レハ廣書傳ノ中ニ定メテ色々ノ事アルヘキソ萬花谷ニモ洞賓カ事ハアレトモ邯鄲午炊ノ事ハナシ
一揚龜山カ謝日月詩　排韻云揚時字中立號龜山先生與遊定夫謝頭道俱游明道先生之門擧有本原行無玷缺爲一世儒宗

太平記鈔第二十六卷

一熱湯ニテ手ヲ濯カ如シ　毛詩十八卷桑柔曰誰能執熱逝不以濯　此ハ手ニ熱物ヲ取リテハ其熱ヲサマサンカタメニ必ス冷水ヲ用テ濯ヒサマスソ其コトク國ヲ治ムル道ハ必賢者ヲ用ルニアルソ今書ケルハ只驚ク義ニ用イタソ

一細川阿波將監淸氏　細川次郞義季ノ子俊氏八郞公頼八郞太郞此子和氏阿波守子　淸氏左近將監阿波守從四位下

一仁木左京大夫頼章　惣シテ仁木細川ノ兩家ハ八幡太郞義家ノ息ニ加賀介義國ノ子兄ヲハ木工助義重ト云フ九條院ノ判官代ニシテ新田太郞ト號ス上野國ニ住セリ惣シテ當流ヲ新田ノ一流ト號ス次テ治部少輔義康ト云鳥羽院ノ北面ニシテ陸奥伊豫守ニ任ス保元々年七月十二日ニ昇殿ヲユルサル、コト昨日ノ合戰ノ賞ニ依ル當流ヲ足利流ト號ス此子ヲ民部丞義淸ト云上西門院幷八條院ノ判官代ナリ是モ父ト同ク昇殿ヲユルサル壽永二年十一月一日ニ備中國水島ニテ平家合戰ノ時討タル是仁木細川ノ太祖ナリ此子義實其子實國ヲ仁木ノ太郞ト云フ次子義季ヲ細川次郞ト云フ然ルニ今ノ頼章ハ實國義俊義繼師義ノ子兄ヲ頼直是ハ豊島ノ仁木ト云フ次ヲ義勝仁木二郞トモ矢田ノ次郞トモ云此子四人アリ一ハ義連次ハ頼章仁木二郞三郞ト云是ヲ丹波仁木ト云フ三ヲハ義長次郞四郞ト云是ヲ伊勢仁木ト云フ第四ハ頼勝彈正少弼ト云フナリ然ルニ此頼章ハ延文三年五月ニ出家シテ道璟ト云同四年十月十三日ニ卒ス六十一歲ナリ

一今川五郞入道　吉良上總介長氏ノ第一子滿氏次子ハ國氏是ヲ今川四郞其子基氏此息五郞國範ト云入道ノ法名ヲ心有ト云ナリ伊豆守貞世ノ父也貞世鎭西探題法名ヲ了俊ト云フ歌人ナリ

一四條中納言隆資　隆顯ノ孫隆實ノ息ナリ南山ニテ從一位ス子孫斷絕

一尫弱　尫ノ字ニハ多ノ義アレトモ一ニハ足ノナヘマカリタル貌ソ又癈疾トテワツラヒノ方ニモ取ルソ

一有待ノ身　凡夫ノ身ヲ云ナリ待ノ字ニハ多ノ義アリ長短大小互受其名ト云テタトヘハ人長七尺アル

ヲハ大トハ云ハス螻蟻ナトカ七尺アラハ長大也又人ノ親ト云ハ子ニ對シタ辭ナリ祖父ニ對スレハ又子ト云ハル丶ソ人間ノ惣ヤウカ皆カヤウノ體ソ貴賤貧福等モ皆クラヘモノカ有テ付タ事ソ元來ノ定ハナイソ

一逆修ノタメ　佛祖統紀第三十四ニハ預修トモ云タリ灌頂十方淨土經第十一卷云普廣菩薩復白佛言若四輩男女善解法戒知身如幻精勤修習行菩提道未終之時逆修三七然燈續明懸繒幡蓋請召衆僧轉讀尊經修諸福業得福多不佛言普廣其福無量不可度量

一正月二日　貞和五年己丑歳ソ

一鳥雲ノ陣　六韜云太公曰凡三軍處山之高則爲敵所棲處山之下則爲敵所囚既以被山而處必爲鳥雲之陣是ハ六韜ノ中ノ其一ナリ

一龍鱗陣　魚鱗ハ魚麗ノ陣ノ類ナリ

一竹葉ヲ取出　東坡十四云野店初嘗竹葉酒注張景陽七命曰豫北竹葉注云竹葉酒名

一秦穆公　史記本紀第五云晉擊繆公々々傷於是歧下食善馬者三百人馳冒晉軍々々解圍遂脫繆公而反生得晉君初繆公亡善馬歧下野人共得而食之者三百餘人吏逐得欲法之繆公曰君子不以畜產害人吾聞食善馬肉不飲酒傷人乃皆賜酒而赦之三百人者聞秦擊晉皆求從々而見繆公窘亦皆推鋒爭死以報食馬之德於是繆公虜晉君以歸

一罰ヲハ輕ク行フ　尙書ニ罪ノウタカハシキヲハ輕ク罰シ功ノ疑キヲハ重ク賞セヨト禹王ノ仰セナリ

一國司顯家卿　北畠准后入道親房卿ノ第一ノ息也權中納言從二位

一笙ノ岩屋　吉野ノ奥ニ人跡絶ヘタル所アリ精練ノ行者ノ居テ行法スル處ナリ

一延喜十三年　誤ナリ當年ヨリ後十八年ヲ過テ延長八年ニ崩御ナリシニ如何トシテ當年冥途ニテ値ヒ申スヘキヤ去ホトニ上人ノ冥途ニ往クコトハ天慶四年ナリ日藏上人ハ洛陽城ノ人ナリ延喜十六年ノ二月ニ金峯山椿山寺ニ入テ出家ス時年十二歳也天慶四年八月ニ金峯山ニ入リ三七日無言斷食シテ密法ヲ行ハレケル忽ニ舌燥キ氣塞テ將ニ死セントス人ヲ呼テ相ヒ救ハシメント思ヘトモ既無言ノ行ナリ如何トシテ聲ヲハ出スヘキヤト思惟スル間ニ既氣絶テ頓ニ一ノ窟ノ前ニ至ル其中ニ一ノ沙門アツ

テ手ニ金瓶ヲ執リ其中ヨリ水ヲ出シテ日藏ニ與ヘテ飲シム味ヒ甘美ニシテ言ハモ申ヘカタシ彼沙門云我是執金剛神ナリ常ニ此窟ニ住シテ釋迦ノ遺法ヲ守護ス上人ノ深重ノ修行ヲ感スル故ニ只今雪山ニ往テ八功德ノ水ヲ取リ來テ授ケ與ト云云 具ニハ元享釋書第九卷ニアリ亦廣クハ扶桑記第廿五卷ニ見ヘタリ

一倶生神　惣シテ人生ルト同ク倶ニ生スル神ヲ云フ故ニ一神ノ名ニアラス今ハ日藏上人ニ生レツイタル倶生神ニテヤアルラン華嚴經第四十四卷云如人從生有二種天常隨侍衛一日同生二日同名天常見人々不見天

一十地等覺　華嚴經ニハ凡夫地ヨリ佛果ノ位ニ到ルマテノ間ヲ前後合セテ四十二位ニタヽミタリ夫ト云ハ十住十行十廻向十地是ヲ四十位ト云フ此上ニ等覺位譬ヘハ太政大臣ノ位ノ如ク此上ニ妙覺位コレハ天子ノ御位ノ如シ

一師資ノ契　師弟ノコトナリ

一役優婆塞　前ニ注ス文武帝ノ時ノ人ナリ天暦帝トハ村上天皇ノ御事ナリ遙ニ二百五十餘年ヲ隔タリ知ラス今出現シテ三尊ヲ安置セル事ヲ

一彼唐堯虞舜ノ古茅茨不剪柴椽不削　源ト六韜ノ語ナリ又史記ノ李斯カ傳ニモ堯之有天下也堂高三尺采椽不斲茅茨不剪雖逆旅之宿不勤於此矣　通鑒集覽第四十云徐廣曰墨子稱茅茨不翦謂以茅覆屋不取整齊云云 索隱ニハ采ハ木ノ名ナリ即今ノ櫟木ナリ此木ハ文釆ナトハナラヌ木也此木ニテ椽桷ヲ作リケルトソ世俗ノ思フニハ庭前ノ茅茨ノ茂リ生スルヲモキラス又椽ヲモケツラスト計リ云ソ右ノ注ノ意ハ左ニテハ無シ

一夜ノ衣ヲ返セトモ昔ヲ見スル夢モナシ　古今集戀部小野

　イトセメテ戀シキ時ハウハ玉ノ夜ノ衣ヲカヘシテソヌル

一月ヲ擔ニ肩ヤセタリ　書言古事第八ニアリ

一故兵部卿親王　大塔ノ宮ノコトナリ

一呉牛喘テ舌ヲ巨　風俗通曰呉牛苦於日故望月而喘韻府曰滿奮坐晋武瑠璃屏有寒色曰臣猶呉牛見月而喘　喘ハアヱクトヨム也息ヲスタク姿ソ

一月中ノ桂　玉屑第十六卷云按西陽雜俎云舊傳月中

有桂有蟾蜍故異書言月桂高五百丈下有一人常斫之
宋之問カ詩ニ桂子月中落天香雲外飄
一紅ノ八シホノ岡ノ下紅葉　大和國長谷寺ニアリト
歌ニ
紅ノ八シホノ岡ノモミチハヲイカニ染ヨト名ヲ
シラスラン
一枯葉ノ風ヲ詠　西行歌
津ノ國ノ難波ノ春ハ夢ナレヤ葦ノ枯葉ニ風渡ル
ナリ
一宰相在登卿　聖廟ヨリ七代ノ孫　在良　清能
在清　公輔　在公　在輔ノ息ナリ
一纍々　力追切一曰蔓ハヒコル貌ナリ
一芊々　黃陵廟詩古碑無字草芊々季昌カ注ニハ草盛
貌トアリ
一魏彌子瑕　大ニ誤レリ禰正平ト云ヘシ文選第十三
鸚鵡賦題注云范曄後漢書曰禰衡字正平々原人也少
有才辯而尙氣慠曹操欲見之不肯往操懷忿而以才名
不欲殺之送劉表後復侮慢於表々不能容以江夏太守
黃祖性急故送衡與之祖長子射爲章陵太守尤善於衡
射大會賓客人有獻鸚鵡者射舉札於衡前曰願先生賦
之攬筆而作辭彩甚麗後黃祖殺之時年二十六胡曾詩
曰黃祖才非長者儔禰衡珠碎此江頭今來鸚鵡洲邊過
惟有無情碧水流
一芳甘　韻府ニモ芳甘ト云文字ヲハノセタレトモ茶
ノ事トハ慥ニナシ又東坡第十ニモ芎藭ヤ白芷ノ事
ニ猶不失芳甘ト作タソ去レハ茶ノ名ト一邊ニ思ヘ
カラス
一建溪ノ風味　方輿勝覽第十一云建溪源出武夷至城
外今東溪也云云　玉屑十五云建溪先暖氷微開溪邊奇
茗冠天下　茗モ茶ノコトソ太唐一天下ニ隱モナキ
茶ノ名所トソ
一人間第一ノ水　東坡カ語シラス但山谷第六省中烹
茶懷子瞻詩注云陳舜俞廬山記曰康王谷有水簾飛泉
被巖而下者二三十派其高不可計其廣七十餘尺陸鴻
漸茶經嘗第其水爲天下第一云云　是ヲヤ本據トスヘ
キ知ラス
一二佛並座　大方塔ト云ヘハ多寶ノ塔ノ事ニシテ習
テ此語ヲ作ス法華ノ寶塔品ノ時ニ多寶如來大地ノ
底ヨリ寶塔ニ乘シ來リ玉ヒ釋尊所說ノ證明ヲナシ
テ後ニ塔ノ戶ヲ開テ釋尊ヲ請シ入レ奉リ師子ノ半

座ヲ分テ釋尊ヲ座サシメ玉フヲ二佛並座トハ云ナリ

一五智ノ如來　佛ノ智惠ヲソレ〳〵ノ功能ニ依テ五ノ名ヲ立ルソ此四智五智ノ具足シタルヲ佛トハ云ナリ佛地經云世尊告妙生菩薩當知有五種法攝大覺地何等爲五所謂清淨法界大圓鏡智平等性智妙觀察智成所作智云云人師ノ判釋モ多ケレトモ際限モナキ事ナレハ注サス是ノ五智ヲ五佛ニアテ或ハ五佛尊ニカタトリ或ハ五行ニ配スル事アリ

一烏瑟　具ニハ烏瑟膩沙ト云也一切經音義第廿一卷云此云髻案無上依經云頂骨涌起自然成髻是也シカレハ佛ノ御首ノ螺髮ト云コト也

一吹毛ノ咎　四子講德論云吹毛求疵並施螫毒注韓子曰古之人君大體者不吹毛而求小疵虎ノ皮ナトノ打見ヘテウツクシキ物ヲ毛ヲ吹キワケテ底ノ疵マテ求ルハ更ニ所詮ナキ事ソ

一堯ノ八元　史記本紀云高辛氏有才子八人世謂之八元注賈逵曰元善也索隱曰左傳高辛氏有才子八人伯奮沖堪叔献季仲伯虎仲熊叔豹季貍　左傳第九注云高辛帝嚳之號八人亦其苗裔

一舜ノ八愷　史記云高陽氏有才子八人世得其利謂之八愷注賈逵曰愷和也索隱曰左傳史克對季文子曰昔高陽氏有才子八人倉舒隤敳檮戭大臨尨降庭堅中容叔達　左傳注云高陽帝顓頊之號八人其苗裔云云昔ノ八元八愷ノ種族カ其名ヲ改メスシテ堯ノ時マテ居タルヲ堯ハ擧用シ玉ハス舜ノ時彼ノ人々ヲ擧タルソ此十六人ヲ今堯ノ八元舜ノ八愷ト分テ云ハ非ナリ

一周十亂　論語泰伯篇云武王曰予有亂臣十人注馬融曰亂理也理官者十人謂周公旦召公奭太公望畢公榮公太顚閎夭散宜生南宮适其一人謂文母先儒ノ義ニ母ヲ臣トスル義アルヘカラス然ラハ推スルニ武王ノ后太公ノ女シテ邑姜ヲサスヘシ九人ハ外ヲ治メ邑姜ハ内ニアツテ治メケル故也

一漢ノ三傑　張良ト蕭何ト韓信ヲ云ナリ高祖本紀云夫運籌策帷帳之中決勝於千里之外吾不如子房鎭國家撫百姓給餽饟不絶糧道吾不如蕭何連百萬之軍戰必勝攻必取吾不如韓信此三人者皆人傑也

一世祖ノ二十八將　後漢ノ光武帝ヲ綱鑑紀要ニハ世祖光武ト載タリ世祖ト云ハ多クアレトモ今ハ光武

ト思ヘシ二十八將アリ是ヲ中興ノ臣ト云ナリ明帝永平三年ニ帝思中興功臣乃圖二十八將於南宮雲臺以鄧禹爲首次馬成呉漢王梁賈復陳後耿弇杜茂寇恂傅俊岑彭堅鐔馮異王霸朱祐任光蔡遵李忠景丹萬脩蓋延邳彤銚期劉植耿純臧宮馬武劉隆又益以王常李通竇融卓茂合三十二人

一太宗ノ十八學士　唐ノ太宗名ハ世民ト云テ初ハ秦ニ封セラレタリ高祖武德四年ニ秦王世民ヲ用テ天策上將ト成シタソ世民ノ勳功アマリニ廣大ナル故ニ前代ノ官ヲ名ケ得スシテカヤウニ云タソ其時ニ世民館ヲ開キ文學ノ士ヲ將イテ文籍ヲ討論セシメンカ爲ニ選テ十八人ヲ置ラレタリ分テ三番トシ毎日六人ツヽ館中ニ到テ宿直ヲシタリ世民モ暇日ニハ彼席ニ望テ論談シマスソ士大夫タルホトノ者ノハ此選ニ預ルコトヲ得ルハ時人コレヲ瀛洲ニ登ルト云テ名譽ノ事ニシタソ登瀛トハ注ニ如昇仙也ト云タソ十八人トハ杜如晦房玄齡虞世南褚亮姚思廉李道玄蔡允恭薛元敬顏相時蘇勗于志寧蘇世長薛收李守素陸德明孔穎達蓋文達許敬宗也或ルトキニ閻立本ヲシテ此十八人ヲ圖像セシメテ褚亮ニ仰セ付テ賛ヲ作サシメタルソ此ヨリ十八學士トハ云ヒ弘タソ世民ハ五六年ヲ過テ即位アリテ太宗帝トハ申タリ

一諸ニ有テ爭心無　孝經云爲下不亂在醜不爭孔安國曰醜群類也

一卞和ト申ケル賤者　此故事ニ付テ王ノ名ノ次第多ク相違アリ文選第二十四卷ノ注ニモ韓子ヲ引テ云フ時武王成王文王ト列タリ千字文ノ注コレニ同シ又成王ハ文王ノ次ニ杜赦々ノ次ニ成王煇ナリ但杜赦ハ成王ノ兄ニシテ共ニ文王ノ子ナリ然レハ武成文ト列ルモ誤ナリ又蒙求並祖庭事苑第三ニ厲武文ト次第スルモ誤ナリ楚ニハ厲王ト云ハナシ唯蚡冒武王文王ト云ヘシ蚡冒ハ字ハ眴ト云フ周平王十四年ニ即位セリ在位十七年ナリ武王ハ蚡ノ弟ナリ五十三年ノ在位ソ文王ハ武王ノ子也五年ノ在位ソ今コヽニ武文成ト次第シタルハ文選ニ從フタソ卞和カ三代ノ間ヲ經タルホトニ老年ノ時タルヘシ李太白第二卷ノ注ニハ誤ナク列タソ

一夜光ノ玉トモ名　是ハ又別ノ事ナリ千字文珠稱夜光注云昔楚臣隋侯出行見群牧兒打一蛇傷破血流在

渉中宛轉隋侯憐之取向水中洗以神藥封之得活悠然入水而去其蛇後啣七寸珠來報隋侯於夜庭中忽有光明侯乃開戸視之見一蛇子啣珠於戸外吐珠在地曰我龍王之子因戯草中爲牧牛小兒所傷感君見活故來報恩侯得珠以進楚王々置之殿上夜光如晝故珠稱夜光爲世所寶也又祖庭事苑第三卷同之

一天上ノ摩尼珠　天上ノ珠ト人間ノ珠ト二種アリ法苑珠琳第二十八引智度論云明月摩尼珠多在龍腦中有福衆生自然得之亦名如意珠常出一切寶物衣服飲食隨意皆得々此珠者毒不能害云云　大智度論第五十九卷云是寶珠有二種有天上如意寶有人間如意寶諸天福德厚故珠德具足人福德薄故珠德不具足

一學窻ニ雪ヲ聚　孫康ハ家貧シテ油ナシ常ニ雪ニ映シテ書ヲヨムテ後ニ御史大夫ノ官ニ至レリ

一輦路　輅ノ字ナルヘシ去レトモ路ノ字ニ用タルコトモアリ然レハ強チ苦シカラス

一趙王　趙ノ惠文王ソ名ハ何ト云フ即位十六年ニ楚ノ和氏カ璧ヲ得タリ秦昭王名ハ稷ト云フ璧ノコトヲ聞テ趙王ヘ書ヲ遣シ願ハ十五城ヲ以テ璧ニ易ント云趙王曾テ合點ヲセスシテ彌重寶トセラレタソ

一秦王盃ヲ擧玉フ　史記云秦王會澠池秦王飮酒酣曰寡人竊聞趙王好音請奏瑟趙王鼓瑟秦御史前書曰某年月日秦王與趙王會飮令趙王鼓瑟

一藺相如　史記列傳二十一云藺相如者趙人也爲趙宦者

一左史右史　禮記玉藻曰天子言則左史書之動則右史書之

一盜跖　柳上惠カ弟ナリ常ニ巨盜ヲナス大惡ノ者ナレハ則盜跖ト名ヲ呼タソ人ノ屋ヲ穿チ破リ門樞ヲモ解キ開テ或ハ牛馬ヲ取リ人ノ婦女ヲ取リ親ヲ忘レ父母兄弟ヲ顧リミス增テヤ先祖ヲ祭ルナトノ事ハ打タエタル者ナリ詳ニ莊子第二十九ニ見タリ

一文成カ僞　此二人ヲ史記ニハ引事ニハセサレトモ此ヲ書ク人カ餘勢ニ云タソ文成ト云者ノハ漢ノ武帝ノ時ノ者ナリ如何ンソ引テ云コトヲ得ンヤ僞ノスカタヲ史記封禪書ニ詳ニノセタリ又資治通鑑第四云齊人少翁以鬼神方見上々有所幸王夫人卒少翁以方夜致鬼如王夫人之貌天子自帷中望焉於是乃拜少翁爲文成將軍以客禮々之文成又勸上爲臺室而置祭具以致天神居歲餘其方益衰乃爲帛書以飯牛佯不

知言曰此牛腹中有奇殺視得書々言甚怪天子識其手書於是誅之
一遂連城ノ玉ヲ奪取テ趙ノ國ヘソ歸ケル　文選第二十一覽古詩云趙氏有和璧天下無不傳秦人來求市厥價徒空言與之將見賣不與恐致患簡才備行李圖令國命全藺生在下位繆子稱其賢奉辭馳出境伏軾徑入關秦王御殿坐趙使擁節前揮袂睨金柱身玉要俱捐連城既僞往荊玉亦眞還
一廉頗　史記曰廉頗者趙之良將也拜爲上卿以勇氣聞於諸侯
一拈香　祖庭事苑八云今開堂長老必親拈香者以所得之法必有所自所行之道
一吒祇尼天ノ法　是ヲ或密宗ニ尋タレハ稻荷ノ事也本地辨才天ノ事ナリト答ラレタソ
一始皇ト申ハ莊襄王ノ御子　莊襄王ハ名ハ楚ト云フ孝文王ノ中子昭襄王ノ孫也但シ面ムキニハ襄王ノ子トハ云ヘトモ實ニハシカラス呂不韋ト云者カ莊襄王ノ臣ニシテ位相國ニ至リタルカ后ト密通シテ儲タル子ナリ是事ヲハ深ク隱タルニ依テ其時分ニハ知ル人ナカリケリ孝文王ハ即位アリテ三月シテ薨シ莊襄王ハ唯三年ノ在位ソカヤウニ兩帝ノハテ玉ヘル事ハ何ソナレハ呂不韋カ謀ヲ成シテ人ノ知ラヌヤウニ殺シタソ胡致堂ト云者カ評シタソ此外呂不韋カヲソロシキ計リコトヲシタソ太后ニ密通シテ子ヲ儲タコトカ顯レサウニ成ルホトニ嫪毐ト云者ヲ太后ノ腰モトツカヒニ進セテ又密通ヲサセ程ナク二人ノ子ヲ生セタソ始皇ハイマタ年少ノ時ナリ彼嫪毐カ威勢類ナクシテ長信侯ト成テ政事ハ偏ニ此一人ニアリケリ此時ニ又衆人ノ中ヨリ誰カ云トモナク嫪毐ハコミヤツカイニテハナシ不思議ノハタラキヲシテ始皇ノ假父ト成タソト云ヒ立テタホトニ是モ迷惑シテ帝ノ印判ヲ矯テ諸軍ニフレテ兵ヲ聚亂ヲ起タソ此時ニ王ヨリ昌平君昌文君ヲ大將ニシテ征伐セラレタルニ嫪毐カ軍敗北シ遂ニ生捕リニセラレテ車裂ニ遭タソ彼二人ノ子ヲハ嚢ヘ入テ撲殺シタソサテ太后ヲハ雍賁ノ陽宮ト云所ヘ遷シ置テ放シ囚人トノヤウニシテ居ラレタソカヤウノ事モ偏ニ不韋カシワサヨリ起ルソ不韋モ積惡ノカレ難シテ始皇即位十二年ニ蜀ヘ流サレ鴆毒ヲ飲テ死シタソ

一始皇年十六ノ始　壬寅ノ歳ニ生テ甲寅ノ歳ニ即位アリ然レハ十三ノ年ニアタレリ

一魏畢萬　魏ノ先祖ハ畢公高ト云フ武王殷ノ紂ヲ伐テ高ヲ畢ト云フ所ニ封セラル丶ニ依テ名トスルナリ其後絶テ庶人ト成或ハ中國ニ居ラル時モアリ或ハ夷狄ニ在ル時モアリケルカ其苗裔ニ畢萬ト云アリ晉ノ獻公ニツカヘテ遂ニ魏ニ封セラル丶ナリ今秦ヨリ亡スハ魏王假ト云ナリ始皇即位二十二年丙子ニアタル也畢萬ヨリ二百年ハカリノ後ノ事也

一趙ノ趙襄　其先ニ周臣叔帶幽王ノ無道ナル故ニ周ヲ去テ晉ニ往テ文侯ニツカヘ始テ趙氏ヲ晉ノ國ノ中ニ立テタリ叔帶七世ヲ過テ趙襄ヲ生セリ其子遁遁カ子朔等列ネ二百二十餘年ヲ歴テ周ノ威裂王二十三年ニ裂侯籍カ始テ諸侯ト成レリ籍ヨリ第十一君百八十二年ニアタリテ代王嘉ト云時ニ秦始皇廿五年ニ亡シタソ

一韓宣子　是モ周ノ威裂王廿三年ニ始テ趙魏ト倶ニ列テ諸侯ト成リ周ノ安王マテニ合十代一百七十四年也始皇十七年ニアタリテ此ヲ滅セリ

一齊陳敬仲　陳ノ厲公他ノ子ナリ齊ニ奔テ陳字ヲ改テ田氏トセリ遂ニ周ノ安王十六年ニ太公和カ始テ列テ諸侯トナリ第七代ニ王建ニ至ルマテ合一百六十六年ニシテ秦ノ兵齊王ヲ虜ニシテ來リ松栢ノ間ニ處セシメ遂ニ餓死ス始皇二十六年ニアタル也

一楚王　楚ノ悼王類ハ周ノ安王元年ニ立テ王負芻ト云マテハ合テ九代百七十九年ナリ秦ノ王翦ヲ遣ハシテ負芻ヲ虜ニシテ來リ遂ニ殺タソ始皇廿四年ニアタルソ

一燕王　周ノ顯王三十七年ニ燕易王立テ同四十六年ニ初テ王號ヲ立テ第七代王嘉ト云マテ合テ百十一年ニアタリテ秦ヨリ王賁ヲ遣シ遂ニ虜ニシテ來リ燕ヲ滅シタソ始皇ノ二十五年ニアタルソ

一六國　右ニ云フ國々ソ索隱曰六國乃魏韓趙楚燕齊並秦凡七國號曰七雄

一始皇　本紀云朕爲始皇帝後世以計數二世三世至于萬世傳之爲窮　通鑑云王初並天下自以爲德兼三皇功過五帝乃更號曰皇帝命爲制令爲詔

一三墳五典　尙書序ニモ伏犧神農黃帝之書謂之三墳少昊顓頊高辛唐虞之書謂之五典トアリ

一惣シテ三千七百六十餘卷皆燒捨ラル　此卷數タシ

カナラス儒者ヲ坑ニセラレタル數ハ四百六十餘人トアリ史記云今諸生不師今而學古以非當世惑亂黔首　臣請史官非秦紀皆燒之云云　三十日ノ間ニ燒キ盡サスト見ヘタリ此悉李斯カシワサナリ

一十二丈ノ金人　本紀云大酺收天下兵聚之咸陽銷以爲鍾鐻金人十二重各千石　此中ニ酺ト云ハ三月上巳ノ日ニ水上ニシテ飲食スルヲ云フ應劭曰古者以銅爲兵云云　十二丈トハナシ漢書五行志ニハ大人長丈足履六尺トアリ後漢書云銅人十二各重二十四萬斤ト

一惡星一落テ忽ニ方二十丈ノ石トナル　本紀曰三十六年熒惑守心有墜星下東郡至地爲石黔首或刻其石曰始皇帝死而地分始皇聞之遣御史逐問莫服盡取石旁居人誅之因燔銷其石始皇不樂云云　熒惑モ守心モ皆星ノ名ナリ又邯鄲トハノセス

一函谷　關ノ名ナリ孟嘗君カ傳ニハ在陝州桃林縣西南十三里ト云ヘリ師古云按山形如函故稱函關又圖志云西去長安四百餘里路在谷中故以爲名

一二崤　元和志云東崤至西崤三十五里在秦關之東漢關之西又左傳ニハ崤山ニ二陵アリト載タソ故ニ二崤ト云フ

一虹梁金鐺　西都賦注曰梁典如虹故言虹梁瑺音當椽頭飾也コシリトヨム

一徐福文成　前ニモ云カ如ク文成ハ漢ノ代ノ者ナレハ此時ハアルヘカラス本紀云徐市等上書言海中有三神山名曰蓬萊方丈瀛洲仙人居之請得齋戒與童男女求之於是遣徐市發童男女數千人入海求仙人云云

一海漫々トシテ邊ナシ　此ヨリ下ハ白氏文集第三卷海漫々ニヨッテ書ス曰海漫々直下無底旁無邊雲濤煙浪最深處人傳中有三神山々上多生不死藥服之羽化爲天仙秦皇漢武信此語方士年々采藥去蓬萊今口但聞名煙水茫々無覓處海漫々風浩々眼穿不見蓬萊島不見蓬萊不敢歸童男丱女舟中老徐福文成多誑誕云云

一月華星彩　杜荀鶴旅懷詩云月華星彩坐來收

一之罘ノ大江　山ノ名ニシテ江ニハアラス地理志云之罘山在東萊腄縣括地志云在萊州文登縣西北九十里罘ハ房尤反　フウノ音ソ史記ニハ浮江至湘山祠トアリ此時ニ大風ニ値テ怒ヲ成シ刑徒三千人ヲモッテ湘山ノ樹ヲ伐テ山ヲアカハタカニセラレタソ

一始皇其夜龍神ト戰ト夢　史記云徐市等入海求神藥數歲不得費多恐譴乃詐曰蓬萊藥可得然常爲鮫大魚所苦故不得至願請善射與俱見則以連弩射之始皇夢與海神戰如人狀問占夢博士曰水神不可見以大魚蛟龍爲候今上禱祠備謹而有此惡神當除去而善神可致乃令入海者齎捕巨魚具而自以連弩候大魚出射之自琅琊北至榮成山弗見至之罘見巨魚射殺一魚遂並海西至平原津而病　七月丙寅始皇崩於沙丘平臺云云崩ノ歲ハ五十ニテ　ルト注シタソ沙丘ハ長安ヲ去ルコト二千餘里ナリト注セリ

一白起　列傳第十三卷ニ出タル郿ト云所ノ人也善ク兵ヲ用テ秦昭王ニツカヘタリ其功アケテ計フヘカラス遂ニ武安君ニ封セラレ戰勝攻取ルコト凡七十餘城トアリ昭王五十年十一月ニ死ス然レハ白起カ死シテ始皇ノ崩御ハ四十七年ノ後ナリ此人何ソ二世帝ノ時ノ大將タランヤ

一蒙恬　此人ノ先祖ハ齊ノ人ナリ秦ニ到テ仕ヘタリ祖父ハ蒙驁ト云フ是モ秦昭王ニツカヘテ官上卿ニ至リ莊襄王ヨリ始皇帝ノ即位七年マテ大將ヲシテ度々ノ忠功ヲ成セリ七年ニ卒ス驁カ子ヲ武ト云フ武カ子ヲ恬ト云タリ恬嘗テ獄法ヲ學ヒシ故ニ後ニ獄官ト作タソ始皇ニ仕ヘテ勳功アリ趙高カ謀ニヨツテ扶蘇ヲ殺シタ時ニ蒙恬モ毒ヲ呑テ自殺シタソ始皇三十七年ソ是モ二世帝ノ時ノ軍大將ハセヌ者ソ章邯ハ其時ニ戰ヲシタソ

一鹿ニ鞍ヲ置テ此馬ニ召サレヨ　本紀云八月巳亥趙高欲爲亂恐群臣不聽乃先設驗持鹿献於二世曰馬也二世笑曰丞相誤耶謂鹿爲馬問左右々々或默或言馬

一一人天下ニ横行スルヲハ武王是ヲ耻　孟子二卷云一人衡行於天下武王耻之注云衡横也

太平記鈔第二十七卷

一犯星　星犯月ト云事アリ是ハ臣トシテ主君ヲ犯ス象ナリ客星トハ慧星ナトノ變ナリト

一將軍塚　延暦十三年ニ長岡ノ京ヨリ此平安城ヘ遷玉ヒテ以來都ヲ他所ヘ遷サレス昔ヨリ多ノ都アリケレトモ此京ホトニ地景目出度ク王業久カルヘキ所ナシトテ移サレタリ末代マテモ此京ヲ他所ヘウツサレヌ事ヤアルヘキトテ大臣公卿賢者才人諸道ノ博士等ヲ召集メラレテ僉議アリテ長久ナルヘキ樣トテ土ニテ八尺ノ人形ヲ造リ鐵ノ甲冑ヲ着セ弓矢ヲ持セテ帝自ラ土ノ人形ニ向ヒ祝申サセ給ケルハ必此京ノ守護神ト成玉ヘ若未來ニ此都ヲ他所ヘウツス事アラハ堅ク王城ヲ守テ其人ヲ罸セヨト宣命ヲ含ラレテ後東山ノ嶺ニ深一丈餘ノ穴ヲ掘テ西向ニ立テ埋メラレケリ

一大樹　將軍ノ事也前ニ注ス

一大物五六　大ナル木ノ事ナリ世話ニモ五六ヲカケヨナト云ナリ

一ジモト　苦ノ字也是ヲ又フチトモヨム

一愛宕山　慶俊ト云人南都ノ道慈ニ仕ヘテ三論ノ法ヲ學シ後ニ此山ヲ開テ第一世タリ性ニ悲愍ヲ懷キ貧病ノ者ヲ憐ミシ聖リ也

一玄昉　靈龜二年ニ勅ヲ奉シテ入唐シ智周法師ニ値テ法相ノ深旨ヲ受ケ唐帝ヨリ紫衣ヲ賜ハリ天平七年ニ歸朝ス

一眞濟　釋書三云眞濟姓紀氏洛陽人朝議郎御國之子也延暦十九年生ス弘法大師ニ從テ密法ヲ受テ貞觀二年二月二十五日ニ逝去ス年ハ六十一ナリ盛衰記第八卷云中比我朝ニ柿木ノ紀僧正ト聞ヘシハ弘法大師ノ入室瀉瓶ノ弟子瑜伽灌頂ノ補處智德秀逸ニシテ驗德無雙ノ聖タリキ大法慢ヲ起シテ日本第一ノ大天狗ト成テ候キ此ヲ愛宕山ノ太郎坊ト申也云云今謂眞濟ヲ紀僧正ト云フ此ホトノ人爭カ天狗ニハ成レンヤト疑シク思也

一寛朝　クワンテウ下ヲ濁ル吏部尚書敦實王第二ノ子寛平上皇ノ御孫也密學ニ純粹ニシテ遍照寺ニ居シ衆ヲ集テ法莚ヲヒラキタリ世ニ廣澤流ト云フ長德四年六月十二日ニ化ス廣澤流トハ仁和寺ナリ

一慈惠　第二十五卷ニ注ス類豪ノ傳ハシラス

一仁海　釋書四云事元杲稟密學博錯綜衆流醍醐之側小野之地海啓密講之席世號小野密派永承元年五月十六日滅年九十二云云　小野流トハ醍醐并ニ勸修寺ナリ

一尊雲　大塔ノ宮ノ事也

一堅牢地神　地神ハ惣名ナリ堅牢ハ別號也嘉祥大師云堅牢者理體不可壞也如金剛王無能破者地者依持出生乃智用也

一師子ノ蟲ノ師子ノ肉ヲ食　蓮華面經上卷云譬如師子命絕身死若空若地若水若陸所有衆生不敢食彼師子身肉唯師子身自生諸蟲還自噉食師子之肉又仁王經下卷ニモ如師子身中蟲自食師子ト說カレタリ

一仁トハ施惠四海深憐民　通論曰仁者兼愛故人二爲仁又莊子云愛人利物謂之仁

一臣殺君子殺父　孝經序云臣弑其君子弑其父亂逆無紀

一力ヲ以テ可爭　又序云諸侯力爭道德既隱

一太白　天官書曰太白日庚辛主殺云云　漢天文志曰其日庚辛四時秋也五常義也五事言也人主義虧言失逆秋令傷金氣罰見太白

一辰星　索隱曰即正四時以治辰星之位是也元命包曰北方辰星水生物布其紀故辰星理四時正義曰天官占云辰星北水之精黑帝之子宰相之祥也

一歲星　孟康曰歲星之精散所爲也五星之精散爲六十四變　斗ハ北斗四季司宿トハ春ハ東方ノ歲星夏ハ南方營惑星秋ハ西方太白星冬ハ北方辰星ト云カ如シ曜ハ七曜九曜ナリ宿ハ二十八宿等ノコトナリ

一餓莩滿巷　孟子一云塗有餓莩而不知發注云餓死者曰莩

一天文博士　唐名ヲ司天ト云也天文道ヲハ安部晴明相傳シ來ルナリ

一シラヌヒノ筑紫　ヒノ字ヲイトヨム樣ニヨシ景行天皇ノ御時夜クラキニ船ニテキシニツキ給フ所ヲ知給ハヌニ火ノ光アリ誰人ノ火ソト問給ヘト主シ誰トモ知ラスト答フサテ不知火ノツクシト云云　肥後肥前ト云モ是ヨリ乎

一强仕ノ齡　人ノ四十ニ成ルヲ云フ曲禮上云四十曰强而仕

一縟茵　シトネナリ茵褥ニ作ヘシ說文ニハ車中重席也釋名ニハ車中所坐者也トアリ

一香爐峯ノ雪　白居易カ作寺近香峯下云題遺愛寺鐘欹枕聽香爐峰雪撥簾看

一九回ノ思　崔魯カ詩ニ玉樓春暖笙歌夜肯信愁腸日九回東坡十九云妄心不復九回腸注司馬遷答任少卿書曰是以腸一日而九回居則忽々若有所亡出則不知所如往

一六喩般若　金剛般若經云如夢幻泡影如露亦如電此ノ六ノ喩ヲ說タル故ニ六喩經トモ云ナリ

一王昭君カ胡角一聲霜後夢等　朗詠下卷ニアリ紀納言ノ作ナリ紀氏ハ人皇第七代孝元天皇ノ御末ナリ從三位彈正大弼忠範ノ息中納言長谷雄ヲ紀納言ト云ナリ

一紅葉ソヌサト手向山　菅丞相ノ歌ニ

一都良香　前ニ注ス三千世界等ヲ云ハ朗詠ノ山寺ノ所ニアリ竹生島ニテ作或說ニハ下句ハ辨才天續玉フト

一荒血山　アラチ山ハ有乳山トモカク越前ノ名所ナリ

一淺茅色付　人丸歌

矢田ノ野ニアサチ色ツクアラチ山嶺ノアハ雪寒ソ有ラン

一歸ル山　還ノ字ヨシ越前ノ名所ナリ古今離別部凡河内躬恒

還山何ソハ有テアルカヒハキテモトマラヌ名ニコソアリケレ

一蝸牛ノ角上　文集二十六ニ蝸牛角上爭何事石火光中寄此身　白樂天カ對酒ト云題ノ詩ナリ

一無常ノ虎ノ身ヲ責　大智度論第十九卷云觀無常故不生愛等諸結使譬如羊近於虎雖得好草美水而不能肥如是諸聖人雖受無漏樂無常空觀故不生染著脂云云無常ヲ虎ニ譬タリ

一月ノ鼠ノ根ヲカフル　佛說譬喩經云時有一人遊於曠野爲惡象所逐怖走無依見一空井傍有樹根即尋根下潜身井中有黑白二鼠互齧樹根於井四邊有四毒蛇欲螫其人下有毒龍心畏龍蛇恐樹根斷樹根蜂蜜五滴墮口樹根搖蜂散下螫斯人野火復來燒然此樹王曰是人云何受無量苦貪彼小味爾時世尊告言大王曠野者喩於無明長夜曠遠言彼人者喩於異生象喩無常井喩生死險岸樹根喩命黑白二鼠以喩晝夜齧樹根者喩念々滅其四毒蛇喩於四大蜜喩五欲蜂喩邪思火喩老病

毒龍喩死云云　竟字函ニ入タル經ナリ此中ニ異生ト云ハ衆生ノ事也

一壁草　イツマテクサ古キ壁ニ生スル草也久カラサル物ゾ

一尾形ノ三葉四葉ニ作リ　古今ノ序歌ニ此殿ハムヘモトミクリサキ草ノ三葉四葉ニ殿ツクリセリ

一洞院太政大臣公賓公　賓ノ字ハ悞也賢ノ字ニ改ムヘシ中園相國ト號ス實世實夏ノ父ナリ

一保安　鳥羽院ノ第五番ノ年號久壽ハ近衞院ノ第五番ノ年號也

一高倉宰相廣通　九條大相國伊通公ノ息爲通正四位下　泰通此ヲ高倉ト號スコレヨリ第六代ノ孫ナリ

一冷泉宰相經隆　大納言經房卿曾孫爲經吉田ト名ク今ハ甘露寺ト號スル也其子經賴々ノ子賴隆ノ息也今ノ冷泉家ノ事ニテハナシ

一緇素　緇ハ出家ナリ素ハ俗ヲ云

太平記鈔第二十八巻

一季桓子　魯桓公ノ第四ノ子ニ季友ト云アリ其孫ニ行父ヲ文子ト謚ス文子カ子宿ヲ武子ト云武子カ子紇ヲ悼子ト云此子ノ意如ヲ平子ト謚ス平子カ子斯ト云ヲ桓子ト云フ此子ヲ肥ト云ヲ康子ト云世々ニ魯ノ正卿也

一兵伏飛鴈亂行　孫子云鳥起者伏也獸駭者覆也

一聖猷　毛詩ニ猷道也

一負荊　廉頗カ傳ニ肉袒負荊索隱曰肉袒者謂袒衣而露肉也負荊者荊楚也可以爲鞭也

一北畠入道准後禪閤　又中院入道トモ云フ一品准大臣親房卿ノ事ナリ

一石堂右馬助頼房　石堂四郎頼茂孫義房ノ子ナリ

一沛公　高祖本紀云高祖沛豐邑中陽里人姓劉氏字季父曰太公母曰劉媼李斐曰沛小沛也劉氏隨魏徙大梁移在豐居中陽里孟康曰後沛爲郡豐爲縣

一項羽ハ楚國ヨリ起　本紀七云項籍者下相人也字羽初起時年二十四其季父項梁々父即楚將項燕爲秦將王翦所戮者項氏世々爲楚將封於項故姓項氏注地理志臨淮有下相縣

一濮陽ノ東　史云西破秦軍濮陽東正義曰括地志云濮陽即濮州濮陽縣古吳之國

一定陶ヲ攻　是モ秦ノミカタノ城ナリ沛公ト項羽ト一同シテ攻メタレトモ落サルホトニ地形ノ體ヲ見テ雝丘ヘ至リテ合戰シタレハ秦軍大ニ破レテ大將タル李由ヲ斬タソ是ハ李斯カ子ソ

一孫心ト云シ人　本紀七云孫心民間爲人牧羊立以爲楚懷王注徐廣曰此時二世之二年六月

一釜甑ヲ破等　徐廣曰二世三年十一月史云項羽乃悉引兵渡河皆沈船破釜甑燒廬舍持三日糧以示士卒必死無一還心

一蘇角　文穎曰秦將也云云　王離ハ王翦カ孫也

一函谷關　史注曰按山形如函故稱函關

一人魚ノ油　史云以人魚膏爲燭注徐廣曰人魚似鮎四足正義曰廣志曰鯢魚聲爲小兒啼形如鱧可以治牛出伊水異物志云人魚似人形長尺餘不堪食皮利於鮫魚鋸材木項上有小穿氣從中出東海中按今帝王用漆燈冢中則火不滅

一始作俑人ハ無後乎ト　孟子一曰仲尼曰始作俑者其

無後乎爲其象人而用之也俑トハ葬ニ從ヘル木偶人也上古ノ葬ニハ草ヲ束テ人ノ形ヲ作リテ葬ニ從ヘヘタソ是ヲ衞ニハ芻靈ト云タソ形ノコトク人ニ似ルヤウニ作リタソ中古已來ハ此ヲカヘテ木ヲ以俑トテ人形ヲ造リ面目モ鼻口ヲモ委ク作ルホトニ甚人ニ似タルソ故ニ孔子ハコレヲイヤカリ玉ヒタソカヤウノコトヲ仕リ來ル故ニ秦ノ穆公ノ時ニ三良ノ臣カ死ノ御伴ヲ仕ント云テ死スルコトカ出來シタソ去ルホトニ俑ヲ造リ始タル者ノハ後胤ハアルマシイト孔子ノ仰アリツルソ孟子注ニ夫惡其始造故曰此人其無後嗣乎ト云タルハ此事ソ

一文宣王　玄宗開元二十七年八月ニ孔子ヲ追謚シテ文宣王トナサレタリ

一項伯　索隱曰名纏字伯後封射陽侯

一我則且日項王ノ陣ニ行　本紀ニハ項伯カ沛公ニ對シテ云タル辭ソ違ヒナク明朝早々ニ御出候テ謝詞ヲ述ラレヨト云フ然レハ今ノ書ヤウハ少シ相違ソ

一帶タル所ノ太刀　本紀ニハ擧所佩玉玦以示之者三トアルソ玉篇ニ玦居穴切玉佩如環缺不連トアリ

一項莊　正義曰項羽從弟也

一樂已ニ徹　徹ノ字ニ付テ通徹ト徹去ノ二義アリ今ハ徹去ノ義ナリ樂ノ過キ去ト云意也

一彘肩ヲ肴ニトツテ出ス　彘ハ豕也ト注スイノコナリ肩ハカタトヨム故ニ豕ノ肩ト云ハ誤ル歟項羽ノ樊噲ニ彘肩ヲ賜ヒ與ヘヨト云ヒ付ケラレタルハ則一ツノ生彘肩ヲ與フトアリ生ケル肩ト云コトハ有マシキホトニ不審ナル義ナリ但又豕ノナマノ肩ト云義ニテヤアラント云人モアリ此義モ慥ナラス毛詩第五卷還篇ニ並驅從兩肩兮ト云所ノ注ニ獸三歲曰肩トアリ然レハ今モ豕ノ三歲ハカリニ成リタヲ出シテ肴ニサセラレタト云事也

一樊噲大行不顧細謹等　本紀曰樊噲曰大行不顧細謹大禮不辭小讓如今人方爲刀俎我爲魚肉何辭爲於是遂去云云　大行ハ世間ニ隱レモナキ大ナル事ヲ取リ行フ義ナリ其時ハ少々ノ細事ノ禮ナトハ顧ヌ物ソ大禮トハ譬ヘハ日本ニハ御即位ナトノヤウノ義也其時ニ少々ノ禮讓ハセヌコト也項羽ニ暇乞ヲモセス禮義ヲ失テ歸去ンコトハ如何ト沛公ノ言ヒヤウナレトモソレハ勿體ナキ御分別ソカヽル一大事ノ時分ニ夫體ノ義カ入ルヘキカ唯早々ニ歸リ玉ヘト

異見シタゾ

一間道　人ノ知ラヌ道ヲ云也但史ニハ間行トアリ是モ人ニ知ラレヌヤウニ行ヲ云ゾ

一韓信　淮陰ノ人ナリ國士無雙ナリト云テ蕭何カホメタゾ沛公初テ對談ノ時壇ヲ設テ禮義ヲ調ヘテ對面アッタゾ

一彭越　昌邑ノ人ゾ字ハ仲ト云フ漢王ヨリ將軍ノ印ヲ賜テ項羽ノ軍ヲ擊テ忠功ノ人ゾ

一蕭何　沛豐ノ人ナリ沛公ノ布衣タリシ時ニシハ〳〵沛公ヲ守護シタ人也成帝業功第一ト云ハレタゾ

一曹參　蕭何ト同ク起テ沛公ヲ佐タリ是モ沛人也字ハ敬伯ト云タゾ秦ノ時ニハ沛邑ノ獄掾ノ官ニ居タゾ漢祖即位アリテ元功ヲ定メラル丶時十八人ノ位次アリ參ハ第五ニ選ハレタゾ

一陳平　陽武戶牖鄉ノ人ナリ少時ニ家貧ニシテ好テ書ヲヨミ田三十畝アリケルヲ兄ニ預テ吾ハ學問一三昧ニセリ遂ニ長者ノタメニ重セラル高祖定天下凡六出奇計

一張良　字ハ子房ナリ其先ハ韓人也秦ノ始皇韓ヲ滅シタル時張良ハ家僮ヲ三百人引ツレテ家財ヲ以テ隱レ居テ刺客ヲタノミテ秦ノ始皇ヲ擊テ韓ノ仇ヲ報ントオ覺シタゾ其比始皇帝ハ博浪沙ト云所ヘ遊ニ出玉ヒケルヲヨキ折節ト思テ客ト相伺テ鐵ノ推ヲ擲ケ擊タレハ誤テ後乘ニアタリテ始皇ハ何事モナカッタゾ始皇大ニ怒テ天下ニ觸ヲ廻テ張良ヲ索タゾ故ニ良ハ姓名ヲカヘテ下邳ノ圯上ニカクレ居タゾ其時一リノ老父ニ値ヒ老父ノ墮セル履ヲ取リナトシテ遂ニ太公カ兵法ヲ得テ沛公ニ値ヒ策ヲ運シテ項羽ヲ亡セリ功臣十八ノ時良ハ第三ナリ文成侯ト謚ス

一樊噲　是モ沛邑ノ人ナリ狗羊豕ヲ屠リ賣ルヲ事トシタルモノゾ鴻門ノ會ノ時キ項羽ノ壯士ナリト云テ歎タゾ元功十八人ノ位次ノ時モ噲ハ第二ニ定メタゾ舞陽侯ニ封シタゾ

一周勃　木强敦厚トテイカニモ廉直ニシテ思ヒ入レ深キ人也故ニ高祖モ大事ノ義ヲハ此人ナラテハ成ルマシイト思ヒ玉フゾ安劉氏者必勃也ト云ヒ玉ヘリ文帝ノ時ニ丞相ノ官ニ拜セラレタゾ

一黥布　姓ハ英氏ナリ初ハ兵數千ヲ聚テ項梁ニ從ヘ

リ項羽モ往キ得サル所ヲモ往テ打破リ路ヲ開シ人也故項羽ノ咸陽ニ至リシ時モ此仁カ先鋒ト成リタソ九江王ト云ニ成リタレトモ後ニ隨何カ異見ニ依テ漢ニ歸シテ淮南王ニ封セラルヽソ

一盧綰　豐人也此人ノ親ト高祖ノ御父ト別シテ入魂他ニ異ナリ息ヲ生スルトテモ高祖ト此人ト同日ニ生レタソ里中ノ者ノモ羊ト酒トヲ持テ兩家ヘ一度ニ祝儀ニ往タソ此兩人トモニ壯ニ成リテ學問ヲスルニ又相ヒ親シ高祖初テ起チシ時モ此人共ニ客人ノヤウニ成テ漢中ニ入テ將軍ト成リ常ニ高祖ノ臥內ヘモ入リ衣被飲食ヲ俱ニス其親幸ナルコト此人ニ及ノ者ノハナシ綰ヲ封シテ長安侯ト成シタソ

一張耳　大梁ト云所ノ人也富家ノ女ニ嫁シテ厚ク奉給ヲエテ遂ニ名ヲ知ラレテ沛公ノ將トナレリ

一王陵　沛人也先ツ黨數千人ヲ聚テ南陽ト云所ニ居テ始テ兵ヲ以テ漢ニ屬セリ項羽ハ王陵カ母ヲ執ヘテ軍中ニ置ケリ王陵カ孝義深キ故ニ又羽ニ歸センコトヲ希フ故ナリ陵母私カニ使者ヲ送テ泣テ云クヽレ〲善ク漢王ニ事ヘヨ吾故ニ二心ヲモツコトナカレト云テ則劍ニ伏シテ死シタリ

一劉賈　漢王ニ從テ楚地ノ壽春ト云所ヲ圍ミタソ垓下ノ戰ニモ値タルソ細々ノ功ニ依テ荊王ニ封セラレタリ

一酈商　高陽ノ人也秦ノ陳勝カ起ル時ヨリ此人ハイマタ幼年ナレトモ數千ノ人衆ヲ聚得テ沛公ノ下ニ着キタリ索隱ニ酈音歷ト付タソ

一灌嬰　睢陽ト云所ノ繒ヲ賣アキナウ者也高祖ノイマタ沛公ニテマシマセシ時ヨリ着從テ勳功ヲ積タリ少身ノ仁ナレトモ細々手カラノ戰ヲシテ敵ヲ討タリ元功十八人ノ時第十八ト定メタリ

一夏侯嬰　是モ沛邑人也沛公ノ厩奉行ヲシタソ

一傅寬　魏ノ五大夫ト騎將トヲ用テ横城ト云所ニ居テ沛公ニ力ヲ合テ安陽ト云所ヘ手ツカヒシテ忠節ヲアラハシタソ後ニ陽陵侯ニ封セラレタソ

一劉敬　齊ノ人ナリ漢王ノ五年ニ始テ出テ高祖ニ異見ヲ云タ者ソ元來ハ婁敬ト云タレトモ高祖ノ姓ヲ與ヘ劉敬ニナシテ奉春君トナサレタソ

一靳彊　鴻門ヨリ高祖ヒソカニ遁レ還ルトキニ樊噲ト夏侯嬰ト紀信ト此人ト四人高祖ノ伴ヲシテ有ルソ

一呉芮　秦ノ時ニハ番陽ノ令ニ成タソ甚江湖ノ間ノ心ヲ得タル者ソ號シテ番君ト云タソ立テ、衡山王トシタソ

一酈食其　此三字ヲ正義ニハ曆異幾ノ三ノ音ニ用タソ好テ書ヲヨミ家貧ニシテ衣モ持タヌホトチヤソ然レトモ縣中ノ豪賢ヲモ强テ恐ス皆コレヲ狂生ト云タソ陳勝幷項梁等カ軍ヲ起シテ此人ノ在所高陽ト云所ヲ過ル者數十人アルヲ見テ其大將ヲ問フニ皆チヽケル者共ナリサテハ深ヒ事ハアルマシイト思ヒ遂ニ沛公ニ付タソ

一董公　漢王ノ二年ニ王洛陽ニ至リ玉フ時新城ノ董公ト云者ノ出合テ王ニ對シテ順德者昌逆德者亡ト云タソ此意ハ項羽カ叛逆ヲシテ義帝ヲ殺シタホトニ是非ニ滅亡セントト云タソ

一紀信　古今ニ希ナル忠烈ノ者也委キコトハ第一卷ニアリ此廟ヲ順慶府ト云所ノ太平門ニ立テ、額ヲ忠祐廟ト云タソ詰詞云以忠徇國代君任患實開漢業使後世知君爲重身爲輕侯何有焉

一轅生周苛侯公　侯ノ字ハ非也樅ノ字ナルヘシ魏豹ト周苛樅公ハ滎陽城ヲ守テ居タルヲ項羽ノ攻メ落シテ此兩人ヲハ殺シタソ

一隨何　此人モ黥布モ項羽ノ内ノ者ナレトモ羽カ無道ヲ見カキリテ隨何カ分別ニテ高祖ヘ歸參シタソ

一陸賈　楚人也客人ノヤウニシテ高祖ニ從フ天下ヲ定メタリ一段ト辯口ノ達シタル人也

一叔孫通　薛人也秦ノ時ハ文學ヲモツテ待詔博士ノ官ニ居タリ秦亡ヒテ後ニ楚ノ項梁カ薛ニ往ケル時此人ヲツレテ來リ楚ノ懷王ニ仕ヘタソ懷王ヲ義帝トシテ長沙郡ヘ徙サレタホトニ又此人ハ留テ項王ニ事ヘタソ去レトモ項王ハ無道ノ人チヤホトニ漢王ノ二年ニ漢王ニ降參シタソ

一櫟陽ノ欣　蘇林曰櫟音藥ト此所ヲ一名ニハ萬年城ト云フ雍州ノ櫟陽ノ東北二十五里ニアリ長史欣ハ此所ノ獄掾ノ官ニテアリ

一都尉董翳　秦ノ章邯ヲ勸メテ楚ニ降參セシメタ人ソ今ハ翟王トナサレタリ翟ハ音狄或ハ宅ノ音ヲモ付タソ

一塞王司馬欣　長安城ノ東ニ桃林塞ト云所アリ

一魏王豹　是ハ元來魏ニ都セラレタルヲ徙シテ西魏王ニナサレタリ漢王二年ニ漢ヘ降シタソ

一故主ヲ逐誅タリ　其國々ノ本主ヲハ逐電サセテ吾ヲ本知行トスル事ヲ云フ索隱曰謂田氏趙欵韓廣之屬也

一陰ニ懷王ヲ江南ニ殺　吳芮黥布共敖ヲ密ニ計テ江中ニシテ義帝ヲ撃殺セシムルナリ

一此九ノ罪　高祖本紀云夫爲人臣而弑其主殺已降爲政不平主約不信天下所不容大逆無道罪十也云云　私云今何ノ故ソ九罪ヲ擧テ一ヲ殘スヤ殊ニ此一箇條ニハ三ノ義ヲ含メリ主ヲ殺ト政ノ定メナキト主君ノ前ニテ金諾セルヲ忘ルトナリ肝心ノ條箇ヲ殘スコトイカン

一挺楚　杖フチノ事ナリ

一クツマキ　箭ニアル所ナリ孟子八ニ抽矢叩輪トアリ輪ノ字ヲヨムナリ史記ニ項羽ノ矢ニテ高祖ノ傷胸トアリ高祖ハ胸ヲ射ラレタト云ハヽ軍中カ騒動セント思テ押カクシテ足ヲ捫リタルソ足ノ指ヘ矢カアタリタト云ハレタソ注ニモ二説ヲ書タソ索隱曰中胸而捫足者蓋以矢初中痛悶不知所在故爾或云胸而捫足權以安士卒之心也ト云云　二ノ中ニ後ノ説カ高祖ニ似合タソ此創故ニ遂ニ陣ヲ引テ成皐ヘ入リ王ヘルソ高祖ノ度々ニ手ヲ負給フコトヲ三輔故事曰楚漢相拒於京索間六年身被大創十二矢石通中過者有四言漢王病創也

一樓煩ト云者　本來ハ所ノ名ナリ項羽紀云漢有善騎射者樓煩應劭曰樓煩胡也ト云云　胡比ト云義ナリ應門ト云所ニアル縣ノ名ナリ人ノ名ニハアラサレトモ在名ヲ呼フコトモアルホトニ苦シカラサルカ

一范增血ヲ吐テ死ス　本紀ニモ何ニモ疽發背死ストアリ

一壽春城父　正義曰壽州壽春縣也城父亳州縣父ハ音甫ト付タリ

一大司馬周殷　正義曰按周殷叛楚兼擧九江郡之兵隨劉賈而至垓下　漢王五年ノ十月ニ項王ヲ叛テ高祖ニ歸スルソ

一垓下ノ城　徐廣曰在沛之洨縣索隱曰張揖三蒼注云垓堤名在沛郡正義曰按垓下是高岡絕巖今猶高三四丈其聚邑及堤在垓之側因取名焉

一四面皆楚歌ス　應劭曰楚歌者雞鳴歌也漢已畧得其地故楚歌也多雞鳴時歌也云云　又正義曰顏師古云楚人之歌也猶言吳謳越吟若雞鳴爲歌之名於理則可不

得云雞鳴時也按顔說是云云

一美人虞氏　本紀曰帳中有美人名虞常幸從註徐廣曰一云虞氏此人ハ常ニ身ヲハナレス幸イセラレタソ

一悲歌慷慨　史ニハ懔ヲ忼ニ作ル壯士不得志ヲ云フト注セリ本紀云自爲詩曰力拔山兮氣葢世時不利兮騅不逝々々々兮可奈何虞兮々々奈若何云云　美人モ亦歌ヲ作テ別レヲカナシメリ楚漢春秋云歌曰漢兵已略地四方楚歌聲大王意氣盡賤妾何聊生ト云フ實ニ哀ナル體ナリ項王モ泣數行下左右皆泣莫能仰視トアリ

一烏江亭ノ長ト云者　正義曰括地志云烏江亭郎和州烏江縣是也サテ長ト云ハ人ノ名ニテハナシ所ノヲトナシヤカナル者ヲ云ソ

一赤泉侯　揚喜ヲ赤泉侯ニ封スル也

一呂馬童　中水侯ニ封ス此者知音ノ故ニ直面ニ見モ得サルソ故ニ王翳ヲサシテ曰ク此ハ項羽也吾カ頭ヲ取レト云テ自刎テ死セリ王翳其頭ヲ取リ五體ヲハ五人シテ分ヲ取タレハ各ニ封ヲ與タソ王翳ヲハ杜衍侯トナシタソ項王ハ始皇十五年巳己歳生死時年三十一矣高祖ハ情フカキ仁者ナレハ爲ニ哀ヲ發シ涙ヲ流シ去リ玉ヘリ諸ノ項氏ノ枝屬ヲモ誅セスシテ剩項伯ヲハ射陽侯トナシ其外ノ衆ニモ姓ヲ分ケテ劉氏ニ成サレタソ

一景命　毛詩注ニモ景大ナリトアリ

一溫故知新　論論ノ辭ソ撥亂復正ハ貞觀政要ニモアリ

一正平五年　南朝ノ年號也觀應元年ニアタル也

太平記鈔第二十九卷

一窮子ノ他ヨリ歸リ父ノ長者ニ逢　此ハ法華經ノ信解品ニ明セリ譬ヘハ長者ノ子カ拙ク謬テ他國ヘ逃逝テ乞食ノ窮人トナレリ長者ハコレヲ尋求テ遇ニ相値テ此實我子我實其父ト名乘ケル時ノ歎ヲ作スヲ云ナリ經ノ意長者ヲハ釋尊ニ譬ヘ乞食ノ窮子ヲハ舍利弗目連カ久ク釋迦ヲ忘テ六道ニ流轉シアリクニ比タソ

一吳子　列傳五云吳起者衞人也好用兵嘗學於曾子事魯君齊人攻魯々欲將吳起々々取齊女爲妻而魯疑之吳起於是欲名遂殺其妻以明不與齊也魯卒以爲將

一孫子　列傳五云孫子武者齊人也以兵法見於吳王闔廬々々曰子之十三篇吾盡觀之矣

一吉凶ハ糾レタル纆ノ如　文選二十卷云吉凶如糾纆憂喜相紛擾注濟曰糾纆索也吉凶相繞如索兩股纆也又第十三卷賈誼鵩鳥賦曰夫禍之與福兮何異糾纆注向曰糾纆纆索也兩股相纆言禍福相糾纆亦如之字林曰糾兩合繩纆三合繩應劭曰禍福相與爲表裏如糾纆索相附會也二ツクリ三クリノナワヲ糾纆ト云フ禍福吉凶ハナレヌ物ト云義也

一翰鳥ノ繳ヲ出　文選第十七云若翰鳥纓繳而墜層雲之峻言速也云云 周易注云翰高飛也說文曰繳生絲縷也高トフ鳥ノイトニカヽリテハタト落ルヲ云タソ今ノコヽロハ此文ソ翻シテ書タソ

一天寶十二年ニ安西ト申所ニ　編年通論第十六卷云天寶十二年西蕃寇圍涼州帝命三藏不空祈陰兵勅之不空誦仁王密語數番有神介冑而至帝親見之問曰神謂誰空曰北方毗沙門天王長子也空誦密語遣之數日涼州捷報有神兵至威武雄盛賊畏懼卷甲而去帝悅詔天下軍壘皆立毗沙門天王祠云云 金鼠ノ事ハ大宋高僧傳第一卷ニアリ前第九卷ノ中ニ引用スルカコトシ

一朱雀院ノ御宇ニ金ノ四天王ヲ天台山ニ安置ス　扶桑記第二十五卷云天慶三年庚子正月二十四日有勅遣延曆寺阿闍利明達於美濃國中山南神宮寺令修調伏四天王法　金像ヲ安置ナサレシ事ハ知ラス

一汗馬　祖庭五云李廣利爲貳師將軍伐大宛國得汗血馬名蒲捎漢武作太馬之歌馬出汗即有功勞故云汗馬

一擷頭　ネチクヒ上ハ且定反捽也

一名詮自性　唯識論二卷ノ文也自性トハ體ナリ名ハ

本來自性ノ體ヲ顯ス物ナリ名ニ非レハ萬事顯ル丶事ナシ

一閼伽　烏樞瑟摩明王經上卷音義云閼伽上安葛反或作遏字梵語也即盛香水盃器之惣名也云云　サレトモ世ニ皆閼伽井ト云ハ此器ヲ用テ汲テ別行ノ潔齋ニ用ル井ト云意也

一蘇我馬子　稻目カ子ナリ聖德太子ト力ヲ合セテ佛事ヲ興ス日本紀第二十云馬子宿禰亦於石川宅修治佛殿佛法之初自茲而作

一跡見ノ赤檮　又第二十一云迹見姓也赤檮名也赤檮此云伊知毗也イチヒトヨム

一鳥ノ將ニ死ナントスル時　論語泰伯篇云曾子言曰鳥之將死其鳴也哀人之將死其言也善曹子カ今マサニ死ンホトニ子トモ善ク吾言ヲ用フヘシト云意ヲ云タソ

一無明ノ酒　妙法聖念經第七卷云勿飲無明酒

一嗚呼豎子不堪倶計　本紀七云唉豎子不足與謀コレハ鴻門ノ劔ノ舞ヲシタ時ニ沛公ヲ討トメスシテ逃シ又剩ヘ沛公ノ方ヨリ種々ノ寶物ヲ項羽ヘト范增カ方ヘ送ッレタレハ項羽ハ得テ悅ハレタソ范增ハ腹立シテ劔ヲ拔テ贈物ヲ打破テ棄タソ其時ニ云タ辭ソ項羽ノヤウナル少人ト共ニ天下ノ大事ヲ謀ルコトハ成マシイトノ義ソ項羽ノ天下ヲ奪ン者ハ沛公ナリ吾等ハ定テ虜ト成リヤセント云テ無興シタソ

一佛種ハ緣ヨリ起　法華經一卷云佛種從緣起是故說一乘ト世話ニ云ナル事ニテハナシ深キ仔細アリ

一曾參復車於勝母之鄕　陸士衡カ猛虎行云渴不飲盜泉水熱不息惡木陰注尸子曰孔子至勝母暮矣曰不宿過於盜泉渴矣而不飲惡其名也云云　曾子モ孔子モ倶ニ勝母ノ里ノ名ヲハイミケルトソ

一帝釋ノ軍天人五衰　前ニ注スル故ニ畧ス

一歡喜苑　起世經云善見大城北門之外經二十由旬有大林園名曰歡喜過廻一千由旬倶舍論ニハ喜林苑ト云フ同意ナリ諸ノ天人此中ニ入レハ自然ニ歡喜ノ意生スル故ニ苑ノ名トセリ此ノ中ニ池アリ同ク歡喜ト名タリ方百由旬アリト見ヘタリ

一千鐘ノ祿　孟子ニハ萬鐘之祿ト云ヘリ左傳注ニ釜十爲鐘六斛四升也

一仁義ノ勇者血氣ノ勇者トテ二ツアリ　孟子ノ第三

ニ委ク云ヒタル事ナリ大方今云ヘルカコトシ

一仁者必有勇等　論語憲問篇云仁者必有勇々者不必有仁

太平記鈔第三十卷

一志合則胡越不隔地　文選第三十九云意合則胡越爲昆弟廣弘明集第十三云道合則萬里懸應勢乖則肝膽楚越云云　意ハ同

一唐棣花　毛詩第九ニハ常棣ニ作ル兄弟ノ事ニ用ルソ毛詩ニ常棣之華鄂不韡々此ハユリノ花ノ事也ト云說アリ此花ハ兩々相背テ咲テ後ニ合スルナリ兄弟各別ノヤウナレトモ遂ニハ一體ナルニ比スルソ注云弟以敬事兄々以榮覆弟恩義之顯ト云云

一用則鼠ヒ爲虎等　文選四十五卷云尊之則爲將卑之則爲虜抗之則在靑雲之上抑之則在深淵之下用之則爲虎不用則爲鼠云云　東方朔カ論設客難ヲ著シテ己レカ位ノ早ク居タルヲ慰ミタル時ノ語ソ朔ハ漢武帝ノ時ノ者ナリ字ハ曼倩ト云フ平原ノ厭次ト云所ノ者也

一纎介　集覽五云喩事細微也孅與纖同介通作芥イカニモ少シキノ義也

一附鳳ノ勢ヲ貪攀龍ノ望ヲ期ス　文選三十七注ニハ樊龍附鳳並集天衢　杜子美第五注揚子曰攀龍鱗附鳳翼ト人ノ威ヲ借テ己レカ自由ヲ致ント云義ソ

一南家ノ儒者藤原少納言有範　淡海公不比等大臣ニ四人ノ子ヲワシキ是ヲ四門ト云一ハ左大臣武智丸ノ流コレヲ南家ト云二ニハ參議中衞大將房前ノ流コレヲ北家ト云フ今ノ執政大臣及ヒ其外ノ藤家何モ皆此末ナリト三ニハ式部卿宇合ノ流式家ト云フ四ニハ左京大夫麻呂ノ流京家ト云シカ早絕タリ然ルニ武智丸ヨリ嫡々シテ第二十代ノ孫ナリ父ヲハ藤範ト云フ

一昔殷ノ帝武乙ト　本紀三云帝武乙無道爲偶人謂之天神與之博令人爲行天神不勝乃僇辱之爲革囊盛血仰而射之命曰射天武乙獵於河渭之間暴雷武乙震死云云　此中ニ偶人トハ木ニテ人形ヲ作ルヲ云御子ハ太丁孫ハ帝乙其子紂ナレハ曾孫トテヒマコソ

一紂王　帝乙ニ三子アリ長ハ微子啓母賤シ次ハ中衍季ヲ受辛ト云即紂ナリ紂カ母后賢タリ紂カ幼少ナルホトニ帝乙モ后モ第一ノ子啓ヲ立テント云タソ去レトモ大史官ノ者共カ云ヤウハ本夫人ノ子アレハ妾ノ母ノ子ヲ立ル法ハナイト云テ受辛ヲ立テ王トシタソ

一猛獸ヲ格　格ハ擊也繩ヲ以テ獸ヲウチトルヲ格ト
云ナリ又杙ヲ以テケタモノヲオサエ留ヲモエフナ
リ
一妲己ト云美人　皇甫謐曰有蘇氏美女國語ニハ有鐘
氏カムスメ妲ハ字己ハ姓ナリト云フ
一鉅鹿ト云鄕　史ニハ盈鉅橋之粟注ニ服虔カ義ニハ
鉅橋ハ倉ノ名ナリト許愼曰鉅鹿水之大橋有漕粟也
一朝歌ト云所　史云厚賦稅以實鹿臺之錢注如淳曰新
序曰鹿臺其大三里高千尺臣瓚曰鹿臺々名今在朝歌
城中
一沙丘ニ臺ヲ造　沙丘ヘツヽキタル別ノ所ニ建タリ
地理志曰在鉅鹿東北七十里
一炮烙ノ法　史云紂乃重辟刑有炮烙之法注列女傳云
膏銅柱下加之炭令有罪者行焉輙墮炭中妲己笑名曰
炮烙之刑索隱曰見蟻布銅升足廢而死於是爲銅烙炊
炭其下使罪人步其上云云　列女傳トハ少異ナリ烙或
ハ閣ノ音ヲモ付タリ
一龍頭鷁首　淮南子云龍舟鷁首注鷁水鳥也畫其象著
船首以禦水患云云　鷁ト云鳥カ水ノ上ノ難ヲ避故ニ
天子ノメス船ニハ畫ニカク也文選第二十八卷ノ注
ニハ鷁首舟名トモアルソ
一鐵湯爐壇　鑊湯爐炭ニ作ルヘシ地獄ノ事ナリ第二
卷ノ中ニ注スルカコトシ
一崇侯虎ト云ケル者聞テ紂王ニ告　史云西伯昌聞之
竊嘆崇侯虎知之以告紂々因西伯羑里注帝王世紀曰
囚文王々々之長子曰伯邑考質於殷爲紂御紂烹爲羹
賜文王曰聖人當不食其子羹文王食之紂曰誰謂西伯
聖者食其子羹尙不知也彼國ニハ惣シテ人ヲ食スル
コトアリ日本ニモ餓タル者カ自然ニ人ヲ食スルト
コソ聞ケ文王ノ長子伯邑考ト云シヲ人質ニ殷ヘ遣
テ置キ紂カ御者トシテ侍シヲ殺シテアツモノニ成
シ文王ニ賜テ食セシムトソ極惡ノシワサ共ナリ崇
侯虎ヲハヤカテ西伯ノ伐チ玉ヘルソ
一羑里　韋昭ハ酉ノ音ヲ付タソ或ハ牖里トモアリ是
ニモ音酉トシタソ相州湯陰縣北九里ニアルト見ヘ
タソ
一大宛ノ馬　正義曰大宛在長安正西方二千五百餘里
云云　此ニ善馬多アリ
一嬋娟幽艷ナル女百人　杜子美第六ノ注ニ竹ト月ト
人トヲ三嬋娟ト云トアリ呂氏春秋ニハ於是文王四

臣散宜生等乃周四海內經歷豐士得美女二人トアリ
一西伯渭濱ノ陽ニ田　六韜ニ出タリ史官ノ者ニ編ト
云者アリテ占ヲシケリ
一泰伯有德ノ甥　論語第四曰子曰泰伯其可謂至德也
已矣云云　周ノ太王ノ長子ヲハ泰伯ト云フ次ハ仲雍
第三ハ季歷ナリ是人賢ニシテ聖子ヲ生ス即文王昌
ナリ然レハ泰伯ノタメニハ甥ナリ史記吳世家注云
江熙云太伯少弟季歷生文王昌有聖德太伯知其必有
天下故傳國於季歷
一無道ノ兄管叔ヲ討　史記世家五云武王同母兄弟十
人母曰太姒文王正妃也其考長子曰伯邑次曰武王發
次曰管叔鮮次曰周公旦次曰蔡叔度次曰曹叔振鐸次
曰成叔武次曰霍叔處次曰康叔封次曰冊季載云云　武
王ノ崩御ノ後成王イマタ幼少ニマシマス故ニ周公
旦王室ノ事ヲ專ニアリシ故ニ管叔蔡叔ノ存分ニハ
成王ノタメニ然ルヘカラヌ仕ヤウト云テ亂ヲ作ソ
トセラレタリ此ニ依テ周公旦ハ成王ノ命ヲ承テ管
叔ヲ殺サレタソ蔡叔ヲハ他國ヘ追放セラレタソ
一其年ノ二月　觀應三年ニ改元アッテ當年ハ文和元
年ソ

一三過門中老病死　東坡第四卷過求樂文長老已卒八
句詩ニ三過門間老病死一彈指頃去來今存亡慣見渾
無淚鄉井難忘尙有心ト注ニ佛爲太子遊諸城門見生
老病死遂出家又注ニ謂過去現在未來三世也云云　詩
人玉屑ニモ此詩ノ一二ノ句ヲハ句法淸健天生對也
トホメタソ
一國衙ノ鄉保　今ハ都ヲサシテ國衙ト云フ洛外已下
ノ本知行所ヲハ年來ノ進退ノ如クニアレトノ義也
一七德ノ干戈　前第十二卷ニ注ス
一二條關白良基公　此ヨリ下ハ歷々ノ衆悉ク注スニ
イトマナシ故ニ略ス
一一級　等級トテ次第ノ義ナリ或ハ階級トモ云也ノ
ホリハシヲ一ツノホリ上ル樣ニ階カアルソ
一三條坊門通冬　土御門內大臣通親公ノ子ヲ通方ト
云是則中院ノ始祖ナリ此ヨリ六代ノ孫ナリ權大納
言從一位ソ
一御子左臣納言爲定卿　爲世ノ孫左中將爲通ノ子ナ
リ續後拾遺新千載集ノ撰者也
一北畠准后　大納言正二位親房卿ヲ北畠准后入道又
中院入道トモ云フ

一殷帝大戊ノ時　殷本紀云帝太戊立伊陟爲相亳有祥桑穀共生於朝一暮大拱帝太戊懼問伊陟々々曰臣聞妖不勝德帝之政其有闕與帝其修德太戊從之而祥桑枯死而去注伊陟伊尹之子孔安國曰祥妖怪也二木合生不恭之罰鄭玄曰兩手搤之曰拱云云　史記ニハ一暮ニ大ニ拱クホトニ成ルトアリ尙書傳ニハ七日ノ中ニ大拱トナルトアリ

一顯能卿　入道ノ第三子ナリ伊勢ノ國司ナリ

一淸暑堂　大嘗會五節ヲ此堂ニテ行ハルナリ

一羅穀ノ御袖　增韻ニハ縐紗曰縠紡絲而織之云云　ウスキ絹ナリ

一椿嶺ノ陰　隱居ヲ云ナリ花山ノ跡トハ彼帝イマタ御若年ノ時ニ落飾アリシヲ例トシテ御出家ヲモアラント思召ソ

一衆籟曉寒ク　朗詠云衆籟曉興林頂老群源暮叩谷心寒ト此語ニヨル歟衆籟トハヲホフエトテ天地ノ氣ノ自然ニ鳴ル聲ヲ云フナリ

一梶井二品親王　後伏見院ノ御子ニシテ尊胤親王ト申ス光嚴光明ノ兩帝ノ御弟也

一桑門ノ世捨人　文選ニハ桑門ノ二字ヲサウモンノヨステヒトヽ讀メリ

太平記鈔第三十一卷

一闘諍堅固　大集月藏經第九卷ニ佛滅度ノ後ヲ五百年ツヽ五ツヽニ分玉ヘリ佛涅槃ノ翌日ヨリ初テ五百年ノ間ヲハ解脱堅固ト云次ノ五百年ハ禪定堅固次ノ五百年ハ持戒堅固次ノ五百年ハ多聞堅固次ノ五百年ヲハ闘諍堅固ト定メ給ヘリ然レハ五々二千五百年ノ時分ノ事ナリ去ル天文二十年カ第二千五百年ニアタレリ夫ヨリ已來タ慶長十五年マテハ五十九年ニ成ルナリ當時モ闘諍トテ佛法ノ上ニ各我執ヲ立テ是非ヲ論シ互ニ正理ニ闇キ故ニ釋尊ノ法ハ悉ク滅沒セント兼テ記シ給ヘリ是ヲ彼經ニハ闘諍言訟白法隱沒ト說レタリ法華經ハ又餘ノ佛法ニハカハリテ當時ニ此閻浮提ニ弘リテ末來永々マテモ斷絶ハアルマシト說レタソ經云我滅度後々五百歲中廣宣流布於閻浮提無令斷絶云云　廣宣ノ二字ヲ唯世界ヘヒロマリワタルト計思フハ誤ナリ文選四十四卷ニ廣宣思信トアル注ニ廣遠宣通也トアリ然レハ遠々永々トシテ斷サルヲ廣宣ト思フヘシ其中ニ横遍普弘ノ義ハ含ムソ是ハ法ノ上ノ闘諍也コレニ付テ世間ノ闘戰モ最盛ナルヲ知ルヘキニヤ

一嚴子陵カ釣臺　排韻曰嚴光字子陵小字狂奴少有高名與光武同學帝即位光被羊裘釣澤中乃備安車玄纁聘之三反乃至除諫議大夫不屈去耕于富春山後人名其釣處爲嚴陵瀨云釣臺在桐廬縣南東二臺各高數百丈有羊裘軒客星館招隱堂云云　脚ヲ伸ル等云コトハ窮屈ナルト云ハンタメソ

一鄭太尉　排韻云鄭弘字巨君會稽山陰人微時採薪白鶴山得一遺箭項有人覓弘與之問弘所欲曰常患若耶溪載薪爲難願且南風暮北風至今猶然俗呼鄭公風云云　朗詠曰且南暮北鄭太尉之溪風被人知

一一業所感　一業一引生トテ善惡ノ業ニヨッテ善惡ノ生ヲ感得スルナリサルホトニ只今ノ亂ニ死スルモ定テ前生ノ業ノナス所ナルラント云義ソ

一從父兄弟　イトコトヨム也爾雅釋親云兄之子弟之子相謂爲從父晜弟注ニ從父而別云云　晜ハ音昆ト付タソ從祖兄弟ハフタイトコナリ祖父ノ時ノ兄弟ヨリ別レタル子ト云義也

一四神相應　延暦十二年正月ニ大納言藤原小黒丸參議左大辨紀古作美大僧都賢璟等ヲ遣ハシテ當國ノ

中葛野郡宇太村ヲ見セラル三人共ニ奏シテ申ス此地ハ左靑龍右白虎前朱雀後玄武一モ闕ス四神相應靈地也ト

一堯ノ子堯ノ如クナラス　史記本紀ニ云堯知子丹朱之不肖注索隱曰鄭玄曰肖似也不似言不如人也皇甫謐云堯娶散宜氏之女曰女皇生丹朱又有庶子九人皆不肖也

一舜ノ弟舜ニ不似　史云重華父曰瞽叟更娶妻而生象々傲云云　舜ヲ殺ント巧ヲナス實ニ類モナキ不法ノ義ナリ

一神龍化シテ　前第二十卷ニ注ス

太平記鈔第三十二卷

一本院第二ノ御子　本院トハ光嚴院殿ナリ第一ノ御子ハ崇光院第二ハ後光嚴院ナリ

一廣義門院　後伏見院ノ后光明院ノ御母ナリ後西園寺相國實兼ノ息竹林院左大臣公衡公ノ女ナリ

一貝鐘ノ聲　佛ノ經ヲ貝葉ト云フホトニ誦經ノ聲ト云意モアリ或ハ歌唄ノ時ハ佛ヲ歎スル引聲ノコトニモ成ル也鐘ハ常ノ梟鐘也天竺ニテハ罽賓叱王ノ冥途ニテ苦ヲ受ケルカ鐘ノ聲ヲ聞テ苦ミ息ムト云ショリ拔苦ノ具トシテ諸寺ニ推ナリ唐ニハ禪定寺ノ智興ヨリ推シ始ルトアリ無明ノ眠トハ眠ノ中ニハ前後ヲモシラサルカ凡夫ノ習ヒナリ惡業煩惱ニヒカレテ佛道ヲモシラス善惡ノ業ヲモ辨サルヲ無明ノネムリト云ナリ

一周公旦ハ文王ノ子　魯世家云周公戒伯禽曰我文王之子武王之弟成王之叔父我於天下亦不賤矣然我一沐三捉髮一飯三吐哺起以待士哺ハ口飼也ト注ス廣韻ニハ食在口也トアリ

一大樹ノ一門　將軍ノ一門ト云コトナリ

一子推カ股ノ肉ヲ切　韓詩外傳云晉重耳之亡也過曹里梟須以從因盜其資而逃重耳無糧餒不能行介子推割股肉以食之乃能行劉向新序曰晉文公反國介子推無爵去之介山文公求不得焚山而死云云　左傳ニハ介之推ニ作ル同注ニハ介ハ姓推ハ名ナリ之ハ語ノ助トアリ

一趙盾カ車ノ片輪　晉ノ靈公ノ無道ナルヲ趙盾カ諫ヲナシケレハ靈公ノ意ニサカウ故ニ盾ニ酒ヲノマセテ甲兵ヲ伏セテ殺ントヽ巧ミケルヲ或人コレヲ盾ニシラセタホトニ走リ出テヽ車ニ乘テ迯ントス靈公兼テ車ノ一輪ヲ脱カセテ置キケリニカサシトノ用意ナリ急難ノカルヽニ處ナカリシニ靈輙ト云者カ車ノ一輪ヲ扶ルニ臂ヲ以テ軸ヲウケテ馳駕シテ行シメテ盾ヲ扶タリ是ハ如何ナル者ソナレハ盾カ首山ト云所ヘ田獵ニ出テヽ桑ノ木茂リタル所ニ往ケルニ其中ニ病フテ三日食事モ無リシ者アリ盾コレヲ愍テ簞食ヲ送テ食シム病人カ遂ニ靈公ノ侍臣ト成タリ盾カ芳恩ヲ報ントテ戟ヲ以テアタリヲ拂ヒ靈公ノ衆ヲ擊テ免シメタリ盾喜ノマヽ貴方ハ何ト云人ソト尋タレハ翳桑之餓人也ト答テ名字ヲ云

ハスシテ去タツ左傳第十卷宣公三年ノ傳ニアルソ
一巴猿一叫　朗詠下ニアリ公乘億カ愁賦ナリ明月峽トハ三峽ノ中ノ一ツ也方輿勝覽二十九峽州部云明月峽陵在夷倚江千崖西其白如月又如扇已上長沙磧トハ胡國ノ地ナリ虜中ノ沙漠ヲ磧ト云ト注セリ
一師子國　通鑑綱目四十三云師子國天竺旁國也居西南海中舊無人民止有鬼神及龍居之諸國商賈來共市易鬼神不見其形但出珍寶顯其所堪價商賈依價取之其地和適無冬夏之異諸國人聞其土樂因此競至或有停住者遂成大國能馴養師子因以名國已上 今コヽニ書ケルハ西域記第十一卷云南印度有一國王女聘隣國吉日送歸路逢師子侍衛之徒棄女逃難女在轝中心甘喪命時師子王負女而去入深山處幽谷捕鹿採菓以時資給既積歲月遂孕男子形貌同人性種畜也男漸長大力格猛獸年方弱冠人智斯發請其母曰我何謂乎父則野獸母乃是人既非族類如何配偶母乃述昔事以告其子々曰人畜殊途宜速逃逝母曰我先已逃不能自濟其子於後逐師子父登山踰嶺察其遊止可以逃難何父去已遂擔負母妹下趍人里母曰宜各愼密勿說事源人或知聞輕鄙我等於是至父本國々非家族宗祀已滅投寄邑人々謂之曰爾曹何國人也曰我本國流離異域子母相携來歸故里人皆哀愍更共資給其師子王還無所見追戀男女憤恚既發便出谷往來村邑咆哮震吼暴害人物殘毒生類邑人輙出逐取而殺擊鼓吹貝負弩持矛群徒成旅然後免害其王懼仁化之不洽也乃縱獵者期於擒獲王躬率四兵衆以萬計掩薄林藪彌跨山谷師子震吼人畜僻易既不擒獲尋復招募其有擒執師子除國患者當酬重賞式族茂績其子聞王之令謂母曰飢寒已甚宜可應募或有所得以相撫育母曰言不可若是彼雖畜也猶謂父焉豈以難辛而興逆害子曰人畜異類禮義安在既以違阻此心何冀乃袖小刀出應招募是時千衆萬騎雲屯霧合師子踞在林中人莫敢近子即其前父遂馴伏於是乎親愛忘怒乃串及於腹中尚懷慈愛猶無忿毒乃子刳腹含苦而死王曰斯何人哉若此之異也誘之以福利震之以威禍然後具陳始末備述情事王曰逆哉父而尚害況非親乎畜種難馴凶情易動除民之害其功大矣斷父之命其心逆矣重賞以酬其功遠放以誅其逆則國典不虧王言不貳於是裝二大船多儲糧糗母留在國周給賞功子女各從一舟隨波飄蕩其男船泛海至此寶渚見豐珍玉便於中止其後商人採寶復至渚中乃殺

其商主留其子女如是繁息子孫衆多遂立君臣以位上下建都築邑據有疆域以其先祖擒執師子因擧元功而爲國號其女船者泛至波剌斯西神鬼所魅產育群女故今西大女國是也

一大山ヲモ挾テ　此レハ孟子第一ニ挾太山以超北海ト云ヲ假テ云ナリ

一爲君薰衣裳　白氏文集第三卷行路難ノ辭也事文類聚續集第三ニモアリ但シ今字少シ違セリ爲君盛容色君看珠翠無顏色

一鰥寡孤獨　孟子第二云老而無妻曰鰥老而無夫曰寡老而無子曰獨幼而無父曰孤此四者天下之窮民

一天子ノ位イマスコト七十年　實ニハ七十二年也

一箕山ト云所ニ許由等　皇甫謐曰高士傳許由字武仲聞堯致天下而讓焉乃遁於穎水之陽箕山之下堯又召爲九州長由不欲聞之洗耳於穎濱時有巢父牽犢欲飮之見由洗耳而問其故由對曰堯欲召我々惡其聲是故洗耳巢父曰子若處高岸深谷誰能見子々故浮游欲聞求其名譽洿吾犢口遂牽犢上流飮之已上　正義曰箕山在洛州陽城南十三里

一虞舜　諡法曰仁聖盛明曰舜索隱ニ虞ハ國ノ名ナリ河東ノ太陽縣ト云所ニアルト也舜ハヲクリ名ナリ皇甫謐云字ハ都君也史記ニハ名曰重華トアリ孔安國云華謂文德也言其光又重合於堯ト云云　堯ノ文德ニ重ネ次タル德ナル故重華トハ云ナリ

一其父瞽叟ハ盲母ハ頑嚚也等　尙書云瞽子父頑母嚚象傲注無目曰瞽舜父有目不能分別好惡故時人謂之瞽配字曰瞍々無目之稱也頑ハカタクナ嚚ハヒスカシトヨムナリ象ハ舜ノ後母ノ子ナリ

一耕歷山　括地志云蒲洲河東縣雷首山一名中條山亦名歷山亦名首陽山等云云　凡十二ノ名アリ此山ノ南ニ舜井アリ

一漁雷澤　括地志云雷夏澤在濮州雷澤縣郭外西北山海經云雷澤有雷神龍首人類鼓其腹則雷也

一陶河濱　陶ハスエモノツクルトヨム也曹州ノ河濱ニテ瓦器ヲ作リタル事ナリ後ニ此所ヲ陶城ト云タソ

一器皆不苦窳　不苦窳ノ三字ハユカミイシマアラストヨム也古庾ノ音ヲ付タソ

一二年アレハ邑ヲナシ三年都ヲナス　史云一年而所居成聚二年成邑三年成都周禮郊野法云九夫爲井四

井爲邑四邑爲丘四丘爲甸四甸爲縣四縣爲都也
一娥皇女英　列女傳云有虞二妃帝堯之二女也長曰娥皇次曰女英堯擧舜爲相攝行王政毎事常謀於二女舜旣受禪升爲天子娥皇爲后女英爲妃云云　系本作女瑩大戴禮作女匽
一絺衣　細葛布衣也
一鬱陶　哀思也ト注ス
一忸怩　尙書云予心顏厚有忸怩注慙也
一五日ノ風　五風十雨トテ五日一度風カヨキ比ニ吹テ草木ッ生長セシムルヲ云ソ
一孔子モ尋忠臣必於孝子之門　千字文資父事君注忠臣必出孝子之門
一源氏ノ先祖賴光　淸和帝貞純親王經基滿仲賴光ト次第スルソ鬼切ノ事ハ劒卷ニ詳ナリ
一渡邊源五綱　嵯峨天皇御子河原左大臣源融其子ハ昇大納言正三位其子仕武藏守從五位下其子宛無官其子綱内舍人號箕田源二
一武佐寺　盛衰記三十九云昔聖德太子近江國蒲生郡老蘇杜ニ御座ケルニ太子ノ后高階ノ妃御產ノ氣アリテ十餘日マテ難產シ給ケレハ太子妃ニ語テ曰汝偏ニ神道ヲノミ信シテ未佛法ヲ不信仰胎內ノ小兒ハ必聖人ナルヘシ汝カ身ハ不淨也早ク精進潔齋シ淸淨ノ衣ヲ着シテ佛力ヲ賴マハ自平產セントノヘ給フ妃曰妾君ヲ仰クコト日月星宿ニ相同シ不可違正命我產賀シテ如在ナラハ君ト佛法ニ合力シテ伽藍ヲ興隆シ群生ヲ可濟度佛法眞アラハ威力ヲ示シ給ヘト誓給フ時老蘇宮ノ西南ノ方ヨリ金色ノ光照シ來テ后ノ口中ニ入ケレハ王子平產アリ異香殿中ニ薰シテ栴檀沈水ノ如クナリ妃瑞相ニ驚キ武川綱ニ仰テ光ノ源ヲミセラル命ヲ承テ尋テ行キ是ヲ見レハ西南ニ去コト三十餘町ヲ阻テ一ノ山ノ麓ニ方三尺ノ石アリ青黃赤白紫ノ五色ニテ眼ヲ合スルニ目マキレセリ傍ニ八尺餘ノ香薰ノ木アリ匂人間ニ類ナシ此由ヲ妃ニ奏スレハ妃又太子ニ奏セラル太子宣テ曰石ハ補陀落山ニシテハ寳石ト名或ハ金剛石ト云大唐ニハ瑪瑙ト名タリ木ハ是白檀ナリ天竺ニハ栴檀ト云海中ニ入ラハ沈香トモ號セリ何モ人物ニ不可用早ク以白檀佛ヲ造テ彼石ノ上ニ安置セヨ彼所ハ轉妙法輪ノ跡佛法長久ノ砌也ト妃大ニ隨喜シテ武ニ仰テ彼木石ノ上ニシテ假初ニ三間ノ堂

ヲ造リ覆給ケリ武カ作レル寺ナレハ武作寺ト云ケルヲ改テ長光寺ト定ラル異光遠ヨリ照來テ妃ノ口中ニ入シカハ是ヲ寺號トシ玉ヘリ

一唐太宗血ヲ含疵ヲ呪　貞觀政要第六云太宗征遼東攻白巖城右衛大將軍李思摩爲流矢所中帝親爲呪血將士莫不感勵

一亡卒ノ遺骸　又云大宗征高麗次定州及大軍回次柳城詔集前後戰亡人骸骨設太牢親臨哭之盡哀軍人無不灑泣兵士觀察者歸家以言其父母曰吾兒之喪天子哭之死無所恨云云

太平記鈔第三十三卷

一身體髮膚　孝經云身體髮膚受于父母不敢毀傷孝之始也立身行道揚名於後世以顯父母孝之終也

一周武王ハ木主ヲ作　史記本紀四云爲文王木主載以車中軍武王自稱太子發言奉文王以伐不敢自專云云ハカシルシヲ木主ト云ナリ文選第三東京賦注云翰曰木主刻木爲人主神置廟中而祭之

一漢ノ高祖ハ義帝ヲ尊　義帝ハ楚懷王ノ事ソ項羽高祖ノ主君ソ然ルヲ高羽ノ計ヲ以テ江南ニ放テ殺サレタルヲ高祖ハ無念ニ思ヒ君臣ノ道ヲ重クシ喪ニ處シテ哀ヲ發セラレタソ

一悉達太子　或ハ悉陀トモ云名義集云唐言一切義成舊云悉達訛也此乃世尊小字耳

一淨飯王　天竺ニハ閱頭檀ト云ナリ此方ニハ或ハ眞淨トモ云ナリ

一檀特山　是モ天竺ニハ彈多落迦ト云フ

一善施太子ハ鳩留國ノ翁ニ身ヲ與フ　此本說イマタ見エス十二遊經云鳩留國者晋言智士國善施太子ノ事ハ多クアレトモ此國ノ翁ニ身ヲ與ト云コトハナシ

一十千ノ國ヲ幷タル　仁王經下卷云閻浮提有十六大國五百中國十千小國云云

一十六ノ大國　長阿含經第五云鴦伽　摩竭　迦尸　居薩羅　拔祇　末羅　支提　拔沙　居樓　般閣羅　頞濕波　阿槃提　婆嗟　蘇羅波　乾陀羅　劍淠沙已上國ノ字ヲハ一々私ニ略ス又大雲經第一ニモ十六大國ヲ擧タリ大體同シ

一粟散邊地　天台觀世音經疏下云只非四輪王者名粟散王文輪王ニ金銀銅鐵ノ四ノ不同アリ是ヲ四輪王ト云ナリ百濟國ノ日羅ト云フ人日本ニ渡リテ聖德太子ヲ禮拜セラルヽ時モ傳燈東方粟散國ト云ヘリ日本ヲサシテ云ヘル證ナリ

一離々タル　垂貌ト文選ナトニ注セリ纍々トハ前ニ注ス

一蓮府槐門　大臣ノ異名ナリ或ハ蓮幕槐庭トモ云也

一朝氣ノ煙　ケノ字ハ食ノ字ヲ書クト也

一首陽ニ死ス　飢テ死スト云フ事也前ニ注ス

一八珍ヲ盡セリ　大寶箴云羅八珍於前注珍謂淳熬淳母炮豚炮牂擣珍漬熬肝膋也

一百福莊嚴　佛ニ三十二相アリ其一相ノ果報ヲウルニ付テ百福ト云事ヲ沙汰スルナリ福ト云ハ功德善根ヲ云ナリサル程ニ一ツノ善根ヲ云テソレヲ百合セタルヲ百福ト云也サテ其一善根ヲ定ルニ付テ異說多クアリ大知度論第四卷詳ニ出タリ廣博ナルホトニ全文ヲハ注サス輔行三云問幾許爲一福答有云輪王於四天下自在爲一福有云如帝釋於二天自在爲一福有云大千衆生盲能治得差爲一福有云大千人服毒治得差爲一福有云大千人死救得爲一福云云

一博弈　昔シ烏曹ト云シ者博戲ヲ始メタリ後ニ梟盧雄犢ト云者勝負ノ采トセリ此博戲ノ失ヲ云時長阿含經第十一云博戲有六失云何爲六一者財產日耗二雖勝生怨三智者所責四人不敬信五爲人疎外六生盜竊心云云　臨字函ニ入

一倉公華佗　第二十三卷ニ注ス

一藥師十二神將　藥師本願功德經云爾時衆中有十二藥叉大將俱在會座所謂宮毗羅大將伐折羅迷企羅安底羅　頞儞羅　珊底羅　因達羅　波夷羅　摩虎羅　眞達羅　招杜羅　毗羯羅大將此十二藥叉大將一々各有七千藥叉以爲眷屬已上　大將ノ二字ヲ前後計リニ書テ中ノ十大將ヲハ今私ニ略ス

一愛染明王　宗々ニ其義ヲ深ク沙汰スルコトアリ故今ハ其義ヲ略ス

一尊氏將薨逝　後醍醐帝崩御ノ後十九年ニアタル

一新千載集　延文元年六月十日ニ奉シテ同四年四月廿一日ニ四季ヲ先ツ奏覽ス爲遠朝臣ノ淸書也綸旨ニヨリテ入道大納言爲定卿撰ス

一褒姒一タヒ笑テ　史本紀四云國語云周幽王伐褒褒人以褒姒女焉　又云褒姒不好笑幽王欲其笑萬方故不笑幽王爲烽燧

一夢說ニ問フ　周禮春官占夢掌其歲時觀天地之會辨陰陽之氣以日月星辰占六夢之吉凶已上　漢書ノ藝文志ニモ象占ノコトハマチ〳〵ニアリ故ニ夢ヲ占フコト一大事ナリ故ニ周ニモ其官ヲ正クオケリトソ

一惡キ様ヲミル　劉向新序云諸侯夢惡則修德大夫夢惡則修官士夢惡修身如是則禍不至矣　拾芥抄云惡夢著草木吉夢成寶王桑樹ノ下ニ到テ所見ノ夢ヲ談シテコレヲ誦スルコト三返セヨト云云

一岸ノ額ナル草根　朗詠下云觀身岸額離根草論命江頭不繫舟　唐ノ詩人羅維カ作ナリ

太平記鈔第三十四巻

一漢高祖崩御　皇甫謐曰高祖以秦昭王五十一年生至漢十二年々六十三四日不發喪

一呂氏ト劉氏ト互ニ心ヲ置　呂氏トハ高祖ノ后呂后ノ一門ノ衆ナリ此后ノ父呂公ハ好ク人ヲ相セリ高祖ノ微シキ時ニ呂公見テタヽ人ニアラストシテ女ヲ以テ妻セアリ此胎ニ惠帝諱ハ盈ヲ生セリ呂后ノ兄二人アリ長ヲハ周呂侯ト云ヒ次ヲハ呂釋之ト云フ呂怡ト云ハ甥ナリカヤウノ歴々ノ衆多カリケリ然ルニ高祖ノ愛幸ノ戚夫人ノ子ニ如意太子ト云アリ太子盈ヲ廢シテ如意ヲ立ントツネ〳〵高祖ノ思ヒ玉フ故ニ崩御ノ後ニ天下ノ大事ニナラントスルソ故ニ諸臣互ニ心ヲ置合フソ

一高祖ノ老臣周勃樊噲　陳平灌嬰トハ十萬ノ士卒ヲ將テ榮陽城ヲ守リ樊噲周勃トハ二十萬ノ軍ヲ以テ燕ト代トノ騷動ヲ靜メタソ

一已ヲ尅復禮　論語顏淵篇云子曰克已復禮爲仁一曰克已復禮天下歸仁焉爲仁由已而由人乎哉

一孟嘗君カ三千客悉珠履ヲハイテ春信カ富ヲ欺　此ハ誤レリ蒙求ニ春申履珠トアリ史記列傳十八云春申君者楚人也名歇姓黄氏游學博聞考烈王元年黄歇爲相封爲春申君賜淮北地十二縣趙平原君使人於春申君々々舍之於上舍趙使欲夸楚爲瑇瑁簪刀劍室以珠玉飾之請命春申君客春申君客三千餘人其上客皆躡珠履以見趙使々々大慙已上　平原君ハ趙ノ公子勝ト云者ナリ

一軍ニ三ノ謀候ヘシ　孟子四云天時不如地利々々不如人和注天時謂時日支干五行王相孤虛之屬也地利險阻城池之固也人和得民心之所和樂也云云　假令ハ日トリ時トリヲシテ敵ノ城廓ヲ圍ムト云ヘトモ其城カ堅ク持テ落チ下ラサルハ天時ヨリ地ノ嶮岨ナルハ遙ニマサリタルソ又曰城非不高也池非不深也兵革非不堅利也米粟非不多也委而去之是地利不如人和也

一大將軍西ニアリ　曆林問對上云或問大將軍何也答曰新撰陰陽書云大將軍太白之精天之上客太一紫微宮方伯之神不居四孟常行四仲正四方三歳一移百事不可犯云云　其太白西方星金精也降地而三歳之間爲方伯之神十有二年運四方終而復始矣金者禁也主裁

斷故犯之者必受殃在東方者卯方可忌之寅甲乙辰四神相兼可忌之餘方皆爾

一觀心寺　弘法ノ弟子東寺ノ實慧天長四年ニ此寺ヲ建立アリ

一志賀ノ古京　天智六年三月十九日ニ都ヲ近江ノ志賀ニ遷サセ玉フ是時天下ノ百姓遷都ノ義ヲ歎ク故ニ諷諫ノ者モ多ク童謠モ亦多カリキ日々夜々ニ失火モ處々ニアリケルト日本紀第二十七卷ニ載テアリ五年住ミ玉ヒテ天武元年ニ又和州崗本ノ宮ニ移リ還リ玉ヘリ

一諸苦所因　法華經第二卷ノ文ナリ貪欲ニ婬財ノ二ツアリ此二カ根本ト成テ諸ノ苦患ハ出來スル也

一轅門ヲ堅　張晏曰軍行以車爲陣轅相向爲門故曰轅門

一斥候ノ備　綱目集覽四云許愼云斥度候望也所以望烽燧示兒編曰斥候謂檢行險阻伺候盜賊已上烽火ヲ見テ君將ヘ告ケ知ラスルヲ斥侯ト云フ故ニモノミト讀メリ或ハ敵軍ノ中ヘ忍ヒ入テ樣子ヲヨク見來ルヲモ云ト見タリ列傳ノ第四十九ニ此事カアルソ

一羊腸ヲ遶　ツヽラヲリ路ノ曲リ行所ヲ云フ惣メハ坂ノ名也集覽一卷云羊腸山在太原西北九十里正義曰羊腸阪道在太行山上南口

一後漢ノ光武庭前槐木不風拔倒　本據シラス

一應和ノ年　村上帝ノ年號也

一自受法樂　諸佛菩薩並天神マテ法ヲ用テタノシミトシ給ヘリ故ニ三寶ニ對シタテマツリ誦經誦咒シヌレハ各ノ法樂ヲ受給フナリ

一常行三昧ノ念佛　天台ノ摩訶止觀第二ニ四種三昧ト云コトヲ立玉ヘリ一ニハ常行二ニハ常坐三ニハ半行半坐四ニハ非行非坐ノ三昧ナリ初ニ常行三昧ノ姿ヲ云ハヽ終竟三月行不得休息ト云テ彈指ノ項モ坐セスシテ歩々聲々念々唯在阿彌陀佛ノ行ヲ作スソ此レハ源ト般舟三昧經ヨリ出タル作法ナリ

一止觀院　傳教大師年二十二歳ノ時延暦七年ニ叡山ノ頂ニ一宇ヲ創タリ是ヲ一乘止觀ト云フ今ノ中堂是也

一正年七年　南朝ノ年號也此方ニハ文和元年ニ當レリ

一宋ノ伯顏　宋ノ將軍ニアラス元ノ重臣ナリ元ノ世宗至元十二年十月ニ中書右丞相ノ官ニ至レリ項羽

ノ廬舎ヲ焼キシコト前ニ注ス
一昔漢朝ニ一人ノ貧者アリ　此ミナ本文ニ違ス排韻云曹娥會稽上虞人父時爲巫祝漢順帝漢安二年端午日縣江泝濤迎婆々神溺死娥年十四沿江號哭旬有七日投江而死抱父尸而出桓帝元嘉元年縣長度尚改葬娥於江南道傍爲之立碑命邯鄲子作碑文已上　今コヽニ書ケルト一々ニ相違セリ是ノミナラス何レモ此ヤウノ事多シ
一發鳩山ニ精衛ト申ス人等　人ノ名ニハアラス唯タ鳥ノ名ナリ前第十卷ニ注ス
一尾閭洩セトモ乾カス　莊子秋水篇曰天下之水莫大於海萬川歸之不知何時止而不盈尾閭洩之不知何時已而不虚注尾閭者泄海水之所也在碧海之東其處有石闊四萬里厚四萬里居百川之下尾而爲閭族故曰尾閭海水沃著即焦亦名沃焦也水注之無不燋已上　佛說ニハ是ヲ沃焦山トモ又ハ沃焦石トモ云ナリ金剛三昧經ニモ一切衆流皆歸大海以沃燋山故大海不增ト說レタリ所詮今云意ハ此焦ケル山石ニテモ乾サル海ナルヲ爭カ鳥ノ分濟ニテ埋メ平クヘキヤト云意也次下ニ七旱ト云ハ湯ノ七年ノ旱ヲフマヘテ云ナルベシ
一兵書虚實篇　六韜ノ第四卷ニアリ惣シテ敵ノ虚實ヲ知ルコト肝要也齊靈公ト晉ノ平公ト戰フ時ニ靈公吾國ニ巫山ト云フ山ノアル其上ニ登テ晉ノ軍兵ヲ望ミ見レタソ晉人敵ヨリ人衆ノ多少ヲ見ルト知テ山澤ノ險キ所ノ人ノ往エサル處ニ多ノ旗ヲ建テ衣物ヲ以人形ヲ作リ車ニ乘セテ曳テアリキ其車ノ後ニハ柴ヲ引アリキテ塵ホコリヲ揚テ猛勢通ルヤウニ見セタソ齊公ハ此ヲ見テ晉ノ軍衆ノ多キコトヲ恐レテ十月ノ晦ノ夜ルノ闇ニマキレテ陣ヲ引テ然モ其城ヲソノマヽ置テ陣ヲ張ルヨシヲ見セテ歸ラレタソ其時ニ晉ニ師曠ト云フ名譽ノ耳ノハヤキ者カ云フ樣ハ鳥烏ノ鳴聲カイカニモ樂ムヤウハ齊ノ師ハ必遁タルラント云ソ又刑伯ト云者ハ班馬ノ聲アリト云此意ハ馬多アレハ必連テイナヽク物ナルニ今ハ別々ノ馬ノ聲スル程ニ齊ノ師ハ遁タルヘシト云タソ又叔向ト云者ハ敵ノ城ノ上ニ多烏アリ軍兵多ク城ヲ守ラハカヤウニ鳥ハ止ラシ必齊ノ師ハ夜ノ間ニ迯タルヘシト云タソ三人ノ口カ符合シタホトニ密ニ人ヲ遣ハシメ見セタレハ案ノコトク

ニ違ワサルソ左傳第十六卷襄公十八年傳ニ見ヘタリ

一圓丘　郭璞カ遊仙詩云圓丘有奇草云云　禮記曰祀天圓丘祀地方丘ト天ノ形ハ圓ケレハ是ニ象トル也

一摩醯脩羅王　今ノ本ニ脩ノ字ヲ書ハ誤也大智度論第二云魔醯首羅此稱大自在形有八臂三眼騎大白牛大雲降雨々大千界一切衆生無能知數唯此天王獨能知之

太平記鈔第三十五卷

一天知地知　後漢ニ揚震字ハ伯起ト云者アリ昌邑ト云所ヘ往タレト其守護ニ王密ト云人ト對面シテ餘リニ互ニ餘念ヲ絶シテ入魂ヲシ既ニ夜ニ入リタル時王密金ヲ十斤懷ニ入レ來リテ揚震ニ贈リ與ヘタレハ揚震ハ無興シテ取受ケサルソ其心ハ只今某ハ東來ト云處ノ大守ニ遷サレテ往トテ金ヲ給ハリ候ヘハ欲心ノ義世間ニ聞ヘテ面目ヲ失ト云タソ王密カ曰クソレハ尤承リ分ケタレトモ既ニ暮夜ニシテ知ル者モナシ殊ニ人シラザル樣ニ自身持來レハ更ニ外ヘ漏聞ヘ知ルヿモ有マシキ程ニ是ヲハヒラニ御取アレト云タソ其時ニ震曰天知神知子知我知レリ然レハ四ツノ知リテガアリ何ソ知ヿ無ト云ヤトテ會テ取サレハ王密ハ却テ愧シク思テ立去タルソ

一鷸蚌相阨則我其弊　此ハ天台ノ法華文句第九卷ノ文也故事ハ春秋後語第三十卷ニアリ前第十四卷ニ注ス鷸ハシヤクナキト云鳥也ト古來ヨリ云ヒ傳タリサレトモ爾雅ニハ翠鷸也ト云ヒ倉頡解詁ニハ鷸翠別名也トアリ然レハ翡翠ノ事也ト聞ヘタリ

一脣竭齒寒　左傳五卷僖公五年傳云晉侯復假道於虞以伐虢宮之奇諫曰虢虞之表也虢亡虞必從之晉不可啓寇不可翫一之謂甚其再乎諺所謂輔車相依脣亡齒寒者其虞虢之謂也已上　晉ノ臣荀息ト云者カ謀トシテ晉ノ國ニ此已前ヨリ久アリ來タル屈産ノ馬ト垂棘ノ美玉トヲ虞公ニ遣ハシテ此度少シノ間道ヲ御假シアレ虢ノ國ヲ討ント云タルヲ虞ノ宮之奇ト云忠臣アリ虞公ニ無用ノ事也道ヲ假シテ虢ヲ討タラハ遂ニハ當國ノ滅亡ノ端ト成ント種々ニ異見ヲシタレトモ彼二色ノ寶ニ引レテ重テ尙モ珍物ヲ得ント思ノ心アツテ道ヲカスノミナラス結句前驅ヲシテ虢ヲ伐テ下陽ト云所ヲ滅シタソ然シテ中カ二年過テ復道ヲカルニ依テ宮之奇コレヲ勿體ナク思テ種々異見ヲ作タソ先年一度道ヲカシテ下陽ヲ滅セシコト尙以無用ノ義ナルニ又今重テ同心ノコトハ虞ノ滅亡ハ近ニアリ脣亡タラハ齒ハ寒カルヘシ又人ノ面ニハツラカマチ相依テ顏貌ハ好シ一方アシク成タラハ倶ニ惡シカルヘシト色々ノ譬ヲ引テ敎訓ヲシタソ遂ニ聽入レスシテ虢ヲ伐チ又吾カ國モヤカテ伐レタソ

一魯酒薄邯鄲圍マル　楚ノ宣王威力ヲモツテ諸侯ヲ朝會セシメタル時魯ノ共公舊各ヨリモ遲參セラレタソ會盟ノ時ハ其國々ヨリ酒サカナヲ用意シテ持參アルニ魯ノ酒カ薄テ歷々ノ衆一盞ヲ勸マルヽヤウニナシ其後ニ事ノ仔細アリテ兵ヲ發シテ魯ヲ攻メラルヽ事アリツルカ懇望ノ義有テ又楚ヘ朝セシ時ニ趙王ノ成侯種ト一度ニ酒ヲ進セラレタレハ楚ノ酒奉行カ魯ノ薄酒ヲ趙ノ厚酒ニ取易ヘテ王ニ獻シタッ故ニ楚ノ王趙ノ酒ノ薄キコトヲ怒テ趙ノ邯鄲ヲ圍レタソ具ニハ莊子ニ出タリ白氏詩集第二ニ魯酒薄如水邯鄲開戰場ト云タモ是レナリ

一戰國ノ七雄　索隱曰六國乃魏韓趙楚燕齊幷秦凡七國號曰七雄　雄ハ尊ノ字ノ意アリ諸國ノ中ニ此七尊崇ナレハソ

一秦ノ政ニ被幷　政ハ始皇ノ名也本紀云秦始皇帝者秦莊襄王子也以秦昭王四十八年正月生於邯鄲及生名爲政姓趙氏年十三歲莊襄王死政代立爲秦王已上趙ノ國ノ中ノ邯鄲ニテ生ス故ニ趙氏トスルナリ

一貞任宗任　第十六卷ニ注ス

一吏ノ不善　說文曰治人者也師古曰理也理其縣內

一國王ニ歸ス　四十華嚴第十二卷云國內之人恣情積惡令修善者無以暫安如是障修及造不善所有罪業六分之一還屬彼王

一湯武ハ火ニ投身桑林ノ野ニ登　武ノ字ハ悞ナリ唯湯王ト云ヘシ綱鑑紀要云湯既即位大旱七年太史占之曰當以人禱湯曰吾所爲請雨者民也若以人禱吾請自當遂齋戒剪髮斷爪素車白馬身嬰白茅以爲犧牲禱于桑林之野以六事自責曰政不節歟民失職歟宮室崇歟女謁盛歟苞苴行歟讒夫昌歟言未已大雨方數千里已上　山谷詩ニ桑村請六事ト云タルモ是ナリ

一太宗呑蝗　貞觀政要第八農務篇曰貞觀二年京師旱蝗蟲大起太宗入苑視禾見蝗蟲掇數枚而咒曰人以穀爲命而食之是害于百姓百姓有過在予一人爾其有靈但當蝕我心無害百姓將呑之左右遽諫曰恐成疾不可太宗曰所冀移災朕躬何疾之避遂呑之自是蝗不復爲災

一彼上人承平四年ニ　誤レリ天慶四年辛丑ノ年也

一法然ノ理　輔行一云法然只是自然之異名

一罪人有四人　扶桑記二十五云入死門間夢事金峯菩薩令佛子見地獄時復至鐵窟有一茅屋其中居四箇人

其形如灰燼一人有衣僅覆背上三人裸袒蹲踞赤灰獄領曰有衣一人上人本國延喜　帝王也餘課三人其臣也君臣共受若王見佛子相招云我是日本金剛覺大王之子也而今受鐵窟之苦彼太政天神以怨心燒滅佛法損害衆生其所作惡報惣來我所我爲其怨心之根本故今受此苦也太政天者菅臣是也此臣宿世福力故成大威德之天我父法王令險路歩行心神困苦其罪一也予居高殿令聖坐父下地焦心落淚其罪二也賢臣無辜誤流其罪三久貪國位得怨滅法其罪四也令自怨敵害他衆生其罪五也是五爲本餘罪枝葉無量也受苦無休苦哉悲哉汝如我辭可奏主上我身辛苦早可救濟云云又攝政大臣可告爲我拔苦起一萬卒都波已上

一古人云其身直影曲ラス　貞觀政要一云若安天下必須先正其身未有身正而影曲上理而下亂者也

一明惠上人　紀州在田郡ノ人ナリ九歳ニシテ出家シテ高尾山ニ上覺ニ從テ倶舍論ノ頌ヲ讀ミ數日ノ中ニ能誦セリ一期ノ行德具ニ記スニ及ハス元亨釋書第五卷ニアリ

一寬喜元年　後堀河年號也此比ハ明惠上人ハ口中ヨリ光ヲ放テルコトアリ奇異多カリケリ

一最勝園寺貞時　高時ノ親父也正安三年八月二十三日ニ出家シテ法名崇演最勝園寺入道ト名ク

一報光寺　報ノ字ヲ寶ニ作ルヘシ貞時ノ親父ナリ弘安七年四月四日ニ出家ス法名道杲寶光寺ト號ス

一捿堺　誤ナリ墀ニ作ルヘシ

一延喜式　延喜格ハ十二卷アリ上ハ貞觀十年ヨリ起リ下ハ延喜七年マテニ至ル式ハ五十卷ナリ

一周ノ太王　古公亶父ト云フ長子ヲ太伯ト云ヒ次ハ虞仲第三ハ季歷々ノ子ハ西伯文王ナリ古公ヲ大王トシ季歷ヲ王季ト云

一豳ト云所　徐廣曰新平漆縣之東北有豳亭索隱曰豳卽邠古今字異耳云云　委ハ周本紀ニ見ヘタリ或ハ又孟子第二曰大王居邠狄人侵之事之以皮幣不得免焉事之以犬馬不得免焉事之以珠玉不得免焉乃居其耆老而告之曰狄人之所欲者吾土地也吾聞之也君子不以其所以養人者害人二三子何患乎無君我將去之去邠踰梁山邑于岐山之下居焉邠人曰仁人也不可失也從之者如歸市云云　史記正義曰括地志云梁山在雍州好畤縣西山徐廣曰岐山在扶風美陽西山其南有周原皇甫謐云邑於周地故始改國曰周

一玄宗ハ兄弟二人坐ス　兄弟多クアリ宋ノ王成器ト申ノ王成義ハ玄宗ノ兄ナリ岐王範ト薛王業トハ弟ナリ二人ト云ヘカラス共ニ叡宗ノ子ナリ玄宗ハ第三子ナレハ三郎トモ云タソ母ハ昭成順聖皇后ト云フ竇氏也初ニハ德妃ト云フ垂拱元年八月戊寅ニ東都ト云所ニテ生レ玉ヘリ此腹ニ金仙公主玉眞公主トテ二リノ女子モアリ

一兄ノ宮ヲハ寧王ト申ス　成器ヲ改名シテ憲ト云タルヲ開元七年九月ニ寧王ニ徙サレタソ二十九年十一月ニ薨ス追謚シテ讓皇帝ト云タソ此ハ劉皇后ノ腹ノ子ソ此后ヲ尊テ肅明順聖皇后ト云タソ

一弘農ノ楊玄琰カ女ニ楊貴妃ト云美人アリ　御覽第百四十一云揚貴妃父玄琰蜀州司戸妃早孤養於叔父玄璬開元初武惠妃特承寵遇故王皇后廢黜二十四年惠妃薨帝哀悼久之後庭數千無可意者或奏玄琰女姿色冠代宜蒙召見時妃衣道士服號曰太眞既進見玄宗大悅不期歲恩禮如惠妃已上　天寶四載ノ秋ノ比ヨリ貴妃トセラレタリ

一或人是ヲ媒シテ寧王ノ宮ヘ進セケルヲ　此說ハ非ナリ資治通鑑四十三卷初武惠妃薨後宮無當意者或言壽王妃楊氏之美上見而悅之乃令妃自以其意乞爲女官號太眞更爲壽王娶郎將韋昭訓女潛內太眞宮中不期歲寵遇如惠妃已上　壽王ハ玄宗ノ子也十九史略ニモカクノ如ク載タリ又范葉陽曰明皇殺三子納子婦三綱絕矣其何以爲天下乎トアルソ今此中ニハ始終寧王ノ妃ト書ケルコト謂レナシ

一高力士　集覽四十三ニハ高麗人トアルソ

一金雞障　綱目云金雞障々坐障也畫金雞爲飾云云

一銀漢　詩學大成云佛氏解銀世界仙家多住玉華宮云云天ノコトナリ

一魯國ニ一人ノ才人アリ等　此本據ヲ知ラス但齊ノ崔杼カ棠公カ妻ニ淫セシヲ莊公モ亦此妻ニ密通セルコトヲ怒テ莊公ノ侍人ニ賈擧ト云者ト云ヒ合セテ莊公ヲ弑シタリ齊大史官書シテ曰ク崔杼弑其君崔杼怒テ此大史官ヲ殺ス其大史ノ弟又繼テ件ノ事ヲシルス又崔杼コレヲ殺ス其弟又相嗣テ書ス又コレヲ殺ス前後合テ三度マテ殺セリ其弟又件ノ事ヲ具ニ書ス其時ニ則ユルシテ殺サスコレニ依テ齊ニ直史アリト云コト天下ニ聞ヘタリ具ニハ襄公二十五年傳幷ニ齊世家ニ見ヘタリ此レヲ本據ニシテ唐

ノ玄宗ノ時ノヤウニモ書ルカト思フ事也但コレハ管見ヲモツテ義推ノ一分ナリ
一菩提子ノ念珠　榮西國師ノ渡唐ノ時ニ天台山ノ菩提樹ヲ分ケテ持來リ商船ニ付テ筑前ノ香椎ノ神祠ニ種ラレタリ其後ニ東大寺ニ栽ラレテ遂ニ叡山ニ移シ夫レヨリ建仁寺ノ東北隅ニ移セリ如來成道ノ靈木ナルヲ以テ後世ヲ願フ道俗コレヲ念珠トスル也
一增一阿含經　第二十六卷ニ明セリ
一小國ノ王　舍衛國ト云フ大國ノ王ナリ
一御心ニ嫌ハシク　經曰極生瞋恚吾等人姓何緣當與婢子結親其衆中或言當與或言不可與云云
一瑠璃太子　增一ニハ流離ニ作レリ經云集諸相師與子立字時相師言大王當知求夫人時諸釋共諍或言不與使彼此流離今當立字名曰流離云云　此外ノ諸經論ニハ同ク瑠璃ニ作レリ
一七歲ニ成セ　經ニハ年向八歲トアリ
一淨飯王ハ崩御　經ニハ時波斯匿王命終便立流離太子爲王云云
一釋氏ノ刹利種ニ强弓等　經云是時諸釋一由旬內遙射流離王或射耳孔不傷其耳或時射頭髻不傷其頭或射弓絃不害其人云云　刹利種トハ天竺ニテ王種性ノ事也
一一人寄手ノ方へ返忠　好苦梵志ト云者也
一釋氏無所殘討レナントス　經云殺九千九百九十萬人流血成河繞迦毗羅衛城
一此池ニ摩竭魚又多舌魚　經云水中有二種魚一名拘璅二名多舌云云　此下ノ過去ノ宿因ノ委經ト大ニ違ス故具ニ注セス又目連尊者佛ニ對シテ申サルヽ事ハ法句經ニ說タリ今ハ舍雜シテ書タリ
一梨軍支之事　百緣經第八卷ニ說レタリ但此因緣ヲ大論第三十卷ニハ羅頻周比丘ト明セリ又雜譬喩經ノ中ニハ羅云珠トモ名タリ
一漏箭　漏刻ノ箭ノ事ナリ元來ハ黃帝漏水ノ器ヲ以テ晝夜ヲ分チ始メリ箭トハ浮箭トテ水ノ增スルニ隨浮アカルソ文選五十四注云箭謂水中置竹箭水漏至刻以知其數也云云　杜詩曰五夜聲漏聲催曉箭九重春色醉仙桃

太平記鈔第三十六卷

一仁木右京大夫義長　義勝ノ第三男ナリ此ヲ伊勢仁木ト云フ具ニハ前ニ云カコトシ

一仙與國王殺五百人　昔此閻浮提ニ大國王アリ名ヲハ仙豫ト云ケル深ク大乘經典ヲ敬重シ玉フ其時ニ婆羅門トモ集テ云ク菩提ノ性ハ本トヨリ所有ナシナトト云テ大ニ經典ヲ謗ス此謗言ヲニクム故ニ其命根ヲ斷スコレヨリ來タ地獄ニ隨セス等ヲ涅槃經第十二卷ニ説レタリ然ルニ唐ノ西明寺ノ道世ノ諸經要集第十一卷ニハ亦有如仙譽國王殺五百婆羅門生地獄中發生信心生甘露國ト云ヘリ今ハ且ク此説ニ見タリ與ノ字ハ誤也

一班足太子一千ノ王ヲ害ス　仁王經下卷云昔有天羅國王有一太子欲登王位名班足太子爲外道羅陀師受教應取千王頭以祭塚神自登其位已得九百九十九王少一王即得一王名曰普明王云々此最後ノ普明王四無常ノ偈ヲ説キ玉ヘルヲ聞テ殘ル諸王モ三空三昧ト云フ悟ヲヒラキ班足モ亦無生法忍ト云覺ヲ得ラレタリ千人王ヲ實ニ殺セルニ非ス賢愚經ニハ駁足王トアリ大論ニハ鹿足王ト明セリ

一繫屬結縁　ニツ辭大方ハ同シ善ニツキ惡ニ付テ於主ニ少シ取ツキカヽリ縁ニ染ムモノナリ互ニ縁ニ成テ善惡ヲ作ス也

一利物　利益衆生ト云事ヲ畧シテカヤウニ使ナリ

一五部大乘經

大方廣佛華嚴經六十卷　東晋佛駄密多譯

大集經日藏分月藏分合五十卷　北涼曇無讖譯大品

般若經三十卷　姚秦羅什共僧叡等譯

妙法華經八卷　同譯也此經ヲ唯妙ト云テ大ト云サルニ深意アリ

大般涅槃經四十卷　與大集經同譯

一二十八部衆　不空ノ翻譯ノ孔雀經云復有二十八藥叉大將能於十方世界覆護一切衆生爲除衰惱患厄之事有四藥叉大將住於東方擁護東方乃至南西北並各住四園常居於地常在空居蓋每方及上下共二十四而四園各一則共成二十八部云云

一細川右馬頭頼旨　旨ノ字誤ナルヘシ有ノ字ニ作ルヘシ頼春ノ第二子息ナリ明徳二年九月九日ニ卒ス勝妙院ト號ス

一香椎　或ハ神功皇后ノ廟或ハ仲哀天皇ノ廟ト一定ノ義ナシ然レトモ資綱ノ説ニ仲哀ト云フ正説ナリ

一吒祇尼天　前ニモ云カコトク此ハ稲荷ノ事ソト或ル人ノ云ハレタソ本地ハ辨才天トソ

一千顆萬顆ノ玉　朗詠云瑩日瑩風高低千顆萬顆之玉染枝浪表裏一入再入之紅

太平記鈔第三十七卷

一細川右馬頭頼之　頼春ノ第一男武藏守ニ任ス從四位上貞治六年ヨリ暦應元年マテ管領也世人コレヲ武州管領ト號セリ明德三年三月二日ニ頓滅ス永泰院ト名タリ新後拾並新續古今作者ナリ

一竹園椒房　竹園梁園ナトハ親王ノ唐名也椒房椒庭ハ后宮中宮ノ御事ナリ

一君ハ舟臣ハ水等　家語五儀解云夫君者舟也庶人者水也水所以載舟亦所覆舟云云　貞觀政要第十云仲尼曰君猶舟也人猶水也水所以載舟亦所以覆舟

一義之カ草書　晉ノ王右軍カ事ナリ池ニ臨テ書ヲ學フ時ハ池水カ悉ク墨ニナルホトニ多ク書トソ故ニ草書ハ古今絶類ト沙汰シタソ其筆勢ヲホムルニ付テ多批判ヲシタソ梁武帝ハ如龍跳天門虎臥鳳閣トモ評論アツタソ

一韓愈　字退之ト云フ以六經之文爲諸儒倡學者仰之如泰山北斗云

一五柳先生　詩學大成十八云陶潛少懷高尙嘗爲彭澤令素簡貴不私事上官郡遣督郵至縣吏白應束帶見之潛嘆曰吾不能爲五斗米折腰事鄕曲小人邪稱印綬去縣乃賦歸去來後徵著作郞不就宅邊有五柳樹自號五柳先生

一七松居士　鄭薫字子博唐末知貢擧所居爲隱岩蒔松子庭號七松處士云云　集覽一云不官於朝而居家者曰處士

一秀筆ニ譬ヘラレシ覇隆舊將軍　排韻云李廣隴西成紀人材氣天下無雙文帝曰惜廣不逢時令當高祖世萬戶侯何足道哉云云　胡曾詩曰況是四方無事日覇陵誰識舊將軍云々注ヲハ畧ス禿筆ニ譬タル本據イマタ見ス尋ヌヘシ　又錦繡段ノ退筆ノ詩ニ是レアリ

一正月十四日　貞治元年壬寅ナリ

一魏徵ハ其君ノ舊臣ナリ　何トモ聞ヘヌ事也唐ノ舊臣ニテモナシ隋ノ臣ニテモナシ此人ハ隋ノ末ニ夏ノ竇建德ト云者立テ五鳳元年ト改元シタリシ時ニ起居舍人ニ成サレタト見タソ唐ノ武德ノ末ニ始テ息隱太子ノ文庫ノ役者ニ成シテ置玉ヘリ然レハ太宗ノタメニハ大段ノ敵ノ臣下ナリ故ニ太宗曰魏徵往者實我所讎ナリト又曰卿罪重於中鉤我任卿踰於管仲ト仰ラレタリ管仲カ事ハ前ニ注スルカ如ク齊

ノ桓公ノ兄ノ公子糾ノ臣桓公ノ敵タリシ時ハ桓公ヲ射タレハ帶鉤ニ矢カアタリテ身ヘハトホラヌソ不思議ノ仕合ナリ其後公子糾ヲ伐テ遂ニ管仲ハ桓公ノ臣ト成タソ其時ニ昔ノ遺恨ハ云ハレヌソ却深ク賞ヲ加テ覇者ノ長ト成ラレタソ

一陳渉ト云ケル者　世家十八云陳勝者陽城人也字涉少時嘗與人傭耕之壟上悵恨久之曰苟富貴無相忘庸者笑而應曰若爲傭耕何富貴也陳渉太息曰嗟乎燕雀安知鴻鵠之志哉二世元年七月發閭左適戍漁陽九百人屯大澤鄕注徐廣曰在沛郡蘄縣

一白起カタメニ被討　是ハ誤ナリ二世二年癸巳冬ノ比秦ノ司馬欣董翳佐章邯ヒソカニ陳渉ヲ撃ツ時ニ陳大ニ敗北スル處ニ其御者莊賈ト云者陳渉ヲ殺テ吾ハ秦ニ降參シタルヲ陳渉カ士卒共ガヨリ合テ莊賈ヲモ殺ソ

一項梁ト云者　項羽ノ季父也ヲチノコトソ是モ二世元年ニ呉ヨリ起テ八千人ノ士卒ヲ用テ江ヲ渡リ打テ出ル黥布モ此衆ニ會テ一味ス則六七萬人ト成テ彼陳渉カ次ニ出テ景駒ト云者ノカ楚王ト名乘テ居タル所ヘ取カケテ大ニ戰ヒ景駒モ又其臣秦嘉ヲモ倶ニ殺シタソ其時ニ阜陵ト云所ニ范增ト云者アリ年七十ニ成ケルカ計策ニ奇才ナル名人ナリ出テ項梁ニ對シテ云ケルハ此比陳渉カ勢ヲ震テ己カ威武ノミヲ立テ楚ノ後胤ヲ立サル故ニ程ナク討レタソ今君モ江東ヨリ起テ軍威輕カラスト云ヘトモ君ハ代々楚ノ將ノ位ナレハ自餘ノ者附順スルコトアルマシ唯楚ノ後胤ヲ立テヽ主君トセラレテ然ヘシト異見ヲシタレハ最ト同シテ楚ノ孫心ヲ立テヽ懷王ト號シテ我ハ臣下ニ成テ專軍ヲ執リ行タソ章邯ト漢陽ト云所ニテ戰テ其軍ヲ大ニ破リ兵ヲ引キ定陶ト云所ニ至リ再ヒ秦ノ軍ヲ破テ大ニ驕レル氣色ヲフルマヘリ故ニ宋義諫曰戰勝而將驕卒惰者敗ト云タレトモ項梁ハ少モ聞イレスシテ敵ヲ輕セシ時ニ二世王悉人數ヲ引率シテ章邯ニ加リテ楚軍ヲ撃ケルニ大ニ敗軍シテ其時項梁ハ討死ニセルソ然レハ懷王ハ項梁ノ時ニ立ラレタソ死後ニ立テルヤウニ書ケルコトハ惡シ

一楚ハ三戸ノ小國ナレトモ　索隱曰按左氏以畀楚師于三戸杜預註云今丹水縣北三戸亭則是地名不疑コレニハ多ノ說カアレトモ此義ニ依ルヘシト聞ヘタ

リ三體詩ニ楚會三戸少人煙トアル注ニモ三戸亭在
南郡穰縣安密卿トアルソ
一懐王ノ孫心ト申ケル人　秦本紀云求楚懐王孫心民
間爲人牧羊立以爲楚懐王注徐廣曰此時二世之二年
六月云云 又通鑑集覽ニ云心名也楚懐王槐之孫
一先帝ノ股肱　文選第六十注云股肱猶左右也
一身子聲聞　身子トハ舍利弗ノ事ナリ舍利ハ身ト云
フ弗ハ子ト翻スルナリ今ノ因縁ハ大知度論第十二
卷云舍利弗於六十劫中行菩薩道欲度布施河時有一
人來乞其眼舍利弗言眼無所任何以索之若須我身及
財物者當以相與答曰唯欲得眼舍利弗出一眼而與之
乞者得眼唾而脚蹈舍利弗言如此等人雖可度也不如
自調早伏生死於是廻向小乘
一踩躪　上ハ仁柳切踐蹈也下ハ呂振切輾也ト注セリ
二字ヲフミニシルトヨム
一一角仙人事　大智度論第十七卷云時波羅奈國山中
有仙人以仲秋之月於澡盤中小便見鹿合會婬心即發
精流盤中麚鹿飲之即時有身滿月生子大類如人頭有
一角其足似鹿々當產時往仙人舍前生子付仙人而去
仙人出時見此鹿子自念本縁知是已兒取已養育及其
年大勤教學習通十八種大經又學坐禪行四無量心得
五神通一時上山値大雨泥滑其脚不便躃傷其足便大
嗔恚咒令不雨仙人福得諸龍鬼神皆爲不雨々々故穀
果不生人民窮乏無復生路波羅奈王憂愁懊惱命諸大
臣集議雨事明者議言我聞有一角仙人上山傷足嗔咒
令十二年不雨王即開募若有能令仙人失五通屬我爲
民者當與分國半治是波羅奈國有婬女名曰扇陀端正
巨富來應王募婬女言若是人者我能壞之作是語已取
金盤盛好寶物語王言我當騎此仙人來婬女即時求五
百乘車載五百美女五百鹿車載種々歡喜丸皆以衆藥
草和之及持種々大力美酒色味如水服樹皮衣行林樹
間以像仙人於仙人舍邊作草庵住一角仙人遊行見之
諸女皆出好華妙香供養仙人々々歡喜諸女以美言敬
辭問訊仙人將入房中坐好床褥與好淨酒以爲淨水與
歡喜丸以爲果瓜食飲飽已語諸女言我從生來初未得
如此果水諸女言我一心善行故天與我願得此果水仙
人問女汝那屬色盛肥答曰我常食此好果飲此美水仙
言汝何不在此住答曰亦可住耳女呼共澡洗女手柔軟
觸之心動遂成婬欲即失神通天爲大雨七日七夜令得
歡樂飲食七日酒食皆盡繼以山水木果其味不美更索

前者答言已盡今當共取去此不遠有可得處仙人言隨意共出去城不遠女便臥地言我極不復能行仙人言汝不能行者騎我頂上我當擔汝女先遣信報王々可暫出觀我智能王見問言何由得爾女曰以方便力無所復能令住城中好供養恭敬之足其所欲拜爲大臣住城少日身轉羸瘦念禪定心厭此世欲王問仙人汝何不樂答曰雖得五欲常念林間王曰本除旱患何爲強奪其志即使遣之旣還山中精進不久還得五通一角仙人我身是也婬女者耶輸陀羅是也

一十二ノ觀露盤ノ氣鯢桓ノ審　何レモ第二十四卷ニ注ス

一耶輸陀羅　此ニハ華色ト云ヒ亦ハ名聞ト云フ悉陀太子ノ次妃ナリ出家シテ尼衆ノ主トナレリ

一水想觀ヲ成　淨土三部經ノ中ノ觀經ニ十六相觀ヲ明ス其中ノ一ツナリ

一鳩杖　周禮羅氏注鳩性不噎食之助氣云云　故ニ老者ノ杖ニハ鳩形ヲ作テ著ルソ鳩ニアヤカリテ噎セヌ樣ニト也白氏六帖云老人刻杖爲鳩形取其不咽云云

一大鵬ノ九霄ノ雲ニ搏　莊子云有鳥焉其名爲鵬背若大山翼若乘天之雲搏扶搖羊角而上者九萬里絕雲氣負靑天云々此ヲ取テ云ヘルソ

一ヲモトヒト　長恨歌ニ侍兒扶起嬌無力ト云フ侍兒ノ二字ヲヨメリ

一元獻皇后　他本ニ元ヲ玄ニ作ルハ誤レリ綱目第四三云后妃傳曰元獻皇后揚氏華陰人帝在東宮后入宮爲良媛時太平公主忌帝媛方娠帝不自安遂生男是爲肅宗云云　此腹ニ寧親公主ヲモ生セリ開元十七年ニ薨ス細柳原ト云所ニ葬レリ

一武惠妃　長恨歌傳ニハ武叔妃トアリ通鑑等ニハ武惠妃トノセタリ則天皇后ノイトコ恒安王攸正ノ女也開元ノ始ニ初テ夏悼王幷哀王上仙公主ヲ生ミケレトモ何レモ襁褓ノ内ニシテ死セル故ニ玄宗モ一段ノ愁傷ナリ其後ニ壽王瑁ヲ生シタレハ先例不吉トヤ思ハレケン宮中ニテハ養育セスシテ帝ノ兄ノ寧王憲ヲ賴ミテ宮外ニテ養育アリ何事ナク其後ニ盛王琦ト咸宜ト大華ト二公主ヲ生シタソ開元二十五年ニ薨セリ年四十餘歲ソ尊テ貞順皇后ト云タソ

一楊貴妃　度コトニ本傳ヲ引クニオヨハス姿質ノ麗艶ノコトハ雙モナシ剩歌舞ノ道ニモ達シ音律才算數ノコル所モナク人ノ器量ニ過タリサルホトニ帝

ノ意ヲ動シ移スコトタダ人ノ所作ニ非ス祿山カ亂出來シテ貴妃カ死スル年三十八歳トアリ

一巫山ノ神女ヲ賦セシ宋玉　王逸楚辭序曰宋玉屈原弟子云云　前ニモ注ス宋玉ハ郢人也楚大夫ノ官ニ居タル者ナリ神女賦高唐賦ヲ書テ襄王ニ上タソ

一夭々タル桃花　毛詩桃夭篇云桃之夭々灼々其華注夭ミ其少壯也ト云フ

一寧王ノ御方ヘ進セケル　前ニモ云カ如ク此說ハ非ナリ更ニカヤウニ書タルコトハナシ武惠妃ノ生ミ玉ヘル壽王瑁ヘ約束ノ義アリケルヲ玄宗押ヘ取テ壽王ニハ韋昭訓カ女ヲ娶テ太眞カ代リニセラレタソサテコソ子ノ婦ヲ納レタ義ハ三綱ノ道ニハツレタト云テ譏リタソ

一歡喜園　前ニ注ス含脂夫人ハ帝釋天王ノ妃也

一驪宮　三秦記曰始皇至驪山與神女遊忤其旨神女唾之生瘡始皇怖謝神女爲出溫湯泉而洗除

一溫泉　明皇雜錄云天寶六載更溫泉華清宮湯治井爲池嘗賜貴妃浴於溫湯安祿山於范陽以玉魚龍鳧鴈石梁石蓮華以献雕鐫尤妙上大悅命陳於湯中

一藍田日暖等　三體詩云滄海月明珠有涙藍田日暖玉生煙トアリ唐詩正韻第四ニモコレアリ

一先彩門戸ニ滿テ等　長恨歌ノ傳ノ意ヲ取テ云フ曰ク富均王室車服邸第與太長公主侔ト云云　御覽ナトニハ太平公主トアリ

一セウト　兄ヲモ弟ヲモ云フ何レモ苦シカラス

一楊國忠　綱目第四十三云楊釗者貴妃之從祖兄也不學無行爲宗黨所鄙從軍於蜀云云　無能無才ナレハ親類マテモイヤシメテ衆ニ入レサ・ルソ貧者ニシテ鮮子仲通ト云カ常ニ合力ヲシ扶持シテアルソ從祖兄トハ世俗ニマタイトコト云事ナリ爾雅釋親曰兄之子弟子相謂爲從父晜弟コレハイトコト云事也郭璞注ニ從父而別トアルソ然レハ從祖兄弟トハマタイトコ也注ニ從祖而別ト云タソ世ニ兄字計ヲ見テ貴妃カ兄ト云ハ誤ナリ從相ノ二字ニ心ヲ付クヘキ也天寶九年十月ニ釗ノ字ヲ除テ國忠ノ號ヲ賜ナリ

一畎畝ノ中ニ人ト成　孟子十云養舜於畎畝之中孔傳云深尺廣尺曰畎司馬法云歩百爲畝イカニモ少シノ所ニシテ卑賤ノ中ニテソタチタト云意ソ

一安祿山　營州ノ柳城ト云所ノ者也本來姓氏モ無キソサウナ者ソ母ハ阿史德氏ソ突厥ト云胡國ノ巫ニ

テト相ヲモツテ業トスルソ阿犖山ノ神ニ祈テ生タル故ニ則其子ヲ阿犖山ト名ヲ付タリ後ニ母再ヒ安氏ニ嫁シテ思順ト云子ヲ生シタソ故ニ犖山カ種カハリノ弟カ出來シタルコトヲ喜テ兄モ其マヽ安氏ニ成タソ犖ノ字ヲモ改テ安祿山ト云ソ

一簞食瓠漿　孟子云簞食壺漿以迎王師

一崔乾祐　祿山カ將ナリ哥舒翰馬歩八萬ヲ領シテ此者ト靈寶ト云所テ戰ヒタルカ翰軍敗北シテ潼關へニケ入タソ思明ト云者ノハ祿山カ同卿ノ者ナリ初ハ史窣于ト云タソ驍勇ノ聞アツテ張守珪ト云人カ玄宗へ奏シテ將軍ニ成シテ置タルソ帝此ニ對談アリテ史思明ト名ヲ賜タソ遂ニ祿山ト一味シタソ

一祿山カ兵七十萬騎　通鑑等ニハ凡十五萬反於范陽トアリ

一馬蹄ニソ懸タリケル　馬嵬驛ノ中ニ寺アリ其佛殿ニテ貴妃ヲハ縊リ殺シ尸ヲハ庭ニサラシタソ後ニ驛西ノ道ノ側ニ埋タリ時ニ年三十八歳トアリ

一回紇　此ハ所ノ名ニシテ人ニテハアラス

一行在　天子ノ居住シ玉フ所ヲ云ナリ一所ニハ定マラス前ニ注ス

一蜀江水綠等　是ヨリ下タ何レモ長恨歌ノ辭ナリ蜀國ハ中ニ大ナル江カ有テ兩方カ山ナリ草木カ江ニ移リ綠色イツレモ物サヒシキ體ソ

一太液芙蓉　此池ニ蓮ヲ種ヘヲカレケルソ芙蓉トハ應劭曰蓮華也ト未央ハ宮ノ名ソ漢ノ代ニ蕭何カ奉行シテ造タソ此ニハ柳カ多アルソ

一悄然　悲ム義ナリ玉篇ニハ悄憂也ト注ス心ニ類ノナキヲ云ナリ

一南内　南苑ト云ヘシ又唐ニ南内ト云コト別ニ子細アリ

一臨卭ノ方士ト云者　方士ハ人ノ名ニハアラス蜀國ノ臨卭縣ノ楊通幽ト云者ヲサシテ方士トシタソ文選三十一注ニハ方士術士也李善曰道人方術之士也トアリ仙術ヲ得タル者ヲ云也仙傳拾遺曰楊妃死帝召揚什伍於行在考召至三日夜奏曰人寰之中千洲三島之内求之不得後於東海上蓬萊頂見妃謂什伍曰此後一紀當相見願保聖體母憶念也

一雙鬟　髮ヲカラソニ結タル姿ナリ

一ヲウトノコモリ　夜殿ニ入リテ寢タル義ナリ

一雲海沈々　是ヨリ下ハ長恨歌ノ傳ノ語ナリ

一鳳舄　クツノコト也鳳ハ貴テ云辭也舄ハ毛詩ノ注ニ人君之盛履トアリ或ハ又履也ト注セルソ

一展轉ノ御思　爲感君王展轉思トアリ毛詩云悠哉々々展轉反側トアリ車ノ輪ノクルリト一トマワリ回ルヲ云ソ其コトク物ヲ思ヘハネラレヌマヽニ身ヲ打返シ々々スルヲ云ソ

一新垣平カ詐　史記封禪書云趙人新垣平以望氣見上言長安東北有神氣成五采若人冠絻焉或曰東北神明之舍西方神明之墓也天瑞下宜立祠上帝以合符應於是作渭陽五帝廟同宇　其明年新垣平使人持玉盃上書闕下獻之平言上曰闕下有寶玉氣來者已視之果有獻玉盃者刻曰人主延壽人有上書告新垣平所言氣神事皆詐也下平吏治誅夷新垣平

一比翼ノ鳥　封禪書云各一翅相比而飛而爲比翼鳥又文選第二十云願爲比翼鳥注北方有比翼鳥又云古詩曰願爲雙鳴鳥

一連理枝　樹一枝相向連接脉理而生爲連理枝比明皇妃子私相盟誓

一玄宗崩　寶應元年ニ崩ス齡七十八歲ナリ蜀ヨリ還幸ノ六年ノ後ナリ

一一念五百生　人師ノ語ナリ經文ニテハナシ

太平記鈔第三十八卷

一彗星　爾雅曰彗星爲攙搶注亦謂之孛星言其形孛々似掃彗或云掃星已上　杜預曰彗所以除舊布新也音似義反正義曰彗徐醉反又先倒反妖星光芒徧指如彗者〓也春秋鉤命决宋均注云彗五慧也色蒼則王侯破天子苦兵赤則賊起彊國恣黃則女害色權奪后妃白則將軍逆二年兵大作黑則水精賊江河决賊處處起已上　史記天官書云正義曰小者數寸長々或竟天而體無光假日之光故夕見則東指晨見則西指芒所及爲灾變見則兵起

一客星　通鑑集覽十一云客星只是慧孛變名也

一豐浦　蝦夷大臣ノ事也

一中臣大兄王子　舒明ノ御子ナリ

一鎌子　亦ハ鎌足ト云フ天兒屋根命二十一世ノ孫大織冠ト號ス是也

一二河白道　選擇集云譬如有人欲向西行百千之里忽然中路有二河一是火河在南二是水河在北二河各闊百步各深無底南北無邊正水火中間有一白道可闊四五寸許云云　水火ノ二河ヲハ衆生ノ愛欲ノ水ト嗔恚ノ猛火ニ譬ヘ中間ノ白道ヲハ即我等衆生ノ煩惱妄想ノ心中ニ一念發起シテ往生淨土ノ願樂ヲ成スニ譬タリ今ハ此語ヲ假テ云計ナリ

一文殊佛ノ御使ニテ　淨名經ノ中卷問疾品ニアリ佛告文殊汝行詣維摩詰問疾云云　一切經音義第八云維摩詰或言毗摩羅詰此譯云無垢稱々者名稱也或爲淨名者其義一也

一玄奘大般若ヲ渡ントト　大慈恩寺玄奘傳云玄奘本名禕姓陳氏漢大丘仲弓後也子孫徙於河南故又爲洛州緱氏人焉云云　唐貞觀七年ニ天竺ニ渡リテ法ヲ求メ得ル所ノ經論ハ凡六百五十七部ナリ西域記十二云踰葱嶺之危隥越砂磧之險路云云　此砂磧ヲサシテ流沙ト云ナリ統紀三十三云東入大流沙其沙隨風聚散人多迷路往來聚遺骸以記已上　流沙河トテ大河ノヤウニ思フ以外ノ誤ナリ沙ヲ風カ吹テ流行クヤウニアル故ニ何ニ准シテ名トスルト見タリ尙書禹貢云餘波入于流沙蔡氏注云杜佑云沙州西八十里其沙隨風流行故曰流沙

一燎原ノ焔　尙書ニ出タル語ソ前ニ注ス

一李將軍　漢ノ李廣カ事也

一鰐ノ淵ヲ去　韓文三十六云今與鰐魚約盡三日其率醜類南徙于海以避天子之命云云

一蝗ノ境ヲ出　後漢ノ魯恭ハ粛宗ノ時中牟ト云所ノ守護ニ成テ道德ヲ用テ理非ヲ斷ル故ニ群國ノ蝗螟常ニハ稼苗ヲ傷ヒツルニ此人カ行ヨリ堺ヲ出テヽ入ラサルソ

一朝三暮四ノ賛　莊子ニ出タル故事ソ又列子曰宋有狙公者愛狙養之成群能解狙之意狙亦得公之心損其家口充狙之欲俄而匱焉將限其食恐衆狙之不馴於己也先誑之曰與若芧朝三而暮四足乎衆狙皆起而怒俄而曰與若芧朝四而暮三足乎衆狙皆伏而喜云云　狙ハサルノ事也猿ヲ養フ者ヲ狙公ト云タソ猿モ主人ノ意ヲ能知リ主人モ又狙ノ意ヲ知リタソ或トキ戯テ曰ク汝ニ栗ヲ朝ハ三ツ暮ニハ四ツヽ與ント云タレハ衆狙カ怒タリ又朝四暮三ニセント云タレハ猿カ喜タルソ今引テ云タル意ハ食物ヲ配リ與フルニ付テ云ナルヘシ

一人間榮耀風前塵　白居易カ詩トソ

一富貴草頭露　杜子美三云惜君只欲苦死留富貴何如草頭露　又東坡十四卷云生前富貴草頭露身後風流陌上花

一德風遠扇並不尤　論語ニ出タリ

一魏ノ將司馬仲達　蜀ノ孔明ト對陣シタル時ノ事ソ

一孔子顔淵ニ向テ用之則行等　論語述而篇ニ出タソ用舍ト云コトハ唯孔子ト顔回トハカリニアルト仰ラル故ニ子路カ心ニハ御兩人ノコトクニ用舍ノ義ハ及ハストモ三軍ノ大將ト成テ戰ヲセンハ恐クハ某ニテアラウト思テ誰ト與ニセント云タソ然ルヲ孔子ハ其方カ如キノアラ義ヲ云フ者ニハ同心ハナシト仰ラレタルソ暴虎トハ徒搏ト注シタソ虎ヲ手ウチニスル類ソ馮河トハ深キ河ヲ船筏ヲモ用スシテ徒渉リニセントスル者ヲ云ソ所詮ハ謀ヲ好テ事ヲ成スカ好キソ

一家朝世ヲ治テ已三十七代　此ハ誤ナリ十八代也幼帝トハ度宗ノ末子ナリ景炎三年戊寅三月ニ帝船ニテ碙州ト云所ヘ遷幸成テ崩シ給ヘリ時ニ十一歳ナリ五月ニ帝昺年八歳ニシテ即位アルホトニ幼帝ト申ス也在位二年ニシテ元人來リ戰フ宋ノ大將張世傑カ戰敗レテ既ニ大事急ニ成マヽニ陸秀夫ト云都帝ヲ抱テ厓山ノ下ノ海ヘ沈メテ吾モ倶ニ亡ヒタソ

此時宋ハ滅スル也前後共ニ十八主凡三百二十年アツテ滅スルナリ此年カ太元ノ至元十六年ニアタルソ

一三韓　日本ニテハ新羅百濟高麗ヲサシテ云ヘトモ彼方ニハ辰韓弁韓馬韓ノ三所ヲ云ソ何レモ唐ヨリハ東北方ノ國ソ

一吐蕃　集覽三十九云本西羌屬姓勃窣野居析支水西在吐谷渾西南

一太元國主老皇帝　凡元ノ太祖姓ハ奇渥温氏名ハ鐵木眞ト云タソ蒙古部ノ人ナリ世ニハ蒙古部ノ長ト云タソ宋ノ寧宗ノ代開禧二年丙寅ノ歳ヨリ立ツ是ヲ太祖ト云フ二十三年ニ僭位シテ殂ス太宗立ツ十七年ニシテ殂シ定宗立ツ五年ニシテ殂シ憲宗立ツ九年ニシテ死シ世宗立ツ此諱忽必烈ト云憲宗ノ同母弟也即位ノ初年ノ年號ヲ中統ト云宋ノ景定元年ニアタレリ五年過テ改元アリテ至元ト云フ此九年ニ始テ國號ヲ立テ元トハ云ヒケリ十六年ニ宋ハ滅シタリ此年元ノ世宗ハ六十四歳ニ成ラレタルホトニ老皇帝ト云フナルヘシ

一伯顏丞相　是モ宋ノ臣ト書ケリ誤也太元ノ世宗ノ至元々年ニ中書左丞相ニ任セリ二十萬衆ヲ將ヒテ使コト一人ヲ使カ如クシタ人ソ一代之良將トホメラレタソ宋ノ柳岳カ元ニ往テ和睦ヲナサント云タレトモ此人カ云ヒ破テ合點ヲセサルソ

一襄陽ノ守呂文煥　呂文德ト云者カ弟ナリ此城ノ守ト成テ五年ノ間元ニ圍レテ居タレトモ援兵モナク元ノ兵ハ日々ニ益シテ攻メタレトモ拒キキタルソ遂ニ至元十年ノ二月ニ城ニ居ナカラ元ヘ降シケルソ城ヲヨク持タト云テ歎ラレタレトモ敵ニ降タト云テ誹タソ宋ノ三分一ノ所ナルニ敵ニ成タホトニ諸方ノ手カ違タソ故ニ嗚呼呂文煥劉整千載名教之罪人也ト書タソ

一大釜ノ賈似道　是モ誤レリ宋ノ寵臣コレニ增タ者ハナシ然レトモ驕色ノミニ怠テ謀略モナクシテ權威ニ任セラレタソ似道者眞天下之至愚者也ト評シタリ

一賈平相兄弟　似道カ弟ヲハ賈貴妃ト云タソ

一尉繚　齊ノ人ナリ史記ニハ此人ノ事ヲハ記サス戰國ノ際ニ生テ權譎ヲハ專トセサルソ奇特ノ志氣ト人カ評シタソ

一李衞　貞観政要ニ云李靖字藥師京兆三原人也姿貌魁奇少有文武材云々後ニ衞國公ニ封セラル故ニ李衞ト云也

一相如壁破　史記云司馬相如者蜀郡成都人也字長卿少時好讀書學擊劍文君夜亡奔相如々々乃與馳歸成都家居徒四壁立注索隱曰案孔文祥云徒空也家空無資儲但有四壁而已云云　卓文君ト云美人カ夜ル亡ケテ相如カ所ヘ奔入タソ嫁娶ノ禮儀ヲモ調ヘスシテ行クテ奔ルト云タソ相如モ此文君ヲツレテ馳テ成都ヘ歸テ居タ時ノ體ソ何レモ資財雜具モナウテ舍タニモ四壁計ナル所ニ居テタンヌヲ作タソ山谷曰家徒四壁書侵坐

一劉仲カ乾鍋薪盡　劉仲ハ名ハ喜ト云フ漢ノ高祖ノ兄也六年ノ春ノ比帝秦ノ孤立ニシテ滅亡セルニ懲リテ同姓ノ衆ヲ大ニ封シテ天下ヲ塡撫セント用意ソ故ニイトコノ劉賈ヲハ荊王ト成シ兄ノ劉喜ヲハ代王トナシ玉ヘリ然ルニ明ル年ノ冬匈奴カ代州ヲ攻戰フ故ニ國ヲ棄テ雒陽ヘ歸ラレタソ故ニ高祖ハ大ニ怒リテ合陽ト云所ヘ遣ハシテ置レタソ其時ニ貧乏ニテコソ有ルランソ故ニ其體ヲ今ハ書タソ

一老驥ノ千里ヲ思　東坡十九云莫因老驥思千里醉後哀歌缺唾壺注晉書云王敦醉後慷慨悲吟以鐵如意擊玉唾壺歌曰老驥伏櫪志在千里云云

一飢鷹ノ一呼ヲ待　飢ツカレタル體ヲ云ハントテ飢鷹ノ事ヲ云タソ

太平記鈔第三十九卷

一堯ノ代ニスラ四凶アリ　尙書ニ云流共工于幽州放驩兜于崇山竄三苗于三危殛鯀于羽山已上　共工ハ官ノ名ナリ此人貌ハ恭敬ニシテ心ハ傲リ狠リテ道ニ背ケル故ニ北裔ノ地ノ人ノ往覆モ希ナル所ヘ流サレタソ惣シテ人ヲ流スト云事ヲ蔡氏カ注ニハ流遣而遠去如水之流也ト云タソ此共エヨリ始レル事也驩兜ハ臣ノ名ナリ共工ニ黨類ス罪惡同シキ故ニ南山ヘ放タル也三苗ハ國ノ名ヲ人ニ付タソ江南荊揚ノ間ニアリ險ヲ恃テ王命ニ違キ亂ヲ起セリ三危ハ西ノ方ニアル邊地ナリ鯀トハ崇伯カ名ナリ禹ノ父ソ羽山ハ東海ノ中ニアリ此ニ流スト云或ハ放竄殛ト語ヲ替云ヘトモ皆誅スト云事ナリ孔安國カ注ニモアリ

一魯國ニ少正卯アリ　孔子魯國ノ定公十四年ニ司冦ノ官ニ成リ玉ヒテ喜色アリ子路カ云ヤウハ君子ハ禍カ來レトモ恐レス又福ノ事アレトモ喜コトナシトコソ承ルニ今位ヲ得テ喜玉ヘル義ハ何事ソト不審シタソ孔子ノ曰ク最汝カ言フコトク也吾喜ハ平人ノ存分ノ如クニハ非ス當國ニ今マテ大夫ノ官ニ居タル少正卯ト云ヘル亂政ノ者ヲ誅シテ國人ノ惱ヲ除ンコトヲ喜フ也ト仰ラレタソ天下ニ大惡ト云コト大段五ツアリ竊盜ヨリモ大罪ナリ一ニハ心逆而險ナリ常ニ心ヲ奸險ノ間ニオイテ人ニ無理ヲカクル者也二ニハ行僻而堅此ハ常ノ所作一ト僻アリテ人カ異見ヲ云ヘトモ我事ニ自慢ヲシテ堅固ニ守テ善道ニ移ラヌ者ナリ三ニハ言僞而辯コレハ言ニ出スホトノ事カ詐僞ニシテ兎イヘハ角云ヒ辯舌ヲ以云ヒマキラシテ當座ヲ過ス者ナリ四ニハ記醜而博非義ノ事ヲ年來作シ置テ何レヲ惡シト云ハンヤウモナク而モ行跡ハ人ナミナラヌ惡キ事ノミ多アルヲ云フ五ニハ順非而澤吾意ニ惡キ事ヲハ知レトモ又イカヤウニモ惡カラヌ調義モアルヘシト思テ非義ヲ作シ其過ヲカサル者アリ此五ノ中ヘ一ツモアル事大罪ナルニ少正卯皆兼有之トテ官ニ成リテ七日過テヤカテセラ誅レタソ彼尸ヲ三日ノ間朝廷ニサラシテ衆人ニ見セ玉ヘルソ孔子家語第一卷相魯篇ニ出タリ又說苑第十卷ニモアリ但第五箇條ノ次第少シ殊ナリ

一心鴻毛ヨリ輕　韓退之曰死有重於泰山或輕於鴻毛云云又莊子第四卷注疏ニモ云フ

一麟角ヨリ希　太平御覽云蔣子方機論曰學者如牛毛成者如麟角注言其多也言其少也

一五十步ニ止ル者百步ヲ笑　孟子一云兵刄旣接棄甲曳兵而走或百步而後止或五十步而後止以五十步笑百步則何如曰不可直不百步耳是亦走也云云戰ノ時刀ヲ拔テ互ニ勝負セントスル期ニ成テ甲ヲ捨ニクル者ノ中ニ或ハ五十步ホト吾ニハケタルニ其方ハ百步ニケタト云テ笑コトアランヤ虎口ヲハツシテ逃ルハ五十步モ百步モ同逃ヤウソト云ナリ

一百里奚ハ虞ノ君ヲ棄弁ニ管夷吾ハ桓公ニ降　第五卷ニ注ス

一垂棘ノ玉　此ニハ異義多クアリ文選第一ニハ懸黎垂棘ト云ヘリ此ヲ或ハ明月ノ玉ト云ヒ或ハ夜光ノ珠ト云フナトノ義一途ナラス西京賦曰流懸黎之夜光云云吳都賦曰隋侯於是鄙其夜光ト云フ夜光垂棘ハ一物カトソ云ヒヌル

一管夷吾ニ召忽等　論語第七憲問篇云子路曰桓公殺公子糾召忽死之管仲不死曰未仁乎已上　桓公ト公子糾トハ兄弟ナリ然レトモ子細アリテ糾ヲ殺サレタリ管仲モ召忽モ倶ニ糾ノ臣ソ召忽ハ糾ト共ニ死ス管仲ハ死セサレハ仁者トハ云マシト云タソ

一豈如匹夫　又曰豈若匹夫匹婦之爲諒也自經於溝瀆而莫之知也管仲カ仁義ノ道ニ賤シキ者ノ其方ノ死セハ吾モ死セントナト丶諒ヲ盡シテ約ヲ成ジテ或ハ腹ヲ切リ或ハ淵瀨ヘ身ヲ投ルヤウナル事ニテハナキソ

一履道翁　日本案四十二箇條序云神功皇名元年辛己六月有履陶公持此書來曰授先帝仲哀々々復授之於應神云云不審多シ仲哀ハ庚辰ノ歲崩ス此年ニ應神生ス此時ニ仲哀モ傳ヘ玉フヘカラス況ヤ神功元年ニハ仲哀ハイマシ玉ハサルソヤ

一昔和泉　和泉小次郎親衡カ事也大力ノ者ナリ

一岩松治部太輔　畠山義純ノ第三男岩松太郎藏人時兼ト云フ此第四代ノ孫直國ト云タル人ナリ

一飡霧ノ飢　晉ノ嵇康ヲ題顏年詩曰中散不偶世本自餐霞人　翰注ニ仙者之流ト云ヘリ楚辭ニ漱正陽而含朝霞ト云タモ何モ仙人ノ事ニ用ヒタリ今ハ出家ノ潔齋ノ食事ニヨセテ云フナリ

一曲徑通幽處　三體詩ニハ題破山寺後院トアリ此寺ハ五祖ノ六祖ニ傳衣ノ處トアリ玉屑第十五卷ニハ竹徑ニ作レリ

一橋鴈齒ヲナセリ　遊仙窟ニ鴈齒トキザメリト讀ム注ニ云列木亦刻石爲之其形一前一却如鴈之行列人鳥牙齒之形云々此注ニハ人ヤ鳥ノ齒ノ形ニ譬ヘタソ但文選第二十卷ノ注ニハ齒列也トアリ然レハ板ナトノ列タル則齒ノ字ヲ付タソ樂天初テ江南ヲ司ル時ノ詩ニ王尹橋傾鴈齒斜ト云ヘリ

一蜀江ノ錦　翰墨全書癸集七ニ蜀江ト題シテ六帖云蜀有濯錦江益州有錦城

一歩ニ履香シ　詩人玉屑二十云天聖間閩僧可士有送僧詩云一鉢即生涯隨緣度歲華是山皆有寺何處不爲家笠重吳天雪鞋香楚地花他年訪禪室寧憚路岐賒已上此ハ名譽ノ詩作ニシテ肉食ノ者ノ能到ル所ニアラストト云タソ

一一椀ノ中ニ天仙ヲ得　盧仝カ茶歌ニ一椀唯吻潤ト云テ六椀通仙靈ト云タルニ據ルソ

一螭頭ノ香爐　螭ハ角ハ無テ龍ノ如ニシテ黃色ナル者ソ

一鷄舌ノ沈水　酉陽雜俎云一木四香根曰旃檀節曰沈香花曰鷄舌膠曰薰陸已上　續博物誌第二ニハ沈香ハ雜木也朽蠹テ沙水ニ浸シテ歲久ナリヌルヲ取テ見レハ儋崖海道ノ民ノ橋梁ノ木ノ如ク皆香材ナリ詮ハ海桂橘柚ノ木ノ水中ニ沈テ多年ニシテ得ル是ヲ沈水香ト云也

一浮香世界　衆香世界ト云ヘシ淨名經下卷香積佛品云時維摩詰即入三昧以神通力示諸大衆上方界分過四十二恒河沙佛土有國名衆香佛號香積已上　其世界ハ香ヲ以樓閣ヲ作リ苑園田器悉ク香氣アリ人天之香最爲第一トアリ

一百服ノ本非　譬ハ衆園ノ名茶ヲ飲テ何レハ正銘也本ナリ是ハ本園ニハ非スト云事ヲ致スホトニ本非ト云ナルヘシ

一三尸　柳文第十八卷ニ罵尸蟲文アリ有道人言人皆有尸蟲三處腹中ト云フ上尸トハ淸姑ト云人ノ眼ヲ伐ツト中尸ハ白姑ト云人ノ五臟ヲ伐ト下尸ハ血姑ト云人ノ脾命ヲ伐ツト故ニ庚申ノ夜ニ昏睡ノ間ニ此三尸カ人ヲ害スルホトニ寐サルヤウニスル事ヲ專トス但是ハ世人ヲ惑ハス道ナリトテ深罵タリ

一花開花落コト二十日　事文類聚後集第二十卷牡丹詩花開花落二十日一城之人皆若狂

一魯叟有言曰等　論語八衛靈公篇ニアルソ或ハ其衆ト云ヨリ下ハ則注ノ辭ソ東坡第十云坐令魯叟作瞿曇注魯叟指孔子也

一楚ノ屈原カ汨羅ノ澤ニ吟　屈平字ハ原ソ楚ニ仕ヘテ王族ノ三姓ヲ掌ル官ニ居ス是ヲ三閭大夫ト云也同列ノ上官ノ大夫彼屈平カ能ヲ妬テ懷王ニ譖タソ王此ヲ信シテ屈平ヲ疎スル故ニ憂テ離騷經ヲ作テ我愁ヲ述ヘタソ襄王立復讒ヲ信シテ江南ヘ謫セシメタソ故ニ復九歌九章ヲ作テ恨ヲ伸テ遂汨羅江ニ沈タソ漁父辭云屈原既放遊於江潭畔行吟澤顏色憔悴形容枯橋漁父見而問之曰子非三閭大夫與何故至於斯屈原曰世人皆濁我獨淸衆人皆醉我獨醒是以見放漁父曰聖人不凝滯於物而能與世推移世人皆濁何不淈其泥而揚其波衆人皆醉何不餔其糟而歠其釃何故深思高擧自令放爲屈原曰吾聞之新沐者必彈冠新浴者必振衣安能以身之察々受物之汶々者乎寧赴湘流葬於江魚腹中安能以皓々之白蒙世俗之塵埃乎漁父莞爾而咲鼓枻去乃歌曰滄浪之水淸兮可以濯我纓滄浪之水濁兮可以濯我足遂去不復與言

一南曹辨　南都ノ或春日或多武峯等ノ役者ニ立玉フヲ云フ

一布留ノ神寶　石上ヲ布留社ト號ス二十二社ノ内ニモ十六社ニモ入タル所ノ社ソ神名帳曰大和國山邊郡石上坐布都御魂神社是也イソノカミト云ハイハ添モノナリソノカミフルノ心ナリ草薙劍ヨリソノカミノ劍ト云心ナリ

一還城樂　乞食調ノ樂ナリ

一天兒屋根　春日大明神也人臣ノ祖トシテ輔佐ノ道ヲナシタマウ也

一博陸　攝政關白ノ唐名ナリ具瞻トハ毛詩小雅節南山篇云赫々師尹民具爾瞻已上師尹トハ周ニテハ三公ノ官ヲ云タソ

一高皇産靈尊　タカンミムスヒノミコト　此御ムスメ拷幡千々姫ヲモッテ天照大神ノ御子天忍穗耳尊ノ妃トシ玉フナリ天照大神ト高皇産靈尊ト相計ヒ皇孫ヲ下シ給フ八百萬神勅ヲウケテ共仕フ諸神ノ上首三十二神アリ其中ニ五部ノ神ト云ハ一ニハ天兒屋根命中臣祖二ニハ天鈿目命三石疑姥命四玉屋

命五ニハ天大王命忌部祖　此中ニハ中臣忌部二祖ハ宗ト神勅ヲ承テ皇孫ヲ扶護リ玉ヘリ

一綠林　漢天鳳四年ニ臨淮娘瑘其外荊州ヨリ綠林ノ兵起レリ是則人ノ物ヲ侵奪シテ飢饉ヲ慰スル民衆數萬人綠林山ノ中ニ隱レ居テ盜竊ヲ成ス也夫ヨリ盜賊ノ名ト成レリ

一高麗國ノ王　至正二十三年ナレハ彼國ノ恭愍王ノ即位十二年ニ當ル也日本國ノ貞治五年ハ至正二十六年ニアタルホトニ四年メニ著岸ソ

一所轄　車ノクサヒノ肝用ナルヤウナル處ヲ云ナリ

一島嶼　トモニシマトヨムナリ

一貪婪　タンランノ音ナリムサホリシタルトヨム

一萬戶金乙貴　萬戶ハ官ノ意ソ金ハ姓ソ千戶金龍ト云モ例シテ知ル•ヘシ

一元朝皇帝　順宗帝ノ事ナリ明宗ノ子ナリ至正二十三年ハ日本ノ貞治二年ニアタル

一文永弘安兩度ノ戰　本朝ノ文永ト元朝ノ至元トハ同年ニ改元ソ文永三年ノ本朝國史ニ蒙古高使大船三艘ト記セリ次宋元通鑑第十六卷至元三年元賜日本國王書トノセテ則其書モ載タリ然レハ兩朝ノ記少モ違スルコトナシ

一文永十年　宋元通鑑云至元十年元遣忻都會高麗洪茶伐日本舟凡九百艘士卒二萬五千人

一弘安　是モ本朝ノ記錄ニ弘安四年五月廿一日蒙古來船四千艘二十四萬人トアリ通鑑第十八云至元十八年擊日本兵十餘萬人死于海島還者僅三人

一弘安六年　又云至元二十年以阿答海爲征東行省丞相發五衞軍二萬人征日本又命闍里怙木兒以蒙古軍習舟師者二千人探馬赤萬人習水戰者五百人同往征之

一弘安八年　又云至元二十二年冬十月立征東行省以阿答海爲左丞相劉國傑陳巖並左丞洪茶丘右軍牽諸軍伐日本已上カヤウニ攻伐スレトモ少モ勝利アラサレハ至元二十三年ニ至テ日本ヲ伐コトヲ永キ制止ト成サレタリ民ノ困ニコソ成テ所詮ハ無ヒトソ

一太元國ノ老皇帝　前ニモ云ヘルカ如ク至元十六年ノ比カ六十四歲ニアタリタルホトニ弘安ノ末マテハ五六年モ過ルソ然レハ七十歲許ニテモアラウソ

一乾闥婆城　大智度論六云日初出時見城門樓櫓宮殿行人出入日轉高轉滅此城但可眼見而無有實是名揵

闍婆城已上　是ハ皆蜃氣ノワサナリト論ノ注ニモ見タリ

一二十二社　伊勢　石清水　賀茂上下　松尾　平野　稻荷　春日　大原野　大神　石上　大和　廣瀨　龍田　住吉　日吉　梅宮　吉田　廣田　祇園　北野　丹生　貴布禰

一櫟社　莊子人間世曰匠石之齊至乎曲轅見櫟社樹疏云櫟木名也社土神也祀封土曰社々吐也言能吐生萬物故謂之社已上

一神名帳ニ載ル所　三千一百三十二神トアリ今ノ説ハ不審ナリ

一道祖神　五經要義曰祖道行祭爲道路祈也師古曰黃帝子名纍祖好遠遊而死於道故後人以爲行神出行者祭之因饗飲焉

一呂洞賓　是ハ多不審アリサレトモ又本據モコソ有ラメ知ラス

一仲哀天皇　タヽノ御名ハ足仲彥ト申ス日本武尊ノ第二ノ御子ナリ成務帝ニ御子ナキ故ニ立テ皇太子トセリ此天皇御形相世ニ勝テキラ〱シク御長一丈マシ〱ケリ熊襲ノ反亂ヲ征伐シ玉ヘトモ成ラスシテ歸リ橿日ノ行宮ニシテ隱レ玉フ河内國長野陵ニ葬ニキ越前ノ氣比明神是也

一神功皇后　息長宿禰ノ女開化天皇四世ノ御孫ナリ名ヲハ息長足姫尊ト申ス仲哀立テ皇后トス治天下六十九年ニシテ崩シ玉ヘリ時年一百歲ナリ香椎大明神是也ト右ニ云カコトク又仲哀ト云說モアリ

一渭水ノ土橋　漢書列傳第十ニモ下邳圯上トアリ圯トハ土橋ヲ云トアリ下邳ヲ渭水トハ云ワス大ニ違シタソ

一安曇　アツミトヨム也ツノ字ハ濁ルソ纂疏云阿曇連者姓氏之名今此姓之人爲神之祭主矣

一白和幣青和幣　青和幣ハ青幣也白和幣ハ白幣也青白ハ春秋ニカタトル故ニ神ヲ祭ルニハ春秋ヲ用ルナリ幣ヲニキテト云ハ右ノ手ヲ以祭ルニキテト云是ナリ右語拾遺曰令長白羽神種麻以爲青和幣令天日鷲神以木綿津咋見神穀木種殖之作白和幣是木綿也已上二物一夜審茂矣如是則青和幣造以麻葉也白和幣造以穀謂木綿也青白則葉與木綿之色又象於春秋也故祭神必用春秋也

一梅之枝　櫻人　石河　葦垣　眞金吹已上呂歌ナリ

夏引　貫河　飛鳥井　差櫛　差ノ字我ハ刺ニ作ル
淺水橋已上律ノ歌ナリ

一高良明神　カハラノ神　玉垂命ト申ス也天武二年二月八日高良詫宣ニ曰譽田天皇御宇爲晨昏武略之健將　一説ニ高良ハ武內神也ト公卿補任曰武內神大臣孝元天皇五世ノ孫也在官二百四十四年春秋二百九十五年但薨時幷日時人不知之云々又云仁德天皇五十五年丁卯薨ス但年未詳也

一吳服部我朝ニ來　應神三十七年ニ來ルト日本紀ニ見ヘタリ

一姑耶山　耶ノ字ハ誤ナリ邈姑射ノ事ナリ莊子云往見四子藐姑射之山汾水之陽疏曰汾水出自大原西入于河水北曰陽則今晉州平陽縣在汾水北昔堯都也惣シテ姑射山或ハ汾水汶陽又ハ茨山紫府ハ皆大上天皇ノ御事也

一大覺寺法皇　後宇多院ノ事也德治二年七月廿六日出家ナリテ法號ヲハ金剛性トソ申ケル

一六大無礙　我身ノ地水火風空識ノ六大力無礙自在ノ姿ト成ルコトハ靄氣雲晴テ清光ノ月ノ出カ如ク也ト

一顯瑜加上乘　瑜伽ト云コトハ前ニ注ス上乘トハ密敎ヲ稱歎シテ云タリ

一赤肉中臺　迷倒ノ我等衆生ノ赤肉中ニ其マヽ覺性ノアル所ヲ云ソ禪家ニ赤肉團上有一無位眞人ト云フモ同意ソ

一慈尊ノ出世　大師ノ入定モ肉身ヲ改メスシテ彌勒佛ニ値ハントノ義也ト今ハ又此靈場ニ來レハサナカラ慈尊ニ値ヘルカ如シ

一不輕菩薩　法華經第七卷不輕品ニ委ク見タリ爰ニアルカ如ク枝木瓦石ヲ用テ打擲スル者マテヲ禮拜恭敬シ玉ヘハ諸人カ異名ヲ作テ不輕菩薩トハ云ヘリ

一聰明文思ノ四德　堯典云昔在帝堯聰明文思光宅天下已上　是ヲ堯ノ四德トハ云ナリ

一三隅ノ高察　論語述而篇云擧一隅示之不以三隅反則吾不復也云々譬ヘハ東ノ方ヲ云ヘハ三方ノ事ヲ思ヒ知ヲ三隅ノ察トハ云ナリ

一腥羶ノ血　ナマクサシト讀

一戰圖ニ入ル山中　已亥歲詩ニ澤國江山入戰圖生民何計樂樵蘇ト云異本ニハ澤ノ字ヲ南ノ字ニ作レリ

然レハコヽヘノ取合セニハ一段面白ソ

一七月七日　貞治三年甲辰ノ歳ソ

一虞祔ノ祭　釋名云既葬還祭於殯宮曰虞謂虞樂安神使還此也云云 神靈ヲ招キ還シ吾處ニ安置セシメントノ故ニ祭ルヲ虞ノ祭ト云ソ又葬而反祭曰虞トモアリ又釋名曰祭曰祔祭於祖廟以後死孫祔於祖也云云祔ハ付ノ字ニ通スルソ先祖ノ廟ヲ祭ルトキニ以後死ノ孫ノ者ヲ付傍シテ祭ルヲ云ソ韻會云說文後死者合食於先祖从示付聲又合葬曰祔

一挽歌　崔豹古今注曰薤露蒿里並喪歌出田橫門人橫自殺門人傷之爲之悲歌言人命如薤上之露易晞滅亦謂人死魂精歸乎蒿里故有二章其一曰薤上朝露何易晞露晞明朝更復落人死一去何時歸其二章曰蒿里誰家地聚斂魂魄無賢愚鬼伯一何相催促人命不得少踟蹰李至延年乃分二章爲二曲薤露送王公貴人蒿里送士大夫庶人使挽柩者歌之世亦呼爲挽歌也云云 田橫ハ蜀ノ人也齊ノ王ニ成タル人ノ後胤ナリ故ニ秦ノ末ニ自立シテ又齊ノ王トナラレタリ漢ノ高祖ノ臣ニ灌嬰ト云大將カ軍兵ヲ卒シテ取カケテ齊ノ軍ヲ敗テ遂ニ其國ヲ平ラケタリ田橫ハ一族ヲ引連テ海島ノ中ヘ移居タルヲ高祖ヨリ種々ノ謀言ヲ用テ召寄セラレタリ田橫ハ力及スシテ出ル時キ日比別シテ懇志ナル客人ヲ二人同道シテ出テ洛陽マテ來テ漢ノ使者ニ告テ云ク貴方モ能聞候ヘ某モ始ハ漢ノ高祖ト同位ノ者ニシテ倶ニ南面シ王ト云ハレタソ然ルニ高祖ハ今天子ト成リ吾ハカヤウニ亡虜ノ身トナレリ時ノ榮衰トハ云ナカラ其愧イツレノ時カスヽカンサル程ニ參テ御目ニカヽルニハ及ハヌト云テ遂ニ自殺シテ首ヲ刎テ同道シタル客二人ニ首ヲモタセテ漢王ニ奏シ奉ラシム高祖コレヲ見涙ヲ流シ非傷シ玉ヘリ王ノ禮法ヲ執リ行テ葬ヲシ玉ヘリ又首ヲ持テ往ケル二人ノ者ヲハ都尉ノ宮ニナシテ置レタソ彼二人ノ者田橫ノ葬禮ヲスマシテ後ニ家ノ傍ヲホリテ其マヽ自ラ首刎テ死シテ冢ノクツレタル穴ニ入レタソ又海島ニ殘タル者五百人アマリ有ケルモ田橫カ自殺セラレタルト聞テ一人モ殘ラス腹切テ死シタソ田橫ニ從テ伴ニ來タ者共ハ哭モセス哀ニタエカネテ悲歌ヲ作テ愁歎ノ深キヲアラハシケルヲ薤露蒿里ノ歌トハ云ナリ

一八苦　生老病死ノ四苦ニ又四苦ヲ加ルソ一ニハ愛

別離苦夫婦ノ恩愛ソノ外親子兄弟等ノ別ノクルシミヲ云フ二ニ怨憎會苦我意ニモ入サル者ノニ會テ嗔恚忿ヲ作スヲ云三ニハ求不得苦意ニ願ヒ求ルコトノ叶ハヌヲ云四ニ五盛陰苦我カ一身ノ中ニモ思マヽニ成ラヌヲ云ナリ

一菩提ニソ資シ奉ル　資福亡者ト梵網經ニ說レテ吊フコトヲ資福ト云フ故ニ資ノ字ヲ音ニヨムヘキ也

一十種供養　法華經ヨリ出タリ一華二香三瓔珞四抹香五塗香六燒香七幡蓋八衣服九妓樂十合掌也

一大樹緊那羅ノ琴　大樹緊那羅王經云爾時大樹緊那羅王以己所彈瑠璃之琴在如來前善自調琴及餘八萬四千伎樂其音普皆聞此三千大千世界是琴音聲及妙歌聲隱蔽欲界諸天音樂云云此琴ノ聲ヲ聞テ長老丈迦葉ハ立テ𠌃儛セラレタルコトヲ說レタリ

一千歲給使　法華經ノ提婆品ニ說玉ヘリ過去ノ大王法華經ヲ求メ給フ故ニ身命ヲモ財寶モ國位ヲ太子ニ讓テ誰ナリトモ妙法ヲ敎示サン者ノニ隨從給使セント仰ラレテ鐘ヲ推テ此由ヲ天下ヘ宣令シ玉フ時ニ無比仙人ト云者ノ出來リ某コソ法華經ヲ存テ侯ヘト申上ケレハ大王則千歲ノ間菓ヲ採リ薪ヲ拾水ヲ汲テ仕ヘ玉ヘリ

一淨藏淨眼　法華經ノ妙莊嚴王品ニアリ過去ニ光明莊嚴國ノ王ヲ妙莊嚴ト云邪見熾盛ニシテ佛法ヲ知ラヌ淨藏淨眼ノ二子ハ佛ノ所ニシテ弟子ト成リ覺ヲ得又神力モアリケレハ諸ノ奇特ヲ現シテ父ノ王ニ見セタテマツリ心ヲ轉シテ佛所ニ詣リ法華ノ悟ヲ開カシメ玉ヘリ父王モ大ニ悅此二子ハ我善知識也ト宣玉ヘリ

太平記鈔第四十卷

一後白河法皇ノ御遠忌　法皇ハ建久三年三月十三日崩御ナリ貞治六年マテハ百七十六年ニアタレリ

一治レル代ノ音ハ安　禮記第十一卷樂記云治世之音安以樂其政和亂世之音怨以怒其政乖云々毛詩序モコレニ同シ

一此殿鳥ノ破席田鳥ノ急　呂歌ノ樂ナリ破トハ序破急ノ破ソ

一萬歳樂　平調ノ樂也

一伊勢海　催馬樂ノ律ノ歌ノ内ナリ

一三臺急　三臺鹽ト云モアリ庶人三臺ト云モアリ

一玉笙ノ聲中ニハ鳳鳥來儀　列仙傳上云王子晉好吹笙作鳳凰鳴遊伊洛間道士浮丘公接之之(衍カ)上嵩山也巳上尚書二云鳳凰來儀云々舜ノ樂ヲ九奏シタレハ鳳凰モ來儀シタリ此靈鳥サヘカクノ如ナレハ餘ノ鳥獸ハ九タヒ奏スルニ及ハスシテ牽儛コトハ知ラレタソ

一招提　三千威儀經上卷音義云譯云四方也招此云四提此云方謂四方僧也巳上　四方ノ僧ノ集リ居ル所ソ

一荼毗　或ハ闍維ト云共ニ天竺ノ語ナリ此ニハ焚燒ト云フ火葬スルコトソ

一四德ノ樂邦　常寂光土ヲ云ナリ天台法華疏九云常即常德寂即樂德光即淨我ト云ヘリ常樂我淨ノ四德ヲ具タル淨土ヲ常寂光トハ云ナリ又我等カ一心一念ノ上ニモ此四德ヲ備タレハ寂光モヨソニハナシト談スルナリ是ヲ故於自心常寂光中遍見十方一切身土ト釋スル也

一玄圃　東方朔十洲記曰崑崙山有三角一角正西北名玄圃臺淮南子ニハ懸圃在崑崙閶闔之中トアリ懸ト玄ト古字通スト文選ニ注セリ

一左馬頭基氏　尊氏第三子義詮ノ御弟ナリ從三位瑞泉寺ト號ス

一幼稚若君　義詮第一息義滿ノコトナリ母ハ家ノ女房紀良子ナリ通淸法印ノ女也應安元年ニ征夷大將軍ニ任ス應永二年六月二十日出家時年三十八歲法名道有改云道義也戒師ハ絕海國師也同十五年五月六日ニ薨ス北山亭ニ葬ル時年五十一歲同九日被奉贈大上天皇尊號但自本家被固辭云云

太平記鈔音義

第一卷並序

一蒙　モウ
一南巣　ナンサウ
一紂　チウ
一趙高　テウカウ
一鳳翔　ホウシヤウ
一鯢波　ケイハ　トキノ
コヱ
一八荒　ハツクワウ
一儲王　チヨワウ
一警衛　ケイヱイ
一襲來　シウライ
一宸襟　シンキン
一前烈　センレツ
一李斯　リシ
一碩才　セキサイ
一甸服　テンフク

一桀　ケツ
一殷　イン
一牧　ホク
一祿山　ロクサン
一狼煙　ラウエン
一措　ヲク
一濫觴　ランシヤウ
一旌旗　セイキ
一拜趨　ハイスウ
一探題　タンタイ
一朝陽　テウヤウ
一革　アラタム
一懿公　イコウ
一眉顰　マユヲヒソム
一壟斷　ロウタン
一孚　ヒヨウ

一黎民　レイミン
一虞芮　クセイ
一遺　ワスル
一冊　カシツク
一西施　セイシ
一皎々　誤ナリ耿々カウ
カウ
一公廉　キンカト
一九嬪　キウヒン
一殊艶　シユエン
一輦　レン
一后妃　コウヒ
一尊良　ソンリヤウ
一富緒川　トミノヲカハ
一瑜伽　ユカ
一荊溪　ケイ〱所
一玉泉　キヨクセン
一竹苑　チクエン
一記別　キヘツ
一祚　ソ　位也

一鰈　カレイ
一亞聖　アセイ
一徽弘殿　コウキテン
一毛嬙　ホウシヤウ
一絳樹青琴　カウシユセ
イキン
一蕭々　シヨウ〱
一粉黛　フンタイ
一樂府　カクフ
一尤態　ユウタイ
一關雎　クワンシヨ
一螽斯　シユウシ　イナ
コノ事
一御子在　ミコヒタリ
一總角　ソウカク
一春宮　トウクウ
一三諦即是　サンタイソ
クセ
一金闕　キンケツ
一烏芻沙摩　ウスサニ

太平記音義

全

一孔雀經　クシヤクキヤウ
一職事　シキシ
一眤　ムツフ
一眄形　ミメカカチ
一昌黎　シヤウレイ
一猶子　ユウシ
一造化　サウクワ
一嬋娟　センケン
一預　アラカジメ
一等閑　ナヲサリ
一雜掌　サツシヤウ
一雲霞　ウンカ
一宿直　トノイ
一匿地　クケチ
一颯　サツ
一傍　ソハ
一帶出　ヲイキイタス
一闕　キト
一縮　シムル

一綿纖　ニシコリ
一掖殿　エキテン
一足助　アスケ
一欵狀　クワンシヤウ
一伊達　タテ　上濁
一旨酒　シシユ
一傑出　ケツシユツ
一逍遙　セウヨウ
一區々　クヽ
一勃然　ホツセン
一餘波　ナコリ
一無端　アチキナシ
一篝　カヽリ
一土岐　トキ
一齁鼾　ヰヒキ
一築地　ツイチ
一撫揚　ナテアケ
一天井　テンシヤウ
一屹　キツ
一周障　アハテ

一胡籙　エヒラ
一狹間　サマ
一鉢付　ハチツケ
一櫓　ヤクラ
一呀　クワエテ
一大理　タイリ
一尋常　ヨノツネ
一烏鵲　ウシヤク
一乞巧奠　キツカウテン
一囚　トラハレ
一告文　カウモン
一眩䁕　メクルメキ
一塗炭　トタン
一一等　イツトウ
一綺　イロイ

一磨々　スリ〳〵
一繁藤　シケトウ
一衣摺　キヌスリ
一冑　カフト
一鋒　キツサキ
一這　ハウ
一嗷問　カウモン
一牽牛織女　ケンキウシヨクシヨ
一願絲　ケンシ
一伶倫　レイリン
一楚忽　ソコツ
一秋田　アイタ
一澆季　ケウキ
一宥　ナタムル

第二巻

一甍　イラカ
一日來　ヒコロ
一法勝寺　ホツセウシ

一遏雲　アツウン
一斯　カヽル
一雜賀　サイカ

一寂漠　セキハク
一臆病　ヲクビヤウ
一轟　ト丶ロ
一嘶　イハウ
一舁止　カキト丶ム
一居長高　ヰタケタカ
一境節　オリフシ
一行纏　ハ丶キ
一今右　イマハコウ
一檣　ホバシラ
一翟　テキ
一若々　ホノ〲
一笠置　カサキ
一岸破　カツハ
一鐵漿　カネ
一轡　クツハミ
一逼々　ツマリ〲
一格勤　カクコ
一擒　トリコ
一比叡辻　ヘイツシ

一牛頭馬頭　ゴツメツ
一宿命通　シユクミヤウツウ
一晩鐘　イリアヒ
一餉　カレイ
一寇讎　カウシウ
一阿　ヲモネル
一蹈皮　タヒ
一烈　ハケシク
一松明　タイマツ
一糚坂　ケハイサカ
一髕　ヒン
一貳　フタコ丶ロ
一扣　ヒカユル
一摑　ツカム
一畔　クロ　又　アセ
一堅者　リツシヤ
一堀峪　ホリカケ
一挑　イトム
一諱　イミナ

一赤山　セキサン
一頃刻　シハラク
一巔　タウケ
一直下　ミヲロス

第三巻

一蔓　ハヒコル
一長濤　ナカサハ　ナカサウ
一譴　セメ
一岨　ソワ
一攀折　ツ丶ラオリ
一篦深　ノフカ
一金磁頭　カナシントウ
一偏衫　ヘンサン
一大佛　タイフツ
一江馬　エマ
一那波　ナハ
一寒河　サンカウ
一小見山　コミヤマ

一仰木　アフキ
一左藤　サタウ　ハタ
一咫尺　シセキ
一陶山　スヤマ
一諸兄公　モロヘコウ
一正成　マサシケ
一鬨　トキノコヘ
一矢間　サマ
一足助　アスケ
一眞向　マツカウ
一人額　ヒトナタレ
一結城　ユウキ
一印具　イク
一葛西　カサイ
一蒲原　カンハラ
一貳　キタナシ
一刷　カイツクロウ

一深須　ミス
一有王山　アリワヤマ
一要　サヘキル　ヨコキル
一弛　ハツス
一楢原　ナラハラ
一最安　イトヤスシ
一天返　テヘン
一混　ヒタスラ
一窈溟　ヨウメイ
一厩　ムマヤ
一筈　ハツ
一族　ヤシリ
一翔　カケリ
一醜　ミニクシ
一斗藪　トソウ

一拜趨　ハイスウ
一一揉　ヒトモミ
一咄　トツ　濁
一爲體　テイタラク
一靉　タナヒク
一吐田　ハンタ
一拵　コシラユル
一漬　ヒタル
一櫓　ヤクラ
一綿嚙　ワタカミ
一氈城　センセイ
一眞直中　マツタヽナカ
一痕　アト
一灰燼　クワイシン
一御嵩　ミタケ
一言主　ヒトコトヌシ

第四巻

一浩　カヽル
一襲來　シウヲイ

一探使　タンシ
一楚忽　ソコツ

一白地　アカラサマ
一難易　ナンイ
一桑門　ヨステヒト
一玲瓏　レイロウ
一津守　ツモリ
一石灰　セキクワイ
一嚴　キヒシシ
一航海　ウミニフナワタリス
一緊要　キンヨウ
一拜揖　ハイユウ
一跉跰　サマヨウ
一長襟　ナカキオモイ
一晨明　アリアケ
一輾　キシル
一朧月夜　ヲホロツキヨ
一艤　フナヨソイ
一直違　スチカイ
一讎　カタキ　アタ
一范蠡　ハンレイ

一灔澦　エンヨ
一臨　シヒヽシ
一立部　リウフ
一百回　モヽタヒ
一畑　ハタ
一俊明極　シユンミンキ
一棧山　ヤマニカケハシ
一得々　トク〳〵
一恁麼　インモ
一行啓　キヤウケイ
一想像　オモヒヤル
一強顔　ツレナシ
一介錯　カイシヤク
一印南野　イナノ
一久米　クメ
一大山　タイセン
一並　アハスル
一句踐　コウセン
一渠儂　カレ
一侮　アナトル

一磬　ヒカユル
一控　ヒク
一夫椒　フセウ
一餡與　セキヨ
一北　ニクル
一大夫種　タイフシヨウ
一殿　ヲクルル
一太宰嚭　タイサイヒ
一轅門　エンモン
一簣　アシカ　他本ニ簀ニ作ル非ナリ簀ハスノコ也
一雪　キヨムル
一巫覡　フカン
一屡身　屡ノ字ハ非ナリ窶ノ字ニ作ルヘシミヲヤッス
一奇　アヤシム
一化　アタ　タヲハニコル
一阿　ヲモネル
一行宮　アンキユ
一褒姒　ホウシ
一妲己　タツキ
一湲々　シヤウ〳〵
一南殿　ナテン或ハナンテン
一噤　ツクム
一酷　ハナハタ
一千態　チヽノカタチ
一戮力　チカラヲアハス
一纜　トモツナ
一三尾　三才

第五卷

一公衡　キンヒラ
一娘　ムスメ

一御禊　コケイ　ヲンハライ
一宥　ナタムル
一霽　ヒサク　ウル
一道　イフ
一油錠　アフラツキ
一垢　ハチ
一鼠狼　イタチ
一承塵　ナケシ
一直垂　ヒタヽレ
一玄獺　イタチ
一鵄　トヒ
一觜　クチハシ
一掻消　カキケス
一媚者　ハケモノ
一妖靈星　ヨウレイセイ
一睨　ニラム
一榎島　エノシマ
一擧動　フルマイ
一隱形　ヲンキヤウ
一尤　トカムル
一櫃　ヒツ
一捜　サカス
一分段同居　フンタントウコ
一奉幣　ホウヘイ
一目睡　マトロミ
一許　トコロ
一物怪　モノノケ
一笈　ヲイ
一尾籠　ヒロウ
一蹲踞　ソンコ
一褊　サミス
一無端　ハシタナク
一玉置　タマキ
一躁　サハカシ
一薙　ナク
一行追　ユキツマル
一峠　タウケ
一儼　ヲコソカナリ

一雌羽　メントリハ
一槇野　マキノ

第六巻

一母堂　ホタウ
一蓬生　ヨモキウ
一假冊　イツキカシツク
一悉地　シツチ
一澆季　ケウキ
一眞似　マネ
一風聞　ツタヘキク
一切所　セツシヨ
一同士軍　ドシイクサ
一周章　アハツル
一杜松　ハシラモト
一渡部　ワタナヘ
一人交　ヒトマセ
一驪　アカル
一帶出　ヲヒキイタス
一僻　クセ
一隅田　スタ
一今般　コノタヒ
一蒸　ムス
一御内外樣　ミウチトサマ
一進退谷　シンタイキワマリ
一志城津　シキツ
一生駒　イコマ
一退壞　カシヤウ
一紀淸　キセイ
一宿禰　シユクネ或ハスクネ
一反覆　ハンフク
一啓白　ケイヒヤク
一濶如　クワツシヨ
一鑰　ヤク　カキ也
一令旨　リヤウシ
一澁谷　シフヤ

一大佛　ヲホサラキ但タイフツトヨム
一厚東　コウトウ
一千田　チタ
一小栗栖　ヲクルス
一安保　アフ
一華堂　カウトウ
一淡河　アイカソ
一鐘樓　シユウロウ
一太秦　ウツマサ
一纐纈　カウケ
一河崎　カハサキ
一腨當　スネアテ
一厚總　アツフサ
一一部　イチノヘ
一下濃　スソコ
一人見　ヒトミ
一帶　ハク
一弘誓　クセイ
一欵冬　ヤマフキ
一要須　ヨウシユ
一睨　ニラム
一卓散　タクサン
一覆　ウツフシ
一水彈　ミツハチキ
一去來　イサヤ

第七巻

一菜摘川　ナツミカワ
一不屑　モノヽカストモセス
一並居　ナミヰ
一槃噲　ハンクワイ
一才鋌　クワセン　ホコ也
一九原　キウケン
一天河　テンノカワ
一旌旗　セイキ　ハタ

一千劔破　チハヤ
一坤軸　コンチク
一口遊　クチスサミ
一雙六　スコロク
一賽目　サイノメ
一擘　ヒコツル　ツンサク
一石生　イソナリ

第八卷

一飽間　アクマ
一武庫河　ムコカワ
一殿　ヲクルヽ
一金持　カナチ
一肥脹　コエフクルル
一同車　トウシヤ　下ヲ濁
一訛　ヤサシシ
一河島　カウシマ

一峙　ソハタツ
一尋常　ヨノツネ
一藁　ワラ
一愁　ナマシイ
一班足王　ハンソクワウ
一得能　トクノウ
一土居　トキ
一千波湊　チフリノミナト
一上月　カウツキ
一冬々知　クヽチ
一右往在往　ウワウサワウ
一手反　テヘン
一鹽小路　シヨウノコウチ
一澪　セヽラキ
一物集女　モスメ

一向日明神　ムコウノ明神
一辟易　ヘキエキ
一仰　ノル
一衣笠　キヌカサ
一有元　アリモト
一殖月　ウエツキ
一形勢　アリサマ
一齒嚼　ハカミ
一高德　タカノリ

第九卷

一貳　フタコヽロ
一結城　ユウキ
一華曇子　クワトンス
一濃紅　コイクレナイ
一逞　タクマシ
一潜　クヽリ
一中吉　ナカキリ
一轟　トヽロ

一善峯　ヨシミネ
一膩　ヨコルヽ
一法勝寺　ホツセウシ
一得平　トクヒラ
一龍頭　タツカシラ
一福光　フクミツ
一逸足　イチアシ
一勢汰　セイソロヘ
一篠村　シノムラ
一家督　カトク
一混　ヒタスラ
一笠符　カサシルシ
一筈　ハツ
一畔　ロク
一眞甲　マツカウ
一大江山　ヲイノヤマ
一嗚呼　ヲコ

一迎　ハツル、
一波々伯部　ハウカヘ
一餘田　ヨタ
一元老智化　ケンラウチクワ
一御生所　ミアレ
一燎　ニハヒ
一賽　カヘリマウシ
一奠　マツリ
一菲　ウスシ
一瑞籬　スイリ　ミツカキ
一設樂　シタラ
一總角　アケマキ
一傍折敷　ソハヲシキ
一安郡　ヤスノコホリ
一別所　ヘツシヨ
一惘然　ホレ〳〵アキル、
一流石　サスカ

一位田　インテン　クライタ
一侍兒　ヲモトヒト
一贄　ニヱ
一燒荒　タキスサミ
一叢祠　ホコラヤシロ
一聿　ツイニ
一當棘　タウキヨク
一勠力　チカラヲアハス
一函蓋　カンカイ
一櫨匂　ハチニホヒ
一直義　タヽヨシ
一母衣　ホロ
一利仁　トシヒト
一膕　ツカム
一琵琶甲　ヒワノコウ
一妻鹿　メカ
一日來　ヒコロ
一忼慨　カウカイ
一經起　キヤウテウ

一篠原　シノハラ
一寺主　テラシ
一袙　アコメカサネ
一蘇　クサカリ
一老曾　ヲイソ
一摺針　スリハリ
一谷　キワマル
一爽　サハヤカ
一突立　ツキタツ
一石見　イワミ
一寄藤　ヨリフチ
一小屋木　コヤキ
一岩切　イハキリ
一窪　クホ
一御器所　コキソ
一西郡　ニシコリ
一弘田　ヒロタ
一瀟王野　ミヲノヤ
一鹽谷　シタニ
一近部　チカヘ

一蹴垂　ケタレ
一樵　キコリ
一日夏　ヒナツ
一愛智河　エチカワ
一吉良　キラ
一彳　タヽスム
一柄口　ツカクチ
一中布利　ナカフリ
一下篠　ケテウ
一皆吉　ミナキリ
一鹽屋　シホヤ
一壹岐　イキ
一原宗　ハラムネ
一怒借屋　ヌカリヤ
一海老名　エヒナ
一覺井　サメヰ
一眞上　マカヘ
一眞壁　マカヘ
一新野　シンヤ
一愛多義　アタキ

一佐海　サウミ
一肝心　キモコヽロ
一軹道　シタウ
一不審　イフカシ

第十巻

一藩塀　ハンヘイ藩ハ垣ナリ
一動　ヤヽモスレハ
一沼田　ヌマタ　上野
一生品　イクシナ
一宗氏　家氏ノ子
一岩松　足利流也
一桃井　モヽノヰ足利種族也
一鞍壺　クラツホ
一田中　義俊ノ子始テ名ク
一瘡痏　サウイ
一入間河　イルマカワ
一小手差原　コテサシハラ
一津張郡　ツハリ郡ニテハナシ
一笠懸野　カサカケノ
一貞満　貞義ノ子
一里見　サトミ義俊始テ名トス
一大井田　義俊ノ孫ヲ始メテ名ク
一紀五　キコ
一色代　シキタイ
一縨　ホロ
一下河邊　シモカウヘ
一照耀　テリカヽヤク
一久米　クメ

一黄石公カ虎ヲ縛スル手ト云事ヲ注セサル故ニ今コレヲ云フ魏志云呂布傳縛虎不得不急云云　今ハ戰ノ急ナル事ヲ云乎
一新開　下ハニコル
一大多和　ホウト
一澁谷　シフヤ
一一業　イチコウ
一輪違　ワチカイ
一潤色　シユンシヨク
一漁陽　キヨヤウ
一戎翟　シユウテキ
一城　シヤウ　名字也
一魚鱗　キヨリン
一剛臆　カウヲク
一惟幕　イハク
一打莅　ウチノソミ
一稻村崎　イナムラカサキ
一濃紅　コイクレナイ
一栗生　クリウ
一安保　アフ　下ヲ濁
一如激　ケキスルカ如
一一當　ヒトアテ
一豐島　トシマ
一譜代　フタイ
一十間坂　シツケサカ
一鼙鼓　ヘイク或ヒク
一掠　カスムル
一防場　フセキハ
一鶴翼　クワクヨク
一猛率　ミヤウソツ
一可奪師　スイヲウハウヘシ
一斧鉞　フエツ
一貳師　ニシ　人名
一干潟　ヒカタ
一篠塚　シノツカ　人

一畑　ハタ　人
一難唾　カタツ
一葛西　カサイ
一虎韜　コタウ
一揉　モム
一直似　マネ
一逸足　イチアシ
一探題　タンタイ
一嗜　タシナミ
一曲录　キヨクロク
一鐔　ツハ
一大厦高墻　タイカカウシャウ
一諏方　スワ
一イラヽチ　利鬼トカク
一御妻　ヲサイ　女
一祝　ハウリ
一[illegible]　アヲタ
一矢長　ヤタケ
一吹毛　スイモウ

一身繕　ミツクロイ
一風烈　カセハケシク
一墳墓　フンホ
一追靡　ヲイナヒケ
一來太郎　ライタラウ
一粒子　リウコ
一蓬　キタナシ
一御敎書　ミケウシヨ
一鹽飽　シワク
一叉手　シヤシユ
一俯樣　ウツフシサマ
一惘然　ハウセン
一公孫無知　コウソンンフチ
一口說　クトク
一羿負　カイヲウ
一步跳　カチハタシ
一劫略　コウリヤク
一谷々　ヤツ〳〵
一恁麼　インモ

一纐　ツカム
一葛原親王ニ三代ノ孫平將軍貞盛　三代ト云ハ誤ナリ五ト云ヘシ
一飛礫　ツフテ
一胴切　トウキリ
一江馬　エマ
一佐介　サスケ　名字

第十一卷

一賺　スカス
一淋　ソヽク
一邦時　クニトキ
一御內外樣　ミウチトサマ
一足信　アシニマカセ
一閣　サシヲク
一豫讓　ヨシヤウ
一船上　フナノウヘ
一師卦　シノケ
一王弼　ワウヒツ

一糢糊　モコ
一立破　タテハリ
一秋田城介　アイタノシヤウノスケ
一刈田　カツタ
一生甲斐　イキカヒ
一搜出　サカシイタス
一假初　カリソメ
一草鞋　クサクツ
一編笠　アミカサ
一吹擧　スイキヨ
一程嬰　テイエイ
一爪彈　ツマハチキ
一蓍笠　シセイ　メトノ事
一後乘　コウシヨウ　伴

一壚治　エンヤ
ノ事
一朝山　アサヤマ
一引殿　ヒキヲクレ
一禿　チヒル
一屣　ケキ　アシタ
一長時　チヤウシ　倶ニ
一護法　コホウ
濁
一倶胝　クテイ　數ノ名
一吼首羯磨　ヒシユカツ
マ
一凬　ホノカ
一儲餉　チヨシヤウ
一羽書　ウシヨ
一猶豫　ユヨ　疑ノコト
一干戈戚揚　カンクワセ
キヤウ
一輦輅　レンロ
一縲紲　ルイセツ
一議　タハカル
一短褐　タンカツ
一禁錮　キンコ
一記念　カタミ
一信　カタミ
一挺楚　テイソ　フチ
一溝壑　コウカク
一覿面　テキメン
一英時　ヒテトキ
一形勢　フルマイ
一時節　オリフシ
一鏃礪　ヤシリヲトク
一嬌　ハク
一極浦　キヨクホ
一力勦　チカヲヲアハス
一膝行　シツカウ　イサ
ル
一逕津波　ヲキツナミ
一碧潭　ヘキタン
一洞穴　トウケツ

一放生津　ハウシヤウツ
一有公　アリトモ　名ノ
リ
一絳袴　シロキハカマ
一愍　ナマシイ
一渚　ナキサ
一碇　イカリ　船ノ
一術婆伽　シユツハカ

第十一巻

一正慶　シヤウキヤウ
一雷霆　ライテイ
一虎賁　コホン
一拆伏　シヤクフク
一剃髮　タイホツ
一休明　キウメイ
一攝受　シヨウシユ
一忿怒　フンヌ
一賈島　カタウ
一法體　ホツタイ
一殿法印　トノヽホフイ
ン
一介　ヨロイ
一鏁　クサリ
一鞘　サヤ
一白箆　シラノ
一矧　ハク
一征矢　ソヤ
一筈　ハツ
一太逞　フトクタクマシ
一沃懸　イツカケ
一鞦　シリカイ
一混物具　ヒタモノヽク
一打込　ウチコミ
一硫黄島　イソウカシマ
一蟄懐　チツクワイ
一無本所　ナイカシロニ
一輕軒　ケイカン

ス
一諫　ヘツラウ
一求竈　サウニモトム
一納諫言　カンケンヲイル丶
一伎藝　キケイ
一浩　カ丶ル
一嚴重　ケンテウ
一直事　タ丶コト
一法勝寺　ホツセウシ
一摸　モウツス事
一待賢　タイケン
一美福　ヒフク
一交戟　カウケキ
一御匣殿　ミクシゲトノ
一飛香　ヒキヤウ
一襲芳　シウハウ
一鳥曹子　トリノサウシ
一豐樂　フラク
一格勤　カクコ
一媚奥　ワウニコヒ
一掠　カスムル
一郢曲　エイキヨク
一蹴鞠　シウキク
一立錐　リフスイ
一明法　ミヤウホウ
一錯亂　サクラン
一怨靈　ヲンリヤウ
一咸陽宮　カンヤウキウ
一陽明　ヤウメイ
一郁芳　イウハウ
一偉鑒　イカン
一貞觀　チヤウクワン下ハ濁
一弓場　ユハ
一凝花　キヨウクワ
一雷鳴坪　カンナリノツボ
一小安　コア

一神今食　三字倶ニ濁
一競馬　クラヘムマ
一軻　アコカ丶ル　不審
一江相公　カウシヤウコウ
一弘徽　コウキ
一房玄齡　ハウケンレイ
一魏徵　キテウ
一第五倫　タイコリン
一邐伯玉　キヨハクキヨク
一畫圖　クワト
一礎　イシスヱ
一釆椽　サイテン
一手戰　テワナ丶ク
一折桂　ケイヲオル
一袒　ハタヌク
一盍　ナンソ
一李嶠　リケウ
一淸花　セイクワ　公家
一參商　シンシヤウ二ノ
一御修法　ミシヲ
一眞弓　マユミ
一朧月夜　ヲホロツキヨ
一直廬　チヨクロ
一馬周　ハシウ
一杜如晦　トシヨクワイ
一諸葛亮　シヨカツリヤウ
一羊祜　ヤウコ
一傅説　フエツ
一倪寛　ケイクワン
一聳　ソヒユル
一茆茨　ハウシ
一大極殿　タイコクテン
一漱　クチス丶ク
一都良香　トリヤウキヤウ
一簍　クワウ　樂器ニ
一摋蜂　ハチヲトラシム
一蘭橈　ランノサホ

星名

一舩　フナハタ
一無實　ムシ
一淳素　シユンソ
一許容　キヨヨウ
一柘榴　シヤクロ
一瀉水印　シヤスイノイン
一伏轉　フシマロフ
一忠包　タヽカヌ
一宮毗羅　クウヒラ
一蘇　ヨミカヘル
一魯般斧　ロハンカオノ
一偉奕　ヲホヒナルカナ
一嚬眉　マユヲヒソム
一搚　コシラユル
一有忠　權中納言正二位
一厨　クリヤ
一金襴　キンラン
一祉　コソ

一錦纜　下ハトモツナ
一椎櫟　ケイノカチ
一蓬　トマ
一翹　ツマタツル足ニ
一澆漓　ケウリ
一蹴殺　ケコロス
一烘著　モヘツク
一希世　マレヨ
一蔭連　カケツラ
一從父兄弟　イトコ
一粟散　ソクサン
一蝕　ムシクヒ
一驕誇　ヤヨウクワ
一規矩　キク
一日來　ヒコロ
一博奕　ハクエキ
一行騰　ハヽキ
一纐纈　カウケツ　クヽシモノ
一已熟印可　イシユクノ

一韜光　シカリヲツヽミインカ
一擧動　フルマイ
一飈　ヲソロシ
一甲　カフト
一攢　アツムル　シユ
一昇　ケイ
一翔　カケル
一鵺　ヌヱ
一源三位賴政　鎭守府將軍　滿仲第一息左馬權頭賴光々子賴國々子賴綱々子兵庫頭仲政號馬塲其子也右京權大夫從三位備後守任ス母ハ勘解由次官藤原友實女也治承三年六月十五日ニ出家ス法名ハ賴圓ト云フ或ハ眞蓮ト云フト云云
一蚊睫　カノマツケ
一孫廂　マコヒサシ
一鋸　ノコキリ
一妖氣　ヨウキ
一馬鳴　メミヤウ菩薩ノ名
一支提　シタイ　塔ノ事

一絆　キツナ
一斗藪　トソウ
一南瞻部州　ナンセンブ
一王莽　ワウマウ
一疫癘　エキレイ
一蟭螟　シヨウメイ
一仁壽殿　シシユウテン
一長距　ナカキケツメ
一靈囿　レイユウ
一褰帷　トハリキカヽク
一栴檀　天竺ノ王ノ名
一建盞　ケンサン　器

一典主　トノモツカサ
一旱魃　カンハツ
一薩埵　サツタ　菩薩ノ名
一眞綱　マツナ
一掲焉　ケツエン
一荊棘　ケイキヨク
一涼燠　リヤウイク
一不穩　ヲタヤカナラス
一倚頼　イライ
一云足　コヽニタンヌ
一肆　カルカユヘニイマ
一則天　テンニノツトル
一風聞　ホノカニキク
一過　過ノ字ニ同シ
一行藏　カウサウ
一乾臨　ケンリン
一儻　モシ
一驪姫　リキ
一巧言令色　カウケンレイシヨク
一曲沃　キヨクヨク
一斃　タヲル　畜ノ死ヲ
一鴆　チン　毒鳥ナリ
一牝雞　ヒンケイ
一泮　ハヒコル

第十三卷

一離宮　リキウ
一幸　ミユキ
一須彌髮　シユミノカミ
一辻毛　ツチケ
一背筋　セスチ
一花廐　クワキウ
一秣飼　マクサカウ
一牛漢　イサメル貌
一雕梁、テウリヤウ
一屈產　コツサン

一騅　スイ
一驥騊　キタウ
一騮駼　リウロク
一驪驊　リクワ
一鄽縣　テツケン
一駬駟　シシ
一換骨　クワンコツ
一加之　シカノミナラス
一彭祖　ハウソ
一羽化　ウケ
一鑾輿　ランヨ
一壽　コトフキ
一償　ツクノウ
一屬車　シヨクシヤ
一明堂　メイタウ
一造父　サウホ
一尤　ケヤケシ
一的然　テキセン
一虞芮　クセイ二國
一群集　クンシユ
一褊　サミス　蔑ル義
一諫鼓　カンコ
一揵兒所　コンテイトコロ
一雍齒　ヨウシ
一中其巧　ソノコウニアタル
一圖膺　トニアタリ
一爽　サハヤカ
一郵　ユウ、馬ヤトリ
一行脚　アンキヤ
一龍逢　レウハウ
一溫殿　ユトノ
一黄蘗　ワウハク　祖師
一目睡　マトロム
一裏場　アカリハ
一竹林院　中納言公重ト公宗トハ西園寺實衡卿ノ子ニシテ兄弟ナリ

一熊羆 ユウヒ クマシ
丶マク
一上原 シヤウケン
一流泉 リウセン
一擡 モタクル
一傍 ソウ
一生產 ウフヤ
一雛育 ヒナヲハコクム
一寶俊卿 後ニ常磐井右大臣ト號ス從一位
一掩抑 ヱンヨク
一濮水 ホクスイ
一魂魄 コンハク
一廉婕夫 レンセウフ
一法令 ハウレイ
一倉蒲 クラミツ
一淵邊 フチヘ
一挑 カヽクル
一嚙切 クヒキル
一倚傍 ヨリソウ

一周章 アハテ
一攻籠 セメコ
一石上 セキシヤウ
一啄木 タクホク
一鬢髮 ヒンハツ
一弄璋 ロウシヤウ
一孀房 チフサ
一聖廟 セイヘウ 北野天神
一索々 サク〳〵
一通夜 ツヤ
一殺聲 サツセイ
一貞徹 テイヒン
一寰中 クワンチウ
一素懐 ソクワイ
一淸久 キヨヒサ
一刺殺 サシコロス
一居屈 ヰカヽマル
一肝靜 キモヲシスメ
一干將鏌鋣 カンシヤウバクヤ

一嚼 カム
一煎揚 ニエアカリ
一秦舞陽 シンフヤウ
一雷煥 ライクワン
一諱 イミナ
一縮 シヽメル
一矢矯 ヤハキ
一峠 タウケ
一敷地 シキチ
一瓜生 ウリウ

第十四卷

一確執 クワクシツ
一細川阿波守和氏 公頼ノ第一子彌八郎和氏ト云フ康永元年九月二十三日ニ頓死ス年四十七歳也補陀寺ト名ク新後拾並新續古今作者也頼春ノ舍兄也
一致一戰之日 日トキ
一逋 ノカルヽ
一蠹害 トカイ
一徇天下 ハシタカウ
一淬 ニフラス

一淬 ニフラス
一仇 アタ
一齒嘆 ハクイ
一荊軻 ケイカ
一七首 ヒシユ
一弊乗 ツイヘニノツトツテ
一葦名 アシナ
一上木 ウハキ
一深町 フカマチ
一牙砥 キハヲトク
一瞬目 シユンホク
一雞肋 ケイロク
一撥亂 ランヲヲサム
一略地 チヲリヤクス
ハクヤ

一拉敵　テキヲトリヒシク
一虎窺　トラノコトクニウカヽウ
一狼狽　ラウハイ
一浸潤之譖　シンシユンノシン
一蟷螂　タウラウ
一循環　シユンクワン
一侈　ヲコリ
一刼　ヲヒヤカス
一驥尾　キヒ
一勾萠　コウマウ
一獄訟　ウツタヘヲサタム
一桃井　モヽノヰ
一羽川　ハネカワ
一由良　ユラ
一饗庭　アイハ　場ニ作ヘシ

一蜂起　ハチノコトクニオコリ
一革命　メイヲアラタム
一鷸蚌　イツホウ
一渠儂　カレ
一超涯　テウカイ
一悖政　ハイセイ
一贖刑　ツミヲアカナウ
一桐宮　トウキウ
一姧　カタマシヽ
一囹圄　レイキヨ
一噬臍　ホソヲクウ
一孰與　イツレ
一昆吾　コンコ
一金谷　カナヤ
一一井　イチノヰ
一風間　カサマ
一石谷　イシカイ
一仁科　ニシナ
一伊木津志　イキツシ

一猿子　マシコ
一眞壁　マカヘ
一薩埵山　サツタヤマ
一耳語　サヽヤク
一四度路　シトロ
一入矢　コミヤ
一怺　コラユル
一頼遠舎弟道謙　土岐十郎頼兼コソ舎弟ナレ今所云ハ悞ナルヘシ
一赤松雅樂助貞則　則ノ字ハ非ナリ貞範ハ範資ニハ舎弟則祐ニハ兄也
一直下　ミヲロス
一曳聲　エイコヱ
一鴈行　カンコウ
一瘆　ヒルム
一舎人　トネリ
一託間　タクマ
一高徳　タカノリ
一全職　マサモト
一久下　クケ

一纐結　アウケツ
一高　カウ
一譜代　フタイ
一名張　ナハリ
一立直　タテナヲス
一筥根　ハコネ
一薄情　ウタテシ
一照射　トモシ
一難波　ナンハ
一龍糙　リウサウ
一追北　ニクルオウ
一桁　ケタ
一香西　カウサイ
一吉備津　キヒツ
一碓井　ウスキ
一石動山　ユスルキヤマ

一引他 匹田ニ作ルヘシ
一大江山 ヲイノヤマ
一壁書 ヘキシヨ
一潜 クヽル
一槇崎 マキノシマ
一海老名 エヒナ
一長 チヤウ 名字
一石橋 シヤクキヨウ
一飛漬 トヒヒタリ
一駕輿丁 カヨチヤウ
一眦須羯磨 ヒシユカツマ
一玄象 ケンシヨウ
一牧馬 ホクハ
一潼關 トウクワン
一勅使河原 テシカハラ
一要 ヨケル
一翡翠 ヒスイ
一楊梅 ヤマモヽ
一波止土濃 ハシトノ

第十五巻

一三摩耶 サマヤ
一吹訴 カウソ
一敎待 ケウタイ
一舷 フナハタ
一舳 ヘ 船ノ
一艫 トモ
一寢食 シンシヨク
一公請 クシヤウ
一卓犖 タクラク
一夜須麿呂 ヤスマル
一恩恤 ヲンチツ
一八埏 ハチエン
一江師匡房 エノソツキヤウハウ
一賴豪 ライカウ
一秀倉 ホコラ

一儲 ヒツキ
一拉 ヒシク
一聖女 シヤウニヨ
一伊達 タテ
一形勢 アリサマ
一亘理 ワタリ
一信夫 シノフ
一鑓 ヤリ
一烏獲 ヲウクワク
一鳧鐘 フシヨウ
一阿逸多 アイツタ
一尖 スルト
一俵藤太 タハラトウタ
一三伏 ミツフセ
一鐺 コシリ
一手挾 タハサミ
一誘 コシラユル
一百足蚿 ムカテ
一燒松 タイマツ
一躍 ヲトリ
一矢所 ヤツホ
一撞鐘 ツキカネ
一俵 タワラ
一倉廩 サウリン
一産業 サンケウ
一鐘木 シモク
一梵刪 ホンセイ
一臆病 ヲクヒヤウ
一質 テタテ
一輪寶 リンホウ
一無礙 ムケ
一糺森 タヽスノモリ
一勢洮 セイソロヘ
一結城 ユウキ
一三頂 サンツ 馬ノ
一同士打 トシウチ
一眞倒 マツサカサマ
一梅酸渇 ハイサンノカツ
一後矢 ウシロヤ

一下松　サカリマツ
一人傑　シンケツ
一神樂岡　カクラヲカ
一竪者　リツシヤ
一長船　ヲサフネ
一中子　ナカコ
一小間　サマ
一板端　イタノハシ
一搔楯　カイタテ
一兕咀　シユソ
一秀句　シウク
一藪里　ヤフサト
一久我畷　コカナワテ
一芥河　アクタカワ
一湊河　ミナトカハ
一混　ヒタスラ
一旅屯　リヨヲタムロニス
一殿馳　ヲクレハセ
一小清水　コシミツ

一瑕瑾　カキン
一靜原　シツハラ
一龍花越　リウケコヘ
一惡手　アラテ
一蟇目　ヒキメ
一五分鑿　コフノミ
一高因幡　タカイナハ
一角總著　アケマキツケ
一懸金　カケカネ
一度方　トハウ
一虛事　ソラコト
一八瀬　ヤセ
一降松　サカリマツ
一蹈所　フミト
一尾宅　ヲイハケ
一童體　トウタイ
一豐島　テシマ
一神崎　カンサキ
一打出宿　ウチテノシユク

一渚　ナキサ
一除目　チモク
一千束　チツカ
一等閑　ナヲサリ
一改補　カイフ
一聖女　シヤウニヨ

一乘殿　ノリヲクル丶
一袖濡　ソテヲヌラシ
一萱　ワスレクサ
一關守　セキモリ
一丑三　ウシミツ

第十六巻

一飽浦　アクウラ
一轍魚　テツキヨ
一醒蒼　セイサウ
一宗像　ムナカタ
一水木　ミツキ
一指戻　サシモトス
一遣戸　ヤリト
一香椎　カシイ
一才　ワツカ
一臥木　フシキ
一大高　タイカウ
一火威　ヒヲトシ

一多々良濱　タ丶ラハマ
一吻　イキツキ
一薏　アチキナク
一弊屋　ヘイヲク
一時籠　アセクラ
一蓚　シトミ
一下火　アコ
一蚍蜉　ヒフ
一土肥　トイ
一著纏　ツキマトウ
一白石　シライシ或シロイシ

一反　ヒトソリ
一八代　ヤツシロ
一小杵　ヲツキ
一崔乾祐　サイケンユウ
一高山寺　カウセンジ
一頓宮　トンクウ　ハヤミ
一勢山　セヤマ
一多地部　タチヘ
一賀古　カコ、カク
一毋監　モロイコトナシ
一耻雪　ハヂヲスヽク
一樵　キコリ
一射越　イノコシ
一石戸　ヲシコ
一一宮　イツキウ　社
一屹　キツ
一德平　トクヒラ
一嚴島　イツクシマ
一奉幣　ホウヘイ

一遠干潟　トヲヒカタ
一神田　カンタ
一阿蘇　アソ
一哥舒翰　カシヨカン
一波々伯部　ハウカヘ
一奈義能仙　ナキノセ
二所
一新見　ニミ
一室山　ムロヤマ
一斑鳩　イルカ　所
一窈溟　ヨウメイ
一三石　ミツイシ
一阻　ヘタツル
一甥　ヲイ
一範猷　ノリミチ　名ノリ
一佐重　スケシケ
一釜甑　フソウ
一函蓋　カンカイ
一鞆　トモ　所

一赫弈　カクヤク
一聞逖　キヽニケ
一徒立　カチタチ
一此彼　ココカシコ
一觸穢　シヨクエ
一駁返　ハネカヘリ
一百里奚　ハクリケイ
一孟明視　マウメイシ
一唯々　イイ
一憑河　ヒヨウカ
一眺望　テウハウ
一鹿松岡　カシマツノヲカ
一輪違　ワチカイ
一燈爐堂　トウロタウ
一生田森　イクタノモリ
一尾道　ヲノミチ
一射外　イハツス
一鍬形　タワカタ
一紺部　コンヘ　人

一草壁　クサカヘ
一浮矢　アタヤ
一逆木　サカモキ
一虎口　ココウ
一葬禮　サウレイ
一養由　ヤウユウ
一穆公　ホクコウ
一愕々　カク〳〵
一暴虎　ホウコ
一迫戸　セト　海ノ
一取梶面梶　トリカチヲモカチ
一和田御崎　ワタノミサキ
一經島　キヤウノシマ
一楯端　タテノハ
一天維坤軸　テンイコンチク
一鶚　ミサコ
一追樣　オツサマ

一求塚　モトメツカ
一晏然　アンネン
一伊弉諾　イサナキ
一蛭子　ヒルコ
一開闢　カイヒヤク
一伊弉冊　イサナミ
一本下　ホンケ
一神日本磐余彥　カミヤマトイワヤアレヒゴ
一千方　チカタ
一相馬　サウマ
一將門　マサカト
一守屋　モリヤ
一長屋　ナカヤ
一橘逸勝　タチハナノハヤナリ
一江美押勝　ヱミノオシカツ
一早良　サウラ
一小腕　コウテ

一勇　タケシ
一翩翻　ヘンホン
一長生　ヲサタカ　名ノリ
一御裳濯川　ミモスソカワ
一素盞嗚　ソサノヲ
一名草　ナクサ　群
一迹高　シヤツカウ
一血出　チヲアヤシ
一蜘蛛　クモ
一紀朝雄　キノトモオ
一劒戟　ケンケキ
一眞鳥　マトリ
一入鹿　イルカ
一氷上　ヒカミ
一文屋　フンヤ
一井上　ヰカミ
一純友　スミトモ
一帯刀　タテハキ

一禮盤　ライハン

第十七卷

一積習　セキシフ
一音無瀧　ヲトナシノタキ
一童堂　ワラウタウ
一穴生　アナウ
一爽　サハヤカ
一傍折敷　ソハラシキ
一下濃　スソコ
一四目結　ヨツメユイ
一猜　ソネム
一箸塚　ハシツカ
一龍頭　タツカシラ
一横川　ヨカワ
一埋草　ウメクサ
一蓦直　マツシクラ
一撓揸　タメコシラユル
一謡歌　ソヽロウタ

一擁護　ヲウコ
一白鳥　シラトリ
一將門　シヤウモン　所
一水飲　ミスノミ
一油幕　ユハク
一向上　ミアクル
一龜甲　キツコウ
一瓜紋　クワノモン
一大嶽　ヲホタケ
一雲母坂　キラヽサカ
一泰武　ヤスタケ
一巔　イタヽキ
一虎韜　コタウ
一出屏　タシヘイ
一射白　イシラマカス
一綿貫　ワタヌキ　或ハ四月一日ト書クト

ヨ

一妖　ハクル
一飛礫　ツブテ
一朝暖　アサナキ
一海松　ミル
一被　カツク
一髻　モトヽリ
一援兵　タスケノツハモノ
一眤　ムツフ
一飽和　アクワ
一新道　シンタウ
一宅良　タクラ
一翊　フタメク
一泥粘　トロニネラレタル
一嬌　ハケル
一忼山　ホヤマ
一想像　ヲモイヤル
一頻伽　ヒンキヤ
一吹雪　フヽキ

一中　アタル
一櫛川　クシカワ
一和布　ワカメ
一亘理　ワタリ　亘ノ字ヨシ
一四方山　ヨモヤマ
一鱗形　イロコカタ
一兵士　ヒヤウシ
一湯尾　ユノオ　是ハ疱瘡ノ符ヲ出ス所アリ
一蒐合　カケアイ
一葉原　ハハラ
一橇　カンシキ
一豊原　トイハラ
一好堅樹　カウケンシユ
一椀飯　ワウハシ
一蓬　キタナシ
一現　ケニモ
一睨　ニラム

一里見伊賀守　八幡太郎義家ノ孫義重ハ新田一流ノ大祖ナリ此子義俊ヲ大新田ト云ヒ又ハ里見ト號ス此子ヲ伊賀守義成ト云フ
一化　アタ
一杵臼　シヨキウ
一孤　ミナシコ
一礒菜　イソナ
一薹々敷　ハカ〲シキ
一彌武　ヤタケ
一貂錦　テウキン
一已亥　キカイ
一隴西行　ロウセイカウ
一引繕　ヒキツクロウ
一初冠　ウイカフムリ
一打凋　ウチシホルヽ
一撥　ハチ
一似繪　ニセヱ
一現理　ケニコトハリ
一急雨　シクレ

一程嬰　テイヱイ
一趙盾　テウトン
一長　ヒトヽナル
一亂抗　ランクイ
一安間　アマ　名字
一啾々　シユウ〲
一可憐　アハレムヘシ
一陳陶　チンヨウ
一里見大炊助時義　此末ニハ義氏ト云フ何モ非ナリ義房ノ事ナルヘキ歟
一御匣殿　ミクシケトノ
一慮外　ヲモヒノホカ
一臈闌　ラウタケ
一返魂香　ハンコンカウ
一愁殺　シユサツ
一現　ウツヽ
一文悪　アヤニク

一心當　コヽロアテ
一逍遙　セウヨウ
一御秘　ミソキ
一氣高　ケタカク
一調　シラフル
一目文　メモアヤ・ニ
一請　サマ〳〵
一几帳　キチヤウ
一白地　アカラサマ
一亭　テイ
一數寄　スキ
一郢曲　エイキヨク
一濡　シホレ
一邊　アタリ
一閑麗　ミヤヒヤカ
一强顏　ツレナキ
一英房　ヒテフサ
一卌　カレツク
一様　タメレ
一苅藻　カルモ

一御手洗川　ミタラシカ
ワ
一轟　トヽロク
一青海波　セイカイハ
一雜錯　カキミタス
一熟々　ツク〳〵
一浮　ウカレ
一裳裾　モスソ
一御隔子　ミカウシ
一褒貶　ホウヘン
一披講　ヒカウ
一妙々　タヘ〳〵
一幽容　ユウナルカホハ
セ
一衣引被　キヌヒキカツ
キ
一鄭仁基　テイシンキ
一魏徵　キテウ
一楊端書　シチノハシカ
キ

一下紐　シタヒホ
一蓬生　ヨモキウ
一畑　ハタ所
一隨身　スイシン
一葎　モクラ
一冷愁　スサマシク或
ハサヒシ
一尼崎　アマカサキ
一穴無端　アナアチシキ
ナシ
一澳　ヲキ
一手繰　テクリ
一髭男　ヒケヲトコ
一巫三峽　フノサンカウ
一碇　イカリ船ノ
一恞鷹　ホコモ
一千尋　チイロ
一這出　ハイイテヽ
一無垢　ムク
一蓬屋　トマヤ

一御息所　ミヤストコロ
一命長　イノチナカラヘ
一秦武文　ハタノタケフ
ン
一蔦　ツタ
一懶　モノウシ
一天降　アマクタル
一許　トコロ
一仰太刀　ノリタルタチ
一續松　タイマツ
一搔負　カイヲウ
一渺　ハルカ
一肝心　キモタマシイ
一擡　モタクル
一大物　タイモツ
一荒人神　アラヒトカミ
一渦　ウツ波ノ
一水屑　ミクツ
一欲　ホシカル
一陀羅尼　タラニ

一退紅　コキクレナイ　　一巽口同音　イクトウヲ
一突流　ツキナカス　　ン
一黄鷄毛　キトキケ　　一下風　ヲロシ
一早離速離　サウリソク　　一物故　モツコ
リ　　一櫓床　ロトコ　船ノ
一口說　クトク　　一泡　ウタカタ
一椒房　セウハウ　　一壤　ツチクレ
一蠱害　トカイ　　一寡　クワ
一雙六賽　スゴロクノサ　　一徳播　トクヲホトコス
イ　　一南贍部州　ナンセンブ
一伽藍佛　カシヨウフツ　　シウ
一摩竭陀　マカタ　　一盡淨虛融　シンシヤウ
一變易　ヘンヤク　　コユウ
一淨飯　シヤウホン　　一跋提河　ハツタイカ
一無相　ムサウ　　一鵜羽不葺合　ウノハフ
一應化　ヲウケ　　キアハセス
一豐葦原　トヨアシハラ　　一湖　ミツウミ
一樂々名美　サヽナミ　　一紅蓮　コウレン
一桑原　クハハラ　　一諾　ウケコウ
一屈首　ミクシヲクツシ　　一久遠實成　クヲンツシ

一聖眞子　シヤウシンシヤウ
一鸞鏡　ランケイ　　一慚愧　サンキ
一圓宗　エンシユウ　　一影響　ヤウカウ
一涓露　ケンロ　　一回眸　マナシリヲメク
一懺悔　サンゲ　　ラス
一竈殿　カマトノ

第十九巻

一除目　チモク　　一眞八　マウトマツト
一縣守　カタモリ　　一宇合　ノキアヒ
一纖縄　ツクナハ　　一家持　ヤカモチ
一古佐美　コサミ　　一乙丸　ヲトマル
一驕逸　ケウイツ　　一象外　シヤウクワイ
一俗骨　シヨツコツ　　一蓬萊　ホウライ
一攀　ヨツル　　一策　ムチウツ
一蘭撓　ランテウ　　一下風　カフウ
一細呂木　ホソロキ　　一津業　ツコウ
一押領　アウリヤウ　　一三峯　ミツミネ
一伊自良　イレラ　　一上木　ウハキ
一深町　フカマチ　　一鯖江　サハエ

一撓　タヲマス
一眞柄　マカラ
一本筈　モトハス
一織田　ヲタ
一鴆毒　チントク
一終焉　シユエン
一鶺鴒　セキレイ
一轍魚　テツキヨ
一蹐　ヌキアシス
一弛張　シチヤウ
一犂牛　リキウ
一南部　ナンフ
一張落　ミナキリヲツル
一芳賀　ハカ
一志和　シワ
一德山　トコノヤマ
一人間世　シンカンセイ
一赤坂　アカサカ
一自貴　ミキ　所
一毗嵐　ヒラン

一足立　アタチ
一狼煙　ラウエン
一足羽　アシハ
一大虫　ヲウムシ
一涸魚　カクキヨ
一黄疸　ワウタン
一尸鳩　シキウ
一丹生　ニウ
一跼　セク丶マリ
一優如　ユウシヨ
一旣往　キワウ
一信夫　シノフ
一下山　シモヤマ
一篦撓形　ノタメカタ
一猛勢　マウセイ
一根尾　ネオ
一洲股　スノマタ
一垂井　タルヰ
一鬮　クチ
一散靡　アラケ

一鐔　ツハ
一黒地河　クロチカハ
一逋　ノカル丶
一咄　トツ
一眉目　ヒホク
一不中　アタラス
一武藤　ムトウ

一鋭卒　エイソツ
一協　カナウ
一隻手　セキシユ
一帶紐　ヲヒヒホ
一嚢砂背水　ナウシヤハイスイ

第二十卷

一黒丸　クロマル
一安居　アコ
一春近　ハルチカ
一黒龍　クツレ　明神
一烹鮮　ハウセン
一禰津　ネツ
一篠原　シノハラ
一薺　ホソ
一覿　ミル
一億載　ヲクサイ
一欽盈　キエイ

一波羅密　ハラミ
一河合　カワイ
一江守　エモリ
一勝虎　セウトラ
一中條　チウテウ又ナカテウ
一那多　ナタ
一式瀰　モツテヒソカニ
一素昔　ソセキ
一無疆　フキヤウ
一聿　ツイニ

一蒸民　シヨウミン
一菱里　ユウリ
一徑　タヽチニ
一旅　タムロ
一否泰　ヒタイ
一必矣　ヒツセリ
一卓犖　タクラク
一擾亂　シヨウラン
一綫縷　センロウ
一夫差　フサ
一遲擬　チキ
一覿面　テキメン
一穽　ヲロヲトシ
一峙　ソハタツ
一閑耕　カンニタガヘス
一古治　コヤ
一岩栖　カンセイ
一殘勝　サンニカチ
一芻蕘　スウセウ
一炊　カシク

一翠花　スイクワ
一呑炭　アラスミヲノミ
一黄池　クワウチ
一挑　イトム
一振臂　タヽムキヲフル
ウ
一熟輿　イツレ
一歸同　ヲモムキヲナシ
一渠　カレ
一勾踐　コウセン
一乾堀　カラホリ
一調伏　テウフク
一鼎　カナヘ
一寂釣　セキヲツリ
一借問　シヤモン
一酣飲　カンイン
一溝壑　コウカク
一漱　クチスヽク
一濺　ソヽク
一諺　コトハサ

一屬強　ツケスマイ
一銜雙　ツキナラフル
一鼷鼠　ケイソ
一黥布　ケイホ
一蛟龍　カウレウ
一膝纏　ハヽキ、刀ノ
一勾當　コウタウ
一呦々　ヨウ〳〵
一凬　ホノカ
一家山　カサン
一中陰　チウイン
一越路　コシチ
一洄流　クワイリウ
一女良　メラ
一安野津　アノヽツ
一曠劫　クワウコウ
一毆　ウツ
一接待所　セツタイシヨ
一且過　タンクハ
一寂々　シヤク〳〵

一騰跳　アカツ、オトツ、
一千鈞弩　チンキンノト
一金持　カナチ
一未央宮　ヒアウキウ
一鬢櫛　ヒンクシ
一脛巾　ハヽキ　刀ノ
一倚頼　イライ
一立吟　タチサマヨウ
一侍兒　ヲモトヒト
一淺津　アサウツ
一陽明　ヤウメイ
一彌帆　ヤホ　船ノ
一梶　カチ
一羅刹　ラセツ
一戰聲　ワナヽイタルコ
エ
一居所　トシヨ
一行脚　アンキヤ
一羅鈿　ラテン
一牛頭　コヅ

一馬頭 メツ　一阿防 アハウ
一鐵狙 クロカネノマナイタ　一肱 ヒチ 手ノ
一炮 アフル
一串 クシ　一魚著 マナハシ
一庖人 ハウシン　一楷 シモト 杖
一簸 ヒル 箕ノ　一薩埵 サツタ

第二十一卷

一時勢粧 シセイサウ　一孱應 リヤクヲウ
一檻 ヲリ　一鏃 ソク
一閫 ヲヽウ　一閼 アツカル
一警衛 ケイエイ　一椒房 シヨウハウ
一恪勤 カクコ　一曲水 キヨクスイ
一重陽 テウヤウ　一蹈歌 タウカ
一台輔 タイフ　一賄 マイナイ
一納言 タウケン　一折烏帽子 オリエホシ
一西郊 セイカウ　一嘲哳 テウロウ
一宿直 トノイ　一翔 フルマウ
一搭頭 タツチウ　一光堂 ヒカリタウ
一房官 ハウクワン　一遠騒 アハテサハク

一呶訴 カウソ　一喧嘩 ケンクワ
一法禁 ハウキン　一山邊 ヤマノヘ
一傾城 ケイセイ　一揉 モム
一撥 ヒロゲ　一檜皮 ヒワタ
一細煙 ホソクツ　一泛々 ハン〳〵
一鐘樓 シユロウ　一惣社 ソウシヤ
一灰燼 クワイシン　一金峯山 キンフセン
一回祿 クワイロク　一奇麗 キレイ
一崔嵬 サイクワイ　一昆明池 コンメイチ
一耆婆 キハ　一扁鵲 ヘンシヤク
一晏駕 アンカ　一地僻 チサカリ
一鼎湖 テイコ　一覇陵 ハレウ
一魔魅 マミ　一掌握 シヤウアク
一寧戚 ネイセキ　一造次 サウシ
一奉弊 ホウヘイ　一軒廊 コンラウ
一卜定 ホクチヤウ　一御禊 コケイ
一齋廳 サイチヤウ　一拔穗 ヌイホ
一龍尾堂 レウヒタウ　一回立殿 クワイリウテン
一正始 セイシ
一雅音 カイン　一禍 カタヌク

一宴醉　エンスイ
一主基　シユキ
一稻春　イナツキ
一冢宰　チヨサイ
一居山　ヰヤマ
一國府　コウ
一淺香　アサカ
一善惡無　アヤナ
一桐壺　キリツホ
一欄干　ランカン
一芙蓉瞼　マナフタ
一媒　ナカタチ
一兼好　ケンカウ
一闔　ウカヽウ
一混　ヒタスラ
一墜　マヒル
一川緣　カワハタ
一屋杉　ヤスキ
一石季倫　セキヽリン

一悠紀　ユウキ
一童女　インコ
一風致　フウカウ
一御國忌　ミコツキ
一香下　カシタ
一求上　クシヤウ
一金翠　キンスイ
一更衣　カウイ
一烽　トフヒ
一牡丹　フカミクサ
一副臥　ソイフシ
一安濃　アコキ
一團鞘　マルサヤ
一半蔀　ハシトミ
一雛　ヒナ
一莞爾　ニツコ
一御著　コチヤク
一繰出　クリタシ

第二十二卷

一造父　サウホ
一領下　カンカ
一轉　コロハス
一褒盪舟　カウフネヲヤル
一以管窺天　クワンヲモツテテンヲウカヽウ
一闔閭　カツロ
一田上　タナカミ
一議　タハカル
一武市　タケイチ
一舷　フナハタ
一手改　テタテ
一香西　カウサイ
一大館左馬助討死　大館二郎家氏ニハ孫又二郎宗氏ノ子氏明ト云フ義貞ハ此人ノ爲ニ又イトコノ子ナリ宗氏ハ元弘三年五月十八日鎌倉ノ稻村崎ニテ討死ス
一嗚呼　ヲコ
一檣　ホハシラ

一驪龍　リレウ
一快舜　クワイシユン
一昇　ケイ　人
一寒促　カンサク
一黷　ケガス
一馳鶩　チホク
一蟇目　ヒキメ
一早晚　イツカ
一河江城　カワノエノシヤウ
一詑間　タクマ
一淺海　アサミ
一尋　ヒコ　或ハイロ

第二十三卷

一遐齢　カレイ
一直様　スクサマ
一靠　ヨリカヽル
一行難　ユキナヤム
一化物　ハケモノ
一居去火　漁火イサリヒ
一江豚　イルカ
一巇　タホラカス
一扈従　コシヨウ
一幻　マホロシ
一破風　ハフ
一蠟燭　ラツソク
一蠢動　ムクメク
一曝　サルヽ
一毬　テマリ
一叢　クサムラ
一鋏　ハサミ
一繭絲　クウシ
一我有　ワカウ
一啓白　ケイヒヤク
一任他　サモアラハアレ
一鬼見　キケン
一泰山府君　タイサンフクン
一沃　ソヽク　イルヽ
一眇身　ヘウシン
一啻　タヽ
一嬰　カヽル
一無聊　タノモシケナシ
一[illegible]棘　コンキヨク
一怪石　クワイセキ
一栖遲　セイチ
一迅速　シンソク
一追賁　ツイヒ
一無端　ハシタナク
一行迹　フルマイ
一韆　ムナカイ
一首木　クヒキ　轂ノ字
一撥落　カナクリオトス
一三十輻　ミソノヤ

一借上　センシヤウ
一臨　ヒシヒシホ
一頼康　頼遠ノ舎兄土岐六郎頼清ノ第一男ナリ左近将監刑部太輔昇殿ヲユルサル延文三年五月朔日出家シテ善忠ト號ス等持院殿ノ薨去ニ依ル故也
一這　ハウ　地ヲ
一轅　ナカヘ
一芝生　シハウ
一笏　シヤク
一聖廟　セイヘウ
一格式　キヤクシキ
一前覆　センフク
一逸輿　イツケウ

第二十四巻

一正税　シヤウセイ
一國衙　コクカ
一小朝拜　コテウハイ
一御暦　コリヤク
一氷様　ヒノタメシ
一腹赤　ハラカ
一御贄　ミニヱ
一御杖　ミツヱ
一視告朔　カウサク
一中春　チウトウ
一國忌　コツキ
一議白　キヒヤク
一御弓　ヲンタラシ
一白馬　アヲムマ
一大極殿　タイコクテン
一御修法　ミシホ
一除目　チモク
一內論議　ウチロンキ
一御薪　ミカマキ
一蹈歌　タウカ

一粮　カテ
一賭弓　ノリユミ
一御巫　ミカンノコ
一釋奠　シヤクテン
一祈年　キネン　トシコ
イ
一御燈　コトウ
一鎮花　ハナシツメ
一社本　モリモト
一當宗　マサムネ
一嬪　ヨメツカイ
一位記　イキ
一弓場　ユハ
一齋　イツキ
一被馬　カサリムマ
一神衣　カンミソ
一六衞府　ロクヱフ
一藥玉　クスタマ
一御飯　コハン
一醴酒　ヒトヨサケ

一射禮　シヤレイ
一御麻　ヲンヌサ
一御贖　ミアカモノ
一卒川　イサカワ
一考選　カウセン
一御讀經　ミトツキヤウ
一華嚴會　ケコンヱ
一座徹　サヲテツス
一當麻　タヰマ
一大神　ヲホワ
一淮陰　シユンヲン
一灌佛　クワンフツ
一埓　ラチ
一御楔　コケイ
一駒牽　コマヒキ
一三枝　サイクサ
一結番　ツカヰ
一忌火　インコ
一酒司　サケノカミ
一御體御占　コタイノミ

一月次　ツキナミ
一神今食　シンコンシキ或ハイタマクラト云フ
一道饗　ミチアイ
一荒世　アラヨ
一文部　フンヒトヘ
一奏　タテマツル
一乞巧奠　キカウテン
一定考　カウチヤウ
一神甞　カンナメ
一大忌　ヲホミ
一鎮魂　タマシツメ
一年終　ネンシユウ
一獻物　カケモノ
一大歌　ヲホウタ
一荷前　ニサキ
一御髮上　ミクシアケ
一樞機　スウキ
一贈爵　ソウシヤク
一庫裏　クリ
一奇麗　キレイ

ウラ
一鎮火　ヒシツメ
一東西　ヤマトカワチ
一祓刀　ヌサノタチ
一節折　ヨヲリ
一相撲　スマイ
一例幣　レイヘイ
一新甞　ニイナメ
一風神　カサカン
一鼓吹　ツヽミフヱ
一斷罪文　タンサイノフ
ミ
一陰陽寮　ヲンヤウレウ
一土牛　トコ
一追儺　ツイナ
一區々　マチマチ
一法堂　ハツタウ
一衆寮　シユリヤウ
一傍　ソウ

一靈庇廟　レイヒヘウ
一焦尾　オヲコカス
一龍門亭　レウモンチン
一拈華　ネンケ
一無聲音　ムシヤウヲン
一烟嶂　エンシヤウ
一韋偃　イエン
一盍誠　ナンソイマシメサル
一成風　ヲトヲナス
一灰弘　クワイコウ
一淳朴　シユンハク
一覩　ミル
一錯刑　ケイヲオク
一尙矣　ヒサシ
一舍沙　カンシヤ
一蒙瓮　ホトキヲカウフル
一云捐　コヽニステ
一提羅　タイラ

一浸秋　アキヲヒタス
一級岩　キウカン
一棒三壺　サンコヲサヽク
一絕唱溪　セツシヤウケイ
一覆轍　テツヲクツカヘス
一犬上人　イヌシンニン
一聖射　セイキウ
一偉哉　ヲヽイナルカナ
一粲然　サンセン
一無功德話　ムクトクノワ
一横岳　ヨコタケ
一漫　ミタリニ
一緘石　イシヲツヽム
一加旃　シカノミナラス
一詷達　テウタツ　濁ル
一聞說　キクナラク

一岩栖　カンセイ
一山櫛　セツヲヤマニシ
一奢侈　シヤ
一入鄽　ヱツホニイル
一瀨　スヽク
一榮西　ヤウサイ
一摸樣　モヤウ
一法則　ハウソク
一摩訶迦羅天　マカヽラテン
一媢　コフル
一練若　レンニヤ
一舍衞　シヤヱ
一波斯匿　ハシノク
一容易　タヤスク
一豫參　ヨサン
一尼師壇　ニシタン
一旋嵐風　センランフウ
一杵　ヨシ
一金翅　コンシ

一硼飲　カンイン
一藻梲　セツニヱカク
一韜光　ヒカリヲツヽム
一執鞭　シツヘン
一儼　ヲロソカ
一墳墓　フンホ
一心操　シンサウ　コヽロハヘ
一喝食　カツシキ
一手段　シユタン
一有所得　ウシヨトク
一嗟傷　サシヤウ
一須達　シユタツ
一祇陀　キタ
一瞿曇　クトン
一臆　オク
一勞度差　ラウトシヤ
一金剛力士　コンカウリキシ
一劏喰　サキクラウ

一咄　トツ
一一生補處　イツシヤウフシヨ
一竺法蘭　チクホウラン
一太素風　タイソノフウ
一擘　ヒコツリ
一玉晨君　キヨクシンクン
一不爲得　シエス
一白馬寺　ハクハシ
一潛鱗　センリン
一絓纊　トウクワウ
一行佛性　キヤウフツシヤウ
一涎　ヨタレ
一陸士龍　リクシレウ
一荷鳴鶴　シユンメイクワク
一金口　コンク
一摩訶迦葉　マカヽシヨ

一奮迅　フンシン
一傅毅　フキ
一摩騰　マトウ
一自然　シセン
一胡床　コシヤウ
一握　ニキル
一炷芝萩　シテキヲタキ
一鯨桓審　ケイクワンノシン
一松室　マツムロ
一颰　ハツ
一冠冕　クワンヘン
一閉口　ヘイコウ
一繽紛　ヒンフン
一唐居敷　カラヰシキ
一日下　シツカ
一自解佛乘　シケフツシヨウ
一髣髴　ハウホツ
一破顔微笑　ハカンミシ

ウ
一拈葉　ネンケ
一泒分　ハワカレ
一沒滋味　モツシミ
一堅石白馬　ケンセキハクハ
一听　キク
一淸辯　シヤウヘン
一富樓那　フルナ
一擘　ツンサキ
一圓頂　エンチヤウ
一遐邇　カシ
一覃今　イマニヲヨンテ
一暗證　アンシヨウ
一滔天　カンテン
一煙焞　エンホツ
一禁遏　キンアツ
一今般　コノタヒ
一云當日　タウニチトイヽ

ヨウ
一瞬目　シユンホク
一師子吼無畏　シヽクムヰ
一權實　コンシツ
一叫騷怒張　ケウサウトチヤウ
一護法　コホウ
一是彼非此　カレヲセシコレヲヒス
一方袍　ホウハウ
一多武峯　タウノミネ
一掃蕩　サウタウ
一要須　ヨウシユ
一濫觴　ランシヤウ
一爝火　シヤクヽワ
一睛　マナシリ
一片岡　カタオカ
一朝端　テウタン
一綺　コト
一呵法　カホウ

一閲墻　カキニセメク
一法義大會　ホウキタイヱ
一警固　ケイコ
一壯觀　サウクワン
一聲華　ハナヤカ
一戸次　ヘツキ
一祐熙　スケヒロ
一粟飯原　アイハ
一海老名　アヒナ
一八葉　ハチヨウ
一設樂　シタラ
一逸見　ヘシミ
一富永　トミナカ
一清久　キヨヒサ
一老懸　ヲイカケ
一蒔繪　マキヱ
一布衣　ホイ
一上括　ウワクヽリ
一靴　クツ
一土肥　トイ
一打混　ウチコミ
一薄　スヽキ
一如木　シヨホク　上ハ濁リ下ハ清
一院司　インシ　下濁
一雲立涌　クモタテワキ
一狩衣　カリキヌ
一生　スヽシ
一洲流　スナカレ
一粲　サワヤカ
一裏無　ウラナシ
一蔦　ツタ
一女郎花　ヲミナメシ
一浮紋　ウキモン
一淺黄　アサキ
一浮線陵　フセンレウ
一槿　アサカホ
一紫苑　シヲン
一唐草　カラクサ

一經緯　タテヌキ
一秦　ハタ
一儲進　チヨシン
一光榮　ミツナカ
一亂聲　ランシヤウ
一鞋　クツ
一延道　ヱンタウ
一一聟　イチケウ
一蘇合　ソコウ
一古鳥　フルトリ
一陵王　レウワウ
一納蘇利　ナウソリ
一太平樂　タイヘイラク
一狛桙　コマホコ
一新秋　ニイアキ
一一攫　イツクワク
一難波　ナンハ
一紙屋川　カミヤカワ
一星野　ホシノ
一葛榮　カツヨシ
一悠揚　ユウヤウ
一三宅　ミヤケ
一高德　タカノリ
一都築　ツヽキ
一壬生　ミフ
一香勾　カウワ
一二十重　ハタヱ
一楓　サカス
一爪縹　ツマクル
一四人　メシウト
一牛頭栴檀　コツセンタン
一黧黑　ツヽシミクロ
一側　ソハメル

第二十五卷

一軒廊　コンラウ
一御占　ミウラ

一卜定　ホクチヤウ
一御隔子　ミカウシ
一天怪　ヨウクワイ
一施行　シカウ
一肝心　キモタマシイ
一蹲踞　ソンコ
一悶絶　モンセツ
一説破　セツハ
一嗣成　ツクナリ
一沈麝圓　チンシヤエン
一追從　ツイシヨウ
一冊　カシツク
一譽田　コンタ
一國崎　クサキ
一犀角　サイカタ
一璽　シルシ
一齋主　祭主ト作ルヘシ　サイシユ
一通夜　ツヤ
一被物　キモノ

一拔穗　ヌキホ
一箒　ハウキ
一觸穢　シヨクエ
一希代　キタイ
一榻　シチ
一銚子　テウシ
一僻地　ヒヤクチ
一依詫　エタク
一俞山人　ユサンシン
一金鎻　キンサ
一口噤　クチヲツクム
一蓬矢　ヨモキノヤ
一粟生田　アウタ
一足許　アシモト
一珊瑚　サンコ
一登極　トウキヨク
一傳奏　テンソウ
一初瀨　ハツセ
一嘲哢　テウロウ
一義之　キシ

一國常立尊　クニトコタチノミコト
一泥土瓊　ウヒチニ
一面足　ヲモタル
一大戸間邊　ヲホトマヘ
一伊弉諾　イサナキ
一二神　フタハシラ
一天瓊鉾　アマノトホコ
一滴凝　シタヽリコヽツテ
一嫁　トツク
一喜哉遇可美小男　アナニヘヤウマシヲトコニアイヌ　アナウレシヱヤアイヌウマシヲトコ
一蛭子　ヒルコ
一天照太神　アマテラス　ヲホンカミ
一小蛇　サハヘ
一葛城　カツラキ
一香久　カク或ハカコ
一榊　サカキ

一國狹槌　クニサツチ
一豐斟淳　トヨクンヌ
一大戸之道　ヲホトノチ
一沙土瓊　スヒチニ
一惶根　カシコネ
一伊弉冊　イサナミ
一浮橋　ウキハシ
一鋒　ホコサヽ
一吾恥　ワカハチ
一鶺鴒　セキレイ　トツ　キヲシヘトリ
一素盞烏　ソサノヲ
一月讀　ツキヨミ
一大社　ヲホヤシロ
一一千　イチヽ
一島根見　シマネミ
一日前宮　ニチセンクウ
一手力雄　タチカラオ

一八咫鏡　ヤタノカヽミ
一十千悪神　トチノアラフル
一老翁　ヲキナ
一脚摩乳　アシナツチ
一八岐蛇　ヤマタノヲロチ
一髻　ミツラ
一爪櫛　ツマクシ
一筧　カケヒ
一惘然　ホレホレ
一高間原　タカマノハラ
一燎原　ノヒ
一群雲　ムラクモ
一十握　トツカ
一神璽　シンシ
一正哉吾勝々速日天忍穂耳尊　マサヤアカツカツアマノヲシホミヽノミコト
一不遑　イトマアラズ
一大槩　タイカイ

一千釼破　チワヤフル
一淸地　スカ
一簸川上　ヒノカハカミ
一老婆　ヲンナ
一稲田姫　イナタヒメ
一遣方　ヤルカタ
一宣　ノタマウ
一湯津　ユツ
一生牲　イキニヱ
一大蛇　ヲロチ
一寸々　ツタツタ
一日本武　ヤマトタケ
一草薙釼　クサナキノツルキ
一朱鳥　シユテウ
一蓬蓽　ホウヒツ
一禮奠　レイテン

一蘋蘩　ヒンハン
一纛旗　タウノハタ
一夙　ツト
一葛葉　クツハ
一黄粱　クワウリヤウ
一邯鄲　カンタン
一従官　シヨウクワン
一午炊　コスイ
一手亀　テカヽマル
一爪生野　ウリウノ
一安部野　アヘノ
一阿間　アマ
一手反　テヘン
一目賦　メヲクハル
一馬淵　マフチ

第二十六巻

一羽束使　ハツカシ
一水無瀬　ミナセ
一湊河　ミナトカワ

一蘊藻　ウンサウ
一龍尾堂　レウヒタウ
一直任　チキニン
一河圖　カト
一阿堂　アタウ
一呂洞賓　リヨトウヒン
一使令　シレイ
一力學　ツトメマナフ
一勵　ハケマス
一明地　アケチ
一先蒐　サキカケ
一尋常　ヨノツネ
一直中　タヽナカ
一目賀田　メカタ
一須々木　スヽキ　人名
一尩弱　ワウシヤク
一御代卽　コヨニツカセ

一有待身　ウタイノミ
一縣　アカタ人名或ハ　コホリ
一河勾　カウワ
一遣過　ヤリスコスセ
一訇呼　ノヽシリヨハヽリ
一雜賀　サイカ
一尻籠　シコ
一上々　イヤカウヘ
一賀名生　アナウ
一竈殿　ヘツイ
一等覺　トウカク
一正儀　マサノリ
一柴橡　サイテン
一平侍　ヒラサフライ
一輾　キシル
一誘引　サソウ
一在登卿　アリノリノキヤウ

一當度　トニアタル
一輪違　ワチカイ
一驀直　マツシクラ
一青砥　アヲト
一犇　ヒシヒシト
一長　チヤウ人名
一齒嚼　ハカミ
一唐櫃　カラヒツ
一簎　ヤナクヒ
一襲來　シユウライ
一神樂屋　カクラヤ
一笙　シヤウ
一金峯山　キンフセン
一茅茨　ハウシ
一淳素風　シユンソノフウ
一喘　アエク
一山庄　サンサウ
一纍　ルイ〳〵
一芊々　セン〳〵

一鍬　スキ
一瓜彈　ツマハシキ
一窊　クホミ　イシマ
一守屋　モリヤ
一廉頗　レンハ
一八凱　ハツカイ
一卞和　ヘンクワ
一這出　ハイイツル
一會盟　クワイメイ
一酣　タケナハ
一壽　コトフキ
一缶　ホトキ
一外戚　クワイセキ
一拈香　ネンカウ
一外法　ケホウ
一相看　シヤウカン
一穩便　ヲンヒン
一函谷　カンコク
一涇渭　ケイイ
一化女　クワシヨ

一締　アヲタ
一鑵子　クワンス
一烏瑟　ウシツ
一吹毛　スイモウ
一藺相如　リンシヤウシヨ
一強顏　ツレナシ
一照車玉　セウシヤノタマ
一調　シラフル
一右史　ユウシ
一食言　シヨクケン
一陞座　シンソ
一法眷　ハツケン
一陀祇尼　タキニ
一大衣　タイエ
一首楞嚴　シユレウコン
一二崤　シカウ
一鐺　コシリ
一之罘　シフ

一蒙怡　モウテン
一獨樂軒　トクラクケン

第二十七卷

一犯星　ホンシヤウ
一梶井　カチヰ
一纐纈　カウケツ
一縄床　テウシヤウ
一音頭　ヲントウ
一簓　サヽラ
一堪能　カンノウ
一感興　カンケウ
一長講　チヤウカウ
一羽黒　ハクロ
一愛宕山　アタコサン
一笏　シヤク
一崇徳院　シユトクイン
一井上　ヰカミ
一上臈　シヤウラウ
一清花　セイクワ

一若御　ワカコ
一早晩　イツカ
一客星　キヤクシヤウ
一輕軒　ケイカン
一曲彔　キヨクロク
一律雅　リツカ
一薄化粧　ウスケサウ
一亂拍子　ランヒヤウシ
一連貫　ツラヌキ
一浩　カヽル
一蹲踞　ソンコ
一牛玉　コワウ
一身毛竪　ミノケヨタツ
一袞龍　コンレウ
一廢帝　ハイタイ
一云　コヽニ
一堅牢　ケンラウ
一業報　コツホウ

一七顛八倒　シツテンハツタウ
一乾　イヌイ
一宍戸　シヽト
一勝田　カツタ
一和久　ワク
一今川五郎入道心省　今川四郎國氏ノタメニハ孫太郎基氏ノ子國範ノ事也伊豆守貞世法名了俊ノタメニハ親ナリ駿河守頼貞ハ國範ノ舍兄式部大輔頼基ノ長子ナリ
一結搆　ケツコウ
一梟惡　ケウアク
一逐電　チクテン
一手足　テタリ
一義詮上洛　十九歳ノ時ナリ
一大厦　タイカ
一褥茵　シヨクイン
一蕭踈　シヨウソ
一涙痕　ルイコン

一椋　ムクノキ
一餓莩　カヒヨウ
一巽　タツミ
一保昌　ホウシヤウ
一禰津　ネツ
一轅門　エンモン
一下手人　ケシニン
一瑕瑾　カキン
一顰　ヒソム
一謙譲　ケンシヤウ
一典厩　テンキウ
一強仕　キヤウシ
一輕羅　ケイラ
一朦朧　モウタウ
一坐來　サライ
一九回　キウクワイ

一六喩　ロクユ　一手向山　タムケヤマ
一都良香　トリヤウキヤ　一竹生島　チクフシマ
ウ　一敦賀　ツルカ
一稠　キヒシク　一還山　カヘルヤマ
一蝸牛　クワキウ　一璧草　イツマテクサ
一江守　エモリ　一氣高　ケタカシ
一聲花　ハナヤカ　一編戸　アミト
一出抜　タシヌク　一手鞠　テカヽマリ
一淺生津　アサウツ　一八代　ヤシロ又ハヤツ
一安居　アコ　シロ
一波羅密　ハラミ　一溢者　アフレモノ
一足羽　アシハ　一坐　ソヽロ
一强　アナカチ　一邂逅　タマサカ
一才幹　サイカン　一經營　ケイエイ
一緇素　シソ　一冕服　ヘンフク
一塤　ツホ或ハニハ

第二十八巻

一季桓子　キクワンシ　一忩劇　ソウケキ
一鼎　カナヘ　一江河　カウノカワ

一三角　ミスミ　一鼓崎　ツヽミカサキ
一三青　ミヨシ　一城所　キトコロ
一神田　カンタ　一奴可　ヌカ
一小原　ヲハラ　一織田　ヲタ
一富田　トタ　一甕　モタイ
一那珂　ナカ　一筒火　トウノヒ
一匐々　ハウハウ　一探竿　タンカン
一影草　エイサウ　一抛續松　ナケタイマツ
一鹿子木　カノコキ
一石堂右馬助頼房　石塔四郎頼茂ノタメニハ孫義房ノ子ナリ東山靈山正法寺住國阿上人ノ弟ノ子ナリサテ尊氏直義ノ親父貞氏ト此頼房トハマタイトコ也
一備　イハク　一斑鳩宮　イルカノミヤ
一者　テイレハ　一澳　ヲキ
一専使　センシ　一不過往　インシヲトカ
一負刑　フケイ　メス
一嚙臍　ホソヲカム　一鉅鹿　キヨロク
一釜甑　フソウ　一穌角　ソカク
一當陽君　タウヤウクン　一錠　アフラツキ

一傭人　ヨウニン
一曹無傷　サウフシヤウ
一籍　セキ
一嚮　ムカウ
一睨　ニラム
一髢　テイ
一刀俎　タウソ
一龍蹄　レウテイ
一霸上　ハシヤウ
一撞摧　ツキクダク
一黥布　ケイホ
一張耳　チヤウシ
一吳芮　コセイ
一轅生　エンセイ
一魏無知　キフチ
一塞王　サイワウ
一王歇　ワウケツ
一共敖　キヨウカウ
一臧荼　サウト
一靈壁　レイヘキ

一新曲　シンホウ
一旨酒　シシユ
一許諾　キヨタク
一褰　カカケテ
一卮　サカツキ
一如厠　カワヤニユク
一間道　カンタウ
一靳强　キキヤウ
一足下　ソツカ
一豎子　シウシ
一盧綰　ロクワン
一酈商　レキシヤウ
一酈食其　レキイキ
一隨何　スイカ
一櫟陽　ヤクヤウ
一趙司馬卬　テウノシハカウ
一遼東　レウトウ所
一梅鋗　ハイケン
一滎陽　エイヤウ所

一狃　マナイタ
一烹殺　ハウセツ　ニコロス
一卿子冠車　ケイシクワンシヤ
一下針　サケハリ
一大牢　タイラウ
一固陵　コレウ
一城父　セイホ
一虞氏　クシ
一烏江　ヲウカウ
一都尉　トイ
一溫故　フルキヲタツネ
一撥亂　ランヲ、サメ
一復正　セイニフクスル

一哈　アサワラウ
一丁壯　テイサウ
一轉漕　テンサウ
一挺楚　テイソ　ッチ也
一樓煩　ロウハン
一辟易　ヘキヱキ
一太半有　タイハンヲタモツ
一垓下　カイカ
一慷慨　ヤウカイ
一費將軍　ヒシヤウクン
一合禮　カツテイ
一知新　アタラシキヲシル

第二十九卷

一越智　ヲチ
一欃　カンチキ
一物集女　モツメ
一謳歌　ヲウカ
一向明神　ムカウノミヤウシン

一窮子　クウシ
一秋山新藏人光政出王氏不遠　清和天皇第七代ノ苗裔新羅三郎甲斐守義光ノ次男武田冠者義清ノ嫡子逸見冠者清光ノ第三男加賀美二郎ヲ信濃守遠光ト云フ是則小笠原南部秋山ノ先祖ナリ此遠光ノ嫡男ヲ秋山太郎光朝ト云フ人ノ孫ヲ六郎新藏人光政ト云フナリ故ニ清和帝ヨリハ第十三代ニアタル也
一阿保　アフ　人
一連錢葦毛　レンセンアシケ
一畠水練　ハタケスイレン
一請流　ウケナカス
一棒　ハウ
一帶添　ハキソイ
一料纒　アサナハルナハ
一井原　ヰハラ
一石龕　イワヤ
一糟糠　ヌカワラ
一輸鳥繳出　カンテウノケキヲイツ
一岩屋　イハヤ
一歸敬　キキヤウ
一無謂　イワレナシ
一安西　アンセイ
一殿　ヲクル丶
一擯頸　ネチクヒ
一倡　イサヤ
一師虔　モロノリ
一引尾　ヒキオ　所
一泣尾　ナキオ　所
一名詮自性　ミヤウセン
一愛曾　アソ

シシヤウ
一閼伽　アカ
一漬　ツルカ　水
一目睡　マトロム
一白旗　シラハタ所
一鳶烏　トヒカラス
一手叉　テヲアサヘ
一凝　コラス
一神尾　カンノヲ
一小清水　コシミツ
一御影濱　ミカケノハマ
一三幅　ミハヽ
一雀松原　スヽメノマツハラ
一英光　ヒテミツ　人
一鏃汰　ヤシリヲソロヘ
一蘇我馬子　ソカノムマコ
一跡見赤檮　アトミノイチヒ
一秦河勝　ハタノカワカツ
一迫門　セト
一窶　ヤツス
一生田　イクタ
一師支　モロエタ
一遠江　トヲイ名字
一鹿目　カノメ
一掛羅　クワラ
一家城　ヤキ但シ屋ノ字ニ
一保連　ヤスツラ
一伊朝　コレトモ
一饗場　アイハ
一命鶴　ミヤウツル
一九原　キウケン
一武庫川　ムコカワ
一刹那　セツナ
一藕花　クウケ
一西　サイ　名字

第三十巻

一無興　フケウ
一揖讓　ユウシヤウ
一唐棣　タウテイ
一下火　アコ
一衣紋　エモン
一纖芥　センカイ
一附鳳　フホウ
一攀龍　ハンレウ
一石塔入道　右馬頭賴房ノ父ノ義房ノ事ナリ
一桃井右馬權頭直常　足利ノ乃祖治部少輔義康ノ息三郎兵衛左馬允義兼ノ息兵部少輔義胤ヲ桃井ト名ク此子ヲ小次郎賴直ト云フ其孫ハ此直常也後ニ播磨守ニ任ス
一篠峯　サヽノミネ
一褒貶　ホウヘン
一探册　短册　タンシヤク
一格　カク
一妲己　タツキ
一朝歌　テウカ
一不耐　タヘス
一炮烙　ハウラク
一渭濱陽　キヒンノキタ
一獲物　エモノ
一非熊　ユウニアラス
一非羆　ヒニ
一准　ナソラウ
一鏡宿　カヽミノシユク
一八相山　ハツサウヤマ
一蒲原　カンハラ
一宇都部佐　ウツフサ

一大胡　ヲウ
一山上　ヤマカミ
一周綱　チカツナ
一益子　マシコ
一群義　ムラヨシ
一猪俣　イノマタ
一安保　アフ
一天命　テンミヤ
一佐貫　サヌキ
一氏家　ウチヘ
一羶　ナマクサシ
一嵬　ウツタカク
一野與　ノイヨ
一羽切　ハキリ
一打墊　ウチヒシク
一足柄山　アシカラヤマ
一古宇津　コウツ
一北條　ホウテウ
一黃疸　ワウタン
一國衙　コクカ
一鄉保　カウホウ
一卒法　ソツハウ
一級　キウ
一貶　ヲトス
一窮達　キウタツ
一嚴君　ケン
一月奏　クワツソウ
一津守國夏　ツモリノクニナツ
一瑞籬　タマカキ
一大戊　下ハホウ
一伊陟　イチヨク
一認　コシラユル
一切居　キリスユル
一起揚　ヲキアカル
一喉吭　ノトフエ
一下賀　ケカ
一四十九院　シシユウク院ヲハヨマス
一淸暑　セイシヨ

一羅穀　ラコク
一臍圖　トニアタル
一同車　トウシヤ上ハ清　下ハ濁
一椽　タルキ
一篸　サヒシ
一椿嶺　チンレイ
一乾臨　ケンリン
一馬道　メンタウ
一遷輿　アシロコシ
一頹　クツル丶

第三十一巻

一鬪諍堅固　トウシヤウ　ケンコ
一鄭太尉　テイタイヰ
一中金　ナカヽネ
一出繩　テナハ
一南西　ナンサイ
一四方田　ヨモタ
一勅使河原　テシカハラ
一瓦葺　カハラハキ
一酸草　カタハミ
一風間　カサマ
一瓶尻　カメシリ
一嚴子陵　ケンシレウ
一釣臺　テウタイ
一從父兄弟　イトコ親類
一勝代　カツシロ
一三宮　サンノミヤ
一淺羽　アサハ
一丹　タン
一私市　キサイ
一古屋　或ハ降屋
一退緩　タイクワン
一干屋　ホシヤ
一五十嵐　イカラシ

一椶梠葉　シユロノハ
一銀漢　キンカン
一四十九院　院ノ字ヲヨマス
一木津河　コツカワ
一荒坂　アラサカ
一志純　シシユン
一的山　アツチ
一栽田山　ウエタヤマ
一伊木寸　イキス
一旌旗　セイキ
一洞峠　ホラカタウケ
一藥研　ヤケン
一放生津　ハウシヤウツ

第三十二巻

一茨宮　イハラノミヤ
一畝傍橿原　ウネヒカシハラ
一有識　ユウシヨク　職ノ字ニテハナシト承ル
一諒闇　リヤウアン
一准后　シユコウ
一曲阜　キヨクフ
一西郊　セイカウ
一貝鐘　ハイシヨウ
一今積　イマツミ
一山名右衛門佐師氏　惣シテ山名ノ系圖ハ新田一流ノ正統ノ祖新田太郎義重ノ嫡男伊豆守義範ノ子太
一保光　ヤスミツ
一椒庭　セウテイ
一常盤井　トキワヰ
一慶愛寺　景ノ字ナルヘシ
一齋所　サイシヨ

師義節是ハ早世ス此ノ弟次男永明門院藏人重國ヲ山名太郎ト號スソレヨリ第六代ヲ左京權大夫伊豆守時氏法名ハ道靜トソ申シケル其子初ハ小太郎ト云フ右衞門權佐師氏ナリ明徳年中ノ氏清ノ舍兄ナリ

一富田　トタ
一颰　ツシカセ
一蛭卷　ヒルマキ
一直鎮　ナヲツネ
一長沙磧　チヤウシヤセキ
一遊和軒　ユウクワケン
一朴翁　ハクヲウ
一奮迅　フンシン
一果離　クワヲハナレ
一正税　シヤウセイ
一孤獨　コトク
一丹朱　タンシユ
一許由　キヨユウ
一瀝々　レキ〳〵

一錣　シコロ
一鉞　マサカリ
一吉峯　良ノ字ナルヘシ
一駕輿丁　カヨチヤウ
一仰天　キヤウテン
一君無　キミヲナイカシロニス
一勇猛　ユウミヤウ
一堆　ウツタカシ
一若干　ソコハク
一鰥寡　クワンクワ
一虞舜　クシユン
一箕山　キサン
一韜干　ツヽミテ
一巣父　サウフ

一無覺束　ヲホツカナシ
一頑嚚　クワンキン
一雷澤　ライタク
一苦絃　ユカミイシマ
一女英　ジヨエイ
一絺衣　チイ
一優然　ユウセン
一昨木　サクホク
一口遊　クチスサミ
一武作寺　ムサテラ
一蟄懷　チツクワイ
一拔群　ハツクン
一修驗　シユケン
一水浴　ミツヲアフル
一宮城　ミヤキ
一啞　ア
一宿直　トノイ
一終夜　ヨモスカラ
一質　ムクロ
一横川　ヨカワ

一冀州　キシユウ
一象傚　シヤウハヲコレリ
一娥皇　カクワウ
一倉廩　サウリン
一匿穴　クケアナ
一愕　ヲヒユル
一鵜宿　イルカノシユク
一大江山　ヲイノヤマ
一那邊這邊　カナタコナタ
一幻　ウツヽ
一天怪　ヨウクワイ
一水品　スイシヤウ
一眞國　サネクニ
一腕　ウテ
一高安　タカヤス
一閣　サシヲキ
一破風　ハフ
一戸隱山　トカクシヤマ

一鈴鹿　スヽカ
一神南　カウナイ
一岩峯　クワクリ
一河野　カウノ
一山彥　ヤマヒコ
一山嶽　サンカク
一盤折　ツヽラオリ
一生稻　イナメ
一揉々　モミニモム
一雪頽　ナタレ
一蛤蚫　ハマクリハ
一伏繩目　フシナソメ
一荊刺　ケイキヨク
一魚角　ウヲスミ
一薦田　コモタ
一栗生田　アソウタ
一追樣　ヲツサマ
一總角　アケマキ
一壹爽　サワヤカニ

第三十三巻

一野干　ヤカン
一苦桃　ニカモヽ名字
一首藤　ストウ　須ノ字
一合眼　メクソヘ
一飛礫　ツフテ
一小牧　コマキ
一城戸　キト
一想像　オモヒヤル
一身體髮膚　シンタイハツフ
一殘傷　ソコナヒヤフル殘ノ字ハ非ナリ毀ノ字ヨシ
一雌雄　シヨウ
一蘩蘋　ヒンハン
一木主　モクシユ
一衽　シン

一小倉　ヲクラ
一鵜留　クル
一楊　タウ
一水屑　ミクツ
一川端　カワハタ
一井堰　ヰセキ
一奇　アヤシ
一溝壑　コウカク
一錦繡　キンシユウ
一雅意　カイ
一段子　トンス
一金襴　キンラン
一百福　ヒヤクフク
一齋羹　サイカウ
一甘酸　カンサン
一旨酒　シシユ
一鮫　カイラキ
一賄賂　ワイロ
一酷　ハナハタ
一僻事　クセコト
一贈爵　ソウシヤク
一癰瘡　ヨウサウ
一有驗　ウケン
一鬼見　キケン
一太山府君　タイサンフクン
一星供　シヤウク
一冥道供　ミヤウタウク
一慈救　シク
一衣笠山　キヌカサヤマ
一鎖龕　ソカン
一奠茶　テンチヤ
一靈塔　ランタウ
一蘭省　ランシヤウ
一柳營　リウエイ
一悶絕　モンセツ
一僻地　ヒヤクチ
一行吉　ユキヨシ名字
一窪　クホ
一饗場　アイハ

一宗　ソウ名字
一西河　サイカウ
一牛嚢　ウシノクソ
一綾部　アヤヘ
一藤木　フチノキ
一味坂　アチサカ
一世良田　セラタ
一城　シヤウ　名字
一國分　コクフン
一名和　ナワ
一派　ミナマタ
一稲佐　イナサ
一谷山　タニヤマ
一絹脇　キヌワキ
一土持　ツチモチ
一合田　アウタ
一高良山　タカラヤマ
一朝井　アサイ
一三栗屋　ミクリヤ
一寶萬嶽　ホウマンカタケ
一連署　レンシヨ
一寢食　シンシヨク
一國內通計　コクナイツウケ但計ノ字ヲ外ニスヘシ
一陳謝　チンシヤ
一苦　ネンコロ
一褒姒　ホウシ
一夢説　ユメトキ
一南瀨口　ミナセクチ
一萍　ウキクサ
一牢籠　ラウロウ
一矢口　ヤクチ
一艫舳　ロヘ
一孤　ミナシコ
一天翔　テンヲカケル
一地潜　チヲクヽル
一漲　ミナキル
一閃　ヒラメク
一牛頭馬頭　コツメツ
一常盤　トキワ
一堅盤　カキハ

第三十四巻

一難波　ナンハ
一高根澤　タカネサハ
一龍山　リウセン
一恩地　ヲンチ
一贄河　ニヘカワ
一最初峯　サイシヨカミネ
一庶幾　ソキ
一護持僧　コチソウ
一更衣　カウイ
一天河　テンノカワ
一猿子　マシコ
一左良階　サラシナ
一伊駒　イコマ
一斥候　セキコウ
一佐美　サミ
一當木　マサキ
一岩群　イワクニ
一古折　フルオリ
一丹下　タケ或ハアカシタ同字ナリ
一俣野　マタノ
一譽田　コンタ
一酒勾　サカワ
一水速　ミマヤ
一湯淺　ユワサ
一駒犬　コマイヌ
一無惡不造　ムアクフサウ
一遊佐　ユサ
一母衣　ホコ
一田邊　タナヘ

一阿弖河　アセカワ
一槐木　クワイホク
一自受法樂　シジユホウラク
一祐　サイワイ
一甲山　カフトヤマ
一碧潭　ヘキタン
一發鳩山　ハツキウサン
一尾閭　ヒリヨ
一壘虛　ルイキヨ
一鹿窪　カノクホ
一物部　モノヽヘ
一通夜　ヨモスカラ

一私語　サヽヤク
一枯凋　カレジホム
一擧動　フルマイ
一竪義　リウキ
一竪　ヨタツ
一曹娥　サウカ
一河伯　カハク
一精衞　セイエイ
一洩　モラス
一内海　ウツミ
一茂呂　モロ
一莓苔　マイタイ

第三十五卷

一勸賞　ケンシヤウ
一狩漁　カリスナトリ
一鵙目　モスメ但物集女ト書ト也
一同士軍　トシイクサ

一心操　コロヽハエ
一行明　キウメイ
一帳臺　チヤウタイ
一足纒　アシマトヒ
一根來　ネコロ

一鷸蚌相陁　イツホウアイハサム
一鴨頭　カウト
一矢矧　ヤハキ
一揉尾　ソトオ
一塔尾　タウノオ
一魯酒　ロシユ
一杉梢　サンサウ
一縟　ナヒヤカ
一被並　アハセラル
一繰鳴　クリナラシ
一利潤　リシユン
一園囿　ヱンイウ
一應諾　ヲウタク
一祉　コソ
一畔　クロ
一倩　ツラツラ
一奸曲　カンキヨク
一和談　ワタン
一儒　ヤツス

一乘其弊　ソノツイヰヘニノツトル
一西郷　サイカウ
一草木　クサキ　キヲ濁
一景石　カケイシ
一脣竭　クチヒルツキ
一邯鄲　カンタン
一神宿　カミサイ
一青醒　アヲサメ
一秦政　シンノセイ
一爲體　テイタラク
一荼毒　トヽク
一善巧　センケウ
一其有　ソノウ
一萬般　ハンハン
一道畔　ミチノホトリ
一鍾愛　シアイ
一廉直　レンチヨク
一儉約　ケンヤク
一間荒　マハラ

一藻鹽草　モシホクサ
一飯匙　イヽカイ
一朝食　アサケ
一位牌　イハイ
一閑寂　カンセキ
一煙蓑　ヱンサ
一直垂　ヒタヽレ
一乞丐　コツカイ
一龔　ツカウ
一迥　ハルカ
一滑河　ナメリカワ
一亟　ヒン
一麗貌　レイハウ
一逆鱗　ケキリン
一押除　オシノケ
一剎利　セツリ
一忉利　タウリ
一舐　ネフル
一噤　ツクム
一晨朝　シンテウ

一礒菜　イソナ
一椎葉　シイノハ
一笈　ヲイ
一茅宮　ハウキウ
一捿遲　セイチ
一雨笠　ウリツ
一叙爵　シヨシヤク
一公文　クモン
一俵　タワラ
一燧袋　ヒウチフクロ
一賄賂　ワイロ
一弘農　コウノウ
一誘引　サソウ
一容　イルヽ
一增一阿含　ソウ一アコン
一梨軍支　リクンシ
一伽耶　カヤ
一瞿彌　クミ
一番豆崎　ハツサキ

一服部　ハツトリ
一楢崎　ナラサキ
一左手　サス　河
一馬杉　マスキ
一磬控　ケイコウ
一玉箭　タマクシケ

一河合　カハイ
一儀我　キカ
一二部　ニイフ
一蠅拂　ハイハライ
一佐脇　サワキ

第三十六卷

一旱魃　カンハツ
一徒事　タヽコト
一土岐右馬頭氏光　樋口東洞院ニテ御幸ニ合テ狼籍シタル頼遠ノ第一子ナリ外山ハ遠江守光明ト云フ今峯ハ近江守直頼ト云フ此兩人ハ氏光ノ舎弟也
一仙豫　センヨ
一五十鈴川　イスヽカワ
一木綿　シテ
一兕咀　シユソ
一樵夫　シヨウフ
一撥　ハチ
一鐘木　シモク
一撞　ツク
一鹿色　ソシキ
一函蓋　カンカイ
一二間　フタマ
一山名時氏嫡子師義　小太郎左宗亮トモ云ヒキ次男中務太輔ハ氏冬ト云フ早世セラレタリ

一名木能仙　ナキノセ　　一大見丈　タイケンチヤウ
一倉懸　クラカケ
一佐用　サヨ　　一有元　アリモト
一星祭嶽　ホシマツリノタケ
一赤松筑前入道世貞　貞範ノ事ナリ則祐ハ字自天ト云フ冷泉爲秀卿ノ間弟トシテ倭歌ノ道ヲキワメ勅撰集ノ中ニ入レリ寶林寺妙善ト號ス貞範モ則祐モ圓心ノ子ナリ
一上月　カウツキ　　一眞島　マシマ
一細河右馬頭頼旨　旨ノ字ハ非ナリ有ノ字ナリ讃岐守頼春ノ次子ナリ勝妙院ト號ス明德二年九月九日ニ卒ス
一金河　カナカワ　　一香椎　カシイ
一宗像　ムナカタ　　一城井　キヰ　豐前
一飯守山　イヽモリヤマ筑前早良ノ郡ナリ
一赤松範資　圓心ノ嫡男ナリ　　一甘身　アサマシ
一縣　アカタ
一瓜生　ウリウ　　一豺狼　サイラウ
一富樫　トカシ　　一駁　ハネル
一細川相模守清氏　細川八郎俊氏ノ第一男ヲ公頼ト云フ此第一男ハ阿波守和氏ナリ康永元年ニ頓死ス補陀寺ト號ス歌道者ナリ此嫡男清氏ナリ頼春ノタメニハ甥ナリ
一其弟左馬助　頼和ト云フ次下ニ利ノ字ニ作ルハ非ナリ
一口遊　クチツサミ　　一愍　ナマシイ
一將監家氏並將氏　共ニ清氏ノ弟ナリイトコ兵部少輔氏春トハ和氏頼春師氏ノ三人ハ公頼ノ子ナリ氏春ハ師氏ノ第一男ナリ松栢院ト云フ新後拾ノ作者也
一戰慄　ワナヽキ　　一突鼻　ハナヲツク

第三十七巻

一蔀　シトミ　　一遣戸　ヤリト
一跳落　ハネヲトス　　一苦集滅道　クスメチ
一花瓶　クワヒン　　一義之　キシ
一韓愈　カンユ　　一文集　ワンシユフ
一眠藏　メンサウ　　一禿　トク
一覇陵　ハレウ　　一佩　ヲフル
一蹂躙　フミニシル　　一羅洞　ラトウ

一耶輪陀羅　ヤシユタラ　一水想観　スイサウクワ
一玉箒　タマハヽキ　ン
一紲　キツナ　一大鵬　タイホウ
一搏　ハウツ　一元獻　ケンケン
一武淑　フシユク　一假色　アタノイロ
一媒妁　ハイシヤク　一蕭颯　シヨウサツ
一舎脂　シヤシ　一通宵　ヨモスカラ
一嬋妍　センケン　一甃　イシタヽミ
一蘭膏　ランカウ　一吠畝　ケンホ
一喫　キツ　一崔乾祐　サイケンユウ
一簞食　タンシイ　一瓠漿　コシヤウ
一潼關　トウクワン　一霓裳羽衣　ケイシヤウ
一鼙鼓　ヒク　或ハイク　ウイ
一探使　タンシ　一哥舒翰　カシヨカン
一鳳翔　ホウシヤウ　一西施　セイシ
一統纉　トウクソウ　一釦　カンサシ
一囘紇　クワイキツ　一行在　アンサイ
一翠花　スイクワ　一搖々　ヨウヨウ
一蓬萊　ホウライ　一方丈　ホウチヤウ
一瀛洲　エイシユウ　一雙鬟　サウクワン

一刷　カイツクロウ　一鳳寫　ホウセキ
一涙欄干　ナンタランカ　一新垣平　シンエンヘイ
ン
一未央宮　ヒヤウキウ　一信　カタミ

第三十八巻

一豐浦　トヨラ　一中臣　ナカトミ
一大兄　ヲホエ　一鎌子　カマコ
一金輪際　コリンサイ　一白髭　シラヒケ
一竹生　チクフ　一箕浦　ミノウラ
一院庄　インノシヤウ　一仁堀　ニノホリ
一新見　ニミ　一秋庭　アキハ
一得倉　トクラ　一富田　トンタ
一肝心　キモタマシイ　一這々　ハウハウ
一安良　ヤスラ　一倉滿　クラミツ
一仁木兵部大輔義尹　左京大夫頼章ノ次子ナリ後ニ
出家シテ道環ト號ス
一御服峯　コフクノミネ　一單于　センウ
一長者原　チヤウシヤカ　一還補　クワンフ
ハラ　一鰐　ワニ

一蝗　クワウ　イナゴ　一訛　アヤマリ
一寇讎　コウシユウ　一往者　インシヲハ
一不尤　トカメス　一ウタ津　歌ノ字也ト
一飽浦　アクラ　一袷　アハセ
一片皮破　カタカウヤフ
リ　一陶山　スヤマ
一伊賀　イカ　名字
一駿足　シユンソク　一闕櫓　キトヤクラ
一株瀨　クイセ　一三國渡　サンカウノワ
一富松　トマツ　タリ
一舍之　スツル　一揚子江　ヤウスカウ
一日向　ヒヒサシ　一伯顏　ハクカン
一呂文煥　リヨフンクワ　一賈似道　カシタウ
ン　一矢間　サマ
一羽衞　ウエ　一斥候　セキコウ
一籌策　チウサク　一饅頭　マンチウ
一乾鍋　カンクワ　一老驥　ラウキ
一羸　ツカル　一イ　タヽズム
一時境　ヲリフシ

第三十九巻

一少正卯　シヨウセイハ　一鴻毛　コウモウ
ウ　一撓　タワム
一麟角　リンカク　一百里奚　ハクリケイ
一垂棘　スイキヨク　一屈產　コンサン
一賄　マイナイ　一管夷吾　クワヰコ
一召忽　セウコツ　一絰　クヒル
一溝瀆　コウトク　一板鼻　イタハナ
一芳賀　ハカ　一苦林　ニカハヤシ
一陰森　インシン　一馳突　チトツ
一遑卒　テイソツ　一參然　サンセン
一勇銳　ユウエイ　一些　チト　スコシ
一編木子　サヽラコ　一三頭　サンツ
一膺機　キニアタリテ　一斬居　キリスエ
一覿面　テキメン　一連翦　レンシヤク
一岩松治部太輔　畠山遠江守義純第三男岩松太郎藏
人時兼ト云フ此第四代ノ孫直國ト云タルナリ
一向背　キヤウハイ　一老僻　ヲイヒカミテ
一朝哢　テウロウ　一鬱陶　ウツタウ
一弊禮　ヘイレイ　一招請　テウシヤウ
一維摩會　ユイマヱ　一要脚　ヨウキヤク

一滄霞　サンカ
一柳條　リウデウ
一如在　イマスカコトク
一御注連繩　ミシメナワ
一祟　タヽル
一棟別　ムネヘツ
一還禮　クワンレイ
一風燈　フウトウ
一松籟　シヨウライ
一云聚　コヽニアツマル
一鑣　クツハミ
一蕭墻　シヨウシヤウ
一縮直　シメナヲス
一汨羅　ヘキラ
一幄屋　アクヤ
一翕如　キウシヨ
一榊　サカキ
一覆面　フクメン
一還城樂　ケンシヤウラク

一聚螢　シユケイ
一垂手　スイシユ
一月額　サカヤキ
一白幣　シラユウ
一猜　ソネム
一嚴密　ケンミツ
一灣溪　ワンケイ
一竹箟　チクカン
一鏑頭　チトウ
一躋　ノホル
一妖艶　ヨウエン
一哈　アサワラフ
一屈原　クツケン
一南曹辨　ナンソウノヘン
一布留　フル
一御正體　ミシヤウタイ
一伶倫　レイリン
一正始　セイシ
一警蹕　ケイヒツ

一御裾　ヲンキヨ
一博陸　ハクリク
一具瞻　キウセン
一白浪　ハクラウ
一溢物　アフレモノ
一所轄　シヨカツ
一官廨　クワンカイ
一寧處　ネイシヨ
一貪婪　タンラン
一却奪　ヲヒヤカシウハウ
一交隣　カウリン
一施行　シカウ
一金龍　キンレウ　人名
一一萬戸千戸　官ソ
一五島　コタウ
一乾闥婆城　ケンタツハシヤウ
一鏁　クサリ
一鐵炮　テツハウ

一天兒屋根　アマノコヤネ
一高彥靈尊　タカミムスヒノミコト
一牒使　テウシ
一相接　アイセツス
一搔擾　カキミタル
一島嶼　タウヨ
一潛地　チヲクヽリ
一勦捕　カラメトラウ
一移文　イフン
一啓稟　ケイホン
一金乙貴　キンイツキ　人名
一據　ヨントコロ
一蜃氣　シンキ
一懸拚　カケヒキ
一桔槔　ハネツルヘ
一街衢　カイク
一霹靂　ヘキレキ

一閃々　セン〱
一連索　レンサク
一道祖　タウソ
一稲荷　イナリ
一荒木田　アラキダ
一貞俯　サタヒサ
一門司　モシ
一餞送　ハナムケ
一束修　ソクシユ
一安曇　アツミ
一庭燎　ニハヒ
一青和幣　アヲニキテ
一梅之枝　ムメカエ
一石河　イシカハ
一夏引　ナツヒキ
一飛鳥井　アスカヰ
一差梳　サシクシ
一呉服部　クレハトリ
一高良　カウラ
一細螺石　シタヽミ

一外　ヨソ
一櫟社　レキシヤ
一氣比　ケイ
一命婦　ミヤウフ
一度會　ワタラヱ
一宮號　ミヤカウ
一窈冥　ヨウメイ
一至雍發　シヨウハツ
一山陰　ヤマアイ
一礒良　イソラ
一白和幣　シラニキテ
一催馬樂　サイハラ
一櫻人　サクラヒト
一葦垣　アシカキ
一貫河　ヌキカハ
一眞金吹　マカネフク
一淺水橋　アサンツノハシ
一姑耶　コヤ　耶ハ非ナリ

一石花具　カイラキ
一貢　ミツキモノ
一王仁　ワウニン
一課　カケモノ
一篳篥　ヒツリキ
一無覺束　ヲホツカナシ
一汾水　フンスイ
一柱杖　シユチヤウ
一曙　アケボノ
一黔　クロメル
一發　サク
一跳行　センカウ
一腥羶　セイセン
一慵　モノウキ
一蒲團　フトン
一虞耐　クフ
一茶毗　タヒ
一有待　ウタイ
一紺紙　コンシ
一緊那羅　キンナラ

一干珠　カンシユ
一綾織　アヤハトリ
一篋　ハコモノ
一浙東　セツトウ
一髑髏　トクロ
一楚囚　ソノトラハレ
一方袍　ホウハウ
一送行　ソウアン
一映夕暉　セキニヱイス
一芳躅　ハウシヨク
一草鞋　サウケイ
一三隅　サンクウ
一戰圖　セント
一湘　ニル
一晏駕　アンカ
一挽歌　ハンカ
一棺　ヒツキ
一資奉　シヽタテマツル
一金泥　コンテイ
一珊提嵐　サンタイラン

第四十卷

一追貢　ツイヒ
一思無邪　ヨコシマナカランコトヲオモウ
一母屋　モヤ
一家禮　ケライ
一瞿麥　ナテシコ
一鷄冠木　カヱテ
一款冬　ヤマフキ
一佐脇　サヱキ
一横地　ヨコチ
一詠　ヨメル
一礫乎　ヲヽイナルカナ
一内舍　ヲトネリ
一披講　ヒコウ
一此殿烏破　コノトノヽトリノハ
一伊勢海　イセノウミ
一磯城島　シキシマ
一安居院　アコイ
一日本歌　ヤマトウタ
一洪花　コウクワ
一几帳　キチヤウ
一鹹　カイフキ
一地黄莢　チカリヤス
一立紋　リウモン
一淺青　アサキ
一藁科　ワラシナ
一膝行　シツカウ
一明媚　メイヒ
一圭章　ケイシヤウ
一身入　ミニシム
一篳篥　ヒチリキ
一席田　ムシロタ
一萬歲樂　ハンセイラク
一三臺急　サンタイノキウ
一慣　ナラウ
一招提　セウタイ
一噴　スハ
一手蓋　テンカイ
一靉　タナヒキ
一咹　アキルヽ
一一切　ツヤツヤ
一鎮撫　チンフ
一醫殿　クストノ
一雲珠卷　ウスマク
一緋色　アケノイロ
一途轍　トテツ

太平記鈔音義　畢

太平記賢愚抄

全

太平記賢愚抄

序　分

序ハ次也又緒也イトクチヲ見テ糸ヲソロユル如ク序ヲ見テ其書ノ一部ノ大意ヲ知ル如ソ又廊也家ニ至ルニハ先廊下ヨリ入リ其コトク序ヲ見テ次第ニ奥ニ至ルソ

○蒙竊　文選曰蒙竊惑焉善曰周易云蒙者蒙也韓康伯云蒙昧幼少之象也濟曰蒙ハ謙稱也言ハ蒙竊トハ卑下之辭ナリ

○古今　古往今來也（イニシヘイマ）ヲ云

○變化　千變萬化也（ウツリカワル）ト云義也

○安危　安穩危亂也

○來由　來歷由緒也

右言ハ古ヘイマノウツリカワル義ヲ以テ世ノヤスク治ルトアヤウク亂ルヽトノイハレヲ案スルト云義也察トハ心ニテ思ヒ計リアキラカニ見考ル意也

○覆而無外天之德也明君體之保國家

言ハ天ハ萬物ヲ覆テ外ナキ也無外トハ偏頗ナク善惡共ニ遍ク照シ覆フ也古語曰大鑑無私照云云　如此明君モ親疎ナク萬民ヲ撫育シ國家ヲ保チタマヘト云意ナリ明君トハ偏聽ナキヲ云也貞觀政要ニ具ニ見タリ體之トハ物ヲカタトルト云意ナリ

○載而無棄地之道也良臣則之守社稷

言ハ地ハ汚淨ヲ不嫌萬物ヲ載戴クソ如此臣下タル者其君ノ善惡盛衰ヲ不言ヨクツキ隨ヘト云意也古語曰忠臣不事二君又曰貞臣不見國危云云　皆一タヒ主君ニ仰載テ再其君ヲ篡シ棄ル事ナカレト云義也良臣トハ忠臣貞臣ナトヽ云テ臣下ニ六ツノ品アリ其中ニ良臣ヲ勝レリトス六臣ノ事政要ニ詳ナリ則之トハ是ヲ法度ニスルト云義也社稷トハ史註曰社ハ主土稷ハ主穀字書曰社土地神主也稷爲五穀之長其德缺則雖有位不持　德トハ天之德君主之德也所謂　未了ノ義ヲ釋スル心也又本ヨリアル語ヲ引出書ナリ又評論ノコトハ也

○夏桀走南巢　夏ハ三王ノ始也禹王ニ興テ桀ニ終ル夏爲天子一十七世凡四百五十八年云云　南巢ハ處ノ名也殷ノ湯王南巢ニ於テ桀ヲ亡ス史略曰王履癸號爲桀爲瓊宮瑤臺殫民財肉山脯林酒池可以運船糟堤

可以望十里　一鼓而牛飲者三千人末喜以爲樂國人大崩湯代夏桀走鳴條而死云云　淮南子曰湯敗桀於歴山與末喜同舟浮江奔南巣之山而死云云　謚法曰賊人多殺曰桀

○殷紂敗牧野　殷ハ夏ノ次也成湯ニ興テ紂ニ終ル殷爲天子三十一世凡六百四十四年云云　牧野ハ處ノ名在紂都朝歌南云云　周ノ武王牧野ニシテ紂ヲ伐ス史記云周武王於是遂率諸候伐紂々亦發兵距之牧野甲子日紂兵敗紂走入登鹿臺衣其寶玉赴火而死云云　史略曰昌率子發立率諸侯伐紂々敗于牧野云云　又曰帝辛名受號爲紂資辯捷疾手格猛獸智足以拒諫言足以飾非云云　謚法曰殘義損善曰紂　右夏桀殷紂共ニ逆惡ノ主也　其德缺則雖有位不持ノ義ヲ演說ス

○其道違則雖有威不久　道トハ地道臣下ノ道也

○趙高刑咸陽　趙高ハ秦始皇ノ臣下也二世胡亥子嬰三代ニ事フ皆政事ヲ司ル遂ニ子嬰ノ爲ニ咸陽ニシテ刑罪セラル咸陽ハ宮ノ名也史畧曰立公子嬰爲秦王二世之兄子也嬰既立族殺趙高云云

史記曰

子嬰遂刺殺高於齋宮三族高家以徇咸陽云云

○祿山亡鳳翔　安祿山ハ唐玄宗明皇帝之臣下也至德二載鳳翔ト云處ニテ安慶緒殺祿山云云　鳳翔ハ縣ノ名也史記曰肅宗自鳳翔縣出將兵發于長安諸卒悉歸服肅宗以伐祿山滅之云云

右趙高祿山共ニ豪猛ノ臣下也其道違則雖有威不久ノ故ヲ發明ス

○前聖愼而得垂法於將來也　前聖トハ周公孔子等ノ聖人ナリ法トハ天下ヲ治ムル政法也四書五經之屬ソ將來トハマサニキタルトヨム後代ノ義也垂トハ敎ヘ下スト云義也

○後昆顧而不取誡於既往乎　後昆トハ後代ノ人ヲサシテ云也誡トハ聖誡トテ聖人ノ法度也既往トハステニユクトヨム先代ヲ云也既往ノ字論語ニ見タリ言ハ先代ノ事ヲ鑑テ何ンゾ聖法ヲ執行ハサランヤト云義ナリ古句曰見前車之覆爲後車之誡唐太宗曰以銅爲鏡可正衣冠以右爲鏡可見興替云云

謹按スルニ太平記ハ是君主ノ明暗臣下ノ善惡ヲ錄ス蓋シ後代ノ龜鏡ニナサシメン爲也君臣タル者豈此書ヲ讀サルヘケンヤ或曰夫序ハ其書ノ大意ヲ記スルモノ也然ルニ此書已ニ四十卷ニ餘レリ序ハ纔

ニ三四行ニ不過大意ヲ言盡スヘケンヤ答曰一部ノ大綱此序ニ粲然タリ若其意ヲ盡サント欲シテ後醍醐持明院之御政務尊氏義貞之武略正成師直之戰功等遂一是ヲ記サハ事狀繁多ニシテ是ヲ讀ニ遑アランヤ惟此書ヲ作スル事元亨建武ノ治亂ヲ鑑テ後代君臣タル人私欲ヲ忘レテ萬民ヲ撫育シ國家ヲ安泰ニ成シメン爲ナリ故ニ曰前聖愼而跡垂法於將來也後昆顧而不取誡於既往乎云云 寔ニ此兩句此序ノ面目此書之大綱也豈大意ヲ記スルニアラスヤ

第一卷

○狼烟(ノロシ) 萬花谷三十八云諸侯時中國有事燒狼糞爲煙以達諸侯 五代殷文圭集注 世話云狼糞ヲ燒事ハ火直ニ揚テ不斜遠方ニ達セン爲也 匀府曰狼火烽火用之烟雖風不斜

○翳 クラマス ○鯨波 トキノコヱ

○富於春秋 史記ニ詳ナリ

○濫觴 家語曰江始出泯山其源可以濫觴及至江津不舫楫不可以渉 水ノ始出源ハ淺シテ盃ヲ浮ル程ナレトモ流ノ末ハ大河ト成テフネイカタ無レバ成ヌソ故ニ物ノ始ハ少シナレトモ後ニハ大ニ成ソ濫觴ト云ヘハ物ノ始ノ事ソ 山谷曰泯江始濫觴入楚乃無底トアリ

○鎌倉右大將賴朝ハ源家八幡太郎義家之子嫡子義親二男義忠三男義國四男爲義此爲義之子義朝々々之三男賴朝也義朝平治之合戰ニ打負尾州内海ニテ家人ノ長田ニ被誅後彼賴朝已ニ可被誅處ニ池尼公淸盛ノ繼母タリトイヘトモ是ヲ重クヲモワレケレバ尼公重盛ヲ以テ賴朝ノ命ヲ被乞ケレバ無力死罪ヲナダメ伊豆ノ蛭カ小島ニ被流罪其後高尾ノ文覺ノ進メニ依テ謀叛ヲ起シ平家ヲ追討シテヨリ其威四海ニ及フト云云 尼公ハ忠盛ノ四男池大納言賴盛卿母也

○將軍 武官之頂上也職原抄曰古來尤爲重寄非武略之器者不當其仁云云

○征夷大將軍 職原曰征夷者始於大日本武尊每有兵事遣將師也粗見舊記未置鎭守已往東征人或爲按察使或爲鎭守將軍文屋綿丸以來有征夷將軍號云云

○遠江守平時政 先祖常陸大丞始ハ良望後ニ國香ト

改ム貞盛維將維時直方維方盛方阿多美禪師聖範時家時方北條四郎時政也此時政ハ賴朝ノ舅タルニ依テ執權トシテ高時マテ九代天下ヲ掌ノ中ニシテ成敗ヲ司也將軍ハ賴朝賴家實朝ヲ三代將軍ト云賴經其子賴嗣是ヲ攝家二代ノ將軍ト云光明峯寺攝政道家公四男賴經也宗尊親王其子維康親王久明親王其子守邦親王是ヲ親王四代ノ將軍ト號ス宗尊ハ後嵯峨ノ王子也久明ハ後深草ノ王子也以上是ヲ先代九代ト云何モ末ノ系圖之處ニ具也又自時政至高時先代九代ト云

○旌旗(ハタノコトナリ)

○八荒　杜詩曰八荒開壽域一氣轉洪鈞　毛勻ニ八荒曰八表

○儲王攝家　儲王ハマウケノキミ也皇子イマタ御即位ナキ時ヲ云也攝家ハ攝政家ノ事也攝政ハ周公旦ヨリ始ル關白ハ漢ノ霍光ヨリ始ル也日本ノ攝政家ヲ中スニ近衞鷹司是皆藤家ノ適流也春日大明神之苗裔大織冠淡海公之孫也謂之執柄家華山院德大寺西恩寺轉法輪三條等ハ謂之淸華黨

○沙汰　沙ハイサコ汰ハユル也諸事ヲ穿鑿シ是非ヲツヲ沙汰ト云フ善惡一ツニ取交ヘテ善ハ善トシ惡ハ惡ト分別スルハタトヘハ沙石ヲユリテ金ト石トヲ分ツカ如キソ又沙汰ノ二字ヲユリソロユルト讀ソ孫綽ト習鑿齒ト云者相共ニ行ク孫ハ前ニアリ習ハ後ニアリ孫曰沙之汰之瓦礫在後習對曰簸之颺之糠粃在前

○鎭西　筑紫ヲ云也鎭トハ九州ト云心西トハ西國ト云義也筑紫ハ九州ニシテ西國ナル故ニ鎭西ト云周禮曰九州名山爲地之鎭

○成敗　成ハ就也敗ハ破也善ヲハ成就シ惡ヲハ敗破スル義也左傳ニ勸善懲惡ト云ヘリ詳ニ御成敗式目抄ニ見タリ

○異賊襲來　異國ノ匈賊オソヒ來ルト云義也

○蔑如(サミシ)　○朝廷　內裏ノ事也

○宸襟　宸ハ帝王ヲ指シテ云ソ襟ハオモフ也

○陵廢　陵ハヲカ物ノ興カタニトルソ廢ハスタル、ソ只興亡ノ心ソ　○默止(モタシ)

○后胤　子孫ノ事也　○蔽(ツイヘ)

○逸遊　逸樂遊宴也淫亂酒宴ニ長スル義也

○奇物　奇特ナル事メツラシキ物ヲモテアソブ事也

太公曰帝堯王天下之時奇怪珍異不視玩好之器不寶
淫佚之樂不聽云云
○傾廢　國ノカタムキ世スタレルノ義也
○生前　現世ヲ云也生テ居ル間也前トハ目前ノ義ソ
諺ニ生前死後ト云フ
○衞ノ懿公　衞ノ懿公名ハ赤ト云人鶴ヲ愛ス鶴ヲ大
夫ノ車ニノセテ遊ハレタソ或時狄人來テ衞ヲウツ
公國人ニ甲ヲ授ケテ戰ハシメントス國人皆云幸ニ
俸祿ヲアタヘテ寵愛セラルヽ鶴ヲ遣シテフセカシ
メヨ我等何ソ戰ハント云也故ニ衞ノ國遂ニ亡ルソ
春秋第四閔公二年傳ニ見タリ
○秦ノ李斯　李斯ハ楚ノ上蔡人也秦ノ始皇ノ臣也後
ニ二世胡亥ニツカヘ趙高ト惡シ故ニ趙高讒シテ李
斯ヲ獄ニ入ル獄トハ籠ノ事ソ斯スナハチ獄中ヨリ
上書シテ罪ナキ由ヲ申ス趙高其書ヲステテ囚何
上書セント云テ不奏也遂ニ斯ヲ獄中ヨリ出シテ殺
ス斯獄ヲ出ル時中子ニ謂テ曰吾汝ト黄犬ヲヒキテ
倶ニ上蔡ノ東門ニ出テ狡兎ヲ獵シテ朝ニツカヘス
ンハ此患ニハ逢マシキソ今其事ヲ思フトモ不及ト
云タソ史記列傳二十七ニ見タリ文選曰李斯之受罪
兮歎黄犬而長吟
○三綱　君臣父子夫婦是ヲ三綱ト云
○五常　仁義禮智信是也
○周公　周公旦姓ハ姬名ハ旦也文王ノ子武王ノ弟成
王ノ叔父也史記世家曰周公旦者周武王弟也自文王
在時旦爲子孝篤仁異於群子及武王即位旦常輔翼云
云
○孔子　孔子名ハ丘字ハ仲尼魯人也史記世家曰父叔
梁紇母顏氏以魯襄公二十二年庚戌之歲十一月庚子
生孔子於魯昌平鄉陬邑爲兒嬉戲常陳俎豆設禮容云
云
○萬機　書皐謨二曰萬幾トアリ機ハ惡ソ
○碩才　大ナル才智也
○關所　孟子曰古之爲關也將以禦暴今之爲關也將以
爲暴云云　慶源輔氏曰關則一而古今所以爲關之意則
不同云云　言ハ古ハ非常ヲ誡メン爲也義トス天理也
今ハ稅ヲ征セン爲也利トス人欲也孟子大全ニ詳也
○四境　四方ノ道路國境也
○七道　東海道　東山道　北陸道　山陰道　山陽道
南海道　西海道是也

○大禁　孟子ニ問國之大禁トアリ

○龍斷(ロウタン)　孟子卷四ニ古之爲市者以其所有易其所無者有司者治之耳有賤丈夫焉必求龍斷而登之以左右望而罔市利人皆以爲賤故從而征之征商自此賤丈夫始矣云云　龍斷ト云ハ四方ノ土ヲ切アワシタル處ノ少シ高キ塚也其高キ處ニ賤丈夫カ上テ市ノ利ヲ見テ其ハ高ク賣タ買タヤスキ物ヲ高クウルナト云テモラサス是ヲ云ソ罔ニスルトハ左右ヲ見テモラサス公事ヲ取ヲ云ソ征ハ取也有司ハ市奉行也商人ニ公事ヲ取事ハ此賤丈夫ヨリ始タソ

○田服　畿內千里之外田服五百里侯服又五百里綏服又五百里要服又五百里荒服見于尙書五服圖

○赤土ノミ有テ靑苗ナシ　白氏文集曰捕蝗々々者誰子天熱日長飢欲死興元兵久傷陰陽和氣蠱蠹化爲蝗始自兩河及三輔荐食如蠶飛以雨々飛蠶食千里間不見靑苗空赤土河南長吏言憂農課人晝夜捕蝗虫是時粟斗錢三百蝗虫之價與粟同云

○餓莩(ガヘウ)　餓莩滿岐ト孟子ニ見タリ飢死ノ人チマタニ多キ事ソ

○飢饉　漢元帝紀救民飢饉師古曰穀不熟爲飢蔬不熟爲饉又菜不熟曰饉

○朝餉ノ御供(アサカレイノクゴ)　朝ノ御膳ノ事也

○檢非違使(ケヒイシ)　唐名大理ト云物ヲ糺明判斷スルノ官ナリ尤其人ヲエラヒテ任スル者也職原抄曰此云使廳淳和天皇御宇天長年中初置之異朝尤重出職云云　又曰爲國家之樞機歷代以爲重職也

○九年之蓄　記曰三年耕必有一年之食九年耕必有三年之食以三十年之通雖有凶旱水溢民無菜色然後天子食日擧以樂云云　人ノ飢タル色ヲ菜色ト云也故事淵海ニ見タリ

○下情上通　下情上通上下安ト白氏文集ニ見タリ昔周ノ成王ノ臣ニ召公名ハ奭ト云人アリ直ニ訴ヲキカネバ明ニ理非ハ決セラレヌトハ甘棠樹ノ下ニ居テ民ノ訟ヲ直ニ聞タアヒテ明ニ理非ヲ決斷シタマウ故ニ民ヨロコンテ其德ヲ思ヒテ其樹ヲキラナンタソ召公ハ周公ト左右タリ文粹曰周公在左召公在右云云

○虞芮ノ訴　虞ト芮トノ二國田ヲアラソウテ數年決セスアル時相謂テ曰西伯ハ仁人也ユイテ是ヲタヽシ然シテ西伯其ノ國境ヘ入ル田ヲ耕ス者ハ畔ヲユ

ツリ行ク者ハ路ヲユツル虞芮ノ君相共ニ曰クア丶吾等ハ小人也以テ君子ノ朝ニ入ヘカラストテ其ヨリ歸リテ前ニアラソフ處ノ田ヲ閑田トナス閑田トハ耕サスシテ荒タル田ヲ云ソ西伯トハ即チ周ノ文王ノ事也此ノ事家語ニ見タリ

○刑鞭モ朽ハテ　朗詠集曰刑鞭蒲朽螢空去諫皷苔深鳥不驚　言ハ刑鞭ハ刑罪ノ鞭也蒲ヲ以テ作ルソ罪アル人ヲ此鞭ニテ打也然ルニ治リタル世ニハ罪人モナケレハ刑鞭モ久ク取出サス朽ハテケルニ依テ螢ト化シテ去ルソ古語ニ腐草化爲螢ト云ソ諫皷ハ帝王ノ政タヾシカラサレハ此鼓ヲ擊テイサムルソ然ルニ帝王聖德ニシテ國家無爲ナリケレバイサムヘキ事モ無ソ故ニ諫皷モウツ人ナケレハ鳥モ驚カヌソ

○命世亞聖ノ才　亞聖ハ聖人ニ次ト云意ソ孟子題辭曰可謂直而不倨曲也不屈命世亞聖之大才者也

○齊桓覇ヲ行　覇者把也末第四卷ニアリ讓リヲ不受無理ニ威ヲ以テ國ヲ把ヲ覇王ト云ソ諸侯ノ上トシテ威ハアレトモホメタ事テハ無ソ

○楚人弓ヲ遺　楚ノ恭王獵ニ出テ弓ヲ遺ル左右ノ人コレヲ求メントス王ノ曰止ヨ楚人弓ヲ遺レハ楚人コレヲ得ン孔子聞テ曰ク惜哉大ナラサル也人ヲ遺レハ人是ヲ得ント不云シテ何ソ必シモ楚ナラン說苑ニ見タリ

○草創　草創ハ取立ル始ヲ云也下學集ニ見タリ

○守文　漢書外戚傳卷第六十七上曰繼體守文之君顏師古注曰繼體謂嗣位也守文言遵成法不用武功也云云　守文ハ國家ヲ治メタモツ義也

○三載　三年之事也　○尊崇　尊ヒアカムル也

○立后　准三后又略云准后也准后者皇大后宮祖母也皇后宮國母也中宮也又云准三后見下學集大皇大后宮職帝王祖母也皇大后職帝王母也皇后宮職帝王之妻也已上　謂之三宮和漢同之中宮即皇后也本朝並置二宮太無其謂然而光仁御宇被置此職以來代々並置仍號四宮云云　職原抄ニ見タリ又周禮注皇后正寢一燕寢五是爲六宮夫人以下分居焉帝王立適后三夫人九嬪二十七世婦八十一女御職秩載自漢武元之後世增淫費乃至掖庭三千增級十四云云

○冊（カシツク）

○毛嬙西施絳樹青琴　皆美女也　文選ニ見タリ

○鏡ヲ掩フ　耻タル意也三體詩ニ高歌一曲掩明鏡昨日少年今白頭ヲ作タソ

○君恩葉ヨリモ薄　寵愛ノナキヲ云ソ秋胡子ヲ題スル詩曰郎恩葉薄妾氷清

○一生空ク　白氏文集曰一生遂向空床宿秋夜長夜長無睡天不明耿々殘燈背壁影蕭々暗雨窓打聲春日遲日遲獨坐天難暮宮鶯百囀愁厭聞梁燕雙捿老休妬鶯歸燕去情悄然春往秋來不記年唯向深宮望明月東西四五百廻圓今日宮中年最老云云

○三千寵愛　長恨歌ニ詳也

○六宮周禮云天子后立六宮鄭氏注云前一宮後五宮也五者后一宮三夫人一宮九嬪一宮二十七世婦一宮八十一御妻一宮后正位宮闈體同天座六宮ハ上陽宮華清宮蓬萊宮葡萄宮芙蓉宮連理宮南宮長生殿也六宮粉黛無顏色ト作タソ

○天子　白虎通云王者父天母地亦曰天子虞夏以上未有此名殷周以來始稱王者爲天子也禮記云惟天子受命於天故曰天子

○顧盻（カヘリミヽルソ）　顧ハ青顧トテウラヤカニ人ヲ見ルカタソ喜テ見時ハ眼青怒テ見時ハ白ソ盻ハ斜ニ見ルカタチ也　○殊艷尤態　美ナル體ソ

○善巧便佞　言ヲ巧ニシテ佞人ナル者ソ論語ニ便佞ハ口才也

○皇后元妃　キサノ事也職原ニ見タリ

○評定雜訴　評ハ量也諸事ヲ評議シテ決定スルソ同雜訴ハ萬ノ公事訴訟ノ義也　准后前ニ見タリ

○奉行　言ハ上ノ意ヲウケタマハテ諸事ヲトリ行事也

○關雎樂而不淫哀而不傷　毛詩第一ニアリ關雎鳥ノ名ソミサコト云鳥ソ雌雄一處ニ不居ソ是ハ文王后妃ノ德ヲホメテタトヘタソ關雎ノ事ハ毛詩ノ正義ニ色々ニ云タソココニハ略シテ云フ

○螽斯　毛詩之篇名也　后妃子孫衆多也言螽斯不妬忌則子孫衆多也詩大全曰螽音終斯字只語辭　螽斯ハイナコ虫也子ヲ多クウム也官女多クシテ皇子御繁昌ナルニタトヘタリ

○御子左　二條家號御子左

○御坐（ヲワシマス）　○志學　十五歲也見論語

○六義　六義者風賦比興雅頌也文選注云歌事曰風布義曰賦取類曰比感物曰興政事曰雅成功曰頌各隨作

者之志名也
○淺香山　難波津ニサクヤ此花冬籠リ今ヲ春ヘト咲
ヤ此花　歌ノ父トス
淺香山陰サヘミユル山ノ井ノ淺クハ人ヲ思フモノ
カハ　歌ノ母トス
○總角（アケマキ）　杜詩曰總角愛聰明注曰詩總角丱
兮注聚兩髦也ヒタヒカミユヒタル子ノ事也
○春宮　太子曰東宮選詩正體育德於少陽注謂太子繼
天子之體育德東宮少陽ハ東方又震爲長子東屬震故
事淵海　天子ニ成タマフベキ人春宮立セタモフ職
原抄ニ詳也
○進（マイラスル）
○一ヲ聞テ十ヲ悟ル　論語曰回也聞一以知十云云　利
根聰明ナル義也
○三諦　空假中之三也
○莂別（キヘツ）　聲聞未來成道之時如來ノ授記兼テ
定事ソ
○烏芻沙摩（ウスサマ）　○潜（ヒソカニ）
○樣々大法　山門四箇大法　安鎭　熾盛光
七佛藥師　山門獨修之　普賢延命東寺兼修之
東寺大法　孔雀經　仁王經　請雨經
三井大法　尊星王　法華法　金剛童子
○山臥　大峯葛城諸山ニ遍歷シ常ニ山中ニ宿ス故ニ
山臥ト云下學集云役行者文武帝時人也年三十餘棄
家入葛城山居焉持孔雀明王咒乘五色雲優遊仙府驅
逐鬼神以爲使令云云　山臥者是役行者之末流也
○護摩　梵語ニ護摩此云燒言燒滅一切惡事之根本也
有內護摩有外護摩
○錦織（ニシコリ）　○足助（アスケ）
○累葉　重代之義ソ
○顯職　顯職ト云ハ外記官史式部民部烝彈正忠勘解
由判官等也職原ニ詳也
○蘭臺　辨官ノ唐名ナリ言ハ此官ニ任ズル人ハ御前
近ク召仕ハル故ニ身ヲ清ク香シクスル也蘭ハフチ
ハカマトヨム香ハシキ草也
○職事　藏人也內侍ノ宣トテ天子ノ被仰出事ヲロツ
カラ出納之官ニ課テ事ヲ諸人ニ告知スル職也
○欵狀　クハンノ音ナレトモクハシヤウトヨム禁中
ヘ官ナト望ム時ノ狀也　○緬（アカメテ）
○眤（ムツヒ）　○髻（モトヽリ）

○盻形（ミメカタチ）　○褊單（ス、シノヒトヘ）
○韓昌黎　排勻曰韓愈字退之以六經之文爲諸儒倡學者仰之如泰山北斗云謚文公號昌黎先生
○折（ワカツ）
○晚唐　唐ノ代二十二主二百八十八年ノ內ヲ盛唐中唐晚唐ト三ツニ分ツソ唐ノ高祖ヨリ第七主玄宗天寶ノ末ニ至テ盛唐ト云天寶ヨリ第十二主憲宗ノ元和ニ至テ中唐ト云元和ヨリ第二十二主濮宗ノ亡ニ至テ晚唐ト云也
○傑出　智慧百人ニ過タルヲ豪ト云千人ニ過タルヲ傑ト云萬人ニ過タルヲ英ト云淮南子ニ見タリ
○猶子　兄弟ノ子ヲ云即チ姪也千字文曰猶子比兒注曰禮記曰兄弟之子比己之子故曰猶子
○韓湘　排勻曰愈姪老成之子字淸夫云云
○逍遙　アソブ意也莊子ニ自得逍遙トアリ
○優遊　タノシム意也曲禮曰優遊喜樂注曰優遊自得之カタチ也
○眞宰之臂ヲ掣　眞宰上訴天應泣杜韻府
○壺中ニ天地ヲ藏　神仙傳曰壺公者不知其姓名汝南費長爲市椽云云　公入壺中人莫見之唯長房於樓上見之知其非常人乃日々掃除壺公坐進餠餌公受而不謝如此積久公知長房篤信謂曰依暮後無人時更來長房如其言而往公謂曰見我跳入壺便隨我跳長房承公言試跳即入壺但見有日月有天地又樓觀五色閣道左右傳者數十人公曰我仙人也云云　詩云壺中自有佳山水終不重尋五老峯云云
○橘裏　巴園人收兩人橘如三斗盎剖之有二叟相對身長尺餘象戲一叟曰橘中之樂不減商山但恨不得深根固蔕爾一叟曰僕飢矣頭然哺食之食訖以水噴地爲二白龍而去幽明錄
○左遷　人道尙右以右爲尊故非正之術曰左道謫官曰左遷自漢以來至唐亦謂去朝廷爲州縣曰左遷
○謫居　ナカサレテ居ル配所ヲ云
○九重　ミヤコノ事也京ハ九條アリ故ニコヽヱト云
○癡人　ヲロカナル人也
○餘波　ナコリ三知抄曰餘波ナコリ名殘トモ書ク長恨歌傳曰浴日餘波云云
○寢覺（ネサメ）　○等閑（ナヲサリ）
○境觸（ヲリニフレ）
○貞女　タヽシキ女也古語曰忠臣不事二君貞女不見

兩夫　　　　○無端(アチキナク)
○宍賢　アナカシコシト云ハアナカマヱテト云義也下學集曰宍賢上古時倭漢兩國未知家人居土窠恙虫螫人故本朝書札末相勸曰宍賢言土窠之宍賢閉塞可防恙虫
○夙　ツト、ハ早朝ノ事也
○高齁鼾(タカイヒキ)　○匿地(クケチ)
○颯(サツト)　○屹(キツト)
○帶出(ヲヒキイタス)　○鋒(キツサキ)
○周障騷(アハテサワグ)　○磨磨(スリスリ)
○胡簶(エヒラ)　○櫓(ヤクラ)
○打番(ウチツカユ)　○狩野(カノ)
○衣搨(イスリ)　○扉(トヒラ)
○這(ハウテ)　○喚(オメク)
○白狀　白狀トハトラハレテ隱謀ヲ告アラハスヲ云也
○大理　前ノ檢非違使ノ注ニ見タリ
○肥馬塵　富貴ニシテ人ノウラヤミ隨フ義也　杜詩曰朝扣富兒門暮隨肥馬塵殘盃與冷炙到處潛悲辛
○宜哉　ムヘナルカナトハモツトモト云義也古歌曰吹カラニ秋ノ草木ノシホルレハムヘ山風ヲ嵐ト思ヘハ
○不義而富　論語第四述而篇曰不義而富且貴於我如浮雲云云　注曰富貴而不以義者於我如浮雲非己之有也言ハ道ニアラスシテ富貴ナルハ我物ニアラス天ノウカベル雲ノ如シ
○牽牛織女　三知抄曰牽牛ヒコホシ男七夕ノ事也織女ヲリヒメ女七夕ノ事也ト云　烏鵲橋ハカサヽキノハシ也白雲集ニモカサヽギノ橋ハ七夕天河ノ橋ノ異名也ト云リカサヽキノ渡セル橋ト中納言家持ノ歌ニヨメリ朗詠集七夕詩曰憶得少年長乞巧竹竿頭上願糸多大夫房覺明之注曰荊楚記曰七夕婦人結綵縷穿七孔ノ針或ハ以金銀鍮石爲針陳瓜菓於庭中以乞巧有蟢子網於絲上則以爲得乞巧奠ノ事奧ノ年中行事ノ處ニ詳也
○乞巧奠(キツカウテム)
○時節(ヲリフシ)　時分同上境節同上
○騷人　騷人墨客トテ詩歌ヲモテアソヒ風流ナル人ヲ云ソ唐詩曰騷人遙駐木蘭舟
○伶倫　音樂ヲ奏スル人ヲ云也又伶人トモ云

○月卿　公卿ノ事也大納言以上ノ人ヲ公卿ト云也
○雲客　殿上人ノ事也昇殿シタル人ヲ云也
○中夏　ミヤコノ事也尚書舜典曰蠻夷猾夏注曰猾亂夏明而大也魯氏曰中國文明之地故ニ曰華　四時之夏疑亦此義也
○行事(アリサマ)
○告文(カフモム)又(コクフム)
○眩餌(メマヰハナチ)　○澆季末世ヲ云ナリ
○塗炭　道ノスタレタルヲ云也尚書曰有夏昏德墜塗炭云云　夏桀闇亂不恤下民々之危險若陷泥墜火無救之者
○懼恐(オチオソル)　○綺(イロヒ)
○罪ノ疑シキ　罪疑惟輕功疑惟重　刑疑附輕賞疑從忠厚之至　尚書大禹謨ニ見タリ
○赦免　トカヲユルスコト也

第二巻

○三公　大師大傅大保是也倭朝之三公ハ大政大臣左右大臣是也職原曰異朝三公者皆則闕之官也爲師傅保職棟梁于諸官鹽梅子帝道者也云云
○九卿　漢置十二卿正卿九太常光祿衛尉太僕廷尉鴻臚宗正少府司農晉百官志古者諸侯皆名執政大臣曰正卿周後始有三公九卿之號　匀府倭朝ニハ八卿アリ中務式部兵部治部刑部大藏官内是也是ヲ八省ト云也
○伽藍　釋氏要覽云伽藍梵語也加藍摩此云衆園々者生植之所佛弟子居之取生植道本聖果之義
○一人出給フ　吾君不遊有深意一人出兮不容易六宮從兮百司備八十一車千萬騎云云　白氏文集驪宮高ノ詞也
○鳳輦　帝王之ノリモノ也
○萬歳ヲ呼　故事合璧曰翌日親登崇嵩御史乘屬在旁吏卒咸聞呼萬歳者三其令祠官加增大室祠云云　言ハ漢武帝嵩山ヘ上リタマヘバ萬歳々々ト山カ呼フタソ日本ニモ筑波山ヤラ萬歳々々萬々歳ト呼フタト云ソ萬歳ヲ呼トハ國治マリ目度事也
○供養　佛ニ香花ヲ供シ僧ヲ養ナヒ施ヲ云科注曰賤施高曰供養自高施賤曰利益
○星霜　年月ヲ經ルト云意也
○行事(フルマイ)
詠詩漢高三尺劒坐制諸侯張良一卷之書立登師傅

○龍顏　天子ノ御事也

○咫尺　チカック義也

○朝夕（テウシャク）

○澆漓　是モ末世ノ事也

○三衣　一曰僧伽梨即天衣也二曰欝多羅僧即七條也三曰安陀會即五條福衫裙爲三衣誤也匀府

○比（タクヘ）

○巓（タウケ）

○鳥カ鳴ク東　鳥カ鳴アツマト云如何ナル詞ソ只東國ヲ指ス義也アツマト云ン枕詞也玄中記云東南有桃都山上有大樹名桃都枝相去三千里上有天雞日初出照此樹雞即鳴天下雞皆隨之鳴云云仍テ雞カ鳴ク東トツヽケ侍ル也雞ノ字ヲトリトヨムソ又東國ヲアツマト云事ハ昔景行天皇ノ御子日本武尊東夷ヲ鎭メ給ヒシ時相摸ヨリ上總ヘ渡ラントシ給ヒシニ海中ニシテ惡風起リテ御船已ニアヤウカリシカハ弟橘媛海ニ入テ風ヲ靜メタマフ御船無爲ニ通リケレハ尊ヤカテ夷ヲ平ケ給ヒケリ其後サテ吾嬬ト三歎シ給ヒキ因テ山東ノ諸國ヲ吾嬬ノ國ト云也壒囊抄ニ詳也吾嬬ヲ吾妻トモ書也

○直下（ミヲロス）

○逆鱗　龍ノ喉ノ下ニサカシマナルウロコアリ物是ニカヽルハ則怒テ人ヲ殺ス故ニ帝王ノ怒リタマフヲ逆鱗ト云龍ヲ王ニタトユルソ龍顏ノ龍紋ノナト云モ帝王ノ事也

○三族罪　一人有罪刑及父母兄弟妻子太平御覽又尙書ニ見タリ韻府曰三族亦謂父母妻

○因果　因果經云欲知過去因見其現在果欲知未來果見其現在因　私云ムクヒノ罪ニハモレヌソ

○近江路　古歌云近江路ヲ朝立クレハウネノヽニ田鶴ソ鳴ナル明ス此夜ハ宇禰野ハ野路ノホトリナリ

○時雨モイタク　古今貫之歌ニ
白露モ時雨モイタクモリ山ノ下葉ノコラス色ツキニケリ

○鏡山　古今大伴黑主歌ニ
鏡山イサ立ヨリテ見テユカン年ヘスル身ハ老ヤシヌルト

○不破　新古今家隆歌ニ
人スマヌ不破ノ關屋ノ板ヒサシアレニシ後ハタヽ秋ノ風

○丹生少屋　ハニフノヤトヨム半伏小屋トモ埿小屋トモ書也ヤフレタル家也三知抄曰古鄕ノ前ノ川岸ニハフシテトヨメリ又住吉ノ松ノ根コトニハニフ

シテ是モ士ノクツレテ岸ノウツホナル體也云云
○鷄唱　朗詠詩鷄人曉唱聲驚明王之眠山谷詩晨鷄催
不起トアリ
○疋馬　一疋ノ馬ナリ唐詩官柳青々匹馬嘶
○サヨノ中山　新古今西行歌ニ
年タケテ又越ヘキト思ヒキヤ命ナリケリサヨノ
中山
○隙行駒　前魏豹傳曰人生如白駒之過隙注曰白駒謂
日景トアリ
○亭午　日中ヲ云ナリ東坡詩日輪亭午汗珠融注云日
在午曰亭午トアリ
○昔南陽縣　朗詠集曰谷水洗花汲下流而得上壽者三
十餘家注曰九日翫菊詩序白氏六帖曰南陽縣有菊方
有流水汲下流者有三十餘家皆得上壽云云　翹林文苑
詩學大成等ニ詳ニ見タリ
○宇都ノ山　伊勢物語歌ニ
スルカナル宇都ノ山邊ノウツヽニモ夢ニモ人ニ
アワヌ成ケリ
○富士ノ高峯　新古今歌ニ
富士ノネノケフリハナヲソ立ノホル上ナキモノ
ハ思ヒ成ケリ
○五噫歌　梁鴻過京師作五噫之歌曰陟彼北芒兮噫顧
覽帝京兮噫人之劬兮勞噫宮室崔嵬兮噫遼々未央兮
噫　後史
○質(ムクヒ)
○君雖不君　孝經曰君雖不君臣不可以不臣父雖不父
子不可以不子
○叩(ヒカユル)
○揆一也　孟子卷八曰得志行乎中國若合符節先聖後
聖其揆一也云云　曰揆度也其揆一者言度之而道無不
同也云云　尙書舜典曰納于百揆注曰揆度也百揆者揆
度庶政之官
○粧坂(ケハヒサカ)
○君視臣　君ノ能ネンコロニ召使ハレハ臣モ君ヲ大
切ニ思フヘシ君ノ臣ヲ使フコト土ヤアクタノ如ク
ニ惡クセラレハ臣モ亦君ヲ敵ノ如クニ思フト也孟
子曰君之視臣如土芥則臣視君如寇讎君之視臣如手
足則臣視君如腹心君之視臣如犬馬則臣視君如國人
云云
○三菩提　三菩提トハ心經注曰梵云阿此云無梵語耨

多羅此云上梵語三此云正梵語藐此云等梵語菩提此云正覺是阿耨多羅三藐之菩提者乃無上正等正覺謂無上眞性也
○譜第　職原曰名家譜第輩云云　第トハ其家ノ古來久シキ被官也重代ト云ハ三代ホト傳ハリタルヲ云譜第ハ三第ホトヲハ不言
○越路　コシチトハ北國也塞ノ字ヲモコシチトヨム北塞ト云ソ又三越路トハ越前越中越後ヲ云也皆都ノ方ヲ前ニアテヽ云ソ備ノ三州ヲモ都ノ方ヲ備前ト云也
○頭燃　冷齋夜話曰夫出家兒塚間樹下辨那事如救頭然云云　救ハ拂也然ハ燃ト同
○綿密　武帝曰用意綿密乃此史言ハ綿密トハ疎ナラス其事ハカリヲキヒシク思フ事也資朝卿現世ノ事早思ヒ捨テヽ一向ニ觀念工夫ハカリト云義也頭然ヲ拂フトハ捨去ノ意也
○按察(アセチ)　　○五蘊　五體ナリ
○六方　衆徒之下公事沙汰ヲ取アツカウ役者也
○四大　地水火風ナリ千字文ニ詳ナリ
○八大龍王　法華序品云有八龍王難陀龍王跋難陀龍王娑伽羅龍王和修吉龍王德叉迦龍王阿那婆達多龍王摩那斯龍王優鉢羅龍王
○連理　長恨歌曰在地願爲連理枝云云言ハ樹一ツニシテ枝相向テ生スルヲ連理枝ト云ソ契深キヲ云也
○前相　サキニシメスカタチ也先表也タトヘハ目ヒクメケハ酒食ヲ得燈ニ花アレハ錢財ヲ得乾鵲サワケハ客人來リ蜘蛛アツマレハ百事ヨキカ如シ是等ヲ前相ト云也又惡事ニモ前相カアルソ狗床上ニ登リテ臥シ鼠啣々トナケハ禍生スルカ如シ
○大地震　地動ノ事詳ニ法苑珠林大集念佛三昧經立世阿毗曇論等ニ見タリ智度論曰地動有四種一火二龍龍三金翅鳥四天王二十八宿等云云　春秋左氏傳文公九年九月癸酉地震正義曰陽伏而不能出陰迫而不能蒸遂於是有地動云云　孔晁云陽氣伏於陰下見迫於陰故不能升以至於地動是地道安靜以動爲異也釋地動篇曰陰勝陽臣逆君之時必有地震變　天文錄曰地以秋動有音起兵
○貳(フタコヽロトヨム)　○重耳　大王之事具末
○行啓(キヤウケイ)　○七大寺詣
○東大寺　聖武天皇建立神龜五年造立之

○興福寺　不比等　和銅三年造立號山階寺
○元興寺　崇峻天王元年推古造立本法興寺　飛鳥寺
○大安寺　皇極天皇元年始之蘇我馬子和銅三年畢本
名百濟寺
○藥師寺　天武天智天皇元年造之
○西大寺　高野天王天平神護元年造立之天平勝寳元
年造之同七年造畢
○法隆寺　聖德太子建立號伊香留香寺
○比叡辻(セエツシ)　○仰木(アフキ)
○赤山(セキサン)　○雙手(カタテ)
○稚(ヲサナシ)　○逼々(ツマリツマリ)
○峪(カケ)　○格勤(カクコ)
○攝政家大臣家大將家將軍家ナトノ家務職ヲ持ホト
ノ器量ナル人ヲ云格ハ法也家ノ法度ヲ勤ムル心乎
職原ニモ諸家ノ勤中殊撰重代器量所補也ト任尉人
ノ事ニ云ヘリ
○下松(サカリマツ)　○早雄(ハヤリヲ)
○岸破(カハト)　○石室(イワヤ)
○居長高(イタケタカ)
○皇居　王ノ御座アル處ヲ云ソ

○要害　我タメニハ肝要敵ノタメニハ害アル也
○蟠龍　天子ノ衣服ヲ云也天子ノ御衣ニハ龍ヲヌイ
モノニスルソ故ニ云也韻府袞衣五章裳四章皆綉龍
蟠曲
○婬輿　タマノコシナリ結構ナルノリモノヲ云
○上卷　具足ノウシロニ付ルクミサケ也三知抄曰東
方アケマキハラマキノクミサケ也云云　愚按スルニ
童子ノヒタイ髪ユヒタル上卷クシサケニ似リ故ニ
童子ヲアケマキト云歟又ハ髪ヲ上テマク意歟
○阿(ヲモネリ)
○萬死ヲ出　政要云太宗曰玄齡昔從我定天下備嘗艱
苦出萬死而遇一生所以見草創之難也云云
○須臾　シハラクトヨム少ノ間ノコト也中庸曰道也
者不可須臾離也云云　唐詩世間甲子須臾事
○六軍　長恨歌曰翠花搖々行後止西出都門百餘里六
軍不發無奈何云云
○先蹤　先例也
○阿新(クマワタ)又(アニイ)
○天狗　眼ニ不見シテワサヲナス也杜工部天狗賦曰
上揚雲旓兮下列猛獸云云

○ヤンコトナキ　ホメタル詞ナリ又上﨟ヲヤンコト
ナキ人ト云源氏桐壺ノ巻ニヤンコトナキニハアラ
ヌトアリ花鳥ニヤンコトナキトハキハメテ上﨟ノ
品ヲ云トアリ無止ト書タリ又云上タル人ハ思召立
コトヲ止タル也
○雜賀（サイカ）　○鑊湯（タヽフノユ）
○敷雙（シキナラヘ）又處雙（ヲキナラヘトモアリ）
○幢（ハタホコ）　○返（ヒルカヘス）
○趼（サスラヒ）　○蔦鷄冠木（ツタカイテ）
○明曉（アカツキ）　○松明（タイマツ）
○髻（モトヽリ）
○卜部宿禰（ウラヘノソコネ）
○藂祠（サウシ又ヤシロ）　○唐輪（カラハ）
○鐵漿黑（カネクロ）　○覺束無（ヲホツカナシ）
○眸（マナチリ）　○醎（ヒン）
○和東（ハツカ）　○漣（ツヽイテ）
○顰（シハメテ）　○咽（ムセフ）
○爴（ツカム）
○漂泊　タヽヨウトヨム東漂西泊トアリ
○連枝　チキリ深キ義也千字文ニ見タリ

○社稷　序ノ注ニ見タリ
○紀信カ謀　紀信乃乘王車ノ黄屋左纛注曰李斐曰天
子車以黄繒爲蓋裏纛毛羽幢也在乘輿車衡左方上蔡
邕曰以犛牛尾爲之如或騑頭或在衡師古曰纛音毒又
徒倒反　見漢書第一高帝紀　犛韵府支韵黑色牛又
肴韵　言ハ黄屋ハ天子ノ車也結構ナル事ソ左纛ト
ハハタノコトナリ
○千載　千歳ナリ載ノ字モトシト云意ソ十九史界唐
紀玄宗皇帝ノ處ニ曰天寶三年春正月改年曰載云云
○頃刻　スコシノ間ノ事也

洛中條里　横小路
一條　正親町（ヲホキマチ）
土御門　鷹司　近衛　勘解由小路
中御門　春日　大炊御門　冷泉
二條　押小路　三條坊門　姉小路
三條　六角　四條坊門　錦小路
四條　綾小路　五條坊門　高辻
五條　樋口　六條坊門　楊梅
六條　左女牛（サメウシ）
七條坊門　北小路　七條　鹽小路

八條坊門　梅小路　　八條　　針小路
信濃小路　唐橋　　九條
堅小路
西朱雀(シユシヤク)坊城　壬生(ミフ)櫛笥(クシケ)
大宮　猪熊　　堀川　油小路
西洞院　町　　室町　烏丸
東洞院　高倉　　萬里小路(マテノコウヂ)
富小路　京極　　東朱雀

第三巻

○王扆　王之後ニ立物也屏風ノ樣ナル物ソ具末
○攀折(ツヽラヲリ)　○向上(ミアクル)
○鏃(ヤシリ)
○金磁頭(カナシトウ)又矢頭トモ
○坤軸　又地軸有四柱三千六百軸犬牙相牽　博物志
○河圖括地象曰地有三百六十軸
○入頽(ヒトナタレ)　○印具(イク)
○寒河(サムカウ)　○蒲原(カンハラ)
○小見山(コミヤマ)
○須彌山頭高八萬四千由旬如々居士錄飜譯名義集云
蘇迷盧　西域記云唐言妙高舊曰須彌又曰須彌樓四寶合成云云
○日月迷盧半五十一五十云云　俱舍
○三種神器　元亨釋書十七載之又塵荊抄六載
○倒轉(タヲレマロフ)　○贓(キタナシ)
○步跳(カチハタシ)
○史記ニ云帝桀之時自孔甲以來而諸侯多畔夏桀不務德而武傷百性云云　弗堪廼召湯而囚之夏臺已而釋之湯修德諸侯皆歸湯遂率兵以伐桀走鳴條遂放而死
○分野(アリサマ)
○越王會稽ニ降　第四本經ニ具也
○白屋白蓋之屋以第覆之蕭望之傳注周公下白屋　樂府
○八苦　生苦老苦病苦愛別離苦寃憎會苦求不得苦五盛陰苦
○天上五衰　一頭上花萎二腋下汗出三兩目數瞬四項中光滅五不樂本座又云身光不現花鬘萎頓兩腋汗流體便臭穢不樂本座　藏乘法數
○異聞集　呂翁經邯鄲道上邸舍中有少年盧　生自貧困言訖思睡主人方炊黃粱翁探囊中一枕以授生曰枕

此則榮遇如意生枕之夢自枕竅入至其家身歷富貴五十年老病而卒欠伸而寤顧呂翁在傍主人炊黃粱猶未熟生謝曰先生此室吾之欲

○要(サイキル)又(ヨコキル)

○鑁(ムラカル)　○天返(テヘシ)

○混(ヒタスラ)

○論語曰子路曰子行三軍則誰與子曰暴虎憑河死而無悔者吾不與也必臨事而懼好謀而成者也

○天竺　東天　西天　南天　北天　中天　惣而六億六萬二千八百六箇國也一億ハ十萬也又萬ノ萬ヲ曰億

○支那　四百州一千九百四十四箇國ト云ヘル一書アリ

○深須(ミス)　○常盤木(トキハ)

○茵(シトネ)　○諸兄(モロヘ)

○鬘(ヒムツラ)　○有王山(アリワウサム)

○結城(ユウキ)　○網代(アシロ)

○楢原(ナラハラ)　○窈瞑(ヨウメイ)

○氈城(セムセイ)　○吐田(ハムタ)

○廻(マハツテ)　○高志(カシ)

第四卷

○楚囚　春秋第十二成九年傳云晉侯覩于軍府見鍾儀問之曰南冠而縶者誰也有司對曰鄭人所獻楚囚也使稅之召而弔之再拜稽首問其族對曰伶人公曰能樂乎對曰先父職官也敢有二事使與之琴操南音公曰君王何如對曰非人之所得知也固問之對曰其爲太子也師保奉之以朝于嬰齊而夕于側也不知其他公語范文子文子曰楚囚君子也言稱先職不背本也樂操土風不忘舊也稱太子抑無私名二卿尊君也不背本仁也不忘舊信也無私忠也尊君敏也仁以接事信以守之忠以成之敏以行之事雖大必濟君盍歸之使合晉楚之成公從之重爲之禮使歸求成

○武陵桃源　避秦亂之事晉大元中武陵漁人溪行忽逢桃花林云云

○天台桃源續齊諧記曰漢明帝永平十五年剡縣有劉晨阮肇二人共入天台山採藥忽迷失路糧盡乏望山頭有一樹桃二人共取食少健下山得澗水飲之幷各澡洗又見蕪菁葉從山腹流出次又有杯流出中有胡麻飯屑二人謂相去人不遠因入水々深四尺許得一里又度一山

出大溪見二女子顏容要妙絶言未有便喚劉阮姓名似有久舊歓悦因曰劉郎等來何得晩也因邀過家廳舍服飾無不精花東西有牀帷縵七寶纓絡非世所有左右直息青衣并悉端正都無男兒須臾與胡麻飯山羊脯食之甚美設甘酒又有數仙各捉三五桃子至女家云來慶女婿出樂器歌調作樂日既向暮仙女各還去劉阮就所邀女宿語言切美行夫婦之道住十五日求還女云令來至此皆是宿福所招得與仙女交接流俗何可樂遂住半年天氣和適如二三月中百鳥哀鳴能不悲思求去甚切喚諸女作琴歌共劉阮去從東洞口去不遠至大道隨其言果得還家都無相識鄉里怪異乃驗七世子孫傳聞上世祖翁入山去不知所在今乃是既無親屬栖宿許所欲還女家尋山路不得云云

○史記六十一云周武王已平殷亂天下宗周而伯夷叔齊耻之義不食周粟隱於首陽山釆薇而食之及餓且死作歌其辭曰登彼西山兮釆其薇矣以暴易暴兮不知其非矣神農虞夏忽焉沒兮我安適歸矣吁嗟徂兮命之衰矣遂餓死於首陽山由此觀之怨耶非耶或曰天道無親常與善人若伯夷叔齊可謂善人者非耶云云

○灩澦　エンヨ處ノ名也　○海原（ウナハラ）

○隮（スリヒシホ）　○桑門（ヨステヒト）

○玄中記云東南ニ有桃都山上有大樹名桃都技相去三千里上有天雞日初出照此樹雞即鳴天下之雞皆隨鳴ト云云 仍雞カ鳴東ト連ケ侍也又東國ヲアツマト云事ハ昔景行天皇之御子日本武尊東夷ヲ鎮給シ時相模ヨリ上總ヘ渡ントシ給ニ海中ニシテ惡風起テ御舟已ニ危カリシカハ弟橘媛海ニ入テ風ヲ靜メ給テ船ヲ無爲ニ通シケレハ尊ヤカテ夷ヲ平ケ給ケリ其後サテ吾嬬ト三歎シ給キ因リテ山東ノ諸國ヲ吾嬬ノ國ト云也　壒嚢抄

○淮南子曰桃都山大樹曰桃都有天雞日出即鳴天下雞皆鳴

○柵（シカラミ）　○俊明極（シユンミンキ）

○金馬　孝經注云漢武帝使學士金馬門侍詔備顧門公孫弘東方朔皆此之類也金馬門傍有銅馬故謂之金馬門也

○蘭臺者太政官又近代云辨官

○亢龍ハ　乾卦上九也位ノ背タ處ソ飛龍ハ九五　天子ノ御位也

○跉跰（サマヨウ）　○想像（ヲモヒヤル）

○強顏(ツレナク)
○晨明(アリアケ)又(アサアケ)
○假借(カイシャク)　○印南野(イナノ)
○久米(クメ)　○大川(タイセム)
○三體詩溫庭筠詩云鷄聲茅店月人跡板橋霜
○直違(スチカイ)
○氏族大全云范蠡越大夫也滅吳而歸遂乘扁舟浮於五湖號鴟夷子波之陶爲朱公三致千金再分與貧交昆弟言富者稱陶朱公云越王思其功以黃金鑄其像
○孟子曰以力假仁者覇々必有大國以德行仁者王又云五覇者三王之罪人也今諸侯者五覇之罪人也今之大夫諸侯之罪人也注云趙氏曰五覇齊威晉文秦穆宋襄楚莊也
○渠儂(カレ)
○易係辭云尺蠖之屈以求信也龍蛇之蟄以存身也
○蔑(アナトル)　○蒐(カヽル)
○進退維谷レリ詩　○殿(ヲクルヽ)
○敗軍之將不可以言勇亡國之大夫不可以圖存　史記九十一　論語朱熹注云陪臣家臣也左傳注諸侯之臣曰陪臣　春秋　伯犂之孫嚭爲吳太宰

○白馬素車者降人所乘也齊死之義也
○鑾綏(シシユ)日本之神鑾之類ソ
○枷械(テカセアシカセ)　○寠(ヤツス)
○簣(アシカ)　○眞似(マネ)
○巫覡(カンナキ)　巫　武具切覡胡的切男爲巫女爲覡玉篇
○殷名獄曰羑里文王拘於羑里通作牖史記文王拘牖里文選班彪游居賦嗟西伯於牖城
○史記九十云天與弗取反受其咎時至不行反受其殃
○長恨歌曰玉容寂寞淚欄干梨花一枝春帶雨
○偕老同穴　毛詩曰夫婦堅約之義也
○瀼々　露多貌也
○詩云伐柯伐柯其則不遠執柯以伐柯睨而視之猶以爲遠君子以人治人改而止注詩豳風伐柯之篇柯斧柄則法也睨邪視也言人執柯伐木以爲柯者彼柯長短之法在此柯耳然猶有彼此之別故伐者視之猶以爲遠也若以人治人則所以爲人之道名在當人之身初無彼此之別故君子之治人也即以其人之道還治其人之身其人能改即止云云　朗詠都良香作雞人曉唱聲驚明王之眠鳧鐘夜鳴響徹暗夫之聽

○文選巻第十九云宋玉高唐賦并序昔者楚襄王與宋玉遊於雲夢之臺望高唐之觀其上獨有雲氣崪兮直上忽兮改容須臾之間變化無窮王問曰此何氣也玉對云所謂朝雲者也王曰何謂朝雲玉云昔者先王嘗遊高唐怠而晝寢夢見一婦人曰妾巫山之女也爲高唐之客聞君遊高唐願薦枕席王因幸之去而辭曰妾在巫山之陽高丘之岨且爲朝雲暮爲行雨朝々暮々陽臺之下

○艤(フナヨソヲイ)　○徽服(ヒフク)

○潜行(センコウ)

異本說

○擅々登(ツクツクト)　○憂伏繁(ウキフシシケシ)

○忘却(アキレテ)　○押甘(ヲシクツロケ)

○詫間(タクマ)　○轉(マロヒ)

○谷(キハマル)

○自專(ミツカラホシイママニシテ)

○漬(ヒタツテ)　○瀼々(シヤウシヤウ)

○被面縛(メムハクセラレ)

○戮力(チカラヲアワス)　○排(ヲシヒライテ)

○伐柯(カラヲキル)　○無(ナイカシラ)

○蕩(トロカス)　○渠濃(カレコレ)

○航海(フナハタリ)　○千態(チヽノカタチ)

○巫覡(フカン)　○麝臍(シヤセイ)

○褰(カヽケ)　○嚭(ヒ)

○呈(アラハス)　○噤(ツクム)

○躍(アヲレトモ)

第五巻

秦大夫百里奚其先虞人家于百里因氏焉百里奚困于牛口之下秦穆公以五羖皮贖之與語國事大悅授之國政號曰五羖大夫氏族大全

○鬻皮之耻　鬻皮(シユクヒカワヲヒサク)

○管仲名夷吾少與鮑叔牙遊叔牙知其賢薦於齊桓公以爲相九合諸侯一匡天下仲之力也桓公稱爲仲父仲曰吾嘗與鮑叔賈分財利多自與叔不以我爲貪知我貧也吾嘗與鮑叔謀事而更窮困叔不以我爲愚知時有利不利也吾嘗三仕三逐叔不以我爲不肖知我不逢時也吾嘗三戰三走叔不以我爲怯知我有老母也公子糾敗吾幽囚受辱叔不以我爲耻知我不修小節而耻功名不顯也生我者父母知我者鮑子也撰管子八十六篇　排匀

○射鈎之罪　管仲齊桓公之帶鈎射後用之以爲相云云

貞觀政要任賢篇注云管仲名夷吾齊卿也初齊襄公被弑議立君高國先陰告公子小白於莒魯亦發兵送公子糾而使管仲別將兵遮魯道射中小白帶鉤糾至齊小白已立是爲桓公管仲請囚鮑叔牙請公以爲大夫後爲相遂覇天下

○呂氏春秋曰昔堯朝許由於霈澤之中曰請屬天下於夫子許由遂之箕山之下

○莊子曰堯以天下讓巣父巣父曰君之牧天下亦　猶予之牧孤犢焉用惴々然以所牧而與予々無用天下爲也牽犢而去

○許由洗耳堯召許由爲九州長不欲聞之洗耳於水濱巣父牘牽欲飲之見由問其故巣父曰子若處高屋空谷誰能見子々故浮遊俗間苟名譽汙吾犢且牽上流而飲之高士傳

○文選第二十卷曹子建上責躬應詔詩表　竊感相鼠之篇無禮遄死之義以罪棄生則違古賢夕改之勸忍垢苟全則犯詩人胡顏之譏

○鼠狼(イタチ)　○玄獺　是モ(イタチ)

○鵄(トヒ)　○跫(アシヲト)

○承塵(ナケシ)　○忌忌(イマイマシ)

○擧動(アリサマ)　○彳(タヽツム)

○隱形咒(インキヤウノシユ)

○笈(ヲイ)　○單皮(タヒ)

○叢祠(ホコラ)

○分段同居　二生死　分段生死變易生死　藏乘法數
四土同居　方便實報寂光

○目睡(マトロム)　○鬢結(ヒンスライフ)

○向上(ミアクル)　○橡(トチ)

○揉(モム)　○目合(メクハセ)

○褊(サミシケリ)　○化者(ハケモノ)

○移木立信史記六十八移作徙　商君傳曰有功者顯榮無功者雖富無所芬華令既具未布恐民之不信已乃立三丈之木於國都市南門募民有能徙置北門者予十金民怪之莫敢徙復曰能徙者予五十金有一人徙之輒予五十金以明不欺卒下令令行於民云云

○觜勾(クチハシマカル)

○獻芹　文選四十三卷嵇叔夜與山濤書又列子少異

○無端(ハシタナク)

○葛亮卒　宣王追之姜維反旗鳴鼓宣王乃退諺曰死諸葛走生仲達三國志又具末

○雌羽(メントリハ)　○裹(アカル)
○鞘(サヤ)　○槇野(マキノ)
○油錠(アフラツキ)

異本說

○志貴津(シキツ)　○射鈎(カキヲイル)
○移木信(イホクノシム)　○單皮(タヒ)
○御祓(ヲハライ)　○驛薄(ハネヲトフ)
○假冊(モテナシカシツキ)
○儼(ヲロソカ)　○芻蕘(スウシヤウ)
○脚巾(キヤハム)　○冬敎(ノリ)
○裹(アカリ)　○犯浮(ウカレ)
○忍垢(ハチヲトメ)　○風聞(ホノカニツタヘ)
○拘(トマル)　○陰(カケル)

第六巻

○御母堂(コホタウ)　○假冊(イツキカシツク)
○擬(ナソライ)　○昌泰(延喜帝之年號)
○湯淺(ユサ)　○隅田(スタ)
○杜松(ハシラモト)　○髯(ヒカユル)
○這々(ハフハフ)　○杜松(ハシラモト)

○漢書項籍傳云楚蜂起之將皆爭附君　師古注曰蠭蜂字也蠭起如蠭而起言其衆也一說蠭與鋒同言鋒銳而起者
○去來(イサヤ)
○劉伯倫酒德頌曰陳說禮法是非鋒起注說禮經法制以示先生言是非如劍戟之鋒
○及相競逐而起文選第四十七
○古宇都(コウス)　○秋篠
○志城津(シキツ)　○宿禰(ソコネ)
○讖文一作讖　說文驗也徐曰凡讖緯皆言將來之驗也韵會
○論語第十云興滅國繼絕世擧逸民天下民歸心焉
○佐用(サヨ)
○漢書列傳第一云陳勝字涉陽城人吳廣字叔陽夏人也勝少時嘗與人傭耕之壟上悵然甚久曰苟富貴無相忘傭者笑而應曰若爲傭耕何富貴也勝太息曰嗟吁燕雀安知鴻鵠之志哉秦二世元年秋七月發閭左戍漢陽九百人勝廣皆爲屯長行至蘄大澤鄉云云
○淺河(アイカハ)　○小栗栖(ヲクルス)
○太秦(ウツマサ)　○革堂(カウタウ)

○緉纈（カウケツ）　○臑當（スネアテ）

○一部（イチノヘ）

○天道虧盈而益謙地道變盈而流謙鬼神害盈而福謙人道惡盈而好謙々尊而光卑而不可踰君子之終　易

○小間（サマ）　○要須　又作勇士

異本説

○黃壤（クワウシヤウ）　○齒嚼（ハカミ）

○見懲（ミコリ）　○沒（カクル）

○千田（チタ）　○引傍（ヒツソフテ）

○遐壤（カシヤウ）　○銀鎰（キンヤク）

○籤文（シムモム）　○苔繩（コケナワ）

○安保（アフ）

第七卷

○戈鋋（クワセン）　鋋　市然切小也

○史記本記第七云　君王與沛公飮軍中無以爲樂請以劍舞項王曰諾項莊拔劍起舞項伯亦拔劍起舞常以身翼蔽沛公莊不得擊於是張良至軍門見樊噲々々曰今日之事何如良曰甚急今者項莊拔劍舞其意常在沛公也噲曰此迫矣臣請入與之同命噲即帶劍擁盾入軍門交戟之衛士欲止不內樊噲側其盾以撞以衛士仆地噲遂入披帷西嚮立瞋目視項王頭髮上指目眥盡裂項王按劍而跽曰客何爲者張良曰沛公之參乘樊噲者也項王曰壯士賜之巵酒則與斗巵酒噲拜謝起立飮之項王曰賜之彘肩則與一生彘肩樊噲覆其盾於地加彘肩上拔劍切而啗之項王曰壯士能復飮乎樊噲曰臣死且不避巵酒安足辭云云

○漢王軍滎陽南築甬道屬之河以取敖倉與項羽相拒歲餘項羽數侵奪漢甬道漢軍乏食遂圍漢王漢王請和割滎陽以西者爲漢項王不聽漢王患之乃用陳平計予陳平金四方斤以間疏楚君臣於是項羽乃疑亞父云云　將軍紀信乃乘王駕詐爲漢王誑楚々皆呼萬歲之城東觀以故漢王得與數十騎出西門遁云云

○九折（ツヽク）　○學（マネ）

○千劍破城（チワヤノシヤウ）

○霤（アマタレ）　○矢長（ヤタケ）

○口遊（クチスサミ）

○褒或作褒左傳序因行事以正褒貶

○雲梯　公輸般爲高雲梯欲攻宋墨子見楚王曰請令公輸般設攻宋之具臣請禁帶守之於是般九攻之墨子九

卻之楚王遂輟兵謂紫帶爲城以箸爲械　陳珠傳
○轉漕（テムサウ）又（コキヲクリ）轉ハ陸ヨリ馬人ニテハコフソ漕ハ海水ヨリ舟筏ニテハコフヲ云ソ
○怺（コラユル）○門楣々擔也楣也門上横梁楊妃傳云男不對侯女作妃君看女卻作門楣云云
○添（チフリ）　○知間（シルマ）
○射越（イノコシ）　○中吉（ナカキリ）
○石生（ヲシコ）　○船上（フナノウヘ）
○幸範（ユキノリ）　○今張（イマキリ）

異本說

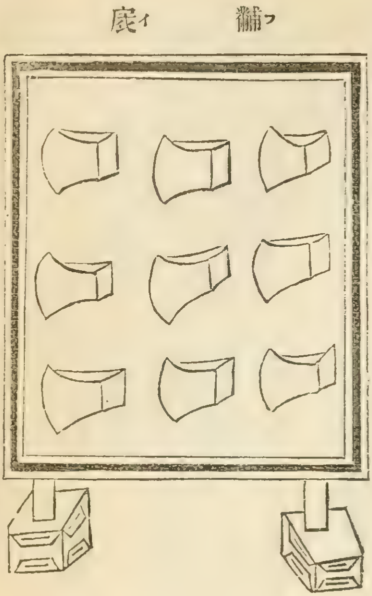
○三角（ミスミ）　○長生（ナカタカ）
○地僻（チサカリ）　○新見（ニイミ）
○厭（アクマテ）　○地畧（チヲリヤクス）
○解脫（トキユルシ）　○魯般（ロハム）
○九道（ツヽラヲリ）　○要（ヨケリ）
○護良（モリヨシ）　○勝手（カツテ）
○肆（カルカユヘニ）

第八卷

○飽間（アクマ）　○佐用（サヨ）

○上月（カウツキ）　○頓宮（トンクウ）
○武庫河（ムコカハ）　○久々知（クヽチ）
○左傳第八文公七年　宣子曰云云　先人有奪人之心軍之善謀也逐寇如追逃軍之善政也訓卒利兵秣馬蓐食潜師夜起
○旅說文旅軍云五百人旅者衆也師克以和故必相從也衆出則旅寓故謂在外爲旅周禮五卒爲旅
○校（タクラブル）
○右往左往（シトロモトロ）
○辟易　擧要云驚卻皃史記項羽紀辟易數里師古曰開張而易其本處云云
○月卿雲客　下學集云三位以上曰月卿也四位以下曰雲客殿上人也夕拜郎ト云
○警蹕　說文正行人也本作趩从走畢聲漢書出稱警入言趩警者戒肅趩者止行人霍光傳道上稱趩梁孝王傳注師古曰言出入者互文出亦有趩漢儀法皇帝輦動左右侍帷幄者稱警出殿則傳趩止人淸道　擧要
○四武衝陣　六韜ニ疾戰之篇ニ太公カ一大事ノ法也武者ヲ四手ニツクツテ車ヲ四ツ作テ四方ヘ自由ニ向テ一文字ニツイテ懸ソ太公カ秘藏シテ難義ニ及

フ時ノ手タテニハ是ヲ用ソ
○詫(ヤサシ)　　○潺(セヽラキ)
○御修法(ミシホ)
○太平記ニ玉扆トアルモ又天子ノ負扆トアルモ此ツイ立障子ノ様ナル物ヲ後ニ置テ前ニ王ノ御座アルヲ云
此圖者見新註尙書
○八珍　凡王之饋珍用八物淳音諄熬淳毋音摸炮豚炮牂音藏擣珍　漬熬　肝膋　腸脂膟ㅣ燔燎禮　羅八於前　大寳箴一云牛羊麋鹿麕豕狗狼



黼司几筵凡大朝覲大饗射凡封國命諸侯正位設黼依音扆注斧謂之黼其繡白黑文以絳帛爲質依其制如屏風賈釋云諸文多作斧字若據釆色而言即繢人職白與黑謂之黼若據繡於物上即爲金斧之文近及白近鑿曲切柔黑則曰斧取金斧斷割之義屏風之名出於漢世故引爲況舊圖云從廣八尺畫斧無柄設而不用之義
○物集女(モズメ)
○向日明神(ムカウノミヤウシム)
○賦(ヨコルヽ)
○勢撰(セイソロイ)又勢汰(セイソロイ)
○靡(ナヒク)　　○形勢(アリサマ)
○得平(トクラ)　　○赤山(ゼキサム)
○八陣　雜兵書八陣者一曰方陣　二曰圖　三曰牝
四曰牡　五曰衝　六曰輪　七曰浮　八曰鴈行
○八陣圖天地風雲飛龍翔鳥虎翼蛇蟠八勢也杜詩注永嘉薛氏云圖可見者三在云云　詳于韻府圖字孔明八陣圖
○天陣人陣唐員半千曰兵家有三陣星宿孤虛天陣山川向背也陣偏伍彌縫人陣臣謂不然師以義出沛若時雨得天之時爲天陣足食約費且耕且戰得地之利爲地陣

擧三軍士如弟子得父兄得人之和爲人陣帝曰善　史記
○六花陣　宋神宗曰李靖造六花陣大抵八陣即九軍方陣也六花陣即七軍圖陣也　紀事本末
○臑當（スネアテ）　○殖月（ウヘツキ）
○妻鹿（メカ）　○萬石
論語第六季康子問政於孔子曰如殺無道以就有道何如孔子對曰子爲政焉用殺君子之德風也小人德草也草尙之風必偃
○考工記云橘踰淮化爲枳晏子曰江南爲橘江北爲枳又史記
○金持（カナチ）　○稗田（ヒエタ）

第九卷

○故事淵海云自言疾曰有采薪之憂　孟王使人問疾醫來孟仲子對曰昔者有王命有采薪之憂不能造朝今病小愈趍造於朝　注采薪之憂言病不能采薪
○史記九十七酈生曰擧大事不細謹盛德不辭讓
○猶豫穴豫不決曰ー楚辭心猶豫而狐疑兮高后紀計猶豫顏子古注猶預獸名性多疑居山中忽聞有聲則預上樹下止不一故不決者言猶預　禮記作猶與　擧要馬援傳穴音由
私ニ云常ニ狐疑ソラウタカイ猶預ヲウラヲモイト讀ソ
○太行已下三十五字樂天句　古文眞寶載之
○特（タハカル）又忖トモ
○奴可（ヌカ）　○志宇知（シウチ）
○波々伯部（ハウカヘ）　○賓祚（アマツヒツキ）
○三槐九棘左三槐三公位焉右九棘公卿伯子男位焉注槐者懷也懷來人也　詩學大成　九棘朝士掌建邦外朝之法左九棘公卿位焉　禮秘官　植棘者取其赤心而外刺故稱九卿曰列棘　韵府
○三家者閑院花山中院是曰英雄之三家此下家々有之閑院者九條右丞相師輔公之男閑院太政大臣公季公之流也此下有三家三條西園寺德大寺云之閑院王家也花山者關白內大臣賴通公之男京極師實公之流也此下二家有之大炊御門洞院是也中院者村上天王皇子具平親王之流也此下立四家久我堀川土御門三條云之村上源氏也
○御生所（ミアレ）又御顯トモ在リ
○論語八云　吾恐季孫之憂不在於顓史而在蕭牆之内

也注鄭玄曰蕭之言肅也蕭牆謂屛也君臣相見之禮至屛而加肅敬焉是以謂之蕭牆後季氏家臣陽虎果囚季桓子

○昆明國有池方二百里漢武欲伐昆明作池象之以習水戰西南夷傳

○潏淪　碧琉璃滑水潏淪歐大淵紆倫切水深廣

○劍閣以下三十二字文選第六左太沖魏都賦

○漢書音義服虔曰師敗曰北々南北之北

○國家安危在此一擧前漢書項籍傳

○郎詠云陰森古柳疎槐春無春色獲落危牖壞宇秋有秋聲

○燒荒（タキスサヒタル）　○燎（ニハヒ）

○風（ホノカ）　○首途（カトテ）

○叢祠（ホコラ）　○賽（カヘリマウシス）

○聿（ツイニ）

○博物志云江南蜮工虫長三寸口在弩形氣射人影殺人

○史記本紀第七樊噲曰大行不顧細謹大禮不辭小讓如今人方爲刀爼我爲魚由何辭爲於是遂去云云

○峠（タウケ）　○爐勾（キツカウ）

○設樂（シタラ）　○利仁（トシヒト）

○流石（サスカ）　○礎（イシスヱ）

○琵琶甲（ヒワノカウ）

○安郡（アンノコホリ）共ニ處ノ名材木ノ出處也

○前漢書列傳第一卷項籍傳曰項籍字羽下相人也初起年二十四其季父梁々父卽楚名將項燕者也家世楚將封於項故姓項氏籍少時學書不成去學劍又不成去梁怒之籍曰書足記姓名而已劍一人敵不足學々萬人敵耳於是梁奇其意乃敎以兵法籍大喜略知其意又不旨竟學云云　秦始皇帝東遊會稽渡浙江梁與籍觀籍曰彼可取而代也梁掩其口曰無妄言族也梁以此奇籍々長八尺二寸力扛鼎才氣過人云云　羽壁垓下兵少食盡漢師諸侯兵圍之數重羽夜聞漢軍四面皆楚歌廼驚曰漢皆已得楚乎是何楚人多也起飮帳中有美人姓虞氏常幸從駿馬名騅常騎廼悲歌忼慨自爲歌詩曰力拔山兮氣蓋世時不利兮騅不逝騅不逝兮可奈何虞兮々々奈若何歌數曲美人知之羽泣下數行左右皆泣莫能仰視於是羽遂上馬戲下騎從者八百餘人注師古曰戲大將之旗也音許宜反又許爲反漢書通以戲爲旌麾及指麾字

○烏江（ヲカウ）　○若集滅道（クヽメチ）

○劍閣唐玄宗帝出奔于蜀

○壽永之亂　安德天皇年號二年七月二十四日平族奉

帝出都行西州八月二十日後鳥羽受禪明年七月二十
八日即位四歲高倉第四子
○寺主(テラシ)坊宮門跡候人也
○袙重(アコメカサネ)　○安宅(アタキ)
○日夏(ヒナツ)　○老曾(ヲイソ)
○愛智河(エチカワ)　○鞆口(ツカクチ)
○中布利(ナカフリ)　○寄藤(ヨリフチ)
○皆吉(ミナキリ)　○南和(ナワ)
○御器所(コキソ)　○怒借屋(ヌカヤ)
○西郡(ニシコリ)
○滿王野(ミツワノ)又(マヲノ)
○陶山(スヤマ)　○高境(カウサカ)
○愛多義(アタキ)
○通鑑僖宗紀己亥六年春高駢擊黃巣屢破之巣遂趣廣
南冬黃巣在嶺南士卒罹瘴疫死者什三四云云
○玄象(ケンシヤウ)　○下濃(スソコ)
○軹道(シタウ)
史記六云使人約降子嬰々々即係頸以組白馬素車奉
天子璽符降軹道旁注徐廣曰在霸陵驅案蘇林曰亭名
在長安十三里

○負薪憂(フシムノウレヒ)　○畷(ナワテ)
○花墨子(クワトムス)　○料理(シツラウ)
○疋壇(ヒキタ)　○厚總(ヲウフサ)
○雅忠(マサタヽ)　○肉菲(ニクウスキ)
○設樂(シタラ)　○函蓋(カムカイ)
○利人(トシヒト)　○櫨匂(ハシニヲイ)

第十卷

○不審(ヲホツカナシ)又(イフカシ)
○譴責(ケンセキ)　○生品(イクシナ)
○紀五(キコ)　○扣(ヒカユル)
○縨(ホロ)
○莊子天地篇云猶螳蜋怒臂以當車轍必不勝任矣
○韻府精衞鳥名狀如烏名石塡海
○山海經云發鳩山鳥名精衞炎帝女溺於東海精衞常取
西山木石以塡海
○小手差原(コテサシバラ)
○鏑(カフラ)
○分陪(フハイ)又文拇トモ
○南部(ナンフ)　○新開(シムカイ)

項梁起東阿西北至定陶再破
○秦軍項羽等又斬李由益輕秦有驕色宋義乃諫項梁曰
戰勝而將驕卒惰者敗今卒少惰矣秦兵日益臣爲君畏
之項梁弗聽云云 秦果悉起兵益章邯擊楚軍大破之定
陶項梁死云云 項梁自號爲武信君
○豐島（トシマ） ○葛西（カサイ）
○關戸（セキト）
○長恨歌曰漁陽鼙鼓動地來驚破霓裳羽衣曲
○稲村崎（イナムラサキ）
○六韜三立將武王問太公曰立將之道奈何太公曰凡國
有難君避正殿召將而詔之曰社稷安危一在將軍今某
國不臣願將軍帥師應之將既受命乃命太史卜齋三日
之太廟鑽靈龜卜吉日以授斧鉞君入廟門西面而立將
入廟門北面而立君親操鉞持首授將其柄曰從此上至
天者將軍制之復操斧持柄授其刄曰從此下至淵者將
軍制之云云
○由井濱（ユイカハマ）
氏族大全 王猛字景略隱華陰山懷佐世之志晉桓溫
關猛披緼袍詣之捫虱談當世事旁若無人溫異之
○訇（ノヽシル） ○譆（ツクロウ）

○檜（シモト） ○慘（ヲヒタヽシ）
○拉（クタク） ○佩（ハク）
○軲子（タツコ）又立子（トモアリ）
○逸足（イチアシ） ○蓬（キタナシ）
○顏田（ヌカタ） ○磬（ヒカユル）
○扣（ヒカユル） ○假粧坂（ケワヒサカ）
○鹽飽（シワク） ○叉手（シャス）
○御乳母（ヲムメノト） ○懷存（タキソタテ）
○襁（ムツキ）
緥小兒衣也齊人名小兒被爲褓則裼也詩載衣之裼師
古曰即今小兒綳亦通作葆魯世家成王小在強葆
○外所（ヨソ） ○刧略（ヲヒヤカス）
○犄（アヲタ） ○四隊（シタイ）
三體詩畫袴朱衣四隊行
○帶替（ハキカユル） ○兎雞（トケイ）
○任歷（インモ） ○撲（クム）
○室（サヤ） ○糢糊（ホコ）
淮南子云魯陽公與韓構戰酣日暮援戈麾之日退三舍
左傳七注一舍三十里
○飛礫（ツフセ） ○播（ヒロクル）

○立破(タテワリ)　○手縷(タクル)
○甘名字(カナフ)又(アマナフ)
○阿曾(アソ)　○苅田(カツタ)
○歎來(ナケキシ)　○勇々敷(ハカセ)
○矯(ハカセ)　○戎衣(シユフイ)
○措(ヲク)

第十一卷

○賺(スカス)　○屬隨(ツキシタカウ)
○編笠(アミカサ)
○死易　史記程嬰晉趙氏客也屠岸賈攻滅趙氏朔夫人有遺服及生男夫人置之袴中得脫朔客公孫杵臼謂嬰曰胡不死嬰曰死易立孤難杵臼曰吾爲其易子爲其難取他人嬰兒匿山中嬰繆呼曰與我千金吾告趙氏孤處屠岸賈諸將隨嬰殺杵臼反趙孤而趙眞孤乃在嬰家後十五年因韓厥復立之是爲趙氏嬰乃自殺曰我得下報宣孟與杵臼矣　存孤極若辛後來有曹馬亦是受遺人宋紹興爲立廟封二子爲侯　又氏族大全載之
○豫讓吞炭　趙襄子漆智伯之頭以爲飮器智伯之臣豫讓欲爲之報仇乃詐爲刑人挾匕首入襄子宮中塗厠襄子如厠心動索之獲豫讓左右欲殺之襄子曰義士也舍之謹避之耳豫讓漆身爲癩呑炭爲啞行乞於市其妻不識也其友識之曰以子之才臣事趙孟必得近幸子乃爲所欲爲顧不易耶何乃自苦如此豫讓曰不可旣委質爲臣又求殺之是懷二心以事其君也凡且吾所爲者極難耳然所以爲此者將以愧天下後世爲人臣懷二心者也旣去頃之襄子當出豫讓伏於橋下襄子至橋馬驚索之得豫讓遂殺之史賈誼治安策曰豫讓心報襄子五起而不中人問之曰子嘗事范中行氏智伯滅之子不爲報讎反臣事智伯今智伯死子何爲報之深也對曰中行衆人遇我々故衆人報之至於智伯國士遇我々故國士報之故此一豫讓也反君事讎行若狗彘而抗節致忠行出乎烈士人主使然也
○諺(コトワサ)　○安室卿(アシノカウ)
○贔屓　文選第六卷左太冲魏都賦曰巨靈贔屓首冠靈山又谷詩云猛獸贔屓踞上頭　畏負韓文
○戚揚(セキヤウ)又(ヲノマサカリ)
干戈ー毛詩斧鉞也
○土居(トイ)　○得能(トクノウ)
○鹽冶(エンヤ)

○輦輅(レムロ)又(レムラク)
○專諸者吳堂邑人也伍子胥之亡楚而如吳也知專諸之能伍子胥既見吳王僚說以伐楚之利吳公子光曰彼伍員父兄皆死於楚而員言伐楚欲自爲報私讎也云云 具酒請王僚々々使兵陳自宮至光之家門戶階陛左右皆王僚之親戚也夾立侍皆持長鈹酒既酣公子光詳爲足疾入窟室中使專諸置匕首魚炙之腹中而進之既至王前專諸擘魚因以匕首刺王僚々々立死左右亦殺專諸王人擾亂公子光出其伏甲以攻王僚之徒盡滅之遂自立爲王是爲闔閭云云 乃封專諸之子以爲上卿云云
史記八十六
○荊軻者衞人也其先乃齊人徙於衞々人謂之慶卿而之燕々人謂之荊卿々々好讀書擊劍以術說衞元君衞元君不用其後秦伐魏置東郡徙衞元君之支屬於野王荊軻嘗遊過楡次與蓋聶論劍蓋聶怒而目之荊軻出人或言復召荊卿蓋聶曰曩者吾與論劍有不稱者吾目之試往是宜去不敢留使使往之主人荊卿則已駕而去楡次矣云云 秦王方環柱走卒惶急不知所爲左右乃曰王負劍負劍遂拔以擊荊軻斷其左股荊軻廢乃引其匕首以擿秦王不中々桐柱秦王復擊軻々被八創軻自知事不就倚柱而笑箕倨以罵曰事所以不成者以欲生劫之必得約契以報太子也於是左右既前殺軻云云　史記八十六

○暗不知(ソラシラス)　○勞(イタワル)
○楯矯(タテヲハク)　○簇礪(ヤシリヲトク)
○勠(アワスル)　○纜(トモツナ)
○謙祐(ケムニサイワイス)
○淡河(アイカハ)又(アワカ)
○稚(ヲサナシ)　○在存(ナカラユル)
○吻(イキツク)　○佐介(サカイ)
○縛屈(シバリク丶メテ)　廣韻云禁錮重繫也
○冊(カシツク)　○誣(カコツ)
○挺(トテモ)　○記念(カタミ)
○挺楚　戮楚ナトノ心木ノスワイニテ人ヲウツ事也
刑鞭之類乎
○佐用姫(サヨヒメ)　○信(カタミ)
○博多(ハカタ)　○浩(カ丶ル)
○欲(ヲホシ)　○對(ムカヘリ)
○烘(モユル)　○翹(ツマタテ)
○希世(マレヨ)

第十二卷

○中夏曰華又千五百里曰華　勻會

○七德　左傳十一宣十二年傳云武禁暴戢兵保大定功安民和衆豐財者也

○九功　左傳八文七年九功之德皆可歌也謂之九歌六府三事謂之九功水火金土穀謂之六府正德利用厚生謂之三事義而行之謂之德禮

○陛下人臣對天下稱天子曰陛下蔡邕獨斷陛所由升堂也天子必有近臣報兵陳陛以戒不虞謂陛下者群臣不敢指斥天子故呼在陛下者因卑達尊義也　故事淵海

○休明德　烋美也和也善也通作休

○虎賁　勇而疾曰虎賁周禮虎賁氏掌先後王而趨以卒伍軍旅會同亦如之舍則守王閑々梐枑也樂記　虎賁注賁怒也尚書孔安國注若虎賁獸言其甚猛前武帝置期門平帝更名虎賁

○將軍之唐名或曰大樹或曰幕府

○馮異字公孫佐漢光武中興云々　居樹下軍中號爲大樹將軍云云氏族大全

○太湜（フトクタクマシ）　○沃懸（イッカケ）

○論語ニ王孫賈問云與其媚於奧寧媚於竈何謂也子曰不然獲罪於天無所禱也

○立錐　秦民富者田連阡陌貧者無立錐之地　前食貨香岩曰去年貧無卓錐之地今年貧錐也無

○職原曰　紀傳明經明法筭道謂之四道　紀傳道史記文選漢書等明之ッ明經道ハ周易禮記尚書毛詩左傳等明之明法論語孟子大學中庸其外五常純明之是曰法家也

○摸（ツッス）又（マヌル）　○談天（タッテ）

○后町（キサキマチ）　○御匣殿（ミクシケトノ）

○雷鳴（カンナリ）　○盧鳥曹司（ロサウシ）

○小安殿（コアトノ）　○神今食（イタマクラ）

○競馬（クラヘムマ）

○八省（ハッシャウ）　中務式部民部治部兵部刑部大藏宮内之八也

○軻（アコカル）

○源氏物語第五卷花宴此卷ハ南殿花盛ニ帝東宮女御已下花ニ戯レ目ニアコカル、夜遊管絃樣々在而人靜而源氏藤壺ノ邊窺フニ扇ニ花ヲ折添而差簪朧月夜内侍過給ヲ源氏搔抱テ三ノ戸口草ノ原ニテ假契

アリ御手ヲ取而ホタシモトニアリト是ハ難離ト云
事也此卷ニ帶扇ノ顯ル、枕衣袴也鶯ノ忘飼ト云飼
アリ此忘飼トハ鶯ノ巣ヲ立離時親子ノ中忘カタキ
ニハ母ノ口ニ土ヲ一ツ、フクミテ飼是ヲ云也又女
ノ男ニ難離時口ヨリ物ヲ傳ヘリ故ニ內侍是ニヨツ
テ源氏ノ御口ニ丁子ヲ吹入給是ヲ云也
○鴻臚舘在羅城門傍異朝人來時會此處
直廬
○回祿鄭禳火于元冥回祿左傳昭十八玄冥其神玄冥月
令水神也風俗通玄冥爲雨師黃庭經腎神玄冥云云　回
祿火神也
○手戰（テワナヽク）
○坤柱（ヒツシサルノハシラ）
○昇懷（カキイタク）　魏文帝令曹子建七步作詩不成
行大法應聲曰萁豆燃豆萁豆在釜中泣本是同根生相
煎何太急　魏志　嗽六藝之芳潤文選十七
○番（ツカイ）　○弓倒（ユンタヲシ）
○五善論語ニ注馬融曰射有五善焉一曰和志體和二曰
和容有容儀三曰生皮能中質四曰和頌合雅頌五曰興
武與舞同

○十（ツヽ）
○韵府鼻字魏王遺楚美人夫人鄭褎愛之甚於王鄭知王
以已爲不妬因謂美人曰王惡子之鼻見王必掩之美人
從之王謂鄭曰美人見我必掩鼻何也對曰似惡聞王之
臭王劓其鼻
○參商　參星商星也其隔遠不近也
○列女傳曰尹伯奇母取蜂去毒繫衣上伯奇前欲去之母
大呼曰伯奇牽我吉甫見疑伯奇自死
○生松（イキノマツ）　○埴生（ハニフ）
於觀音寺薩天錫詩云無常說法現神通千里飛梅一夜
松萬事夢醒雲吐月觀音寺裏一聲鐘
○濡衣（ヌレキヌ）
○叫喚大叫喚　八大地獄之名是其二也
○伏轉（フシマロフ）
○淨藏貴所　山城州人諫議大夫善淸行第八子也延喜
時人也四歲讀千字文聞一知二十二歲出家爲天台慈
覺弟子中齡草創雲居寺爰落墮之後行力尙不襄云云
○天慶九年六十一年朱雀院年號
○貞元年　貞元三年四月十三日改元　天元六十四代
圓融院年號

○周武王伐紂之後革商受命偃武修文歸馬于花山之陽放牛于桃林之野　周書
○規矩(キク)　○拵(コシラユル)
○行縢(ムカハキ)
○孔安國孝經賦服貴服謂之僭上々々爲不忠云云
○三密身密口密意密　○湜(ヲヒタヽシ)
○印可　印ハ信也可ハ許也
○絆羈(キツナニ)又(ホタサル)
○三衣一曰僧伽梨即大衣也二曰欝多羅僧即七條也三曰安陀會即五條也圓覺要覽
○小隱々陵藪大隱々朝市伯夷竄首陽老聃伏柱杖文選二十二王康琚反招隱詩
○五濁惡世　劫濁煩惱濁衆生濁見濁命濁見法華料注
○抖擻　杜多梵云杜多漢云抖擻謂三毒如塵坌其心能振憚前去今訛爲頭陀圓覺要覽
○千木(チキ)　○形祖木(カタソキ)
○不搼(ソラス)
○御裳濯川(ミモスソカワ)
○懕(ヲソロシ)　○即位(シヨクイ)
○若干(ソクハク)

○淮南子堯時十日並出草木焦枯堯命羿令射之中其九日日中烏皆死墮羽翼焉
○列子云海上有蟲曰焦螟集於蚊睫離朱子羽望之不見形解俞師能聽之不聞其聲䖘俞古听者晏子春秋作鵧
○流鏑矢(カフラヤ)流字不讀
○仁壽殿(シシユテム)　○距(ケツメ)
○禁忌(イマイマシ)
○唐書曰貞元二十一年日本國遣使來朝留學生橘逸勢學問僧空海元和元年朝貢使判官高階眞人上言前件學生藝業稍成願歸本國便與臣同歸從之開成四年又遣使朝貢太平御覽七百八十二卷日本國部
○延暦二十三年空海渡唐二十五年桓武崩御延暦之次大同也五十一代平城元年當唐憲宗元和二年也
○空略(ソラカラクリ)　○化(ヲモカケ)
○毒(ヲソロシキトク)　○泮(ハヒユル)
○尙書第六牧誓武王曰古人有言牝鷄無晨牝鷄之晨惟家之索注索盡也喩婦人知外事雌代雄鳴則婦奪夫政則國亡
○夔(タヲレテ)　○跪(スアシ)
○䔖(シキリ)　○從父(イトコ)

○保忠(ヤスタタ)

第十三卷

○事文類聚後集三十八八駿圖秦少游其序云云　世說周穆王駕八駿日會王母於瑤池從羣仙而遊按山海經去中國三萬里非虛說也而不知其徒得之厥神是生爲之用歟

八駿穆王巡行天下馭八龍之駿一名絕地足不踐土二名翻羽行飛禽三名奔宵夜行萬里四名超影逐日而行五名踰輝毛色炳燿六名超光一形十影七名騰霧乘雲而行八名杜翼有肉翅　拾遺記

○九萬皐相馬秦穆公謂伯樂曰云云　伯樂曰若皐之所觀天機也得其精而忘其麁在其內而而忘其外馬至果天下之良馬也列子

○八駿穆天子傳　赤驥溫驪白義渠黃驊騮騄駬緣耳山子王子年拾遺記周穆王巡行天下馭八龍之駿名曰司地翻羽奔雷越影踰輝超光騰霧挾翼振迹周於四海也杜草堂詩注

○馬之旋毛善惡詳于事林廣記圖畫

○天馬半漢文選三(ハンカントイサメリ)

○跳梁　小夷跳梁於山谷間　蕭望之傳　又井蛙跳梁井幹之上莊秋水跳梁(テウリヤウトヲトリアカル)

○春秋考異記云地生月精爲馬　漢書曰漢中星爲天駟

○魯國黃伯仁龍馬賦曰或有奇貌絕足蓋爲聖德而生

○文選十四　顏延年赭白馬賦曰徒觀樹骨垂梢植髮雙瞳夾鏡兩權協月　傳玄乘輿馬賦曰頭似削成尾如植髮相馬經曰目成人者行千里注成人者視童子中人頭足皆見言目中淸明如鏡相馬經云頰欲圓如懸璧因謂之雙璧其盈滿如月異相之表也黃伯仁龍馬頌曰雙璧似月

○杜天育驃騎歌曰眼有紫焰雙瞳方

○秦本紀周穆王得騄耳之駟相馬經曰馬眼欲艷光口中欲赤也

○莊子馬蹄篇云馬蹄可以踐霜雪毛可以禦風寒齕草飮水翹足而陸馬之眞惟也

○大宛國名西域傳宛別邑餘城多善馬法大宛國有高山有馬不可得因取五色母馬置其下與集生駒號天馬子蒲梢汗血之馬充於黃門西域賛良馬名也依出善馬而後以其地爲名也

○渥洼水名馬所出生　荀子騏驥一日千里　論語曰驥

不稱其力稱其德
○左傳五請以屈產之乘與垂棘之璧假道於虞以伐虢注
屈地生良馬垂棘出美玉故以爲名自晉適虢途出於虞
故借道四馬曰乘
○天子十二閑六種邦國六閑四種家四閑二種　事文類
聚後集三十八
○太平御覽馬部說文曰馬怒也武也云云　以壬申日死乘
馬者忌之
○目如黃金項如鷄尾名鷄斯之乘之以獻商王太平御覽
○周官曰凡馬八尺以上爲龍
○呂氏春秋飛兎騕褭古之駿馬穆天子傳驊騮騄耳曰馳
三萬里　杜草堂詩注　月精爲馬月數十二故馬十二
月而生御覽
○竹批雙耳峻風入四蹄輕　杜草之詩
頭上銳耳批秋竹脚下高蹄削寒玉　杜甫相馬行
○隅目青熒夾鏡懸杜驄馬行
○鑾　說文人君乘車四馬鑣入鑾鈴象鸞鳥聲和則敬也
崔豹古今注五路衡上金雀者朱鳥也故謂朱鳥鸞也口
銜鈴謂之鑾又謂之和鑾通作鸞郭璞曰鸞鈴也在軏曰
鸞在軾曰和漢五行志登車有鸞和之節師古曰和鈴也

詩和鸞雝々毛注和在軾鸞在鑣鄭以爲戎車鸞在鑣乘
車鸞在衡嚴氏曰和鸞皆鈴也又八鸞瑲々朱氏曰鈴在
鑣曰鸞馬口兩旁各一四馬故有八也
○東觀漢記曰世祖十三年王國有獻名馬寶劍直百金馬
以駕鼓車劍以賜騎士　太平御覽三百四十二
○八駿穆王欲使車轍馬跡遍行天下乘一馬犇戎爲右造
父爲御　廣記驊騮騄駬赤驥白兎撓渠黃騟盜驪山子
一云赤驥盜驪白義渠黃驊騮騟騟山子綠耳見韵府駿
字
○相馬經李伯樂馬生下墮地無毛行千里尿舉一脚行百
里闕筋堅者千里馬膝如團麴千里馬一歲上下齒二十
四歲齒黃三十三歲齒白馬頭爲王欲得方目爲丞相欲
得明脊爲將軍欲得強腹爲城郭得欲張四下爲令欲得
長眼欲得高匡眼睛欲得如懸鈴紫艶光眼下懸蠶懸鑿
欲得成鼻孔欲得大鼻頭欲得有王火字口中欲得赤膝
骨欲圓而張耳欲相近而竪小而厚伏龍骨欲得成頸欲
得長雙跌欲得大而突蹄欲得厚腹下欲得平有八字尾
骨欲得高而垂凡相馬之法先除三羸五駑乃相其餘大
頭小頸一羸也弱脊大腹二羸也小脛大蹄三羸也大頭
緩耳一駑也長頸不折二駑也短上長下三駑也大髂短

脊四鶩也淺髖薄髀五鶩也事文類聚後集三十八髖苦官昆切髀上也廣韵兩股間也說文股上髀說文股也增韻股骨也或作脾補爾切又步米切　玉篇　髂柯額切禽獸骨曰

李伯樂　秦穆公時人　晉文公夷吾同時人也

○吐哺周公旦又夏禹王御覽

○瘫齒事未具也

○孔子曰德之流行速於置郵而傳命當今之時萬乘之國行仁政民之悅之猶解倒懸也故事半古之人功必陪之惟此時爲然　朱子注置驛也郵馹也所以傳命也孟子引孔子之言如此孟子二公孫丑上

○看督長(カトノヲサ)

○靴沓(ツクリカワノクツ)

○尻鞘(シムサヤ)

○海松色(ミルイロ)

○傍(アタリ)

○致任　記曲禮大夫七十而致仕若不謝則必賜之几杖王制七十注致其所掌之事於君而告老也

○白頭望斷萬重山以下補苑聯芳集卷第三滅翁題大義渡之頌

○裏場(アカリハ)

○取貸(トリマカナフ)

○弄璋弄瓦生子曰弄璋生女曰弄瓦詩斯于吉夢維何維熊維羆維虺維蛇大人占之維熊維羆男子之祥維虺維蛇女子之祥乃生男子載衣之裳載弄之璋生女子載衣之裼載弄之瓦　故事淵海

○禮記曰男子生桑孤蓬矢六射天地四方　注云天地四方男子所有事也見太平御覽三百四十七弓部又見論語皇侃疏

○風秋(カセヒヤヽカ)

○玉樹歌殘王氣終景陽兵合戍樓空　三體詩　言陳後主榮花之餘作玉樹後庭花曲景陽宮中極其樂其曲未終爲隋兵所逼與張貴妃孔貴嬪投景陽井中又自井中引出以殺之

○商女不知亡國恨隔江猶唱後庭花　三體詩注陳後主作玉樹後庭花之曲聞者泣下後爲隋所滅間泉說曰隋亡有伴侶曲陳亡有後庭花皆亡國音也商女樂隋舊俗妖淫哀思不知爲亡國之音此詩有關涉聖賢不欲聞桑間濮上之音趙孟不顧聞云云墻有茨

○後主與張貴妃孔貴嬪遊臨春結綺望山三閣唱玉樹後庭花曲因爲隋所滅

○淸久(キヨク)

○列傳謂其妻曰吾藏劔在南山之陰北山之陽松生石上劔在其中矣
○八十梟(ヤタケ)　○淬(キタウ)
○瞪目(メヲミハル)　○切齒(ハヲクイシハル)
○太平御覽眉廣三寸　碧岩尺作赤碧岩第十載之又祖庭事苑所載
○瓜生(ウリウ)　○云云(サヽヤク)
○安之(イツクニカユカム)　樣少(タメシ)
○石動山(ユスルキノヤマ)諏訪祝子(スハノハウリ)
○玄象牧馬(ケムシヤウホク)

第十四卷

○逆鱗　韓說雖云龍喉下有逆鱗徑尺嬰之則殺人主亦有之
○魚麗　美萬物盛多能備禮也　小雅韻府　魚麗陳名選又左傳
○韓信爲萬余囊盛沙壅水上流引車半渡擊龍且本
○相持鷸蚌　趙且伐燕蘇代爲燕將謂趙王曰川蚌出曝而鷸啄其肉蚌合而拑其喙鷸曰今日不雨明日不雨必有蚌脯蚌曰今日不出明日不出必有死鷸戰國策鷸餘律切知天將雨鳥也
○狽屬無前足附狼而行失狼則不能動故漢紀周勃狼狽失據　韻府
○爵　陸佃云一升曰爵亦取其鳴節以戒荒淫雀鳥之淫者一曰爵位也白虎通曰爵者盡也所以盡人材文字音義爵量也量其職盡其材也大夫以上與宴享然後賜爵以章有德故因謂命秩爲爵
○柳營周亞夫將軍之事
○太甲成陽適長孫太丁之子又曰太甲宗伊尹立之太甲旣立不明伊尹放諸桐三年悔過自責復歸于亳互見圖又尙書第四王徂桐宮居憂克終允德
○囹圄　說文囹作圄囹圄所以拘罪人前東方朔傳囹圄空虛今作囹廣韻囹圄周獄名月令注䟽囹止也所以止出入罪人於舍初學記囹領也圄禦也言領錄囚徒禁御舉要噬臍悔事不及曰ー左莊六楚文王過鄧々侯曰吾甥也止而享之騅甥聃甥養甥曰亡鄧國者必此人若不早圖後君噬臍　左傳三卷注若齧腹臍喩不可及　故事淵海
○附驥尾蒼蠅之飛不可數步托騏驥之尾乃騰千里之路光武與隗囂書

○昆吾　西海上多昆吾石治成鉄作劒切玉如泥列又作
鋸鋙匀府鋸鋙山名
○獄訟(ウツタヘヲサタム)
○妎妁(カイシヤク)　○里見(サツミ)
○籠守澤(コモリサワ)　○額田(スカタ)
○金谷(カナヤ)　○厚東(カウトウ)
○愛曾(アソ)　○難波(ナムハ)
○山上(ヤマカミ)　○風間(カサマ)
○饗庭(アイハ)　○猿子(マシコ)
○矢矧(ヤハキ)　○私語(サヽヤク)
○高坂(カウサカ)　○栗生(クリウ)
○篠塚(シノツカ)　○名張(ナンマリ)
○四度路(シトロ)
○同在佛所聞說一味之法然所證各有淺深譬兎馬象三
獸渡河兎渡則浮馬渡及半惟大香象徹底截流韵府兎
渡聲聞馬渡緣覺香菩薩也
○倅(ヒトシ)　○薄情(ウタテ)
○本結(モトイ)
○宿紙薄墨也又云紙屋紙公家所用
○陸沉(ツキシツミ)又(リクチム)

○髻(モトヽリ)
○右往左往(シトロモトロ)
○照射(トモシ)　○曳聲(エイヤコエ)
○眞額(マツカウ)　○外(ハツルル)
○嗅(ヲメク)　○會釋(エシヤク)
○堪(コラユル)　○詑間(タクマ)
○香西(カウサイ)　○吉備津宮(キヒツミヤ)
○全職(ミツモト)　○責却(セメヲヒヤカス)
○碓井(ウスイ)　○波々伯部(ハヽカヘ)
○呼鳴(ヲコ)　○供御(クコ)
○潛難(クヽリカタシ)　○迦(ハツス)
○伊岐洲(イキス)　○芥河(アクタカハ)
○箙(エヒラ)
○咄笑(トツトワラウ)　○舫(モヤイ)
○矢間(サマ)　○早業(ハヤワサ)
○膸當(スネアテ)　○脇楯(ハイタテ)
○石橋(シヤクケウ)　○直中(タヽナカ)
○右(カクテ)　○一積(ヒトタマリ)
○鬨(トキ)　○飛濆(トヒツカル)
○勅使河原(テシカハラ)　○日ノ札(ヒノミフタ)

○二間(フタマ)

○明星日札二間御本尊觀音也　二間ノ供ハ仁壽殿ノ觀音供ノ事也是モ大師ノ依奏聞承知元年ヨリ始也東寺ノ長者勤之每月十八日阿闍梨參內シテ於仁壽殿觀音供ヲ勤是モ內侍所ニ付テ御神體ヲ觀スル秘傳侍ルトカヤ但近頃ハ淸涼殿ニテアル也其故ハ白河院御宇承曆四年庚申二月ニ大內ニ失火有テヨリ仁壽殿ノ觀音供絕タリケルニ堀河寬治六年壬申經範僧都法事斷絕不可然由奏ス少納言成宗ヲ以テ勅答ニ曰此供昔於仁壽殿修彼殿未ナシ爭カ可修僧都重申サク我カ高祖奏シテ此供ヲ仁壽殿ニ置シハ其時ノ常ノ御殿タル故也近クハ淸涼殿常ノ御座也尤可宜縱仁壽殿成ト云トモ淸涼ノ近密ナルニ何ソ如ント申サレシニ依テ永長元年丙子正月ヨリ觀音供ヲ淸涼殿ニ置ル同門ノ宿老タルニ依テ經範ノ擧ヲ以テ其時定賢阿闍梨勤之彼所二間アル故ニフタマト云ト云云　或說ニハ主上ノ御座ノ次ノ間ニテ御身近ク被修故ニ二間ノ觀音供ト云ト云云常ノ御座ヲ一間トスル心歟二ヲハツキトヨミテ次ノ字ノ心ニ用ル也壒囊抄五

○這回(コノタヒ)

○文選八上林賦云建翠之旗　善曰翠華以翠羽爲葆也
向曰翠旗以翠羽飾旗

○要(コトキル)　○方見(ウタテ)

○彼岸所(ヒカンショ)　中方之衆法會處也彼岸處ト云ヘ共何時モ衆會スル也

○波止土濃(ハシトノ)　末具也

○船ノ舳艫(トモヘ)　○冥路(ヨミチ)

○鑾輿屬車(ランヨショクシヤ)

○貸(カナヘ)　○驥盜驪(ホタウリ)

○育(ハコクム)　○永等(ハレラ)

○圖膺(トニアタツテ)　○孀房(メノト)

○守氏(カス)　○八十梟(ヤタケ)

○無重(ヲモキコトヲサミシ)

○官人(サフライ)　○日(トキ)

○疼(ヒルム)　○匕首(ヒシユ)

○愛知(エチカハ)　○全職(ミツモト)

○囹圄(ヒトヤ)　○携(スカツテ)

○覆(コロフ)　○坐(イラレケル)

○振臂(タヽムキヲフツテ)

○才(ハツカ)　○獄(サタムル)
○尤(ケヤケキ)　○照射(トホシ)

第十五卷

○卓犖　超絶也韓文進學解ー爲傑又陳登傳奇逸卓犖又云犖々事之明也
○連署　廣韻署書也　○衣須磨呂(ヤスマル)
○埏　地深也前相如封禪書下泝八埏叶音戈戰切又先韻老子埏埴以爲器埏如然反
○禿倉(ホコラ)　○迦(ハツルル)
○聖女(シヤウニヨ)　○形勢(アリサマ)
○震(ヲヒタヽシ)　○旦理(ワタリ)
○凫氏　鑄鐘匠曰凫氏周禮考工記凫氏爲鐘故事淵海
○鐺(コシリ)　○化(ハクル)
○撞鐘(ツキカネ)　○質(テタテ)
○九牛　秦時任商鞅法令如牛毛杜法密如牛毛漢書若九牛亡一毛同馬遷傳或問人之相去如九牛毛爭有是乎華譚曰許巢讓天子之貴小人爭半錢之利此之相去何啻九牛晉華譚傳細字如牛毛坡學者如牛毛成者如麟角者也家語致使口諷牛毛心通麟角　金經纂要

○不洮(ソロハス)
○止渴梅　魏武帝士大渴無水令曰前有梅林可止渴士卒聞之口中水出世說
○智出萬人爲英禮記三代之英注疏云倍人曰茂十人曰選倍選曰俊千人曰英倍英曰賢萬人曰傑倍傑曰聖舉要廣韻英傑特立也荀子注倍萬人曰傑白虎通賢萬人傑
○石谷(イシカヤツ)　○伊木津志(イキツシ)
○攤(スクム)　○神樂岡(カクラヲカ)
○度方(トハウ)
○降松(サカリムツ)又下松
○會地(ソチ)
○尾宅(ヲイワケ)又(ヲイヤケ)又追分
○混(ヒタスラ)
○大樹將軍　馮異字公孫佐漢光武中興蕪蔞亭上豆粥至南宮進麥飯破赤眉云云　異爲人謙退諸將論功獨退居樹下軍中號大樹將軍拜征西將軍賜璽書曰征西功若岳猶自以爲不足孟之反亦何異哉謚節侯氏族大全
○旅屯(リヨヲタムロス)　○殿馳(ヲクレハセ)
○纜(トモツナ)

○五刑　墨　墨其額　劓截其鼻剕刖其足宮男去其勢
女閉齒室大辟死
○源氏第一桐壺此卷ニ初髻濃紫ト云事アリ
○朧(ラウタケ)　○無止事(ヤコトナシ)
○強而(ツレナシ)　○化(アタ)
○現(ウツヽ)　○雷火(イナヒカリ)
○淨原(シツハラ)　○江帥(カウソツ)
○洮(タヽスミ)又(ソヒユル)
○三津澤(ミサワ)　○術(タハカリ)
○御修法(ミシヲ)・　○新開(アラヒラ)
○出秡(タシヌク)　○一搖(ヒトユリ)
○狗子(ヱノコ)　○御喪龕(コサウ)
○盤余(イワヽレ)　○攪乘(カキノスル)
○日本(ヤマモト)　○直衣(ナヲシ)
○遊馳(アソハサル)　○捘(モム)
○偶(フタリノ)

第十六卷

○韲(アチキナク)　○宗像(ムナカタ)
○時蘢(アセコ)　○存(ナカラユル)

○香椎宮(カシノミヤ)　蚍蜉大蟻也韓文詩蚍蜉撼大
樹　○艶(カサシ)
○仰太刀(ノリノタルタチ)
○神田(カムタ)　○八代(ヤツシロ)
○小杵山(ヲツキヤマ)
○積羽沈舟羣輕折軸衆口鑠金積毀銷骨史記七十　唐
李義府笑中有刀　韵府
○二萬里(ニマノサト)　○奈義(ナキ)
○能仙(ノセ)　○飽浦(アクラ)
○多地部(タチヘ)　○勢山(セヤマ)
○室山(ムロヤマ)　○斑鳩(イカルカ)
○頓宮(トムクウ)
○羊腸趙險塞名山形屈辟如羊腸戰國策潞州長安縣太
原嵐州上黨壺關皆有羊腸坂　韵府
○大富(ヲホトミ)　○射越(イノコシ)
○石戸(イシヘ)　○少兵(チツトモ)
○七寸(ミツヽキ)　○得平(トクフ)
○史記第七項羽乃悉引兵渡河皆沈船破釜甑燒廬舍持
三日糧以樂士卒必死無一還心於是至則圍王離與秦
軍遇九戰絶其甬道大破之殺蘇角虜王離涉間不降楚

自燒殺當此時楚兵冠諸侯云云 軍救鉅鹿下者十餘壁莫敢縱兵及楚擊秦諸將皆從壁上觀楚戰無不一以當十云云

○鞆（トモ）　○外所（ヨソ）

○鑿（ヒカユル）　○蟹穢（ショクエ）

○賀古川（カクカハ）　○駁返（ハネカヘル）

○愕々　霍光傳驚愕失色　愕々直言廣韻謇諤也后陳忠傳忠臣蹇謇諤之節　趙良曰千羊之皮不如一狐之腋千人之諾々不如一士之諤々武王諤々以昌殷紂墨々以亡史記六十八

○杜詩云小敵信所怯注謂光弼北邙之敗也光武與王尋等戰自將歩騎千餘前去諸部喜曰劉將軍平生見小敵怯今見大敵勇甚可怪也

○鶍越（ヒエトリコエ）　○直違（スチカイ）

○繪島（エシマ）　○生田森（イクタモリ）

○紺部（カウヘ）　○宇佐美（ウサミ）

○論語一云有子曰其爲人也孝弟而好犯上者鮮矣不好犯上而好作亂者未之有也云云

○全職（マサモト）　○千方（チカタ）

○眞鳥（マトリ）又（サネトリ）

○豊浦（トヨラ）　○逸勢（トシナリ）

○早良（サウラ）　○安部（アヘ）

○純友（スミトモ）　○鵜（ミサコ）

○御崎（ミサキ）　○雄朝（ヲトモ）

○釜甑（コシキ）　○不豫（タノシム）

○沙鳥（ミサコ）　○手銜（テツキ）

○甃（ツミイシ）　○苦（ネンコロ）

○强（スクム）　○紀友尾（キノトモヲ）

○捷（ツヨク）

第十七卷

○童堂（ワラウタウ）又和光堂

○穴生（アナフ）　○三鄰（ミツスアマ）

○雲母坂（キラヽサカ）　○浮矢（アタヤ）

○蓦直（マツシクラ）

○甲冑等始之事黄帝造始メ同蚩尤造ト云ヘリ吾朝ニハ人王第一神武天皇日向國宮崎郡ニテ造初仍筑紫鎧ト云已未日也故戊巳ヲ用事秘事也

○藤威トハ紫絲ニ藤染之絲ヲ組交而綴也帝王之御鎧ナルヘシ

○四姓鎧トハ源氏ハ黒糸威　平家ハ紫絲威　藤氏靑黄絲威　橘家ハ黄糸綴ヲ本トス
淸和天皇御宇白河關白之次男忠仁良房勅ヲ承リ定メ給脇立ハ神功皇后三韓之時御懐胎ノ間御鎧不足其時住吉大明神ノ御子高良大明神ノ御袖ヲ脇ニ當給是ヨリ脇立始菱縫ハ此袖ノスソノ文菱也是ヲ表而始ラル端ノ匂甲ノ鍬形淸見原天皇之御時ヨリ始ル紫紅ト紅梅ト黄色等也妻匂ハ靑黄赤白黒ニテ匂也紫スソコトハ藤二枚ヲ紺ニテ綴餘ハ皆紫也　紅藤紺トハ上紅ニ威而下二枚紫也　火縅トハ紅ノ糸ヲ以綴白絲ヲ以耳絲ヲ引也縱糸紅威其耳糸班ハ赤糸威也比魚威トハクレナイノ糸ニテヲトシ札頭ニ銀ノ覆輪ヲ懸ナリ比魚ノ頭ヲ並ニ似タリ故ニ名付タリ　志那皮ヲトシハ平城天皇ノ御時武藏國大畑庄ヨリ始而獻スル皮也始ハ黄皮其後紫ヲ以卷而大豆ヲ以染其後蚊蛤ニテ色ヲ上紋ハ卷索四色ヲ持間四名皮ト云云　雜物トハ紺綴ニ紫ノ袖甲藤萌黄ノ袖甲縹ニ紅梅ノ袖甲是ヲ云也式日トハ三ツ巨ノ鎧ヲ云五音威トハ靑黄赤白黒之五色ニ各其色薄色ヲ添ヲ云也濃色ハ體也香也薄色ハ用也韻也色ハ音ニ通ス五色ヲ以五音ニ通ニ五音威ト云ヘリ
其刀劔甲冑者南無鐵性光音威德天王之變作又十六善神將四天八天等ノ化現也
○撓捬(タメコシラユル)
○訛歌(ソヽロウタ)又周禮王大捷則凱歌
○金磁頭(カナシトウ)　○人雪頽(ヒトナタレ)
○敷地(シキチ)　○上木(ウヘキ)
○佛生(ウリウ)
○驚捨(カケヒキ)　淹屈久義也
○牒達協切說文札也徐曰議政未定短牒諸謀曰牒簡也廣韻書版曰牒增韻官府移文謂之牒又訟辭亦曰牒通作諜
○衙　唐制天子居曰衙行曰駕一曰古者軍行有牙尊者所在後人因以所治爲衙又衙集也
○前五識第六―第七―第八―有八識心王諸門料簡
○四教　藏教　三藏教明生滅四諦正化小乘傍化菩薩
通教　三乘同稟故明因緣即空無性四諦正化菩薩傍化二乘　別教　不共二乘故明因緣假名無量四諦的化菩薩不涉二乘
○圓教　事理具足不偏不別但化最上利根人

○一心三觀　空觀假—中—圓覺三觀　泯相澄神—奢摩他　起幻消空觀　三摩提　絕待靈心—禪那　八識以下　藏乘法數
○酋長　勻會魁師之名貞觀政要注曰酋慈由切長音掌番國之長
○咎犯　咎一作舅事見檀弓蜀劉備詳于三國志
○塗炭前ニ見ヘタリ
○妖孽數見史記龜策傳　欃槍　妖星名劉槍彗星又名天槍　杜劉力掃欃槍韵府
○謂其鷹犬之才爪牙可任文選四十四
○赤眉賊　光武紀
○漢靈帝張角聚三十六萬皆著黃巾
○棘矜々穫同　鋤耰　史記矛柄也
○獨夫殷紂見孟子　○松墻韻會云墻墻根內也
○竇憲降單于兵二十萬登燕然山刻石紀功本
○禁野(キンヤ)　○宇殿(ウトノ)
○甕原(ミカノハラ)　○小栗栖(ヲクルス)
○木津(キス)又(コツ)　○愛智(エチ)
○信樂(シカラキ)　○阿閒(アマ)
○志宇知(シウチ)

○闌干闌板閒曰—又橫斜貌曹植詩月落參橫北事—王無競曰別後—注淚不斷也
○征矢(ソヤ)　○鍔音(ツハヲト)
○那須(ナス)　○愛洲(アイス)
○新典侍　內侍所也
○玉趾跳　(キヨクシヲスアシニス)
○山雀(ヤマカラ)　○船上(フナノウヘ)
○風紛(カサマシリ)
○紅蓮(クレム)　八寒地獄之一也　見ノ曲ケンノタマ又劍ノ曲
○鯖並(サハナミ)　○今庄(イマシヤウ)
○豐原(トイハラ)
○劔白山(ツルキシラヤマ)
○胙(ヒホロキ)　○鳴寺(ナルシ)
○小濱(ヲハマ)　○却(シリソク)
○手足(テタレ)　○擁(マモル)
○莞爾(ニツコトハラウ)　○慣(ナラフ)
○三日原(ミカノハラ)　○軌(アト)
○寶祚(アマツヒツキ)　○讒槍(ソシル)
○辜(ツミ)　○腕緩(ウテタユミ)

○綿貫（ハタヌキ）　○鈌（スクル）
○漕返（コキモトス）　○土矢間（ツチサマ）
○歆狂（フテヽ）　○白疏（ハクシヤウ）
○芋生（ヲクモ）

第十八巻

○梁園賦雲見韵府雪字　○覺鑁（カクハン）
○飛礫（ツフセ）　○朝暖（アサナキ）
○被（カツク）　○眤（ムツフ）
○湯尾（ユヲ）又油尾　○宅良（タクラ）
○三尾（ミヲ）　○橇（カムシキ）
○翊（フタメク）　○不矯（ハメス）
○吹雪（フヽキ）　○小野寺（ヲノテラ）
○玄義第五云大論云譬ハ如有樹名曰好堅在地百歳一ヒ出即百丈蓋衆樹頂此譬圓位也
○文句第十云好堅處地牙已百圍頻伽在㲉聲勝衆鳥
敦賀（ツルカ）　○蓬（キタナシ）
○現（ケニモ）　○化（アタ）
○餘多（アマタ）
○文選　王褒四子講徳論云君爲元首臣爲股肱明其一體相須而成元首明哉股肱良哉　書
○柄口（ツカクチ）　○彌武（ヤタケ）
○我執（カシヨウ）　○呵責（カシヤク）
○引繕（ヒキツクロウ）　○御匣殿（ミクシケトノ）
○初冠（ウイカウフリ）　○時明（トキメク）
○上達部（カンタチヘ）　○朧闌（ラウタケテ）
○古今序云華山僧正尤得歌體然其詞華而少實如圖畫好女徒動人情
○文悪（アヤニク）　○御手洗（ミタラシ）
○御秡（ミソキ）　戀セシト御手洗川ニセシ御秡神ハウケストモ成ニケルカナ
○轟（トヽロカス）　○過難（スキカテ）
○幽々（ホノホノト）　○目モ文（メモアヤ）
○熟々（ツクツク）　○請々（ソヽロ）
○浮（アコカル）　○白地（アカラサマ）
○徘徊（サスラウ）
○御隔子（ミカウシマイラスル）内裏公家之立具隔子也朝暮（アケタテマイラスル）ヲ云御隔子進
○太（ヒタスラ）　○流石（サスカ）
○妙々（タヘタヘ）　○打濡（ウチシホレ）

○化粧(アリサマ)　○怨(ウラメシ)
○モカミ川ノホレハクタル稲舟ノイナニハアラス此
月ハカリ
○思ヒキヤシチノ端垣カキツメテ百夜モ同マロネセ
ントハ
○曉ハ榻ノ端垣百夜カキ君カコヌ夜ヲ我ソ數カク
○曉ハ榻シキノ羽カキ百羽カキカキアツメタル思ヒ
ヲヤセン
○彼方此方(カナタコナタ)
○十月(トツキ)　○御息所(ミヤストコロ)
○藻(モクラ)　○蔦(ツタ)
○冷愁(サヒシ)　○紛(マカフ)
○無端(アチキナヤ)　○續松(タイマツ)
○哈(アサハラウ)　○手繰(テクリ)
○朗詠云載鬼一車何足恐棹巫三峽未爲危
○碇(イカリ)又錠　○渦(クス)
○水屑(ミナクツ)　○欲(ホシカル)
○篷(トマ)　○退紅(　　)
○仕丁(シチヤウ)　○灘(ナタ)
○速離(ソクリ)　○泡(ウタカタ)

○靜心(シツコヽロ)　○宿直(トノイ)
○不審(ヲホツカナシ)
○信安郡石室中晋時樵者王質逢二童子棊與質一物如
棗核食之不飢置斧坐而觀童子曰汝斧柄爛矣質歸郷
閭無復時人　述異説
○方士逢楊貴妃事詳見于　類説
○襟(ヲモイ)　○壊(ツチクレ)
○不審(イフカシ)　○減劫(ケンクウ)
○波止土濃(ハシトノ)　○芋野老(イトコロ)
○首(ミクシ)　○諾(ウナツク)
○微明(アケホノ)　○眇(ハルカ)
○小守(コモリ)　○勝手(カツテ)
○贊河(ニエカワ)　○蔓(ハヒコル)
○祠(ヤトル)　○建(コホレカヽル)
○條々名美(サヽナミ)又樂々名美
○常盤(トキハ)　○押並(ヲシナヘテ)
○白地(アカラサマ)　○行尹(ユキカタ)
○晴明(トキメク)　○點(モヨヲス)
○通難(トヲリカケ)　○妖(ハクル)
○許詑(ウケカウ)

第十九卷

○宇合(イヘトモ)　○家持(ヤカモチ)
○象外(シヤウクツイ)
○朗詠云昇殿是象外選也俗骨不可以踏蓬萊之雲尙書亦天下之望也庸才不可以攀臺閣之月
○五馬漢制大守駟馬其加秩中二千石乃右驂故以五馬爲貴遁齋閑覽漢朝臣出使爲太守增一馬故爲五馬潘子眞詩話　韓詩云人生五馬貴莫遺髮毛侵
○右(カクテ)
○耿純云攀龍鱗附鳳翼杜詩云攀龍附鳳勢莫當　喩攀臣依附天子也
○細呂木(ホソロキ)　○伊自良(イシラ)
○直柄(マカラ)
○鶺鴒在原兄弟急毛詩九　故事淵海云兄弟急難相救如鶺鴒在原　○金谷(カナヤ)
○丹生(ニフ)
○喚宜艶切魚口上出喁魚凶切衆口
○潘岳賦跼高天蹐厚地而已哉
○詩　正月作跼蹐箋者畏怖之言也

○用捨　出論語　弛張　出禮記　一ヒハ張(ハル)一ヒハ弛(ハツス)
○子謂仲弓曰犂牛之子騂且角雖欲勿用山川其舍諸論語三仲弓父賤而行惡故夫子以此譬之
○部井(ヘイ)　○篦橈(ノタメ)
○漫(ソヽロ)　○根尾(ネヲ)
○德山(トコノヤマ)
○莊周遊乎雕陵樊之賭黃鵲執彈留去聲宿留也之一蟬方　得美蔭而忘其身螳螂執翳而搏之見得而忘其形黃鵲從而利之見利忘其眞莊周捐彈而又走　又說苑曰吳王欲重刑諫者死舍人曰園有蟬悲鳴飮露不知螳螂在其後螳螂不知黃雀在其後臣執彈丸欲取黃雀不覺露沾衣如此皆務欲得其前不顧其後吳乃罷
○散靡(アラケ)　○忝(ヲホケナク)
○瑠璃燈棚　江湖集　氷壺凛々王龍蟠吐出明珠照檐寒好是山堂無月夜一天星斗墮欄干
○幹(メクラス)　○越生(コシヲ)
○式(モツテ)
○殷名獄曰羑里文拘於羑里通作牖史記文王拘牖里文選班彪游居賦嗟西伯於牖里

○天維煉石補天維李地維坤維大火流坤維選
○地軸地有四柱三千六百軸犬牙相牽博物志
○遭(ヲ丶ツ)　○啓(ヒライツ)
○粟飯原(アイハラ)　○卓犖(タククラク)
○沙嚢(シヤノフクロ)　○稠(キヒシク)

第二十卷

○波羅密(ハラミ)　○安居(アコ)
○黑龍(クツレ)　○勝虎(シヤウトラ)
○頤幽深難見也　易探頤索隱愚謂此頤大早者恐非易義
○烹鮮　老子經云老子云治大國若烹小鱗　注鮮魚也烹小魚不去腸不去鱗不散撓恐其糜也治國煩則下亂治身煩則精氣散去也
○禰津(ネツ)　○富樫(トカセ)
○宸　說文屋宇也从宸聲賈逵曰室之奥者後人指帝居曰宸廣韻天子之
○聿(ツイニ)　○流(ツタウ)
○歘(タチマチ)
○金牛　秦惠王欲伐蜀刻五石牛置金其後蜀人以爲牛便金使五丁力士拖牛成道秦隨伐蜀蜀紀
○火雞　殷浩北伐江逌爲長史以雞百餘隻長繩連之脚繫火驅放過塹飛集羌營皆然之本
○肆(カルカユヘニ)　○范蠡　詳見于史記第十三
○杜牧赤壁詩東風不與周郎便銅雀春深鎖二喬赤壁東坡赤壁賦　古文眞寶載之周瑜吳人呼爲　周郎
○卓犖　或作逴礫　卓犖超絕文選
○孟子第二曾子曰戒之戒出乎爾者反乎爾者也朱子注穆公不能反己猶欲歸罪於民豈不誤哉
○淸文煥皇猷韓匀府　○儻(タマタマ)
○匀府云七月七日忽有靑鳥飛集殿前東方朔　曰此西王母欲來有頃王母至二靑鳥夾侍王母傍
○癖(クセ)　○慄戰(ワナ丶キフルフ)
○穽(ヲトシ)
○文選民方塗炭注天下禍亂如在塗泥炭火之中
○論語七子曰善人爲邦百年亦以勝殘去殺矣　誠哉是言也
○漱石枕流　晉孫楚傳少時謂王濟曰當枕石漱流誤云漱石枕流濟曰流非可枕石非可漱楚曰枕流欲洗其耳漱石欲礪其齒本

○孟子第二文王之囿方七十里芻蕘者往焉雉兎者往焉
朱子注芻草也蕘薪也輔氏曰芻謂取薪者蕘謂取薪者
毛詩詢于芻蕘
○屬強(ツケスマイ)　○騰跳(ヲトツ丶ハネツ)
○對城(ムカイシャウ)　○廢立(ハイリウ)
○魏荀彧曰千鈞之弩不爲鼷鼠發機監
○前漢書第一　夏四月甲辰帝崩于長樂宮臣瓚曰帝年
四十二即位十二年壽五十三
○膝纏(ハ丶キ)脛巾同
○叡　俞芮切　說文深明也或作睿書睿作聖古文作睿
○懸首　文選二十四梟其首漢書音義云懸首於木上曰
梟
○椒房皇后爾椒房　漢官儀　皇后爾椒房以椒塗壁取
其溫辟惡氣或云取椒實審衍之義故事淵海
○三體絶句宿虛白堂李郢　秋月斜明虛白堂寒蛩唧々
樹蒼々江風徹曉不得寐二十五聲秋點長
○ワヒヌレハ身ヲ浮草ノ根ヲタエテサソウ水アラハ
イナントソ思フ　小町
○驚破(ソヨメク)
○優曇華此云靈瑞二千現現則金輪王出法華科註又其
人甚希有過於優曇華疏云鉢名瑞應二千年一現々則
金輪王出　韻府
疱　疱瘡也　等活
疱裂　黑繩一黑
歎哳口　衆合
郝々丸　號叫
八寒　八熱
虎々丸　大號叫
青蓮花　焼然
紅蓮花　極焼然
大紅蓮花　阿鼻　見藏乘法數
十方如來大慈悲皆集一體觀世音八寒八熱奈落迦大
悲一人代受苦
○跂(ハネ)　○魚著(マナハシ)
○淺津(アサウツ)　○女良(メラ)
○志延(シノフ)　○徑(タ丶チ)
○何鹿(イツシカ)　○最(ハシメ)
○俎(マナイタ)　○神風(カムベ)
○目羅湊(メラノミナト)　○胡路(コシチ)
○騰(アカツ丶)　○覆(クツシテ)

○廢立（テタテ）　○听（イタミ）
○競（キソイ）　○攀（ヨツ）
○歸（ヲモムキ）

第二十一卷

○時世粧　白樂天時世粧ノ歌白樂天ハ出自城中傳四
方　崔樞夫人治家整肅貴賤皆不計貴賤周話彔瑣碎
彔貴賤作婦妾
○猛虎左深山百戰震恐及在檻穽之中搖尾而求食　文
選　○鏃（ソク）
○白馬（アヲムマ）　○蹈歌（タウカ）
○白馬節會正月七日於禁中行之蹈歌節會正月十四日
十六日兩日於禁中行之十四日ハ男蹈歌十六日女蹈
歌末二十四日ニ具也
○有學步於邯鄲者未得髣髴失其故步班固傳　壽陵餘
子學步邯鄲也失其故步行匍匐而歸　荀
○西郊（ニシノヲカ）　○翔（フルマフ）
○細煙（ホソクツ）
西城記曰膽部洲之中地者阿那婆答多池唐言無熱惱
舊曰阿耨達訛也在香山之南大雪山北周八百里金銀
銅鐵琉璃頗胝飾其岸焉金沙彌漫清波皎鏡大地菩薩
以願力故化爲龍王於中潛宅生清冷水云云
○佛說柰女耆域因緣經一卷一十七紙後漢安世高譯一
切經辟字函
耆域經云一長者園有柰樹枝葉繁茂其實且其於茂葉
之中忽化生一女長者怪之喜之而養育及于長容貌頗
美而柳眉花顏具於百媚群國之王聞之而爭求於婚長
者不堪于權豪之求而如前置之柰樹稍告諸王曰一任
各々爭之而得爾時頻婆沙羅王潛及殘更上柰樹結於
掣電一歡於是諸王止爭王語女曰若有男子可與我若
女則汝可育之仍留與一環而去矣後產一男手持藥袋
與鐵針而生及長問母云諸童謂我於無父而欺詆蓋實
無父耶母以實告又與以王所留之環耆婆童子謂于王
宮而通報王思前事諾焉欲立爲太子于時韋提希子有
闍王耆婆云我不敢受太子之位宜立闍王吾學醫術殺
世人病而已王許之尋醫師而令學其道耆婆未學其道
自然達醫術其師還習之耳或時有賣薪者其柴之中有
藥王樹而照於樵人五藏仍置之雖然不知何枝是藥王
樹遂一每株令運之中有一株留之而還其餘之一檐薪
於樵人云云　得系又得薪喜悅而歸爾來以此樹照見病

人之心肝無復毫髮之差名醫之名聞于天下茲有頭痛而死者則破腦取出數十虫以三種膏藥治之語其親曰七日不動而可見之如其言七日而甦其家喜之欲以其女令爲隨侍耆婆辭之曰只可賜五百兩金仍與金耆婆與之醫術之本師而報相續之恩又有一人乘木馬而隨死肝臟飜覆故也亦治而活之復得黃金五百兩以答柰女孚乳之恩惠又他國有王以瞋恚病殺人無限聞耆婆之道就頻婆沙王召之不堪辭而往其王宮照見之五藏如毒蛇血氣甚盛而非可治之病密問王之母云昔因有何奇怪之事耶母云我昔日晝寢夢有束帶之人行欲事覺而見其傍有蛇之出竇而去未進人而語耳耆婆云然以醍醐可治之半生忌之仍以五斛醍醐自煎而七日之內令服之求四千里象乘之疾急歸于本國隱磧迦王以醍醐氣溢于口召烏而令逐之烏行於路抂疾過于象果追達於耆婆々々渴而飲磵水剝梨而嘗餘於半顆烏告相携而疾歸于王宮耆婆云此梨者萬病之一藥也要付于人烏乞之而食卽時腹痢瀉下而不能進一步留滿三日而耆婆云我爲留觸毒于梨也今日王病愈矣可共往果王病平愈而還恐耆婆於路而死時節相携而到于王宮王大喜要分半國而和家財半與耆婆々々曰我雖爲王子而讓位於人治病爲業而已豈受其謝耶願王見于釋尊則是所希也佛者治于三毒之病故顯大醫王之名於三界者也仍相伴百詣靈山聞法而證初果矣耆婆欲亡時百草泣曰耆婆亡則於我等無用于世耳獨薄苛不泣蓋薄荷之於萬病也猶如人之雖佛滅度各抱無常之念而有寸善之識一說云訶梨勒獨歌云爾　一義云耆婆波斯匿王之子也母柰女初生之時掌針藥而生

○扁鵲姓秦名越人少時遇桑君飲以上池之水能隔墻視病盡見五臟癥結特以診脈爲名耳　氏族大全　秦代長桑君扁鵲少爲舍長舍客長桑君過扁鵲奇之常謹遇之長桑君曰我有藥方年老欲傳與子乃出懷中方飮以上池之水三十日當知物矣扁鵲如其言從此視病盡見五臟之癥結　秦越人號扁鵲盧國渤海人後素問靈樞之旨設爲問答作八十一難以釋疑義其間榮衞度數尺寸部位陰陽王相藏府虛實脈法證病與夫經絡流注針刺俞穴莫不該備爲醫之祖焉傳曰越人至虢々太子暴死越人曰此尸厥也可活乃針會穴隨手而起

○晏駕見漢書天文志謂天子之死　登仙登霞曰王崩御

○三明　生死智明　宿住智明漏盡智藏棄法救

○三界欲界色界無色界　三界二十五有頌云四洲四惡

趣六欲並梵天四禪四無色無想五那含

○秦穆公三良　史記五云繆公卒葬雍從死者百七十七人秦之良臣子輿氏三人名曰奄恰仲行鍼虎亦在從死之中秦人哀之爲作歌黄鳥之詩君子曰秦繆公廣地益國東服彊晉西覇戎夷然不爲諸侯盟主亦宜哉死而弃民收其良臣而從死且先王崩尙猶遺德垂法況奪之善人良臣百姓所哀者乎是以知秦不能復東征也注索隱曰宣公已上皆史失其名今按世本古史考得繆公名任好　繆與穆同

○秦始皇　寳玉二十八卷本經ニ具也

○後醍醐帝　文保二年戊午二月二十六日受禪三月二十九日三十一歳而即位暦應元年戊寅八月十六日丑刻於吉野而五十一歳崩御

○中流失船一壺千金見韻府壺字

○魯仲連齊人奇偉倜儻其師徐刧曰吾弟子離小千里駒也時秦圍趙急魏遣新垣衍議趙請帝秦仲連見衍曰彼即肆然爲帝連有蹈東海而死耳秦軍聞之却五十里衍曰吾乃今知仲連爲天下士平原君遂欲以千金爲魯連壽連笑曰所貴乎爲天下士者爲人排患釋難解紛亂而無取也齊田單問策於仲連下狄又破聊城歸言於齊王欲爵之仲連逃於海上曰吾與富貴而詘於人寧貧賤而輕世肆志焉氏族大全

○甯戚飯牛於車下擊牛角歌曰南山矸白爛中有鯉魚長尺半生不逢堯與舜禪短布單衣纔至骭從昏飲牛至夜半長夜漫々何時且齊桓聞之命後車載之賜之衣冠授以卿位　新序

○拔穗（ヌキホ）　○正始（セイシ）

○悠紀（ヤウキ）　○主基（シユキ）

○童女（インコ）　○八乙女（ヤヲトメ）

○稻舂（イナツキ）

○論語第七　子張曰書云高宗諒陰三年不言何謂也子曰何必高宗古之人皆然君薨百官總已以聽冢宰三年

○御國忌（ミコクキ）　○安居山（アコヤマ）

○香下（カウケ）　○穴間（アナマ）

○黎（コロヲイ）　○緩（タユミ）

○郭公鳴ヤ五日ノ菖蒲草アヤメモシラヌ戀ヲスルカナ　新古今

○陸奥ノ淺香ノ沼ノ花カツミカツミル人ニ戀渡ルラン

○善惡無（サカナ）　○烽（トフヒ）

○我宿ノ本アラノ小萩サキシヨリヨナ〳〵月ノ影ソウツロウ

○蛙ナクヰ出ノ山吹チリニケリ花ノサカリニアワマシモノヲ

○名ニメテヽヲレル計ソ女郎花我ヲチニキト人ニ語ルナ

○夕顔　見于源氏第二　五條ソタリ賤家ノ軒ニ白花笑隨身〆何條花ト問給ヘハ荒ナン賤女夕皃ノ花ト申又隨身〆請給ヘハ内ヨリ女房ノ最優ナルヤ紅ノ扇ニ花ヲ折テ出ス是ヨリ見初メ通給定家卷頭ノ歌ニ　夕顔ノ花物申宿ナラハナト戀スマニ車立ラン

○鄙閑（ヒタヽケ）　○安濃（アコキ）又安灑

○伊勢ノ海ヤアコキカ浦ニ引網ノタヒ重ナレハ顯ニケリ

○錦木　昔ヨリ樣々申タル事ナレハ一定難知ケレ共常ニ宜シトスル説一ツ侍ヘリ一ニハ陸奥夷共ハ女ヲ迎ントテ文ヲヤル事ハ無テ一尺計リナル木ヲ采テ其女ノ家ノ門ニ立ル合ント思フ男ノ立ル木ヲハヤカテ取入也不合ト思者ノ立木ヲハ不取入強テ立副ル程ニ千束限リトシテ眞ノ志アリトテ其時取入テ契ルト云ヘリ或ハ千束ニ成テモ取入ネハ思絶ヌ共云ヘリ千束ニナレハ必可合樣ニ聞ル歌侍レハ千束カ限歟

○錦木ハ千束ニ成ヌ今社ハ人ニ見ラレヌ閨ノ内ミメ

○錦木ノ數ハ千束ニ成ヌランイツカミタチノ内ハミルヘキ

是ハ和歌抄ニアリ前ノ歌ト同シ體也　又匡房卿ノ歌

○思ヒカネ今日立初ル錦木ノ千束モ待テ逢ヨシモカナ　又千束過テモ猶立ル由アル歌　藤原永實

○イタツラニ千束朽タル錦木ヲ猶コリスマニ思ヒ立カナ　又一ニハ錦木トハ灰ノ木也其木ヲ灰ニ燒テアクニサセハ萬ノ物ノ色ヨク成也仍テ灰ノ木ヲ錦木ト云ト云云物ノ色一合ヲ靚ヒテ此木ヲ一尺許ニ切テ思女ノ門ニ立也故ニ錦木ヲ立ルト云也其趣如前又一枚立ル木ヲ爭カツカトハ云ント云義侍レ共束紂ト云ハ一拳アルヲ云ト申セハ數ノ木ヲ結合セス共一拳アラン枚木ヲモ一束ト可云ト見タリ俊頼ノ無名抄ニモ始ノ説ノ如ク書ニ狛鉾竿ノ樣ニ斑ラニ采リテ立レハ錦木ト云ト侍テ奥ニ至テ實ニハサ

モセヌトカヤ錦木ト云ニ付テ申セルニヤト書シテ
侍ヘリ奥義鈔ニ灰ノ木ニテ錦ノ絲ヲ染レハ爾云フ
ト侍ヘリ　見壒囊鈔第四

○莞爾ニツコト笑　　○御著（コチヤク）

○石苞字仲容晉武立八公攀龍　六字越喬鐃淩雋崇石
崇字季倫小字齊奴父臨終分財與諸子獨不及崇母言
之石苞曰此兒雖小後能自得及爲荊州刺史使商客航
海致富金谷別館在河陽一名梓澤與王愷鬪富作錦步
障五十里以蠟代薪珊瑚樹高三四尺者六七株與潘岳
等爲二十四友見潘氏族大全

○綠珠　石崇以珠三斛買梁氏女後孫秀求之投樓下死
匀府
翠蛾紅粉嬋娟及殺盡世人々不知事文類聚美女

○蹂躙（フミニシル）　○手撥（テヲカイテ）

○忽（ユルカセ）　○羽床（ハユカ）

○轉（コロハカス）　○崔嵬（サイクハイ）

○行平家（ツレヘイケ）　○親（ミツカラ）

○早田宮（ハヤタ）　○半蔀（ハシトミ）

○瞋（イラヽケ）　○膺（アタル）

○志水（ヨシツ）

第二十二卷

○史記第五云造文以善御幸於周繆王得驥溫驪驊騮綠
耳之駟西巡狩樂而忘歸徐偃王作亂造父爲繆王御長
驅歸周以救亂繆王以趙城封造父々々族由此爲趙氏
云云

東坡　後赤壁賦云攀栖鶻之危巢俯馮夷之幽宮注馮
夷華陰人服八石得水仙是爲河伯

淮南子楚共王獵養由基調弓矯矢猿抱樹以號

○缺脣（イクチ）　○咆（クワヘテ）

○行（フルマイ）　○伊地（イツチ）

敷目又式目　三ッ目ノ鎧ヲ云

麈荊抄　孟子第三云北宮黝之養勇也不膚撓不目逃

○羿盪舟　論語第七南宮适問於孔子曰羿善射奡盪舟
俱不得死然禹稷躬稼而有天下夫子不答南宮适出子
曰君子哉若人尙德哉若人

○疏云羿之臣寒浞殺羿而通於羿妻遂有孕生奡々多力
人也能陸地推舟也

○戰國七雄　史學提要云戰國之世合爲七雄注云自元
王以後爲戰國世十二國至此惟秦楚燕也晉分韓魏趙

齊亦改姓爲田矣此七雄强大稱王稱七雄其餘滅亡削弱無復論矣

十二諸侯鄭宋晉吳衛秦齊陳楚蔡杞燕也

○元王者周二十八代主元王仁以下云戰國元王父敬王丐マテヲ春秋ト云春秋ノ十二侯之內秦ト楚ト燕トアリ晉分韓魏趙晉之三卿ハ晉侯臣下也晉之末强大ニ成テ韓ト魏ト趙ト號ス是戰國ノ七雄之內也齊ハ太公始封也陳敬仲自陳奔齊終ニ奪齊後ニ田知奪齊田爲氏故田齊ト云此秦楚燕齊韓魏趙ノ七國七雄ト稱シテ强大ナルヲ然モ秦ノ力豪强ニシテ秦遂滅六國而始皇併天下提要又云秦利連衡六國利合從注曰衡與横同之其時遊士爲從衡之學連衡者說諸侯以賂秦故爲秦之利從音蹤合從者說合六國以拒秦故爲六國之利私云戰國縱横之說ト云ニ異義アリ史記合從連衡索隱曰東西爲横南北爲從秦之地形東西横ニ長故張儀相秦爲秦連横張儀合六國以欲歸秦蘇秦滅秦以欲歸六國言張儀ハ爲秦計說六國ヲ合テ秦ヘ欲取秦地形東横長六國之地形ハ南北ニ縱ニ長シ故ニ張儀横ヲ連ネテ六國ニツキクツサレシト用心スルソ合從トハ六國ノ地形從ナル程ニ六國互ニ心ヲ合テ秦ノ横ナル國ヲツキタツサント云蘇秦張儀ハ皆鬼谷子カ弟子也蘇張カ辯ト云ハ此事也又儀秦トモスルソ鷺ヲ鴉トモ云イナストロ本ニ云カ如ク辯舌ヲ以テ于諸侯遂張儀カ方勝テ六國秦ニ亡タソ又漢書ノ晉義ニ以利合爲從ト以威勢相脅爲衡居正曰此說非也以六攻一爲從以一離六爲衡物之衡直相當亦然故從爲合衡曰連言六トハ六國也一トハ秦也常忠告秦云從横之說其義雖多此義可取也史記張儀曰衡人言連衡之事ヲ司人ト云義也詳于賈誼過秦論

○孫武舉人以兵法見吳王闔廬王出宮中美人百八十人使武敎戰孫子分爲二隊以王寵姬爲隊長皆令持戟三令五申婦人大笑斬二隊長以徇復鼓之婦人左右前後蹟起皆中規矩繩墨　着兵法十三篇　氏族大全

○論語七子曰以不敎民戰是謂棄之

○源氏第二帚木此卷二十八段ノ神秘アリ一條　ニテ頭中將式部卿右馬頭諸人之善悪ノ品ヲ定メ給フ雨夜ノシナ定メト云フ

○人知レヌ我カヨヒ路ノ關守ハヨイ／＼コトニ打モネナナン

○不跰（ヤスラワス）　○周章（アワテ）

○騷(サワク)
○三會　佛說彌勒下生經羅什譯　豈字函
爾時彌勒佛於華林園其園縱廣一百由旬大衆滿中初
會說法九十六億人得阿羅漢第二大會說法九十四億
人得阿羅漢第三會說法九十二億人得阿羅漢又佛說
彌勒來時經云彌勒得道爲佛時於龍華樹下坐樹高四
十里廣亦四十里佛滅後劫後六十億殘六十萬當來下
○田邊(タナヘ)　○武市(タケチ)
○韮(ヨセカクル)　○三宅(ミヤケ)
○高市(タカイチ)
○屈原漁父辭　寧赴湘流葬於江魚之腹中
○鞆(トモ)　○綴(シコロ)
○詑間(タクマ)　○香西(カウサイ)
○鮑鯇(イヒキ)　○謁(カヽリ)
○陰島(ヲキノ)　○馳鶩(チホク)
○鑽(キル)

第二十三巻

○便(ヒンナフ)　○韮(ヨリカヽル)
○白玉カ何ソト人ノ問シ時露ト答ヘテキエマシ物ヲ

○江豚(イルカ)　○噉(タフラカス)
○這行(ハイメクル)　○鉸(ハサミ)
○响(ヲヒヘ)
○桃符　六帖仙木注造桃板着戶謂之仙木象鬱壘山桃
百鬼所畏山海經海中有鬱壘山山有桃木桃下有二神
能啖百鬼故今元日設桃符於門
○四悉壇　世界悉壇　爲人—對治—第一義—藏乘法
數　對治二字出經文
○太倉公者齊太倉長臨菑人也姓淳于氏名意少而喜醫
方術受師同郡陽慶受之三年爲人治病決死生多驗云
云史記
○魏志云華佗字元化魏沛國譙人也一名旉遊學徐土兼
通數經曉養性之術年且百歲而猶有壯容時人以爲仙
云云　又蒙求云花佗養性術名五禽之戲謂虎鹿熊猿鳥
也體有不快起作一禽之戲
○眇身史記本紀六　寡人以眇々之身興兵誅暴亂賴宗
廟之靈六王咸伏其辜天下大定云云
○武王有疾周公作金縢　見尚書金縢篇
○飜譯　○咆
○鞿(ムナカイ)　○撥落(カナクリヲトス)

○三十輻(ミソノワ)
○前漢書一罪三族　張晏曰父母兄弟妻子也如淳曰父族母族妻族也師古曰如說是也
○五刑見前　○醢(スリヒジホ)
○尙書大禹謨云罪疑惟輕功疑惟重刑疑附輕賞疑從重忠厚之至
○浩(カヽル)
○林間溫酒燒紅葉石上題詩掃綠苔　詩學大成
○笏(シヤク)　○御曆(ミコヨミ)
○栖遅(セイチ)　○尋(イクヒロ)
○近隣(アタリ)　○任地(サモアラハアレ)
○聊(ヤスキコト)　○三十輻(ミソカ)
○靑陪從(アヲサフライ)
○三合力者(アラテノモノ)
○七寸(ミツヽキ)　○見課(ミヲウセケ)
○扈從(コシヤウ)又(フミハタカル)

第二十四卷

○腹赤(ハラカ)　○御贄(ミニエ)
○氷樣(ヒノタメシ)　○御杖(ミツエ)

○視告朔(コクサク)　○國忌(コクキ)
○御弓(ヲムタラシ)　○白馬(アヲムマ)
○御修法(ミシホ)　○除目(チホク)
○御薪(ミカマキ)　○賭弓(ノリユミ)
○御麻(ヲホヌサ)　○御巫(ミカンノコ)
○御贖(ミアカ)　○卒川(イサカワ)
○祈年(トシコイ)　○鎭花(ハナレソメ)
○當麻(タヰマ)　○神衣(カムミソ)
○三枝(サヰクサ)　○結番(ツカヰ)
○藥玉(クスタマ)
○醴酒(ヒトヘサケ)又(ヒトヨサケ)
○御體(ミテイ)　○神今食(ヰタマクラ)
○道饗(ミチアイ)　○鎭火(ヒシツメ)
○荒世(アラヨ)　○東西(ヤマトカウチ)
○節折(ヨヲリ)　○定考(カウチヤウ)
○神甞(カムナメ)　○新甞(ニイナメ)
○風神(カサカム)　○鎭魂(タマシツメ)
○獻物(カケモノ)　○相甞(アイナメ)
○荷前(ニサキ)　○齋院(ナイシトコロ)

年中行事

○四方拜ト申ハ正月元日ノ寅刻ニ天子天地四方ヲ拜シ給フ當年ノ星本命星ヲ七亢返唱ヘ給頌文ナント侍ルト也是年々ノ災ヲ禳テ寶作ノ長久ヲ祈給年中行事ニハ寬平二年正月朔日ニ始リタリト見タリ又二條ノ關白家ノ御記ニハ寬平二年ノ宇多ノ御門ノ御記ニ載ラレタレ共始メトハ不覺此事何始タト不見皇極天皇雨ヲ祈リ給テ四方ヲ拜シ給由日本紀ニモアレハ是ナントヲ始ト申スヘキト云云

又云屛風ヲ立廻香花燈供先向北セ給テ屬星名ヲ七返唱給フ屬星ハ本命名也云云 執政大臣モ伊勢太神八幡以下諸神先聖ヲ拜シ給フト也

○屠蘇白散　朔日ノ平旦ニ近奉三箇日進ト見タリ此藥ハ一人是ヲ飮ハ一家無病一家飮之一里無病自少飮之至老無病ト云也君此藥聞食ニハ未嫁稚童女ヲ求テ先彼ニ令飮後清涼殿ニテ聞食也仍此童女ヲ藥子トハ申也是モ屠蘇ヲハ從小兒飮ト云本文アル故也

○朝賀ノ事朝拜トモ云也是ハ元正ノ賀ヲ奏スル事也去年ノ目出タキ嘉瑞トモヲ注シテ今日是ヲ奏スレハ奏賀嘉瑞トテ二人庭ニ進ンテ祝ヒ申也其儀式ハ大極殿ノ高御倉ニ着セ給フ人々禮服ヲ着シテ御即位ノ如ニ幡ヲ振テ萬歲ヲ唱ル也一條院ノ御宇正曆ヨリ後ハ此事ナシト云此群臣ノ朝賀ヲ受ケ給フ事ハ神武天皇元年正月朔ヨリ始ルト見タリ然ハ殊ニ久キ節會ナルニ廢ケルコソ悲ケレ就其神武天皇元年正月朔ヨリ始ト注セル事打任テハ難心得侍リ常ニハ舊主ノ末ノ年ヲハ新帝ノ治ルニ繫事史記ノ法ナレハ正月朔日ノ事ヲ元年ニ懸ン事ハ不審ナレ共是ハ常ノ義ニ替テ不葺合尊ノ隱レ隱シマス年ヲハ庚申ニ繫神武天皇元年ヲハ辛酉ノ歲ニ注セリ然ハ元正モ元年ニ當レル歟將其時未年始ナントノ事モタシカナラネハ只即位ノ事ヲ推テ元年ト注セルニヤト推量侍リ凡テハ神代ノ末人皇最初ノ事ナレハ今ノ儀ニハ難擬者哉又說云奏瑞トハ過シ年諸國ヨリ醴泉連理木ナトノ嘉瑞ヲ申上タルヲ今日是ヲ奏聞スルヲ云ヘリ即位ノ儀ニハ替也

○小朝拜事是ハ訓音ノ名目也小ヲセウトヨマス然ニ延喜五年正月一日仰左右大臣被止之ケル也又同十九年正月一日左大臣ノ依被申復舊被行之云云 其故ハ四方拜ハ宗廟社稷ノタメ又ハ普ク群臣ヲ惠萬民

ヲ憐ミ給フ天子ノ御政也此小朝拜ハ臣下トシテ君ヲ拜シ奉ルヘキ由ヲ申請テ行ルヽ事ナレハ指テ非爲朝廷非神事佛事之儀私ノ禮也仍君子ニ私ノ無禮トテ延喜ノ聖主止給シヤ然ヲ又群臣頻ニ元正ノ日君ヲ拜シ奉ン事ヲ申請ラレシカハ又行ハレケルト也是モ清涼殿ニテ關白大臣以下ノ人々帝王ヲ拜シ奉ラルヽ也其返リニ四位六位マテ袖ヲ連テ舞踏シ給也是ハ臣トシテ申行ルヽナレハ先人々伺候ノ由ヲ奏シテ其後御門出御アル事也如此ノ私事ナレハ小朝拜トハ申也サレハ朝賀アル時ハ不被行也

○奏氷樣腹赤之御贄　是ハ宮内省ノ奏スル事也氷樣ト申ハ只氷也去年納メタル處々ノ氷ノ樣ヲ今日節會ノ次ニ奏聞スル也是ヲ凍スル池ヲハ氷池ト云也延喜式ニモ氷池ノ祭ヲ注セリ喩ヘハ氷ノ多生ハ聖代ノ驗シ冰ノ居サルハ凶年ノ相也仍テ氷ノ御祈トテ大法ナト行也樣トハ寸法程ラヒノ分際アル故也仁德天皇ノ御宇額田大中彥皇ノ始テ氷ヲ奉ラセ給フ也其後ヨリ季冬每ニ國々ニ是納テ氷室ヲ置シ也次ニ腹赤ノ魚トテ筑紫ヨリ奉也昔ハ節會ナトニ聽テ供シケルニヤ腹赤ノ食樣トテ食サシタルヲ皆トリ渡シテ食給ヒケルト也景行天皇ノ御時肥後國毛宇土ノ郡長濱ニテ此魚ヲ釣リ擧タルヲ每年節會ニ供スヘキ由定メ置ケル也

又說云一日七日十六日ニ南殿ニ出御アツテ行ル三節會ト云也元日ニ陰陽寮七曜ノ御曆ヲ奉ル主水司氷樣ヲ奏ス氷樣トハ氷室ニ修メタル氷ノ厚サ薄サノ寸法ヲ取テ奉レハ如此云ヘリ又鱒ト云魚其腹赤ニ依テ如此云ヘリ昔筑紫長濱ニテ釣出テ奉シヨリ不絕事ニナレリ

○視告朔事是ハ正月二日也告朔ト云名ハ唐シヨリ起テ論語ニモアレ共本朝ノ儀ハ聊カ差別侍リトナシ吾朝ノ儀ハ百官ノ行事ト一日ヲ注シテ每月天子ノ御覽スル也告朔ノ文ヲ視ト申ス心也視告朔ト書ルヲ只コクサクト二字ニ讀テ視字讀ヌカ口傳也ト承ル論語ニ子貢欲去告朔之餼羊子曰賜也汝愛其羊我愛其禮トアリ鄭玄カ注每月朔ヲ廟ニ申スト云ヘリ羊羊ヲ餼ニ懸テ朔ヲ廟ニ告ス祭アリ北祭絕テ久シケレハヲモ懸シト申スヲ羊ノ有ルハ猶禮ノ殘レルニテアルニ羊サイナクハ昔此禮アリト知人モアラシト惜ミ給也名ハ同シケレ共心ハ替リ侍ルニヤ是

ハ毎朔ノ事ナレ共元正ハ事多故ニ二日ニ行ルヽ也餘月ハ朔日ナルヘシ

○若水ノ事　是ハ立春ノ日主水司ノ獻スル事也去年御生氣ノ方ノ井ヲ點シテ蓋ヲシテ人不汲立春ノ日此水ヲ汲テ主水司ノ人ノ奉也君朝餉ニテ聞食也是モ年中ノ邪氣ヲ除クト云本文アル故トカヤ當時モカワラヌ事ト承ル

○卯杖ノ事　是ハ正月上ノ卯ノ日奉杖事也持統天皇三正月乙卯日大學寮ヨリ獻杖八十枚云ヘリ又文德天皇ノ實錄云仁壽二年正月巳卯日諸衞府ヨリ獻杖逐精魅アリ就之本古何ヘハ漢ノ官儀云正月卯日以桃枝作杖厭惡鬼也ト云云　此若水卯杖ノ二ハ日難定故ニ此ニ注也

○白馬ノ節會ノ事　正月七日也天武天皇十年正月七日ニ始ルト也白馬ヲハアヲムマト讀也其心ハ馬ハ陽獸也靑春ノ色也仍テ正月七日ニ馬ヲ見ハ年中ノ災ヲ除クト云本文ノアルト也御馬ノ數ハ三七二十一匹ナルヘシ三才ニ像ル寬平ノ御記ニアリトナリ又說云白馬ハ葦毛ノ馬也其色白ニ依テ白馬ノ節會ト云然レ共右ノ說ノ如ク以義アヲムマト讀ナリ

○御齋會ノ事　自正月八日至十四日七箇日也天武天皇元年始テ金光明經ヲ講セラルヽト云云　於大極殿八日最勝王經ヲ講讃セラル是朝家ノ御祈ノ爲也此經ニ殊ニ國家ヲ護持スル功德甚深ナル故ト云云　或本ニ大極殿ニテ金光明經ヲ講セラル又治部省ニテ大元法ヲ修セラル又眞言院ニシテ東寺ノ長者後七日ヲ修ス是等ハ皆息災ノ爲也年ノ始ニ行ルヽ也

○女叙位ノ事　正月八日ニ行ルヽ也隔年ニ有之女叙位トハ女ノ位階ヲ叙セラルヽ事也其内内侍司ノ被官ニ東童ト云者アリ行幸ノ時姬松トテヲカシキ馬ニ乘テ供奉スル即是也トナン是ニハ三子ヲ用ラルヽト申傳ヘタルニヤ凡ソ三子カ天子ノ御守リニテアル由毛詩ニアリ女叙位ニハ毎年申文ヲ出シテ必五位ヲ給ルトナリ然モ是ハ昔ヨリ只同名乘ヲ相傳テ名謁スルト云ヘリ最常ナラヌ事也

○除目ノ事　正月九日也除目縣召ハ諸國ノ司ニテ侍リ田舍ヲハ縣ト申テ外國ノ輩ヲ召テ任官ヲ授ケラルル也仍テ加樣ニ名付也京官除目ト申ハ京ニアル諸司ヲ任セラルヽ也是ハ宗ト田舍ノ人ニ官ヲ給ルト也京官除目ハ十一日歟天カ　天武天皇四年三月ニ

始ト見タリ

○蹈歌ノ節會事　正月十四日十六日兩日アルナリ是ヲ男蹈歌女蹈歌トテ兩度アリ然レ共十四日ノ男蹈歌ハ近代不被行ト申ス也女蹈歌ト申ハ大方京師遊士ノ聲能歌者ヲ召テ年ノ始ノ祝詞ヲ作テ歌ハセ舞ヲマハセテ御覽セラレケル也誠ニ十四日十六日ハ月ノ比ナレハ明月ニ此蹈歌ノ曲ヲ聞食ル丶也此蹈歌ニウタフ歌ノ曲ニ此殿ト云フ秘曲アルトカヤ又カサシノ綿トテ冠ニ綿ヲ卷テカサシニ用ルト也光源氏ニ馬中子ナント云ル丶此事也ト但シ男蹈歌ノ事ナルヘシ源氏ニハ男蹈歌ノ事ヲ申侍ル也ト云云

○御薪ノ事　正月十五日也是天武天皇ノ御宇ニ白鳳二年癸酉諸臣供御薪ト云云 御薪ト申ハ百官悉ク薪ヲ奉也是其心ハ民ヲ休メン爲ニ宮内省納メラレケルナルヘシ其由延喜宮内式ニモ見ヘタリ

○賭弓之事　正月十八日也貞觀二年正月十八日幸於豐樂院觀之ト云云 見ル事ハ禮記ニモアル也是ハ左近衞右近衞左兵衞右兵衞ノ四府ノ舍人共射ト也左右ノ大將射手ノ奏ヲ取給也大方京司管領ニテ御座セハニヤ於後射手饗ヲ給也是ヲ返主ト申ト云リ饗ヲハ源氏ニアルト申スト也サレハ彼射手ニ饗饗セラル丶事ヲカヘリアルシト申シ侍ル也凡此返リ主シ行ヒ給ヌ大將ハ無左右參リ給ハヌヤラン度々ノ召ニ付テ參内シ給ト云云 三寶字抄ニ饗ノ字ヲアルシトヨメリ

○内宴ノ事　是ハ正月二十一日ニアリケルニヤ詠詩ノ御遊ナルヘシ嵯峨天皇弘仁三年幸神泉苑覽花樹文人ヲシテ令賦詩給ヒケル其ヲ始トスト云云 内々ノ節會ナレハ内宴トハ申也仁壽殿ニテ行ル丶也但此事昔モ久ク絶タリケルヲ保元ニ信西入道ノ申行シ後ハ又絶テ侍ルトナン文道ノ爲メ尤モ無念ノ事ナルヘシ

○釋奠ノ事　是ハ二月上ノ丁日也然トモ若此日日蝕幷ニ祈年ノ祭リ當レハ不行シテ中丁ニアル也文武天皇大寶元年二月丁巳ノ日始テ有釋奠禮是ハ孝經禮記毛詩尚書論語周易左傳等ヲ轉輪シテ講之云云 其本古ヲ申サハ禮記ノ王制ニ云釋采奠幣禮先師也仍釋奠ノ禮ト申也後漢ノ明帝十五年ニ幸孔子宅祠仲尼及七十二弟親御講堂ニト云リ仍本朝ニモ先聖孔子先師顏回ヲ祠給フ也御學寮ニ御影御座ス供具

ヲ備ヘ詩ヲ作リ文ヲ講シテ禮奠ヲ奉ル此事春秋二季ニアル也秋ハ八月上丁日是モ若日蝕幷御國忌ニ當レハ中ノ丁ニ被行也弘仁ノ格ニ云應改孔宣文爲文宣王ト云云是モ今ハ絶テ不被行也

○献胙事二月也必釋奠ノ次ニ日アレハ庚ノ日ニ當レリ同ク春秋二季ニアル也若釋奠延レハ献胙モ同ク中ノ庚ニ延也胙ヲ献ツルトハ昨日ノ釋奠ノ供具ヲ大學寮ヨリ内裏ヘ奉也胙ヲハヒホロキトヨム直禮ノ義也又二條攝政家ノ御記ニ云胙ヲハ神道ニハ神食トモ書譬ヘハ神供ナントヲ申ト云云

○祈年ノ祭事　二月四日於神祇官行之前後ノ齋アルナリ天武天皇四年二月甲申有ト祈年ノ祭ノ官史記ニ見ヘタリ其本古ヲ云ハヽ周禮曰祈年ハ求豐年也ト又神祇令ニ曰謂祈猶禱也祈年ヲハトシコヒノ祭トヨム也大神宮已下三千七百三十二座ノ神ヲ祭テ年災ヲ祈リ除カルヽ故ニ祈年ノ祭ト申也或本ニ白猪白雞ヲ用事アリ今世ニ其沙汰ナシト云云

○最勝講事　五月也是ハ撰吉日ヲ政ニテ日不定也五箇有之一條院長保四年五月七日ニ始テ行之ト云云此講ハ　永延帝始テ清涼殿ニテ此經ヲ被講也其後後朱雀院ノ御時ニヤ生身ノ四天王親道場ニ現シ給ヒケル也仍テ其後ハ四天王ノ座ヲ敷レケルトナリ

○京中賑給事　是モ五月撰吉日政ナレハ日ハ不定寅申及亥日ニハ不賑給ト云云　月令ニ云季春ノ月天子發倉廩賜貧窮云云　仍卑キタツキ無キ民ニ米鹽ナントヲ賜ルナリ京中ノ條里ヲ分テ檢非違使承テ是ヲ引也氷鹽ノ勘文ナントト申事アリト也大臣陣ノ座ニ着テ是ヲ定メ行給フ也賑ハトミ也貧者ヲ富シムル財ヲ給ハルナルヘシ賑ヲハ富ニ作レリ

○道饗ノ祭ノ事　六月晦日被行事也卜部ノ氏人於京城四之隅道上而祭之也其心ハ自外來ラン鬼魅ヲ敢テ京師ニ不令入故ニ預シメ道ニ迎饗遏也仍テ道饗ノ祭ト云也此モ夏冬二季ノ祭也冬ハ十二月晦日也

○鎭火祭事　是ハ六月晦也風土記曰謂在宮城四方角卜部等鎭火而祭ル爲防火災也故曰鎭火ト云々是モ夏冬二季ニアリ冬ハ十二月也

○大祓事　是モ六月晦日也日本紀ニ曰天武天皇三年六月晦日大祓始ルト云リ義解ニ云祓ト者解除不祥ト云々此祓ヘハ百官朱雀門ニ集テ祓テシ給也六月晦日ノ事ナレハ六月ノ祓ニ通ヒ侍ルヘケレ共是ハ

群臣一同シ集テシ給祓ヘ也仍テ大祓ト申スニヤ觸穢ナントモアリ又神事ナントモ行ルレハ臨時ニモ常ニ此祓ハアル事ト也アナカチ六月ニハ不限也或本ニハ建禮門ニテ祓トナリ

○節折ト云ハ竹ノ枝ニテ玉體ノ寸法ヲ取持出レハ神祇官祝言ヲ申テ祓ツトムル也竹ニテ寸法ヲトレハ節折ト名付也六月晦日ニアリ節折ヲハヨヲリトヨム

○乞巧奠ノ事　七月七日七夕ノ祭リ也風土記ニ云七月七日牽牛織女會天河俗掃庭露施机筵ヲト云々牽牛ヲ夫爲ト織女ヲ爲婦ト七月七日庭上机ヲ立供具ヲ備ヘ香花ヲ調ヘテ又竿ノサキニ色々ノ絲ヲ懸テ織女ニ供シ奉ルナリ是織女祭リナリ

○相撲節ノ事　七月二十五日ヨリ二十九日マテアル也日本紀云垂仁天皇御時七年ニ始テ有之ト云聖武天皇神龜三年ニ始テ諸國ニ相撲人等ヲ被召ト云云此相撲ノ節ト申ハ諸國ノ供御人ヲ召集テ是ヲ行セテ天子叡覽アル也始メハ召合ト申ス是二十八日也後ヲハ拔手ト申ス二十九日也其中ノ上手ヲ勝テ後御覽スル故ニ拔手トハ申也是ヲ召使ヲハコトリ使ト云也字ニハ相撲使ト書テコトリツカヒトヨム口傳ナリ左衞門ノ管領ニテ侍ハ方ヲ分テ國々ヘ使ヲ下シテ是ヲ召ト云或本云二十六日内取ト云習禮心也召合ハ眞外ノ相撲ノ正日也拔出トハ昨日勝タル者ヲ拔賞ラル此使小鳥使ト云也萬葉集ニカク誦セ侍リ相撲取日ニ至テヒサコ花ト申テ夕顔ノ花ヲ作テ髻ニ指事アリ件其緣未考ヘ侍ラス

○祈年穀奉幣事　七月也撰吉日政ナレハ日不定也是ハ二十一社ニ御幣ヲ奉テ年穀ノ田刈草ヲ祈リ申サルヽ事也日本上七社伊勢石清水賀茂松尾平野稻荷春日中七社下七社

○定考ノ事　八月十一日十二日兩日アル也十二日ニアルヲハ小定考ト申也凡此定考ト申事ハ昔ハ六位已上ノ加階ニ叙スル人ハ其藝能行跡ヲ撰ミテ榮爵ヲ賜リケル也撰叙令ナント申文ニ委ク注ケルナリ德行才名恪勤ナトニ依テ官爵ヲ賜リケル也此人々ヲ撰ヒ出シ定ルヲ定考ト云也但文字ニハ定考ト書タレ共打返シテカフチヤウトヨム是又口傳也尤故實アル事ナリ

○季ノ御讀經ノ事　八月或ハ九月也撰吉日儀ナレハ日ハ不定是ハ大般若經ヲ禁中ニテ讀誦セラルヽ也

此時引茶トテ僧ニ茶ヲ引ルヽ也サレハ二條ノ攝政家ノ御記ニモ茶ハ昔ヨリヲホヤケノモノテナシ給物ニテ侍レハ大內ニモ茶苑ナトアリ中北拇尾ノ何上人トヤラン茶ノ種ヲ植タルト申ハ僻事ニテアルナリ

○御燈之事　九月三日ナリ是ハ天子ノ北斗ニ燈ヲ奉リ給事ナリ今ハ久ク其儀絕テ只御祓ヘ計リアルトナリ是ヲ行レシ時ハ北山靈巖寺ト云處ニテ高キ嶺ニ火ヲ燃シテ北辰ニ供セラレケルト也或本ニ月林寺園城寺ナトニテ奉ラル例アリ近比ハ絕ヘ侍ルトナリ

○不堪田奏ノ事　九月七日ナリ是ハ諸國ノ田ノ損シテ作ルニ堪ヌ處々ヲ目錄ヲ書テ奉リケレハ其ニ付テ租稅三分一ナト免給事アリシ也委諸國ヨリ坪付ヲシテ奉ルヲ大臣陣ニ參シ給テ定メ申テ國々ヘ施行セラルヽ事アリシトナリ

○重陽ノ節會ノ事　九月九日也是ヲ重陽宴ト云事ハ月與日共ニ陽ノ數ナルカ故ニ云儞也其由易ニモ見ヘタリ又此日群臣ニ氷魚ヲ賜ル事アリ凡テハ十月ノ旬ニ氷魚ヲ賜ルトナリ

○新嘗會事　十一月中ノ卯ノ日也日本紀云天照太神新嘗ノ初也ト此節會ヲニイナメ祭ト申也今年ノ初ツ稻ヲ神ニ供シ奉ラセ給ナルヘシ御代ノ初ニアルヲ大嘗會ト云每年アルヲ新嘗會ト申ナリ

○豐明節會ノ事　十一月辰日也又宴會トモ書ナリ昨日神ニ手向奉リシ胙ヲ君モ聞食シ臣ニモ賜ハラン爲ニ節會ヲ行ルヽ也宴會ヲモトヨノアカリトヨムニ也凡テハ御節會ヲトヨノアカリトハ申ヘキ也

○賀茂臨時ノ祭事　十一月下ノ酉日也宇多天皇寬平年中ニ所始給也コレハ宇多ノ御門未王侍從ト申奉リシ時狩シ給ケルニ賀茂大明神親ク現シ給テ臨時ノ祭ヲタブヘキ也可申由アリテ申也トテ驗テ上セ給ケルカ幾程ナク王侍從帝位ニ卽セ給ヒケレハ卽寬平年中ニ始テ臨時ノ祭ヲ奉リ給ト也都テ諸社ノ祭ヲハ事繁ケレハ不注也

○內侍所ノ御神樂ノ事　十一月下ノ酉日臨時ノ祭同日也寬平ノ御宇ヨリ始ルト云云　賢所ニテ每年アリト也

○荷前ノ事　十二月也荷前トハ先皇ノ御陵ヘ年ノ替リ幣帛ヲ奉ラセ給也十二月五日ニ此荷前ノ日定メ

ラルル也同十三日ニ參議以上ヲ點定テ奏聞セラル
ヽ也
○御佛名之事十二月十九日二十日二十一日ノ間ニ靑
日ヲ擇テ行ルヽ也佛名トハ三世ノ諸佛ノ御名ヲ唱
テ一年ノ罪障ヲ懺悔シ御座也貞觀ノ頃ニヤ一萬三
千佛ヲ畫圖ニ顯シテ諸國ヘ賦ラセ給ケル由國史ニ
見タリ此時左衞門ノ府ノ栢梨ノ庄ト云所ヨリ御酒
ヲ奉テ殿上ニテ勸盃ノアルナリ栢梨庄トハ所領ノ
名也佛名懺悔トハ禁中ヨリ始テ邊山ニ至ルマテ佛
名サンケトテ歳暮ニ必過現未ノ三千佛ノ御名ヲ稱
シテ罪障ヲサンケスル也譬ヘハ年中所造罪障ヲサ
ンケシテ三世諸佛ノ智光ニ照シ歳霜ト共ニ令消滅
意也　衆罪如霜露慧日能消除是故應至心　懺悔六
情根一切業障海皆從妄相生若欲懺悔者端座思實相
共ニ普賢經文ナリ又華嚴經云我昔所造諸惡業皆由
無始貪瞋癡從身語意之所生一切我今皆懺悔以此等
意歳暮必罪障ヲサンケセラルヽ也サレハ歌云
○アラ玉ノ年モクルレハツクリケン罪モ殘ラス成ヤ
シヌラン
○河竹ノナヒク葉風ニ年暮テ三世ノ佛御名ヲ聞哉凡

ソ懺悔ノ功德ノ大ナル事譬ヘハ千年ノ煩惱ノ闇ニ
テ暗キ處ト云トモ一寸ノサンケノ紙燭ヲ差入レハ
千年ノ闇晴千里ニ代積煩惱ノ薪ト云トモ芥子許サ
レケノ火ヲ付ハ悉ク燒盡ストモ云ヘリ仍多歌ニモ
ヨメリ
露結ソ霜ニタトフル罪ナレハ朝日マツマテナケ
キ成ケリ
思ヒトク法ノヒカリシ照サスハ身ニヲク露ヲ誰
ハラハマシ
○懺悔ヲハ梵ニハ痾鉢底鉢羅底提捨那ト云痾鉢底ハ
罪過也鉢剌底提捨那ハ對他說也此故ニツヽメテ說
罪トモ翻スヘハサンケトモ云ナリ今ハ古ニ隨テサ
ンケト云也又一切經ノ玄應音義云懺ハ除懺楚音也
具ニ云ハ懺摩此ニハ云請忍謂請賢聖或請淸淨僧忍
テ受懺悔ト云云　悔ハ改也恨ナリ新撰字鏡云懺子廉
切淨也捨也洗也又楚鑑反或抄曰天竺ノ懺魔ト云ヲ
ハ此ニハ追悔ト譯ス義淨三藏是ヲ釋シテ云是ハ請
恕願勿瞋責ト云云　追悔トイフハ爲僻事人ノ咎ル時
誠ニ僻事也許シ給ヘ枉テ腹立タマハサント手ヲス
リテ怠リヲ請ヲイフ然レハサンケトハ聊カ其意不

同ト云云 禁中トハ內裏ナリ門戶ニ有禁非侍衞者不得入故曰禁中小野六帖ニアリ抑過現未ノ三千佛ト者過去莊嚴劫千佛現在賢劫千佛毘婆尸佛ヲ爲首樓至佛ヲ爲終未來星宿劫ノ千佛也千者擧滿數耳有無量無數如來ト云云 サレハ御佛名ノ道師初後一唱テ云南無歸命頂禮萬三千佛ト云云 其故ハ仁明天皇御宇承和十三年ニ佛名ヲ禁中ニ被始ヨリ以降叢外ニ至ルマテ修佛名皆十六卷ノ佛名經ヲ用ユ此中ニ所載佛菩薩賢聖等ノ名一萬三千餘ナリ然ヲ玄鑒內供上奏シテ十六卷ノ佛名ヲ略シテ延喜十八年ニ三千佛名經ヲ令改修ヨリ以來タ以之常ノ式トス然レ共導師ハ不改作法於初後必猶萬三千佛名ト唱ルヲ爲故實云云 淳和帝天長七年ニ召テ東大寺道昌律師佛名ノ道師トシ給フ時御門勅問アツテ曰王者ト臣下ト庖宰ノ罪何レカ可重道昌答申サク帝ハ重臣ハ可輕其時少逆鱗ノ御姿ニテ重テ故ヲ問給フ左右ノ侍臣肝ヲヒヤシケレ共昌律師更ニ不驚奏シ申サク竊ニ庖氏ノ供御ヲ見レハ割鮮數十以薦一膳山澤飛走動レハ受過戮所羞少所屠多以是思之王者ハ爲重臣庶ハ不然纔ニ資口腹耳也御門美禁庖供給フト見タリ又承和五年ニ佛名アリ靜安法師在比良山佛名經ヲ讀テ禮拜懺悔スル聲帝闕ニ聞ヘケル間勅シテ聲ニ付テ是ヲ被尋果シテ安公ヲ得タリ即導師トシテ被修佛名懺悔靜安法師ハ是西大寺ノ常騰律師ノ弟子也此外度々行ルト云ヘ共承和以前ハ有無不定也又三千佛ニ定ルハ延喜十八年ヨリ也其度ハ淨藏梵唄ヲ勤ト云々此貴所聲明妙ヲ得タリト云ソ

○節料事 十二月晦日此節料ト申ハ神祇官ニテ十二月晦日ニ御贖物ヲ奉給也節料ノ命婦ト云物アリ又此夜ヲ除夜トモ云也一年ヲ除クカ故ト云云

○追儺事 是モ同夜也是夜於禁中殿上ノ侍臣以桃弓葦ノ矢ヲ驅追惡鬼是ヲ追儺ト云故ニ此夜ヲ云爾也儺ヲハヲニヤラフトヨム也論語曰鄉人儺朝服立阼階ト孔安國注曰儺驅逐疫鬼ト云々漢ニハ儺ノ一字ヲ用タリ金谷云昔高辛氏子十二月晦ノ夜死ス其靈成鬼致疾病因之以桃弓葦矢逐之云云 コレ只彼疫鬼ヲ逐義也光源氏ニハナヤラフト書タルナトハ儺ナルヘシ是ハ呉音ニ當ルニヤヤラトハ逐ト云詞也以上年中行事ニ如此アリ

或本云方相氏ト云テ鬼面ニ金ニテ四眼ヲ作身ハ赤

物ヲ著テ手ニ鉾ヲ取疫癘ヲ追也今ノ世ニハ大殿ノ物此役ヲツトムルニヤ追儺ニ參公卿ハ桃弓葦矢ヲ取也此弓矢ハ疫癘ノ恐ル丶本像アル故也

凡踐祚大嘗祭ヲ爲大祀ト祈年月次神嘗毎年ノ新嘗等ヲ爲中祀大忌風神鎭花三枝相嘗鎭魂鎭火道饗ノ祭ヲ爲小祀ト云フ

○牛車輦車ノ宣旨トハ牛車ハ高貴ノ智臣宿老ノ大臣ナト此宣旨ヲ蒙リ給テ陣ノ中重トカヤヘ車ヲ牛ニ懸テ出入シ給フト也輦車ヲハ輦ヲハ手車トヨム輪ヲ懸ケ輿ノ樣ニ作リタル車ナルヘシ是モ可然宿老ノ大臣又ハ女御更衣ナトノ許レテ大內ノ中ヲ通ヒ給フモノ也ト云ヘリ源氏ニハ桐壺ノ更衣モ此輦車ノ許サレヲハシマシケル由書侍ルニヤ尤モ規模ノ事也

○八座トハ諫議大夫トテ殊ニ天子ヲ諫メ奉ル人也又ハ參議ト云也唐名ハ宰相職原ニモ參議ハ非正官ト云テ召時モ參議トハ不言宰相ト云故ニ正官ニ非ストアルナリ勝レタル才者ヲ三位四位ノ中ヨリ撰出シテ任スル也其數八人アル故ニ八座ト云ナリ公卿僉議ノ座ト云ヘハ必參向シテ議定スル故ニ參議トモ申ナリ

○尙書トハ辨官也其人七人アル故ニ七辨ト云ヘリ必侍從ヲ兼ヌル故ニ帶劍也尙書トハ辨ノ唐名也又日本百官ノ笏ヲ持ツ事ハ人王第四十四代元正天皇ノ御宇ニ定メラル五位已上ハ牙ノ笏六位ハ木笏ト見ヘタリ已上見壒囊鈔

○屠蘇酒廣韻屠蘇酒元日飮之可除瘟氣屠蘇孫思邈菴名

○卯杖　漢官儀云正月卯日以桃枝作杖壓惡鬼也又本朝文德天皇實錄云仁壽二年正月己卯諸衞府獻杖逐精鬼也　下學集

○三月上巳續齊諧記晉武帝問尙書郞摯虞曰三日曲水其義何指答曰漢章帝時平原徐肇以月初生三女三日俱死一村以爲怪乃相携水邊濯洗流水以濫觴曲水起此帝曰若如所說便非佳事晳曰摯虞不足以知臣請說其始昔成王卜洛邑因流水以泛酒故詩曰羽觴隨波又秦昭王置酒河曲有金人自泉而出捧水心劍曰令君制有西夏因立爲曲水二漢相沿皆有盛集故事淵海

○浴佛　佛生於四月八日是日浴佛高僧傳四月八日浴

佛以五香水灌頂ニ歳時記四月八日諸寺各設齋以五
香水浴佛作龍華會
○目連救母佛經云目連以母餓鬼中佛令作盂蘭盆至七
月十五日以百味五菓蓋盆中供韄十方大德而後母得
食目連白佛凡弟子者順以盂蘭盆供韄佛言大善後世
因之遂爲盂蘭盆會
○郭若虛圖畫見聞誌云僧惠崇建陽人工畫鵝鴈鷺鷥尤
工小景善爲寒汀煙渚蕭灑虛曠之象山谷題惠崇畫扇
詩云惠崇筆下開江面萬里晴波向落暉梅影橫斜人不
見鴛鴦相對浴紅衣
○唐代韋偃父鑾官至少監善畫山水松石花鳥時名雖已
籍々而未免墮於古拙之習偃雖家學而筆力遒健風格
高擧過父遠甚尤善畫馬其筆法磊落揮霍振動　圖繪
寶鑑第二
○成風之斤　莊子曰莊子過惠子之墓謂從者曰郢人堊
漫其鼻端若蠅翼使匠石斲之匠石運斤成風聽而斲之
盡堊而鼻不傷郢人立不失容宋元君聞之召匠石曰嘗
試爲我爲之匠石曰臣則嘗能斲之雖然質臣死久矣自
夫子之死也吾無以爲質矣
○論語卷之五　顏淵喟然歎曰仰之彌高鑽之彌堅瞻之
在前忽然在後
○四華曼陀羅華　小白花摩訶曼陀羅華　大白花曼殊
沙華小赤花摩訶曼殊沙花　大赤花　法花料註
○射人含沙山谷演雅詩射工含沙須影過
○明堂天子布政之宮　文選注又見孟子
○論語卷之三　子曰臧文仲居蔡山節藻梲何如其知也
○雷同　事多同曰雷同記ニ毋雷同注雷聲聞百里謂之
同
○法花云諸佛出於五濁惡世所謂刧濁煩惱濁衆生濁見
濁命濁
○論語卷之七曰君子耻其言而過其行
○言之者無咎聞之者足以誡　毛詩序作戒
○王戒簡要　蒙求
○食言　孟武伯惡郭重曰何肥也哀公曰是食言多矣能
無肥乎　尤
○尼師壇坐具也
○富蘭那　謂一切法斷滅性空無君臣父子忠道
○末伽梨　謂衆生苦樂不因行得自然耳
○刪闍夜　謂道不須求生死刼數苦盡自得何假求耶
○阿耆多翅舍　著弊衣自拔髮五熱炙身以苦行爲道

○迦羅鳩陀　謂諸法亦有相亦無相應物起見隨答有無
○尼犍陀　謂罪福苦樂本自有定要當必受非行道所能斷也　藏乘法數　六師外道
○胡床　隋改曰交床唐穆改曰繩床　勻府
○玉晨君　黃庭經云太上天道玉宸君注大士之尊也本行經六宸君即黃老君之號也太上洞玄靈寶救苦經有十方天尊玉宸君其一也
○鯢桓之審爲淵止之審爲淵流之審爲淵汪淵者靜默之謂耳疏此擧譬也鯢大魚也桓盤也集審也夫水體無心動止隨物或鯨鯢盤桓鰯龍騰踴云云　莊應帝王
○守靜極以自作時爵躍而鯢桓　坡和陶辭
○黈纊塞耳而所於無聲　文選
○晉荀鳴鶴陸士龍會張花々曰今日不可作常語陸曰雲間陸士龍荀曰日下荀鳴鶴陸曰既開青雲睹白雉何不張爾弓挾爾矢張曰荀何遲荀曰本謂雲龍騷々今乃山鹿野麋弩徽遲强是以故遲一坐撫掌陸雲傳
○爝　炬火小光也　○焞烟起貌
○爝火　莊子日月出矣｜不息
○鬩鬪也　兄弟鬩墻之外禦甚務詩ニ務與侮同
○胡越同舟同舟而濟胡越何患乎異心也易略例

○聲花（ハナヤカ）
○粟飯原（アハイハラ）　八葉車
○設樂（シタラ）　○淸久（キヨク）
○千秋（セムシユ）　○粲（サハヤカ）
○邊（アタリ）
○十大弟子　藏乘法數
頭陀第一　摩訶迦葉　多聞第一　阿難陀
智慧第一　舍利佛　解空第一　須菩提
說法第一　富樓那　神通第一　目犍連
論義第一　迦旃延　天眼第一　阿那律
持律第一　優婆離　密行第一　羅睺羅
○三度燒　延文三年戊戌正月四日夜燒貞治六年丁未五月廿九日夜　應安六年癸巳九月二十八日夜
○筑都（ツヽキ）　○楓（サカス）
○四主頭（シシテウ）　○黧黑（ツシミクロシ）
○漕戾（コキモトス）　○鎖龕（ソカム）
○南瀨口（ミナセクチ）

第二十五卷

○國崎（クサキ）　○垢離（コリ）

○前集事文類卷之四十　戴山松誤畫鬪牛
○仲原師光詠歌　滄海爾凝劒盧島乃顯手我皇乃未曾久幾　塵荊抄
○日本惣名　磤馭盧島　秋津島　野馬臺　大和　山迹　日本　耶摩堆　敷島　豐葦原又葦原三穗國扶桑國　以上見下學集
大養德國　高天原日高國水穗國細戈千足國暘谷村磯輪上秀眞國　一豐國　日本　島根　閻浮界至治域　日東　日城　扶東海　已上塵荊抄
○太子傳云日本六十六箇國　郡八百九十郷一萬八千九百三十四　河八萬三千四十六山九萬八千五十二、池一萬一千三十大菩薩一萬三千八　大明神三萬五千七十餘社又大社八萬九千八百九十七小社二十萬七千八社云云　太子以後之勸請可若干
○後漢書ニ大和王居邪麻堆　又吾朝ヲ伏見ト云義アリ　金札傳　伊左古々爾私賀代和邊奈無須賀和羅耶婦志弱乃左登乃阿禮摩久毛於志　此歌ハ古今之中灌頂ノ歌也桓武天皇山城菅原伏見里ニ宮造仕給時天人降常住怪思而宣爾ヲ讀ニ天ヨリ金札フレリ其札ニ此歌アリ裡ニ天照大神アリ于時人ニ詫而曰伏見トハ日本國也古今註ニハ是著山城ノ伏見ニハ非大和國ニ菅原ト云里アリサテ加樣ニツクルトナン見塵荊抄
○遘合(ミトノマクワヒ)爲夫婦トモ又夫婦ヲシテ
○逢事於稻負鳥乃敎次和人於戀路爾摩土和摩志野和
○世中爾稻負鳥乃奈加利勢半契乃伴志於伊賀志良摩志此稻負鳥ニ數多之義アリ　家隆卿歌
○秋乃田乃稻負鳥乃焦羽毛木葉毛與於寸露耶深覽是ハ鶺ヲヨメリ又或歌ニ　取渡次板田乃橋乃中絕手稻負鳥渡羅佐利氣利
是ハ馬ト云ヘリ本草和名兼名苑等ニ萬ノ異名形ヲ顯タルニハ見ヘス順カ和名ニハ庭扣ヲハ鷺鴒又鶺鴒ト書テ注ニハ日本私記ニ嫁敎鳥ト書タリ又別ニ稻負鳥ト在テイナヲホセトリト書而萬葉ヲ引タレハ異鳥ト見ヘタリ順知サランヤ　塵荊抄
○小蛇　サハヘ又五月蛇トモ書
○一千(イチ、)　○日前宮(ニチセンクウ)
○鏡　内侍所ト申是ヲ八咫鏡トモ齋鏡トモ眞經鏡トモ日像鏡トモ日矛鏡トモ申內宮ノ御體是也
○千劒破(チハヤ)又千般八　千ハ多數ノ義也般ハ渡

ルトヨメリ物ニ渡リ年久經心ヲ千葉破トモ云左傳德般四海能重長印文集富門戶烟不絕德般昔年家好過長月又御殿茅茨切ラスシテ二十一箇年迄在ケレハ茅屋古トモ云ヘリ又太神宮茅葉屋ニ籠給ヲ惡神達責奉時彼屋ヲ破出給ケレハ茅屋破トモ云又禰禪トモ書タリ　塵荊抄

○淸地(スカ)淸地此ハ云素鵝見日本紀

○以女奉吾耶曰隨勅奉矣

○脚摩乳(アシナツチ)

○松栢生於背上而蔓延於八丘八谷之間日本紀

○寸々斬其蛇

○日本紀寸々(ツタツタ)　叢雲(ムラクモ)

○到出雲國簸川上所在鳥上峯時彼處有呑人大蛇素盞嗚尊乃以天蠅斫之劔斬彼大蛇云云　尾中有一神劔日本紀

○草薙(クサナキ)

○十握(トツカ)又十束(トモ)

○神璽(シイシ)

○八坂瓊曲玉(ヤサカニノマカタマ)

○左傳第一苟有明信澗谿沼沚之毛蘋蘩薀藻之菜筐筥錡釜之器潢汙行潦之水可薦於鬼神可羞於王公　蘋蘩　見第二

○唐含元殿前龍尾道詰曲七轉宛如龍尾　韻府

○易坤卦註曰夫兩雄必爭二主必危

○前漢書第一　乘勝逐北至樓煩會大寒士卒墮指者十二三師古曰十八之中二三墮指

○手不龜　莊子　　○龜(カヽマル)

○先蒐(サキカケ)　○迦(ハツレ)

○手返(テヘム)　○惶根(カンコネ)

○瓊鐘(サカネコ)　○攝津守(ツモリ)

○汏合(ユリアハス)　○物江(モノヽヘ)

○稱(ホムル)　○泥土瓊(ウヒチヽニ)

○沙土瓊(スヒチヽ)　○鵇鵠(トツキヲエトル)

第二十六卷

○羽束使(ハツカシ)搆

○魯陽公與韓戰酣日暮援戈麾之日退三舍淮南

○驀直(マツシクラ)　○斥候(モノミ)

○直下(ミヲロス)　○河勾(カウワ)

○犇々(ヒシヒシト)　○雜賀(カイカ)

○逞（ヲヒタヽシ）　○天河（テムノカハ）
○賀名主（カナフ）
○禰衡字正平氣尙剛傲矯時慢物漢建安初遊詐陰懷一
剌旣而所適至於剌字漫滅孔融深愛其才上䟽薦之云
鷙鳥累百不如一鶚曹操召爲鼓吏衡爲漁陽摻撾蹀躍
而前容態有異聲節悲壯操送於劉表々送於黃祖々長
子射言赤大會賓客有鸚鵡者射曰形先生賦之以娛嘉
賓衡攬筆而作文無加點祖性急竟殺之氏族大全黃祖
殺之時年二十六　文選注
○孔文擧　薦禰衡表　見文選第三十七
○䘐（アヲタ）
○舜陶于河濱器不若窳　史記
○八元元善也　伯奮　仲堪　叔獻季仲　伯虎仲熊豹
季貍　左傳九　史云高辛氏有才子八人世謂之八元
○八愷々和也蒼舒隤敳檮戭大臨尨降庭堅仲容叔達
庭堅卽皐陶字　史云高陽氏有才子八人世得其利謂
之八愷注賈逵曰愷和也
○十亂　周公旦召公奭太公望畢公榮公太顚　閎夭散
宜生南宮适其一人謂文母劉侍讀以爲無子臣母之義
蓋邑姜也九人治外邑姜治內或曰亂本作亂古治字也

論語朱子注
○論語卷之四舜有臣五人而天下治　五人禹稷契皐陶
伯益　武王曰予有亂臣十人孔子曰才難不其然乎唐
虞之際於斯爲盛有婦人焉九人而已
○後漢書列傳八十卷顯宗明帝二十八將
鄧禹　馬成　吳漢　王梁　一作良　賈復　陳俊
耿弇　杜茂　寇恂　傅俊　岑彭　堅鐔　馮異　王
霸　朱祐　任光　祭遵　李忠　景丹　萬脩　蓋延
邳彤　銚期　一作姚　劉植　耿純　臧宮　馬武
劉隆
右二十八將顯宗永平中圖形雲臺按東漢精華云高祖
功臣皆㪽弛之士光武功臣皆信義儒學之士又論二十
八將次第鄧寇賈復才德兼優最高次馮異岑頭吳漢耿
弇勳高次銚期王霸祭遵朱祐之屬皆賢餘亦忠義勇敢
智略之士全無姦雄厠其間惟馬武不及亦無過皆起河
北　見古今紀要
○唐太宗命圖畫功臣於凌烟圖　見三場文選第三十八
學士　杜如晦　房玄齡　于志寧　蘇世良　薛收
褚亮　姚思廉　陸德明　孔穎達　李元通　李守素
虞世南　蔡允恭　顏相時　許敬宗　薛元敬　蓋文

達　蘇勉　天下向慕謂之登瀛洲　褚遂良傳　ノ

○卞和　楚人得玉璞凡兩獻之楚王而受　乃抱玉而哭復以獻王使人理之乃得玉名曰和氏之璧　氏族大全

○盜跖　見莊子　文成秦始皇時之道士也求蓬萊藥莊子曰云云　丘請爲先生往說之柳下季曰云云　且跖之爲人也心如湧泉意如飄風强足以距敵辯足以飾非順其心則喜逆其心則怒易辱人以言先生必無往孔子不聽顏回爲馭子貢爲右往見盜跖々々乃方休卒徒太山之陽膾人肝而餔之孔子下車而前見謁者曰魯人孔丘聞將軍高義敬再拜謁者々々入道盜跖聞之大怒曰如明星髮上指冠曰此夫魯國之巧僞人孔丘非邪爲我告之爾作言造語妄　稱文武云云　丘所謂無病而自灸也疾走料虎頭編鬚汔不免虎口哉

○負荊　秦王會趙王於澠池藺相如請秦王擊缶趙王歸以相如爲上卿位在廉頗右頗曰必辱之相如出而望見輙引車避匿其舍人皆以爲恥相如曰吾畏廉將軍哉念秦不敢加兵於趙者以吾兩人在也今兩虎共鬪其勢不倶生云云　頗聞之肉袒負荊至門謝罪爲刎頸交詳于史記列傳第二十一

○漢三傑　蕭何　張良　韓信　夫運籌帷幄之中決勝千里之外吾不如子房塡國家撫百姓給餉饋不絕糧道吾不如蕭何連百萬之衆戰必勝攻必取吾不如韓信三者皆人傑吾能用之此吾所以取天下者也項羽有一范增而不能用此所以爲我禽也群臣悅服　漢書一

尙書序曰伏犧神農黃帝之書謂之三墳言大道也道也少昊顓頊高辛庚堯虞舜之書謂之五典言常道也　ノ

○前漢書　百六十八卷　班固作　顏師古注　西漢十二帝　起高祖元年乙未盡王莽地皇四年癸未合二百二十九年　十二帝紀十三ー八表八ー　十志十八ー七十列傳七十九ー

○後漢書　百三十ー　范曄作子賢註　唐章懷太　光武起後漢乙酉歲改建武元年傳及十二帝至獻帝建安二十五年庚申凡一百九十五年十二帝后紀一十二卷志三十卷　八十列傳八十八ー

○史記　司馬遷作　凡百三十卷　本紀十二卷　世家三十卷　書八書　表十ー　列傳七十ー

○四書大學一卷　論語十卷　孟子十四卷中庸一ー

○五經　易十卷　禮記三十ー　毛詩二十ー　尙書十四卷　春秋三十ー

○太平御覽一千卷　○太平廣記五百ー

○周禮十二卷　○爾雅三―　○蜀志十五―
○魏志卅卷　○吳志三十―此三部三國志ト云
○晉書百三十卷　○宋書三十六―　○南齊史五―
○陳史三十六卷　○梁史五十六―
○隋書八十五卷―　○周史　○後魏志
○北齊史九十二卷　○南史　○庚書二百―
舊唐書新唐書在
○資治通鑑百卷　○少微通卷五十六―
○九國志　編年通載　南庚書　子田古史
○本朝事實　東都事略　紹運圖　歷代記年
○帝王互見圖　荀子　揚子　莊子二十卷三十三章
○老子經上下八十一章　劉子二卷　管子三十卷
○曾子　鬼谷子　抱朴子　韓非子　鶡冠子　道家書
公孫龍子　墨子　金樓子　文子
○尸子二卷　牟―三卷　太元經楊―雲作
○國語二十卷　家語　離騷經楚屈平　文選六十卷
蒙求　千字文　胡曾子是ヲ三註ト云
○風俗通二十二卷　貞觀政要十卷　翰苑三十卷
○百詠二―　樂天文集七十卷　高祖實錄二十卷　太
宗實錄三十卷　山海經二卷　脩文殿御覽三百六十
卷　類林二十卷　方輿勝覽七十―
○齊春秋五十―　初學三十―　梁典五十六―
○臣軌一―　帝範二―　太公六韜六―
○陳書三十六卷　○竈殿(ヘッツイ)
○神陵之事二十八卷ニ具也
○孟子卷之一　一人衡行於天下武王耻之此　武王之
勇也而武王亦一怒安天下之民　衡與横同衡行謂作
亂也
○若御(ワカコ)　○化(ウカレ)
○丱女(クワムチヨ)　○寸寸(ツタツタ)
○舒膺(ノシフキ)　○之眾(シフ)
○彌子暇(ヒシカ)　○陛座(シムソ)

第二十七卷

○桑門　文選讀(ヨステヒト)　抖擻　釋氏要覽云頭
陀者梵言杜多漢言抖擻謂三毒之塵能忿汗心此人能
振掉除去今稱頭陀稱呼之訛也善注意云杜多者抖擻
貪欲嗔痴三界內外之若不取不舍不恪不着非是不着
我說人名爲杜多也詳文選頭陀寺碑註
○髟(サヽラ)　○不蹈(タマラス)

○論語十　謹權量審法度修癈官四方之政行焉興滅國繼絕世云云
○上達部（カンタチヘ）　○下手人（ケシシニム）
○七座（ナ、マス）　○敦賀（ツルカ）
○文集二十六蝸牛角上爭何事石火光中寄此身隨富隨貧且歡樂不開口笑是痴人
○壁草（イツマテクサ）　五月頃濕壁ニ生ル草ヲ云不久者ソ
○古今序歌　コノ殿ハムヘモトミケリサキクサノ三業四業ニ殿ツクリセリ
○鄙（ヒナ）　○霑交（ミソレマシリ）
○淺生水（アサウツ）　○沃（ハツス）
○矯餝（イツワリカサル）　○仁萬堀（アシホリ）
○番頭崎（ハツカサキ）　○大兄（オホヱ）
○磬控（カケヒキ）　○豐浦（トヨラ）
○風上（カサヲモテ）　○新見（ニヰミ）
○汃（コミ）　○座（ソ、ロ）
○勝田（カタ、）　○咡（サ、ヤク）
○一涯（ヒトキワ）　○强（アナカチ）
○白江（カウヘ）

第二十八卷

○城處（キトコロ）　○那珂（ナカ）
○箶（ウツホ）　○鹿子木（カノキ）
○越智（ヲチ）
日本昔有人魚出江州蒲生郡綺川　見太子傳
○孟子卷之一云仲尼曰始作俑者其無後乎爲其象人而用之也如之何其使斯民飢而死也朱子注俑從葬木偶人也古之葬者束草爲人以爲從衞謂之芻靈略似人形而已中古易之以俑則有面目機發而太似人矣故孔子惡其不仁而言其必無後也孟子言此作俑者但用象人以葬孔子猶惡之况實使民飢而死乎
○探竿（タムカム）　○口說（クトク）
○目加（メクワセ）　○怨讎（ヲムタ）
○屬（トモカラ）
○滎陽　鉅野　櫟陽　城陽　葬羽於　穀城
○初項梁　立韓後公子成爲韓王云云　韓王成云云
○韓廣爲遼東王　○齊王建孫田安爲濟北王
○番君吳芮爲衡山王　○師古云番音蒲河反
○田市爲膠東王　○齊將田都爲齊王趙相張

耳爲常山王　○陽尊懷王爲義帝實不用
其命二月羽自立爲西楚覇王　前漢第一
○鬼鬚(キヒゲ)　○甬道　鄭氏曰甬音踊
○塞王欣司馬欣　○韓信封爲淮陰侯—申軍法
○呂靑　呂臣父
○彭越漢王拜越爲魏相國　列傳四
蕭何　次律令　陳豨師古曰豨音許豈反
○章耶　秦將軍　爲雍王　○匋々(ハウハウ)

第二十九卷

○橇(カンシキ)　○物集女(モスメ)
○貝鏑(カイラキ)
○文選卷十三夫禍之與福何異糾纏　善曰字林曰糾兩
合繩纆三合繩應劭曰禍福相與爲表裏如糾索相附會
也鶡冠子曰禍與福如糾纆也
○右龕(イハヤ)
○文選第十七　若翰鳥纓繳而墜層雲之峻　此言速也
○貝錦(カキラキ)
○佛法金湯編卷之四　玄宗召不空入內云云　毗沙門事
云云　不載鼠之事

○莞爾(ニツコト)　○擯頸子(チクヒ)
○愛曾(アソ)　○劇(サワカシタ)
○名詮自性句詮差別　敎文
○菅野(スゲノヤ)　○目睡(マトロム)
○手叉(テヲアサヘ)　○神尾(カムノヲ)
○妹子(イモコ)　○赤檮(イチイ)
○河勝(カウカツ)　○迫門(セト)
○生田(イクタ)　○饗庭(アイハ)
○鳥之將死其鳴也哀已下曾子言也　見論語
○文選卅九　鄒陽書云里名勝母曾子不入邑號朝歌黒
子回車　尸子曰孔子至於勝母暮矣而不宿過於盜泉
渴矣而不飮惡其名也
○祝部(ハウリ)　○武庫川(ムコカハ)
○鹿目(カメ)　○西(セイ)
○論語六　顏淵死顏路請子之車以爲之椁子曰才不才
亦各言其子也鯉也死有棺而無椁吾不徒行以爲之椁
以吾從大夫之後不可徒行也
○論語卷之七子曰有德者必有言有言者不必有德仁者
必有勇勇者不必有仁
○倡(ヰサヤ)

第三十卷

文選四十五　東方曼倩答客難云抗之則在青雲之上抑之則在深淵之下用之則爲虎不用則爲鼠

○漢書云東方朔字曼倩平原厭次人也武帝時擧賢良方正之士

○千鐘(サカツキ)　○盡終(ツキハテ)

○殷帝武乙庚丁之子帝太丁武乙之子帝乙太丁之子帝辛帝乙之少子帝乙長子曰微子啓以母賤不得嗣而辛以母正后得嗣天下謂之紂帝紂資辯捷疾聞見甚敏材力過人手格猛獸智以拒諫言以飾非而厚賦稅以實鹿臺之錢及盈鉅橋之粟然又狎侮五帝荒怠弗敬自絕于天結怨于民斮朝涉之脛剖賢人之心作威殺戮毒痛四海崇信姦回放黜師保屛棄典刑囚奴正士郊祀不脩宗廟不享作奇技淫巧以悅婦人武王伐之馬仲虎所編互見圖

○宇都部佐(ウツフサ)　○大胡(ヲホコ)

○山上(ヤマカミ)　○天命(テムミヤウ)

○利根川(トネカハ)　○野與(ノイヨ)

○蟄(ヒシク)　○七德見十二卷

○三過門闌老病死一彈指頃古來今　東坡詩西過永樂文長老已卒

○瑞籬(タマカキ)　○桑穀(カチ)

○帝大戊立伊陟爲相亳有詳桑穀共生於朝一暮大拱大戊懼問伊陟々々曰臣聞妖不勝德帝之政其有闕與帝其修德大戊從之而拝桑枯死而去

○若若(ホノホノ)　○遷輿(アシロコシ)

○寥(サヒシ)　○合(カナウ)

○面後(エクヘ)　○生稻(キナノ)

第三十一卷

○嚴光字子陵小字狂奴少有高名與光武同學帝即位光披羊裘釣澤中之備安車玄纁聘之三反乃至除諫議大夫不屈去耕于富春山後人名其釣處爲嚴陵瀨釣臺在桐廬縣南東西二臺各高數百丈有羊裘軒客星館招隱堂　氏族大全

○東漢史云鄭弘字巨君會稽山陰人微時採薪白鶴山得一遺箭頃有人覓弘與之問弘所欲曰常患若耶溪載薪爲難願旦南風暮北風至今猶然俗呼鄭公風第五倫爲會稽守召署督郵擧存廉黒遷爲淮陰守春出行早鹿方

道夾轂而行主薄賀曰三公車轓畫鹿明府必爲宰相漢之和初拜太尉時第五倫爲司空班次在下每朝見弘曲躬自卑帝問知其故置雲母屏風分隔其其間由此爲故事　　○南木（ナキ）

○春過夏闌表司徒之家雪應路達且南暮北鄭太尉之溪風被人知　朗詠

○川曲（カハクマ）　○酒匂（サカフ）

○酒間（サカマ）　○淺羽（アサハ）

○豐島（トヨシマ）　○四幅袴（ヨノハカマ）

○左傳七退三舍　注一舍三十里

○神奈河（カンナカハ）

○巨福呂（コフクロ）又呂ハ路トモ　是ハ建長寺山號也巨福山ノ近所也巨福路ト云

○方見（ウタテ）　○私市（キサイチ）

○匿地（クケチ）　○嬪（コメツカイ）

○桑轂木（カチノキ）

○畝火橿原（ウネヒカシワハラ）

○神日本磐余彥尊（カムヒモトイハワレヒコスヘコレノ）

第三十二巻

○茨宮（イハラノミヤ）

○神日本磐余彥（カムヤマトイワヽレヒコ）

○畝傍（ウネホ）傍作火　○諒闇之事具前

○融（トウロ）　○周公一沐三握髮　韓

○吐哺　周公一食三吐哺　韓文　趙宋李淸臣謁韓魏公姪吏報曰大視方寢淸臣題詩云公子乘閑臥絳厨白衣老吏慢寒儒不知夢見周公否曾說當年吐哺無　韓魏公曰吾知此人久矣竟有東床選

○靑瑣高講　○蒲屋（カマヤ）

○妖（ハケル）

○史記魯本紀周公戒伯禽曰我一沐三握髮一飯三吐哺起以待士子謹無以國驕人

○颰（ツシカセ）　○鍔（ツハ）

○蒲生（カモフ）

○太平御覽六百九十八卷履部　異苑曰介之推逃祿隱跡抱樹焚死文公拊木哀嗟伐而製履每懷割股之功俯視其履曰悲夫足下々々之稱將起於此

○キクナラク〳〵ノ底ニ入人ハ刹利モ首陀モカワラ

サリケリ
○鵤(イカルカ)　○古遊(クチスサミ)
○那邊這邊(カナタコナタ)
○金精(サヒ)　○渺々(ハルハル)
○形(ムクロ)　○神南(カウナイ)
○和久(ワク)　○陶器(スユ)
○磐折(ツヽラヲリ)　○雪頽(ナタレ)
○新谷(アラタニ)　○河匂(カウワ)
○瓶尻(ミカシリ)　○内海(ウツミ)
○嘘(サモ)　○七寸(ミツヽキ)
大宗吃疵　貞觀政要仁惻篇云大宗征遼東攻白巖城右衞大將軍李思摩爲流矢所中帝親爲吮血將士莫不感勵

第三十三卷

○三臺星　虚精星六淳星曲順星
○九棘　具于前九卷　○合眼(メクワセ)
孝經云身體髮膚受父母不敢毀傷孝之始也立身行道揚名於後世顯父母孝之終也夫孝始於事親中於事君終於立身

○論語之七子貢曰管仲非仁者與云云　吾其被髮左衽矣豈若匹夫匹婦之爲諒自經於溝瀆而莫之知也
○二百國以下百國以上粟散國ト云百國不足粟散邊地ト云　塵荊抄
○三大臣之異名　丞相蓮府槐門大相國　下學集
○三槐　朝士面三槐三公位焉禮三祐手植三槐於庭曰吾子孫必有爲三公者已而果然　言行录東坡有三槐堂銘
○杜詩云厚祿故人書斷絶　譏交態薄也　恒飢稚子色凄涼欲塡溝壑唯疎放　言失其所也
○金襴　金紗　印金　段金　段子　繻子　北絹素紗・生絹　平絹　藍摺　長絹　細美　顯紋紗　准布黄草布　木蘭地　絨(シヽラ)　經緯　裝束　直衣狩衣　袍衣　袙襴襠　脇闕　奴袴　サシヌキノハカマトモ差貫大帷紐紐子トモ半臂懸帶石帶袷宿直物直綴明衣襁褓　襖(アヲ)
○行纏(ムカハキ)又行縢(ムカハキ)　脚絆泗州檜扇
○山門四箇大法　安鎭　熾盛光七佛藥師　山門獨修之　普賢延命　東寺脩兼之上
○藥師十二神將見一切經惟字函

宮毘羅大將　跋折羅大將又跋作伐迷法羅大將又法作企安捺羅大將　捺作底　安涅羅大將　安作頞

○拔折羅(ハサラ)　○鳴霆(ハタメク)

○摩涅羅—　因陀羅—　陀作達—　婆異—　異作夷摩呼—　呼作虎—　眞達—招度—　作朱杜　鼻羯—　鼻作毘　此十二夜叉大將一々各有七千夜叉以爲眷屬　佛說藥師如來本願至

○東寺大法　孔雀經仁王經請雨經後七日以上山門又有例也

○悶絕僻地(モタヘコカルヽ)

○三井寺大法　尊星王　法華法金剛童子准大法以上山門又有例也

○幡田(ハタ)　○派(ミナマタ)

○土持(ツチモチ)　○水繩山(ミナフヤマ)

○垂居(ノリウツル)

○六韜有八徵云云　五曰使之以財以觀其廉六曰試之以色以觀其貞云云

○氣詰(キツマリ)

○事文類聚云君子愼其所好又視其所好可以知其人焉

○南瀨口(ミナセクチ)　○彌立(ヨタツ)

三途　地獄　餓鬼畜生　○斥候(モノミ)

○賓頭盧說法經云昔人行曠野爲象所逐入三井中藏有四毒蛇欲螫其身當知此人若惱不可勝數云云　有人迯死入井遇四蛇傷足欲上樹則逢二鼠跤藤　無常之法二鼠侵藤醉象四蛇等喩若切精至一切經晝字亟二鼠喩日月

○近隣(アタリ)

○常盤堅盤(トキハカタハ)又常住不斷トモ書

第三十四卷

○薨　呼弘切說文公侯殀也白虎通曰薨言奄也奄然亡也

○崩　悲朋切說文山壞也从山朋聲禮記曲禮注疏自上墜下曰崩王者死如從天墜左傳注疏天王崩若山崩然穀梁傳曰高曰崩厚曰崩尊曰崩天子崩以尊也以在民上如崩

○論語卷之六顏淵問仁子曰克已復禮爲仁一日克已復禮天下歸仁焉爲仁由已而由人乎哉

○平原君使人於春申君春申君舍之於上舍趙使欲夸楚爲瑇瑁簪刀劒室以珠玉飾之請命春申君客春申君客

三千餘人其上客皆躡珠履以見趙使々々大慙云云 史記七十八

○平原君趙勝者趙之諸公子也　史七十六

○春申君者楚人也名歇姓黃氏游學博聞事楚項襄王云云 史記七十八

○孟子二　孟子曰天時不如地利地利不如人和注天時謂時日支干孤虛王相之屬也地利險阻城池固也人和得民心之和也

三里之城七里之郭環而攻之而不勝夫環而攻之必有得天時者矣然而不勝者是天時不如地利也城非不高也池非不深也兵革非不堅利也米粟非不多也委而去之是地利不如人和也故曰域民不以封疆之界固國不以山谿之險威天下不以兵革利得道者多助失道者寡助寡助之至親戚畔之多助之至天下順之以天下之所順攻親戚之所畔故君子有不戰々必勝矣

○緣(ユカリ)　○禿(カフロ)

○靑上達(ナマカムタチ)　○帄(ハタカル)

○諸苦所因貪欲爲本見法華二

○小宇津(コウス)　○小里(ヲサト)

○猿子(マシコ)　○當木(マサキ)

○丹下(タケ)　○水速(ミマヤ)

○羊腸　趙險塞名山形屈辟如羊腸戰國策注潞州長安縣太原嵐州上黨壺關皆有羊腸坂

○田邊(タナヘ)　○承平二年壬辰平將門謀叛

○疎(ウトク)

○天慶三年庚子將門伏誅秀鄕得首

○伯顏之事末三十八卷具也

○酷(ハナハタ)

○曹娥　精衞事前十卷ニ見ヘタリ

○尾閭莊子秋水篇云天下之水莫大於海萬川歸之不知何時止而不盈尾閭洩之不知何時已而不虛春秋不變水旱不知此其過江河之流不可爲量數疏尾閭者泄海水之所也在碧海之東其處有石濶四萬里厚四萬里居百川之下尾而爲閭族故曰尾閭海水沃着即焦亦名沃焦也水注之無不燋

○左傳十六叔向告晉侯曰城上有烏齊師其遁又齊師夜遁師曠告晉侯曰烏烏之聲樂齊師其遁　注烏烏得空營故樂也

○鹿窪(カノクホ)　○茂呂(モロ)

○井堰(キセキ)　○譽田(コムタ)

○稻佐(イナサ)
○甘酸苦辛(カムサムクシム)
○圜(マハリ)

第三十五卷

○諾(ウナック)　○揚震四知　見蒙求　天地ー爾ー吾ー　○纏頭(ヒキカック)
○鷸蚌相持　兩爭不解ー戰國策　趙伐燕蘇伐說趙惠王曰昨者臣過易水蚌方出暴而鷸啄其肉蚌合而箝其啄鷸曰今日不放明日不放必有死蚌々曰今日不出明日不出必有死鷸兩不相捨漁者幷擒之　故事淵海
○矢矧(ヤハキ)　○揉尾(ソトヲ)
○春秋第五僖五年傳晉侯復假道於虞以伐虢宮之奇諫曰虢虞之表也虢亡虞必從之晉不可啓寇不可翫一々謂甚其可再乎　諺所謂輔車相依脣亡齒寒者其虞虢之謂也云云　遂襲虞滅之云云　注宮之奇虞忠臣也
○魯酒　言薄酒曰魯酒許垣語淮南子云楚會諸侯魯趙俱獻酒々吏怒趙乃以魯薄酒易趙厚酒奏之楚王以趙酒薄故圍邯鄲　莊子魯酒薄而邯鄲圍
○故事淵海　○晨朝(アリアケ)

○縟(ミヤヒヤカ)
○貞觀政要八云貞觀二年京師旱蝗蟲大起太宗入苑視禾見蝗蟲掇數枚而咒曰人以穀爲命而汝食之是害于百姓百姓有過在予一人爾其有靈但當蝕我心無害百姓將吞之左右遽諫曰恐成疾不可太宗曰所冀移災朕躬何疾之避遂吞自是蝗不復爲災
○飯匙(イ丶カヒ)　○朝(アサケ)
○熟々(ツクツク)　○拔折羅(ハサラ)
○番豆崎(ハツカサキ)　○二部(ニイヘ)

第三十六卷

○前漢書之一高帝紀云所謂養虎自遺患也云云
○五十鈴川(イス丶カハ)　○木縣(イウ)
○五部大乘經目錄
華嚴經　舊譯六十卷　新譯八十卷　梵網經二卷華嚴結經也　大集經三十卷　日藏經十卷　月藏經十卷　摩訶般若波羅蜜經三十卷　仁王經二卷
○地震吉凶
昴張氐婁室胃　此六宿日地震者是火神動也不雨江河枯竭其年之農業不吉

柳箕壁奎尾危　此六宿日龍王動也如上
畢心角房女虛井觜斗此九宿日帝釋動也天下安穩豐饒風雨隨時五穀成就
參鬼星軫亢翼此六宿日金翅鳥動也同前
○經律異相卷之三　地大動有八種緣佛在舍衞城告諸比丘有八因緣而大動此地深六十萬由延爲水所持水依虛空或復是時虛空風動而水亦動水動地便大動是初動也若比丘得神足所欲自在觀地如掌能使地大動是三動也若復諸天有大神足有大威力能使地動是三動也若復菩薩在兜術天欲降神下生是時地動是四動也若菩薩自知在母胎地爲大動是五動也若菩薩知滿十月八出當母胎地爲大動是六動也若菩薩出家於道場坐降伏魔怨終成等正覺地爲大動是七動也若如來於無餘涅槃而涅槃地爲大動是八動也出增一阿含第二十三卷
○鐘木(シモク)　　○甘身(アサマシ)
又地動時刻事
○香椎(カスイシ)シイトハ云ハヌ
丑寅卯ノ時ハ　金翅鳥　五穀不熟凶
戌亥子ノ時ハ　帝釋動　天下安穩五穀豐饒也
未申酉ノ時ハ　龍神動　旱魃年不宜
此內金翅鳥動ニ付テ未曾有經之說ノ如ンハ劫初ニ龍王ト金翅鳥ト爭シケル事アリ龍王ハ八萬由旬ノ須彌ヲ動シテ喜見城振動セント云金翅鳥ハ八萬由旬ノ大海ヲ扇優底金ヲ顯ント云龍鳥共ニ爭堅負方ヨリ子ヲ辨ヘシ契ケリ龍王大身ヲ現シテ須彌山十五匝カラミテ動ス諸天ノ力ニ依テ動ク事ナシ金翅鳥三萬里ノ翅ヲ延テ一羽ニ大海ヲ扇優テ海底ノ金ヲ顯シケリ龍王爭ニ負テ毎日五百ノ小龍ヲ辨フ仍龍宮愁ヘ此事也
○天龍八部欲色二界大
天　　阿修羅此云非天無天行故
龍　與雲致雨象　迦樓羅此云妙翅鳥銜中勝故夜叉
此云勇健　飛空噉生　緊那羅　此云歌神乾闥婆
此云尋香行作樂神　摩睺羅迦　此云大腹即蟒青蛙
類藏藥法數
○指卷(クルマキ)
○迦樓羅　此云金翅翮作金色兩翅相去三百三十六萬里居膽部大樹上　莊子呼爲大鵬見道宣所述法華科註　　○篠向(サヽムキ)

第三十七巻

○告集滅道　洛陽東山清水寺ノ淸閑寺麓也三井寺開山敎待和尙欲往城南山崎別業及經此地其木履之響鳴作苦集滅道之音奇異事也由是厥後關東左遷人亦及經此道觀四諦之法呼此道云苦集滅道　下學集

○纊耳(クワウシ)

○太平御覽四百五十九鑒戒部云云　丘聞之君者舟也民者水也水能載舟亦能覆舟君以此思則危至焉

○五柳先生傳陶淵明自作　見古文眞寶第六

○唐代鄭薰所居爲隱岩蒔七松號七松處士氏全

○絆(キツナ)　一角仙人之事出智度論第十七

○喰霞晨霞明可喰杜春食朝霞者日始出赤氣也相如府注　○印(ヲキテ)

○十二之觀　觀經有十六觀寶樹觀水想觀等又優婆夷淨行法門經有三十二觀法觀地水火風想觀滅想觀身想云云

○漢民年七十者授玉杖以鳩鳥爲飾欲老人如鳩不噎也後禮儀志

○歌律(ウタツ)

○ミチノクノ十符ノスカコモ七フニハ君ヲネサセテミフニ我

○ネム　○一夜フス小鹿ノ角ノツカノマモネラレムモノカ　○カヽル思ヒニ　此二首十二觀ノ次ニアリ

○大鵬　言鵬者自莊始詩苑叢珠

○追從(ツヰシヤウ)　○化(オモカケ)

○柔(ワリナサ)　○登(ミノラス)

○鹿子木(カノコキ)

第三十八巻

○大兄(ヲホヱ)　○大山(タイサム)

○偶人(ヒトカタ)

○朝三　狙公曰與若芧　栗也　朝三　暮四衆狙皆怒曰朝四暮三群狙皆喜芧木名栗莊子狙公賦芧　注芧栗

○株瀨(クイセ)　○伊丹(イタミ)

○彌長(ヤタケ)　○富松(トマツ)

○三韓　韓有三種馬―辰―辨―後東夷傳方丈三韓外崑崙萬里西杜　一里作國

○大器晩成　先子經
○漢書司馬相如傳曰家徒四壁立
○論語八子曰人無遠慮必有近憂　新注　蘇氏曰人之所履者容足外皆爲無用之地而不可廢也故慮不在千里之外則患在几帝之下矣

第三十九卷

○四凶史記一云昔帝鴻氏有不才子掩義隱賊好行凶慝天下謂之渾沌少皡氏有不才子毀信惡忠崇飾惡言天下謂之窮奇顓頊氏有不才子不可教訓不知話言天下謂之檮杌此三族世憂之至于堯々未能去縉雲氏有不才子貪於飲食冒于貨賄天下謂之饕餮天下惡之比之三凶　杜預曰非帝子孫故別之以比三凶也　舜賓於四門乃流四凶族遷于四裔　賈逵曰四裔之地去王城四千里
○劉向說苑卷之十五孔子爲魯司寇七日而誅少正卯於東觀之下
○鴻毛如｜遇順風　文選第四十七死有重於泰山或輕於鴻毛韓
○孔子家語云學者如牛毛成者如麟角也
○金剛經纂要云致使口諷牛毛心通麟角
○若九牛亡一毛司馬遷傳晉華譚傳云或問人之相去如九牛毛寧有是乎華譚曰許巢讓天子之貴小人爭半錢之利此之相去何啻九牛毛
○五十步止者百步走　孟子ニ見ヘタリ
○文選二十五云百里奚愚於虞智於秦遇與不遇也
○百里奚管夷吾之事前ニ具ナリ
○雲出川(クモツカハ)　○縞木子(サヽラノコ)
○御注連繩(ミシメナハ)
○杜工部草堂詩卷之八　戲題王宰畫山水圖歌云十日畫一水五日畫一石云云　巴陵洞庭日本東赤岸水與銀河通云云
○事文類聚後集卷之三十花草部牡丹詩花開花落二十日一城之人皆若狂云云
○論語卷之八子曰衆惡之必察焉衆好之必察焉注王肅曰或衆阿黨比周或其人特立不羣故好惡不可不察也
○蕭牆前ニ具也
○屈原既放游於江潭行吟澤畔顏色憔悴形容枯槁漁父見而問之而曰子非三閭大夫與何故至於斯屈原曰擧世皆濁我獨清衆人皆醉我獨醒是以見放漁父曰聖人

不凝滯於物而能與世推移世人皆濁何不淈其泥揚其波衆人皆醉何不餔其糟而歠其醨何故深思高擧自令放爲屈原曰吾聞之新沐者必彈冠新浴者必振衣安能以身之察々受物之汶々者乎寧赴湘流葬於江魚之腹中安能以皓々之白而蒙世俗之塵埃乎漁父莞爾而笑鼓枻而去乃歌曰滄浪之水清兮可以濯吾纓滄浪之水濁兮可以濯吾足遂去不復與言　見文選第三十三卷又古文眞寶載之

○緑林賊見韻府賊字　緑林ノ引歌

世ノ中ノ人ノ心ハ横田山緑ノ林色ソカクルヽ

○白浪賊見太平御覽又後漢書第八孝靈帝紀中平元年春二月鉅鹿人張角自稱黃天其部師有三十六萬皆着黃巾同日反叛續漢書三十六萬餘人左中郎將皇甫嵩破之云云　中平五年九月南單于叛與白波賊寇河東云云

○江州甲賀横田山之賊之故事

近江ナル人ノ心ハ横田山緑ノ林カケニカクレテ

○三餘　董遇曰學者當以三餘冬者歲之餘地者日之餘陰雨者月之餘　魏畧

○乾闥婆城大論云日初出時見城門樓櫓宮殿行人出入日轉高轉滅但可眼見而無有實名乾闥婆城云云　輔行云乾城俗云蜃氣蜃大蛤也朝起海洲遠視似有　新譯名義集

○博多(ハカタ)　○桔槔(ハネツルヘ)

○荒木田(アラキタ)　○度會(ワタラヘ)

○門司(モシ)

○文選卷之五一人守隘萬夫莫向

○礒良夫明神ハ光ヲ和塵ニ雜テ專ラ人ニ同シ給者也淺是ヲ云ハ如人間之妾貴賤好醜萬差ナルベシ其證ヲ云ハ昔神功皇后新羅ヲ攻給シ御船ノ楫取ニハ誰ヲカヘキト住吉高良諏防三島等ノ諸神評定アルヽ安曇礒良コソ海底ニ久ク住テ海ノ案内者ナレトテ是ヲ召ルヽニ其顏ノミニクキ事ヲ耻テ淨衣ノ袖ヲ面ニ覆テ參ケル常陸ノ鹿島大明神是也春日四所ノ其一也筑紫ニテ鹿島明神ト云大和ニテ春日大明神ト申也壒嚢鈔五

○催馬樂(サイハラ)　○石花貝(カキノカイ)

○吳服部(クレハトリ)　○綾織王仁(アヤハトリ)

○虞祔　葬而反祭曰虞　檀弓䟽云還殯宮安神之祭祔說文後死者合食於先祖从示付聲又合葬曰祔周禮太

祝付練祥國事　注付當爲祔祭先王以祔後死者
○高祖召田横々自剄從者爲歌以寄哀情今挽歌自横始
通典
○八苦見第三　○緊那羅歌神也天龍八部之中見前
○老僻(ヲイホレ)　○目遁(マシロカス)
○垂棘(スイキヨク)　○列(ツヽイテ)
○麗駒(リク)　○苫林(マヤハヤシ)
○神侘(ツカセ)　○嗷儀(カフキ)
○快(アヤシマレ)又異　○躋(ノホレハ)
○嗣房(ツキフサ)　○搔擾(カキナフル)
○假令(カリソメ)　○辟(クチワキ)

第四十巻

○鹹(カイラキ)又梅花魚トモ
○打鰄(ウチサメ)　○黄茨(カリヤス)
○鷄冠木(カイテ)　○八代(ヤツシロ)
○横地(ヨコウチ)　○磯城島(シキシマ)
○柳營　謂將軍家起於漢周亞夫之故事云云
○招提　菩薩皆古佛號故寺稱招提　釋書
○唄(スワヤ)　○藥殿(クストノ)
○執事職之事
高武藏守師直　自建武三年至觀應二年十八年仁木
左京大夫頼章自觀應二至于延文三七年細川相摸守
清氏自延文三至于康永元四年
義將　管領職自康永元至明德二十三年
細川武藏入道常久自明德二至同三年
右京大夫頼元　自明德三至同四年
義將　自明德四至應永五年六年
畠山左衛門佐入道德元自應永五至同十二年
左兵衛督入道　道孝自應永十二至十六年　五年
治部大輔義淳　自應永十六至同十七年
畠山尾張守入道　道端　自應永十七至同十九年
細川右京大夫道觀　自應永十九―
○花貝(カイヲキ)又(カキノカイ)
○礒良(イソラ)　○貢(ミツキモノ)
○細螺石(シタヽミ)又(ホソカイサヽイ)
○白和幣(シラニキテ)　○屯(カタウシ)
○羨念(ネカウ)　○悲(イタワシキ)
○結目(ネメ)　○至雍(シヨウ)
○黠(クロメル)

和歌集

○萬葉集二十卷歌數四千三百九十六首也四十五代聖武天皇御宇山邊赤人左大臣橘諸兄卿撰始其後中絶五十代帝桓武天皇五十一代平城天皇二代之御宇中納言家持等撰了故三代集ト云リ

○續萬葉集五十九代宇多天皇御宇寛平四年壬子菅家撰給

○古今集二十卷歌一千九十首六十代醍醐天皇御宇延喜五年乙丑四月十五日甲斐守紀貫之尾張守紀友則凡河内躬恒左衛門尉壬生忠岑等撰

○後撰集二十卷歌千三百九十六首六十二代村上天皇成明御宇天暦十年丙辰大中臣能宣淸原順紀時文坂上望城撰拾遺集二十卷歌千三百五十首六十代花山院師貞御宇寛和二年丙戌一條攝政殿下兼家公撰

○後拾遺集二十卷七十二代白河院承暦年中七十三代堀河院寛治年中治部卿通俊撰大宰大貳大納言經平子也

○金葉集十卷歌六百五十四首七十五代崇德院顯仁御宇天治二年乙巳木工頭俊頼卿撰帥大納言經信子也

○詞花集十卷七十六代近衛院體仁治仁平三年壬申正三位兼左京大夫顯輔撰六條修理大夫顯季子也淸輔者顯輔子也

○千載集二十卷八十二代後鳥羽院尊仁文治三年丁未中納言俊成卿撰

○新古今集二十卷八十三代土御門院爲仁御宇元久二年乙丑大納言通具大藏卿有家權中納言定家從二位家隆參議雅經等撰

○新勅撰集二十卷八十六代四條院秀仁御宇天福元年癸巳定家卿撰

○續後葉集二十卷八十八代後嵯峨院邦仁御宇寛元二年甲辰爲家卿撰

○續古今集二十卷八十九代龜山帝恒仁之御宇文永九年壬申爲家卿行家卿基家卿光俊卿等撰

○續拾遺集二十卷龜山帝建治二年七月弘安元年十二月撰了爲氏卿撰

○新後撰集二十卷後宇多帝正安三年十一月蒙勅嘉元元年十二月十九日撰了爲世卿撰二條東大納言也此娘爲子

○玉葉集貳十卷伏見院正和元年二月二十九日爲兼撰爲氏之舍兄爲則之子也

○續千載集〻二十卷後二條院文保二年十月晦日爲世卿撰

○續後拾遺集二十卷後醍醐帝元亨元年爲定撰爲氏曾孫也

○風雅集康永元年本院萩原殿御自作

○新詞花集二十卷依二條院勅淸輔雖撰帝崩御之間不準勅撰

○新千載集爲定撰

○新拾遺集爲明撰爲氏曾孫也

易云所謂天道斷盈作此書者取其義以爲四十卷之大綱也今正其字誤者泰山一毫雖然如此成之日用之間一動一靜亦不顧之何足見世盛襄乎尊卑方可勤旃

天文十有二龍集癸卯冬十一月上旬

江州住侶乾三作之

慶長十有二丁未曆仲夏如意珠日

於醫德堂以乾三正本刊行

太平記年表

全

太平記年表序

古昔詰王御極天下熙熙焉悉沐艶陽乎大造而若其性故曰三皇之世如春謂民物各遂其生也中世虞政日遷上薄天和下好闘諍矣㮣　後醍醐之朝元亨之間君暗臣惑趙高指鹿之日梁冀跋扈之時燧燗掠天鼙鼓震地凶慮五十年也是太平記之所由作也蓋其爲書也辭藻豔麗雄偉頗飾然戰國之時出於各各之手故歳次之差事實之誤或不能無焉若夫大全綱目詳則詳矣而浩瀚茫洋未易窺測讀者病諸吾友河原風林子源貞頼嘗考古籍徧鑑歴代茹其英華參以己意詳審精密纂撰一書題曰太平記年表若此書者上揭年月下註事蹟人物家譜無不目該括於是五十年之理亂興亡一開卷則心目之間而得矣所謂荊山之璞遇和氏而顯乎世豐城之劒遇雷氏而顯乎時此之謂也人人擊節歎賞如酔春風矣既而屬序於余余服用心之勤而其名望不可令蕪沒而零落也遂爲一言辨其首以系他日錄史者之採

元祿己巳臘月西村道益題

太平記年表凡例

一凡太平記爲書也可謂備矣然年月序次錯雜難辨者間不寡也如殖土岐賴兼多治見國長正中元年甲子此書誤爲元德元年己巳之類是也故今咸踐國史而證之讀者以差不可疑也

一凡自天子以至庶人具揭姓名以識其傳也蓋姓氏未詳者措不載也

一凡前著家系者略不贅也又時日不明者考訂時節以挾中間也

一凡改元載支干而其餘省不記者爲簡而易覽也

一凡立北朝稱帝以南朝次之者北朝所以直續皇統也故以北朝之年號爲本而配南朝之年號以屬之也

太平記年表卷之一

後醍醐天皇（人皇九十五代帝諱尊治號師宮　後宇多院第二皇子母談天門院忠子參議忠繼女也正應元年十一月二日降誕正安四年六月六日爲親王嘉元二年十二月廿日元服德治三年九月十九日立太子文保二年二月二十六日踐祚時三十一歲）

二年（時文保三年也）改元

「元應」

元（己未）立藤禧子爲中宮（禧子大織冠鎌足二十四代裔後西園寺太政大臣實兼女也按國史中宮入內往文保二年八月三日也）帝更納廉子而寵焉（廉子鎌足廿代胤正四位下左中將安野公廉女也號三位局後爲准三后於南朝號新待賢門院）

十月撰續千載集

二　五月北條敦時卒於六波羅（敦時人皇五十代桓武帝十六代駿河守政長男也六波羅在京師按從順德院御宇承久三年北條義時始置六波羅職以來世使葛藟護京師）

「元亨」

元（辛酉）四月上皇（後宇多院）剏建大覺寺金堂

六月鎭西探題北條兼時卒（桓武帝四代高望王十二代大炊助有時男四郎）使同英時（北條四郎時政六代武藏守久時三男也）續職○常盤範貞（桓武帝十五代北條義時四代遠江守時範長男駿河守）上洛司六波羅職○帝勅停新關

夏大旱　帝恤之詔使廳開倉廩而賑民且置記錄所躬聽訟獄

二　正月帝朝覲于上皇（後宇多院）○北條氏世居于鎌倉以陪臣執國命蔑朝廷至高時（桓武帝四代高望王十代遠江守時政七世相摸守貞時男相模守自時政至高時執權凡九代也）驕恣倍甚故　帝與昵臣等（日野資朝同俊基四條隆資尹亞相師賢平成輔等也）謀滅東夷焉足助重成（人皇五十六代淸和帝四代源滿政十代六郎二郎貞親一男錦織判官代）暨南都衆徒等應密詔○又陰勅諸寺僧徒託中宮孕妊之事咒咀東夷矣

○五月奧州安藤攝州渡邊紀伊安田大和越智與長崎高資（圓喜子新左衞門尉高時管領也）有釁因茲各叛武命八月東福寺虎關獻元亨釋書

三　五月日野資朝（鎌足廿一代亞相俊光男從三位黃

門文章博士民部卿）締無禮講而親豪傑（尹亞相師賢四條隆資洞院實世日野俊基聖護院廳玄基伊達游雅足助重成土岐賴兼多治見國長等也）且託文談運籌策（令北小路玄慧講呂黎文集

「正中」

元甲子六月上皇後宇多院崩殂壽五十八

八月大佛維貞（時政六代陸奥守宗宣男修理大夫）歸于鎌倉九月當麓範貞聞土岐賴貞（源賴光十二代賴春四男伯耆十郎賴兼）多治見國長奉　帝密詔謀覆鎌倉而使山本時綱（清和帝十四代時信男孫九郎）小串範行討賴貞國長（是太平記擾亂之起本也）

十一月大地震竹生島摧塌半沒湖水

二　五月十日東使長崎泰光南條宗直執日野資朝同俊基（鎌足廿代大內記種範二男藏人右少辨）下于鎌倉

七月萬里小路宣房（鎌足廿代左京大夫資通一男從一位大納言）持告文赴于鎌倉謝高時（高時俾秋田城介時顯請取之）高時使欲披閱之二階堂貞藤（鎌足廿二代行藤男出羽入道道蘊也）諫之弗聽遂令齋藤利行（鎌足廿一代左衞門尉基行一男太郎左衞門）啓之利行忽眩而死高時大恐天譴免俊基斧謫資朝於佐渡

八月撰續後拾遺集

十月舊將軍惟康薨（後嵯峨院皇子征夷大將軍宗尊男從四位下征夷大將軍母近衛攝政藤兼經女宰子行年二十六）

「嘉暦」

元丙寅三月東宮邦良（後二條院皇子）薨○高時祝髮（號宗鑑）讓執權於其弟泰家（四郎左近大夫）北條長時（相摸守重時男武藏守）長崎高資不肯强使泰家剃髮令金澤貞顯（北條時政五代越後守顯時一男修理大夫）執權泰家怒欲殺貞顯於是貞顯亦薙髮而脫職故以北條守時（武藏守久時男相摸守號赤橋）大佛惟貞爲兩執權

七月立量仁（後伏見上皇王子）爲春宮

二　三月十六日興福寺回祿

十月大佛惟貞卒

三　十月十四日前將軍久明薨（後深草院第二皇子母三條內府藤公親女從二位房子征夷大將軍一品式部卿親王行年五十五）

十二月以尊雲爲天台座主（尊雲後醍醐帝第六皇子母安野公廉女廉子尊雲後號護良世稱大塔宮禀性剛

毅有扶皇綱覆武家之大志專嗜武事矣
「元德」
元己巳
二　三月八日帝行幸於南都（東大寺興福寺）○廿七日
行幸於叡岳且營大講堂
・五月十一日東使二階堂時元（鎌足廿四代行元男下
野判官）長井遠江守上洛召南都智教教圓於六波羅
更令雜賀（隼人佐）縛圓觀（法勝寺）文觀（小野醍醐
寺住侶東寺之長者）忠圓（淨土寺）及二條爲明（鎌足
十八代京極定家四代中納言爲藤長男正四位上左中
將）既而將栲問爲明詠敷島之和歌東使感激之宥爲
明辜
五月廿九日高時命本間（佐渡國守護）戮日野資朝於
佐州阿新（資朝男國光中納言時十三歲）殺本間（三
郎斬資朝者也）報父仇
六月八日東使伴僧徒赴于鎌倉○廿四日預圓觀於佐
介時俊（時政三代淸時一男）文觀於佐介貞俊（時俊
男遠江守）忠圓於足利貞氏（源義家八代伊豫守家時
一男從五位下讃岐守）
七月十三日流文觀於硫黃島忠圓於越後惟圓觀免流
刑預結城親光（藤秀鄉十八代上野介宗廣二男上野
入道）○復逮捕日野俊基再下于鎌倉獄諏訪（左衞門
尉）第姑令工藤高景（次郎左衞門尉）誅葛原岡（俊基
之臣後藤左衞門尉助光尋來幾盡已矣）
「元弘」
元辛未　春俊明極來朝（住洛南禪寺）　帝鐘愛賜禪師號
二月帝行幸于北山遊花下○山門（四王院延命院大
講堂法華堂常行堂）罹兵燹
七月三日地震紀州千里濱潮水涸爲陸（二十餘町許）
○七日大地震士峯崩無慮百餘丈
八月廿二日東使率三千騎上京欲幽　帝及尊雲於是
花山院師賢（鎌足十三代太政大臣師實八代内府師
信男尹大納言）佯稱帝登叡岳（四條隆資二條爲明中
院貞平整衣冠而從之居西塔釋迦堂山徒並大津松本
戶津比叡辻仰本絹川和仁堅田之兵悉來服焉）○帝
遯潛幸于南都（萬里小路藤房其弟季房源具行按察
使公敏六條忠顯大膳大夫重康樂人豐原兼秋隨身秦
久武等供奉焉按七月廿四日乘夜出御內裡同廿五日
入御于南都東南院同廿六日遷宸席於和束之鷲峯山
從是　帝適于笠置）○賊將常盤範貞及兩使帥師攻
台岳台兵逆戰于唐崎不決山徒快實（岡本坊之播磨

堅者)殺海東父子(左近將監其子幸若丸)賊兵敗走(海東兵八騎波多野兵十三騎眞野入道父子平井九郎死于此)〇廿七日持明院(人皇九十二代後伏見院諱胤仁)春宮(光嚴院諱量仁)遷幸席於六波羅(今出川右府兼季三條通顯西園寺公宗日野資名同資明防城經顯等奉從焉)〇花山院師賢謀計發覺山徒忽變師賢遂脫叡岳走于笠置(四條隆資二條爲明從之)〇台徒豪譽(上林房阿闍梨)營通賊擒澄俊(大塔宮執事安居院法印也)出于六波羅〇廿九日妙法院尊澄(後醍醐帝第八皇子後還俗號宗良母准后源尊氏繼母)大塔尊雲潛出奔如于石山從是兩皇子離別(尊雲赴于南都尊澄之于笠置)〇帝臨幸于笠置假寐夢於大樹南枝嚮足安玉座覺而占之卜人曰南木楠字也用之則當再踐南面之位於是即命萬里小路藤房(大納言宣房男中納言)召楠正成(人皇廿一代敏達帝五代井手左府橘諸兄十四代從五位上兵衛正玄二男也多門兵衛大夫判官攝津河內守才兼文武名振四海曾住河州金剛山西)正成入朝　帝勅以大事正成諾而罷乃歸河內高壘深溝據于赤坂城〇賊使佐々木時信(宇多帝皇子源敦實親王十一世近江備中守賴綱六男判官近江守)防山徒(江州兵並丹波國住人久下長澤一族八百餘騎陣大津)

九月一日六羅兩撿斷(糟谷三郎宗秋隅田次郎左衞門尉)督兵發向于宇治將攻笠置高橋(又四郎)先登敗績〇三日賊軍蟻附置城殆危(五畿內兵七千六百餘騎向于搦手東海道十五箇國及伊賀伊勢尾張三河遠江兵二萬五千餘騎經伊賀路向于金剛山越山陰道八箇國兵一萬二千餘騎向于大手山陽道八箇國兵三萬二千餘騎沿木津河而分隊向西之手都七萬五千餘騎也)足助重範(淸和帝四代鎭守府將軍源滿政十世六郞二郞貞親男)勁弓喜射射荒尾兄弟雖頗挫銳賊兵不漂鼓譟攻剽本性房(南都般若寺律僧)轉礮殺敵猶以泰山壓卵賊不能前〇櫻山(四郎備後牧)叛高時據一宮(備後)官軍風靡雲集〇廿日關東大軍發鎌倉赴于笠置(大佛貞直普恩寺信忍等十四將及長崎等從兵四十八人都二十萬七千六百餘騎也)〇晦日夜陶山義高小見山次郎乘風雨入笠置城中縱火於皇居攻擊賊衆應之足助重成父子力戰而死焉官軍狼狽　帝墮草蓬萬里小路藤房其弟季房(參議左大辨)微服景從徐到于有王山(山城國多賀郡)　十月二日深須松

井執　帝及尊良（後醍醐帝第一皇子中務卿母爲世女爲子）尊澄而後常盤範貞幽于平等院東使請附三種神器於新帝　帝不聽焉○五日賊回乘輿於六波羅廷臣數輩被窘辱（萬里小路宣房其子藤房季房花山院師賢峯僧正春雅東南院聖尋按察使公敏源具行侍從公明左衛門督實世平成輔左衛門督爲明左中將行房左少將忠顯源能定四條隆兼妙法院執事澄俊北面諸家此餘囚統六十餘人泛々族不遑數）○八日兩撿斷（糟谷高橋）配俘獲預于諸侯附尊良於佐々木時信尊澄於長井高廣（左近大夫將監）源具行（村上帝皇子具平親王十代右中將師行男從二位黃門）於筑後前司貞知（平貞盛十五代伊勢貞經男）東南院聖尋於常陸前司時朝（時政五代式部太輔時輔男也）藤房忠顯（村上帝十二代權中納言六條有忠二男少將）脫檻屬　帝○九日帝詐模三種神器傳之於　新帝（堀河具親日野資名撿之佐々木淸高及長井水谷但馬等驚固之）○十一日新帝登極○賊大佛貞直等諸將圍攻赤坂城正成令其弟正氏姪正遠將輕兵三百間道出不意立幟千餘人諸將相議麾兵屯于吐田楢原本間澁谷鼓兵徑進衆不得已從之城中息鼓寂示虛賊競登正成假構兩壁臨期一時絕維倒壁壓賊無數大潰退諸將大懼遠徙設距堙圍之數日諸將相議曰前日之敗以無攻具也乃各擁干盾而前將縣鈎芒牽倒城兵以長杓酌熱湯注之灼爛三百餘人賊捐甲兵而奔爾後無敢言攻者唯絕糧道築壘以久困之城中纔餘數日粮正成覺知不可守而豫坑城中燒屍爲已死待風雨夜其忠誠格天風雨遽至正成留勝田直幸和田宗景田原正忠恩地爲祐於城命之曰量我已遠敵營可焚城而去因脫甲過敵營候人誰呵正成答以迷途賊疑射之不中去賊兵望烟入城見坑中屍相信曰正成已死雖敵良將也惜哉乃使湯淺定佛（孫六入道）守之○大塔尊雲特逋在般若寺（南都）一乘院好專（按察法眼）嘗通武家率兵索搜之尊雲以奇詐（匿大般若經之篋中）避難免定于熊野（在紀州也光林房玄尊赤松則祐小寺相摸岡本三河房武藏房村上彥四郞義光片岡八郞矢田彥七平賀三郞等隨逐之）經歷諸邑而到于十津河籍戶部竹原之享居焉半年（尊雲還俗號護良且以竹原女爲妾）熊野別當定遍知難攻係利祿釣邑士邑士忽變有猥心因護良不能住遂去適于吉野塗遭芋瀬之暴三傑（赤松則祐欲仗節死義平賀三郞發籌策村上義光奪二光之旂旗）

排道而過害地復逼玉置之難宮兵已危片岡則命野長瀨率兵來敗玉置之兵護良遁入槇野城（上野房聖賢築所也）○備後櫻山遂勢窮焚一宮（吉備津大明神）與族二十三人倶自盡矣

十月

光嚴院踐祚（人皇九十六代諱量仁後伏見院第一皇子母西園寺公衡女廣義門院）十一月行大嘗會（關白鷹司左府冬教別當日野黄門資名）○梶井尊胤（後伏見院第四子二品親王母治部卿三位局）補天台座主兼領大塔梨本御室法守（尊胤兄二品法親王母堀川局）移仁和寺

「正慶」（案太平記公家一統曰正慶年號以廢帝改元復元弘考國史不然故立正慶用焉）

元（壬申）三月東使（二階堂信濃入道行珍工藤次郎左衞門高景）上洛莅行刑罰遷　先帝於隱岐國（一條行房六條忠顯三位殿局奉從焉千葉介貞胤佐々木道譽等率兵警固道路）和田高德（宇多帝皇子敦實十七代信濃守高成孫備後守範長男號備後三郎有弘演之義膽存范蠡之智謀也）嘗竭力於王室欲奪　帝於杉坂不遂矣東使令佐々木誅源具行於柏原（近江）足助重範於六條河原又使河越圓重（三河入道）斬平成輔（桓武帝十八代權中納言惟輔男）於早河尻放一宮尊良於土佐畑（佐々木時信警固道路）妙法院尊澄於讃岐託間（長井高廣成途中）聖護院聖助（尊澄弟母藤佐仲女少將內侍）於但馬預公明（鎌足廿二代實仲男侍從中納言）於波多野宣通（鎭守府將軍秀鄕十二代出雲守義重二男上野介）實世（鎌足廿六代洞院公賢男別當左衞門督）於佐々木（三郎左衞門尉）師賢於千葉介貞胤（桓武帝十八代宗胤一男）藤房於小田（民部太輔）季房於長沼（駿河守）貶公敏（鎌足廿五代實泰二男按察使大納言）於上總聖尋於下總俊雅於長門○常盤範貞辭六波羅職以北條仲時（義政四代相摸守基時男越後守）同時益（義政四代越後守時敦男左近將監）補焉○小串信秀（油小路籍五郎兵衞尉）獲殿法印良忠而獄于加賀前司第（護良城吉野據之遠近贏糧響應矣○萬里小路宣房再仕二君○山門根本中堂常燈熖滅有奇怪矣高時妄弄田樂且好鬪犬

四月三日楠正成帥師圍赤坂城絕糧環攻湯淺率降焉乃使平野（將監）守之

五月十七日正成出張于天王寺（攝州）兩六波羅（仲

時居北時益居南時人謂兩六波羅也）遣隅田高橋將五千騎擊正成正成伏兵示寡挑戰賊易之徑進官兵佯北賊乘利逐北臻天王寺伏覆遽起三道夾擊兩將大亂而犇溺死不可勝算

七月十九日六波羅大懼之使宇都宮公綱（鎌足二十一代三河守貞綱一男治部太輔）討正成公綱以爲前日以衆已敗績矣我寡難敵雖然臨危授命臣任也不歸私家直前赴之路收兵（七百餘騎）次于杜松和田宗景謂正成曰乘夜擊彼疲敝則必勝耳正成曰公綱以寡繼衆其志在必死矣縱雖戰勝頓兵挫銳天下事止爭此一擧哉昧爽牽兵盡藏其跡公綱至于天王寺欲戰無人俄然喜曰不血刃而郤勁敵主將之威也頃之烽燧發四山賊懼日夜嚴戍氣耗勢屈遂引兵而還洛正成復屯于天王寺

八月三日正成讀天王寺之讖文示衆以逆徒滅亡天下歸順之兆也（蓋田單於即墨託神之術）正成城千劔破

○赤松則村（村上帝皇子具平親王六代從三位季房男次郎入道圓心播州住人）奉護良之旨據于苔繩城（圓心子則祐從護良艱難備嘗當此時承令旨授圓心也）乃傳檄聚兵勤王之師四方蜂起塞杉坂絕兩道（山陽山陰）

十月高時移書召兵諸國軍士應期會京師（阿曾時治大佛貞直等六將統三十萬七千五百餘騎九月二十日發鎌倉十月八日着都其餘四國河野厚東大內安藝熊谷等盪數百艦至于兵庫甲斐信濃源氏七千騎江馬淡河三萬餘騎經坂本着東京其兵充滿于京師矣）

二　正月十八日二階堂道蘊（出羽守貞藤入道）督軍攻吉野城拒戰七日戮傷甚多巖菊丸（吉野執行當手鄉導）自後山襲入賊衆應之城兵擾敗護良躬捉戈卻賊旣被二創入帷幕燕方將自盡村上義光（源賴信九代彌四郎信泰三男彥四郎）被箭十六聞歌聲來曰事已急矣請誑賊爲皇子宜以逋乃著護良之戎衣登櫓上大呼曰護良伐賊不克已殞命乃自刎而死賊愷歌護良與數十騎出城門凶徒更遮前路村上義隆力戰死之護良脫走于高野（義隆義光子也請與父同死不許於是死節矣）

二月二日阿曾時治（時政六代遠江守守時男彈正少弼）董諸軍發向于攝州次于天王寺入見基親（鎮守府將軍時長十六代左衞門尉基胤男四郎恩阿）本間資貞相議先登墮命於城門前本間子資忠亦蹈父死地而

戰死矣賊圍赤坂城相戰十餘日賊絶水路（播州住人吉川八郎策之）城兵渴而無爲束手而降（平野以下二百八十二人）六波羅殺之○大佛貞直陸奥家時（時政六代陸奥守惟貞二男右馬助）匡三軍圍千磐城晝夜苦戰三日不克貞直下令曰不令而進者不許誅從茲相持不戰金澤貞將（時政六代修理大夫貞顯男右馬助）謂貞直曰前日所以下赤坂者絶水便也此山城所以水不乏者必每夜汲溪水貞直然之迺使名越氏實（北條義時六代民部太輔公貞一男越前守）率三千餘騎守澗城中有機泉（曰五所秘水細流一夜得四五斛矣）無藉此澗水名越兵久守怠惰正成夜半掩之賊驚敗亡乃取其旗幕翌日樹諸城上鼓掌而笑名越大怒麾族五千兵激厲而進城兵下木石滋衆皆轉崖谷甯後曠日龍鬪正成縛偶人夜列城下前施盾後隱兵賊兵競集城中矢石屢發死傷太衆賊懲創不能攻諸將怠慢頗侵法名越篤時（義時四代遠江入道）與其姪時家（義時四代尾張守公時長男）爭娼妓戲倶刺死從兵二百餘相擊刺○新田義貞（淸和源氏八幡太郎義家十代朝氏一男小太郎）密奉護良之令旨稱病歸國上野○伊豫土居得能（倶河野族）叛高時聚兵○十二日與北條時直（時

政五代上野介宣長門探題）戰于星岡大敗探題師時直遂逃亡

三月四日高時使敎諭諸將背議度谷以飛橋正成使善彀射之數投炬火焚橋賊捐棄而走橋倒壓死亦衆六波羅命宇津宮公綱往援公綱及紀淸兩黨知其不可攻以苯耟使縶壘已陷一樓城兵悉力拒之傑外盡攻陷之術而傑內守衞有餘公綱無如之何○赤松圓心發若繩略近鄰賊軍襲來戰于舟坂獲渠魁乃慈宥晚歸焉伊東（大和二郎）感恩惠叛屬赤松迺城三石（備前）遂加地秀氏（佐々木盛綱三代二郎實秀男源次郎左衞門備前守護）寨往反赤松進屠高田（兵庫助）壘更築摩耶城（攝州）六波羅使佐々木時信（宇多帝十二代備中守賴綱六男近江守）北條時知（時政六代式部太輔時輔男常陸前司）追討赤松兩將帥師圍摩耶城赤松子範資（圓心長男信濃守）貞範（同二男筑前守）出不意襲擊賊潰奔赤松復與阿波小笠原戰于酒部敗擾圓心麾敗兵反戰擊不虞得首三百餘級乃梟于瀨川○十二日赤松進兵將攻京師六波羅使須田高橋將二萬騎拒于桂河霖雨倍水激浪鼓岸則祐不屑之揚一鞭渡飽間伊東小寺宇野河原林等續進範資貞範亦不忍見之

鼓兵濟來賊軍辟易未戰而敗績赤松兵逐北縱火於大
宮猪熊寰中狼狽士女相蹈藉哀號之聲震動中外因遷
帝及上皇(花園院)春宮后妃於六波羅○隅田高橋合
戰于堀川不利陶山河野以利兵繼屢鬪敗赤松軍貞範
則祐已危突衝避難圓心潰走于山崎○十五日圓心分
中院貞能(村上源氏中將號聖護院宮)聚敗兵屯于山
崎而遮西國運轉賊率五千騎攻山崎坊城晴秀（內府
藤高藤四十四代左兵衞佐尹豐男左衞門佐）出不意
橫衝囟徒敗走○菊池寂阿(肥後國牧)及小貳妙惠(鎌
足八代藤太秀鄉十三代筑後守盛經男貞經入道號大
宰小貳）大友具簡俱奉　先帝之密詔將討探題北條
英時英時聞之招菊池於博多寂阿以爲事覺乃使八幡
宗安(彌四郎)告兩將小貳大友持兩端不應剩斬行人
宗安馘首畀英時菊池大怒帥師攻英時英時戰敗城將
陷小貳妙惠率一萬餘騎來救擊菊池寂阿知事不濟謂
子武重曰我今死義汝宜歸國報父讎武重請共死寂阿
叱曰何拘小節忘大義乎武重吞聲而歸寂阿遂冒陣而
死矣○二十三日先帝潛出隱岐赴于伯耆（六條少將
忠顯獨奉從之）得名和長年(伯州名和住人)其弟長
重(太郞左衞門尉)長生(小次郞)將兵在船上山長年

甥七郞曾有密慮爲僞旗樹山上佐々木淸高（宇多帝
四代兵庫頭成賴九代豐前守宗淸男隱岐判官）率三
千騎尋攻船上長年兄弟沖戰大敗佐々木師淸高逃亡
(佐々木彈正戰死同佐渡前司束手降焉)山陰山陽屬
之者如歸市○山徒率兵攻京師賊逆擊敗之
四月三日赤松等官軍復刧京師（殿法印良忠中院貞
平率三千騎自鳥羽竹田進圓心督三千五百騎自七條
寄矣)六波羅使佐々木長井河野陶山等拒焉(佐々木
時信常陸前司時朝長井縫殿助秀正將三千兵向于糺
河原矣河野陶山帥五千騎要法勝寺大路富樫林島津
小早河統六千騎禦八條寺町厚東加地隅田高橋糟谷
土屋小笠原董七千騎邀進西七條口奇零千餘兵爲遊
兵備疲弊）陶山河野前兵撥木幡强敵且敗東寺官軍
矣島津小早河與赤松戰于八條不決（赤松士頓宮入
道同孫三郞田中盛兼同盛泰拔群有功遂當島津安藝
前司父子之鏃死官兵勞)妻鹿長宗(薩摩氏長裔播州
住人孫三郞）數礫甲士賊兵讐焉菅家族與武田信武
(新羅三郞義光九代伊豆守信宗男兵庫助)掎角官軍
蹉跌有元佐弘（菅道眞十六代佐高一男四郞）其弟
佐光佐吉福光佐長殖月重佐原田佐秀鷹取種佐等勉

戰而死　○先帝使六條忠顯（村上源氏具平十代黄門有忠男頭中將）往援赤松矣太田（但馬守護三郎左衞門尉）秦恒良（後醍醐帝第三子前坊母同護良）來會忠顯于篠村（丹波）○帝御脩法
四月八日忠顯將恒良董三軍復侵京師賊逆戰殺太田及庄眞壁三百騎官軍潰散○九日王師狼藉燒谷堂○十六日高時使名越高家（北條義時六代貞家男尾張守）足利高氏（讃岐守貞氏二男治部太輔）伐官軍南將匡一萬二千騎上洛○二十七日賊將高家率兵攻八幡山崎乃無慮妄進佐用範家（赤松族）伏翳薈射高家獲首賊軍敗犇高氏與高時有隙叛赴于丹波如可中吉歸六波羅告之兩檢斷遽然猶握熱湯高氏旣而到于篠村豪士烏合雲集乃觀兵賞久下時重（秀鄉十二代大內新左衞門宗重長男彌三郎又號上野判官）疾參且褒其蓋幟（畫笠驗一番之文字最有吉蹤矣）五月二日千壽王（高氏二男後號義詮母赤橋相摸守女也）出奔鎌倉謀簡繼至高時大驚遣長崎（勘解由左衞門）諏訪（木工左衞門）捕竹若（高氏長子頃背居豆州山寺伯父宰相法印良遍所）誅浮島原○七日高氏軍于篠村納願書於八幡宮六波羅脊議築高壘構櫓壁深濠瀦河水○八日官軍圍京師高氏兵設樂（五郎左衞門尉）討齋藤玄基（鎭守府將軍利仁十二代四郎左衞門基永八男伊豫房）大高重成（天武帝二十一代左衞門尉賴基男伊豫守）與河野通遠鬪遂得通遠（對馬守通治猶子七郎）首○赤松奮戰破東寺壘妻鹿長宗武部七郎先驅樹勳功官軍進圍攻六波羅（諸將相議關東一方）賊已戰敗迫罩城仲時時益分　新帝及兩上皇而赴于鎌倉旣而到苦集滅道時益中箭死（糟谷七郎以鎧袖裹其頸瘞泥中）官軍遮行路流箭侵乘輿中吉（備前住人彌八）除前路尊胤（梶井宮新帝弟）遁走于伊勢○江州官兵等奉成良（後醍醐帝第四皇子）要地機賊無可爲佐々木時信携首降焉仲時到于番馬（江州）與從兵三十二人皆自殺矣（從順德院御宇承久三年北條義時始置六波羅職衛來至于仲時時益歷數一百十有一年而滅）官軍逐幽　新帝上皇且奪神器附于成良○正成聞之大喜乃令衆大呼曰六波羅有奇事兩將東游諸士知之否拊手大笑諸將驚走正成放輕兵趾之死傷相枕○八日新田義貞與族大館宗氏（八幡太郎義家八代次郎家氏男號次郎）其子幸氏（孫二郎）氏明（彌次郎）氏兼（彥次郎）堀口貞滿（義家六代右馬權

頭貞義一男號三郎)其弟行義(四郎)岩松經家(義家十代下野太郎政經一男兵部權太夫)里見義胤(淸和帝十二代孫四郎長義男五郎)江田光義(淸和帝十一代十郎二郎行光男)桃井尙義(義家六代又二郎滿氏長子次郎)等樹義旗於笠懸野(上野)越後族里見鳥山田中羽川大井田等率兵應期來會焉義貞握手談論謝速來救矣○九日跋扈于武州足利兵紀五(左衞門)聞義貞已淳起而介千壽王來從焉義旗所望從靡王師所臻蔓夷八州之士億萬衆不期來服矣○十日高時使櫻田貞國(治部太輔)金澤貞將追討義貞○十一日兩將師師遂發武州合戰于小手差原不利○十二日復鬪于久米河大敗櫻田之師賊退旅于分陪○十五日高時使其弟慧性救金澤櫻田之疲羸○越前平泉寺衆徒率七千騎討淡河時治(北條時政三代越後守時盛男右京亮居越前大野郡牛原)○小貳妙惠大友具簡(秀鄉十四代因幡守親言男出羽守貞親入道)再叛探題英時語菊池武重武重想前日變不肯兩將遂撤殺英時得三百四十首級(世人曰昨日從賊亡菊池今日爲忠臣亡英時將爲忠臣與爲賊臣與行路難不在山兮不在水唯在人情反覆之間其小貳大友之謂乎)○十六日官軍挑戰于分陪衆寡不相敵義貞潰走屠戮無算三浦義勝(大多和平六左衞門)察無備擊不意賊辟易敗擾官兵逐北及慧性橫溝拒戰免主長崎高重力戰而被二創安保道堪(宣化帝後胤)與從兵百餘人蹈戰而死○北條時直(時政四代修理大夫時房男上野介)藉俊雅(峯僧正)乞降免咎○十七日越中守護名越時有(北條時政六代民部太輔公貞男遠江守)其弟有公(修理亮)其姪貞持(兵庫助)等勢窮自盡矣(魂魄留此地天陰則往往鬼哭聞之人傷心矣)○十八日義貞收三軍三道攻鎌倉(大舘宗氏江田行義將十萬餘騎向于極樂寺切通堀口貞滿大島守之爲上將裨將率十萬騎向于巨福呂坂義貞義助督奇零數萬騎向于假粧坂)高時使諸將抗之(相摸高成城景氏丹波時盛金澤左近將監將三萬騎守假粧坂大佛貞直率五萬騎守極樂寺切通赤橋盛時統六萬騎守州崎其餘兵十萬爲遊軍在鎌倉)官軍苦戰數十交相持不決○十九日大佛部將本間(山城左衞門尉)數破堅陣而殄大舘宗氏官兵不漂爭前進赤橋盛時(北條時政六代武藏守久時男前相摸守)兵殫自裁矣晝夜交及雖官兵碎骨賊支嶮岨不能速經日義貞以爲縱雖得鬪克久則屈兵生禍不如歷海

濱襲之乃麾兵嚮于稻村崎賊豫設射船而相拒義貞無爲覬覦其忠戰也感天潮濤遠乾賊船漂澳義貞欣然拜天帝乃鼓兵疾擊鎌倉危急長崎爲基（三郎左衛門入道思元男勘解由左衛門）直衝剛陣逃亡大佛貞直金澤貞將普恩寺信忍（北條時政六代尾張守時兼男前相摸守）鹽田國時（時政五代左近將監時國男陸奧守入道道祐）鹽飽聖遠其子忠頼等力戰而死焉安東聖秀（左衛門入道）率殘兵抵于小町口將自殺義貞之妻聖秀之姪也使使於聖秀言曰請宜謝罪降軍下贖身以救公之命聖秀嘆曰族已殲苟免則如人口何乃使前自殺長崎高重（圓喜男）屢冲戰殺官兵不可勝算遂被重創高時入于東勝寺與族二百八十餘人咸自盡矣（右北條氏從順德院御宇建曆元年時政執權於鎌倉以來至于此讓嗣八世司職九代曆數一百二十有二年族悉滅）慧性獨遁走于奥州（慧性陰上京仕西園寺公宗而浸顯建武二年號北條時興將覆朝廷矣）五大院宗繁（北條恩顧之臣號右衛門高時遺言以長子邦時之事矣）欲扶邦時之命詐降焉諏訪盛高（經基十一代右兵衛尉盛重男三郎）介龜壽（高時二男後號相摸二郎時行建武二年起奥州奪鎌倉）遯于越後○先帝開六波羅已陷發船上赴洛（頭大夫行房勘解由次官光守整衣冠供奉金持大和守樹錦旗從左名和長年役帶劍副右其餘兵士皆着戎衣帶弓箭鹽谷高貞率千餘騎前驅朝山太郎都五百騎後乘矣）○二十八日五大院宗繁變義告船田義昌（源滿仲十四代裔新田義貞執事）於邦時（高時長男相摸太郎母宗繁妹）之寶所義昌執邦時於相摸川○二十九日誅邦時於鎌倉○先帝到于兵庫新田義貞馳郵奏高時伏誅赤松圓心父子收兵來護六月二日楠正成督師往候于兵庫　帝慰勞曰中興之業悉是卿之勳也正成拜稽首曰陛下不神武之德微臣爭樹早速之功乎從是正成爲前驅○三日護良到于志貴○六日先帝復位（是稱後醍醐帝重祚在二條內裡）賞高氏元勳爲治部卿其弟直義任左馬頭○護良嘗與高氏有釁且知其有黑心欲討之　帝使坊門淸忠（從一位關白道隆十一代左中將俊輔次男右大辨宰相）言曰高氏無咎何及干戈世已太平宜復浮屠也護良曰高氏姦佞才以一戰之功欲立萬人之上臣之孤忠欲因其勢微伐之兩葉不去將用斧柯今禍在蕭牆之中願任大樹以爲藩屏復歸釋門不知何謂　帝於是復使淸忠罷兵補征夷大將軍○二十三日護良董三軍入洛（赤

松園心率千餘騎前驅殿法印良忠以七百騎列二番四條隆資收五百騎列三番中院貞平帥八百騎列四番千種忠顯匡千餘騎後拒其餘諸國兵二十萬七千餘騎三日支從列也）〇前辱流人等皆復于京師〇此時萬機無大小咸決於准后（高氏繼母）群士媚奥而蔽主明

七月前將軍守邦薨（舊將軍久明男母惟康女行年三十三）〇北條竄徒尋縛于南都〇九日誅戮阿曾時治江馬篤時（時政四代民部太輔時章二男遠江守）佐介時俊於阿彌陀嶺佐介貞俊（時俊子）亦殺于阿波二階堂道蘊恃被宥恕住洛下遂以有異志季秋被刑

八月二日中宮禧子逝（西園寺實兼女）〇高氏叙從三位任武藏守賜御諱字改名尊氏

十一月三日春宮邦良薨（後二條院皇子）〇前亡餘黨分散諸國而據諸城官軍攻伐平氏盡殲矣（小貳大友殺規矩掃部助高政絲田左近大夫將監貞義於筑紫矣楠正成殪佐々日憲法於河州飯盛城矣土居得能屠討赤橋駿河太郎重時於豫州立烏帽子城矣

太平記年表卷之一終

太平記年表卷之二

「建武」（慕光武之中興改元建武）

元甲戌 正月　帝課州郡於秕稅（二十分一之租）造大內裏藤房諫曰大亂之後人困民弊兵役不已農桑失業禹卑宮室與秦作阿房亡何舍其興其亡之從　帝不聽

二月大賞功臣封尊氏于武藏常陸下總三州直義于遠江義貞于上野播磨其子義顯（號小太郎）于越後勝屋義助（義貞弟右衞門佐）于駿河楠正成于攝津河內名和長年于因幡伯耆其餘封賞有差功臣赤松圓心不與甚怨望之

三月護良欲擊尊氏下令於諸士大森盛淸（源賴親十二代彥二郞盛治族備中守）示之尊氏尊氏獻之誣以謀反准后和之　帝昏昧徙信之大怒幽護良于宮中戮其近臣殿法印良忠等三十餘人

五月三日附護良於直義〇成良任征夷大將軍直義爲執權且任相摸守居鎌倉遂以護良往繫之于土獄（二階堂）

七月隱岐廣有（鎌足二十代隱岐守廣義次男次郞左衞門弘舜）射怪鳥（其聲譽相倖源賴政之功）

八月帝議群臣將誅小貳妙惠（因菊池武重劾奏也）小貳豫賂准后及諸卿皆曰忠臣正成曰彼之罪惡不煩論辨禽獸亦所不爲也碎首屠軀不足以償而可貰哉若貰之恐爲亂階淸忠以爲無禮議寢不行（遂擧小貳賞之建武亂小貳果從尊氏　帝悔之矣）

二　二月鹽谷高貞（宇多帝十三代左衞門尉貞淸一男隱岐判官嘗雲州牧）獻龍馬（使言曰其相異常聳骨高筋少脂肉鷄頸而長鬃龍背而連毛耳似削竹瞳如夾鏡今日自卯至于酉行程幾四百有五十六里也）帝悅曰良馬也乃詔馬寮而善養之一日宴羣臣於馬場殿　帝因問藤相國曰屈地之產項羽之騅有一日千里之名也於本朝未聞之今此馬新來是何祥哉吉凶焉在相國對數以吉蹤帝太悅衆皆以聖德賀之藤房來晚坐定　帝又問藤房對曰天馬之出于本邦其吉凶難斟雖然退而惟之其不吉也乎臣謹案中華漢帝卻之以與周王愛之以衰一吉一凶的然在焉雖然天未棄君故降此妖災而示戒也幸陛下監之今也兵革之後剝民膏血大興土木善政無聞牝雞司晨豺狼當路故執政無吐哺而接人之禮諍臣無上表以正主之諫於是愁訴忽熄記錄所決斷所如無人然群臣咸以爲虞芮質成必使無訟之謂也悲哉

其之爲惑也天下之士見忠功之不立政道之不正而共默止者也爲上者豈可不思之乎且天運膺圖逆徒雖亡定天下復帝位者尊氏義貞正成圓心長年也其當節向義立忠思君可容輕重計校于其間乎然圓心一人陛下不及何也賞中其功則有忠之士進罰當其罪則有咎之士退嗚呼今政道非齊弗中抽賞之功復有似反綸言之掌今若有平氏亡國之燼則天下之士卒倒戈歸賊也必矣抑又臣伏以天馬之所用不足以爲用若又於有所用之則大亂之用而非太平之用也然則吉乎不吉乎願陛下明監之唯幸弗愛奇物而愛善人弗行逸豫而行仁政是則所以隨天意而順人欲也然則禍害速消福祥畢臻帝聞之作色諸臣皆默然

三月十一日帝幸八幡(藤房監之整衣冠從之)○十二日藤房侍朝　帝亦知其復諫藤房因言　帝曰龍逢比干之諫死死而不悔伯夷叔齊之餓死死而不怨陛下亦思之乎　帝遂不辭退而言曰吁已矣乎竟去之北山之下　帝聞藤房行而大驚詔父宣房令追之遂不得乃大慟哭而還　帝亦悔焉

七月西園寺公宗(鎌足二十六代內府實衡男正二位權大納言按承久之亂公宗祖公經與北條義時合謀鎌倉得勝義時曰我子孫至七世可以西園寺爲倚頼其後世官登太政大臣位極一品)謀反將立北條時興(高時弟左近大夫入道惠性遁逃入洛匿公宗家公宗使之蓄髮改名也)曁其族名越時兼(時政七代左近大夫貞家次男號太郎)爲將移書聚兵各定約期日發兵又陰搆浴室下伏鐵蒺藜誘　帝欲蹈而陷之及其將幸其弟公重(竹林院中納言)證之　帝遣名和長年結城親光執公宗文衡准后請宥罪因附長年流于出雲正成使長年殺之乃斬文衡於六條河原○時行以期發兵於東國(名越時兼五千餘騎及諏訪三浦那和葦名淸久鹽谷等五十餘人從之)將覆鎌倉小山秀朝(秀鄕十四代下野守貞朝一男下野判官)澁川等官兵拒戰敗走新田族亦戰于利根川(上野)潰逃自茲平師蠅集雷震○十六日時行董軍三道攻鎌倉直義介成良出奔使淵邊弑護良　帝遣尊氏征時行時尊氏爲東八州管領

八月八日賊逆戰于佐夜中山敗績官軍追擊獲渠魁(淸久山城守也)尊氏鼓譟攻鎌倉時行敗走熱田大宮司任廣(鎌足二十代刑部少輔顯廣一男)縛三浦介矣復遣桃井直常(義家八代直頼一男右馬權頭)討時兼直常受正成計策斬時兼於大聖寺(加州)○尊氏在鎌

倉僭爲征夷大將軍奪義貞族采地以賞功臣義貞怒簒尊氏族食邑自是天下割據私動干戈尊氏素有奪天下之大志畏護良包藏不發護良既弒時行已夷乃欲擊義貞爲移檄於七道聚兵皆曰尊氏反　帝遣法勝寺僧惠鎭往鎌倉驗其事

十月尊氏上書(使价細川阿波守和氏也)奏擊義貞辜義貞聞之亦上書劾奏尊氏八罪是時　帝始聞弒護良大怒

十一月賜義貞於節度尊良爲東國管領○八日義貞董諸軍赴于鎌倉(　)十一日尊良帥師(大智院宮彈正尹宮洞院實世持明院道應園基隆二條爲冬堀川黄門江田行義大館氏義及土岐眞壁島津等從之)發京師○廿日直義率二十萬騎發鎌倉禦官軍(　)廿五日義貞莅于矢矧川欲濟使長濱(六郎左衞門)視水勢長濱曰崖高難襄義貞遠水而陣令輕兵射挑之吉良義尙(淸和帝十六代右兵衞佐俊氏男左兵衞佐)土岐賴遠(賴光九代大膳大夫賴貞次男彈正少弼)佐々木道譽濟川來堀口貞滿桃井胤氏(足利義國四代義胤孫遠江守)里見義成(新田義重三代裔伊賀守)山名義長(義重五代重村男孫二郎)等擊半渡破之高師直(入皇四十代天武帝廿二代豐前守師重長男武藏守尊氏之執事)其弟師泰(越後守)鼓兵繼來大館宗氏額田時經(義重三代氏經男也)岩松賴有(淸和帝十三代時兼曾孫禪師)等復破之仁木細川今川石堂率一萬騎直衝義貞陣鳥山大島等鼓譟擊之殺傷無算賊兵輘轢義助逐北絕川義貞止之幾斬千餘級乃降者二萬許直義退陣于鷺坂宇都宮仁科等新來向曉襲鷺坂賊睡迷竄走○二十六日細川定禪(義家八代二郎四郎賴貞二男卿律師)反于讚州(鷺田庄)討殺高松光定(賴光八代號土岐五郎住讚州高松因爲名也)勢呑西藩託問香西藤橘兩家坂東坂西等皆應之艤于宇多津將入寇(　)佐々木信胤(宇多帝十三代左衞門二郎高信三男飽浦三郎左衞門)同信高(宇多帝十四代備中守持信男田井新左衞門)應細川據福山城(備中)○二十八日兒島高德及朝山(備後守)等官軍攻福山城賊逆擊大敗之官兵走蟄三石城(備前)松田盛朝太田全職高津淨源等來援高德官軍得力合戰于和氣相持不決松田猝反官兵敗績犇熊山城(備前)內藤變官軍復潰十二月五日本間村上等率甲士五萬來援直義得力桃戰于手越川官軍涉川復破之直義走歸于鎌倉尊氏大畏往

建長寺截髮近臣止之直義憂之與上杉重能（鎌足十七代左近將監重顯次男伊豆守）相謀作尊氏徒縱雖爲僧罪不免死之綸旨示尊氏尊氏於是脫法衣著戎衣東士相喜麇屬及二十餘萬（帝已中興賞罰不當女謁數行人皆思復武家故關東豪傑多隷尊氏官軍不奮此謂也）○十二日尊良義助及大友鹽谷等率七千餘騎陣于竹下義貞督七萬騎屯于箱根尊氏向竹下直義向箱根義貞部將菊池武重（鎌足二十六代肥後守武時入道寂阿子肥後守）先登破吉良細川之陣義貞有力士四人（畑六郎左衞門篠塚伊賀守亘理新左衞門栗生左衞門）號四天王又選勁弓十六人（杉原下總守高田薩摩守葦堀七郎藤田六郎左衞門川波新左衞門栗生左衞門篠塚伊賀守難波備前守河越參河守長濱六郎左衞門高山遠江守岡田四郎左衞門靑木五郎左衞門同七郎左衞門山上六郎左衞門藤田三郎左衞門同四郎左衞門）一甲冑一進止號十六騎黨每戰挫銳每射賊必疊雙賊不能進○尊良兵輕進敗績仁木細川土岐佐々木三浦赤松等逐北搗尊良陣義助以七千騎酣戰衆寡不敵引兵而退其子義治（式部太輔時十三歲）失賊中義助反戰遂得義治歸（與梶原景時反

戰同功矣）不圖大友鹽冶遽叛從賊倒矛擊于後官軍潰散爲冬（冷泉定家四代御子左大納言爲世三男二條中將）隕命於賊手○普門利淸（藏人）應尊氏叛于能登率兵攻石動山中院定淸拒戰而死寺院悉爲焦土○義貞在箱根不知竹下之敗將進兵兵皆四散僅聚得百餘騎○十三日引兵西馬熱田大宮司任廣菊池武重等望旆來從賊衆茅塞力士一條時盛（淸和帝十五代行時男號高島太郎次郎）欲膺義貞篠塚蹴倒斬首刺賊九人莫敢當者官軍來襲幾及二千餘騎到于浮島原甲斐源氏（下山加賀美等）追尊良在路二子本義貞族也不得已從尊氏望旆來服義貞喜談論此時始聞鹽冶大友叛○十四日到于天龍川河水激溢壞民屋爲浮橋義貞殿渡衆了與船田義昌後渡綱斷浮橋中陷人馬沒水栗生不脫甲入水游泳扶之義貞與義昌跳超至岸此時不得渡者猶二十餘人名張（八郎）皆執而投岸挾二人得渡義貞退屯于尾張（下山加賀美謂義貞曰東國從尊氏無他厭公家而慕武家也將軍自立別揭旗則衆悅歸之也必矣何不早圖義貞曰寡人於君無恨捨順效逆天下豈爲知義者乎二子數勸之不可因與船田堀口相謀移書告關東諸將以義貞自立東藩豪將奉誓詞

以應之義貞曰彼等棄我從賊豫知其故然雖君不君不可臣以不臣我今不自立衆必食言擊我我死爲忠臣今方自立則衆服我我生爲賊臣寧爲忠臣而死不爲賊臣而生矣船田流涕而退二子遂去復從尊氏矣）〇十九日久下時重（秀鄉十二代大內新左衛門宗重男彌三郎號上野判官）應尊氏叛于丹波波々伯部中澤等屬之齋兵蓄糧俟山陽山陰兵〇西國官兵馳驛奏賊蠭四方復五畿七道相繼告急　帝大驚俾匹田召義貞守京此時賜龍馬於匹田行數十里而斃（於是人皆知藤房之言有驗也）義貞至闕示關東諸將誓紙於淸忠曰是皆起于女謁　帝嘉義貞無貳心悔婦言是用也〇赤松細川進兵抵須磨正成討而走之尊氏遣使言正成曰某本無貳因義貞之讒不意得賊名足下與我當奉以幾內五國南海六州因幷力誅義貞夾輔王室不亦可乎正成不肯　帝聞之授四國九州管領

「延元」

元丙子正月尊氏帥數萬騎將入寇官軍分兵禦之名和長年督二千騎守勢田（水中伏蒺蔾張大綱）正成以五千餘兵守宇治（淸四野絕橋桁）義助以七千餘兵守山崎（高壘壁深塹濠）義貞以一萬騎守大渡（水中列材橋桁設機）〇七日尊氏屠江洲伊岐州城（山法師成願房守焉）〇八日細川定禪赤松範資久下時重波々伯部爲光等逐二條師基（鎌足二十二代關白兼基二男大納言）屯于大江山　帝使江田行義（修理亮）往討之〇九日尊氏到于大渡師直毀屋爲筏乘五百餘人中流係栰不得涉禦矢漂搖方綱忽斷解兵皆沒死賊衆渡橋中陷溺死千餘人野木賴玄（師直兵）走桁得遁正成使使言義貞曰山崎之守烏合之衆不足恃宜疾益兵義貞不可〇十日賊衆襲山崎官兵逆擊追紀氏（播州軍）義助屬戰破坂東坂西軍乃乘勝進細川定禪赤松範資匡六萬餘騎薄于後官軍狼狽引兵入城賊進攻剽官兵敗走　帝奔于山門僧祐覺率千餘兵來納糧米粃糠及錢貨許多而大賑官軍〇義顯衝折細川師而歸京〇十一日尊氏入京焚大內裡賊衆糧乏欲掠無物（召吏讓責皆曰去年正成悉發倉廩運入山門人皆畏正成神智也）〇結城親光欲刺尊氏詐降焉尊氏不肯使大友具簡往糺之親光不忍大友言遂刺具簡而死〇尊氏使細川定禪將六萬騎攻山門又約三井寺於戒壇經營之事〇北畠顯家（村上帝十二代准后親房男鎮守府將軍從二位源權中納言奧州國司）帥三萬二千餘騎發奧州

赴洛〇十二日顯家拔江州觀音寺城（佐々木大夫判官氏頼守之）獲首五百餘級〇十四日顯家濟湖上而來于山門〇十五日昧爽顯家義貞正成董諸軍攻三井寺賊下坂口拒之千葉介率一千騎先登既而陷城門細川兵出不意横擣千葉兵大亂魁將戰死義貞力戰數折鋭賊敗退于三井寺官軍乘勝圍攻深溝不能渡義助令四天王（栗生篠塚畑亘理）渡橋倒城門官兵進縱火於佛閣細川定禪敗走〇十六日官軍凱旋舟田經政諫義貞曰勝兵利不如乘勝義貞然之鞭一萬騎追逃攻京義貞分兵去轅與賊十三萬騎相亂呼前後擊左右賊勢敗百戰皆克尊氏奔于丹波路及梅津失馬欲自殺數都筑下馬授尊氏得免到于松尾葉室定禪謂從兵曰今日之敗自三井寺始罪我之由也急與赤松貞範分三百餘兵夜襲京師義貞兵入街市弛婧兩將出意外奮擊舟田義昌及由良大館高田等戰死官軍潰散尊氏復入闕〇二十日尊良率二萬餘兵來援山門官軍倍力以奮〇二十七日官軍分二千餘騎侵京師上杉畠山等以五萬騎拒鬪正成分虎賁二千爲三前隊五百持盾（長四尺許其兩端設鉤）賊來則連合如壁賊兵猶豫中軍善射五百餘放箭如雨賊不能進正成以奇零千餘騎突衝斬首二百餘級顯家義貞等帥師前後夾擊鼓譟動天地首級七千三百生擒二百餘尊氏復走于丹波路正成謂義貞曰衆心在士女玉帛將軍不顧曩之敗乎義貞然之引兵而還尊氏復入京〇台徒率兵攻神樂岡（宇都宮及紀淸兩氏守之）不利高因幡全村（妙觀寺）揮鎌刺賊（從是人呼全村曰手突之因幡）僧徒繼進宇都宮等委城逃亡〇二十八日正成使能哭者剃髮與數十僧往京覓屍賊怪問之彼哭曰我楠公與義貞同死賊以信之乃索似首而梟之復夜令羸卒燃數千炬過小原鞍馬免徑尊氏以爲兩將果死士卒悉逃乃分兵於四道追之〇二十九日官軍伏旗息鼓將擒尊氏忠顯（六條中將）違約放火尊氏大驚復走于丹波路（往丹州曾地寓居內藤入道道勝宅）二月二日帝自山門還闕（以花山院爲皇居）帝嘗賞義貞之功賜美女（勾當內侍）〇尊氏得隙之于攝州（湊河）使愛兒藥師丸（熊野別當四郞法橋道有末孫）往京請　持明上皇（伏見院熈仁）之院宣〇五日顯家義貞逐尊氏到湊河〇六日與直義戰于豐島不利正成後至見其戰地麾兵南横突賊陣直義潰逃斬首六百三十餘〇七日大伴厚東大內介等點二百餘艦來救賊軍矣土居得能輸三百餘艘來援官軍官軍得力奮鷲勢

乃毀折賊軍大破之尊氏乘船遁于九州下軍爭船溺死亦衆○正成謂義貞曰功難成易敗機難得易失今必乘破竹之勢宜疾西征彼怯病復發大事去矣義貞惑溺勾當內侍而不可○二十五日義貞任左近衞中將義助轉右衞門佐○加茂神主基久被寃辱（基久女天生麗質在深閨雄于一朝故後醍醐持明兩皇子慕之切基久阿世獻女持明院因後醍醐帝深憤之二帝治世每易或貶或賞焉）○尊氏到于筑前居宗像大宮司宅小貳妙惠其子賴尙率三百騎將救尊氏菊池武俊（武重子或曰武士）設覆奸急發掩擊小貳敗走薄于內山城菊池獲時籠田原三原等百五十首級乃梟之於水木武俊進攻內山城妙惠遂兵羅自殺其子宗應（藏主）焚父尸共爛死○尊氏率二百五十騎發香椎宮（筑前仲哀之廟）首途一烏啣杉枝翺翔直義以爲吉兆士衆咸倍氣與菊池戰于多々良濱大破之武俊遁走于肥後尊氏遣一色道猷（義家七代宮內卿公深男太郎入道）仁木義長（義家十代義勝二男右京大夫號伊勢仁木）追討菊池武俊敗走兩將進兵逐內河（彥三郎）殺阿蘇大宮司惟直於小杵山（肥前）殪秋月（備前守）於太宰府從是九州悉屬尊氏松浦神田東手降尊氏狐疑之高師茂（師直弟駿河守）數引和漢之例而脫衆疑

三月北畠顯家任鎭守府將軍下奧州○西國大叛（丹波國久下長澤荻野波々伯部等將仁木賴章據高山寺城播州赤松圓心城白旗峯而俟討使作州管家江見弘戶等壘奈義能仙菩提寺而掠略國中備前田井飽浦內藤頓宮松田福林寺等將石橋左衞門寨甲斐河三石而寨海陸備中莊直壁陶山成合新見多治部等橫于勢山）○帝聞之大驚新田義貞爲十六箇國管領且賜西征之綸命義貞瘧病使部將江田行義大館氏將討赤松○六日赤松逆戰于書寫阪下不利義貞病痊到于斑鳩赤松使小寺（藤兵衞尉）言曰請許播備二州之牧屬官軍貞義諾之乃使書奏之久而不報正成曰播磨九州之咽喉而圓心天下之驍將也不許則急伐勿令計成　帝不聽行程往反之間赤松完城郭繕甲兵食言欺之義貞大怒攻之不下曠日頓兵於堅城之下又使菊池武季守都宮公綱守舟阪之嶮

四月六日後伏見上皇崩殂（壽四十九）○十八日兒島高德以二百騎據于熊山賊兵圍攻之高德力戰被二創與今木範秀其弟範仲中西範顯和田範氏松崎範家等十七騎突冲賊軍敗走于福岡官軍分手追之（江田行

義率二十餘騎經杉坂而入于美作大江田氏經帥五千騎而進舟阪小納言範猷及頓宮畑由良小寺三津澤等三百餘騎以伊東大和守爲嚮導卷轡銜枚歷間徑而回于三石）賊兵視回兵而大驚擾奔官軍追擊獲首百餘生虜五十餘人進拔奈義能仙菩提寺之三城矣義助圍三石城不克大江田氏經（義家十代藏人經兼男式部太輔）董二千騎到于備州屯于福山赤松則祐得平秀光遣使言尊氏曰官軍攻敝邑及備前備中美作力屈財乏乘弊發兵莫不克矣事遠緩緩城皆陷則雖百萬衆莫成功矣尊氏從之使仁木義長及小貳大伴守九州〇二十六日發太宰府（筑前）赴洛　五月一日尊氏詣于嚴島僧賢俊（三寶院僧正）持來　後伏見上皇院宣（崩殂以前下之）授尊氏〇五日尊氏兄弟帥大軍海陸並進〇十三日義貞引兵而屯于兵庫〇帝勅正成曰當疾往援義貞正成曰賊衆不可當矣計復幸山門召義貞歸京臣歸于河內彼必入寇以畿內兵絕糧道與義貞夾擊則莫不擒矣意義貞應有此慮然不戰而還謂陛下何故支于武庫耳坊門淸忠曰官軍每戰以寡伐衆是非策之善乃聖運合天也況未見敵而再幸于山門其如社稷之恥何正成嘆退〇十五日直義帥二十萬騎攻福山官兵息鼓

寂然賊易進大江田氏經急發奮擊然寡不敵衆官軍竟潰走于三石〇十六日正成勒敢死士七百行到于櫻井驛召長子正行（時十一歲）訓之曰我竭力於王室久矣然奸檜間于內我死天下必歸尊氏乎汝盡忠勿有貳因授家訓一卷曰此乃治國用兵之樞要汝且暮熟覩以當厲忠臣孝子之志也正行從行正成叱曰盡留國而雪恥復仇敢莫忘吾言也正行流涙而訣正成已到于兵庫見義貞酌酒晝夜談相歎曰事無可濟矣〇十八日官軍復委三石而走于攝州賊兵遮途菊池臣原拒戰免衆和田範長後退賊圍擊範長遂力戰而死其子範家賴宇野重氏（赤松部將）而免死〇二十五日海陸賊軍輻湊于兵庫官軍分兵應之（脇屋義助將五千騎陣于經島大館義明率三千餘騎控于燈爐堂之南楠正成督七百騎屯于西宿義貞董二萬五千餘騎陣于和田海崎）兩軍相持未戰官兵本間重氏（相州住人孫四郎）射飛鶖鵰主客拊手大感之細川定禪鳴鼓將移陸官軍攢鏃防禦因賊船不能襄沿流而下官軍雖悉力而拒戰海岸茫洋而遂不得遮賊衆皆襄陸也直義將一萬騎進來正成令曰天下之爭只在二賊今遇其一豈非幸乎士皆爭先奮擊直義潰逃馬中矢而斃官兵迫之藥師寺公義拒戰獻馬

而免尊氏令高師直及吉良石堂上杉等六千騎來救正成正季復擊破之前後力戰死者二百乃聚殘兵五百暫憩民居直義復麾潰卒前正成屬吏士激戰兵氣十倍自辰至未交戰十六合兵且盡復集之僅得七十三人莫不被傷復入向之民居與弟正季及一族俱自盡矣賊軍大奮園義貞仁木細川六萬與大館江田三千相戰而不決高上杉八萬與大江田里見烏山五千鬪不克復直義及吉良石堂統十萬騎俱進義助令士卒曰伏節死義此是時也諸士勉之士咸倍膽氣乃與宇都宮菊池河野以一萬騎相當義貞握二萬三千騎冲戰數十合寡不敵衆官軍潰散義貞離士卒馬中矢而斃賊兵及之義貞上求塚揮二刀除賊箭小山田高家揭鞭來授馬而戰死義貞徐逃亡○二十九日尊氏入寇　帝再走于台嶽　後伏見上皇(背通尊氏)幸東寺尊氏奉之別建皇統矣尊氏欲擧楠正行心函父正成首贈河州正行嘗不忘寢苫枕干之仇荐欲起義兵諸臣等以其謇而時未至諫而止之

六月二日尊氏使吉良石堂仁木細川高桃井等五十餘萬騎攻山門三日不克○七日高師重(天武帝第三皇子高市王二十代右衞門佐師氏男豊前守)鼓兵襲松尾官軍大亂殺傷無數賊兵進登城當陷杉本定範(山神大夫坊)討江田泰氏(源義家八代三郎行義男)賊猶豫義貞及宇都宮等出意外突衝賊驚奔○八日吉良石堂仁木細川率十八萬騎攻東阪下義助令勁弓拒之放箭如雨殺傷殆三千餘賊不能進義助及堀口江田大館董六千騎直擣土居得能等二千餘騎椅角夾擊湖上善射附船於岸橫發賊轢前後而敗績○十七日熊野八庄司率五百騎(皆著緇鎧)爭前攻登本間資氏相馬忠重嘗勁弓手利二人立艪拒之每射賊無不疊雙賊擾走○十八日金輪院光澄使今木隆賢言高師重曰乘夜襲四明則必可敗師重然之乃制銳卒五百附于隆賢夜將襲四明紀淸兩黨索搜直斃百餘人而縛隆賢○足利高經(次郎家貞男修理大夫尾張守後號入道道朝)帥北兵將攻橫川楞嚴院僧徒爲拒之數繕器械盤若院頑童遽病託神○二十日黎明神猿群來撞生源寺之鐘官軍聞之諸方皆應鼓譟奮擊賊衆敗走船田兵逐趾獲賊將師重乃刎首梟唐崎○帝奇附郡縣許多於山門僧徒悅之送牒於南都興福寺衆徒應之○晦日官軍率十萬騎攻京師賊逆擊大破之

太平記年表卷之二終

太平記年表卷之三

「延元」

元丙子 七月八日二條師基（鎌足廿一代太政大臣兼基二男正二位亞相）率敷地上木等三千騎復攻京師尊氏分兵防之官軍放火激戰賊互更拒戰官兵遂敗于內野義貞危急精兵磬控脫圍而逃○帝復使四條隆資往於八幡遮轉輸又使中院貞平將二千騎往于宇治而絕橋乃陣于橋小島崎成良董千餘騎蔑視京師而屯于長坂又自西塔塞鞍馬路自愛智信樂遮勢多賊兵糧殫大窮阿波淡路官兵阿閇志宇智小笠原等三千餘騎來援臺岳夜發烽燧於花頂山　帝裁錦袴（三寸許）賜諸士因官兵大奮○十三日東坂下官軍攻東寺（尊氏居之）師直率五百騎拒之官兵突衝破之逐北陷一樓因守壘殆危土岐惡源太（賴光八代伯耆守賴貞入道存孝子）單騎力戰追擊師直麾七百騎進繼官軍敗走○義貞分二萬騎爲三（以名和長年及高梨河野族五千餘兵爲先鋒以二條師基洞院實世五千騎爲後軍義貞兄弟握奇零一萬騎中軍矣）阿波淡路官兵千餘到于今熊野額田兵八百縱火於嵯峨三道漸進戰于大宮賊敗據于東寺義貞皷譟急圍攻東寺土岐賴遠（賴貞入道存孝男彈正少弼）率虎賁三百出不意襲官軍之後官軍擾亂無可制遂潰走于坂下賊數十萬圍攻義貞義貞令士卒曰以彼計我彼實百倍矣以尋常之戰則士卒咸死若一心而擊彼虛則必勝焉士衆勉之乃纏二萬騎而擣堅陣其鋒不可當引兵而還于叡岳名和長年戰于大宮而兵旣盡從兵僅二百奮擊竟死○尊氏附數邑於興福寺衆徒忽變服尊氏從是山門糧竭官兵甚困

八月

光明院踐祚（諱豐仁後伏見院第四皇子光嚴院弟也）

九月十七日台徒帥師侵江州小笠原逆擊破之台徒復率二萬餘騎將伐小笠原賊僅三百發意外徑殪三千八台兵潰走○佐々木道譽（宇多帝四代兵庫頭成賴十代佐渡判官宗氏二男高氏入道）使使奏山門曰請許江州牧謝罪而候軍下討小笠原以開糧道　帝悅許之道譽適逐小笠原奪江州反攻山門義貞怒之使義助將三千騎擊道譽道譽逆戰大敗官軍從是官軍日衰台岳夜窮

十月尊氏使僧忠圓誘　帝曰臣曾雖勤王殉義因義貞之讒不得已受朝敵之號願陛下顧孤忠而再得復帝闕

則臣宜扶王化而盡拜趨之禮也　帝無慮從之洞院實世遣使告之義貞堀口貞滿馳來皇居攀鳳轅嘆曰今陛下去忠臣從逆臣何謂義貞若有罪則何及斧鉞族戚自刎就義耳　帝有愧色乃召義貞兄弟背誓曰尊氏蔑朝家流毒於四海因汝等雖竭力於王室天運未至官兵離散賊燄熾昌衆寡不可敵也於是欲暫潛賊手而俟時朕何有異志乎必勿疑又附春宮（尊良王子）於義貞曰是乃儲王方宣奉之赴于越前以奇計征纂逆也敢莫忘矣義貞兄弟揮淚而退○義貞納家傳銀劍（號鬼切源家累代重器也）於日吉社○十日帝復還于京師直義請附三種神器於　新帝　帝嘗製僞物號神器傳　新帝○尊氏幽　帝於花山院廷臣數輩被竄辱就中誅本間資氏台徒祐覺於花頂山○義貞介　春宮及尊良赴于北國妙法院尊澄亦遁于遠州○十一日官軍到于越前木目越疾風大雪不能行皆因樹下憩佐々木熊谷等壘天曲遮前路河野兵三百欲戰墜指不能彎力竭自殺其餘凍死不可算千葉介貞胤束手降于足利高經○十三日義貞到于敦賀氣比氏治（彌三郎大夫）奉三百騎來援官軍義貞入金崎城（越前）使其子義顯脇屋義助將三千騎往于杣山城（越前）瓜生保（人皇五十二代嵯峨帝廿二代裔源判官晉居杣山）其弟重（兵庫助後任越前守）同照（彈正左衛門後任加賀守）來于鯖並驛享義助且蓄軍資而頒官兵矣足利高經僞爲綸旨以示瓜生保信之忽變從高經其弟義鑑房諫之於義助感義鑑房忠信附其子義治（時十四歲）於義鑑房乃引兵而欲歸于敦賀途遭今庄淨慶（越前之住人九郎入道）之要由良光氏（越前守）知難免將就義今庄不忍見其忠誠伏矛蹲踞義助脫歸于金崎賊軍圍城稍麻義助及僅十六騎作僞旛爲大軍襲後賊驚敗績○廿日雪晴貞松布花春宮尊良及義貞浮樓船遊于金江魚踊入船中義貞銜取以祭○尊氏使高經及仁木細川今川荒川等六萬騎復攻金崎高經環攻之不下摧勇銳堅城下小笠原兵八百攻巽崖栗生矢島氣比赤松等掩擊走之今川令百餘艦復攻巽崖城兵二百急發突衝賊復潰散中村被創不能退野中貞國反戰救之○加州劍白山衆徒應官軍攻那多城（富樫介守之）○菊地武俊日吉加賀法眼等脫京師還國將發兵

十一月帝潛遁走于吉野（北面景繁一人奉從）自茲二皇竝立（吉野爲南朝京師爲北朝）楠正行及紀伊官兵來會護皇居○高野與根來矛盾相生○二日亘理（新左衛門）奉　南帝之綸旨來于金崎授之於義貞官軍

蘇生於是賊兵散四方高師泰樹新關以羅散兵瓜生保及宇都宮天野等詐爲符節以軼關門兒還于杣山奉義治揚旗以俺和近鄰荷糧烏合乃分兵而塞鯖並湯ノ尾且淸四野移民器設殘湯尾驛〇五日上皇賞尊氏功敘正三位任大納言補征夷大將軍直義敘正四位轉參議爲副將軍〇二十三日高師泰使六千騎攻杣山城其兵割氷濟水以簾行來湯尾驛解甲息焉瓜生以爲隳術中乃放輕卒三千出不意襲伐賊兵潰亂生擒三百殺傷無數〇二十八日足利高經師師繼到于越前府〇二十九日瓜生率三千騎逆擊敗之進屠新善光寺城斬首三百生俘百三十人乃刎首而梟于帆山繕甲兵而欲援金崎正月十一日里見義成（新田義重二代太郎義俊男伊賀守）帥師將救金崎路程攻敦賀寨（今川駿河守以二萬餘騎守之）宇都宮紀淸兩黨接戰不利瓜生天野等雖破賊寨遭師泰三千騎敗走里見義成麾殘兵橫衝賊衆不轟包擊義成瓜生保其弟義鑑房力戰而將死其弟林源琳（次郎入道）及重照揚鞭來義鑑房叱曰豫誓留汝等非徒懼死爲復起滌瑕已宜疾還國報仇也兄弟三人呑聲歸矣義成及瓜生兄弟酣戰而死官軍悉敗

三月金崎城糧竭兵窮〇五日義貞義助洞院實世潛出城而奔于杣山（以河島左近藏人惟頼爲嚮導）〇六日師泰令諸軍攻金崎城中已糧盡殺馬而肉食士卒欲拒而跋瘁由良長濱知不可其守而諫義顯曰城之傾覆在今日當移春宮於蕪木而後將軍自殺也義顯然之乃移春宮於蕪木而一宮尊良及義顯里見武田氣比太田等三百餘人俱自盡矣由良長濱率五十騎與賊相紛將刺師泰而體勞不能戰遂自殺矣〇七日高經使島津忠治（豐後守藤忠久孫駿河守）執春宮於蕪木移于京師幽東寺〇尊氏欲顚敗叡岳北小路玄慧諫之止焉〇義貞兄弟聚得竄兵三千而據于杣山高經督六千騎攻杣山堅城不能下曠日屯于越前府畑時能（六郎左衞門尉）將細屋典廐與敷地山岸上木等居加州大聖寺城（津葉五郎守之）且壘細呂本（加越之境）掠略國中平泉寺僧徒及伊自良（次郎左衞門尉）城三峰請將於義貞義貞使義助將五百騎往援之義助與僅五十騎斥候于鯖江賊兵五百亟來掩擊義助奮戰大敗之結城河野熊谷伊東足立小島中野瓜生等逐北進擊義助制之曰小敵之堅大敵之擒也乃引兵而縱火於民居官軍望烟雲集（宇都宮美濃將監泰藤天野民部大輔政貞率三百騎先來一條行實帥二百騎自俺和來瓜生越前守重

其弟加賀守照收五百騎自妙法寺城來山徒三百餘騎自大鹽城來河島左近藏人惟頼董三百騎自三峰城來義貞督千餘騎自杣山來于鯖江）兩軍持河水猶豫船田兵葛（新左衞門）先登官軍皆涉賊防戰不決河島惟頼角躙賊軍後凶徒潰走于足羽官騎乘勝陷越前府城其勢以震北陸不戰拔七十餘城城州淩夷矣

四月金崎春宮及成良遭害（尊氏令粟飯原下總守氏光密上鴆毒而殺兩皇子）○諸國官軍聞義貞已跋扈于北越而勃興焉）大館左馬助氏明與土居得能發于伊豫國江田兵部大輔行義與足立本庄等據丹州高山寺城金谷治部大輔經氏與吉川高田等寨于播州丹生遠江井伊介奉八宮尊澄而據于奥山）宇都宮公綱率紀淸兩黨五百騎候于吉野　帝賞公綱之戰勞任四位少將○北條時行（相模二郎）陰上使於吉野請免旣往之辜　帝乃赦時行之咎

八月十九日北畠顯家督東兵十萬騎進發于下野足利義詮使高上杉等八萬騎追討之兩軍隔利根川相持未戰官兵長井眞永（藤原利仁十八代齋藤別當實茂男）其弟豐後次郎先登流沒官軍勵爭十萬咸涉賊迎戰于水內而敗績宇都宮公綱帥師來援官軍其臣芳賀禪可（兵衞入道）奉加賀壽丸（公綱子）據于宇都宮城（下野）矣顯家遣伊達信夫兵二萬攻宇都宮禪可遂以城降焉北條時行亦率兵來于足柄箱根新田義興（義貞二男德壽丸）統二萬騎到于入間川（武藏）俱欲攻鎌倉　十二月二十八日王師三道襲鎌倉賊兵大亂義詮走于安房

曆應　南朝延元三年

元（戊寅）正月八日顯家董五十萬騎發鎌倉赴洛行路雖有賊敢無當者旣而到于尾州熱田大宮司源雄（鎌足十八代攝津大宮司家範男也）率五百騎來服堀口貞滿（美濃守常居濃州根尾城）帥千餘騎來從之○賊將高上杉桃井等率五萬騎發相州倍道追官軍今川高土岐帥八千七百騎望旗來賊并其兵六萬旣而著于濃州官軍反應之伊達信夫兵三千先戰芳賀小笠原二千騎敗之高兵三千渡洲俣川而前北條時行鼓五千騎直衝破之今川三浦等回阿宇賀横進南部下山結城兵一萬疾擊復敗之賊將上杉憲顯（內大臣藤高藤十一代藏人憲房二男民部大輔）督一萬騎與新田義興及宇都宮公綱合戰于青野原上杉潰亂桃井直常土岐頼遠率虎賁千餘騎徑衝顯家之陣力戰數十合賊死者三百復奬殘

兵與日野顯信鬪不利兵已盡僅得二十三騎無不被傷乃引兵而屯于洲俣河邊賴遠被二創走于長森城

二月六日高師泰同師冬（師直猶子播磨守）細川賴春（義家八代公賴男刑部大輔）佐々木氏賴（宇多帝十三代時信男太夫判官）同道譽其子秀綱（近江守）督諸軍發向于濃州旣而到于江州聞官軍衆多涉黒地川求後難矣顯家聞其强甚慄令士卒曰俯察彼之策其心在必死是所謂窮寇勿迫乃索兵而走于南都尊氏復使桃井直常其弟直信（修理大夫）追伐顯家桃井兄弟帥師發于南方大破官軍顯家逃亡桃井凱旋〇顯家復聚散兵出張于泉州（堺）良侵近隣高師直率三軍圍之不克尊氏復使桃井兄弟往擊之直常簡熊羆之士繼衆激戰屠戮無數（桃井之戰地有丘墳世人呼之曰桃井塚）師直分軍圍顯家躬握奇零向于天王寺〇佐々木道譽其子秀綱沈醉而燒妙法院（光嚴上皇弟亮性二品法親王居之）山門嗷訴乞討道譽父子之罪尊氏不得已謫道譽父子於上總

五月堺城力竭陷矣顯家戰于阿部野而遂隕命武藤政淸（丹波國住人右京亮）獲其首〇義貞帥六千騎在于越前國府乃分兵攻波羅密安居河合春近江守等城一條行實（攝政伊尹公十三代少納言行房男左少將義貞之外戚）與賊鬪于黒龍不利船田經政亦與細川兵戰于安居敗走細屋典厩圍攻勝虎城鹿草兵來救襲官軍後因官軍潰逃

七月新田族大江田中條風間鳥山等（曾居越後上野）董二萬騎到于越中普門俊淸（越中守護）支戰不利遁于松倉城官軍進來于加州富樫介拒戰于篠原而敗績遁走于那多官軍佚而姑憩于今湊亂妨狼籍頗失法矣〇義貞已合援兵而欲攻黒丸城修糧米具器械此時賜　南帝宸筆之勅書於義貞曰義與顯信等魁將雖悉力而抗戰士衰兮糧盡矣竭兮弦絶王師潰亡當數日汝宣疾來救官軍而除危難也義貞乃送牒檄於山門而驗台徒〇二十九日義貞使義助將二萬騎往于泉州援官軍自留于北越而屢壓足羽〇師直令間諜縱火於八幡神殿官軍驚亂賊兵十萬應烟攻秘城將陷多田兵高木松山等防戰逐賊因得持爾後賊止戰遠移絶糧道城中糧竭委城而犇于河内〇足利高經修壘溝而據足羽城矣且課平泉寺之僧徒咒咀義貞義貞夢化臥龍却賊覺而大悅齋藤道獻（鎌足二十一代基任四男七郎基傳入道）聞之竊嘆曰事不可濟閏七月二日義貞督三軍發

河合驛馬跪蹶奴隷既而到于足羽川旗差之馬僵濆白蘗於河水官軍視之衆疑塞曾官軍圍攻藤島城不下義貞聞之僅率五十騎將之于藤島途遇細川鹿草等三百騎其兵皆立踐放矢如雨官兵不及拒中野（藤內左衞門尉）諫義貞曰千鈞之努不發爲鼷鼠機願避難而顧後患義貞不可曰苟殺衆雖我獨免何面目乎搏戰義貞之馬斃不得進欲下不中矢死氏家重國（中務丞）獲首乃上于京師梟六條河原○義助令河島守三峯瓜生守杣山畑時能守湊城○十一日義助引兵而歸于越前府八日南帝附皇子義良（第七皇子後號後村上院）於結城道忠義興顯信（北畠顯家弟）時行等從之皆乘船赴于東國○十二日到于天龍灘（遠江）暴風遽發官兵咸漂大洋義良船吹還于神風濱（伊勢）其餘放船不知死生結城道忠病死于安野津○十六日南帝（後醍醐天皇）崩殂（壽五十一歲）

十月

後村上院受禪（諱義良母准后廉子受南帝之禪在吉野）北畠親房（村上帝十二代大納言師重男大納言）輔佐幼帝而移勅書於諸國官軍

二　南朝興國元年

七月三日畑時能率三百騎屠金津長崎河合河口等十二城乃斬首八百餘級○五日由良光氏（越前守）亦率兵拔和田江守波羅密深町等城遡分兵守之堀田氏政（孫二郎三男兵部大輔）亦帥師攻香下鶴澤穴間河北等十一城而降焉義助將三千騎陷織田中荒神峯安居等十七城而縛其將吏七人殺五百餘人○十六日義助董六千騎三道欲攻黑丸高經委城而走于加州乃乞援兵於京師尊氏命諸將討義助諸將帥軍赴于北國屠官軍據城高經得力圍鷹巢城（一井氏政畑時能僅以二十三人持之）不克時能會堪武勇夜放神犬數趾賊營上木家光皷兵緊攻時能翼力士（所大夫房快舜惡八郎鶴澤源藏人長尾新左衞門兒玉五郎左衞門等也）陟地機轉磊石壓賊爾後瞻望而不得攻

九月義助避北國寄而來濃州據根尾城土岐賴遠同賴康（源賴光十一代六郎賴宗男大膳大夫）攻之陷焉義助遁走于尾州經伊賀路而適于吉野南帝賞義助之戰功而加一級○佐々木飽浦信胤（三郎左衞門後爲薩摩守）反尊氏而發義兵於小豆島（伊豫）四國淩亂矣

十月二十一日夜畑時能僅與從兵十六人出城而竄于伊地山○二十二日賊兵三千遠來攻擊時能左右十六

騎力戰數合兵已盡其馬玄黃時能卒中矢而死焉
三　三月高師直慕鹽谷高貞之妻而數欲犯之而其妻貞亮遂不從因師直恃讒高貞高貞避害而奔于出雲尊氏聞之大驚乃使山名時氏（淸和帝十六代政氏男左京權大夫亦號伊豆守）桃井直常進鹽谷高貞遂力竭自盡矣
四月一日義助奉　南帝之勅而赴于豫州途詣高野山旣而到于田邊熊野別當湛譽（新宮別當堪增十代後裔）湯淺定佛及山本東西等來之享應且點三百餘艦而送于武島（淡路）安間志宇知小笠原等迎饗而送于兒島（備前）飽浦信胤及梶原等奉之而送于今張（伊豫）於是四條隆資其子有資大館氏助（義家九代左馬助氏明男）及河野族來會其威浸迫于西國賊指城而走幾衆四國不日平夷矣
五月十日義助病死于國府（伊豫）○細川賴春率七千騎攻河口城（土肥三郎左衛門守之）土居得能合田二宮等將金谷經氏盛五百餘艘而將救土肥賊亦聞之以千餘艘遮之合戰于鞆浦而不決大館之部將岡部（出羽守）鳴鼓揮宮衆信之船殺傷相混無算官兵勢欲退氏助勵之夜出不意而襲鞆城賊驚逃氏助乃城大可島而俟後援賊三千來環攻之不下聞河江城已陷而土肥亦亡蹤而土居得能排城郤于豫州金谷經氏簡虎賁三百而一甲冑一起居令之曰忘身於外死節在此一舉士衆勉旃兵咸倍氣進乃與細川賴春戰于千町原莫不一當百自巳至申凡十有二戰兵且盡復聚之得十七騎）河野備前守通鄕得能彈正日吉大藏左兵衛杉原與一富田六郎淺海六郎高市與三左衛門土居備中守其餘豪士九人）復突衛遯于備後
八月二十四日細川賴春帥師圍攻世田城九月三日大館氏明兵竭自盡矣（曾居于世田城）篠塚（桓武帝十二代畠山重忠六代裔號伊賀守）力易扛鼎足輕戎馬單騎脫圍而遁于隱岐○是年尊氏建立天龍寺以疎石（夢窓國師）爲開山
四　玆年官兵力盡而蹐邊鄙故京師靜謐矣
康永
元壬午　春大森盛長（豫州住人號彥七往建武三年五月討楠正成者也）夜覩妖怪
二月天變地殃痘疹流行直義不豫因玆　光嚴上皇納願書於八幡宮以祈之病即痊三月二十日法勝寺災上（在白河六勝寺之其一也白河院承曆年中造立之）九

月三日土岐頼遠二階堂行春（鎌足二十四代下野判官代時元一男從五位下下野守）遇光嚴上皇之御幸醉逆狼籍直義怒將罰之頼遠走于濃州直義命頼遠姪頼康尋討之頼遠背與天龍寺疎石親睦因疎石連上書乞宥頼遠之辜不聽

十二月命細川顯氏（義家十代八郎二郎頼貞一男陸奥守司侍所）下死於頼遠矣行春亦流于讃州

二　師直草創眞如堂

三　尊氏詣于石清水○直義敍從三位

貞和

元乙酉八月二十九日天龍寺經營畢（立爲五山第二列乃爲公武之祈願所）帝行幸尊氏兄弟亦詣之（頗爲天下之壯觀）於是台徒怨望之愬訴而不輟遂振神輿　帝勅解之○是年荻野朝忠（丹波住人彦六後號尾張守）叛據于高山寺（丹波）尊氏使山名時氏將三千騎撤之朝忠糧彈降焉○兒島高德介新田義治潜上洛欲乘夜襲柳營事發覺而遂不果與義治俱遁于信州其兵香勾高遠（新左衛門）入壬生地藏堂而免死

二　南朝正平元年　是年奏風雅集

三　周信編貞和集

四　六月八日直義夫人解胎產男子

八月楠正行謂諸士曰我聞父之讎不與共戴天我已二十三歲所以未起兵者以時未熟也然稟生多病若且暮死則奈君父之辱何耶乃誓衆出師以發攝州燒中島而屯之赤松馳傳告急尊氏遣細川顯氏及宇都宮佐々木長松田赤松村田等八將將一萬三千騎擊正行

八月十四日細川等賊將到于藤井寺脫甲憩焉正行秣馬蓐食倍道兼行匿兵於譽田山下以七百餘兵臥旗息鼓直進突出奇兵相應前後夾擊賊衆驚動顯氏棄甲曳兵而走逐北六里和田高家（楠正氏四男）其弟源秀（新發意）應期遽起赤松範資其弟範貞相蹂躪六角兄弟戰死斬首四千三百八十餘俘獲四百十七人溺死不可勝算　南帝賞正行之戰忠拜爲左衛門督其弟正之爲大和守和田手和泉守恩地于兵衛司○赤松築二十三城於攝州以拒官軍相闘不數四日求援兵於尊氏尊氏使諸將往救之正行以爲殺我衆而破彼軍不若入京徑擊尊氏計已定乃潜師襲尊氏之館尊氏被二創踰牆而逃其夫人爲亂兵被戮直義匍匐竇中而免死正行在京五十餘日聞尊氏兄弟在江州欲乞師尋征之　南朝不許曳兵而還

十月二十七日

崇光院踐祚（諱興仁光嚴院第一皇子時十六歲母曰藤秀子後號陽祿門院三條大納言公秀女也）〇二十八日立直仁（花園院皇子時十三歲）爲春宮〇仙洞有奇恠

十一月十一日花園上皇崩（壽二十三歲號萩原院）〇二十五日尊氏聞正行病篤而遣山名時氏細川顯氏將二萬餘騎討正行兩將陣于住吉乃分諸部於四所正行以爲我死病床而無爲不若遇彼而死乃病起赴之幽望其塵知備四所輙合爲一軍〇二十六日和田賢秀阿閉了願各橫戟於馬首奮冲衆軍從之時氏戰敗被三創安田（彈正）有膂力負而走徐得免死賊軍潰亂殺傷無數流水者五百餘人正行令輕卒救之撫育而許還其兵咸感仁澤殺身以報恩惠

十二月尊氏得反間而知敵情復使師直兄弟將數十萬騎伐正行兩將既而到于八幡暫息之正行誓天止其弟正儀於千盤之嶮與正之俱入朝　南帝召見詔曰成敗之機在此一擧宜竭節義之力折剛敵之精銳也正行退拜　先帝之廟正之及從兵百四十三人各題姓名於壁以誓焉〇是年自伊勢海出寶劔（稱文治元乙酉　安德天皇沒西海之時負帶之沈海底之劔以奏獻之也蓋記者謬乎未詳其眞僞矣）

太平記年表卷之三終

太平記年表卷之四

「貞和」

五　正月三日師直進軍臻四條畷分兵爲五隊又分步騎而設鳥雲陣（縣下野守奉白旗一揆五千騎備飯盛山河津高橋將大旗一揆三千騎陣外山武田伊豆守師千餘騎屯四條繩手佐々木道譽率二千騎陣伊駒山師直擁奇零二萬騎二十餘町引後陣列矣）五日四條隆資率邑兵二萬增旗多金鼓爲大軍向于飯森山正行分三千五百餘兵爲三隊乃下令曰今日之役同先考湊河之事臣子尙一志力無辱若父之佳名士卒咸恢弘膽氣爭先而前縣兵自高所支擊官兵和田賢秀先登當之縣兵敗走賢秀復進擣師直之陣武田兵三千拒戰正行鼓兵擊破之後軍互進厲戰鼓纛折江河汗馬崩山谷小旗一揆之兵長崎資宗松田重明須々木高行及青砥河匂松田高橋廣戶有元等悉力要官兵佐々木道譽麾二千騎突冲官軍潰退南力戰數十合喪三千二百餘兵正行暫時休與殘兵同就食相勵曰宜直擊師直勿徒勞力細川清氏（義家九代和氏男阿波守）仁木賴章（義家十代賴勝男左京大夫世號丹波仁木）及千葉宇都宮師一萬餘騎攻擊官軍正行敗圍者數擒兵僅五十餘復搏戰斬賊將土岐松田兩氏賊衆散亂不可制師直大怒揮敗兵踊戰正行復起奮衝賊兵拓靡既接師直僅半町上山（六郎左衛門）易位正之斬之正行兄弟喜無窮已而知非師直復奮接師直師直會備健卒之喜發者射之須々木（四郎九州住人）以勁弓數發正行兄弟中箭不得進相與自殺焉和田賢秀廢痛亂敵近于師直湯淺本宮知之邀截賢秀卒不達而斬和田正朝（楠正氏男新兵衛尉）單騎免死而欲還吉野而南馬安保忠實（宣化帝之裔丹黨肥前守）逐跡獲正朝之首（）十四日師直督三萬騎發向于吉野南帝開凶奴襲來而走于賀名生（吉野山之中天河奧）〇十五日師直到于吉野放火於皇居師泰出張石川河原與楠正儀（正成三男左衛門）數戰不決（）犯星客星並現（）師直兄弟耽酒色募奢侈誅菅在登（菅道實十三代在輔男參議左大辨正三位文章博士也）毀其墳墓造臺閣〇上杉重能（內大臣高藤裔重顯二男伊豆守）畠山直宗（義家十代四郎宗生男大藏少輔）營與師直有郤時數咎計覆之頃年直義歸依禪宗而崇敬妙吉侍者（夢窓國師之法眷也）師直兄弟凌僭之已甚妙吉怒之與上杉畠山共譖愬之〇足利直

冬(尊氏之孽子直義爲猶子號宮內太輔)爲西國摠轄
二月二十六日將軍塚(在東山)鳴動〇廿七日清水寺(在京師)炎上
六月三日男山八幡宮震動〇十日大白辰歲三星相合續〇十一日興田樂於四條河原遠近聞傳士女接跡觀娛飇風遽發倒棧死傷許多矣
閏六月五日電光現乾巽如鬪戰〇三日僧雲景(住羽州羽黑山)獻識文
八月直義與上杉畠山等相議欲密戮師直令大高重成(天武帝二十一代頼基男伊豫守)宍戸朝重(安藝守)及力士百餘人伏屏裏以招師直師直不知之偶爾往三條第(直義居所)粟飯原淸胤(下總守)齋藤(五郎左衞門尉)猝反目送告之師直奔免害矣師泰帥師上洛直義欲擊師泰之心使飯尾(修理進)言曰補管領師泰不可赤松圓心其子則祐屬于師直闘舟坂(備前)杉坂(美作)遮兩道〇十三日直義率七千騎護柳營(東洞院尊氏居所)乃移乘輿於持明院師直父子帥帶甲五萬圍柳營竹葦尊氏使須賀(壹岐守)言曰汝父祖世爲當家股肱未失君臣之義方今以毫髮之怨忘累代之恩顧妄動干戈何哉若有怨尊氏則宜疾退演旨也師直下馬拜禮請曰臣於君無怨唯願賜讒人上杉畠山等若許之即脫圍而去也尊氏容之師直乃解軍而退於是流上杉重能畠山直宗於越後妙吉遂竄
八月二十四日師直令八木勝元殺重能直宗於淺生水(越後)
九月十三日杉原(又四郎)率兵圍攻鞆城(足利直冬居之備後)直冬遁走于肥後
十月二十二日義詮入洛代直義而執政務
十二月直義薙髮更名慧源蟄于堀河〇二十六日行大嘗會(內辨洞院相國公賢外辨三條坊門源亞相家信高倉參議廣通冷泉參議經隆左侍從花山院中將家賢右侍從菊亭中將公實等也)

「觀應」

元庚寅 直冬在川尻幸俊(肥後守)之亭而娶小貳頼尙女(妙惠男筑後守)九州大亂〇三角(石州住人兵衞佐入道)奉直冬之命奎踞于石州
六月二十日師泰帥師進發于石州
七月二十七日攻青杉丸屋鼓崎城(佐和善四郎以三百騎據之)森(小太郎)高橋(九郎左衞門)先登從兵三百三好兵二百涉河攀城兵迎擊殪百餘人師泰鼓兵突衝城兵鳴金退賊不得急經日

八月二十五日夜三好一揆健兵二十餘人（足立五郎左衛門其子又五郎杉田彈正左衛門後藤左衛門藏人種則同兵庫允泰則熊井五郎左衛門政成山口新左衛門城所藤五奴可源五小原平四郎織田小次郎井上源五郎瓜生源四郎大庭孫三郎山田又次郎甕次郎左衛門那賀彥五郎等也）自後嶮襲入鼓崎城將佐和力戰而死其餘不戰而拔城三十二進兵圍三隅城不克○直冬率兵蹂宇都宮城斬首百餘級乃逐鹿子木（大炊助）其威漸震

十月十二日慧源逃亡京師石堂賴房（義家八代四郎義房男右馬助）從之○十三日尊氏躬督師直等八千騎發向于九州○二十五日慧源往大和憑越智（河野之族伊賀守）於是蒙師直追伐之　院宣（持明院上皇之旨也）

十一月十九日尊氏到于備前次軍於福岡以待順風

十二月九日慧源上使於吉野乞降而免咎○上杉憲顯（民部太輔鎌倉管領）通慧源而叛上野高師冬（師直猶子實左衛門尉師行六男播磨守）率兵發向于上野與上杉戰敗北走甲州州澤城諏訪祝部帥六千騎圍攻之師冬力盡自殺焉

二　正月慧源董官軍將脅京師畠山國清（八幡太郎義家七代尾張守家國一男阿波守入道道誓）亦率千餘騎從之義詮聞之大驚馳郵求援兵於福岡尊氏帥二萬騎赴洛○七日慧源統七千騎陣于八幡○八日桃井直常亦率七千騎應期而來于東坂下○十五日義詮出奔京師同日直常入洛既而尊氏遇義詮于西岡乃分兵於三而攻桃井直常（仁木賴章其弟義長細川清氏等率五千騎向四條東佐々木道譽率七百騎屯今比叡窺錐虛實尊氏父子率一萬騎向法勝寺）直常分三千騎爲三隊畫地相拒之（後東山前加茂川陣）主客俟期未戰桃井之兵秋山光政（清和源氏賴義七代小太郎光定三男六郎新藏人扇一揆中）輕進挑戰其勢虎猛敢無當者安保忠實單騎卒然相應秋山揮棒安保拔太刀酬戰數合忠實折太刀繼以短刀師直令良射二十餘人射光政忠實制之曰誠雖敵豪士妄徒殺之哉於是兩士不死揖而退（時人感之畫神社僧房及團扇等以謳歌之矣）兩軍塡然接戰殺傷不可枚舉佐々木道譽襲桃井軍後直常敗走于關山尊氏入雒○十六日尊氏父子以寡兵不能鎭京師復去之于丹波直常復入京○義詮及仁木賴章同義長留井原石龕尊氏赴于書寫坂下○高師泰同

師夏師師上洛上杉朝貞（鎌足十九代左近將監重顯三男彈正少弼）倍道逐後與陶山高直合戰于龍山斬陶山兄弟及其族百餘人宮兼信反戰河津氏明高橋英光繼進上杉卒潰散矣芳賀角田等亦率七百騎要杉山河津高橋復突冲拓路

二月一日師泰師夏到于書寫坂下○三日尊氏董三軍圍光明寺城（石堂右馬權頭賴房及愛曾伊勢守矢野遠江守等以五千騎守之）赤松則祐與浦上行景其弟景嗣吉田盛清長田資實菅野景文等俱攻鳴尾嶮城兵數放箭敗赤松軍矣城中有神師驟託宣軍勝之利（伊勢阿曾頑童遽病託神）賊聞之大讋則祐其子朝範（肥前權守）生狐疑曳兵而還于白旗○畠山清國及石堂上杉率七千騎到于東條○十三日尊氏解圍而向于兵庫官軍進屯于小山石堂賴房及阿曾矢野等亦排光明寺城會于小山○十七日尊氏分二萬騎爲二軍向于御影濱藥師寺公義秀鄕三代鎭守府將軍兼光末孫號二郞左衞門尉）簡虎賁二百伏雀松原河津高橋先進當畠山陣官兵竄藪齊射殪百餘人河津被四傷敗走石堂上杉鼓兵破師直陣梶原兄弟踐戰有功石堂上杉復與公鬪義斬首百餘級公義僅逃之于湊河尊氏卒走松岡而逼單城衆咸離散城中猶無人尊氏方欲就死與餘兵偕飲酒歌舞時慧源使饗庭命鶴（清和源氏土岐彌太郞國賴裔次郞光俊末孫）言曰臣苟廢彝倫及干戈也無他爲警師直等之驕奢而已伏願令師直等剃髮爲僧即謝先非而當候軍下也尊氏許可於是欲令師直兄弟爲僧藥師寺公義諫師直兄弟曰宜亟自殺莫隳名師直不可公義怒嘆曰吁豎子不足與謀以去○二十六日尊氏與慧源和成上洛師直師泰薙髮改名（師直號道常師泰號道勝）着緇衣後乘到于武庫川三浦（八郞左衞門）斬師直吉江（小四郞）刺師泰西行重（源經基七代二郞行廣男左衞門四郞）縛師夏其餘族盡殲矣○尊氏兄弟既而雖和會群臣互競褒中不穩諸侯引兵而還國○赤松則祐奉幼主（兵部卿親王護良男）據赤松城

七月晦日慧源出京奔于越前（依南家儒少納言藤有範之諫也）

八月十八日尊氏帥師進發于江州佐々木道譽其子秀綱仁木義長土岐賴康等來聘

九月七日糺神殿鳴動○慧源使石堂畠山桃井將二萬騎往江州而拒尊氏三將既而到于八相山其兵疑內煩濫無可禁遂三將曳兵而還○畠山清國諫慧源以和解

不聽清國怒降尊氏
十月八日慧源發越前而赴鎌倉〇十四日尊氏董諸軍發向于關東
十一月晦日尊氏陣于薩埵山(駿河)慧源使桃井直常將一萬騎遮宇都宮分兵三道攻薩埵山(上杉憲顯將二十萬騎向由井石堂義房將十萬騎同宇都部佐慧源躬督十萬騎在伊豆國府)相持不決大胡山上(共上野住人)援尊氏而發笠懸野介大島(新田之族)將擊慧源長尾率三百騎逐其後
十二月十五日宇都宮介三戸(高師直族號七郎)帥師發上野〇十六日宇都宮到天命驛(下野)三戸遽癲狂自殺因茲從兵逃亡殘兵僅七百宇都宮率殘兵直前〇十九日宇都宮藥師寺涉利根川與桃井長尾戰于那和大敗桃井軍〇津山野等與擊吉江(中務)以狗〇兒玉黨率三千騎襲薩埵之嶮今川南部羽切等轉大石壓之死傷亦衆〇二十七日宇都宮撥足柄之敵屯于竹下小山率兵來會古宇津慧源之軍途散亂仁木義長逐北到于伊豆國府慧源復敗走于北條上杉長尾率敗兵遯于信州途間居千葉介之壘而麾其兵〇義詮獻使於吉野請謝既往之辜和睦　南帝倖赦之於是　上皇拜趨廷臣等乞降候于吉野　南帝大哀勞臣北畠親房(時大納言)爲准后國母(安野廉子)號新待賢門院日野賴意(護持院僧正)補東寺長者醍醐座主大塔忠雲(僧正)兼南門跡(大塔梨本)補南職(鎌倉大御堂天王寺別當)其餘褒賞有差

「文和」

元(壬辰)正月六日慧源復與尊氏和解俱適于鎌倉
二月二十六日南帝促瑤輿於東條〇慧源於鎌倉遭毒害〇二十七日南帝幸于吉野(以神主津守國夏之第爲　皇居)和田楠等率兵警衞路程〇二十九日住吉神松折倒見凶兆
閏二月八日新田義興其弟義宗(武藏守少將)脇屋義治(左兵衞佐)起義兵於上野東士齎糧蠅集三將督十萬騎跨于武州〇十六日尊氏帥師發向于武州次軍於久米川石堂義房(義家十六代四郎賴茂男)與三浦葦名二階堂共有隱謀皆謂於明日接戰之際倒戈以擊尊氏議定然後義房密告諸其子賴房賴房曾有忠義大驚諫父甚切義房不聽賴房惘然而退直入尊氏營中證之義房及三浦葦名二階堂等引兵而遁〇二十日官軍分兵於三所(義興將二萬騎爲先鋒義宗率五萬騎爲中

軍義治率二萬騎爲遊奇軍） 以備尊氏黨諸軍向于小
手差原義興先與幣一揆（其兵三萬赤驗）戰不決義治
與白旗一揆（其兵二萬白旛）接戰殺傷互無算兒玉黨
與饗庭命鶴花一揆鬪大敗之賊潰走于石濱官兵追蹤
四十六里尊氏挺身逃仁木賴章傔忽横挫義興之陣力
戰數尅官兵死者二百義興義治共被二創殘兵亦羸乃
進入于鎌倉義宗收兵陣笛吹潰卒望旗悉會○二十三
日上皇（光嚴院）使中院具忠（村上源氏具平八代參
議通清男）傳三種神器於（南帝（往建武三年十月後
醍醐帝墮尊氏之術中而遷洛時豫爲僞物稱神器以傳
光嚴院之器也南帝曾知其故因今也廢之以賜近臣
等）○南帝詣天王寺而幸八幡（以田中法印之坊爲
皇居也） 乃闕赤井大渡兩所以戒不虞矣義詮使僧慧
鎮（法勝寺）言曰照臨恤下情君臣和睦則何怖畏之有
今王痔蓄甲兵而事戰伐之事何哉 帝勅曰天運膺圖
雖上下和盟而世未靜殘賊遊俠塞逵祇非事兵事而爲
戒非常耳莫敢疑焉義詮信之猜弛矣○二十七日王師
出不意襲京師（中院顯能率三千騎向羅生門千種顯
經將五百騎放火於西七條和田楠將五千騎向大宮）
細川顯氏與楠正儀拒戰于朱雀敗走細川賴春（時侍

所） 率五百騎繼之力戰數合兵已竭賴春隕命義詮避
難而犇于江州北畠准后入京而執萬機其子顯能奉
南帝之詔幽帝（崇光院）及兩上皇（光嚴院光明院）春
宮（崇光院皇子榮仁）於賀名生亦放梶井尊胤於金剛
山下○二十八日尊氏聚潰卒圍笛吹甲斐源氏三千騎
爭先而前官軍奮擊立殄百餘人千葉宇都宮繼進上杉
擂拟復獨三百人自午至申數十戰官軍已勞且盡曳兵
退嶺上杉之力士長尾（彈正）根津（小次郎）雖混敵狙
尊氏發覺不遂官軍日減無可守義宗率奔于越後
三月四日義興義治出鎌倉據于津山（相州）之險（石
堂三浦二階堂以六千騎守之管松田河村之領地也）
○十一日義詮勒三軍入寇 南帝使中院具忠拒之具
忠恐懼義詮之衆兵未戰而走于八幡○十五日義詮進
屯于東山北畠顯能出京奔淀○十七日義詮到于東寺
顯能復走于八幡細川顯氏率兵援義詮來會赤松則祐
亦再叛官軍服義詮○二十四日義詮董軍屯于洞頂還
轉輸矣楠正儀及和田（荒五郎）帥三千騎要荒坂山細
川清氏同顯氏土岐賴康率六千騎激戰官軍攢鏃舍知
兩賊猶豫土岐康貞（惡五郎賴康弟）先登接和田而被
二創土岐家人闕（左近將監）中矢仆康貞負之退路蹈

地機而轉幽谷遂爲敵殺自是後賊不能戰而相持焉山名師氏(義家十代伊豆守時氏男右衞門佐)後期而至乃進兵攻八幡法性寺康長(鎌足二十二代從三位親康男左兵衞督)絕淀橋防禦賊二千騎涉河來康長汗戰十七合兵竭躬被箭十一甲冑如蝟遂敗退八幡

四月二十四日賊定期衆軍攻八幡官兵擺手應之(顯能以伊賀伊勢兵三千支園殿口和田楠以和泉河內兵保守佐羅科)賊縱火於上風燒高橋邑煨烟扞禦官兵不及拒棄甲薄于山上賊乘利圍搴矣

五月五日法性寺康長(?)虎賁八百乘夜蹋細川之營諸營驚擾無可禁殺傷不可勝算和田楠欲聚兵救八幡密出山上還河內和田夭死正儀柔懦遂不果○十一日城中糧彈力窮矣　南帝出奔賊要趺皇子及四條隆貲三條雅賢(鎌足二十二代從三位雅春男中納言)隨命其餘義卒三百防戰而死一宮(彈正左衞門)援　南帝法性寺康長蹴倒斬之宮松田等亦以衆遮前路康長復戰除暴　南帝雖中賊箭而不僾膚遯到于東條伯耆長生(名和長年弟太郎左衞門)負戴神器(內侍所櫃)逃走

南帝嘗使兒島志純(高德入道)移檄召諸國官兵新田石堂桃井吉良上杉等董三道兵(東山東海北陸)倍道赴洛途聞八幡已陷各解軍而還(其餘信州下宮世良神家滋野及伊豫土居得能等亦應期上洛也)

八月二十七日

後光嚴院踐祚(諱彌仁光嚴院第二子母藤秀子號陽祿門院三條亞相公秀女也)補承胤(後伏見院子梶井尊胤弟)於天台座主

十月無神器而修即位禮○二十八日國母逝(三條公秀女秀子陽祿門院)

二月四日光嚴光明兩院罹災燹○山名師氏與佐々木道譽有郤更怨義詮○二十六日師氏出洛奔于伯州與父時氏俱叛通南朝逐吉田(肥前守佐々木道譽目代)纂雲州其爐淩蔑中國

五月七日時氏父子帥師赴洛四條隆俊(隆貲男時少將)法性寺康長將和田楠原蜂屋赤松湯淺等三千騎應期而出張○帝避京師之亂走于山門

六月九日義詮督土岐佐々木等三千騎陣鹿谷南北官兵縱火於民居刧京師和田楠鼓譟破佐々木軍山名亦與土岐鬬獲首五百級吉良石堂原蜂屋等與細川淸氏合戰于鴨川而復敗之淸氏走于四明嶺義詮亦遁于東坂本赤松氏範(圓心四男彈正少弼兄弟有隙依屬官

軍）逐北接長山（遠江守嘗當時力士）長山知膂力不知赤松而逃走○安保忠實荻野朝忠奉高師友（師直孽子武藏將監）率兵屯于吉峰（西山）○十一日山名攻吉峰斬師友忠實朝忠逃亡死傷幾衆○十三日義詮介　帝赴于江州昵臣等從之堀口貞祐（貞滿子掃部助）率兵要行路而憚　帝位不發機佐々木秀綱率三百騎後殿貞祐於是突出斬秀綱得二百首級乘輿既到于鹽津邑兵鳴鼓襲來細川清氏負　帝免難山名雖入京以寡兵不能護京師遂率兵還于伯州四條隆俊亦班軍於南義詮相　帝歸雒

春新田義興脇屋義治委河村城出奔於是東國浸平矣尊氏使畠山道誓（清國入道）相甚氏○尊氏上洛命義詮伐山名時氏奉足利直冬謝罪降于吉野

十二月直冬及山名帥師進發于京師桃井直常足利高經亦反尊氏而應期發仁木賴章畏勇銳不能遮裏兵而蟄于佐野城（丹波）

四　正月十二日尊氏介　帝走于江州（武作寺）○十三日直冬入寇直常高經來會

二月四日尊氏督軍欲襲京到東坂本義詮屯神南共覘洛官軍分隊據于京師師氏過期攻神南後藤基明（播州住人）以勁弓射防之官兵猶豫佐々木兵江見箕浦馬淵等冲戰死基明及一宮粟原海老名等亦力戰死焉時氏鼓兵衝細川賴之（義家九代讃岐守賴春男從四位下右馬頭）之陣秋間生稻須々木等拒鬪死賊軍闌靡小林福間乘勝進擊賊大潰走官兵逐北斬小國伊勢疋壇魚角佐々木新谷薦田河勾瓶尻粟生田等河原重行（武藏七黨其一私黨也兵庫助）赤松朝範（則祐子肥前權守）反戰而有功矣義詮與則祐道譽僅百騎堂堂陣列山名令士卒曰宜直擊道譽不可徒悉力乃進突衝則祐令平塚內藤大鹽近藤今村湯淺曾根拒之平井景範櫻田俊秀大野氏永櫛橋三郎繼之官軍敗績賊內海範秀等追逃得首三百四十餘級師氏被創與河村福間僅三騎徐逃亡○八日細川清氏與桃井戰于四條終日不決桃井兵二宮亂敵接清氏覺而剪○十五日賊入京掠僞尾張氏賴（足利高經男左衞門）苦桃（兵部太輔）率兵制之清氏鼓兵椌尾張軍後朝倉力戰數挫銳細川力士南部（六郎）沸卉官馬不進西塔金乘坊討南部獲首於是兩軍曳兵退矣仁木義長士岐賴康與桃井赤松戰于七條官軍潰走于東寺氏範扶小牧（赤松臣被傷）屢有功

三月十三日仁木細川土岐佐々木師師與桃井直常足利高經戰于西洞院不利尊氏使那須(五郎)往援之那須兄弟及從兵三十六騎冒陣而死佐々木崇永(時信男)細川清氏合兵橫擣官軍不轟清氏被傷土岐賴康突衝敗官軍且分兵絕糧道○東寺城粮竭無可守直冬師氏高經直常等委城而走直冬詣于八幡奉幣卜吉凶巫祀託凶事諸士生狐疑離散○尊氏介 帝歸洛高經乞降復復屬尊氏

「正文」

元丙申 八月義詮叙從三位○是年撰菟玖波集

二　二月先帝(崇光院)及兩上皇以南帝之許還洛○連年兵革不已國衰民窮饑莩充野○佐々木道譽等放辟邪侈而凌僭已甚

三　正月四日天龍寺炎上○春菊池武光(武重男)蜂起于肥後逐探題一色直氏(義家八代二郎範氏男左京太夫) 其弟範光(修理太夫)跨九州義詮使細川繁氏(陸奧守顯氏男伊豫守)追討菊池

二月十二日帝贈足利直義之廟於從二位

四月十八日新待賢門院逝于吉野○二十九日尊氏薨(號等持院法名妙義道號瑞山時年五十四歲) 帝勅日野忠光(鎌足二十三代資明男左中將)贈從一位左大臣義詮拜稽首辭之乃詠位山之和歌以奏之 帝歎賞入新千載集

五月二日梶井承覺薨(後醍醐帝弟二品法親王)

七月菊池武光及新田族奉西征將軍世良(後醍醐帝第六皇子) 分兵陣三所(筑後高良山柳坂水繩山)○十九日武光率兵攻味坂城(太宰筑後守賴尙其子新少貳忠資姪筑後守賴泰等將六萬騎持之) 少貳賴尙曳兵屯于大原與武光之陣間沮澤不能戰而閲日

八月十六日武光分兵爲三陣躬簡利兵三百乘夜襲後三隊相應前後夾擊賊敗績菊池姪肥後次郎鼓兵衝新少貳忠資之陣賊潰逃逐北卒斬忠資朝井胤信筑後賴信窪泰助肥前泰親等踐戰而死菊池武明(武光姪孫二郎) 及加屋美參岡庄宇都宮國分等亦戰死菊池武信(武光甥肥前次郎)赤星武貫與少貳賴泰(賴尙次男太宰越後守) 太宰賴光戰擒賴泰而武貫戰死世良武光及新田之族與少貳賴尙及松浦眞壁等戰而不決衆寡不敵官軍遂敗北世良被創廷臣諸士反戰而死(日野左中辨坊城三位洞院權大納言花山院少將北山中將葉室左衞門督世良田大膳大夫田中彈正少弼

岩松相摸守桃井右京亮堀口三郎江田丹後守山名播磨守等也）武光下令曰卿相渠魁既沒吾今雖死何悔之有願遇少貳共死士衆勉之士卒伸勇猛而進武光被二創而斬少貳武藤少貳軍遂敗走于太宰府自卯至酉力戰數十合少貳喪三千六百四十餘兵菊池亦亡千八百餘人○新田義興自越後潜到武藏聚亡命者時々往還于上野畠山道誓聞之大恐令竹澤江戸氏誘討之二人知其不克其謀而叛鎌倉屬義興義興初疑焉竹澤獻美女義興幸之遂信竹澤

九月十三日竹澤寄遊於月伏兵招義興義興聞凶兆而不往竹澤江戸又告義興曰相州有內應者今其襲鎌倉必可破矣義興諾之

十月十日義興夜密赴相模二人待之於矢口渡豫與水手謀鑿船底欲沈之義興來乘船郎從十三人耳中流水手拔絮詠曰水漏船將沈以逃河廣水嶮不可泳也時二人出兩岸拊手大笑之義興怒自殺神靈數爲祟國人恐懼立一祠而祀之（號新田大明神）

十一月菊池武光帥師發向日向大友氏時（秀鄉十六代氏泰男刑部太輔）及少貳宇都宮等倒戈襲後武光不驚進兵拔三俣城（畠山義熈持之）而凱旋更出師於豐後少貳阿蘇城小國遁後武光反戰屠小國城斬首三百餘級

十二月義詮任征夷大將軍（勅使日野左中辨時光也）

四　六月西征使細川繁氏病死于讃州

十月執事仁木賴章死于京師令細川淸氏續職焉○八日畠山道誓董軍發鎌倉赴洛十一月二十八日道誓入洛謁柳營○楠正儀和田正武（正成妹之子和泉守）聞大軍已嚮入朝移　南帝於觀心寺（金剛山奥）廷臣皆散四方

十二月二十三日義詮督諸軍進發南方（道誓赴攝州尼崎赤松世貞其弟則祐爲斥候仁木義長屯于西宮）

○奏新千載集

五　正月和田楠等官軍據諸城而防禦（和田楠據赤坂故城福間河邊等壘平石眞木野酒邊等繕八尾城守之又寨龍泉峯令邑士要之）

二月十三日義詮陣津々山（金剛山乾）待期官兵丹下俣等降賊堅城不可屠曠日頓兵

四月四條隆俊率兵屯最初嶺（紀州）○三日使畠山義深（道誓弟尾張守）擊隆俊隆俊避銳退龍門山賊繼進隆俊放輕卒射拒之鹽谷（伊勢守）鼓譟徑擣賊大潰散

官兵逐北三十餘町獲首二百七十生俘六十七八○十
一日義詮使畠山今川往救義長官兵湯川越智東手降
芳賀公頼(禪可男伊賀守)陷龍門山恩地牲河等奔阿
瀬川○十二日住吉社鳴動神樹(楠)倒　南帝御修法
○將軍宮（護良王子往正平七年赤松則祐奉之則祐
再變之後所幽于京師)潜出京遯高山寺城(本庄平太
平三属之但馬丹波悉服焉）乃進軍赴播州赤松則祐
逆戰甲山擊敗之本庄兄弟戰死將軍宮遁適河州○二
十五日將軍宮與赤松氏範遽叛據銀嵩　南帝大驚使
二條關白良基（鎌足二十三代左大臣道平男從一位
太政大臣號普光園院）追討將軍宮戰敗走于南○正
儀以爲龍泉城完難復乘矣不如合兵放戰乃爲僞旗樹
陰森以去敵果望旗不得攻徒曠數月
閏四月二十九日土岐勵士卒曰望敵壘飛鳥不驚疑彼
當樹僞旗也乃進兵激攻細川淸氏赤松範實聞鼓聲繼
攻遂陷城○今川範氏(義家十代五郎範國男上總介)
佐々木崇榮率兵攻平右城拔之官兵敗走于金剛山
五月三日諸軍以掬園赤坂城○八日和田正武簡虎賁
三百乘夜躡結城營斬首七百兵已盡鳴鉦退（結城兵
物部郡司混于敵入城中和田曾堪兵術卒索捜之而斬
焉）和田楠排赤坂城奔金剛山○二十八日義詮及道
誓班軍○道誓淸氏土岐賴康佐々木道誓同崇榮等與
仁木義長有隙各相誓議討義長○和田楠復出師兵於
攝州義詮使道誓淸氏賴康崇榮等擊之諸將帥師發向
天王寺和田楠復退金剛山道誓淸氏等反軍將擊義長
義長聞之大驚聚兵屯京師
七月十六日道誓淸氏等攻京師義詮未知義長之奸佞
因從之道譽密來數義長之罪而諫之於是義詮始知義
長之暴乃避難走谷堂義長既衆叛親離父子相別逃亡
○乘京師亂弊而南軍勃起五畿糸莠正儀率兵拔譽田
水速城根來僧徒據春日山城恩地牲川帥師屠之湯淺
降賊倒戈將討阿瀬川阿瀬川山本田邊等逆擊得三百
三十首級
八月四日道誓潜出奔京師義長家人西郷遮矢矧小川
亦與仁木絕後道誓及佐竹宇都宮等漂中途○山名時
氏聞南軍復奮大悅勒兵攻赤松拔數城（草木揉尾景
石塔尾新宮神樂尾等）○土岐東池田及小河應義長
據小河邑(尾州)土岐直氏（賴光十一代賴宗男宮內
少輔）攻降焉乃斬小河救東池田(依親族也)吉良西
鄉等壘矢矧要道誓大島義高星野行明率兵擊破之○

石堂賴房仁木義氏(義長弟三郎)帥師陣葛木山佐々
木崇永屯飯守岡相持不戰
九月二十八日佐々木高秀(道譽二男治郎太輔)與仁
木戰市原遂敗仁木軍(仁木部將長野之縄拂一揆先
驅不利矢野子藤宇野部後藤波多野佐脇高島淺香河
合服部等死焉)
十一月義長據長野城(伊勢)土岐賴康佐々木崇永攻
之而不下以久暴師

「康安」

元辛丑三月晦日京師燒亡(八十有六町爲焦土)土岐氏光
(賴遠長男仁木義長養爲子號今峯右馬頭)與義長俱
在長野城其弟光明(外山遠江守)光行(今峯駿河守)
懼氏光徒死密遣使求降不可義長卒委城而走于南方
六月十八日地震(迄十月不已)山谷傾覆殺傷幾衆○
潮濤激瀧沈雪湊(阿波)民居七百餘宇於海○二十二
日天雨雪(甚寒烈冬)
七月十二日山名時氏其子師氏帥師發向美作未戰而
拔六城(名木能仙篠向大見丈菩提寺小原大野等也
各赤松附庸也)妙見林野兩城姑不下時氏以奇計服
焉佐用貞久有元佐久據倉懸城不陷山名父子環攻之

又使小野重長(山名執事)攻赤松之別堡(竹山千草
吉野石堂峯)赤松世貞其弟則祐陣高倉山覘師氏
亦分兵竢彼發動矣阿保忠實(入道信禪)渝盟與長氏
(九郎左衞門尉)倶起兵將侵播州於是赤松城法華山
寨往反且馳傳求援兵於細川賴之○二十日難波浦
(攝州)潮水乾數百町亦出周防海中於鼓○經營天王
寺金堂(般若寺僧圓海檢之)○世良武光等匡兵陣香
椎大友氏時少貳宗像等帥師向香椎松浦黨麾兵登飯
守山將襲後菊池兵城(越前守)放間諜令彼生疑矣
○八月六日黎明城氏蹩飯守營松浦敗走○七日世良
武光進兵擊破大友之軍
九月十日細川賴之到備前欲聚兵而赴播京四國群士
各事私爭鬪不應旨因頓之留唐河○細川清氏與道譽
矛盾發起矣清氏嘗圖不軌道譽荐愬之○二十日清氏
率兵之天龍寺○二十一日夜義詮避難走今熊野清氏
使弟僧瑱陣謝已之罪義詮不許於是清氏蓄兵侍討使
○二十三日清氏引兵赴若州據小濱城(清氏家人頓
宮在焉蓄糧糠數百斛奉之清氏有慮留弟家氏將氏及
兵部少輔氏春於京都)義詮還闕乃命足利氏賴仁木
義氏伐清氏清氏令輕卒焚朝倉敦賀營○二十八日和

田楠復出張攝州（渉渡邊橋屯天神森）佐々木秀詮（道譽男高秀子近江判官）帥師向神崎吉田嚴覺先登濟河來正儀放輕兵射之縈廬加兵佐々木軍潰亂不可禁秀詮兄弟自盡從兵殺傷不可枚擧

十月二十九日氏賴義氏到椿峠淸氏賴利（淸氏弟右馬頭）奉兵向椿峠頓宮猝叛圍小濱城因玆從兵離淸氏兄弟僅逃走攝州乃就石堂謝辜降南朝細川氏春（義家九代師氏男兵部少輔）出京奔淡路起兵將侵京師松山（攝州源氏）承　南帝之旨保香下城○道誓叛基氏出奔鎌倉前程逐土肥據修禪寺（伊豆）其弟義深赴信州藉諏訪○淸氏請出師於是　南帝召正儀議兵機正儀知不可諫之群臣不聽　帝亦願之

十二月三日四條隆俊及石堂細川等軍天王寺細川氏春赤松範實（圓心孫貞則次男彥五郎）亦以期發兵義詮使佐々木高秀（道譽男治部少輔）討官軍○七日淸氏皷兵襲京師○八日義詮介帝奔江州（武作）道譽飾珍器酒饌於我館而行官軍入洛正儀觀道譽之亭太慽之

十二月二十六日義詮督軍攻京仁木赤松等亦應期來會官軍遂走南方○二十七日義詮獻捷書於江州　帝欣然還叡岳○二十九日義詮入雒

「貞治」

元壬寅　正月十四日細川淸氏自南方如讃岐細川氏春聚阿淡兩州兵來會焉細川賴之爲征淸氏進發讃州乃詐使淸氏弛婧而繕軍資

二月彗星客星並現

三月十三日遷　宸席於西園寺故宮○二十七日足利基氏使平一揆伐道誓其兵到伊豆國府葛山等論賦役及鬪諍遊佐神保等乘弊襲擊平師敗走鎌倉基氏復令新田田中擊畠山道誓委三津金山兩城蟄修禪寺四月十九日帝復闕○足利氏賴薙髮晦迹山林（更名心勝爲人存順略達經史時人以爲國器義詮亦寵之唯父道朝偏愛其庶子義將欲使其代己以執政因玆常譖氏賴於義詮義詮以爲見子不如父故不擧氏賴謂在朝逆父不若歸心於釋門於是去）○夏旱魃江州湖水涸數十尋稍見妖孽

六月三日山名時氏馭兵赴作州（嘗在伯州）分隊拔數城（師氏向備州浦上行景及松田河村等待賴之未戰多治見楯崎赴備中入秋庭松山堅城高師秀避難而走備前德倉矣）陶山（備中守）嶮城唯不下○富田秀貞

（天武帝二十代彥部光經男）其子直貞（彈止少弼）起兵於雲州乃發向備後攻宮道山（下野入道）直冬援富田到宮內遣使於宮城求降不可宮使其子氏信擊直冬直冬戰敗富田歸雲州○山名勝豐（新田義重十一代熈貴男左衛門佐）其弟豐時及小林率兵赴播州仁木賴勝（賴章弟）安良據但州不及戰赤松直賴（貞則男）亦保大山城遂不出兵山名進師到丹波與仁木義尹（賴章男）挑戰義詮命足利心勝今川貞世（義家十代範國男伊豫守）往救義尹山名小林等遠輸糧乏曳兵還○桃井直常出張加州（曾居信州）富樫鹿草等遮越中直常突衝大克之直常欲諭密策夜潛出營而適井口城從兵不知之疑惑散走彼乘利斬二百首級

七月義詮爲足利氏經（高經男左京大夫）於鎮西探題氏經到兵庫携妓女於船中而赴九州○清氏陣白峯（讚州）與賴之戰不決飽浦信胤及小笠原等扶清氏來遮運送於是賴之大困焉○二十三日賴之使新開直行收西長尾城（中院源少將保守之）清氏亦遣兵救西長尾新開詐多火皷以示陣潛軍而襲白峯○二十四日賴之聞皷聲合攻清氏嘗勇膽剛毅雖數圍遂與伊賀高光接斬賴利師氏（義家八代細川公賴男掃部助）力戰遁于淡州四國平夷矣

八月和田楠復出師於攝州箕浦（道譽家人次郎左衛門尉）帥師向神崎○十六日楠乘夜夾擊箕浦敗績木林泰則石津行春及鹽谷等逃亡

九月十日道誓義深謝罪降基氏釋之○十六日石堂賴房楠正儀和田正武率兵放火於湊河誘赤松範資保城（多田部山路）不戰官軍凱旋○十八日稻生（平次）告道誓曰基氏讓潛誅於道誓兄弟避害奔南方其家人遊佐江戶等自盡焉○二十三日菊池武光董師發向豐後少貳宗像等主足利松王丸（氏經男）屯長者原（筑後）○二十七日菊池武幸鬪于長者原不利喪岩野鹿子木等三百騎城氏進兵斬少貳兄弟獲首四百級菊池進到後府氏經及大友少貳等避來銳各據堅城（高崎岡棟堅等）

二　六月八幡神輿入洛

三　春大內介義弘（百濟國璋王第三子琳聖太子七世大內正恒十七代胤嘗防長兩州牧）叛官軍發向豐後菊池厚東逆擊破之義弘束手降焉（頃之潛上京賂諸司以金銀玉帛蔽己之罪得譽名）○山名時氏其子師氏仁木義長乞降於義詮免咎

六月基氏爲上杉憲顯於鎌倉執權憲顯嘗與芳賀禪可有隙遂逐禪可奪其國(越後)於是禪可怨望叛上野基氏帥師進發上野○十七日與芳賀高貞(禪可男伊賀守)戰苦林野(武州)基氏自相當數合馬斃彼及之大高重成(天武帝二十一代重長一男左馬助)授馬除害高貞已亡子弟大瞋與岡本富高俱相亂敵中援基氏岩松直國(義家七代政經二男治部太輔)與基氏易位遂高貞爲金井(岩松家人)斬芳賀師潰逃基氏逐之到小山(下野)禪可遂竄基氏凱歌○足利道朝(高經入道)侵春日社領與軍士因宮司氏人等嗷訴而朝廷不許遂振神木於京師洛中奇怪不已

七月七日上皇(光嚴院)崩于丹州(山國壽五十二歲)

四　三月四日道朝設櫻花之遊饗義詮道譽嘗與道朝有郤會大野原而壓興於是道朝大怒削道譽之職故佐々木赤松之屬比周譖道朝義詮命佐々木崇永潛爲誅道朝○八月四日道朝參柳營涕泣謝罪義詮無言道朝退走越前佐々木徙逐跡薄長坂道朝兵二宮(信濃守)反戰防禦佐々木牽兵而還道朝與其子義將(當時管領後號斯波)據杣山栗屋兩城義詮使畠山義深佐々木高秀及土岐山名赤松等八將伐道朝父子

八月十二日春日神木歸座公卿整儀從之十月畠山等八將發向越前攻兩城不克

五　七月道朝病死杣山義將乞降屈服焉

九月二十三日大元使來雲州求援兵於柳營義詮不許卑禮厚幣而送大元

十二月義滿(義詮一男後北山殿母家女房紀良子)敘爵

六　三月十八日帝於長講堂祭　後白河上皇國忌○二十八日天龍寺炎上○二十九日中殿有和歌宴義詮參內四月二十六日基氏(從三位左馬頭法諡瑞泉寺時年二十八)卒于鎌倉其子氏滿(左兵衛督)嗣焉上杉憲顯輔佐之

六月十八日園城寺與南禪寺生矛盾(嗷訴不輟)

八月十八日課三大寺(興福寺東大寺延曆寺)修最勝講僧徒鬪諍而殺傷殆衆

十二月七日征夷大將軍源義詮薨(正二位權大納言贈從一位左大臣號寶筐院時年三十八)其子義滿嗣立細川賴之(從四位武藏守)受顧託而上洛(嘗居四國)輔佐義滿美譽流在人口矣(自元應元巳未至貞治六丁未凡五十八年畢)

元禄四辛未春分日
東武書肆　萬屋清兵衛
　　　　　岡部三郎兵衛　壽梓

太平記年表巻之四　終

太平記年表跋

太平記年表者源貞賴所著也貞賴兼余固有瓜葛之好更同居一夕茗話徐々談　本朝古今之史錄而及太平記余曰惟太平記者美而具矣然粗有序次相先後巳臻生誦者之惑者記者華其文也頗猶欽乎余竊慽焉吾子其思焉賴曰嗚呼力不足其已而已也促之數而諾焉濟月而見其編草語意琅琅且援人物之家系暨事變之一端用加下嗟乎不盡哉頃依劂氏之索鏤梓以布于世後來弄之者不勞心姓氏之混淪歲月之疑惑應辨知四小策中矣復不袖中之珍哉遂爲之書云加藤正典了把筆于籍茅菴

太平記表年跋畢

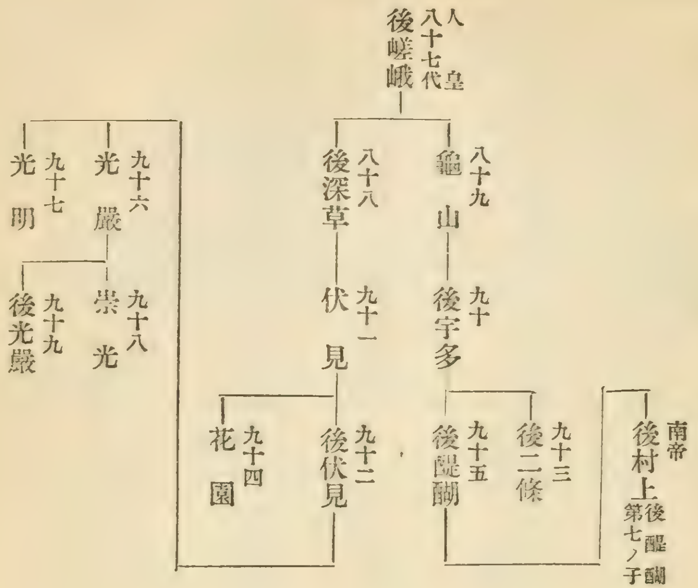
太平記系圖

全


國學院
大學出
版部

太平記之時代

帝王略系圖



第九十五代
○後醍醐天皇　諱尊治。後宇多第二子。母談天門院文保二戊午三月二十九日即位。元弘辛未八月二十四日遷幸南都正慶二癸酉六月復位不及重祚。又治天下三年。曆應元戊寅八月十六日崩御葬吉野山

第九十六代
○光嚴院　諱量仁。後伏見第一子母廣義門院正慶元壬申三月二十二日即位。治天下二年。眞治三甲辰七月七日崩御

第九十七代
○光明院　諱豐仁。後伏見第四子延元二丁丑。十二月二十八日即位治天下十二年康曆二庚申。六月二十四日崩御

第九十八代
○崇光院　諱興仁。光嚴長子。母陽祿門院貞和五己丑。十二月二十八日即位。在位三年。應永五戊寅正月十三日崩御

第九十九代
○後光嚴院　諱彌仁。光嚴子。崇光弟。同母也。文和元壬辰。十二月二十七日即位。在位二十年

第九十五代

○後醍醐天皇　元應元年ヨリ。貞治六年迄ノ事ヲ記ス。都合四十九年也

元應二　元亨三　正中二　嘉曆三　元德二・元弘一

正慶二　建武二　延元二　曆應四　康永三　貞和五

觀應二　文和四　延文五　康安一　貞治六

已上合四十九年也

○南帝之年號

建武五　南帝建武三ハ北帝延元年也　正平二十四　北帝ノ貞治六年ハ正平廿二年ニ相當　建德二

文中三　天授六　弘和三　元中七

已上合五十七年也

南帝元中七年。北帝明德元年相當。明德二年南北一統也

○北條家之系圖

人王第五十代
山部

○桓武天皇—葛原親王—高見王—平高望（始賜平姓 上總介）—良望（鎮守府將軍 改國香）

—貞盛—維將—維時—直方—聖範—時直（雲　山家　四郎大夫）

—時家—時方—時正（北條四郎遠江守從五位下 建保三乙正卒七十三歲）

—義時（元仁元甲申六三卒六十三歲 從四位下陸奧守 江馬小四郎）
—宗時（三郎）
—政範（從五位下 左馬頭）
—政子（嘉祿元七七十三薨六十九歲 源右大將賴朝室 從二位 法名如實）
—女（足利上總介義兼室 右馬頭義氏母也）
—時房（從四位修理權大夫 本𫝼連 祚念）

義時—泰時（仁治三壬寅六十七薨（六六）三十二歲 波羅南方武藏守 江馬太郎五 法名觀阿）
—朝時（寬元二甲辰四六卒五十一歲 名越遠江守 法名生西）
—時章（尾張守 法名道鑑）
—光時
—周時—幸夜叉丸

朝時—時章—時繼
　　　　　—篤時
　　　　　—公時（永仁三乙未卒廿八歲 尾張守 法名道鑑）

　　—時家（九州下向 美作守 左近將監）

—高家（尾張守）—高邦（元弘一癸酉五於久我繩手討死）

泰時—時氏（寬嘉二庚寅六十八逝（廿八歲）六波羅北方 不世務 武藏太郎五）

時氏—時賴（弘長三癸亥十一廿二逝卅七歲 最明寺道崇 北條五郎從五位下相摸守）
　　—經時（寬元四丙午閏四一卒法名安樂 卅三歲 武藏守）
　　—隆政
　　—賴助（仁和）
　　—爲時（本時定）
　　—定宗
　　—隨時（九州成敗）

時村（仁治實子正廿四卒六十六歳 治郎法名行然）
時隆（民部大輔）
宗房（土佐守）
泰宗
時員
政宗
時元
房眞（左近大夫將監）
時光（土佐守）
時國（左近將監）

重時（弘長元二十二 十酉十二三 卒極樂寺觀 覺五十九歳 陸奥守）
長時（武藏守專阿）—義宗（六波羅 駿河守）—久時（六波羅 武藏守）—女（登眞院子六十 歳尊氏室貞治 四乙巳四薨）
忠時（康元政村連署 左近將監）
守時（武藏守）—益時（正中三四廿四執權維眞相並）
義政（左近將監 本時量）—國時（陸奥守）—後時（民部大輔）
業時（陸奥守鎭忍）—時兼（尾張守）—基時（相摸守）—仲時（左近將監 彈正少弼）
時茂（六波羅左近將監駿河守）—時範（六波羅）—貞範（六波羅備前守 左近將監）—貞重
有時（左京大夫 法名蓮忍）—通時—時高（駿河守）—時邦（左近將監）
政村（左京大夫法名覺榮崇康 元丁酉三長時連署）—時村（嘉元三乙巳 四廿三討死 左京權大夫）—爲時（左近將監）—凞時（京宣相並 執權五年 武藏相摸守）
政長—師村
茂時（右馬頭）
實泰（法名淨佛）—實時（越後守）—重村

時敦（六波羅）—時益（元弘三五月 有事六波羅 左近將監）
女（足利貞氏上贈三品）
時俊（五郎本時員）—顯時（越後守）—貞顯（正和四七十 一基時連署 武藏守）—貞將（元弘三癸酉 五廿二於鎌 倉討死 武藏守）—忠時（左近將監）
盛朝（寺）—實政（左近將監 法名實道）—政顯（九州探題 法名顯道）—種時（元弘三逝 修理亮）
宣房（右近將監）—信時
政氏—盛房（丹波守）
時景（掃部助）—時顯（美作守）
時盛（建治二丙子 五二卒八十 一歳越後守）—政忠—貞宜—時英（陸奥守 右近大夫）
朝直（遠江守）—宣時（眞時連署 弘安十七執權）—貞房（六波羅南方）
宗宣（六波羅嘉元三權帥 時撚連署）—維眞（陸奥守修理大夫）—高宣（武部少七）
家時

時宗（弘安七甲申四逝卅四歳正五位上寶光寺道果相摸太郎）
時嚴（寺教惠法印弟子櫻田禪師）
時輔（式部丞）
宗政（武藏守）
宗頼（本ハ宗長異國警固長門下向）

時宗—貞時（七最勝園寺崇演）
時宗—師時（相摸守貞時左馬頭位十一年）
宗政—宗方（後見十一年駿河守本久時）
宗政—師時—貞規（應長元辛亥十廿六卒）
宗頼—兼時（本業時異國警固）

貞時—高時（日輪寺宗鑑相摸守成壽丸）
貞時—泰家（嘉元元癸卯誕生卅一歳正慶二癸酉五廿二自害左近太夫入道惠性四郎）

高時—邦時（萬壽丸相摸太郎）
高時—時行（全嘉丸）
高時—菊壽
高時—龜嘉丸

○新田足利之系圖

○清和天皇（人王第五十六代）—貞純親王（桃園親王兵部卿）—經基（天徳五六十五賜源性鎭守府將軍六孫王）

多田滿中（鎭守府將軍）—頼光（攝津守）—頼義（安部貞任退治鎭守府將軍伊豫守）

頼義—義家（白河院御宇永保三年後三年保衡家衡退治鎭守府將軍八幡太郎）
頼義—義綱（賀茂次郎）
頼義—義光（武田小笠原一條逸見板垣ノ祖新羅三郎）

義家—義親（天仁元被誅對馬守）
義家—義國（從五位式部大輔）
義家—義忠（河内判官帯刀長）
義家—義時（石川陸奥五郎）
義家—爲義（保元七十八義朝誅之左衛門尉）
義家—義隆（毛利陸奥六郎）

義國—義康（足利陸奥守判官陸奥守判官）
義國—義重（新田大炊助左衛門尉九條判官）

義重—義廉（大炊助次郎本名義昌）
義重—義俊（里見）
義重—義範（大炊三郎伊豆守從五下）
義重—女（惡源太室）

- 義純（畠山遠江守）
- 義胤（桃井近江守）
- 義氏（足利陸奧守）
- 義兼（赤御堂左馬頭）
- 義清（嘉永二十二備中於水島討死）
  - 義範
  - 義縁（矢田）
  - 義房（矢田）
  - 義實（矢田藏人）
    - 實國（仁木太郎）
      - 義宗（戸賀崎三郎）
      - 義季（細川次郎）

○新田之系圖

- ○義重（九條判官大炊助）
  - 義廉（大炊助 本名義兼 次郎）
    - 義房（藏人太郎）
      - 政義（太郎）
        - 政氏（太郎）
        - 家貞（堀口次郎）
        - 家氏（大館又次郎）
        - 基氏（太郎）
          - 朝氏
            - 義貞（正四位下左中將治部大輔小太郎）
              - 義顯（越後守小太郎）
              - 義興（左衛門佐德壽丸）
              - 義宗（左兵衛佐武藏守）
            - 義助（曆應三庚辰五四卒脇屋彈正大弼次郎）
              - 義治

○足利之系圖

○義康（保元元年七十二日昇殿 陸奥守）─義兼（鑁阿寺赤御堂 左馬頭）─義氏（從五下治部少輔法樂寺 左馬頭 陸奥守）─泰氏（從五下左衛門佐平石寺 宮內少輔 尾張守）─頼氏（從五下左馬頭吉祥寺治部大輔 三河守）

家時（隣國寺從五位下式部丞 伊豫守）─貞氏（淨妙寺 贈從三位 讃岐守）

尊氏（征夷大將軍 從一位贈左大臣關東長嘉寺延久三戊戌四廿九薨五十四歲 等持 仁山妙義）

直義（左兵衛督 觀應三壬辰二廿六卒 禁惠源）

義詮（贈左大臣從三位貞治六丁未十二七 太卅八歲 寶筐院）

直冬（鎌倉瑞泉寺從三位 左兵衛督 慈恩寺）

義滿（贈從一位太政大臣 應永十五戊子五六薨五十一歲 鹿苑院道義 准三后）

滿詮（贈左大臣從一位應永廿五戊戌五薨 養德院）

義持（從一位內大臣左大將 應永卅五戊申正十八薨四十三歲 勝定院）─義量（應永卅二乙巳二廿七薨 長德院正四下 參議左大將）

義教（贈太政大臣 嘉元辛酉六廿四爲赤松滿祐被害 普廣院 初義宣）

義勝（嘉吉三癸亥廿一薨 十歲）

基氏（竹若丸 貞治六丁未四廿六卒 廿八歲）

氏滿（曆應元戊寅逝四十歲 永安寺 從四位下 左兵衛督）─滿兼（應永五戊寅十一四薨 左兵衛督）─持氏（永享十一己未二十逝 長春院 從三位 左兵衛督）─成氏（延德二庚戊正七薨）

義房（少大四郎）─頼房（官方中務大輔）─直房（乾享院 明應六丁巳九晦日薨 三河守）

義政（慈照院左大臣）

○仁木之統

- ○實國（八幡太郎義家ヨリ六代）——義俊（又太郎）——義繼（彌太郎）——師義（太郎次郎）
  - 賴直（豐島仁木太郎）——義直（太郎）——氏義（右近將監 彌太郎）
  - 義勝（矢田九郎）
    - 義連（太郎次郎）——義尹（兵部大輔 法名道環）
    - 賴章（次郎三郎法名道璨丹波仁木從四下兵部大輔）——義夏
    - 義長（次郎四郎越後守伊勢仁木右京太夫）——滿長
    - 賴勝（彈正少弼 五郎）——義貫
  - 義有（伯耆守）
  - 義基（太郎三郎）
  - 義伴（三郎）——義昭

太平記系圖

太平記評判在名類例鈔

一巻

北嶺 比叡山　三井寺 近江　大津 近江
山門 同　山本　法勝寺 京
横川 同　南都 大和　西園寺 同
梨本　宇治 山城　妙法院
葛葉 攝津與河內　勢多 近江　二階堂
長崎　吉田 京　日野 京
錦織　六波羅 同　安野
土岐 美濃　高倉 同　狩野
多治見　小串　鎌倉 相摸
小野　佐々木　小笠原
秋田城 陸奥　鎮西 九州　伊藤 又伊東
伊達 陸奥　足助 參河　衣摺
齋藤

二巻

比叡山 山城　東大寺 大和　天龍川 遠江
鷲峰山 同　興福寺 同　大井川 相摸
赤山 同　仁和寺 山城　菊川
石山 近江　醍醐寺 同　名取川 陸奥
鏡山 同　淨土寺　絹川 近江
森山 同　法華寺 播磨　十津川 大和又戸津
春日山 大和　安居院 京　古津 山城又木津
高野山 紀伊　黑谷 山門　戸津 近江
富士山 駿河　八王寺 同　八劔 尾張
奧津 駿河　小夜中山 遠江　小礒 相摸
小漄木 尾張　木村　足柄山 相摸
足利　仰木 近江　住吉 攝津
宇都山 駿河　宗禰野　眞野
大礒 相摸　津守 住吉　嵯峨 山城
波多野　長井　笠置 同
老蘇森 近江之老曾　平井　假粧坂 鎌倉 又粧坂
井出濱 同　白井 近江　相坂 近江又會坂
千里濱 紀伊　醒井 同又覺井　坂本 西坂本山城 東坂本近江

濱名　遠江
清見潟　駿河
鳴海潟　近江尾張乍抄
不破　近江美濃乍抄
唐崎　同
三穗崎　駿河又三尾
硫黃島　薩摩
島田　駿河
熱田　尾張
堅田　近江
池田宿　遠江
敦賀　越前
目賀多
秦

番馬　近江
馬淵
河東
諏訪　信濃
常葉
三宮林　山門
藤枝　駿河
工藤
後藤
結城
和束　山城
田子浦　駿河
佐々目　佐介
紀

松本　近江
下松　山城又降松
篠原　近江
栢原　同
神原　駿河又蒲原
浮島原　同
豐原　越前
葛原岡　鎌倉
志賀　近江
雜賀
和仁　近江
本間
伊庭　又伊場
比叡辻

三卷

金剛山　河内
三浦
木津川　山城又古津川

金澤
光明山　山城
平山

般若寺　南都
普恩寺
平等院　宇治

石川　河内
小早川
大河原
有王山　山城
内山　大和
長沼
蒲原　駿河
赤坂山　河内
高志
隅田
櫻山　備後
南部　陸奥
相馬　同
江馬
入江　駿河
多賀　近江
深須　山城
那須　那波

小見山　備中
寒河
大河内
猶原　大和
梶原
志貴山　大和
岩崎
赤橋
猪俣
一ノ谷　攝津
櫻田
吐田　大和
和田　河内又備前
鹽田
武田
糸田
田村
國村

小山
横山
大佛
長澤　丹波
久下　同
志賀良木
岩城　陸奥
高橋
陶山　備中
一宮　備後　伊豫
水谷
糟谷
澁谷
熊谷
井手　山城
松井　同
藤戸　備前
近藤

葛西　名越　椎名　荒尾　楠木　宇津宮

二村　市野邊　佐野 佐竹　土肥　印具 又件具　東條 河内

氏家　毛利　梨間　土屋　橘

四卷

平安城 山城　八幡山 同　大山 伯耆　田兒　詫間 讃岐　杉坂 美作　兵庫 攝津　福原 同　須磨 同　千葉

最勝寺　院庄 美作　大山田 但馬　佐羅山 美作　舟坂山 備前播磨境　吹上 兒島又紀伊在　尾上 播磨　高砂 同　明石 同　三石 備前

府島　兒島 備前又小島　小田 又織田　印南野 攝津　今宿 播磨　有井　見尾港 出雲又三尾湊　港川 兵庫　白川 京又奥州在　早河尻 相摸

久米 美作　畑 土佐　河越 武藏

五卷

天王寺 攝津　木寺　吉野 大和又芳野　小原 紀伊又嵯峨在　竹原 同　中津川 同　阿瀬川 同　湯淺 同　矢田　平賀　城

安善寶塔 吉野愛染　榎島 相摸又江島　玉津島 紀伊　槙野　熊野 紀伊　戸野 同　那知 同　藤代 同又藤白　切目 紀伊　北條 伊豆　村上

和歌 紀伊　由良港 同　玉置 同又玉木　鹿瀬 同　芋瀬 同　野長瀬 同　蕪坂 同　片岡　岡本　東間庄 伊勢　赤松 播磨

六卷

生駒山 河内　箱根山 伊豆又箱根　山里 播磨　奈良 大和

東寺 京　勸修寺　六角堂 京　草堂 同

千田　一部 陸奥　渡部 攝津又渡邊　神崎 同

秋篠（アキシノ） 同
清水（キヨミヅ） 京
賀茂（カモ） 京又鴨（カモ）
北野（キタノ） 同
平野（ヒラノ） 同
太秦（ウヅマサ） 山城
小栗栖（ヲグルス） 山城
阿曾（アソ） 肥後又阿蘇
安保（アフ）

四塚（ヨツヽカ） 同
作道（ツクリミチ） 同
宇佐美（ウサミ）
佐用（サヨ） 播磨
苔縄（コケナハ） 同
古宇津（コウツ） 攝津又宇都
志城津（シキヅ） 攝津
難波（ナニハ） 同
安東（アントウ）、又安藤（アントウ）

尾崎（ヲザキ） 攝津（セツツ）
河崎（カハサキ） 同
河野（カハノ） 伊豫
吉河（キツカハ） 播磨
淡河（アイカハ）
長江（ナガエ）
葦名（アシナ）
人見（ヒトミ） 武藏
杜松（ハシラマツ） 同

七巻

金峯山（キンプザン） 吉野
千波港（チブリノミナト） 隱岐
名和港（ナワノミナト） 伯耆（ハウキ）
天川（テンノカハ） 吉野
菜摘川（ナツミカハ） 同
中吉（ナカギリ） 備前
三吉（ミヨシ） 備中
摩耶（マヤ） 攝津

金持（カナヂ）
熊山（クマヤマ） 備前
淺山（アサヤマ）
葛城（カツラギ） 河內
宇多津（ウタヅ） 大和
河村（カハムラ） 備中
三角（ミスミ） 石見
江田（エタ） 備中

千劔破（チハヤ） 河內又千葉
富士名（フジナ）
勝手（カツテ） 吉野
梨原（ナシガハラ） 播磨
宇多津（ウタヅ） 讃岐又歌津（ウタヅ）
內郡（ウチノコホリ） 大和
三持（ミツモチ） 攝津
江見（エミ） 美作（ミマサカ）

江口（エクチ） 同
新見（ニミ） 備中午抄
星岡（ホシガヲカ） 伊豫（イヨ）
鹽冶（アンヤ） 出雲又鹽谷（アンヤ）
加治（カヂ） 備前
知間（チマ） 備前午覽
廣澤（ヒロサハ） 備後
澤（サハ） 石見

小坂（コサカ） 同
藤井（フヂヰ） 備前
船田（フナダ）
眞壁（マカベ） 伊豫備中
得能（トクノウ） 伊豫
大宮（オホミヤ） 備前
今木（イマキ） 同今張讃岐
宮（ミヤ） 備後（ビンゴ）又安藝（アキ）

新田（ニツタ） 上野（カフヅケ）
和氣（ワケ） 備前（ビゼン）
船上（フナノウヘ） 伯耆（ハウキ）
菅家（カンケ） 美作
芳賀（ハガ） 同
成合（ナリアヒ） 備中
射越（イノコシ） 備前
庄（シヤウ）

八巻

大嶽（オホタケ） 山門
小鹽（ヲシホ） 山城
秋山（アキヤマ） 同名字
中山（ナカヤマ）
萩野（ハギノ） 丹波（タンバ）
田中（タナカ）
富田（トミタ）
西福寺（サイフクシ） 山城
峯堂（ミネノドウ） 同

大舍人（オホトネリ） 京
小寺（コテラ） 播磨
園城寺（ヲンジヤウシ） 三井
法勝寺（ホウシヤウシ） 京
下山（シモヤマ）
山崎（ヤマサキ） 攝津
富樫（トガシ）
西岡（ニシノヲカ） 同又郊
藥師寺（ヤクシテラ）

大原野（オホハラノ） 西山
小屋野（コヤノ） 攝津
宇野（ウノ）
法輪（ホウリン） 嵯峨
淨住寺（ジヤウヂウジ） 山城
高山寺（カウセンジ） 丹波
善峯（ヨシミネ） 山城
竹田（タケダ） 山城
松田（マツダ）

松尾　山城
稗田　丹波又薭田
眞島
河島　山城
二尊院　嵯峨
羅城門　東寺又羅精門
伏見　山城
古塔下　同
桂川　同
八木　播磨
衣笠　山城
向日明神　同
神樂岡　京
物集女　山城
久我縄手　山城又暖
求塚　攝津
肥塚　播磨
妻鹿　同

谷堂　山城
眞如堂　京
原田
川尾
島津
梅津　山城
小幡　同
葉室　同
桂里　山城
八瀬　同
鳥羽　同
神祇官　京
神樂池　丹波又神池
赤井　山城
久々知　攝津
酒部　同
得平
原藤　乍抄

寺戸　山城
眞木　河内
蓮華王院　山城
川原林　攝津
武庫川　同
狐河　同
古川　山城
淀　同
八幡林　攝津
瀬川　攝津
藪里　山城
神澤
萬石大路　同
岩藏　山城
足立
追分　同尾宅
紀　賀茂又河合
鷹取

上月　同
殖月　同
佐治　丹波
名和
丹

有元
福光
飽間
兒玉

頓宮　トングウ
篠村　丹波
千種
林

九巻

伊吹山　近江又美濃
鴨川　山城又賀茂川
細川
今川
四十九院　近江
高
鞍馬　山城
鈴鹿　伊勢
山内　丹波
平塚
三島　伊豆
針　京

伊佐
土肥杉山
片山
大江山　丹泣
荒川
高境
苦集滅道　山城鈔
木曾　信濃
仁木
志宇知　丹波又須知
滿王野　ミツワノ乍抄　マチノ乍抄
新野

禪林寺　京
長光寺　近江武作寺ノ事也
白毫院
大高
高雄　山城
愛智川　近江
愛多義　同又安宅
本庄　丹波
平庄　同
小屋木
唐橋　京
櫛橋

摺針(スリハリ) 近江　波賀野(ハカノ)　位田(インデン)
皆吉(ミナキチ)　波々伯部(ハウカベ)　毎田(マイデン)
吉井(ヨシイ)　吉良(キラ)　武部(タケベ)
余田(ヨタ)　石井(イシイ)　石塔(イシトウ)
近部(コンベ)　黒田(クロダ)　酒井(サカイ)
御器所(ゴキソ)　岡田(ヲカダ)　竹井(タケイ)
別所(ベッショ)　廣田(ヒロタ) 又弘田　下條(シモデウ) ゲデウ
寄藤(ヨリフヂ)　藤田(フヂタ)　藤里(フヂサト)
池守(イケモリ)　進藤(シントウ)　葦田(アシダ) 丹波
西郡(ニシコリ)　上杉(ウヘスギ)　半田(ハンダ)
海老名(エビナ)　浦上(ウラカミ)　宮崎(ミヤサキ)
佐海(サミ)　眞上(マカミ)　中布利(ナカブリ)
奴可(ヌカ) 攝津　疋壇(ヒキダ) 又引他(ヒキタ)　設樂(シダラ)
恕借屋(ヌカリヤ)　花房(ハナブサ)　岩切(イハキリ)
關屋(セキヤ)　秋月(アキツキ) 筑前　壹岐(イキ)
鹽屋(シホヤ) 又鹽谷作鈔

十巻

御山(ヲヤマ) 伊豆　極樂寺(ゴクラクジ) 鎌倉　洲崎(スサキ) 鎌倉

上田山(ウヘタヤマ) 越後　圓覺寺(ヱンカクジ) 同　稻瀨川(イナセガハ)
稻村崎(イナムラサキ) 鎌倉　鳥山(トリヤマ)　崇壽寺(ソシユシ) 同
利根川(トネカハ) 上野又戸[illegible]川　山名(ヤマナ)　東勝寺(トウセウシ) 同
入間川(イルマカハ) 武藏　坂上(サカノウヘ)　五大院(ゴダイヰン)
羽川(ハネカハ)　巨福呂坂(コフクロサカ) 鎌倉　天狗堂(テングダウ) 鎌倉
久米川(クメカハ)　十間坂(ジッケンザカ) 同　塔辻(トウノツヂ) 同
下河邊(シモカウベ)　扇子谷(アフギガヤツ) 同　分陪(ブンバイ) 同
由井濱(ユイノハマ) 鎌倉　葛西谷(カサイガヤツ) 鎌倉　堀金(ホリカネ) 鎌倉
堀口(ホリクチ)　長濱(ナガハマ)　大藏谷(ヲホクラノヤツ) 同
大館(ヲホダチ)　大井田(ヲホイタ)　大多和(ヲホタワ)
大島(ヲホシマ)　小手差原(コテサシハラ) 武藏　小町口(コマチクチ) 鎌倉
苅田(カツタ)　豐島(トシマ) 攝津　若宮小路(ワカミヤコウヂ) 同
世良田(セラタ)　津張(ツハリ) 越後　生品明神(イクシナノミヤウジン)
額田(ヌカタ)　片瀨(カタセ) 鎌倉　切通(キリトホシ) 鎌倉
沼田庄(ヌマタノシヤウ) 上野　腰越(コシコヘ) 同　笠懸野(カサカケノ) 作鈔 新田邊也
黒沼(クロヌマ)　江戸(エド) 武藏　腋屋(ワキヤ)
村岡(ムラヲカ)　桃井(モヽイ)　岩松(イハマツ)
矢部(ヤブ)　一ノ井(イ)　篠塚(シノツカ)

栗生
新開
鹽飽
左藤
藤澤
横
黑見
甘名宇

十一卷

比叡山　山城
金剛山　河内
島津
菊池　肥後
赤關　長門
福嚴　兵庫
二階堂
阿彌陀峯　京
松浦　肥前
大野郡　越前
宇都宮
笠置　山城
南都　大和
江馬

延暦寺　山城
金剛持
書寫山　播磨
法華山　同
赤松　播磨
筑紫
二塚　越中
阿曾
八幡　山城
大伴
六波羅　京
新田　上野
船田
吉野　大和又芳野

放生津　越中ハウヅ午鈔
東寺　京
般若　大和
平泉　越前
玉島山　筑前
朝山
柳浦
五大院
大佛
宇治　山城
小貳　又新小貳筑前
足利　上野
船上　伯耆
立田　大和又龍田

淡河　アフカフ午鈔
櫛田
筒渡　越前
長崎　同
名越
佐々木
紀
清

千劒破　河内又千葉屋
鹽冶　周防阿波淡路在
鳴渡　又鳴戸
長沼
牛原　越前
佐介　午賢
楠　河内
安室郷　播磨午賢

千種
鎌倉　相摸
結城
長岡
博多　筑前
土居　伊豫
得能　同

十二卷

比良嶽　近江又比良社
四明山　山門
高野山　紀伊或河内
飯盛山　河内又伊山
神路山　伊勢
大内山　京
山本
立烏帽子峰　伊豫
志貴　大和又信貴

西寺　京
法勝　同
安樂　筑前
硫黄島　薩摩
神泉苑　京又神泉園
太宰府　筑前
二階堂谷　鎌倉
北野　京
佐々目

熱田　尾張
絲田
小田　又織田
御裳濯川　伊勢
鴨川　京又賀茂河
白川　京
赤橋　伊豫
三浦
佐用庄　播磨

規矩 豐前又企救　伊藤 又伊東　湯淺
名和 又那和　加藤

大内裏

○東　左宣陽門　上東門　日花門
陽明門　陰明門　上西門　月花門
待賢門　紫宸殿　照陽舍　梨壺
郁芳門　清涼殿　淑景舍　桐壺
○南　温明殿　飛香舍　藤壺
美福門　常寧殿　凝花舍　梅坪
朱雀門　貞觀殿　襲芳舍　雷鳴坪
皇嘉門　大極殿　蒼龍樓　萩戸
○西　小安殿　白虎樓　瀧口戸
談天門　神嘉殿　清暑堂　陣座
藻壁門　武德殿　豐樂院　鳥曹司
殷富門　八神殿　中和院　兵衞陣
○北　弘徽殿　眞言院
安嘉門　校書殿　朝堂院
偉鑒門　御匣殿　鴻臚館

達智門　弓場殿　羅城門
○縫殿

○京師九陌名 南北三十八町

一條　正親町　土御門　鷹司
近衞　勘解由小路　中御門　春日
大炊御門　冷泉　二條　押小路
三條坊門　姉小路　三條　六角
四條坊門　錦小路　四條　綾小路
五條坊門　高辻　五條　樋口
六條坊門　楊梅　六條　佐女牛
七條坊門　北小路　七條　鹽小路
八條坊門　梅小路　八條　針小路
信乃小路　唐橋　九條

○竪 東西十八町以大内爲中央但東京分也

西朱雀　坊城　壬生　櫛笥
大宮　猪熊　堀川　油小路
西洞院　町　室町　烏丸
東洞院　高倉　萬里小路　富小路

十三卷

男山 八幡
春日山 大和
相模川
細河
大嵩
小山
岸 加賀
岩藏 山城
倉滿
高
藥師坂 京
長澤 丹波
片瀨 相模
腰越 同
瓜生 加賀
深町 同
諏方 信濃又諏訪

石清水 八幡
仁和寺 京
北山 京
箱根山 伊豆又箱根
澁河
中院 同
竹林院 京
野尻 越中
木間
高橋
矢橋 三河又矢矧
十間坂
富田 出雲
吉良
工藤
葦名
清久

利根川 上野又戸禰川
仁木
西園寺 京
大聖寺 加賀
佐夜中山 遠江
江尻
入江 駿河
水飲峠 伊豆
高倉 京
橋本 遠江
長井
吉田 京
淵邊
井口
上木 加賀
敷地 同

十四卷

大藏谷 鎌倉播磨
大館
大島
大渡 山城淀
橘小島 宇治
寶寺 山崎又財寺
鳥羽 山城
玉
矢島 讃岐又八島
伊岐洲社 近江
伊豆府
十禪師 山門
高梨
高津
熊谷 安藝
石動山 能登
山上 山名

大井城
大内 周防
大智院
薩埵山
橘
槇島 宇治
建長寺 鎌倉
畠山
矢部 因幡
伊木津志
宇多津 讃岐
戸津 近江
高田
高坂
峯堂 山城
石堂
山崎 攝津

大井田
大江山 丹波
大田
平等院 宇治
遠山 美濃
鳥山
兒島 備前又小島
吉備津宮 備前備中備後
淺山
福山 備中
陶山 同
高山 同
高松 讃岐
熊山 備前
供御瀨 近江
芋洗瀨 同
山川

小坂(コサカ)　備中
小幡(ヲバタ)　因幡
相坂(アフサカ)　近江又會坂
天龍川(テンリウカハ)　遠江
四宮川原(シノミヤカハラ)　山城
浮島原(ウキシマガハラ)
杉原(スギハラ)
佐井(サイ)
波々伯部(ハウカベ)　丹波
芥川(アクタカハ)　攝津
河野(カハノ)　伊豫
三石城(ミツイシ)　備前
今川(イマガハ)
野木(ヤギ)
青木(アホキ)
內藤(ナイトウ)　備前丹波
藤井(フヂイ)
酒井(サカイ)

小國(ヲクニ)
愛智川(エチカハ)　近江
相撲辻(スマフカツジ)　山城
坂東(バントウ)　讃岐
木瀨川(キセカハ)
桂川(カツラカハ)　嵯峨
荒川(アラカハ)
佐野原(サノハラ)
波止土濃(ハシドノ)　山門
河村(カハムラ)　備中
河波(カハナミ)
三善(ミヨシ)　備後
今井(イマイ)
赤井(アカイ)　山城
一井(イチイ)
藤田(フヂタ)
金谷(カナヤ)
比叡辻(ヘイツヂ)　近江

小笠原(ヲカサハラ)　甲斐
愛曾(アソ)
勅使川原(テシカハラ)
坂西(バンサイ)　讃岐
厚東(コウトウ)
上杉(ウヘスギ)
佐竹(サタケ)
市川(イチカハ)　備中
波多野(ハタノ)　伯耆越中
河內(カハウチ)　越前名字
羽川(ハネカハ)
狩野(カノ)
南部(ナンブ)　奥州
勢多(セタ)　近江
一條(イチデフ)
藤(フヂ)
額田(スカタ)
世良田(セラダ)

碓井(ウスイ)　丹波
筒井(ツヽイ)　大和
田井(タイ)
江田(エタ)　備後
武田(タケタ)
鷲田(サギタ)　讃岐
普門(フモン)　越中
難波(ナンバ)
篠塚(シノツカ)　上野
加治(カヂ)
土岐(トキ)　美濃
土肥(トヒ)
竹下(タケノシタ)
饗庭(アイバ)　又相庭(アイバ)　相場(アイバ)
栗生(クリウ)
綿打(ワタウチ)
葦堀(アシホリ)
堀口(ホリクチ)

黑田宿(クロタノシユク)
岩松(イハマツ)
田中(タナカ)
櫻井(サクライ)　攝津
桃井(モヽノイ)
鷺坂(サギサカ)
籠澤(コサハ)
中澤(ナカサハ)　越中在
長澤(ナカサハ)　丹波
弘澤(ヒロサハ)　備後
土屋(ツチヤ)
仁科(ニシナ)
和氣(ワゲ)　備中
香西(カウザイ)　讃岐
詫間(タクマ)　同
風間(カザマ)
富樫(トガシ)　加賀
名張(ナハリ)　同

園田(ソノタ)
松田(マツダ)
志賀(シカ)　近江
須賀(スカ)
那須(ナス)　下野又備中
井上(イノウヘ)　越中乍鈔
村上(ムラカミ)
中村(ナカムラ)
長濱(ナカハマ)
洲俣(スマタ)　美濃
久下(クゲ)　丹波
脇屋(ワキヤ)
細屋(ホソヤ)
落合(ヲチアイ)
成合(ナリアイ)
里見(サトミ)　乍賢
見付(ミツケ)
手越(テゴシ)　駿河

猿子(マシコ)
引他(ヒキタ)
安保(アホ) 又阿保
堤(ツツミ)

十五巻

華頂山(クヘチヤウサン) 山城
中靈山(ナカリヤウゼン) 同
三草山(ミクサヤマ) 丹波
熊野山(クマノサン)
山科(ヤマシナ) 山城
鞍馬(クラマ) 同
嵯峨(サガ) 同
如意越(ニヨイゴエ) 山門
龍花越(リウゲゴエ) 同
神樂岡(カグラヲカ) 山城
松尾(マツヲ) 同
下松(サガリマツ) 山城又降松(サガリマツ)
小原(ヲハラ) 山城

海老名(エビナ)
眞壁(マカベ) 伊豫備中
安庶(アソ)
池(イケ)
華山院(クワサンノイン) 京
園城寺(ヲンシヤウジ) 近江
三井寺(ミヰテラ) 同
無動寺(ムドウジ) 同
觀音寺(クワンヲンジ) 同
雙林寺(サウリンジ) 京
眞如堂(シンニヨタウ) 同
蓮臺野(レンタイノ) 京
佐野(サノ) 下野
神崎(カンザキ) 攝津
松本(マツモト) 近江
將軍塚(シヤウグンヅカ) 山城
小清水(コシミヅ) 攝津

千葉(チバ)
由良(ユラ)
宮(ミヤ) 備後安藝
庄(シヤウ) 備中
久我畷(クガナハテ) 山城 久我縄手
寺戸(テラド)
獄門
葉室(ハムロ) 山城
八瀬(ヤセ) 同
籔里(ヤブサト) 同
芋洗(イモアライ) 同又一口(イモアライ)乍柞
車大路(クルマオホヂ)
出雲寺(イツモデ) 同
豐島(テシマ) 攝津
松崎(マツガサキ) 山城
唐崎(カラサキ) 近江
糺森(タヾスノモリ) 山城又河合(タヾズ)

大津(ヲホツ) 近江
梅津(ムメヅ) 山城
尾宅宿(ヲヒワケ) 同西山在 又追分
打出宿(ウツデノシユク) 近江
和介(ワニ) 同
西宮(ニシノミヤ) 攝津
曾我(ソガ) 相模又蘇我(ソガ)
淺井那(アサイナ) 又朝夷那(アサイナ)
亘理(ワタリ)
杉本(スギモト)

十六巻

大山(ヲホヤマ)
大江田(ヲホエダ)
小早川(コバヤカハ)
山田(ヤマダ)
神宮寺(シングウジ)
杉山(スギヤマ)
福林寺(フクリンジ) 備前

靜原(ヒツハラ) 山城又浮原乍抄
福原(フクハラ) 攝津
兵庫(ヒヤウゴ) 同
湊河(ミナトガハ) 同
北白河(キタシラカハ) 京
堅田(カタタ) 同
曾地(ソチ) 丹波
伊達(ダテ) 陸奥
信夫(シノブ) 近江
伴(バン)
大石(ヲホイシ)
合田(アヒタ)
小寺(コテラ) 播磨
内山(ウチヤマ) 肥後
神瀬(カミカセ) 伊勢又神風
土肥(トヒ)
福岡(フクヲカ) 備前

鷺森(サギノモリ) 近江
上賀茂(カミカモ) 京中賀茂 下賀茂
鹿谷(シヽガタニ) 山城
篠村(シノムラ) 丹波
北畠(キタバタケ)
志那(シナ) 近江
栗田口(アハタグチ)
吉江(ヨシエ)
長船(ヲサフネ) 備前
畑(ハタ)
大宮(ヲホミヤ) 備前
小杵山(ヲツキヤマ) 肥前乍抄
小山田(ヲヤマダ)
内川(ウチカハ) 肥後
神田(カンダ) 肥前
杉坂(スギサカ) 備前
多田(タダ) 攝津

多地部(タチベ) 備中
多々良濱(タタラハマ) 筑前
豐浦(トヨラ)
飽浦(アクラ) 備前
三津澤(ミツサハ)
燈爐堂(トウロタウ) 兵庫
二萬郷(ニマノガウ) 備中
阿蘇(アソ) 肥後
藤原(フヂハラ)
八代(ヤツシロ) 肥後
今木(イマキ) 備前
水木(ミツキ) 筑前
木曾(キソ) 信濃(シナノ)
甲斐河(カヒガハ) 備前
賀古河(カコカハ) 播磨
瀨河(セカハ)
西川尻(ニシカハシリ) 備前

室山(ムロヤマ) 播磨
勢山(セヤマ) 備中
舟坂山(フナサカヤマ) 備前
奈義能山(ナギノセ) 美作
白旗峯(シラハタミネ) 播磨
和田御崎(ヘタミサキ) 兵庫
岡崎(ヲカザキ)
阿彌陀宿(アミタカシク) 播磨
草壁(クサカベ) 備中
清原(キヨハラ)
梨原(ナシハラ) 備前
原(ハラ)
荻野(テキノ)
上野(ウヘノ) 須磨(スマ)
吹上(フキアゲ) 備前又紀伊
氷上(ヒカミ)
一宮(イツキウ) 備前備中 備後

菩提寺(ボダイジ) 美濃
高山寺(カウザンジ) 丹波
藥師寺(ヤクシジ)
三寶院(サンボウヰン)
白石(シライシ)
淺原峠(アサハラガタウゲ) 備中
阿佐原(アサハラ)
鹿松岡(シヽノマツヲカ) 攝津乍抄
八木岡(ヤギヲカ)
名草郡(ナクサコホリ) 紀伊
相馬郡(サウマノコホリ) 奥州(ヲウシユウ)
春日部(カスカベ) 備中
紺部(コウベ) 兵庫
經島(キヤウノシマ) 同
繪島(エシマ) 淡路(アハヂ)
嚴島(イツクシマ) 安藝 又伊都岐島(イツクシマ)
一色(イツシキ)

新見(ニイミ) 備中
江見(エミ) 美作
宇禰(ウネ)
菅家(カンガ) 美作
石橋 備前
板倉(イタクラ) 備前
畔籠(アゼコモリ) アゼクラ乍抄
守屋(モリヤ)
南(ナン)
秋月(アキツキ) 筑前
香椎(カシイ) 同

中西(ナカニシ)
江美(エミ)
生田森(イクタノモリ) 攝津
求塚(モトメツカ) 同
鞆(トモ) 備後
尾道(ヲノミチ)
早良(サウラ)
安陪(アベ)
文屋(ブンヤ)
宗像(ムナカタ) 筑前又棟堅(ムナカタ)
唐皮(カラカハ) 備前

頓宮(トングウ) ハヤミ〇抄
宇佐美(ウサミ)
弘戶(ヒロト) 同
石戶(イシト) 乍抄
鵯越(ヒヨドリゴヘ) 兵庫
射越(イノコシ) 乍抄
坂越(サコシ) 播磨シヤクシ
南波(ナンバ) 同クグ又名和
蓮池(ハスイケ) 攝津
得平(トクラ) 乍賢
斑鳩宿(イカルガシユク) 播磨乍抄 (イルカノシユク)

十七卷

船岡山(フナヲカヤマ) 山城
嵐山(アラシヤマ) 同
關山(セキサン) 山門
杣山(ソマヤマ) 越前
小栗栖(ヲグルス) 山城
深山寺(ミヤマテラ) 越前

天王寺(テンワウジ) 攝津
泉涌寺(センユジ) 京
淨土寺(ジヤウトジ)
生源寺(シヤウゲンジ) 山門
白山(シラヤマ) 加賀
賀島(カシマ) 攝津

鹽津(シホツ) 越前
海津(カイツ) 同
金崎(カネガサキ) 同
小濱(ヲハマ) 若狹(ワカサ)
白鳥(シラトリ) 山城
加茂(カモ) 攝津

櫻山 備後
河尻 山城
四王院 山門
四郎谷 同
大嶽 同近江
愛洲 伊勢
木津 山城
篠峯 山門
水飲 山城
葛葉 河內
眞木 同
仰木 近江
蕪木 越前
逸見
鯖江 同
七里半 同
今庄 越前
紫野 山城

楞嚴院 山門
山城脇 山城
横川 山門
修學院 山城
大宮 同
愛智 近江乍抄
童堂 山門
篠原 近江
醍醐 山城
高尾 同
栂尾 同
早尾 山門
長坂 同
雲母坂 同
梨間 山城
阿間 阿波又安間
今路 山城又新道
野路 近江

河島
四十九院 近江
四明巓 山城
湯川 紀伊
大講堂 山門
木目峠 越前
池田
文殊樓 山門
日吉社 同
氣比社 越前
神祇官 京
敦賀 越前
見曲 同
鯖並 同
村雲
今熊野 京
志宇知 丹波又須知
野中

志知 阿波
江戸 武藏
綿貫
兒玉
猪隈 京
宇殿 攝津
豐原 越前
唐櫃越 山城
釼 越前
匹壇 又引他

內野 京
片野 河內
禁野 同
三日原 攝津 又應反原乍抄
丹
針 同
芋生 又芋毛
唐橋 京
音無瀧 山門

市野邊 山城
箸塚 同
右近馬場 京
三石 山門車坂下
宇治田原 山城
倶梨迦羅 越前 又栗殼谷
荒血
穴生 近江
信樂

十八卷

武庫山 攝津
三尾 同上
新善光寺 ○前
火打城 同
那多城 加賀
湯尾峠 越前
飽和社 同

武島 淡路
三輪 大和
新道 越前
禪林寺 京
小野寺
天野
根來 紀伊

三寺山 越前 又深山寺
帆山 越前
吉水 吉野
御手洗河 加賀
櫛川 越前
牲川 紀伊 又贄河乍賢
恩地 同

桑原 同　一ノ谷 攝津　貴志 同
宅良 同　大物 同尼崎　土佐畑
深草 京嵯峨奥　鳴戸 阿波又鳴渡　有井
賀名生 大和　齋藤　秦

十九巻

靈山 陸奥　國分寺 越前　白川關 奥州
德山 美濃　妙法寺 同　富士川 駿河
下山　杉下　入間川 武藏
足柄山 相模　足羽 越前　藤川
藤戸 備前　三峯 越前　安部野 攝津
黑地河 近江　般若坂 大和奈良　中野
吉川 播磨　赤坂 美濃　青野原
河内 越前　河口 越前　多治比
長森　武藤　坂上 田村丸
粟飯原　眞柄 同　大鹽 越前
大虫　大平　津葉
北村 越前　織田 越前又小田　垂井 美濃
高木 同　和田　部井

細呂木 加賀越前境　東條 播磨河内　鹿草 又カクサ
丹生 丹波　伊自良　芳賀 美作
越生 乍抄武藏　根尾 美濃　阿宇賀
葛西 同　志貴渡 同　自貴 乍抄

二十巻

松山　燈明寺 越前　今湊 加賀
松倉城 越中　往生院 越前嵯峨　女良湊 伊豆又目羅湊乍抄
黑丸城 越前　黑龍明神 乍抄越前　大湊 伊勢
石丸城 同　阿多賀 加賀又安宅　安野津 同
安居 越前　勝虎城　篠原
禰津　波羅密 越前　中條
淺津 越前又淺生水乍抄　春近 同　春日
氏家 越中　藤島 同　金子
江守 越前　由居濱 鎌倉

廿一巻

東山 京　建仁寺 京　光堂 建仁寺
西山 同　西岡 山城又西郊　西方寺

藏王堂(ザフウダウ) 吉野
宮腰(ミヤコシ) 加賀
宇津宮(ウツノミヤ) 又宇都宮(ツノ)
藥師寺(ヤクシジ) 京名字
青龍寺(シヤウリウジ)
居山(イヤマ) 越前
安居(ヘコ) 同
松浦(マツラ) 肥前
鶴澤(ツルサハ) 越前
神崎(カンサキ) 攝津
金谷(カナヤ)
小鹽山(ヲシホヤマ) 京播磨三七
小林(コバヤシ)
山名(ヤマナ) 遠江
山本(ヤマモト) 紀伊
大田(ヲホタ) 上野
大舘(ヲホタチ)
江田(エダ)

華頂山(クワチヤウザン) 同
愛宕山(アタゴサン) 山城
筑波山(ツクバヤマ) 常陸(ヒタチ)
禰津(ネヅ)
青襲(アホノイ)
財寺(タカラテラ) 山崎又寶寺(タカラテラ)
櫻山(サクラヤマ) 備後
鳥山(トリヤマ)
神路山(カミヂヤマ) 伊勢
長崎(ナガサキ) 越前
金津(カナツ) 越前
小國(ヲクニ) 越前
橋本(ハシモト) 河内遠江
山崎(ヤマサキ) 攝津
大嶽(ヲホタケ)
大富(ヲホトミ) 備前
大平(ヲホヒラ)
江守(エモリ) 越前

法勝寺(ホツセウジ) 京
醍醐寺(ダイゴジ) 山城
筑紫(ツクシ) 九州
陰山(カゲヤマ) 播磨(ハリマ)
高志濱(タカシノハマ)
安濃浦(アコキガウラ) 伊勢(イセ)
國分寺(コクブンジ) 近江
寺戸(テラド) 山城
神泉苑(シンセンエン) 京
金峯山(キンブセン) 吉野
岡崎(ヲカサキ) 京
小守澤(ヲモリサハ) 又龍
山邊郡(ヤマノベコホリ)
山鹿(ヤマカ)
大宮(ヲホミヤ) 山門
大野那(ヲホノナ) 越前
荒神峯(クワウジンミネ) 越前
江戸(エト) 武藏

佐々布山(サヽフヤマ) 出雲
内郡(ウチノコホリ) 大和又宇知郡
額田(ヌカタ)
熱田(アツタ) 尾張
堅田(カタタ) 近江
和田(ワタ) 河内河内 越前
上木(ウヘキ) 乍抄
御裳濯川(ミモスソカハ) 伊勢播磨
田中(タナカ) 同
黒丸(クロマル) 越前
足羽(アスハ) 同乍抄
吉野(ヨシノ) 大和又芳野
賀久川(カクカハ) 播磨
河合(カハイ) 越前
河口(カハクチ) 同上
兒島(コシマ) 備前又小島
波々伯部(ハウカベ) 丹波
堀口(ホリクチ)

佐々木(サヽキ)
木目峠(キノメトウゲ) 越前
郡上(グンジヤウ) 越前
深町(フカマチ) 同
瓜生(ウリフ) 同
湊川(ミナトガハ) 兵庫
上杉(ウヘスギ)
御着(ゴチヤク)
白川(シラカハ) 京
細川(ホソカハ)
羽川(ハネカハ)
吉水(ヨシミツ) 吉野
加藤(カトウ)
河北(カハキタ) 同上
草野(クサノ) 肥前
波多野(ハタノ)
菊池(キクチ) 肥後
池(イケ) 越前

新田(ニツタ) 上野
木村(キムラ)
今木(イマキ) 備前
眞木(マキ) 河内
楠木(クスノキ)
湊城(ミナトシヤウ) 越前
織田(ヲダ) 越前又小田
屋杉(ヤスギ) 出雲
脇屋(ワキヤ)
笙岩屋(シヤウノイハヤ)
羽床(ハユカ)
吉川(ヨシカハ) 播磨
蓮臺野(レンダイノ) 京
河島(カハシマ) 同上
北畠(キタバタケ)
波羅密(ハラミツ) 越前
鹿草(カクサ)
八幡(ヤハタ) 山城名字

八王子　大和
三輪
桃井
有井
井城　遠江
阿間　淡路
風間　越前
穴間
土岐　美濃
福塚　河内
富樫　加賀
堤

廿二巻

高野山　紀伊
大可島　備後
小笠原
豐原　越前名字
畠山

石淸水　八幡
三角　石見
難波　攝津
芳賀
井遠　紀伊
結城
鹽冶　出雲又鹽谷
齋藤
土肥
根尾　美濃
合　石見
香下　越前乍抄
高市
伊地山　越前
小豆島　讃岐　又也字津島
武島　淡路
千町原　伊豫

一井
赤星
里見
志知　淡路
敦賀　越前
淺倉　又同朝倉
湯淺　紀伊
由良　同又上野名字
土居　伊豫
得能　同
畑　越前
平泉寺　越前
小松寺　備後
杣山　越前
武市　伊豫
千里濱　紀伊

陰島　乍抄
今張浦　伊豫
飽浦
粟津　近江
河田　伊豫
坂東　同
新宮　熊野
波津崎　尾張
淺海
合田
多田
三木　伊豫
宅間　又謝磨
篠塚　上野
伴

廿三巻

今比叡　山門

比良峯　近江
鎌倉　相模
鷹巣
日吉　伊豫
河江　伊豫
坂西　同
田邊　熊野
二宮　伊豫
宮　備後
鞆　備後
尾道　同
世田　伊豫
兒玉
藤
大森　伊勢

梶原
杉原
熊野　紀伊
河野　伊豫
逢阪　近江又會坂又相坂
香西
田上　近江
富田
安藝
勢多　近江
三宅　備前
長尾
岡部　備後
橘
宇多津　讃岐又歌津

宇佐（ウサ）
壇浦（ダンノウラ） 豊前（ブゼン）
樋口（ヒグチ） 京
伏見（フシミ） 山城
二階堂（ニカイドウ）
大内野（ヲホウチノ） 山城
北野（キタノ） 京

廿四卷

北嶺（ホクレイ） 山門
吉良（キラ）
南都（ナント） 大和
天龍寺（テンリウジ） 嵯峨（サガ）
萬壽寺（マンジユウジ） 京
眞如寺（シンニヨジ）
達磨寺（ダルマジ） 大和
興福寺（コウブクジ） 同
白山（シラヤマ） 加賀
澁川（シブカハ）
東寺（トウジ） 京
最勝寺（サイセウジ） 同
横川（ヨカハ） 山門
神祇官（シンギクワン） 山城
延暦寺（エンリヤクジ） 山門
比叡山（ヒエイサン） 同
立田（タツタ） 大和（ヤマト）又龍田（タツタ）
武田（タケダ）
園田（ソノタ） 又苑田（ソノタ）
匹田（ヒキタ） 又匹壇（ヒキタ）又引他（ヒキタ）
率川（イサカハ） 山城
木津川（コツカハ） 同
白川（シラカハ） 京
山科（ヤマシナ） 山城
紙屋川（カミヤカハ）
御津濱（ミツノハマ） 攝津
尊勝寺（ソンセウジ） 京
法華寺（ホツケジ） 同
吉田（ヨシダ） 京名字
南禪寺（ナンゼンジ） 京
龜山（カメヤマ） 山城
秋山（アキヤマ） 同名字
内山（ウチヤマ） 大和
片岡山（カタヲカヤマ） 同
書寫山（シヨシヤサン） 播磨
木幡（コハタ） 山城又小幡
東大寺（トウダイジ） 同
東福寺（トウフクジ） 京
多武峯（タフノミネ） 大和
横岳（ヨコダケ） 筑前
三浦（ミウラ）
島津（シマヅ）

祇園（キヲン） 京
賀茂（カモ） 同又鴨（カモ）又奈頁
安部（アベ）
富永（トミナガ）
清久
松室（マツノムロ） 南都
廣瀬（ヒロセ） 山城又大和午抄
寺尾（テラヲ）
海老名（エビナ）
大原野（ヲホハラノ） 山城
大内（ヲホウチ）
平野（ヒラノ） 京
宇治（ウヂ） 山城
土屋（ツチヤ）
戸次（ヘツギ）
設樂（シタラ）
狩野（カリノ）
星野（ホシノ）
臨川寺（リンセンジ） 同
安國寺（アンコクジ） 同
春日（カスガ）
梅宮（ムメノミヤ） 山城
逸見（ヘンミ）
嘉元寺（カゲンジ）
高山寺（カウゼンジ） 丹波
寺岡（テラヲカ）
大佛殿（タイブツデン） 南都
大講堂（タイカウドウ） 山門
平安城（ヘイアンジヤウ） 京
平（タイラ）
宇佐美（ウサミ）
日光（ニツクワウ）
福原（フクハラ） 兵庫
中原（ナカハラ）
香勾（カウワ）
須賀（スガ）
飛鳥井（アスカイ）
安保（アブ）
崇福寺（ソウフクジ）
清見寺（セイケンジ） 駿河
松尾（マツノヲ） 山城
水谷（ミヅタニ）
下松（サガリマツ） 山城又降松（サガリマツ）
大平寺（タイヘイジ）
大高（ダイカウ）
大井川（ヲホイカハ） 山城
平賀（ヒラカ）
加地（カチ）
伴野（トモノ）
日野（ヒノ）
町野（マチノ）
中條（チウデウ）
粟飯原（アイハラ）
藤原（フヂハラ）

荻野　丹波
社本　河内午抄
森木　山城
當麻　山城又大和
城
千秋
仁木
佐竹
都筑
森
當宗　河内午抄
壬生　京
秦
劍　加賀
伊藤　伊勢
足利　上野
曾我
葛葉　河内
千葉
源

二十五卷

香久山　大和
葛城　大和
初瀨　同
神戶　伊勢
住吉　攝津
西宮　同
日前宮　紀伊
瓜生野　攝津又遠里小野
安部野　同
宇多野　大和
天王寺　攝津
淨土寺
藤井寺　河内
仁和寺　京
施藥院　醫師
和氣　同
丹波　同
譽田　河内
安田
村田
渡部　攝津
石津　和泉
奈良崎
國崎　伊勢
淸地鄉　出雲スカニノサト午抄
簸川上　同
手摩島　同
馬淵
明智　又明地
河村

武藏野
小松原　播磨
原
嵯峨　山城
目賀田
松田
栗生田　午抄
菅家
六角
赤松　播磨
犬飼

二十六卷

大山　伯耆
大渡　山城
飯盛山　河内
河津
如意輪堂
上山
多田院　攝津
伊駒
勝手宮　吉野
長
赤井
櫻井　攝津
堺浦　和泉攝津
大草
河邊
東勝寺　武藏
宇都山　駿河又宇津山
今出川　京
尾上　攝津
小早川
平田
黑田
加納　大和加名生
秋篠　大和
南部
村雲　京一條堀川
大塚
河勾
東條　播磨
宇津木
今川
往生院　河内加賀
石川　河内
天川
長井
畠田
野田
居野
枝橋　山城

鹿島 攝津　廣戸　反橋 京
水無瀬 同　雑賀　高橋
古見　厚東　四條 河内
有元　青木　青砥
關地　縣　須々木
羽束使　淀 山城

二十七卷

羽黒山 出羽　手向山 大和近江　清水寺
法成寺 京　今津 近江　荒血山 加賀越前
荒川　勸修寺 同　鹽津 越前
大津 京　大友 又大伴　有乳山 越前
三寳院 山城　甲斐津 近江又海津　還山 同又歸山
轉法輪 山城　藤島 近江　將軍塚 京
長講堂 同　竹生島 同　柳辻 同
石堂　石橋　河越 武藏
河尻 肥後　火打城 越前　粟田口 京
淺生水 越前　八代 同　八木
苑田　和久　鎭西 筑紫

勝田　飯尾　高坂
志賀 近江　宍戸　舟坂 備前
杉坂 美作

二十八卷

大宰 筑前　山田 山田　皷崎 石見
大庭 又大場　神田 肥前　十津川 大和又戸津川
青杉 石見　杉田　江河
三隅城 石見又三角城　柴田　村上
城所　供御瀬 近江　井上
福岡 備前　鹿子木　熊井
越智 大和　後藤　那珂
小原　佐和　奴可
丸屋 石見　甕

二十九卷

天台山 山門　岩屋寺 丹波　浦上
中靈山 京　十林寺 攝津　遠江
中山　光明寺 播磨　吉江
關山 近江　白旗城 播磨　石崎 備後

三十卷

大類	大島	富田 上野
竹下 相模	下賀 近江	世良田 同

三十一卷

天台山 山門	天野 河内	天王寺 攝津
守堂口 八幡	八幡山 山城	法性寺 京
園殿口 同	荒坂山 同	青龍寺 又青襲
瀧口	薩埵山 駿河	淨法寺
堀口	堀	栽田山
東寺 京	東黨	東條 河内
葛山	葛葉 河内	三大寺 近江
三ノ宮	三浦	三田
横山	四十九院 近江	四宮
四方田	畠山	二階堂
二ノ宮	宮 備後	平山
一ノ宮	一ノ井	一條
國府津山 相模	石堂	石濱
高橋 山城又名字八幡也	高山	高倉
高田	高坂	高島 近江

高梨	小山	小畑
小笠原	小手差原 武藏	小礒
小幡山 山城	小林	小田 又織田
小俣	小早川	村山
村岡	島田	木津川 山城又古津川
下山	下條	豐田
豐島	今河	山下
山名 遠江	山田 近江	山本 紀伊
細川	武藏野	武田
久米川	熊野 紀伊	熊谷 安藝
新田 上野	入間川 武藏	繁野 又滋野
和田	白川 京	白洲
白鹽	狩野	堅田 近江
神奈川 又狩野河	神家	荻野
見田	湯川 紀伊	湯淺 紀伊
友野	世良田 上野又瀨良田	羽川
矢野 伊勢	矢早瀨 近江	松田 備前
河越	河村 相模	矢倉

江田
鎌倉　相模
吉野　大和
宍戸
關戸　武藏
長生　又辰尾
長沼
蓮沼
大森
大平
大井田
赤坂　美濃
戸島　又豐島
鹿島　常陸
兒島　備前條島
宇津宮
洞峠　山城
佐羅科　山城八幡ノ邊

江戸　武藏
田中
吉良　京又
吉峯　眞峯乍抄
關
長井
鞍馬　山城
大江田
大田
大御堂　鎌倉
大津　近江
赤松
巨福呂坂　鎌倉
假粧坂　同
兒玉
宇津木
佐々木
笛吹峠

淺羽
唐戸
垂井　美濃
櫻井
長峯　•
長尾
桃井
大高
大磯
大館
大島　攝州又名字
赤井　山城
放生津　越中
禰津　又根津
宇治　山城
津張　越前
佐竹
南木

南部
將軍塚　京
坂西
板垣
仁科
上杉
土肥
得能　伊豫
玉縄　又出縄乍抄
籠澤　又小守
屋澤
賀名生　大和又賀納
葦名
海老名
中金　乍抄ナカネ
酒間
饗庭　又秋庭

南西
西木
如法經塚　八幡
篠塚　上野
由良
藤崎
土屋
若宮小路　鎌倉
澁谷
扇谷　鎌倉
古尾谷
住吉　津州又墨吉
勅使河原
梶原
中條
酒勾
本間

南
西黨
眞木　河内
仁木
鶴岳　鎌倉
土岐　美濃
土屋　伊豫
脇屋
蒲屋
干屋
古屋　又降屋
千葉
岩松
中村
饗庭　又相庭又饗場
伊祇代　近江又伊木守乍抄
勝代

北畠(キタハタケ)
結城(ユウキ)
曾我(ソガ) 相模
拾辻(トヲノツヂ) 鎌倉
足利(アシカヾ)
淀(ヨト) 山城

風間(カサマ)
五十嵐(イカラシ)
安保(アホ) 又阿保
私市(キサイチ) 河内
逸見(ヘンミ)
那須(ナス)

加治(カヂ) 又加地
丹黨(タンノトウ)
瓶尾(カメシリ)
猪俣(イノマタ)
楠(クスノキ)
瓦葺(カハラブキ)

三十二巻

比叡山(ヒエノサン) 山城(ヤマシロ)
金剛山(コンガウセン) 河内(カハチ)
吉岡(ヨシヲカ)
竹田(タケタ) 山城
長門(ナガト)
匹田(ヒキタ) 又匹壇(ヒキタ)
雙林寺(ソウリンシ) 京
東福寺(トウフクジ) 同
藤山(フヂヤマ)
園寺(ソノテラ) 京
法城寺(ホウシヤウジ) 京

天龍寺(テンリウジ) 嵯峨
仁和寺(ニンワジ) 同
嵐山(アラシヤマ) 山城
竹中(タケナカ)
長樂寺(チヤウラクジ) 京
秋山(アキヤマ)
富田(トダ)
東勝寺(トウセウジ) 鎌倉
藤波(フヂナミ)
沼田(ヌマタ)
法勝寺(ホツセウジ) 京

寺田(テラダ)
吉田(ヨシダ)
清水寺(セイスイジ)
長山(ナガヤマ)
長崎(ナガサキ) 越前
秋間(アキマ)
崎山(サキヤマ)
櫻田(サクラダ)
西福寺(サイフクジ) 京
鈴鹿山(スヾカヤマ) 伊勢
野田(ノダ)

戸藏(トガクシ) 信濃
多賀言(タガヤ)
大野(ヲホノ)
大渡(ヲホワタリ) 山城
北斗堂(ホクトトウ)
伊庭(イハ) 近江
薦田(コモタ)
粟生田(アハウタ)
平井(ヒライ)
生稻(イナタ)
眞野(マノ) 近江
峯堂(ミネノダウ) 山城
高尾(タカヲ) 同又高雄(タカヲ)
梅津(ムメツ) 山城
鹽津(シホツ) 近江
一谷(ノタニ) 攝津
會見郡(エミノコホリ) 伯耆(ハウキ)
岩群(イハクリ) 河内

慶愛寺(ケイアイジ) 同
大江山(ヲホエヤマ) 丹波
大嚔(ヲホシテ)
北靈山(キタリヤウセン) 京
北白川(キタシラカワ) 京
山崎(ヤマサキ) 攝津
四明峯(シメイノミネ) 山門
粟飯原(アイハラ)
三井寺(ミイデラ) 近江
六波羅(ハラ) 京
田村(タムラ)
今村(イマムラ)
高安(タカヤス) 河内
伏見(フシミ) 山城
鹽見(エンミ) シチミ
海津(カイツ) 近江
新谷(ニイノタニ)
岩常谷(イハツネダニ) 因幡

多田(タタ) 攝津
大庭(ヲホバ) ヲホニハ
大原(ヲホハラ)
北條(ホウデウ)
伊田(イデン)
淨住寺(ジヤウヂウジ) 京
武作寺 近江又武佐寺(ムサテラ)
平安城(ヘイアンジヤウ) 山城
生田森(イクタノモリ) 攝津
眞如堂(シンニヨタウ) 京
嵯峨 山城
今積(イマツミ) 若狹(ワカサ)
谷堂(タニノトウ) 山城
鹿谷(シヽノタニ) 同
江見(エミ)
海東(カイトウ)
箕浦(ミノウラ) 近江又蓑浦(ミノウラ)
敷美(シキミ)

宮城郡 奥州
佐美
宇野
紫野 京
神南 攝津
勢多 近江
筑紫
河野邊
渡邊 攝津
杉原 播磨
坂東
松本 同
橋本
櫛橋
福間 因幡
蒲生 近江
須々木
曾禰

佐野 丹波 上野
佐和
宇多河 又歌河
横川 山門
日野 同
波多野
源原
鳥羽
足羽 乍抄アシバ
酒邊 同
原
矢部
儀俄
手塚
福依
首藤 又須藤
近藤
後藤

佐治
宇多郡 大和
茨宮
神樂岡 山城
鴨川 山城又賀茂川
川曲 近江
河勾
石原
足立
坂本 近江
馬淵
澤
細江
淺沼
福塚
諏防 信濃又諏訪
毛利
貴志 紀伊

土師
梶井 京
藤
橘
小國
桂里 山城
裏築地 京

内藤
久下 丹波
和仁 近江
蜂屋
火作
鵤宿 播磨又斑鳩宿又伊留賀宿
又河鹿宿
魚角 又五百住又魚墨

内海
久世
倭久
陶器
栖

三十三卷

太宰府 筑前
大井川 嵯峨
南禪寺 京
北山 京
西塔 山門
市河
思出河 丹波
高辻 京
山賀
松浦 肥前

大光明寺 伏見
大村
南瀨口
建仁寺 京
谷山
永繩山
高良山 乍抄タカラ
高崎 豐後
山井
寶萬嶽 筑前

大友 又大伴
衣笠山 京
桂川 同
西河
戒光寺 京
等持院 同
高木
河尾 肥後
氣比宮 越前
二ノ宮 越中

古浦(コウラ)
一色(イツシキ)
三俣(ミツマタ)
島津(シマヅ)
井原(イハラ) 丹波
小倉(ヲグラ) 嵯峨
八田(ヤタ) ヤツタ
黒田(クロダ)
草壁(クサカベ)
葉室(ハムロ) 京
苦桃(ニガモヽ)
稲佐(イナサ)
味坂庄(アヂサカノシヤウ)
柳坂(ヤナギサカ)
敦賀(ツルガ) 越前
相馬(サウマ)
赤星(アカホシ)

白峯(シロミネ) 讃岐
堺浦(サカヒノウラ) 攝津
三原(ミハラ) 越前
朝倉(アサクラ) 又淺倉(アサクラ)
八島(ヤシマ) 讃岐又矢島(ヤシマ)又屋島(ヤシマ)
小牧(コマキ)
阿蘇(アソ) 肥後又阿曾(アソ)
秋月(アキツキ) 筑前
幡田(ハタ)
合田(アフタ)
肥田(ヒダ) コイタ
佐志(サシ)
庄(シヤウ)
齋所(セイシヨ)
賀屋(ガヤ)
加藤(カトウ)
伊藤(イトウ)

白石(シロイシ)
三村(ミムラ)
三栗屋(ミクリヤ)
朝井(アサイ)
小貳(セウニ) 太宰(ダサイ)
菊池(キクチ) 肥後
草野(クサノ) 肥前
六笠(ムカサ) 日向(ヒウカ)
國分(コクブ)
稲毛庄(イナケノシヤウ)
田平(タヒラ)
竹澤(タケサハ)
泓(ミナマタ)
溝口(ミナマタ)
矢口渡(ヤノクチノワタリ)
杜渡(モリノワタリ) エツリノワタリ

里見(サトミ)
見參岡(ケンサンノヲカ) ミサチカ
坊城(バウジヤウ) 京
城(ジヤウ)
窪(クボ)
宗(ソウ) 午抄

藤木(フヂノキ)
鹿子木(カノネキ)
木綿(コハタ)
絹脇(キヌワキ)
綾部(アヤベ)

行吉(ユキヨシ)
牛糞(ウシノクサ) ウシノクソ午抄
土持(ツチモチ)
詑間(タクマ)
名和(ナワ) 又那和(ナワ)

三十四卷

銀嵩(カネガダケ) 大和紀伊
高根澤(タカネサハ)
富澤(トミサハ)
天川(テンノカハ)
十津川(トツカハ) 同又戸津川(トツカハ)
紀伊川 紀伊
爪生野(ウリウノ)
津守(ツモリ) 住吉(スミヨシ)
戸山(トヤマ)
甲山(カブトヤマ)
石川(イシカハ) 河内

高山寺(カウセンジ) 播磨
今峯(イマミネ)
最初峯(サイシヨカミネ) 紀伊
龍泉峯(リウセンノミネ) 河内
龍門山(レウモンサン) 紀伊
如佐山(ワサヤマ) 同
粉川(コカハ)
眞木野(マキノ)
俣野(マタノ)
野上(ノカミ) 紀伊
山東(サントウ) 同

高見(タカミ)
觀心寺(クハンシンジ) 河内
圓覺寺(エンカクジ) 鎌倉
龍泉寺(リウセンジ) 河内
安部野(アベノ) 攝津
遠里野(トホサトノ) 同
津々山(ツヽヤマ) 河内
阿瀬河(アゼカハ) 紀伊又阿弖川(ニヱカハ)
贄河(ニヱカハ) 同又牲川
野原(ノハラ)
山内(ヤマノウチ)

粟田口 京
磐田 河内
田宮
八尾 河内
鳴尾 攝津
葛原岡 鎌倉
宇知郡 大和又内郡
小里
志宇津
佐羅階 又佐良階
本庄
木所
當木 河内マサキ乍抄
舟木
丹下 河内乍抄
恩地 同紀伊

河邊 河内
尼崎 攝津
田邊 紀伊
西宮 攝津
三宮林 山門
四宮川原 京
小原
奈良 大和
芳賀
遊佐
古折 乍抄
鹽冶 又鹽谷
猿子
鹿窪
物部
水速 河内 又水走城

伊駒 河内又生駒
千盤屋 同又千葉屋
藤田
工藤
厚東
茂呂
小宇津
志賀 近江
佐々良 河内又佐々
平石 河内
越智 大和
明智
六角
日吉
難波
禿 紀伊

三十五卷

春日山 紀伊
天滿山
葛木山
笙岩屋 吉野
吹屋
唐櫃越 山城
花苑 同
久成縄手 同
鳴瀧 山城
根來 紀伊
兵庫 攝津
矢矧 又矢矯
二見浦 伊勢
萩原
目賀田
東池田
玉櫛
並岡 山城

寺戸 山城
六角堂 京
新宮 熊野
神樂尾
塔尾
揉尾 乍抄
長野 伊勢
星野
北野 京
上野 伊賀
大原 同
市原
青砥
國見 河内乍抄
小河 尾張
滑河
草木
名張

廣澤 山城
番豆崎 尾張
楢崎
鹿瀬
芋瀬
蕪坂
長坂 山城
鈴村
西郷
宇野部
服部 伊賀
二部
青地
物集女 山城又鴫目
飯守岡
玉筒 伊勢
景石
河内 伊賀

淺香　馬杉　佐脇 乍抄

三十六卷

神路山 伊勢　神保　神崎
五十鈴川 伊勢　大山 播磨　大見丈城 播磨
中津川 攝津　高倉山 同　大野城 美作
唐河 播磨又金川ト乍抄　法華山 同　篠向城
篠峯　眞島 播磨　竹山 播磨
小原城 美作　田原 伊豆　小濱 若狹
外山　倉懸城 播磨　雪湊 阿波
杣山 越前　杣 播磨　香下城 攝津
香推 筑前　鳴戸 阿波　松山
般若寺 大和　廣戸　飯守 筑前早良部在
飯田　菩提寺 美作　紀井 豐前又城井乍抄
湯山 攝津　修禪寺 伊豆　白江
星祭嶽　妙見 美作　堀江 攝津
石堂峰 美作　今熊野 京又新熊野　逆谷 丹波
椿峠 越前　吉野 播磨　瓜生
天神森 攝津　林野　有元

頓宮　佐用 播磨　縣
富樫 加賀　菅家 同　下松浦 同肥前
千本 京　千草　名木 同又奈我
宗像 義筑前又棟堅　博多 筑前

三十七卷

高雄 山城　忍常寺 攝津　大内 周防
金山 伊豆　金澤 同上　野路 近江
三津 伊豆又三戸　秋山 島羽　篠原 同
中島 攝津　苦集滅道 山城　武作寺 同
神保

三十八卷

御服峰 越中　福林寺 備前　浦上 備前
箱根山 伊豆又箱根　淨光寺 攝津　飽浦 同
陶山　院庄 美作　竹生島 近江
山路 攝津　宮内 備後　藤澤
岡城　三國渡 攝津　三吉 備後
三澤 越中　長倉 越中　長者原 筑前
宇多津 讃岐又歌津　德倉 又得倉乍抄　粟津原 近江

石津(イシヅ)
龍口(タツクチ)
井口(イノクチ) 越中
岩野(イハノ)
小屋野(コヤノ) 攝津
野木(ヤギ)
眞壁(マカベ) 備中
仁萬城(ニマンガシヤウ) 備前
伊賀(イカ) 乍抄
木村(キムラ)
湯本(ユモト)
西長尾(ニシナガヲ) 讃岐

篠村(シノムラ) 丹波
森(モリ)
新見(ニミ) 備中
河原林(カハラハヤシ) 攝津
湊河(ミナトカハ) 同
野尻(ノジリ) 越中
赤木(アカギ)
鈴木(スズキ)
和久(ワク) 丹波
多・田部(タダベ)
鹿草(カクサ)

柹原(カキハラ)
富松(トマツ) 攝津
新開(シンカイ)
安良(ヤスラ)
稻生(イナフ)
芥河(アクタカハ) 攝津
株瀬(クイゼ) 同
伊丹(イタミ) 同
木曾(キソ) 信濃
多治目(タヂメ)
下田(シモダ)

三十九巻

高野山(カウヤサン) 紀伊
稻荷山(イナリヤマ) 山城
山國(ヤマクニ) 丹波又山訓(クニ)
栗屋城(クリヤガシヤウ)
度會(ワタラヘ) 伊勢

光嚴院(クワウゴンヰン) 伏見
大原野 山城西山
若林野(ワカハヤシノ)
朝比奈(アサイナ) 又淺夷那(アサイナ)
荒木田(アラキダ)

御津濱(ミツノハマ) 攝津
雲出川(クモテカハ) 伊勢乍抄
河口庄(カハクチノシヤウ) 越前 川江庄(エノシヤウ)乍抄
岡本(ヲカモト)
本戸(モト)、

番馬(バンバ) 近江
門司(モンジ) 豐前
赤間(アカマ) 長門

板鼻(イタハナ) 上野
金井(カナイ)

五島(ゴタウ) 肥前
小鹽(ヲシホ) 山城

四十巻

延暦寺(エンリヤクジ) 山門
東大寺(トウダイジ) 南都
興福寺(コウフクジ) 同
園城寺(ヲンジヤウジ) 三井寺
萬壽寺(マンシユジ) 京
眞如寺(シンニヨジ) 同
光明峰寺(クワウミヤウジ)

長講堂(チヤウカウダウ) 京
安居院(アグヰ) 同
竹内(タケノウチ) 京
手搔(テカイ) 南都又手蓋(テカイ)
八代(ヤツシロ) 肥後
和氣(ワケ) 醫家
丹波(タンバ) 同

藁科(ワラシナ)
彦部(ヒコベ)
横地(ヨコチ)
濱名(ハマナ)
小串(ヲグシ)
本郷(ホンガウ)
安東(アントウ) 又安藤(アンドウ)

南山小譜

全

南山小譜

序

みよしのゝよしのゝ山に宮しきまして世をしろしめしし三代のみかどの事のあとは何やくれとかきしるしたるふみ多かれどはやくよりことのまがひもすくなからぬをちかき世となりてぞくさ〴〵考へ辨へたる書はいできにける然はあれど其みよ〳〵にまめなる心をつくしつかへまつれりし臣たちのいへのついで人々のちすぢを詳にかき集めたる書はいまだあらざりけりわがとも環山樓のあるじそこをしもうれたみ思ひて書よみ考ふるいとまのひま〳〵さるすぢの傳へ〳〵をかき集めおかれたるにをのれ又見およびたることゞもをかきそへてかの三代のみかどの皇子たち諸王たちはさるものにて名ぐはしきよしのゝ宮に事とり給ひし大まへつ公たちより國々に賊うちさためしものゝふの八十とものをにいたるまで親子うまごとそのついで知られたるかぎりは系もてつりつゝおなじ族のすぢ〳〵をそのついで知られたる限りその氏々にわかちつどへてかく一とぢの書にものして南山小譜と名づけつゝあなかしこ思ひをとしたることも考へもらせることもいと多かるべきをそは後々に見出もし世の物しり人たちのさとしをも得たらんまに〳〵さらにものしてまた一とぢにもかきあらはしてんとす

赤心居士

南山小譜目錄

後醍醐天皇
御諱尊治
後宇多帝第二皇子
御母談天門院藤原忠子
正應元年十一月二日降誕
正安四年六月十六日立親王
嘉元々年十二月二十日元服　同日叙三品
同二年三月七日任太宰帥
德治二年三月十二日遷中務卿
同三年九年十九日立皇太子
文保二年二月二十六日受禪
同年三月二十九日行即位禮
同年十一月二十二日大嘗會
元弘元年八月二十四日夜出皇居幸南都後遷御笠置
同二年三月七日幸隱岐島
同三年閏二月二十四日密出隱岐島幸伯耆國舟上山
同年六月四日還幸京都
同月五日入御二條富小路殿
延元々年十二月二十一日夜密出花山院以三神器遷幸吉野
同四年八月十五日讓位於皇太子
同月十六日崩壽五十二
同年十月二十三日葬于吉野郡搭尾山陵北向

一ノ宮　　　　河端

尊良（タカナガ）親王
母贈從三位藤原爲子權大納言爲世卿女
應長元年　月　日生
正中二年　月　日元服
二品　中務卿
元弘元年八月從帝入笠置遷入河内國東條城
同年十月二日自出就囚
同二年三月八日被配土佐國畑
同三年八月歸落
同年九月二十一日叙一品
延元々年十月奉太子入北國
同二年三月六日於越前國金埼城自殺年二十七

世良（トキナガ）親王
母遊義門院一條參議左中將實俊卿女

宮

信濃宮

正和元年　月　日生
嘉暦元年　月　日元服
　二品　上野太守　太宰帥
元徳二年九月十七日薨年十九
建武三年九月十五日贈一品

｜宗良親王（ムネナガ）
母同尊良親王
正和二年　月　日生
正中三年四月爲妙法院性守僧正資法名尊澄
元徳二年十二月十四日叙三品補天台座主
元弘元年八月與弟大塔宮奉三千衆徒應官軍
同二年三月八日被配讃岐國
同三年八月奉四國兵歸落
建武二年三月十六日叙二品還補天台座主
延元々年六月　日叙一品
同二年還俗任中務卿
　改名宗良
正平七年閏二月六日任征東大將軍
天授三年十一月於長谷寺出家
弘和元年十二月撰新葉和歌集奏覽被擬勅撰集
元中二年八月十七日薨于遠江國井伊谷年七十

大塔宮

聖

三號冷湛寺
｜護良親王（モリナガ）
母民部卿局從三位源親子權大納言源師親卿女
正和四年　月　日生
嘉暦元年九月爲梨本承鎭法親王資法名尊雲
同二年十二月六日親王宣下叙三品補天台座主
同三年十二月八日爲大塔門跡
元徳二年三月二十七日叙二品
同年十二月　日辭座主
元弘元年八月與尊澄法親王同志奉山門徒應
官軍
同年入紀伊國十津川還俗
　改名尊邦後改護良
　兵部卿　式部卿
同三年七月二十三日任征夷大將軍
建武元年十月二十二日被幽常磐井殿
同年十一月十五日被配相模國鎌倉
同二年七月二十三日爲足利直義家人淵邊義博
被害年二十八

｜靜尊法親王

護院宮

母同世良親王
聖護院門跡覺助法親王資
始名惠尊又改尊珊後改今名
嘉暦三年正月二十日立親王
同月三十日准三后宣下
元德二年十二月叙三品補三井長吏三山檢校
元弘二年三月被配但馬國
同三年四月奉但馬國兵應官軍
建武二年三月二十六日叙二品

越中宮

｜恒性法親王
母理子內親王龜山帝女
大覺寺性勝法親王資
元弘二年三月九日被配越中國
同三年二月十九日爲名越貞持被害

花園宮

｜滿良親王
母中納言典侍藤親子中納言宗親卿女
元亨三年　月　日生
延元々年入尾張國波豆埼城
同三年入土佐國
興國元年於建仁寺出家

前坊

法名無文元選
同四年渡海入于元國到福州
正平五年歸朝住筑前國博多
石城山後移住遠江國奥山
元中二年創建深奥山方廣寺
同七年閏三月二十二日寂年六十八
｜恒良親王
母新待賢門院藤廉子贈左大臣公廉女
正中元年　月　日生
元弘元年被幽六波羅詠歌
建武元年正月二十三日立皇太子
延元々年十月行啓于北國
同二年三月六日金崎城落七日爲足利高經所擒
入京
同三年二月奉幽于花山院古宮
同年四月一作七月足利直義命粟飯原氏光進毒十二
日薨年十五

將軍宮

｜成良(ナリナガ)親王
母同恒良親王
正中二年　月　日生

醍醐宮　大聖院宮

元弘三年十月八日元服叙四品任上野太守
建武元年十二月補征夷大將軍入東國
延元々年十月足利尊氏私立光明院爲天子立
此親王爲太子
同年十二月二十六日廢太子位
同三年四月（或作七月）二十一日中鴆毒薨年十四

―杲尊法親王
母少納言內侍贈左大臣隆資女
始名尊眞任勸修寺東南院任大僧都
興國　年　月　日親王宣下

―法仁法親王
母大納言三位局從三位爲道卿之女
正中二年　月　日生
建武元年　月　日立親王
名弱良（或作看良）
延元三年十二月二十八日得度
入仁和寺大聖院
法名法仁
正平六年二月二十二日直叙二品補六勝寺撿校
東寺一長者

後村上院　鎭西宮　白川宮

同七年十一月二十五日薨年二十八

―憲良（ノリナガ）親王
後改義良　後村上天皇是也傳見于後村上天皇
條下

―懷良（カネナガ）親王
母同法仁法親王
延元三年七月入東國於伊豆崎遇暴風漂著四國
興國元年三月任征西大將軍移行肥後國八代郡
高田
正平七年十一月叙二品（于時式部卿）
文中三年十二月叙一品
元中五年三月十六日薨于高田年六十
同年　月　日葬于肥後國八代郡宮地村麓山悟
眞寺

―聖助法親王
母少將內侍大藏卿菅原在仲卿女
聖護院靜尊法親王資
三井長吏三山檢校
新熊野別當
後遁世

一乘院宮

―玄圓法親王
母從二位守子左大臣藤實泰公女
一乘院覺實大僧正資
二品　興福寺別當　法務
早世

河內宮

―尊性法親王
母同護良親王
報恩寺尊誓法親王資
住河內國龍泉寺
延元四年　月　日親王宣下
興國二年　月　日叙三品

妙法院宮

―寂惠法親王
母同玄圓法親王
妙法院
建德元年十月　日寂

―皇子
母昭訓門院近衞局
早世

宣政

―懽子內親王
母後京極院藤禧子太政大臣實兼公女

門院

元應元年六月二十六日內親王宣下
同年十月二十八日叙一品
元德二年十二月十九日爲齋宮
同三年正月十二日准三后
元弘元年八月十三日止齋宮
同二年十一月爲光嚴院妻后
同三年正月十七日北朝立爲中宮
建武二年二月二日院號宣政門院
興國元年五月二十九日潛出光嚴上皇宮入保安寺爲尼年二十六

前齋宮

―祥子內親王
母同後村上帝
元弘三年十二月二十八日爲齋宮依兵亂事不遂群行而止
延元元年十月准三后
後入保安寺爲尼

―姚子內親王
母同護良親王
今林尼衆

―欣子內親王

母同尊良親王
後入嵯峨今林爲尼號鷲尼
—瓊子內親王
母同尊良親王
元弘二年　月　日爲尼
今林尼衆號聽尼
—皇女
母同世良親王
今林尼衆
—皇女
母遊義門院左衞督局中納言爲忠卿女
今林尼衆
—皇女
母同尊貞親王
—貞子內親王
母後宇多院權中納言局右大臣藤公泰公女
—皇女
母未詳
鎌倉松岡東慶寺五世住持號用堂和尙
應永三年八月八日巳刻寂

—皇女
母左衞門督局右中將基時朝臣女
—皇女
母民部卿局
爲關白基嗣公室後離別爲尼
—皇女
母贈從一位藤實子左大臣實雄公女
早世
—瑜子內親王
母大納言局大納言藤公敏卿之女
—皇女
母坊門局右大辯淸忠卿女
—幸子內親王
母新室町院珣子內親王後伏見帝之女
—皇女
母同法仁法親王
—皇女
母左馬權頭貞義女
賜吉水院法印宗信生尊壽丸
以上後醍醐天皇皇子皇女也

南朝第二代

後村上天皇

御諱義良（始憲良）

後醍醐天皇第十二皇子

御母新待賢門院藤原廉子

嘉曆三年九月　日降誕

元弘三年十月十日下向陸奥國鎮守府將軍源顯家供奉之

建武元年六月　日立親王（在國）

延元々年正月十四日上洛

同年二月二十六日元服

同日叙三品任陸奥太守

同年三月二十四日下向于任國

同三年二月二十八日歸吉野皇居

同年三月二十日叙二品

同年閏七月二十五日更詔令下向于陸奥國鎮守府將軍源顯信一品入道親房等從之八月二十五日發船九月十一日於伊豆崎逢暴風船漂着伊勢國篠島

同四年三月　日歸吉野皇居

同月四日立皇太子

同年八月十五日受禪

同年十月三日即位

同五年四月二十八日改元興國

同年十一月十七日大嘗會

興國七年十二月八日改元正平

正平三年正月六日出金峰山皇居遷御天川奥穴太後改字賀名生

正平二十三年三月九日讓位

同月十一日崩於河內國觀心寺行宮壽四十一（或云於住吉行宮崩）

同年四月二十日葬于河內國錦部郡檜尾山陵

後龜山院　長慶院

―熙成（ノリナリ）親王

母嘉喜門院藤原勝子福恩寺關白內大臣經家公女

後龜山院是也傳見于下条

―寛成（ヒロナリ）親王

母同後龜山院

正平二十三年三月　日立皇太弟

後進太上天皇號奉稱長慶院居紀伊國玉川里

護性院宮

―惟成親王
母大藏卿局
文中三年正月　日叙三品任太宰帥　後任式部
卿
元中九年十一月　日薙髮
法名梅蔭祐常
―泰成親王
母同後龜山院
正平十五年　月　日　生于住吉三品　太宰帥
建徳二年九月下向于鎮西
元中　年　月　日薨
―説成親王
母新待賢門院冷泉局
天授元年三月　日叙三品任上野太守
後出家法名惠覺
―師成親王
母同惟成親王
天授二年正月　日叙三品任兵部卿
後出家法名惠梵號木阿
應永二十一年九月　日薨于周防國山口

鎮西宮　新宣陽門院　　南朝第

同月　日葬于山口法泉寺
―良成親王
母同説成親王
下向于鎮西菊池武朝伺候之
―憲子内親王
母中宮源顯子一品入道親房卿女
興國四年　月　日生
正平七年正月十四日叙一品
天授四年二月　日院號宣下
新宣陽門院
元中八年六月　日薨于伊勢國司源顯泰卿多氣
山莊年四十八
―良子内親王
母同後龜山院
无品
爲大納言源顯泰卿室
以上後村上帝之皇子之皇女也
後龜山天皇
御諱熙成
後村上帝第一皇子

三代

御母嘉喜門院藏原勝子
正平二年五月十一日降誕
同六年八月　日立親王
同十二年正月二十日立皇太子
同年二月朔日元服
同二十三年三月九日受禪
同二十五年正月二十一日改元建德
或書云七月二十四日改元恐非
建德三年三月二十二日改元文中
或書云十月四日改元据古文書非
文中二年十一月朔日行即位禮
同四年五月二十七日改元天授
天授七年二月十日改元弘和
弘和四年四月二十八日改元々中
元中九年十月南北議和
同年閏十月二日入夜鳳輦入洛
直幸嵯峨大覺寺殿
同月五日讓三種神器於後小松帝
應永元年二月廿三日上尊號
同夜落飾
法諱覺理　灌頂諱金剛心
同二十九年七月十五日崩于小倉寺殿壽七十八
同月十七日葬于北嵯峨福田寺

一宮

—世泰親王（トキヤス）
母從二位藤原致子關白左大臣教基公女
正平十五年十二月　日生
文中元年　月　日元服
一品　太宰帥
天授三年七月十日薨年十八葬如意輪寺

二宮

—師泰親王
母權典侍局中納言藤邦光女
正平十七年　月　日生
建德元年　月　日叙四品
元中九年講和之後隱河內國
應永廿九年密集兵士
同三十年四月廿二日爲畠山入道々端被弑年六十二
法名覺瑜號長德寺

小倉

—良泰親王
一本作顯能公女
母中宮源信子右大臣顯信公女

宮　　宮僧正　　十念寺上人

建德元年八月　日生
天授五年二月　日立皇太子
元中九年南北和睦之時從父帝入大覺寺殿
正長元年七月奔伊勢國據北畠右中將滿雅學兵滿雅戰死威不再振後歸京落飾入嵯峨招慶院

―行悟
母
圓滿院行助法親王資
大僧正　三井長吏　天王寺別當

―尊聖
母
勸修寺興胤僧正資
大僧正
永享四年七月　日寂

―眞阿
母
應永十六年　月　日出家三十六歲
創建十念寺
永享十二年七月二日寂年六十七

―琮頊

西應寺宮

母
出家　十念寺二世上人

―泰子內親王
母同良泰親王
爲關白左大臣冬實公室

以上後龜山帝之皇子皇女也

尊良親王

―守永親王
母後京極院御匣殿右大臣藤公顯公女
延元二年　月　日元服
上野太守
後叙一品
弘和三年六月廿日出家

―良玄
母同守永
一乘院實玄僧都資
爲二條關白良基公猶子入寺大僧正

―女王
母大納言典侍權大納言藤爲世卿女

遠江宮　　宇津峰宮

今林尼衆

世良親王

母

―女王

宗良親王

―興良親王

母狩野介藤貞長女

興國三年　月　日生

正平八年閏二月　日入遠江國秋葉城

同十四年四月被擒入京

天授三年九月十日依病薨于京年三十七

―源朝臣尹良

母井伊介藤原道政女

或云和久左衛門尉敦貞女

正平十九年　月　日生

天授五年　月　日親王宣下

二品　上總太守

兵部卿

元中三年八月八日賜源朝臣姓叙正二位任征東大將軍兼右大將

同月入駿河國

同九年十月南北合體之後留南方謀回復

應永三十一年八月十五日於信乃國浪合山麓大川原驛爲敵被圍自殺年六十一

號大龍寺

葬于栗光寺

―女王

母同尹良

爲三河守平定省室

源尹重

母世良田藏人政義女

元中三年正月日　叙從五位下

幼名良王

後稱中務大輔

永享七年十二月廿九日入尾張國海部郡津島

同十年九月　日卒

號瑞泉寺

良新
母同尹重
津島社務氷室祖

信重
母大橋修理亮平貞元女
幼名神王
嗣外舅大橋三河守信吉家

護良親王

陸良親王
母一品入道源親房卿妹
建武元年二月　日生
正平六年三月擧兵於播磨國赤松則祐從之同八年二月入丹波國高山寺城丹波丹後但馬兵應之
同年　月　日立親王
常陸太守
同十五年四月　日任征夷將軍
同月廿五日俄變心通武家夜燒賀名生皇居
同月廿六日入道關白師基擧兵討之親敗績自殺

後醍院

年廿七

女王
母竹原八郎入道宗規女

某
母不詳
出家　遊行十二代上人

懷良親王

源良宗
母菊池肥後守武光妹
正平十八年　月　日生
始名雅良王
彼改良宗
稱後醍院越後守

良忠
母
稱後醍院伊豆守
以上後醍醐帝之皇孫也

寛成親王

尊聖

眞福寺四世

母
出家入勸修寺
大僧正　安祥寺々務
永享四年七月八日寂
今按尊聖大僧正巳載後龜山帝皇子列而今
亦載于此未知孰是覽者訂焉

—泰成親王

—泰邦王
母中納言局中納言顯時卿女
南北合體之後隱河内國
後出家法名賴瑜
尾張國中島郡大須莊眞福寺任瑜上人資
一本系圖係後村上帝第七皇子非

—說成親王

—圓悟
母楠左馬頭正式女
圓滿院行悟大僧正資
大僧正　三井長吏
嘉吉二年　月　日寂于河内國

妙福院宮

—義有王
母同圓悟
始出家　法名圓胤
圓滿院圓悟大僧正資
後還俗名義有
文安元年八月於河内國八幡城擧兵不利
同三年八月於紀伊國湯淺阿瀨川城又擧兵同
四年十二月廿二日城落自殺
以上後村上帝之皇孫也

—良泰親王

—義仁王
母大納言守房女
後改良仁、彼入道名義息
南北合體之時留于伊勢國
應永三十二年九月入美濃國於可兒崎爲士
岐持益被虜
正長元年十二月　日被害

—教尊
母同義仁

萬壽寺宮

始名泰仁王
正長元年七月父親王奔据伊勢國司北畠滿雅謀立此王爲繼體事不成而滿雅戰死後入勸修寺爲僧法名教尊
勸修寺尊聖大僧正資大僧正　安祥寺々務

—尊義王
母同義仁
永享元年九月入萬壽寺出家
法名空因　號金藏主
後還俗名尊義
嘉吉三年九月廿三日夜亂入土御門殿放火奪神璽
同月廿五日据比枝山戰軍敗於中堂自殺

—尊慶王
母大納言經泰卿女
住大和國吉野
後遁世爲時宗僧

—女王

北山宮　河野宮　市河宮

母同尊慶

—尊秀王
母色川左兵衞尉平盛定女
擁神璽据吉野自稱南方新皇又稱自天大王
長祿元年十二月三日於吉野大河內宮爲赤松黨被害年十八
後葬神野谷金剛寺

—忠義王
母同尊秀
長祿元年十二月三日於河野谷宮爲赤松黨被害年十六
後葬河野谷金剛寺

—尊雅王
母
兄尊秀王薨後代擁神璽
長祿二年八月廿七日夜赤松家人小寺入道性說襲十津川宮王蒙疵逃入于北山高野上高福寺
同月廿八日夜薨于高福寺

号高福院
以上後龜山帝之皇孫也

五辻宮

|守良親王
龜山帝第五皇子
母中納言藤實任女
四品兵部卿　後出家覺靜
潜居近江國伊吹山下
元弘三年近江伊勢國人奉親王据伊吹山下大
平寺城

花町宮

|懷邦親王
延元三年九月御船漂着遠江國入井伊城
三品式部卿世親王男
母
後村上帝御猶子
上野太守

遍智院宮

|聖尊法親王
後二條帝第五皇子
母權大納言局右大臣藤公泰女
二品　東南院
建德元年九月二十七日於法身院

入寂年六十七

土御門宮

|仁譽法親王
式部卿恒明親王男
母永福門院東御方左大臣藤原實泰女
聖護院覺譽法親王資
二品　三山檢校
南北御合體之後入尾張國大須庄北野野眞福
寺爲三世
改名任瑜
應永二十九年七月　日寂

南門跡

|深勝法親王
式部卿恒明親王男
母
始無親王宣下參南山後爲後村上帝御猶子立
親王
二品
南北御合體之後歸依他阿上人爲遊行第十二
世上人
應永七年十月二十四日寂

|晶王

雅明親王曾孫
正三位　彈正尹　治部卿
延元三年六月　日於吉野薨

近衞殿

藤原經忠
關白左大臣家平公男
母家女房
從一位左大臣關白氏長者
延元二年四月五日參南山
左大臣　從一位如故
如故延元四年八月十五日後村上帝受禪詔
爲關白正平六年十二月　日辭
同七年八月十三日薨年五十一
號堀川殿

經家
母花山院右大臣家定公女
正平七年參南山
同年　月　日敍從二位任權大納言
同十三年八月　日任內大臣
同十四年　月　日敍從一位
同十五年　月　日辭
同二十年正月　日關白氏長者
同二十四年二月二日辭
同年三月二十一日薨年三十八
號福恩寺

勝子
母
後龜山帝御母
號嘉喜門院

二條殿

藤原師基
關白太政大臣兼基公二男
母內藏權頭源兼任女
權大納言正二位
延元二年正月參南山
同三年正月　日任內大臣
同四年正月　日敍從一位
同　八月十五日止傳
興國元年九月　日左大臣
正平六年十二月二十八日關白

氏長者
同十一年二月二日辭
同十四年六月十七日出家年六十
號光明臺院
同二十年正月二十二日薨年六十六

—教基
母
延元四年三月十五日從三位
左中將如故
興國二年二月權中納言正三位
同　四年　月　日權大納言
正平二年正二位兼左大將
同　八年七月內大臣
同九年二月五日從一位
同十年三月七日右大臣
同十一年二月二日關白氏長者
同十三年八月左大臣
同二十年正月辭
天授三年七月出家

—教忠

母
興國六年二月權中納言
正平六年正月權大納言從二位
正平十年於南都戰死

—冬實
母
正平十年七月二十二權中納言
同十四年十二月權大納言
同十五年兼左大將
同十七年右大臣于時正二位
同十九年左大臣從一位
同二十四年關白氏長者

一條殿

—藤原內嗣
關白左大臣經通公男
母從一位綸子太政大臣公賢公女
權大納言　正二位
正平十二年二月歸順
更任權大納言從二位
同十七年出家年二十七

北

—源親房

畠

權大納言師重卿男
母入道右少將隆重女
正二位大納言使別當
淳和院奬學院別當
元德二年三月五日從一位
元德二年九月十九日出家
法名覺玄或作宗玄
延元々年十二月四日參南山
正平六年十二月二十八日准三后
同十四年四月十八日薨時年六十七
號天德院台宗覺玄

—顯家
母從一位藤行子
左衞門督　使別當
權中納言從二位
鎭守府大將軍　陸奥大介
延元三年五月二十二日於攝津國安倍野戰死
年二十一
號長興寺道音
贈從一位右大臣

春日　中院　院橋

—顯信
母同
鎭守大將軍陸奥大介
權大納言
右大臣從一位
正平二十四年三月十二日出家
天授六年十月十七日薨
年六十四
號土御門右大臣
葬于大和國宇陁郡福西莊

—顯能
母同
伊勢國司
右大臣從一位　東宮傅
天授六年十二月出家
弘和三年七月二十八日薨
年五十八
號源光院端帝曇宰

—顯雄
母

大納言正二位
天授二年正月八日內大臣
號覺山勝進

土御門

- 顯成 母權中納言資朝卿女
  權大納言正二位右大將
  元中三年二月二十八日薨
  - 親成
- 顯信 土御門入道右大臣
  准后親房二男
  - 信親
  - 守親 陸奥國司
  - 親統 內大臣 從一位
  - 親能
    - 顯能

木造

入道右大臣
准后親房三男

- 顯泰 母野呂上野介隆俊女
  伊勢國司
  權大納言 正二位 右大將
  應永九年十月二十九日薨
  寶樹院弘覺常徹
- 顯俊 母
  正二位
  - 滿泰 左少將 從五下
    應永六年十一月二十九日於界浦討死
  - 滿雅 伊勢國司
    右中將
    永享元年七月二十八日於岩田戰死
    長福寺祐山常滿

大河內

顯雅
從三位　右中將
嘉吉元年出家
海印寺秋芳常桂

顯雄
大納言
准后親房四男

房雄

顯俊
正三位
右大臣顯能公二男

俊通
早世

俊康始俊泰
權大納言　正二位
應永二十七年三月二十六日出家

冷泉

源持房
准后親房公弟
母參議藤忠繼卿女

參議　從二位　右衞門督
元弘元年七月五日出家
正平六年四月十八日薨
年五十
華嚴寺覺空

持定
左少將
元德二年九月世良親王薨時出家法名杲雲

定能――定統

顯統――雅持
內大臣從一位
元中三年正月二十四日薨

顯時
母准后親房公女
權中納言正二位
元中四年二月　日薨

顯光
從三位　左兵衞督

六條　千種

源有忠
權中納言正二位
內大臣有房公男

有光
權中納言　正二位
正平七年歸順後又候北方

忠顯
參議左中將　彈正大弼
從三位
元弘二年三月七日從帝于隱岐
延元々年正月　日出家
同年六月六日於山門討死

有顯
左少將　出家

顯經
權大納言　正二位
天授三年九月四日薨

雅光

中院

源光忠
六條內大臣有房公二男
權大納言　正二位　彈正尹
元德三年二月十八日薨
贈左大臣

實權中納言光顯卿男
權中納言　從三位
應永二十九年正月二十九日薨

親光
權大納言　正二位
正平六年十一月歸降
同十八年十月又歸北方

具光
准大臣　從一位　權大納言

忠雲大塔
大僧正

具忠
參議　左中將　從三位
正平十年　月　日薨

或云正平七年五月十一日於八幡陣討死

─具致

─具氏
權大納言　正二位
元中六年　月　日薨

─源季光
始季忠
贈左大臣光忠公弟
從三位　右大辨
延元四年九月六日於吉野出家

─師光

─源雅行
三位中將師行卿男
參議　右衞門督　從二位
元德二年　月　日出家年四十五

─家房
少將
延元三年六月八幡合戰有功

─源具行

龜谷一條久我庶流

參議雅行卿弟
中納言　從二位　左衞門督
元弘元年九月被執
同二年正月囚于佐々木道譽家六月十九日於
柏原被殺

─家資

─家泰

─家親

─源具秀
具顯朝臣男
左中將　從三位

─忠具

─源具信
內大臣具親公四男
參議左中將　從三位
正平十一年十一月七日薨二十五歲

─源定成
正三位家定卿男
陸奧守
元弘以來致軍忠後遁世
法名阿道

中院

家房―具定
左少將

定平
始名良定
權大納言正二位

定清
右中將　越中守

雅平
建武二年十二月二日於越中國討死

堀川洞院

源具明
權大納言基俊卿孫基親男

藤原公賢
左大臣實泰公男
母從二位季子中納言公雄卿之女
右大臣　東宮傅　從一位
延元二年正月九日參南山
太政大臣
正平十四年四月十五日出家
法名空元
同十五年四月六日薨年七十
號遍照光院

實世
母家女房
權中納言使別當左衞門督
正二位大學頭
延元二年參南山
左大臣從一位東宮傅
正平十三年八月十九日薨年五十一
葬于大和國與喜山
號與喜左大臣

定世
左少將

實夏
母從三位光子光久朝臣女
權中納言　正三位
正平七年歸順五月十一日還幸後留候北京

公行
母權大納言實孝卿女

正平二年七月二十七日出家
早世

冷泉

┃藤公敏
左大臣實泰公二男
權大納言按察使正二位
元弘元年八月二十四日笠置臨幸供奉
同年十月十二日出家年四十
法名宗肇
同二年四月配于下野國

┃實淸
權大納言　正二位
正平十四年八月　日薨

┃慈靜
僧正

┃藤公泰
左大臣實泰公三男
母家女房中務大輔藤兼頼之女
權大納言　正二位
正平六年十二月參南山

右大臣　從一位
同十四年四月十五日出家年五十二法名覺元

賀茂

┃實茂

┃藤實守
左大臣實泰公四男
母從三位康子藤永定女
權中納言　從二位
正平六年十二月參南山
內大臣　從一位　右大將
正平二十三年出奔北方
文中元年四月十一日薨年五十九

┃公信

┃公益

┃實夏
太政大臣公賢公男
北方左大臣

┃公夏
權大納言　正二位　按察使

三條

—藤原實數
文中二年十一月　日薨
內大臣公秀秀公男
權大納言　從一位
正平二十九年　月　日薨

西園寺

—藤原公重
內大臣實衡公二男
內大臣　正二位
正平十七年十二月參南山
右大臣　從一位
正平二十二年　月　日薨年五十一

—實長
權中納言　正三位
應永二十五年六月六日薨

今出川

—藤原實顯
右大臣公顯公男
母菅原在綱朝臣女
參議正三位左中將

—公冬

花山院

—藤原師賢
權大納言正二位左近大將
文中三年　月　日薨
內大臣師信公男
母參議忠繼卿孫女僧惠一女
大納言　正二位　彈正尹
元弘元年九月二十七日出家
法名素貞
同二年九月配于下總國
同年十月二十九日薨年四十六
建武元年贈太政大臣謚文貞公

—信賢
母內藏頭源仲時女
大納言
正平十三年薨

—家賢
母右大臣家定公女
內大臣　右大將　正二位
正平二十一年六月二十三日薨
年六十七　號妙光寺

大炊御門　九條

經賢

長賢
從一位內大臣

長親
右大臣從一位右大將
元中九年出家號耕雲
法名明魏
應永二十九年　月　日薨

僧元要
上人　入唐

藤原信忠
內大臣冬信公男
權中納言　正三位
正平十一年　月　日薨

藤原爲顯
左兵衛督敎顯卿男
左中將

信顯

助定

吉田　中御門　萬里小路

藤原定房
權大納言經長卿男
內大臣　從一位
延元三年正月二十三日薨六十五

宗房
大納言　正二位
天授二年三月　日薨

守房
權大納言　從一位

藤年光任
右中辨光方卿男
權大納言　正二位
正平十二年　月　日薨

經高
權大納言　從二位

藤原宣房
從三位資通卿男
權大納言　從一位
元弘元年被執

堀川

藤房
權中納言　右衞門督　使別當
正二位
元弘二年正月配于常陸
建武元年十月五日入岩倉出家
天授六年三月二十八日薨八十五

季房
參議　右大辨　從三位
元弘元年十月十六日出家
同二年配于常陸
同三年五月二十日於配所被害

仲房
藏人頭左大辨正四位上
正平六年十一月十二日參南山
同月十八日歸北京

藤原光繼
參議光泰卿男
權中納言　從二位　宮內卿
延元三年二月於南都戰死

葉室

光季

光有
權大納言　正二位
後龜山帝第二皇子乳父
弘和三年八月六日薨

藤原光顯
參議光定卿男
參議從三位秋田城介出羽守
延元元年五月二十一日於任國被斬年三十九

光資
出羽守　民部卿　左大辨
權大納言　正二位

四條

藤原隆資
左中將隆實朝臣男
大納言　從一位　使別當
善勝寺長
正平七年五月十一日於八幡陣討死年六十一
同十一年贈左大臣

隆量

左少將　從四位上
元弘元年被殺
隆重
左少將　從四位下
候兵部卿親王討死
隆任
木工頭
隆俊
內大臣　從一位　權大納言
文中二年八月十日於河內國天野陣討死
隆保
參議　從三位　正平八年薨
有資
右少將　伊豫國司
延元三年十二月下向予任國
藤隆敏
大納言隆蔭卿男
左少將　出家
藤隆兼
父未詳　元弘元年被執

二條御子左五條

藤原爲明
權中納言爲藤卿男
參議　從三位
正平六年歸順　後歸北方
藤爲忠
爲藤卿三男
參議正四位下
正平六年歸順
權中納言　正三位
應永六年六月十八日薨六十五
爲邦
左少將　正四位下
正平十一年　月　日卒二十三
藤爲冬
大納言爲世卿
左中將　正四位下
建武二年十一月十二日於竹下戰死
藤爲嗣
參議爲實卿男

阿野

從三位　正平七年歸順

—藤原公廉
左中將公仲朝臣男
左中將正四位下
正平六年贈左大臣

—實廉
左兵衛督　從三位

—季繼
權大納言
正平十年十一月　日薨

—廉子
後村上帝御母
從三位　准后
正平六年十二月二十八日院號宣下新待賢門院
同十三年四月二十八日薨

—實村或作實秋
左中將　正四位下　早世

—實爲

滋野井

內大臣從一位權大納言

—公爲

—藤實勝
參議右中將公尚卿男
右中將　正四位下　參議
正平七年五月十一日於八幡討死

近衛徳大寺庶流

—藤公量
太宰權帥實香卿男
權大納言　正二位　大宰權帥
正平十六年五月十六日薨七十二

—實博

—實材

坊門

—藤清忠
左中將俊輔朝臣男
參議　右大辨　從二位
延元々年三月二十一日薨年五十六

—親忠
民部卿前權中納言　從二位
正平十四年八月　日薨

勸修寺

藤原經方
内大臣經顯公男
權中納言　從三位
正平十七年十二月二十四日奉南山
治部卿　後出家

日野

藤原資朝
權大納言俊光卿男
權中納言　從三位使別當
正中二年五月十日下向于鎌倉
同　年　月　日配于佐渡國
元弘元年五月二十日於配所被斬

朝光──資夏
左兵衞督　右大辨　從三位
權中納言
正年十八年　月　日薨四十五

邦光 幼名阿新（クマワカ）

資茂
右少辨
參議　左大辨　從三位

京極

藤俊基
治部卿種範卿男
藏人右中辨大內記從四位下
正中二年五月十日下向于鎌倉
元弘元年七月十一日再被執
同二年於鎌倉葛原岡被斬

俊業
文章生

俊孝

中御門

藤原宗重
參議左大辨冬定卿男
從三位　左大辨
正平六年十二月歸順後歸北

藤宗兼
冬定卿二男
參議左大辨正四位下
延元々年八月十五日北方朝官
同二年二月十七日爲尊氏被殺年二十七

宗泰

一條
藤原行房
從二位經尹卿男
右京大夫　美乃守
元弘元年被執
同二年三月七日從帝于隱岐
延元二年於越前國金崎自害年四十九

行尹
左少將

中御門
藤原宣明
參議經宣卿男
參議　左大辨　從三位

甘露寺
藤原藤長
權中納言隆長卿男
藏人頭　左大辨　正四位上

法性寺
藤原康長
從三位　親泰卿男
左兵衛督　左中將

九條
藤原光經
春宮權大進定光男
權大納言右衛門督使別當
正二位　民部卿
延元々年出家

園
藤原基隆
從三位基光卿男
右中將

三條
藤原實任
右中將公種朝臣男
民部卿　彈正大弼　文章博士
權中納言　正二位
延元三年十二月三日薨年七十五

唐橋
平經泰
權中納言宗經卿二男
權中納言　正二位
弘和二年八月　日薨

經氏
左馬頭

烏丸

平時經
權中納言宗經卿一男
藏人右中辨左衞門佐
權大納言　從二位
天授四年十二月　日薨

平惟繼
治部卿高兼卿男
太宰權帥　大藏卿文章博士
權中納言　正二位
延元二年三月參南山
興國三年正月廿一日出家
法名宴儀
同四年四月十八日薨年七十八

惟材
藏人少納言

惟長
藏人　右大辨　正四位下

平成輔
權中納言惟輔卿男
治部卿　彈正大弼　藏人頭
參議　正二位
元弘元年九月被執
同二年五月廿二日於伊豆國早川宿被殺

行輔

平惟顯
宮內權大輔兼顯朝臣男

大中臣隆實
祭主隆蔭卿三男
從二位祭主神祇權大副
建武二年正月廿三日薨六十二

隆基
從二位神祇權大副

大中臣隆昌
父祖未詳
祭主

大中臣爲量

紀伊國造

父祖未詳
從四位下
|大中臣清衡或作清胤
父祖未詳
五位
|紀俊文
從五位淑氏男
從三位　紀伊國造
日前宮神主
|親文
從三位　紀伊國造
日前宮神主
|種文
從五位上
|俊長
從五位下　紀伊國造
後於北方從三位被聽昇殿
|紀淑俊

從四位下紀國造淑文二男
從五位下
|津守國夏
正五位下國冬男
後宇多院北面
元德二年任住吉神主
從三位
正平七年二月廿八日正三位
同八年五月十六日薨
|國量
住吉神主　從三位
應永五年十二月於北方從三位
同　九年　月　日薨
|國久
五位
應永三年住吉權神主從四下
|國貴
從五位下
|度會朝棟

村松

度會朝親男
從三位　外宮一禰宜

―度會朝村――朝景
朝棟弟

―朝英
五位

―度會家行
度會有行男
從三位　外宮一禰宜

―盛行――行治
五位　五位

―度會通詮
父祖未詳
五位

―荒木田季長
父祖未詳

葉室

―清原親善
善宗男
左近將監

父祖不見人々

―藤原公長
右大臣　從一位　左大將

―藤原師兼
權大納言　正二位　大學頭
春宮大夫
元中七年二月　日薨

―藤原實興
權大納言　正二位

―藤原長賓
權中納言　從二位

―藤原時長
權中納言　從三位　左大辨

―藤原季修
權大納言

―藤原實秀
權中納言　藏人頭　左中將

―忠成
權中納言

―氏定

權中納言
|━━惟季
中納言
|━━雅賢
中納言
正平七年五月十一日於八幡討死

三條

|━━宗實
權大納言
|藤原實繼或作實次
權大納言　檢非違使別當
|藤原爲宣
權中納言
|藤原仲盛
參議　從三位
文中二年　月　日薨
|藤原有氏
參議　從三位
元中六年十二月五日薨
|藤原維敎
參議　右衛門督　正三位

御子左

元中七年　月　日薨
|━━經淸
藏人　權右中辨
|━━光實
左近中將
|藤原公廣
參議　左中將
|━━時熈
右大辨
|藤原正雄
正三位　左京大夫　左少辨
藏人
|藤原定冬
權中納言　正三位　參議
|━━光守
右中辨　勘解由次官
元弘三年五月諫主上于船上山
|━━淸顯
少納言　右馬權頭
|藤原勝兼

五辻

春宮大夫

—菅原在仲修理大夫淳兼朝臣男
大藏卿　從三位
延元三年九月九日薨年五十四

—菅原在氏宮內卿國高卿男
從四位下　兵部大輔

—菅原爲基
五位

—中原章言
四位

—中原重綱
五位

—三善賴衡
四位

—三善資連
左兵衛尉

—粟田久盛
四位
植櫻樹千株於後醍醐帝山陵之邊

—滋野宗興

五位

—坂上賴隆或作賴澄
五位

—和氣景繁
刑部大輔
延元々年十一月候後醍醐帝于花山院供奉至吉野穴太
正平七年五月十一日於八幡陣討死

—豐原兼秋清秋男
左近將監　五位　樂人
元弘元年八月廿四日供奉入南都同九月被執

—秦久武
隨身　同上

—大神景光

—源賴武
四位

—源重泰
五位　左衛門尉
內大臣定房薨後落髮

—源成直

新田

右兵衛督
—源宗治
從三位　右中將
興國六年二月薨于鎭西
—吉房
侍從
延元四年九月遁世號松翁
—源貞氏
武家
—源義貞
次郎太郎朝氏男
小太郎　右馬助　播摩守
元弘三年二月十一日賜　綸旨
同年三月奉大塔宮令旨擧兵
建武元年賜上野播摩
延元々年二月二日左近中將
正四位下　左兵衛督　昇殿
十六箇國管領
同三年閏七月二日於越前攻藤島中矢自殺年
三十八

源光院擧阿
正平八年三月贈正三位中納言
—義顯
小太郎　越後守　從五位下
建武元年賜越後
延元二年三月六日於越前金崎城自殺年十
八
—義興
左兵衛佐　正五位下　左近將監
正平十四年十月十三日於武藏國矢口渡爲
竹澤良衡江戸堯寬所誑溺水自殺
法名正英
後有靈異建祠於彼邊號新田大明神
—義宗
左兵衛佐　左少將　正四下
武藏守　昇殿
應永六年七月十四日於伊與國道後卒七十五
金龍寺大檀全活
—貞方

脇屋　　　　大館

兵部大輔　入道覺慶
應永十七年就虜所殺于七里濱

—源義助
義貞朝臣弟
次郎
右衞門佐　左馬權頭　彈正少弼　治部大輔
兵庫助　正五位下
建武元年賜駿河
興國元年五月五日於伊與國々府卒

—義治
右衞門佐　左馬權頭　從五位上
式部丞
天授四年　月　日卒

—義陸
相摸守　陸奥守
天授六年二月從四位下少將
應永十年四月廿五日於庭倉被殺年四十九

—源宗氏
大館二郎家氏男

又二郎
元弘三年五月十八日於鎌倉稻村崎討死

—氏明
彌二郎　左馬助
延元三年春爲伊與守護
興國元年九月三日於伊與國世田城自害

—幸氏
彌二郎　中務少輔
屬足利尊氏
建武三年正月廿八日於近江國觀音寺爲北畠顯家卿討取首

—宗兼
源三

—氏兼
六郎

—義冬
治部少輔　實者細川顯春子

—氏淸
伊賀守

與國四年到伊勢憑國司
正平十年參吉野
正平十六年入伊賀据關岡城
應永二十九年八月十九日卒
年七十六
慈光院顯山

大舘

—源有氏
大舘宗氏弟
三郎　左近藏人
延元二年正月於京討死

—僧賴員
大藏卿律師

大舘

—源氏時
左馬助

大舘

—源義氏
左馬助

堀口

—源貞義
堀口孫二郎家貞男
母駿河守有時女

左馬權頭美乃守從四下

—貞滿
大炊助　美乃守　三郎

—行義
四郎

—義滿
三郎　左京亮

—貞元
四郎

一井

—源貞政
堀口貞義弟
一井孫三郎　民部權大輔
從五位上
延元二年三月六日於越前金崎討死

—政家
左近將監　從五位下
與父同時討死

大島

—源義政
大島又太郎義員男

兵庫頭　讃岐守　治部丞
建武元年補武者所

―義高
左衛門佐　兵庫助遠江守
後出家　法名法西

―義世
兵庫頭左兵衛尉　從五下

―守之
讃岐守

鳥山

―源義俊
左京亮家成男
修理亮

―氏頼
左京亮

大井田

―源經隆
藏人兵衛尉義隆男
藏人大夫　從五位下

―經兼

遠江守　從五下　民部丞
興國三年於越後卒
年四十二

―氏經
式部大輔　彈正少弼　從四下
正平九年於本國卒年三十八

―經世
左馬助

田中

―源經氏
里見田中又太郎重經男
田中七郎藏人

―政繼
左近藏人

―氏政
修理亮
興國四年於上野國討死
年二十五

里見

―源重義
掃部助氏義男

里見
源義胤
延元二年三月六日於越前金埼自殺
藏人民部少輔義宗男
里見五郎

又夫郎　掃部助
大炊助
時義

里見
源義益
父未詳
大膳亮

里見
源時成
伊賀守義成男今按恐非義成男時成
伊賀守
延元二年正月十二日於敦賀戰死

世良田
源義政
下野守政經男
伊與守
正平十九年七月十九日皈順
同　年八月兄弟三人入鎌倉如來堂自殺

江田
源滿氏
世良田三河守賴氏男
江田三郎
義氏
江田二郎　江田三郎
行氏
行義
江田三郎　兵部少輔　修理亮
行忠
丹後守

江田
源……
江田九郎
延元々年正月於京討死

岩松
源經家
岩松下野太郎政經男
岩松小太郎或作二郎

岩松
源義正
兵部藏人

桃井
源尙義
桃井又二郎滿氏男

彌二郎
元弘元年於鎌倉討死

|義通
孫二郎　刑部大輔

|義盛
修理亮

|胤義
孫三郎

|直氏
四郎

|義任
左衞門佐

桃井

|源直常
桃井六部直賴男
右馬權頭　播磨守彈正大弼
正平七年屬義宗

|直和
中務少輔　右馬助

|源顯氏
建德元年三月十六日與足利義經戰于長澤討死

|源義繁
桃井兵庫助

|源敏祐
桃井駿河守

吉見

|源賴氏
桃井左京進

吉見二郎爲賴男
彥四部
興國四年七月七日飯順

|同萬丸

吉見

|源尊賴
吉見孫太部義世男
中務太輔

|源賴武
右馬頭

石川

|源義純
石川藏人義通男
飛彈守

元弘元年笠置敗軍之時於門前父子自害。

義右——初一丸

義冬——牛熊丸

成家——龜松丸

松壽丸

土岐

源頼兼

土岐隱岐孫二郎頼貞男

土岐十郎

元亨年中奉主上密詔事露被殺

頼古

土岐十郎太郎　從五位下

頼孝

土岐十郎二郎　藏人左兵衞尉

足助

源重範

足助六郎二郎貞親男

足助三郎

重政

足助九郎

足助

源重藤

元弘元年八月被捕於六条河原被斬首

佐渡守重方十男

足助佐渡十郎

重經——重宗

二郎　二郎三郎

重武

三郎

賢尊

僧　卿公

元弘三年五月二十六日於鎌倉葛西谷討死

重信

三郎太郎

元弘三年五月二十二日於鎌倉葛西谷合戰

討死

足助

源重連

佐渡守重方四男

足助佐渡四郎

重成

足助村上

源重春
從四位下
孫三郎
元弘三年　月　日於鎌倉前濱討死

源義光
村上彥四郎
元弘三年二月一日於吉野討死

義隆
村上彌四郎　兵衛藏人
元弘三年二月一日從大塔宮討死

名和

源長年 始名長高依勅改名
村上太郎行高男
又太郎　左衛門尉　伯耆守
元弘三年閏二月奉勅守護船上山皇居
同年三月三日賜伯耆國
建武元年加賜因幡國
延元元年七月十三日於京討死
法名釋阿

義高

名和

伯耆二郎　判官　正五位上
延元元年十月十日於南都出家
同三年五月二十一日於界浦討死
年三十七

高光
左衛門尉
延元元年十一月一日於坂本病死年二十二

義重
兵庫允
延元年五月二十一日於界浦討死

源長義
伯耆守長年弟
但馬權守　從五位下

長生
太郎左衛門尉　大藏少輔
延元三年五月二十二日討死

僧源盛
長年弟
信乃法眼

正平十三年十二月十三日於八代死年五十六

—源行村
道效入道男
名和小二郎　左衞門尉　豐前守

—源行實
道效入道男　長年從弟
備中守　從五位下
正平七年四月三日於伯耆討死

—入道覺妙
行高七男
正平十六年三月二十日死

—源高政
名和左京進

—源興村
正平七年四月三日於伯耆合戰與行實高政等共
討死

—源長氏
名和兵庫允
正平七年四月二十五日於八幡討死

—源長秋

二見

名和修理亮
—源光遠
左衞門尉從五位下遠江守
—光長
左兵衞尉左衞門尉　縫殿助
越後守　從五位下
—光家
左兵衞尉

二見

—源……
內舍人　左衞門尉
後入道　法名知心

渡邊

—源娛
瀧口　中務小輔
—某

坂戶

—源康村
左近將監
左衞門尉康鄕男
左衞門尉
—康藤

色川

平盛忠
左衛門尉
左兵衛尉　從五位下

盛氏
左兵衛尉

千葉

平宗胤
千葉介頼胤一男
千葉太郎　千葉介
元弘三年屬官軍後討死
子孫在肥前國

千葉

平貞胤
千葉胤宗男
從四位下　千葉介
北條高時滅亡之後屬仁田義貞有戰功
後變心屬足利氏

相馬

平親胤
相馬彌五郎重胤男
出羽守
正平六年二月十三日賜陸奥國四郡守護職

胤頼

相馬

平光胤
治部少輔　讃岐守
相馬親胤弟
相馬彌二郎
延元元年五月於陸奥討死

相馬

平胤忠
相馬二郎兵衛尉胤基男

胤長
相馬小二郎

忠重
相馬四郎左衛門尉
延元元年山門之役屬官軍與本間孫四郎源資
成同射賊兵顯其名

大多和

平義勝
三浦大多和孫太郎義綱男
大多和平六左衛門尉
元弘三年擧兵襲鎌倉

河島

平維頼
左近藏人

江戸　花岡

―平景氏
民部丞
―平兼隆
平六左衞門尉
延元元年十二月二十四日大塔若宮賞賜三川田

南條

―平宗元
南條出羽前司

津久井

―平長重
瀧口　左衞門尉

津久井

―平豐重
興國五年四月任中宮少進
新待賢門院判官代

菊池

―藤原武時
左衞門尉
肥後守　掃部助　正五位下
後剃髮　法名寂阿
元弘三年三月十三日於筑前博多津戰死
―武重
肥後守

―武光
正平四年　月　日卒
肥後守　從四位下
―賴隆
肥後三郎
元弘三年三月十三日與父同處討死
―武義
剃髮法名自關
天授三年八月十二日討死
―隆寂
僧　號阿日坊
元弘三年三月十三日與父同處討死
―武安
天授三年八月十二日討死
―武政
肥後守　從四位下
文中三年六月二十六日卒
―武朝

結城

―藤原宗廣

上野介廣綱男
上野介從五位下
後剃髮號道忠法名源秀
延元三年九月遇難風漂著
安濃津遂罹病死

結城

―親光
結城太田判官
延元元年正月尊氏入洛時僞降叅而刺大友
左近將監爲衆被殺

―親朝
大藏權大輔　修理大夫
上總守護
興國五年正月叛屬尊氏

―親廣
大藏少輔　七郞左衞門尉

―親政
藏人
建德二年六月十四日與斯波兼頼戰討死

―藤朝常

大藏權大輔親朝男
三河守
正平五年歸順

結城

―藤兼光
大藏少輔
延元元年十月十日到南都出家

益戸

―藤原行助
左衞門尉宗行男
和泉守從五位下　左衞門尉

―顯助
下野守從五位下左衞門尉
延元々年正月討死

小山

―藤原秀朝
下野守貞朝男
使　左衞門尉
建武二年七月三日與北條時行合戰時討死

小山

―藤原義政
左衞門佐氏政男
左馬助　下野守
天授六年五月歸順

弘和二年十一月十二日降氏滿
剃髮號永賢
同年三月二十三日拒禮尾奥城
同年四月十三日自殺

二階堂

—藤原貞藤
出羽守行藤男
出羽守
剃髮號道蘊
元弘三年七月赦死賜懸命地以有賢才之聞也
—兼藤
檢非違使　山城守
法名道義

信夫

—藤原重信
信夫太郎

井伊

—藤原道政
井伊介
仕宗良親王

足立

—藤原遠宣
安藝守

延元元年十月十日到南都出家

天野

—藤原政貞
民部大輔

宇都宮

—藤原公綱
下野守貞綱男
治部大輔　左馬權頭
延元元年十月出家
同二年八月還俗　四位少將
正平十一年十月　日卒
正眼菴理蓮
—氏綱
下野守　從五位下

宇都宮

—藤原泰藤
三河守時綱男
左近將監

狩野

—藤原貞長
狩野介
仕宗良親王

狩野

—藤原貞綱

澁川

―藤原義季
左近將監
刑部大輔
建武二年七月二十二日與北條時行合戰討死

少貳

―藤原冬資
太宰少貳
天授元年四月歸順
同年八月二十六日與今川了俊合戰討死

河野

―越智通盛
對馬守通有男
對馬守　伊與國司
後入道號對馬入道
法名善惠

―通遠
七郎　猶子
元弘三年五月討死年十六

河野

―越智通直 始名通堯
河野通朝男
六郎　刑部大輔

正平二十年八月三日歸順
屬鎭西宮任讃岐守
改名通直
天授六年十二月陣于吉岡
佐志久爲細川常久被攻自殺
號淨居菴道昌桂峰

得能

―越智通縄
備後守
延元二年三月六日於金崎戰死

土居

―通治
備後守　從五位上

―通卿
備前守

得能

―越智通明
備後守通方男
越後守

得能

―越智通言
延元二年三月六日於金崎討死

―越智通益
得能備中守

和田

越智

得能遠江守

越智

得能彌三郎

元弘三年閏二月擧義兵

三宅範長 一說云字多源氏

和田備後守

延元元年五月十八日船坂戰敗自殺

兒島

高德

兒島備後三郎

入道志純

元弘元年笠置城破帝西狩於是欲奪車駕于路事不成夜潛至院庄御館斫櫻樹書小詩去後與父共詣行在

楠木

楠正成

楠正遠男或云正玄男或正澄男

多聞兵衛　檢非違使左衛門尉

河內守　從四位下

元弘元年八月有召參笠置皇居奉勅擧義兵

建武元年賜攝津河內

延元元年五月二十五日於兵庫自殺年四十三

賜正三位左近衛中將

號靈光寺大圓義龍

正行

帶刀左衛門尉河內守正五下

正平二年七月起兵

同三年正月五日於四條畷合戰自殺年二十

五號　孝顯院精忠義眞

正時

二郎　右衛門尉　大和守　從五上

正平三年正月五日與兄正行共自殺

妙解院崇譽玄義

正儀

三郎左衛門尉左馬權頭

參議　左兵衛督　從四位下

天授四年四月二十八日卒

小光寺秀峰義瑞

正勝 一本作正秀

二郎　左衛門尉　左馬助
元中九年五月出千劔破城漂泊于吉野十津
川

|正元
小二郎　河内守
明德四年三月二十五日入京狙義満事不成死

楠木
|橘光正
楠木五郎左衛門尉入道常泉
永享元年九月狙義敎事顯就擒
同月二十三日於六條河原被斬

楠木
|楠正頼
河内守正成玄孫
楠木二郎
文安元年奉高福院宮令旨擧兵時八幡山軍敗
退于紀伊國湯淺城
同　四年十二月三日於湯淺戰死

楠木
|橘正親
楠木十郎
高福院宮仕候

和田
|橘正季

河内守正成弟
和田七郎　攝津守
延元元年五月二十五日與兄正成共自殺年三十
二

和田
|橘正隆
和田五郎
延元元年五月二十五日與正成共自殺

和田
|橘正武
和泉守　左衛門尉
正平十年十二月三十日補壽成門院藏人

和田
|橘正興
左兵衛尉

|橘正忠
和田五郎
正平七年五月病死

|僧源秀
和田新發意
正平三年正月五日討死

橋本
|橘正茂
橋本九郎左衛門尉

橋木
―橋正高
橋本民部大輔
天授五年任式部大輔
同六年七月十七日與山名氏淸合戰討死

橋本
―橋正督
橋本宮內少輔
天授元年六月二十五日以土丸城叛

橋本
―橋正員
橋本八郎
延元元年五月二十五日從正成自殺

宇佐美
―橋正安
宇佐美河內守
延元元年五月二十五日從正成自殺

神宮寺
―橋正師
神宮寺太郎兵衛尉
延元元年五月二十五日從正成自殺

南江
―橋正忠
南江備前守
延元元年五月二十五日從正成自殺

氏姓不見人々

櫻山
―茲俊
櫻山四郎入道
元弘元年九月起義兵築備中國一宮城
同年十月詣吉備津宮殺妻子燒宮自殺

太田
―守延
太田三郎左衛門尉
元弘三年三月奉靜尊親王旨起兵入京
同年四月八日討死

荻野
―朝忠
荻野彥六
元弘三年屬忠顯朝臣入京而据高山城

匹地
―資高
匹地九郎

阿房
―國淸
阿房五郎
延元元年起兵於和泉

岸和田
―治氏
岸和田彌五郎
延元元年十月四日据東條城
―助氏

岸和田左近藏人
正平二年八月十日從正行攻隅田城
同十五年四月二十八日降足利氏

一條―爲治
一條駿河守

津葉―清文
津葉五郎
延元三年二月拔大聖寺城

石黒―盛行
石黒左近大夫將監
興國三年据貴船山城

小俣―義弘
小俣宮內少輔
正平七年歸順

田村―則義
田村庄司
元中三年六月討死

高松―頼重
高松三郎
元弘三年十一月與細川定禪戰不利

妻鹿―長宗
妻鹿孫三郎

今木―範家
今木新藏人

白河―爲興
白河出羽權守
興國四年七月据常陸國河內城舉兵

鹿子木―貞基
鹿子木大炊助
―貞直
鹿子木民部大輔

畑―時能
畑六郎左衞門尉
興國元年十月二十一日於越前國鷹巣城合戰蒙疵
同月二十四日遂死

篠塚―重英 或云平氏畠山重忠六代孫
篠塚伊賀守
興國元年九月伊與國世田城陷乘敵船走于隱岐

僧徒

東南院─聖尋
鷹司關白基忠公男
聖忠僧正資
東大寺別當　東寺一長者
法務　大僧正
號東南院僧正
元弘元年所執
同二年五月十日配于下總國

淨土寺─忠圓
號淨土寺僧正
元弘元年七月二十三日配于越後

小野─文觀
號小野僧正　醍醐座主
元弘元年七月二十三日配于硫黃島
正平十二年八月　日寂

峯─春雅
號峰僧正
元弘元年所執
同二年五月十日配于長門國

護─賴意

持院
日野護持院
大僧正　東寺長者
醍醐座主　兼仁和寺諸院家

大塔─忠雲
中院贈左大臣光忠公男
號大塔僧正　大僧正
正平六年十一月十九日管領梶井妙法院元量壽
院詩補鎌倉大御堂天王寺別當

─慈靜
洞院大納言公敏卿男
僧正

─信聽
大僧正

法勝寺─圓觀
法勝寺　住鎌倉寶戒寺
元弘元年六月就擒
元弘元年七月十三日預結城宗廣幽于陸奧國

護正院─儆全
護正院大僧都　妙法院々家
元弘元年八月二十八日坂本合戰不利而降于武

妙光坊 八尾 理教坊 成願坊 殿法印

家

—玄尊
妙光坊阿闍梨　梨本院家
元弘元年八月二十八日於坂本桃戰

—賢幸
河內國八尾別當
權大僧都　權僧正
延元三年七月二十四日寂六十七

—映秀
理教坊阿闍梨
延元元年九月二十三日與小笠原貞宗戰于安食
馬場討死

—源俊 一作堯全
成願坊律師
延元元年九月十七日與小笠原貞宗合戰討死

—鑑教
僧都

—良忠
權大僧都良寶子
號殿法印

安居院 師法眼 道場坊 侍從房

爲伯父二條關白師忠公之子參候大塔宮
元弘二年六月二十一日被召出于六波羅禁固忽
破囹圄遁世
公尋僧正附法弟子大力人
建武二年十二月二日被殺

—隆俊
權大納言藤爲家卿男
妙法院法印

—澄俊
妙法院執事法印律師
元弘元年八月二十八日所執
建武二年十二月二日被殺

—賢覺
太田師法眼
延元二年三月六日於金崎自殺

—祐覺
道場坊助注記
延元元年十二月二十五日於阿彌陀峯被斬

—快智
岸和田侍從房

大輔房
延元二年四月十六日据巻尾寺擧旗
—定智
岸和田大輔房
延元二年四月十六日與快智共擧旗
—知教
奈良法師
—俊僧
奈良法師
元弘元年九月被執
—行海
奈良法師
元弘元年九月被執

治部房
—圓實
志賀良木治部房
元弘元年九月被執

勝行房
—定快
勝行房侍從豎者
元弘元年九月被執

習禪房
—淨運
習禪房

乘實房
元弘元年九月被執
—實尊
乘實房
元弘元年九月被執

光林房
—玄尊
光林房
元弘二年從大塔宮于熊野

大夫房
—快舜
所大夫房 畑時能姪
延元四年九月被疵而死

金蓮房
—直源
金蓮房伯耆
元弘元年八月二十八日坂本合戰討死

桂林房
—
桂林房讃岐
元弘元年八月二十八日於坂本討死

岡本房
—快實
岡本房播磨豎者
元弘元年八月二十八日坂本合戰有殊功

中坊
—
—

木寺　參河房　武藏房　吉水院

中坊小相模
—木寺相模
元弘二年從大塔宮于熊野
—岡本參河房
元弘二年從大塔宮于熊野
—武藏房
元弘二年從大塔宮于熊野
—宗信
吉水法印
尊壽丸之父　吉野山吉水執行
—慈遍
卜部兼顯子　兼好法師兄
大僧正
興國元年著神風和記三卷獻上南山

問答抄

全

問答抄

目録

以上八十一問

曾我もの語　一やかん　二かきのひたゝれに　三もゑきうらつきたる竹かさ並れんしやくしりかい　四ふくみくつは　五またらむかはき並せんたんとうの弓　六一のまふし　七唯母の文計にかう〳〵　八しらひたゝれほいけんせい　九はんせうそくの珠數もちてかうのひたゝれ　十赤地の錦にて　十一ふところより赤木の柄に　十二九萬八千の軍神　十三大名小名　十四とをさむらひ　十五つなぬきに　十六四方白のかふと並いか物作りの太刀　十七龍頭　十八しやくとりなおし　十九十文字にむすひさけ　廿すいかき　廿一たうはひしやもんの　廿二みきはまさり　廿三ねりぬきの小袖　廿四めんろう　廿五五郎は烏帽子のさしき　廿六りう〳〵作のなきなた　廿七ひやうこくさりの太刀　廿八らいこうの御時　廿九たとふ紙　卅やかんを　卅一らきのてうい　卅二しはうちなりに　卅三一尺八寸の大かたな　卅四鷹をそ　卅五とねりなしをむすひ並すて手綱むくんりうにおちかゝり　卅六ふしけふかく十六つきたる　卅七烏帽子竹かさ　卅八船の字を　卅九もよき句ひの並表紋の竹笠　四十からさいみに　四一ふせんりやくのひたゝれ　四二うき紋の竹笠　四三二の木瓜　四四いとこおいと　四五脇深くかきたるに　四六一寸またらの　四七からさゆみのひたゝれ　四八ひやうもんのゑほしかけ　四九半しやうそく　並きふくたてゝ　五十柄もこふしも　五一かひかねかけてうち込れ　五二いと毛の御服卷

以上曾我物語五十二問

十訓抄　六琴爪にて皮をむき　十八うやゑほし　廿一らゝんを　四三御やきいし　二なへたる烏帽子　廿八かみしも　廿三はなたのあをに　卅一繼物を金の文付て　一守刀よりかうかひ　二館の三郎　九おりことつきひり　十さよみの袴　同蒔繪の　廿九時の簡玄象　卅五茶碗の枕を

以上十訓抄十五問

古事談　四淺黄の上下　九雨面水干に袖むらこ　二牛追物　十一ふくろのゑほし　十八尺矢を　十一しゝあをのかり衣並車力　十四またふり杖

十七 なにしに紙冠　五 さしぬきのそばはさみて
十一 たゞ直垂上下に　廿 とうはらまきに並ひをく
ゝりのひたゝれ　廿二 ゑぼしかけして

新古事談　はたこ馬並かわこ馬並ふみむら　一 不
動袈裟　六 まゝきを

雜問　一 はつふり　二 馬驗小馬驗　三 鏡鞍　四 母衣
を臺に　五 矢立　六 五六の鎧　七 あやい笠あやす
け笠　八 梓弓眞弓月　九 責碑の事　本朝書目

今昔物語　印本十五册　一 放出（ホウダシ）　二 冠に褁着たる
三 尻切　四 勁馭　五 貝をつくりて泣けれは　六 朽
木形の几帳　七 蠻繪に　八 履俣二タならへたる胡
簶並革所々卷たるを持打出の太刀帶て　九 筋黑の
胡簶並法師髮　十 寺冠社冠　十一 あまれたろんに
（承久記）　十二 細太刀　十三 官打　十四 棟門平門
十五 名對面　十六 キフク　十七 鳥打所を
十八 クロツハノ矢　十九 蒜の母衣　二十 尻輪
廿一 尻モナキ矢に　廿二 甲ノ甲ヲ　廿三 うち羽ふ
きて（下卷）　廿四 唐笠サヽセテ　廿五 思白毛ノ本
廿六 其中に不動　廿七 みかんはかり　廿八 小具
足　廿九 タウサキ　三十 三浦の笠シルシ　卅一 長
覆輪　卅二 具足　卅三 ヒロ袖（應仁記）並小泉甲
卅四 蟬小旗　卅五 鐺の事　明德記 印本
卅六 相圖の螺を　卅七 家僕御退治　卅八 赤地の錦
の母衣　卅九 同丸ノ腹當　四十 二重皮　四一 鎧ヲ
コシテ　四二 因幡脛楯　四三 御所ノ其日ノ
四四 一色左京大夫ノ裝束ニハ　四五 笠標ノ義

職人盡歌合
一 三番　二 二番　三 四番　四 十番　五 同し中に
六 十六番　七 十七番　八 十九番　九 二十四番
十 二十七番　十一 四十一番　十二 五十番　十三 右
書はいつれの比にか出來しにや
右十四間

古今著聞集寫本
一 後朱雀院　二 光方廷尉佐にて　三 一條院　四 後
鳥羽院　五 爲實朝臣　六 源二位　七 雅朝親王
八 天曆元年　九 新羅三郎　十 引入烏帽子　十一 賴
光　十二 瀧口大極殿にて　十三 寬治五年　十四 忠
信大納言　十五 布障子　十六 渡殿には　十七 花山
法皇　十八 能通法師　十九 永昌五年　二十 宇治左

平家物語

殿上闇討の章

一　大きなるさやまきをよういし（惟熊云よういのいノカンナゐナルヘシ）さやまき又さうまきとも云又さすが又腰刀又ひも刀又刀子（タウシ）又刀とはかりも云さやまきといふはさやを葛にて卷たることくきさみめを附るなりきさめなきは只腰刀さすがなと云前にいふ如し長さは凡五六寸より一尺ばかりに至るはなし目貫にてつば入れず小刀かうがゐをさす長き下緒を付るむかしの人は此さやまきを常にさしたり今の人のわきざしさすが如し猿樂の狂言師が大名のまねをする時つばなき短き刀をさすは昔の腰刀さしたる體を傳へたるなり扨大さやまきといふは盛衰記の殿上やみ打の條をみれば一尺三寸のさやまきとあり是大きなるさやまきなり又黑さやまきともあり黑くつかさやともにありから木の木地のさや卷もある故黑さやまきといひたるなり軍の時は是を左のわきにさす只敵とくんてさし通し又首をもかくなり後代信玄秀吉などの比より脇指と打刀を大小と名付てさし鎧きても大小をさすゆへ左の方に首かき刀さゝれさる故右の脇に腰刀の柄を後へなしてさす故めてざしと云名出來たり古代の風とは違たり信玄秀吉の比より武士の風俗違ひたる事ともあり

二　つか袋付たる太刀わきはさんで

つか袋とは寫誤なり板行する時筆耕の者の書あやまりなりつる袋付たる太刀なりるとかと字の似たる故衍違たるなりむかしは太刀に必弦袋付しなり飛驒守維久（維久は平家時代の畫工なり）か繪かきし後三年合戰の繪にも軍士皆太刀に弦袋付たる體あり弦袋は今もある弦卷なり弦袋といふは古名にて弦卷は新名なり文安年中書し下學集と云寫書に弦袋弦卷二名を出せり其比もはや弦卷といふ名も出來し故古新雅俗の二名を出せしなり今弦袋は弦卷の事と知らぬ人は綫物或は革などにて袋をぬひ作りて是弦袋なりといふは古書をも古畫をもみす古實知らぬ人の妄作なり

三　うつほはしらより內すゝのつなのほとりほうゐの者の（袍衣ニヤ西光切レノ段ないきよげなるほうゐたるやかきなしトアリ忠盛ノ從者なれば甲冑ノ者トミ

ェ西光切レノ段ハ装束ノコトカ又布衣カ

うつほ柱とは柱の中を空（ウツホ）にしたるなり今筥とゆといふ物なり扉の上の留水をうけ入る柱なり◯ほういの者は布衣の者にて狩衣きたる者なり今世は織文あるをはかり衣と云をりもんのなきを布衣といひならはせとも古代はすべて狩衣と云本鷹狩の時御鷹飼のきる服なりされはかり衣と云て布にて作りしが後に常の時もきる事になりしに依て次第に花美になり高位の人も着せらるる服となれり

禿之章

四　ゑぼしのためやう 當時烏帽子ニテハタムヘキヤウ無御座候

古はゑぼしかたくぬる事なしきぬにうるしぬりてやはらにて今の頭巾の如し鳥羽の院の御代ゑもんと云事始り装束もこわく冠ゑぼしもはりぬきにしてかたくなりたりされどもかぶと下には古代のやはらか成を用たり平家の比ははやゑはし堅くなりたる時代なりためやうとあるはゑぼし師に申付てためさするなりためるとは折事なり

祇王か章

五　立烏帽子白さやまきをさいて 白鞘卷制度

白さやまきとはしろかね作りのさや巻なりさや巻は前にいふ如し古書に白とあるは皆しろかねなり銀の事をいふ

御輿振之章

六　きちんのたゝれに小櫻をきにかへしたる鎧

古小櫻革と云ま革あり藍にて染て白く小きさくらの花かたを染出す其革を細くたちて鎧をおとしたるを小櫻革おとしと云また小櫻縅とも云其小櫻革を黄の染汁にてそめかへせは白き小櫻の花形は黄になりあゐの所はもへき色になるなり此革にておとしたる鎧を小櫻を黄にかへしたる鎧といふ此二色の鎧は鞍馬寺に納りてある古鎧の中にあり後三年合戰繪にもあり

座主なかしの章

七　ゆうけいといふ惡僧あり黒かわおとしの鎧の大あらめにこかねませたるを大あらめの鎧は常の毛引の鎧の如く糸をしけくならべす太き糸にて糸の間をひろくあけてとづるなりされば大あら

めといふめとはまなり間の字なりめとまと音相通にて大荒間なり○こかねませたるとは金の事にはあらず古代は鐵砲なかりし故大かた鎧はさねをねり革にてするなり其中にわりこ札の間々に鐵札をまぜる事ありこかねと云は子鐵なり子入れ子の心なり大あらめ今のすがけの如し

小松敎訓の章

八 ひしりつかの刀（其別太刀の制度奉希候）製作不知或人の說に僧をひしりといふ鮫の皮を柄にかけぬをひしり柄と云魚をは僧の喰ぬ物なればなりと云正說なるかいかゞ證據をはいまた見あたらず

けうくんの章

九 白かな物うちたるむないたせめ

白かなものは前にいふ如く銀かな物なり

十 銀のひる卷したる小長刀（大長刀小長刀と云寸法ニテモ御座候哉）

ひる卷とは蛭といふ蟲のまき付たる如きなり長刀の柄の太刀打の邊に所々かねの輪を入れたるなり小長刀と云は長刀の寸法とて定法はなけれども古物をみるに及の三四尺計あるものあり是大長刀にて二尺はかりより内は小長刀かやうの事は大やうに見へし

御産の卷の章

十一 狂文のかり衣に帯劒したる

狂文と云は文（モン）をいろ〳〵に彩色したるを云又豹（ヘウ）文ともいふ太平記卷二十七田樂の條に色々の花鳥をおし盡し染狂したる水干とあるも狂文なり文といふは今の世の五所もんを云にはあらず惣體のもやうの事を云なり

十二 寮の御馬に四手つけて

しでは正月のしめ繩または神事に引てしめなはに白紙を切さきて垂下るを云神馬にもしてを付るなりしてを四手とかけとも是はあて字なり本字は垂の字なり古語にたるゝ事をしでといふ

無紋の太刀の章

十三 葬の時佩て供するむもんといふ太刀

むもんの太刀は無文の太刀なり凶事の時はく太刀は惣體を黒く染ぬりにして蒔繪の文なし金具もおひとりの革も無文なり

以津岐島御幸の章

十四　御まなはしめ當時の精進かためといふにや

小兒生れてより三歳までは乳味を以て養ひ飯をくわしめす内々にては飯をくはしむる事ありとも夫は内々の事なり扨三歳のすへ四歳の始比にいたつて喰初の祝あり是をまなの祝ひといふなり此時魚味を喰しむるなり魚の事をまなと云なりされはまな初と云まな板まなはしのまなも魚の字なり今も京都にては魚店の事をまなやといふ魚屋とかくなりまなをなと計りもいふ

十五　まこやの山

まこやの山是は印板の時筆耕の寫誤なり本ははこやの山なり天子御位を退（シリゾキ）玉ひて後御所を院と云又仙洞とも仙居ともいふは仙人の居所にたとへ御壽命を祝するなりされは歌には仙洞の事をはこやの山とよむ藐姑射（ハコヤ）山也仙人のすむ山なり事は莊子に見えたり

十六　瀧口のもんしやくの絕にしかは

瀧口のもんしやくと云は瀧口は禁中御殿に瀧口と云所ありそこに祗候する侍を瀧口の侍と云略して瀧口と計もいふなりもんしやくは問籍なり禁中にて夜に入て殿上の名謁と云事あり藏人か御前にむかひてひさま付て後さまに誰々か候と問其時上日（シヤウ）の（當番の事なり）人々參りて一人つヽ名乘を申上る是は殿上と云間に祗候する人々なり扨次に瀧口の問籍とて前のことく瀧口かなのるなり問籍と云は問事なり名謁と云は名乘る事にて兩名一ッ事なれとも殿上の名謁瀧口の問籍と言葉を替ていふなり名謁問籍の事淸少納言枕草紙禁秘御抄其外古書に見えたり

十七　上日の者　所々見えたり

上日（シヤウ）とはつかふる日とよみて仕る日なり今武家にて當番日といふにおなし召仕人少き家にては當番非番といふ事もなきに大祿の家にては召仕人數多くある故當番非番を立て召仕ふなりそれを上日のものを召仕といふなり人少き家には上日の者とて別にはなきなり

十八　ゑかき花つけたる者

繪かき花付たる者とは狩衣水干なとに繪かき作り花なとをとち付て風流のかさりにするなり太平記卷三十に北畠入道源大納言は准后の宣旨蒙

りて花付たる大童を召具し輦に駕して宮中を出入すとあるも同義なり装束に作り花なと付るをつけ物といふなりつれ〳〵草の放免のつけ物といふも此事なり

十九 まんもんをひらき掃部寮ゑむたうを敷

まんもんは幔門也庭に幔幕を打ち切て人の出入すべき所を明ておくを幔門を開と云通道を明るなり○えんたうは莚道也院公卿等の御通あるへき通りの道に敷物を敷事なり

鼬鼠之章

二十 いまたつる藏人にて

いまたつる藏人は印板に出す時筆耕の寫誤なりいまたわか藏人なりまた若藏人と云事なりわトつかトる相似たる故誤たるなり

廿一 御前の切板より安親か勘定をぞ參らせけれ

切板は板緣なり細き板を横に並て打たるをはすのこと云は是も緣なり廣き板を竪に打て切口の外の方へ向たる緣は切板なり

信連合戰之章

廿二 衞府の太刀なれども身をは心得て造らせたるを心得てとあれは眞劔なるべし後に太刀ゆかめはおとりのきおしなおしと御座候はいかゝ

衞府の太刀なれとも身をは心得て造らせたるとなり衞府の太刀は近衞府衞門府兵衞府などの武官のはく太刀なり上古は武官の人は武勇の人を撰て任せらるゝ故に太刀なとも切物を撰て用ひしなり後に段々朝廷の武備衰武官にも武勇の人を撰はず只此家の先格をもつて武勇もなく弱き人を武官に任せらるゝ故太刀なとも切レものをも用ひずしてなまくらを用ゆ平家の時代には既に右の如くなまくら物を用る樣の風俗になりしなり然るに信連は衞府の太刀なれとも心得て切物を用ひたるなり武勇の人なる故當世風のなまくら物をは用る事なかりしなり

競か事之章

廿三 いか物作りの太刀只普通に大きく造るにや

いか物作りの太刀は軍器考の圖式に繪圖ありされともかの圖式には兵庫鎖とあり誤なり兵庫鎖に非ずいか物作りなり圖式板行にあり

廿四 瀧口の奉公忘しとや鷹の羽にてはいたるまと矢一手そさしそへける

瀧口の侍征矢に的惟熊云的をといへる字の間に矢の字ヲチタルニヤトオボシを一手さし添る事は禁庭にて的射る事を不意に仰付らるゝ事ある故其用意に常に的矢一手さし添るなり此事は布衣記といふ古書に見えたり

橋合戰の章

廿五 長絹の鎧直垂にしなかわおとしの鎧

長絹のといふは本絹の手なり海人藻芥と云書其外に古書にあり東鏡にも長絹幾疋と云事所々にあり此絹にて縫たるを長絹の直垂長絹の狩衣長絹の袈裟などゝ云此絹後代たえてなし後代は常の絹にて直垂を縫て長絹といふなり長絹の代に常の絹を用ゆるなり直垂のきくとぢむかしはふさをも付組緒を結ても付革をも付しなり不定なり○しなかわおとしの鎧はしなかはといふ染かわを細く裁ておとしたるなり此奈革とは印本盛衰記に此奈革チ紫革ト書タルハ誤ナリ 藍革に文に歯朶をぞ付たりけるとあり盛衰記に歯朶は正月の祝物に用る草なり一名うらじろとも云此草の葉をむかひ合せ形を丸くしていくらも並て白く染め出すなり本名しだ革なれどもいひにくきによりてしな革といふしな革威の鎧今も鞍馬寺に納てある古鎧の中に有

廿六 五枚甲或は三枚甲とアリシトコロトコソハ申タケレ

五枚甲三枚甲と云はしころの札の數を云是古への詞なり五枚しころ三枚しころといふ事はなし五枚にても三枚にても其札を綴りたる惣名をしころと云なり一枚つゝをはしころとは云す札と いふなり

廿七 つらぬきぬいて跳になり

つらぬきとは軍の時はく毛皮の沓なり是をしらぬ人は毛沓と云は誤なりつらぬきにはたてあけなし軍陣にはくなり毛沓にはたてあげあり是は常の騎馬の時はくなり

廿八 かねにわたいておしおとさるな字規矩ノ𪜈ニヤスクニ渡ス𪜈ニヤ

かねにわたいてはかねは矩の字なり直くに渡すなり

宮御最後之事

廿九 かしわ木にみゝつく打たる金覆輪の鞍おいて

かしわ木にみゝつく打たるとは鞍の文にうち物といふ事あり東鏡にも見えたり柏木に木兎のとまりたる紋を金にて作りてくらに打付たるなり

三十 此外打物の文は何と定らす

からあやおとし三枚甲

から綾威唐より渡たる綾を細く裁ちそれを疊ておとすなり保元物語に白きから綾をふとく疊ておとしたる鎧なと丶ありあやのいろは何色と定らす

ぬえの章

卅一 早太にほろの風切はいたりける矢

ほろとは鳥の兩羽の事なり風きりといふは兩翼の下の方に生たる長き子羽(コヘ)の事なり

卅二 わか身はふたえのかり衣に

狩衣に單狩衣あり裏ある狩衣ありうらある狩衣は表裏のいろをとり合てさま〳〵の名あり表裏同色なるをば二重の狩衣と云此事は布衣記といふ書に見えたり（但二重ノカリキヌノコトナリ）

文覺荒行の事の章

卅三 飛鳥をも祈落す程のやいはの驗者とそ聽えし

やいはの驗者とは修驗者の法力緊く法驗のするとなる事劔のやいはの如くなるを云やいばは及なり

文覺流れの章

卅四 馬の尾て柄卷たる刀

馬の尾の毛を細縄にてよりて柄を卷たるなり

卅五 文覺か働く所のちやうをかうしてけり

ちやうをかうして此ちやうの事詳ならすかうしてとは栲の字なり盛衰記に文覺か事を書たる條に集り寄てかう〳〵栲(ガウ)して門より外へ引出しとあり玉篇に栲は打なりとありつれ〳〵草に犯人をしもとにて打時は栲器によせてゆひ付るなり栲器のやうもよする作法も今はわきまへしれる人なしとぞ有かうするとは打つ事なり今も栲問と云ことはあり

卅六 法便多三人を付られたる

方便は放免(ハウベン)なり昔の書は文字に拘らす字の音訓をかりてさま〳〵に書たる例あり方便のみに限らぬ事なり放免は撿非違使の廳の（廳トハ役所ノコトナリ）下司に放免と云者あり撿非違使は非法違令の者を咎め其罪を糺す職なり放免は今世奉行所の同心といふ者の類なりつれ〳〵草に放免のつけ物と云放免も同し事なり

藤川の章

卅七 忠義の節會行はる

忠義の節會此忠義の二字書誤なり筆耕の者の所爲なるへしすべて節會と云は天子より諸臣へ酒食を給り諸臣御相伴するなり其節會に大儀中儀小儀有其儀式の大中小を云忠義の二字は中儀をあやまり寫したるなり

卅八 はつか十三束 十三束十五束は何ナカソエ候ヤ曾我物語奥野ノ狩ノ章ニふつうに大きなる矢右の手にてと御座候左右の手にて振て一束と申や三ツフセト申ハ指ノ一本二本ノ横てに御座候也

はつかはわつかなり一本にはわつかとありはつかもわつかも同し古今集戀雜かすか野の雪間をわけておひ出つる草のはつかに見へし君かも此はつかもわつかにおなし矢の一束と云は片手一にぎりなり但大ゆひはのけて指四タならひを一束と云指一ツを一タふせといふ一束は人の生れの大小により手に大小あり人の形大小にしたかひて一束の廣狹は違へとも其主の手にて矢つか十二束より上はひかれぬ物なり大男の十二束は小男の手にては十三束も十四束もあるへし此條の十三束同下文の十五束是を以て書たるなりすへて十二束は人々の定りたる矢束なり古き物かたりに十三束十五束なとゝあらは大男の十二束の矢を常の男の手にて握りて見れば十三束も十五束もあるなり自身には十二束より多くは引れぬ物なりかやうの事は今日もある事なればよく知おくべき事なり今世弓の流義によりて十三束程ひく者もあれともそれは矢筈とりたる手首をおりまげ臂尻をさげてむりに一束餘計をひくなりむりをしてははなれ快からず矢勢よはくあたりも狂ふなり十二束は人々天然に備りたる矢束なり人の定たる事にあらず天然に定るなり

奈良炎上の章

卅九 もよきおとしのよろひに黒糸おとしのはら巻 ヨロヒハ鎧カ鎧ハ當時ハ甲冑の惣名ニヤ腹卷ハ胴カ此處〻義カサネテ著スルヤウ也〇腹卷ハ古ク鎧ハ腹卷以後ニハシマリ候ヤ少シ其御面倒ニ奉存候得トモ鎧ノ製作腹卷の制度御シタヽヽ可被下候

古製の鎧は今の鎧とは違たる所々多く有之腹卷はうしろにて合するものなり古の鎧も腹卷の繪圖は軍器考圖式に有之其圖に委く候圖式四卷板行にあり是を見給はゝ明かにわかり候はん

四十 法師甲に五枚甲の緒をしめちの葉のことくにの

つたる白柄の大太刀（法師甲の製度イカヽカサネカフリシ所なりちハ芽カカヤノヤウニ作リタルヽ義カ）
法師甲是又文字の書違なり帽子胄なり帽子胄は
今世くさり頭巾といふ物の事なり○ちの葉はち
がやの事なり

　飛脚到來の章

四一 西寂首を切たりとも聞ぬ又はつつけにしたりと
も聞えけり（ハツヽケハイツノコロ起ル刑ニヤ豊臣家ノ治世ノ磔ハ當時ノ大極刑ニヤ）
はりつけ何れの頃始りたるといふ事詳ならず文
武天皇大寶元年律令の兩書を撰定せらる律は刑
書なり其書に五刑あり笞杖徒流死五タなり死刑
二タ絞斬是なり絞はくびり殺すなり斬は首を切
るなり磔の事は見えず後代平家の代近くに始り
しか不詳

　横田川合戰の章

四二 天文要錄（右書當時傳御座候哉）
天文要錄今傳らす永正元年の奥書ある本朝書籍
目錄にも天文要錄は載せず其以前より絕たる書
なるべし

　北國下向の章

四三 かた道を給ひてければ
かた道を給る事物語に赴を以て考るに官軍の押
し行に往さまの道々にて濫妄浪藉する事をゆる
し給りたるなり往還の內往時はかりにゆるさる
る故片道を許さるヽと云なり此事古代曾てなし
正法にあらず平家の時は亂政なる故如此の作法
ありしなり

　木曾願書の章

四四 箙のほうたてより小硯たとう紙
箙のほうたてとは矢をさす所の箱に似たる所を
云なり小硯小墨短筆を袋に入れて矢の後か脇な
とにおしはさみ結付て置なり是を矢立の硯とい
ふなりほうたてに引出しの箱なとをしつけたる
は後代の人の意巧にてし出したるなり古義にあ
らず

　くりからおとしの章

四五 鏡鞍おゐて
鏡鞍世に知りたる人少し是は鞍の前後の輪の外
面に銀のうすきのべかねをはりてふくりんをび
やうにて打付る由岐先もかねをはる輪の內の方

由岐はかねをはらす其はりたるかねを鏡といふ鏡にほりものをするもあり紋を金にて打てうち付るもあり鏡は銀にてもしんちうにても赤銅にてもするなり愚家眞鍮の鏡鞍を所持せり○或説に少き鏡を鞍輪の面に彫入れたるかゝみ鞍と云又或説にかゝみ草といふ草を蒔繪にしたるを鏡鞍と云是らの諸説はまことのかゞみくらを見すして推量にて作りたる妄説なりまた鏡鐙鏡銜といふ物もありかゞみ鹽手もあり皆古代よりあるものなり古書にあり知らぬ人多し

眞盛最後之章

四六　ぐんしやうつよとて

ぐんしやうづよとて此かな遣ひ違ひたり愚老が見候本にはぐんでうつよなうれとあり（つノ字すと書たる本あり誤なり）此文句切わろく清濁をあやまる故寫すものもかな遣ひを取違へ猿樂の謠なとにもうたひ違たり此よみやうあつはれ己は日本一のかうの者とぐんでうづよとのむは誤なり軍上手にてはなし日本一の剛の者と組で討よ。なうれ。とよむべし己とは手塚か郎等我事を云日本一の剛の者とは實盛をほめていふなり實盛と組てさね盛を討と云事なりなうれは詞の餘勢にてなうおのれの略語なり猿樂の狂言の詞にもいふ事なりあつはれおのれと云以下手塚が郎等我か功を人にしらせんとてよはゝる詞なりよみやうわろければ義通しがたしなうは人をよひかくることばなりなうなうと云同し

主上都落之章

四七　内侍所いんかくときのふたけん上すゝかなとをも所くせよとて

いんかくは書寫の誤なり同し事を盛衰記に書たるには印鎰とあり然はかな遣ひゐんと書てしいんには非すかくは非なりやくなり印は官印とて諸官の役所に渡しおかるゝ印なり鎰は禁中諸門のかぎなり時の簡は晝夜時刻を奏する度に時を書付てある簡を殿上と云間に出し置なりけんしやうは御琵琶の名なり玄上とかくなりすゞかは御琴の名なり鈴鹿と書二品とも禁中歷代の御寶物なり（カタカナニテハカノ字トヤノ字トアヤマルヿアリ形似タレバナリ）

經政都おちの章

四八 もよきにほひの鎧きて長覆輪の太刀を佩ニホヒト申ハイカ、
もよき匂ひの鎧は胴も袖も草ずりも上の一段は萠黄糸にして二段は少し萠木をうすく三段はなをうすく如此段々うすくして下の一段は白くするなり何色のにほひも是に準し知るべし匂ひはすそこをさかさまにしたるなり禁中の宮女の裝束衣(キヌ)五毛(モ)七毛(モ)かさねてきるに其かさねにいろいろの名ありすわう匂紅梅匂くれなゐ匂など云も下は色こく段々上にかさぬるは次第〳〵に色うすく重るを何匂ひと云なりすべて匂ひと云はほのぼのと次第〳〵に増り次第〳〵に消るをたき物などの香にたとへて云なり刀劔のやきばのほのほのと虹の如くなるを匂ひと云女の眉のまゆずみのほの〴〵としたるところをも匂ひと云皆同じ意なり○長ふくりんの太刀とは太刀のさやの人のはく時股にあたる邊みねのかたにすじがねを入たるをもゝよせといふ石づきより柄の方へすじがねの入たるをしば引と云もゝよせを石づきの方まで長く通ししばひきをさやくちの方まで通しみねの方及の方一圓にすじがね入たるを長伏輪の太刀といふ

太宰府落之章

四九 時忠の卿ひをくゝりの袴いとくすのひたゞれ立烏帽子
ひをくゝり詳ならざれども按ずるにくゝり染なるべし宇治川に冬に至りて氷魚(ヒヲ)と云小魚をとるなりしらすと云物類なりその氷魚のかたちの程に細ゝ小さくくゝり染たるなるべしいまうづらしぼりと云物の類なるべし○いとくずは今もある葛布なり葛の根を糸にして織たる故糸葛といふ

征夷將軍院宣之章

五十 廣廂には紫へりの疊を敷
紫へりの疊は紫のへりをさしたるなり紫へりの疊は四位五位の殿上人地下の諸大夫なども用るなり

五一 其日はほう衣に立烏帽子
ほう衣に布衣なり前にしるす

五二 もよぎ糸おどしの腹卷一兩白うつくつたる太刀

一振
白う作たる太刀銀作りの太刀なり白太刀とも云

瀬尾さいご之章

五三 或は（イヤシキモノヽ服ニヤ）柿のひたゝれにつめひもし或は布の小袖にあづまをりし破れ腹巻つゞり着山うつぼ高ゑびらに
柿のひたゞれは柿しぶ染なり直垂は地下の者の服なりつめひもといふはよき人のきるは胸もゆるやかに長し賤者は胸紐も長きを用るに及ばず短きを引つめてむすび賤き體なり○山うつぼにて製作かはるまじ只狩人などの山に入る時付る麁粗にこしらへたるうつぼ成べし○高ゑびらの高の字はあて字なり竹の筒を壺やなくひの如くこしらへたる成べし軍器考の圖式に竹箙あり其眞物をも見たる事あれども是は駿河の竹細工めきたる物にてむかし山うつぼ竹ゑびらと並て云たる物の類とはおもはれず

法住寺合戰之章

五四 甲には四天王を書てぞおしたりける
四天は多門天廣目天增長天持國天此四天王のを書て冑の鉢に貼たるなり此如くする作法にはあらざれども壹岐判官知康はおこがましき者なる故如此の事をいかめしげにしたるなり

五五 かぶらの中に火を入て
かぶら矢は角にても木にても作る中の空なる物なる故其中へもぐさゆわうなどを入て射たるなりかねて火付の具を用意し來るなるべし御所などは瓦ぶきにあらずひわだぶきなれば火付べし

宇治川合戰之章

五六 白くつははげ白あわかませて
白くつはは白みかきの銜なりぬりくつはもある故白と云なり

五七 川中よりのためかたにおし流され
矢の曲りを直すに篦ためを用ゆ其篦ためは篦の入る程すぢかひに木を彫ぬきてある故すじかひなる形を篦ため形と云

五八 こゝにきよりやうのひたゝれ
きよりやうといふは魚綾と書て綾の名なり古書に山鳩色の事と記たるもあれども彼是考へ合するに色の名にはあらず綾の名なり平治物語盛衰

記などにねり色の魚綾のひたゝれとあり是色に非ざる證なり

五九 本田の次郎が鞍のとつ付にこそ付させけれ トツ付モツ付古キ名ニ候ヤ

鞍のとつ付又もつ付とも云兩名ともにふるしとつ付は所付なりもつ付は物付なり是を鹽手の名と心得るは誤なり上古はかれひ付とも云餉付とかくなりとつ付ももつ付もかれひ付も緒の名なり此緒を今の鹽手に結付置て俗ニ云辯當餉をも付け馬の豆糖など俗に入れて結付る爲の緒なり軍には斬首をも結付るなり

河原合戰之章

校註云

六十 重籐の弓のとりうち 本ノ字落字アリ のをかみをひろさ一寸斗に切て左巻にまきける 其日ノ大將ノ印トアリ義經ノ作意ニヤ亦故實候ヤ左卷ハイカヾ

弓の鳥打紙にて巻事定りたる式とも見えず大勢の軍兵なれば義經の作略にて紛れぬ爲にせられたる成るべし左巻にしたる事は故あり凡軍陣には左を貴むなり左は敵に向方なり左は進むかたなり右は退くかたなり左巻は手を進めて卷なり右卷は手退くなり

一二のかけの章

六一 くれなゐの縨をかけ

紅のほろ別義なし紅花染の赤きほろなり

六二 おもだかを一しほすつたるひたゝれにふしなはめの鎧きて

おもたかを一しほすつたると云はすり衣なり古すり衣と云物有木に繪形をえりきさみて其木かたの上にそくゐを布に包て木形を打其そくゐ打たる上に布にても絹にても懸てよく押付木形のひくき所へ布絹をくほめ入レは繪の所高くなる扨藍の葉をすりて布に包て布絹の上をすれば繪出るなり是藍すりなり大嘗會の時の青摺の小忌衣も右の如くして山藍の葉にてするなり杜若の花其外花を包てすりたるを花すり衣といふ物かたりにおもたかを一しほすりたると云はおもたかの形を一へん摺て色の薄きをみあゐすりなるべし古はすり繪師とて家業とする者ありし時甘露寺親長卿の職人歌合にもあり同繪士佐光信が

書きしにも見えたり○ふしなはめと云染革昔ありしなり幕の手縄の如く白薄青紺の三色をいなづまの如く筋をならへかさねて染たるなり此革を細く裁て威したるをふしなはめの鎧と云此鎧後三年合戰の繪にもありまた鞍馬寺に納りたる古鎧どもの中にもあり

六三　旗さしはきちんのひたゝれに（軍家者流の云旗奉行か馬上下ミコ下郎モヒタタレ）（ハキルヤ）きぢんと云はきくぢんの略名なり麹塵と云綾なり經(タテ)糸は薄萠木色の糸緯(ヌキ)は黄糸にて文(モン)をおり出すなり文は定らず（文ハ惣ノモンガラノ事ナリ）天子のめすにも麹塵の御袍(ハウ)あり藏人も拜領してきるなり

二度のかけ之章

六四　馬にものらてけく（校註云　惟熊云けくノ下つノ字脱セルカ）をはき弓杖をつひて

前の第二十七條つらぬきの所に記すが如し

忠度さいこの章

六五　文をとつてみれば（此文トイフモノイカヽ）文とは書物の總名なり然れども此物語に文と有は歌を懷紙にかきて狀の如く卷て箙に結付しなるべし盛衰記には卷物を懷中せられしに其卷物に行くれての歌ありしと云猿樂の謠には箙に短冊を付られたりとあれども平家物語盛衰記等に短冊の事はなし

重衡生捕之章

六六　かちに白うきなる糸をもつて岩にむら千鳥縫たるひたゝれに（直垂ニハ染モアリ縫ハ官カケタル人或ハ幼少ナル者着用仕る儀ハ無御座候）かちは紺の色こく黒くなりたるなり（俗ニカチント云イロ也）白う黄なる糸とは白糸と黄糸なり鎧直垂にぬひ物する事長幼ともにするなり

あつ盛最後之章

六七　ねりぬきにつる縫ひたるひたゝれねりぬきとは今世しゞらのしめと云物なり本名はねりぬきなりたて糸は生糸(スヾシ/キイト)ぬき糸は練なる故練緯といふ

内裏女房の章

六八　權の佐定長は八條堀川えぞ向ひけるせきいにけんしやくをぞ帶したり（赤衣劔ト笏ニヤ）赤衣劔笏なり

六九　小村濃のひたゝれに（何色スリコウ何色村ト無御座候テハ相知不申候）

小村濃は紺村濃なりこんむらこをつゞめてこむらこともいふによりて其詞に付て小の字をあて字にもちひたるなり本はこんむらこなり
ムラコハスソコトハ別ナリ

次信さいご之章

七十 能登殿は卅軍はやうあるものそとて鎧ひたゝれをは着玉はすから巻染の小袖にからあやおとしの鎧きていか物作りの太刀をはき二十四さいたるたかうすべうの矢おい
からま染のらの字はうの誤にてかうまきなり香の墨染なり香染は其本は丁子をこく煎じて染たる故香染といふなり今ハニセ色チシテ丁子茶トイフ 香色に巻染したるを香巻染と云巻染とは綿布を縄にてかたく巻て染るなり染て後なはを解ば縄の跡は白くてあるなり○かうあやおとしの鎧○いかもの作りの太刀前に記す○たかうすべうの矢と云は高うすべうの羽をはぎたる矢なり鷲の尾にうすべうと名付る羽あり白くして本の方にうす黒き所あり其所の末の方に高くあるをたかうすべうといふなり

那須與市之章

七一 うすきりうに鷹の羽わり合てはいたりけるぬためのかふらをさしそへたり○鷲と鷹と一羽マセニハキ候事に御座候ヤ
わしの尾の白きにうす黒き所の亂れ散らず黒白の切れのわかれたるはうすきり所なり○わり合とはませはきの事なり○ぬためのかふらは鹿の角のかふらなり三方にぬためを殘して削るなりぬためは角のしぼなり

弓なかしの章

七二 ぬりのにくろぼろはいだる
ぬりのは矢箆を黒染にぬるなり

七三 馬左のむなかいつくしを
馬のむなかいつくしは只馬のむなかいの邊なり人のむねの邊をむなつくしといふに同じ

段の浦之章

七四 はたの横紙には金剛童子を
はたのよこ紙は旗の上の緒を付たる所なり横上(ヨコガミ)なり是古の手長はたなり後代の乳付はたにあらず

遠矢の章

七五 一の篦に鶴の本白こうの羽わり合てはいたる七十
一段ニ申上候通
前の第七十一條にいふ如し
能登殿さいこの章
七六 御硯御やき石左右のふところに
御やき石は温石なり硯温石を身のおもりの爲に
袖に入給しなり
こんかきの沙汰の章
七七 こんかきのをとこ
こんかきは紺掻なり藍染はかりする者なり外の染物は染殿にて染るなり紺掻は職人歌合に歌あり繪は土佐光信が書きしなり
土佐坊きられの章
七八 七枚の起請を書 幾度モ申シ候事ニ御座候ヤ七ノ字ニギリハ無御座ヤ判官都落ニキセウ文ヲ一日十枚ツヽトアリ
七九 七枚起請十枚起請人の所望にまかするなり
靜きせ長とつてなげかけ奉るたかひもはかりして
きせ長は鎧の別名なり高ひもは肩の上に有
今世ハ脇ノ引合ノ緒ヲタカヒモト唱ヘアヤマル

八十 じゆつちやうのづきん
しゆつてうづきんは入道のかぶる紺色にて上とがりたる物なり
判官都落之章
八一 起請文を一日に十枚宛
前第七十八條にしるす凡起請と云文は本は誓詞とは別なり願書を起して上へ請ひ奉るを起請と云三代實錄に見えたる對島の主小野春風が奉りし起請の文も武備の事を願ひ請ひ奉りし文なり此外古書に起請とあるは皆願事を起して請申事なり然るに後代誓詞を立る時もし此詞に違たらば神佛の御罰をかうぶるべしとて佛神に向て御罰を請ふによつてこれをも起請といふによつて誓詞とおなじことのやうになりたり
以上八十一問答
金わたしの事
安元の春の比云々
[補] 文獻通考日本ノ條下云淳熙三年其國人泛海遭風飄至明州無口食詔給之又有百人行丐於市至臨安支給津遣往明州養贍候有使船發向本國云々南宋ノ

淳熙二年ハ本邦ノ安元二年ナリ重盛ノ金ヲ育王山ニ施ス是此ノ事ト見エタリ然其通考ノ大飄流ノ事ノミニテ前後ニ他ノ事ヲ見ズ

校註注 萋按玉海承安三年三月晦日壬戌條云是日法皇贈書及染革三十張沙金百兩干宋云々ト見エタリ重盛贈金於育王山先事纔三年ナリ例ナシト云ベカラズ是モ一證トスベシ

鎭西よりめうてんといふ云々

[補]按ルニ市舶ノ綱首ナリシカレハ市舶ノ便ニ憑テ財施ヲ遣スナルベシ宋國史ノ其事ヲ載ザルモ是故ニヤ

佛照禪師德光

[補]明高僧傳五燈會之等德光ガ傳ヲ載ス

法印問答

當道三經

[補]朝野群載ヲ按ルニ陰陽得業生讀書黄帝金櫃經一部周易一部ト嘗テ安家ニ陰陽道三經ノ目ヲ尋ネシニ金櫃經周易ノ外三經ト云目ナシト云リ

惣別

[補]惣別ハ佛書之會釋ニ出ヅ總想念處別想念處ナド云ガ如シ總別ニ付テト云トキハ總ト云トキモ分別ト云トキモカクノコトシト云心ナリ

淨海が申所ひが事か云々

[補]定俊按ルニ保元平治ノ際重盛功ナシト云ベカラズ然レドモ社稷ヲ安シ宗廟ヲ奠ルモ人臣當下務ニシテ分外ノ故ニアラズ豈誇張スベケンヤ又令文云右大臣以上若散一位喪皇帝不視事三日ト然レバ定限三日ノ外君上何ノ諱避スルコトアランヤ越前ノ國莊務ノ事上皇ノ收公セラルヽモ功臣ニ於テ恩禮ヲ闕キ清盛ガ言語ニ發スルモ不遜ノ至リ也中納言闕ノトキ清盛基通ヲ汲引ス上皇却テ基房ノ子師家ヲ擧任セシム師家時ニ八歳基通ハ二十歳丘ニ世家ノ胤ヲモツテ才幹ヲ擇バズ顯官ニ處セン事ヲ望ム失ハ同ジ基通ハ稍可ナルノミ八歳乳臭ノ小兒ヲシテ納言ノ任ニ居シム失ノ又失セルモノナリ清盛權勢ヲ負テ君上ヲ蔑ニシ甲兵ヲ輦下ニ動ス罪讁辭スベカラズ然ドモ本ト院中ノ政務ハ舊制ニアラズ名實大ニ戻レリ加之今上英明ニシテ傑出ノ主ナリ萬機ヲ親ラセシメン事ヲ仰望ス清盛忠志ナキニアラズ上皇サキニ信賴ヲ寵シテ平治ノ亂アリ尋テ又

成親ヲシテ變ヲ釀セシム禍亂止マルベカラズ清盛ガ跋扈モ己コトヲ得ザルナリ天下ノ危難ヲウレヘテ不臣ノ名ヲ蒙ル大不幸コレニ過タルハナシ然レドモ重盛ヲシテ存ゼシメバ如此ナラズシテ調護スベシ父子ノ間優劣ミルベシ

曾我もの語

奥野狩倉之章

一　やかんをかりけるぼとに

先最初に斷申候曾我物語これたかこれひと位爭の條にわが山のぢうりよにゑりやうくはしやう云々此文によりて考れば曾我物語は比叡山の僧の作なりされば佛法を專用たり又僧の作たる故正體もなき事を口にまかせて俗人の耳を驚し書たる詞あり又同書九月十三夜名有月に一まんはこわう庭に出で父の事なけきし條に父たにましまさは馬をも鞍をもよういしてたひなましさあらば犬追物笠懸をもいならひなん云々騎射秘抄の序并多賀豊後守中原高忠聞書にも犬追物は鎌倉賞朝公の時始る由見えたり賴朝卿の在世曾我兄弟の比はいまた犬追物はなかりしなり然るに右のごとく犬追物の事を記したるはかの物語は鎌倉の末つかたの代歟室町將軍の代歟世犬追物盛に行はれし比書し故常に見聞にまかせて時代違に心付すして犬追物の事を言出たるなり如此の事まことに俗書なりこれらを以て全篇をおしはかるべし野間なるべし

大見八幡かいとうねらひし章

二　かきのひたゝれにしゝ矢さけたるたけ箙とりてつけ

かきのひたゝれは柿染の直垂なりひたゝれは元は地下の者の服なりされは田舍人は柿澁なとにて染て著しなり當時侍從以上は直垂四品狩衣とあるによりて直垂は侍從以上ならては着さる物にて貴き服なりと江戸人などは思ふもあり古は誰も着る服なり侍從以上直垂といふ事は當御家の御制法にて武の階級を定めさせ給ふ御定なり今も京都なとにては官服に非ず公家衆内々の私服なり○しゝやさけたるとあるは鹿矢さしたるの寫誤なり鹿箭は狩に射る野矢の事なり矢を作るにも品々式法有を狩に射るは式にかゝはらすして羽なともあるにまかせ麁相にはくなり羽の端をもからずして置なり○たけ箙は先に平家物語の問に答候たかえひらに同じ

三　もゑきうら付たる竹かさのれんしやくしりかひ

もゑきうら付たる竹笠は竹にてあしろに組たる

笠のうらをもゑきの緒にてはりたるなり此物語の狩の笠皆此體なり○れんしやくしりかひと云は連著鞦なり鞦といへばむなかひおもかひもこもる餝抄桃華蘂葉なとに衢(ツヂ)總連著鞦見えたり延喜彈正式にも見えたり衢總（辻總トモカクナリ）鞦の組ちかへの辻に兩方に總一つづゝ付るなり總をいくならへて連ねて著たるを連着鞦と云即總鞦なり

四　ふくみくつわ

ふくみくわと云銜なきなり重言なり銜ノ字フクムトモクツハトモよむなりこれらのことはゝ僧の作にて正體なきなり追考古き木の葉はみのくつわを見し事ありおもかひつけの輪の下と引(ヒッ)手とを銀のうすかねにて包たり包む事をふくむ（俗ニクヽムトモ云）ともいふなれは如此製したるを含くつはと云か不詳（銜クツハ轡クツワハトワトカナツカヒニ人ノ知ラヌコトアリ有ノ如ク二品ニ用ルコト子細有）

五　またらのむかはき○せんたんとうの弓

またらのむかはきは鹿皮の行縢なり毛に白星ありて斑なり○せんたんたうの弓の製なし是又正體なし若せんたん巻したる弓といふ事歟

六　椎の木三本こたてにとり一のまふし

まふしは伏兵なりまぶしと云は待伏(マチフシ)なりまちふしといふ詞を中略してまふしといふ

筥王箱根へ登の章

七　唯母の文斗にから〳〵装束そへてそ送ける

から〳〵は辛々なり今も命から〳〵逃たるなと云に同し他の兒の里よりは住持同宿の僧なとへも贈り物するに箱王か母よりは文斗に箱王がきへき装束斗から〳〵調へ送りたるを云貧窮故也

鎌倉殿はこね參詣の章

八　するかん浄衣しろひたゝれほいけんせいあたりをはらひ

白き直垂なり○けんせいは權勢なり權威のいきおいのいかめしきなり

箱王祐經に逢之章

九　はんしやうそくの珠數もちてかうのひたゝれ

珠數の事しらず○かうのひたゝれは香染の直垂なり

十　赤地の綿にてつかさやまきたるまもり刀

綿は誤なり綿の字紺地の錦にて包たる守刀義經

記にも見えたり守刀は長サ五六寸七八寸にて今俗に云合くちなり懐中に隠して左脇にさす故脇さしとも云錦にて包むとは鞘も錦をきせて堅くぬひくゝみたるなり守刀とは身を守る刀なり用心の爲なり錦きせぬも有

十一 ふところより赤木の柄にどうかね入たる刀

ふところよりとは脇さし（右ニ云守刀ナリ）取出したるなり赤木は蘇芳木なり柄鞘ともにすはうの木にてしたるなり木地のつかさやは合せめのはなれぬ爲に必どうかねを入也とうかねは金の輪なり

小次郎かたらひえざる章

十二 九萬八千の軍神（イツコロヨリ申シハジメ候フン神代ニ正據御座候哉）

九萬八千の軍神といふ事上古にきこへす平家物語以來の物に見えたり日本の神にあらず荒神經に九萬八千の夜叉神とあり此夜叉神は人に災難を施す事を好む神なるゆゑ是を身方に祭りて敵に災難を施さしめん爲に祭て推て九萬八千の軍神と稱するなり本は軍神にはあらず我國の軍神に非す佛經より出たる事なり

三原野へ御狩の章

十三 大名小名（何貫以上大名何貫以下小名何町以上以下ト申差別御座候哉大名小名ノ名コノ比ヨリ申候哉）

大名小名鎌倉時代以來の稱なり大小の分量詳ならず

和田のよし盛酒もりの章

十四 とをさむらいのちうどらせ（廣キ座敷ノ名ニヤ聞ユ又名目ニテ）

昔の武士の家作は當世には替り候昔は玄關は寺に有て俗家にはなし屋敷の惣廻りは築地あり或ははた板なるもあり大門あり所々小門もあり大門を入て塀中門あり塀中門を入て客殿あり正面に妻戸あり妻戸の内に座敷を押廻して長く廣き板敷あり其板敷に諸侍の祇候する所なり是板敷をさふらひと云又内さふらひともいふ是遠侍に對して内侍と云なり扨塀中門を入て客殿の向に番所あり此所に武具馬具を納置て番の侍用心きひしく番をする所あり是を遠侍と云是内侍よりは遠きゆへ遠侍といふなり曾我物語に義盛が酒盛の條に遠侍とあるは武家にはあらず大磯の遊女の長かいへのことなり是武家にはあらざれども大家にて常に鎌倉の諸武家遊びに行くに忍ひあるきに非ずおしあらはして馬にのり供人あまた

具し幕なとうたせて遊ぶ事なれば長か門内にても遠侍を作り置て供して來る侍ともをば遠侍に入置て番を勤させたるなり

ふん女の章

十五　外道出立ノ所　くちあんへいのつなぬきに　平家物語橋合戰のつらぬきぬいてトアリ同物ニヤ文字如何

佛說を以てみたるなり正體なき事なり

十六　ひつきやうくうしくの四方白のかふとを猪首に着ごこうしゆいのいか物の太刀を佩　此文ニテハイカモノ作ト云モ製作アリケニ御座候

同上○いか物作といふ太刀製作ある事なり天竺にはなし

十七　今の世にかふとの龍頭を打事此時よりそ始りけり

以上三說佛氏ノ經說ナルベシタツカシラノ事時ニヨリテ能相似候故作者ノ作意ニヤ

同上かふとのたつ頭始る事是又正體なし

虎か杯十郎にさしぬる事

十八　十郎しやくとりなをしさん候　或ハ扇しやくとり直しトアリ笏ノヤウニ持ニヤ和田ノ屋形へ行段に十郎扇しやくにとりなをしとあり　扇を笏の代に取りしなり笏は音コツトヨム忽忘に備ふると云義にて奏聞すべき事又勅詔の旨を忽に忘るまじき爲に笏に書記て持つ是唐の國の事なり本朝にて笏紙とて笏に紙を貼して書付るなり其外には笏を身の前の正中に持てかたちのひすまざらん爲の矩に用て持なり故に謹で人に對する時は笏を正しく持向ふなり其如くに扇を持なり

五郎大磯迄行の章

十九　赤銅作りの太刀ト文字にむすびさけ　刀ト十文字ト云ニヤ

腰刀　コシノモノトモサスガトモ　と太刀と十もんじなり

腰刀ノ事平家物語ノ問サヤマキノ條ニ答シコトシ

二十　すいかきをはねこへ

すいかきは透垣なり塀の上の方をふさがすれんじをして向の見え透くやうに作りたるなり

廿一　忍ひかねたる有樣はたうはひしやもんの　佛家の事しらず

朝比奈五郎力くらへの章

廿二　みきはまさりの大ちから

みきはまさりは見際か見窮歟

小袖乞の章

廿三 紋から面白ければとて秋の野に草つくしぬふたるねりぬきの小袖模様ヲ紋カラトモ申ニヤ。ねりぬき練貫ニヤ今云ネリニヤ又羽二重ノ事ニヤ近來書立タル故實拾要ニ臣下束帶段ニ韈（表裏白練貫老者ハ平指）トアリ同物ニニヤ今云シヽラノシメ字練緯頭ニ御座候韈ニハ如何別物同名ニヤ

經生絹緯練糸にて織たるを練緯と云今のしゝらのしめなりのしめと云は右のしゝらをのしたる心にてしゞらなきをのしめと云しゝら地のねりぬきのしめ地のねりぬきなりのしめは古へは兒または女など幼ク若き時計着るなり男はしゝらを用ゆ惣體に横筋を織る物なり襪などには白きを用ゆ今白ねりと云なりぬりとはねりぬきの略語なり。紋からは文様(モヨウ)の事なり秋の野に草つくしとあるは白ねりぬきに繪をかきぬひ文をも交たるなり古は染もよふはなし皆ゑかきしなり

勘當ゆるされし章

廿四 めんろふのちり打拂國謠熊阪ト云ニコヾノメンロツカシコノツマリト〇文字如何

めんろうはろの字らとなすべしめんらうはめんとうの轉語なりたらと音横の相通故めんたうをめんらう共云めんだうは面道なり約めてだうとも云校註云惟熊云たうノ上ニめノ字脱タルナルベシ 面は家のおもてなり家の面の外まはりに板敷をしたる通り道なり即ち緣頰の事なりめだうといふに馬道と書はあて字なり本は面道なり轉じてめんらうと云

廿五 五郎は烏帽子のざしき

座敷は座を敷くなり頭にえほしの坐を敷なりえほしの頭にすはりたる體をいふ

太刀の由來の章脇指トツシモ刀ナリ妻手指ノ遺製ニ御座候ナリ

廿六 三ッの寶あり第一にりうわう作の長刀第二にくもおとしといふ太刀第三に此かたな

脇指の事前の守り刀の條にいふ如し刀も妻手指も平家物語の間さや卷の條に申述し如し。りうわう作以下の事しらず他書に所見なし

廿七 五郎にひやうこくさりの太刀

兵庫くさりの太刀は柄もさやも銀のうすかねをきせてふくりんありつばも何も皆銀なりあしも銀にておひとりに銀のくさり有古兵庫寮の官は武具をあづかり又武具を作る事を司とる故かの寮寮ハ役屋敷ノ名ナリには上手の細工人を召置なり其兵寮

の上手の細工人の作りたる鏁と云事にて兵庫くさりといふ相州鶴ヶ岡八幡宮の神室に頼朝の兵庫くさりの太刀あり銀作りなり尾州熱田社の神室にもありこれは金作なり

廿八　らいこうの御時大國よりふあくたゆふといふはくやをめし（らいこうハ頼光ニヤ大國ト云ハ外ノ文義ニテミレハ唐ヲサス様ナリはくやハ莫邪カ劍ツクル名人ト云ニヤ○干將莫邪ノ莫邪ニヤ頼光ノ比鍛冶ノ渡リシヿ有之候ヤ○或時二ツの太刀トアリスヘノヤツヒトフリトミヘタリ此太刀ノ由來外書所見御座候ヤ○てうか○むしはみ　毒じやひめ切フアクタイフト云モ和人ノ名ノヤウナリ）

正體もなき昔物語なり

三島かさかけの章

廿九　ひと〳〵たとふ紙をはさみ七番のかさかけをゐて

笠懸に遠笠懸あり小笠懸あり小かさかけは板のはさみ物を立て射るなり曾我か射しは小笠懸に疊紙を挾み物に立て射たるなり古は今世の如く小きはな紙と云物はなしひきあはせと云紙を折て懷中せしなりふところ紙とも鼻紙ともたとう紙とも云諸用につかう紙なりたゝみやうあり又はさみ物に立るには射手の疊紙とて折様少違あり。

富士野の狩場之章

三十　やかんをひら野におひくたし（やかん野干ニヤ奥野ニ狩場之章ハ野間カ）

此やかんは狐をいふ野干と狐は別なれとも我國の俗には狐を野干といふならはしたり

卅一　その日の御裝束にらきのてういのふしまつのかさ折したる立烏帽子（風折シタル立烏帽子トハイカヽ）

此本文助語を寫し誤り且脫文あるへしと思ひ候愚意を以助語を改め脫文を補て云らきのてういにふぢ松をかた織したるひたゝれ立えほし如此なるへしらきのてういは羅綺の重衣にて衣服の美麗なるを重ねきたるをいふ羅綺の重衣と云語は朗詠集にありふし○松はふぢ○松なるへしかさ折はかた織なるへし織物に固織浮織の二品あり松に藤花の咲かゝりたる文様（モヤウ）を固織にしたる直垂なるへしかたとかさ字體相似たるゆゑ寫誤なるへし

卅二　熊のかわのむかはきしはうちなかにめし

芝打は行縢のすそを云すそを長くゆたかにしたるなり

卅三 五郎丸もゑきおとしの胴丸に一尺八寸の大かたな指四尺八寸の太刀を佩 何ホトヨリ寸法也刀ト云ヤ

平家物語の問さや卷の條に答候如く古へ刀といひしは脇指の事にて長さは五六寸よりして九寸一尺はかりあるはなしめぬきの腰物なり五郎かさしたるは一尺八寸なる故太刀とはいひたるなり今世に常にさす打刀一名ツバカタナの事を刀とはかり云ゆゑ古書に刀とあるを見ては心得違あり

卅四 和田はたけ山いつれも鷹をそすへさせける 猪狩ニ鷹ハ

古代狩といふは鹿狩の事なり猪狩にはあらず鹿狩にも鷹をすへさする事は人々の好にまかする成へし 古ハ鹿チカルチバタヽ狩トバカリ云狩ノ本ナルユエナリ

卅五 とねりなしをむすひ置かゝみのむちをうちそへて二ッひとつのすて手綱むくんりうにおちかゝり

此條馬術家の鞭手綱の手と見えたりむくんりうは馬の乗方の流義の名と見えたり此物語書しころ右の流義世に行はれしとみえたり今は詳ならす

仁田猪乘の章

卅六 ゐのしゝかふし草かく十六つきたる

詳ならす

卅七 烏帽子竹かさくつむかはき一とに切ておちにけり

烏帽子ノ製イカヽ

昔のえほしは紙のはりぬきにはあらず緒にうるしぬりてやはらかなりし故おしひらめて冑をもき又笠をもきたるなり後三年合戰繪にえほしの上に笠きたる武者あり又十界圖といふ古書にもえほしの上に笠きて狩するものあまたみえたり

舟のはしまりの章

卅八 然れは舟の船の字を君にすゝむとかきたり 舟ニスヽムノ訓イカヽ

文字しらぬ俗説なりふねと云字のつくりは公にあらす㕣如此同その偏は舟如此なり草書に船の字を𦨞とかくを正字しらぬ人㕣を示の草書と思ひ𦨞を公と思ひてキミニシメス云義なりといひしを覺え誤てキミニスヽムと誤て重ねたるなり

祐經をいんとせし章

卄九 もよきにほひのうら打たる竹笠ウス紅ゐて打たる表紋の竹笠

にほひの事平家物語に答申如くなり但此條は竹笠のうら打たる絹の事なり是もえき色のこきか段々うすく端のかたしらけて染たる緒を云なるへし平家物語もゑき匂ひの鎧の間に答しを參考せらるへし○表文又狂文ともいふ笠の上を色々に彩色したるなるへし平家物語の問狂攻の狩衣の答參考せらるへし

四十 からさいみのてうを○二所藤の弓

からさいみは唐のさいみなり○二所藤弓は二所つゝ藤をよせて卷なり

四一 ふせんりやうのひたゝれ○ふきよせ藤の弓

ふせんりやう浮線綾ニヤ

ふせんりやうは浮線綾なりいとすしをうけたるあやとよみて浮織の綾の事なり古今著聞太平記なとにも其證ありしかるに後代誤てふせん蝶と云文の事をふせんりやうといひ違へて諸の裝束抄ともにも多くあやまり來れり○吹よせ藤の弓は弓の本末の間處なり五六寸七八寸斗の間に細く藤を卷たるを一所にあまた並て又廣く間を置て又前の如くに一所に多くよせて藤を卷なりたとへは冬かれの庭の面に落葉をこゝにも吹よせかしこにも吹よせたるにたとへて名付るなり藤卷たるはゞ三四分斗なるを一分程つゝ間ヲ置ていくつも卷其次に六七寸も廣く間を置て又前の如く卷なり

四二 きんしやにてうら打たるうき紋の竹笠

うき紋の竹笠は是又例の正體なき詞歟笠に浮文固文はあるへからす若うはこの字の誤にて濃き紋を笠に書たる歟それも何色をこくしたるや但正體なき例の詞と見るべし

やかた廻りの章

四三 二ッ木瓜幕ノ紋

木瓜の紋を二ッ書たるなり木瓜はもつかうといふ文なり

祐經やかたへ行章

四四 殿原とすけつねはいとこおいといふもの

伊藤次郎が爲に祐經は甥なり河津三郎は祐經かいとこなり

兄弟出立の章

四五 白きかたひらの脇深くかきたるに

ひたゝれの下に白布の大かたひらを重ねて着たるなり大かたひらは廣袖なり脇をかくくと云は左右のわきをぬひつゞけざるなりひたゝれの如くわきをあけて置なり昔は直垂の下には必大かたひらを重ぬるなり同袴の下には必白大口をかさねて着るなり

四六 一寸またらのゑぼしかけを強くかけ 當時ハ烏帽子懸ハ用ヒラレズヤ

白と黑と一寸またらに組なり是えほしかけの本式なり平組なり丸組にはあらず一名項頭掛とも云今世正月登城の無官の人々のえぼしかけ皆丸組を用るは本式をしらぬ故なり又えぼし懸をひたひの上の風口へ引とをしてほかけ舟の如くしてきるもき樣をしらぬなりさる間えぼし動きて落やすし

四七 からさゆみのひたゝれ 四十章カラサイミ同物ニヤ今ノサイミニヤ

からさゆみ前のからさゐみに同し唐のさいみ布なり

四八 ひやう紋のえぼしかけ

ひやう紋のえぼしかけは是も平組にて前にある一寸またらの如く赤白組なとをまたらに組交たるなり後三年合戰繪に此えほしかけ見えたり

屋形〳〵の前にて答し章

四九 半しやうそくのけいこの者木戸をきふくたゝて 半シヤウソクノ珠鼓トモアリ

半しやうそくは小具足したるを云なるへし

祐經にとゝめをさす章

五〇 柄もこふしも通れ〳〵とさす程にあまりにしけくさしけれはくちと耳と一ッになるいく刀もさし通たる故疵大になり口も一ッに破れたるなり

十番切之章

五一 おし付のはつれにかひかねかけてうち込れ

うしろの方肩の骨兩方蛤貝の樣向ひ合たるほねなり

五二 いと毛の御腹卷

いと毛は毛引に糸にておどしたるをいふ

按曾我物語第七母の勘當ゆるされし章に古き歌をおもひつゝけて「おなじくは空に霞の關もり

て雲路の雁をしばしとゝめん」是はためよ卿のよみし歌そかし云々爲世卿は文保年中の人なり(花園院、後醍醐天皇の御代迄の人なり曾我兄弟死去よりはるかに後の代の人なり是時代違ひなり爲世卿の歌を以て古き歌と記したるを以て考るにかの物語は室町殿の時代に作りし物なるべし最初に斷たる趣と是と參考し給へ

以上曾我物語

十訓抄

第一可施人惠事

六 枇杷をひとふさとりて琴爪にて皮をむきて 京極太政大臣

宗輔公也○上代ハ琴ニ爪ナシト承及候イツコロヨリ始リ候ヤ

校註云

琴爪の知らす 惟熊云 琴爪の知ノ間ニ事ト云字カ有無トカ云字アリシガ落シナルベシ

樂人は知るべしつれ〳〵草の文段抄云中園殿の說に箏のことに蘇香の樂ゆるされし人は大指食指中指の三ッの爪を生すと宣へり云々蘇香の樂ゆるされざる人は爪を用る事と聞えたり

十八 白き衣赤き袴着給てうやゑほしして居給ひたり

白き衣赤き袴うやゑほし此體をひやくえといふなり ハカマハ赤ニカギラズ 内々平懷の體なりうやは恭なりびやくえにてうちとけたる姿なれどもうや〳〵しくえぼしきたるといふ意なるべし

陽成帝御宇

廿八 翁あさきのかみしもきたり扇ひらき 直衣水干直垂通用ニ上下ト唱候ヤ水干上下直衣上下ト申候ヤ

水干長絹直垂素襖などは上と下と同地間色にする故かみしもといふなり水干の上下直垂の上下と云事勿論なり袍直衣狩衣などは上と下と同地同色ならぬゆゑ上下とはいはず

四三 風の氣の煩はしき程にて御やきいしなとまゐらすとてひまなく候にて 七十六章平家物語能登殿さいこの段

風氣の病人に汗を出さんとて温石にて脊を熨すなるへし醫書にも病人の脊を熨す事あり

第四可誣人上事

二 年高き人有直衣にうす色の指貫紅の下の袴を着てなへたる烏帽子をしてゑぼしの尻のいとたかくて 前にもいふ如く昔のゑぼしはやはらかなるゆゑなゆるなりやはらかになへたるえぼしのしりの方を引上てきたるなり

第七可專思慮事

廿一 猶あゆみ入らせ給ふに大御直衣のらヽんをくはて引とめ奉つれは 印本古事談二十七段ニアリ御衣ノスソチヒキトメ申トアリ

らヽんのらの字衍文なり袍直衣半臂なとのすそに横幅を付たる襴(ラン)と云装束圖式と云書に繪圖あり

卄三　はなたのあをに青袴着て

はなたは縹色なり今世はないろと云〻あをは襖の字なり襖は上古武官の着る闕腋(ケッテキ)の袍なり衣服令延喜式に見えたり狩衣は裁縫したる形闕腋袍に似たる物ゆへ鷹狩に着る襖と云心にて狩襖と云なりしかるにいつ比より歟武官の襖をは闕腋の襖と唱へ狩襖の事をたゝ襖と唱へ來りし故襖の名まきらはしくなりて諸の裝束抄ともに襖の事落着せざる說多し源氏物語關屋の卷やらんにいろ〳〵のあをどもつぎ〳〵しきといへるも狩襖の事をあをとかけるなり

卄一　源兵衛尉は繼物を金の文付て　新古事談ニ源兵衛尉ハ烏帽子ヲオトサレケリナント有之候

繼の字は縫の字誤歟縫物したるに金の文付し成へし

第八可堪忍于諸事

一　行成少もさはかずして主殿司をめして冠取て參れとて冠して守刀よりかうかひぬき取て鬢かいつくろひぬ

守刀は前にも云如しわきざしにて懷中にさす物なりそれにかうかひをさすなりかうかひとはかみかきといふ事なりえぼしきて髪をかきつくろふ爲に守刀にさして持なり源順か和名抄に冠帽の具中櫟(レキ)鬢を出して和名カミカキとあり又勁(ケイ)刷(セ)の字をも出せり是もカミカキとよむ冠帽具の中につらね出せる事は冠えぼしなどきてびんをかきつくろふ具なる故なり今ちいさ刀にさすかうかいの事なり

第九可停懇望事

二　館の三郎義光　頼義三男トアリ新羅三郎ニヤ何ニヨリテ館ト唱申候ヤ

館の事しらす

九　おりことつき琵琶　チリト云ツギト云ハ

折琴衝琵琶なりツギにはあらず衝と云も衝(ツキ)折たるなり琴琵琶をへりくたり卑下していへる詞なり實に損したるにあらす

十　かちんの水干にさよみの袴着て

今もあるさいみ布なりさよみさゆみさいみ皆音相通なり

同　年比をしみおかれける蒔繪の弓を中院入道右大臣のもとへかへしやるとて

八年まて手ならしたりし梓弓かへるをみてもねはなかれけり　雅定ヨリ伊尹參議ニ任スル時迄リダマヒシニヤ上ザマニテモ蒔繪弓ハ秘藏ニヤ

蒔繪の弓は大將中將少將なとの持つ弓なり公家の弓なり

第十可庶幾才能事

廿九 代々の御渡物倚子時の簡（琵琶カ）玄象鈴鹿以下　廿九條平家物語主上都落ノ章ニいんかく時の簡玄象すゝかとあり此所にて相濟申候

卅五 近は德大寺の右のおとゝ打まかせてはいひ出がたき女のもとへ獅子のかたを作りたる茶碗の枕を奉るとて　燒物ノ枕ニヤ

燒物にて獅子の形を作りたる枕なり古書には陶器の事を茶碗の何々と云例あり

以上十訓抄十五問

古事談

第一卷

陽成院化物の章

四 淺黃の上下きたる翁の
淺黃の上下は十訓抄の間に答畢

行成刀の事 十訓抄ニアリ

三河と云童發心の事

九 けん紋紗の兩面の水干に袖むらごに雀のゐたる
をそぬひたりける
兩面の水干は裏打の水干なり裏は平緒にて表裏同色なるなり袖むらこは袖はかり村濃に染たるなるへし紫むらこか紺むらこかむらことは紫にても紺にても地白きに所々むら雲の如く端々をうすくちらして染たるをいふ

第二卷

鬼同丸賴光をねらふの章

二 牛追物あらはやと 犬追物ノミ傳ヘシナリ此文章ニテハ未法式アリシトモミエス
牛追物古代は行かゝりに犢牛(コウシ)ある野にて射たる事なれとも賴朝の時より馬場の法量を定られし事東鑑に見えたり牛追物射樣は高忠聞書に見えたりされとも犬追物の射樣を知らぬ人は心得かたかるへし

出家功德の章

十一 おろ〳〵ある頭にふくろのゑほしを引入て
ふくろのゑほしは古代の緒にうるしぬりて常の頭巾のことくやはらかなるを云鳥羽院以後えほしかたくなりたる時代にいひたる詞と聞ゆ

第三卷

武者所むつるみさごを射るの章

十八 御前を罷立て尺矢を取て參りたり
尺矢しらず

續古事談

卷一

近江守仲國はけ物に逢章

十一 しヽあをのかり衣車刀のあるをとりて
製法アリヤ又文官武官トモニ車内ニ設之
しヽあをはしらあをの書誤なり白靑にて今云水あさきなり車刀とて製法なし車の内に入置太刀の事なり

經賴くちなわに逢の事

十四 またふり杖といふ物つき江戸方言サンマタノ事ニヤ
江戸方言さんまたの事なり木杖のまたあるなり

內記上人陰陽師紙冠やふる章

十七 なにしに紙冠をはしたるそ
法師の陰陽師なれはえほしはかふられぬゆゑ紙冠したるなり今世の死人の額に三角の紙をあつる是なるへし年中行事の繪に童子のひたゐに黑き三角のものをあてたるありひたゐえほしともいふか西行歌夫木集ニしのためて雀弓はる男のわらは額えほしのほしけなるかな

卷二

袴垂と云賊保昌にあふ章

五 さしぬきのそばはさみて絹の狩衣めきたるきて
着タル衣ノ狩衣ノヤウニ見エシニヤ狩衣ハ着テサシ貫バカリニテナルベシ
狩衣らしく見ゆるなりたしかに見定めさるなるへし

卷四

御物の鷹を十禪寺の辻につなく章

十一 たヽの直垂上下にあみ笠きたるのほり人馬より
烏帽子着タル上ニアミ笠キタルニヤ
たヽの直垂は織文なともなきをいふかえほしの上にあみ笠あやゐ笠なとも着るなり後三年合戰繪十界圖なとにも見

內裏女房ぬすひとの章

廿一 とうはらまきに左右の小手さして胴腹卷ト云モノアリヤ亦胴丸ニハラマキシテ着シヤ
ひをくヽりのひたヽれはかまに花段子、木蘭地、褐、緆紺村濃、長絹、藍摺島摺秋野スリタル、黃褐、紫ノトウ染、平クヽリ纐纈細筋曳柿、唐貲ノ直垂等色模樣イカ、
とうはら卷只腹卷の事なるへし。ひをくヽり平家物語の問に答候如し。木蘭地は赤黑なる色今

江戸にても正月出仕に着る人有。深紺色俗にかちんと云、伴むらこ前に答申如し。長絹の事平家物語に問答し如し。藍摺同上。島よりは島形をすりたるなり島形とは今世島臺と云物の臺の形なり洲濱(スハマ)形とも云。秋野すりたる平家物語の問に答ることし。黄褐は今云きからちやなり。紫のとり染は紫色に細くしほり染にしたるなりとり染犬射すあふにも用犬追物の書に見えたり。平くヽりはひをくヽりの誤かひをくヽり平家物語の問に答たる如し。纐纈はくヽしそめとよむ今云しほり染なり但花形を括り染るなり和名抄に見。細筋は如字今世は島といふ。曳柿はかき澁にてかすりを畫たるなり。唐貲からさいみ也

後鳥羽帝御勇力之章

廿一 御幸の時はゑほしかけしてくヽりたかく（烏帽子懸ハ紐ナルベシ常ハカケストモスミシニヤ御幸ノ時ナトハ晴ニカケシヤウナリ〇テウスカケ同物ニヤ）えほしかけは式正の時用之常はこゆひにてきるなり

新古事談

巻二

わらしへ名馬となる章

二 はたこ馬食モノツケシ料ニヤ　かわこ馬萬ノ調度ツケシ馬ニヤ

ふみむら三疋ノ事トミユムラトハ如何

賢考のごとくなるべし

巻四

妄語の僧女におどさるゝ章

一 不動袈裟といふをかけて

不動袈裟は今も山伏のかける袈裟なりふさを付出もあり金のりんぼう打たるもあり是を江戸の俗すゝかけといふは誤なりすゞかけ衣とて麻布を柿澁染にしたる衣なり是も山伏のきるなり義經記に義經の御臺所かめわりやまにてわか君を產したる時辨慶わか君をすゞかけ衣に包みし事あり猿樂の謠物あたかの始に旅の衣はすゝかけの露けき袖やはらふらんと云も同じく衣の事也

堪能は一心によるの章

六 身はまづしくてありながらまゝきを好て 印板古事談六

巻續古事談六巻新古事談五巻右ノ内ケ條奉伺候新古事談ト申書五巻御座候事ハ古キヲ引新モマシヘテ正數書題シ候得トモ文章ノムケニ相見エ候付不奉伺候

まゝきを好むはまゝき弓射る事を好みしなりまゝき弓は今用る木竹合たる弓なり夫木抄に證歌ありまゝき弓は的射る弓なるゆゑ次將装束抄にも大射賭弓射禮に眞巻弓矢弓掛を具すべきよし見えたりまゝき弓の軍笠考補正の評に委くしるしぬ今略之

雜　問

一　はつふりはいつ頃より始候や 雜太平記はつはり太刀ト云事アリ帽子兜ノ事ニヤ　はつふりの始不詳候今川了俊の難太平記に見へ候は猶其昔より有し物とはしられ候はつはりといふははちを二つわりしと云事にて太刀に名づけしと云はつふりのはつとかぶとのはちとを合て八八となづけしなりはつふりは今世ひたゐかねと云物にてひたゐよりつぶりの上半分かゝるなり是内かぶとの用心なりこれは目の下のほをあてを用る時の料なり追て思ひ出したれ後三年合戰繪にはつふりに猿頰あてし武者見へたれば平家の時代より有し物なりかの書工飛彈維久は平家時代の人なり軍器考同圖式に鐵鉢(カネ)を半首とせしは誤なり

二　馬驗小馬驗はいつ比より起候や

馬驗は信長記に永錄の比まで馬驗と云事なかりけり元龜の比より初り次第に長じて今しるしの長とすと有

二　鏡鞍前輪ニ鏡ツケシトノ說モ穩ナラヌ樣ナリ

平家物語の問に答じことし

四　武田信繁討死に母衣を臺にあげしと云事

保元平治の物語より以下古き物語ともに名將勇士討死の事多見えたれども母衣を臺に上しといふ事曾て見えず甲陽軍鑑信繁打死の事に初て見えたりかの軍鑑は僞書なればほろを臺に上しといふ事はそらごとなるべし是より近世軍家者流此事を秘傳などゝ書て臺にあげ樣を敎ゆをかしき事なり且今日は討死と思ひ極めたる日はほろを臺に上る是を見て士卒主の討死するを知て粉骨の働をするなりと云是又笑ふべし戰塲に臨む者は日々に討死と思べき事なり甲州の侍は今日は討死する日今日討死すまじき日といふ事あるか士卒も主討死せは粉骨の働をすべし討死せぬ日はよいかげんに働へしといふ事あるか是甲州侍の風儀かおもしろからぬ事なり咲へし

五　當時の筆立を失立と云事如何

平家物語に箙のほうたてより小硯疊紙取出しなとゝあるより起れり後に小硯は便利ならずと今の檜杓の樣成物を作て箙に添たる事なとより今

に矢たてといふなるべし箙は矢を立る物なり矢立に添るといふ事成へし平家物語の問に答しを參考し給へ

六

五六の鐙

五六の鐙の名義色々樣々の妄說あり愚老若年の時よりかの妄說をは信せず別に眞說あらんとおもひて諸書をも探り物知る人にも問けれども眞說とおほしき說なし今年初て眞說を考へ得たり常人ならば甚深極秘とすべき事なれども愚老は然らず如此のしれかたき事は諸人にしらしめん事を願ふに依て五六鐙考といふ書をあらはして所望の人には見せて寫さしむるなり事長ければ此所に記されず他日かの書を一見し給へ

七

綾ゐ笠あやすけ笠狩ニカキリ用ルニヤ藺ヲ以テ織ヲ綾藺笠萱ヲ以テ織ヲ綾笠ニヤ曾我物語ニハ竹笠トアリ夫ヨリ下ニ起リシヤ今ヤブサメ等ニ用ルアヤスケ笠ハ或人曰德廟ノ御時鎌倉ノ古キ寺ノ什物ニアリシヲ指上タル由麥カラニテ作リシ物ナリ上ニ三角ノ物アルヲ綾井笠ト云無ヲ綾スケカサト云ト

あやゐ笠は笠の上に巾子を立たる藺笠なり其圖文安御即位調度圖と云物にあり古代常に用し日笠なりあや菅笠もすげの笠なりあやと云は編む事なるへしさして意義なし今世やふさめに用らるゝあやゐ笠は鎌倉より出しにはあらず享保年中御尋によりて南部東大寺中正倉院より古きやふさめ笠を献上せしを本にして新に作らせられたるなり笠のほねにくゞ縄をからみ張て麥わらをあみつけ赤紫白かの風帶笠の上にあり愚老按るに此麥わら笠は是は田樂笠なるべし職人歌合の繪に田樂法師のきたる笠に似たりかの笠上に莖立て其上丸く少し平める形あり

序に申候此條に德廟と記されしは有德殿の御事にて候歟某廟と申候は漢土にて天子の廟を稱し候事にて候我國いまだ天子の御事を右の如く稱候事國史本朝文粹等にも見えす候況や將軍家に於てをや

御代々御院號は寛永寺增上寺より付申たるにては無之勅號にて候然るを近年儒者の輩　御院號の院の字を私に剃して常憲公有德公と云徒も有之荻生惣右衛門以來の儒者は憲廟又德廟なとゝ書候是等の事　上には曾て御用不被成候稱號にて候を下として私に如此稱し奉り候は甚可恐事に候儒者の癖に漢土を尊崇して中華中國と稱し

我國の事をは倭俗と云て賤しめ甚しきは自ら夷狄と云に至るもあり此國に生れ此國の食を喫ひ此國の服を着此國の國恩を受けながら此國を賤しめ外國を尊むは不義とやいはん不禮とやいはん國賊とやいはん己が生國を賤しめ外國を尊よとは何れの聖人の詞にて何の經典にあるや儒者人倫の道を正すべき者にあらずや然るに右の如くなる事をいふは儒者にはあらず其主恩を知る狗には劣れりかの漢土を尊ひ我國を賤しむる心よりして此國の萬事を悉く漢土の風になさんと欲する故文章を書にも專漢土の風に背かざる樣にせんと思ひて憲廟德廟など丶稱するなり曾て國體に合はす且　上を恐れ奉らさるなり又俗儒の文章に　東照權現宮の御代の事を指して國初と書たるあり是亦當らざる事なり漢土にて國初と云ば天子弑し王位を奪ひ國號を改る故國初と云なり此方にては　　國常立尊の御代をこそ國初とはいふべけれ此方にては國號を改し事無之東照宮は　天子を弑し給はず　皇位をうばひ給はず國號を改め給はざれば國初と稱へきの義なし然るに國初といふは東照宮を以て簒奪の逆臣とするなり是又　上を恐れざるなり又俗儒の文章に　將軍家を指して官家と稱す是又當らぬ事なり官家とは朝廷をいふなり天下の政は皆將軍家より出るといへども臣下なり何ぞ
天子の事を以て稱するの義あらんや賴朝卿以來足利家十三代に至る迄將軍家を官家と稱せし例なし漢土には天子の下に將軍あつて國勢を執る事なければ漢土の風と大に違へり假りに將軍家を朝廷に比して云ふとならば虛事にして實事には非ずたゞ一場の戲文にして百代に傳ふべき文章にあらす君臣の差別をもしらさるは闇昧の愚人なり賢にんもかの俗儒の例文を信して德廟と書れしは誤なり國學に志あるに依て此事を示し侍りぬ

八

梓弓眞弓月弓の事

日本書紀云手ニ捉ニ天梔弓天羽々矢云々梔ハ假字也實ハ櫨字也古事記云即天若日子持ニ天神所賜天之波士弓天之加久矢云々又記應神歌曰知波夜比登宇治能和多理邇和多理是邇多氐流阿豆佐由美

云々梓弓檀弓也三代實錄元慶二年云下二符相摸國一令レ採進槻弓百枝一安房國百枝信濃國梓弓二百枝但馬國檀弓百枝備中國柘（ツミノ）弓百枝備後國百枝云々これを皆丸木弓也弓材を以て名を呼ふなり延喜式兵庫寮式云梓弓一張注云長七尺六寸槻柘檀準レ此云々　同民部省式云凡甲斐信濃兩國所レ進祈年ノ料雜弓百八十張注云　甲斐國槻弓八十張信濃國梓弓百張云々　此外諸書に弓名あり不レ遑二枚擧一今略レ之了右何れも丸木弓なり。義經記忠信最後ノ條去年十一月十三日文治元年都を出て四國の方へ下り給ひし時都の名殘りを捨かねて其夜は鳥羽の湊に一夜宿し給ひたりし時にひたち房を脱字アルカ以て義經か住たる六條堀川にはいか成者のすまんすらんと仰けれはひたち房申けるは誰か住候はんおのつから天狗のすみかと成候はんと申けれは義經か住あれし所に天まのすみかとならん事うかるへし主の爲にもおもき甲冑を置つれは守となりてあくまをよせぬ事あるそと小さくらおとしの鎧四方白の冑山鳥の羽の矢十六さして丸木の弓一張そへておかれしそかし云々。今川了俊筑紫の道行ふりに

云生まかる眞木の丸木の弓取はすくなるよりちからこそあれ云々丸木弓は古代專征戰に用ひし弓なれとも久しく絶たりしを享保の比　將軍御尋によりて何方よりか古き櫨の丸木弓に內の方に劍樋かきて朱染をさしたるを獻せし事ありそれを以て御再興ありしかの弓は參考太平記に白木に劍樋かきたるとある是なり樋をかくは少弱みを付んか爲なり樋をかゝざるもあり愚老が古き丸木弓康正元年トアリをうつし削たるには樋なし丸木弓は征戰に最もよし雨露濕氣には木に潤を得て折るゝ事なしはなるゝ愁なしそこ強くして堅物を貫くによし冬は燥きて折る事あらんかそれも木理の直に通りたるをまさめに取て削りたるはおれす常に內に油を浸して掛け置は木に注ありて燥く事なし新木の時は引にくけれ共年月をへて弦（ツル）なるれはうるはしくひかるゝなりされは伊勢物語に梓弓ま弓つき弓年をへて我せしがごと熟はしみせよ　夫木抄

正三位知家卿　つるなれぬあらきの弓のそりたかみさていたつらにひく人もなし　木弓の新し

きをあらきの弓といふなり丸木の新しきは弦なれすして引にくきをいふなり

九　古代の座敷には床なくおし板と云物有之由如何

古代の家作に床なし押板といふは床を板にてはりたるを云疊を入るもある故板にてはるをは押板と云床はいつころ始るにや詳ならす愚老か按るは鎌倉の末禪學のはやりし比よりの事なるへし床は佛家の座敷佛像の繪をかけ前に大卓に三つ具足を置くなりされは床を上座とするなり俗家にても佛法を信する故床を作りたるなるへしされは掛繪は佛像を本とするなり曾我物語に押板といふ事ありかの物語は室町家の時代に書しと見ゆる事先日の問に答し如し太平記第卅七新將軍京落の條に六間の會所には大紋の疊を敷ならへ本尊脇繪花瓶香爐鑵子盃に至る迄一樣に調へて云々床とはなけれとも床の飾とみゆ北條か比專禪學はやりし故禪家の座敷の體武家に移りしなるへし

十　壺碑の事　小壺村云説如何或人云道程ヲ記タル故積歩（ツムホ）ノ碑ナルヘシト源二位ノヨミ歌ニアレハ久シクツボノ石フミト云傳フトハ見ヘタリ

壺碑は古奥州多賀城中の碑にて京下野常陸蝦夷靺鞨國に至る迄の道法り數を記したる物なり天平寶字六年恵美朝獦修造也筆者三雲眞人なり見事なる筆跡なり壺音コ酒ツボ也壼音コンツボトヨム庭の事なり桐つほ梅つほなとは此壼（コン）なり壺とは別なりつほのいしふみのつほも壼（コン）の字なりつほのいしふみ土中に埋れありしを寛文年中土民ほり出して今は道の傍に立て雨おほひの小屋かけてありとそ愚老かの碑を打たるを所持せり他日見給へ二幅まて持たり一幅は享保中陸奥守より獻上せしを御屋從衆拜借して翻刻して打たるなり奥州のと同し事なりつほのいしふみの類も多くあり

本朝書目大概

眞僞の書御點御加可被下候

キ僞書也　イ未見也
チ近世作也　朱ナキハ古書也

古事記　キ舊事記　日本書紀　續日本紀
日本後記正本ナシ代ニ日本逸史　續日本後記　文德實錄
三代實錄　延喜式　同格　神名帳式ノ内ニアリ
神皇正統記　元々集　禁秘抄　公事根元
國名風土記二册アリ古ニアラス　日本風土記殘册三本餘ハ疑ハシ
江家次第　令義解　百寮訓要記　職原抄
姓氏錄アルカイカヽ　新撰姓氏錄　チ公家名目ヨシ
チ同要覽ヨシ　法曹至要抄　弘安禮節一册ノハ正本也二册ノハ僞
キ禮綱本記大成經ノ内　經教本記同上　キ大成經
扶桑略記　チ本朝通記出所知レヌヿアリ　チ日本遷都考ヨシ
古語拾遺　源氏物語　榮花物語世繼物語ノヿ
伊勢物語　女郎花物語　大和物語　十六夜日記
土佐日記　宇治拾遺物語　同大納言物語
竹取物語　松尾物語　空穗物語　住吉物語印本ヌケアリ
世繼物語榮花物語ノヿ　續世繼物語　西行物語
同撰集抄　雜和集　夜之鶴　稱覺記

無明抄　海道記　同道之記　方丈記
四季物語　徒然草　枕之雙紙淸少納言ナラハノ字去ヘシ
梁塵愚案抄　古今著聞集　十訓抄　故事談
續故事談　チ曉筆記　あろ物語　拾芥抄
チ犬追物々語ヨシ
以下、古書也其餘ハ近世ノ俗書オホツカナシ
ヨ近世ナレ𪜈ヨシ　キ僞書也　朱ナキハ近作
前々太平記　前太平記　奥羽軍記陸奥話記後三年合戰記ニチ一度ニ刊
板メ號惣チ……ト云　滿仲五代記　、陸奥話
、後三年合戰記　、保元平治物語　、保建大記
歷代軍記　、源氏一統志　、源平盛衰記
源平太平記　、平家物語　、曾我物語　同勳功記
、義經記　同興廢記　同勳功記　木曾義仲記
賴朝一代記　同三代記　鎌倉九代記
北條九代記　時賴記　、東鑑　、保曆間記
、承久記　太平記　南朝太平記　楠一生記
同戰功記　三楠實錄　楠軍物語　キ同兵庫卷
キ同知命抄　キ同家傳七卷書　キ同一卷書
キ同櫻井卷　キ同千早問答　キ同法令卷　同全書
キ恩地左近聞書　キ江源武鑑　義貞勳功記
殘太年記　、室町殿物語　後太平記取捨アルヘシ

續太平記同上　鎌倉管領九代記　、應仁記
重編應仁記　、明德記　、文明一統記　、應永記
、椿葉記　、富士御覽記　、永享御幸記　、結城戰記
、嘉吉記　、長祿記　、康富記　、親元記　、穴太記
、光源院記　武家評林　和州諸將軍傳
筑紫軍記　河野軍記　西國太平記　中國太平記
北國太平記　七國志　本朝三國志　陰德太平記
南海治亂記　、北條五代記　同盛衰記
同盛衰記　同太平記　、難太平記　勢陽軍記
戸次軍記　宗像軍記　菊地佐々軍記
キ甲陽軍鑑　武田三代記　信玄全集　同武經
甲亂記　三好軍記　九州諸將傳　四海太平記
織田軍記　、信長記虛實アリ　北越軍記　明智軍記
石田軍記　、大閤記　清正記　天正記
淺井軍記　同物語　蒲生軍記　東國太平記
土佐軍記　賤ヶ嶽記　、大坂物語　古老物語
ヨ武武者語　島原合戰記　川中島五戰記
諸家前太平記　諸家高名記　武將感狀記
甲越戰爭記　古今軍物語　同勇士物語
軍記ノ類後代亂世之勝敗之事且近年ノ作ニテ古實方ニ入用少シ故ニ多ク見ス候勝敗ヲ知ノミニテ益少シ

御院藏書目拜覽奉希候
愚老性疎嬾故書籍之蓄書不多候少許ハ有之候多ハ他ノ藏書ヲ借リ集メシテ間ヲ合セシノミニ候藏書目錄追テ可呈候甚數少恥入候事ニ候

今昔物語　印本十五冊

一　巻一北野大臣長谷雄大納言語
前の放出のかうしの上に　碁擲寛蓮語ニ放出シノ廣庇トモアリ
放出をはウダシと訓を付たるは印本にしらすして妄に訓たるなり源氏物かたりにははなちいでと有母屋より横にはなち出して立たる家なりたとへは丁如此なり上の一文字は母屋なり下のーははなちいでなり今世俗に角屋（ツノヤ）と云

二　冠に襖着たる　襖ハ素袍ニヤ冠ニ素袍如何
袍の左右の腋を縫ひつらねたるを縫腋の袍と云襴あり是は文官の袍なり左右の腋を縫連ねずして闕て有を闕腋の袍と云襴なし狩衣に似たり是は武官の袍なり此武官の闕腋の袍の事を衣服令（エフクリヤウ）に襖と記されたり是本名なり冠に襖を着るは左右近衛左右兵衛左右衛門の六衛府の武官装束なり冠は巻纓にしておひかけを懸るなり
碁擲寛蓮語

三　尻切はきもあへす
尻切シキレとよむ革のざうりなり

四　鞘　於爪上勁厰をかへす語・
勁厰（トウセツ）をとりいたし
勁厰の勁誤なり勁ノ字なり勁厰（ケイセツ）一名櫟鬢（レキヒン）とも云これ腰刀にさすかうかひの事なり源順か和名抄冠帽の具の章に云櫟鬢又文選に云勁厰理鬢　李善曰通俗文所以理鬢謂之厰也厰音雪　釋名に云[illegible]　音盗　導也所以導櫟鬢髪也　櫟鬢音歴和名賀美賀岐　と見へたりかみがきを轉じてかうかいと云なり倭名抄冠帽具中に列たる帽子なときて鬢かくに用る故なりねさめの記に行成大納言守刀よりかうかいぬき出してひんかゝれしとある宿直する故かみかいをさして持たるなり腰刀にさすもひんのちらけたるをかきつくろはんか爲なり是かうかいの本用なり其外の事にも用ひけれどもそれは本用には非ざるなり借用なり

五　女行醫師治瘡語
顔をなをしはめて具をつくつて泣ければ
具をつくつて泣と云事詳ならず推て案ずるに源平盛衰記巻三澄憲祈雨の章に重盛の事を書たるにベジクチシテエモワラハズとありヘジクチは

へ字口(クチ)なり人の顔悦はさる時は唇の形への字の形になるを俗にベソヲ作ルと云ふソハベ字の轉語なるべし泣く時の口の形もへノ字の如くなるなり具をつくると云も此事成べし蛤具の形への字の形に似たり　又ゴカヒヲアケテナクモ云ハ蛤具ヲ舉テナルヘシ

六　巻三延喜屏風の語

母屋の簾おろしたり朽木形の几帳のきよけなる禁秘御抄清涼殿ノ篇に五間(イツマ)注今略之帳注之四面有ニ几帳帷ニ夏生(スヽシ)以ニ胡粉ニ書ニ華鳥ニ冬朽木形下略　此文をみれば几帳のかたびらに夏は花鳥を胡紛にて畫き冬は朽木形を胡粉にて畫くなり朽木とは冬の景にて枯木を畫をいふなり

七　蠻繪に蒔たる硯の箱の手長足長ナト蒔繪ニ致シ候ヤ

古書に蠻繪と書たるもあり盤繪と書たるも有盤は正字にて蠻は假り字なり此國の古書は文字の音訓をかりてあて字に書事多しされは一概に字義を以て釋すれば誤る事有是此國の古書を見るの一つの習なり盤はめぐる事なり草木の花鳥獸の形にても何にても文を圓く書事を盤繪と云なり小補韻會盤蒲沿ノ切蜀紅三峽中水波圓折スル者名曰盤トと是めぐるの義なり

八　巻六平維茂討藤原諸任語

綾藺笠を着征矢卅筋に鴈俣二ッならべたる胡籙を負て握太かなる弓の革所々に卷たるを持打出の太刀帶て　十三卷季武値姑獲鳥章打出ノ太刀トアリ

胡籙は箙なり箙の字の古訓やなくひなり和名抄に見ゆ此條は箙に征矢三十さして上さしに鴈俣二ッさしたるなり。彼物語所々に革卷たる弓見えたり是は元かなにてかわ卷たるとありしを後に寫者カワを革と思ひ誤て革と書たるなるべし弓に革卷事なしかはは革にあらず樺(カバ)なり樺卷と云をかばさくらの皮を卷く事とするも誤なり弓にも鞭にも笛にも樺をまくといふは細き籐(タウ)にても糸にても卷事なり何故樺を卷といふなれば外の木の皮は竪にきめ有故皮を剝は竪にむかれるなり樺櫻の木の皮は横にきめあり皮をはげば横にむくれるなり弓にても何にてもまくは横にまくなり樺さくらの皮の身木に横に卷て有か如くなる故樺を卷といふなり此事。知りたる人なし又矢

にかはきと云は是は皮はぎといふ事なりまゆみの木のあま皮紙の如く成を以てはぐなり的矢の本なり是も卷事をは樺をまくといふなり皮はぎを樺はぎと云は非なり。打出の太刀といふは金銀をちりばめたる太刀と云事なり金銀を打のべる事をうち出といふなり甘露寺親長卿の職人歌合の繪の中（土佐光信筆）しろかね細工の繪の詞書に南鐐してうちてわろきとあり南鐐は銀の上品にて常の銀よりもかたくて細工のしにくきをいふなり源平盛衰記に巴かきたる笠を打出の笠と有銀にて打のへたる笠をいふなるべし

九　卷十二東國の人過花院御門語

綾藺笠を着たり（下略）打出の太刀を帶節黑の胡籙に鷹俣の二並に征矢四十斗さし（下略）鹿毛なる馬の法師髮にて（征矢モルハ數ノ限リモアリヤ）

節黑の胡籙は節黑の矢を着たる胡籙なり古書に例有（校註云　盛衰記ニ石打ノ胡籙ト云モ同例ナリ）節黑とはふしかけをぬりたる矢なり。法師髮とは馬のたて髮もふりの髮も根より刈り去て坊主の如くなる故法師髮と云盛衰記に宗盛の馬を刈り法師にして有も同じ事なり此體の馬後三年合戰の繪にも見えたり

十　主達これを見よ寺冠社冠の得てせんや

詳ならす推て按るに佛寺の冠者社家の冠者といふ事歟冠者とは近比元服したる少年の事を云寺の兒社家の童といふ事にてもあらんか

承久記　印本二冊

十一　（三丁ノウラ）御裝束の下にあまれたらんにくるしくも

アマレタランハ召の字を誤て二ツニ分ケタルナリ召タラン也

十二　細太刀の柄の車の手かたに入たりけるを知せ給はて打おらせ給ひぬ

細太刀は儀刀にて威儀の爲はかりにはく太刀故細く作りたるなまくら物なり生鐵にて打なり野宮中納言定基卿の說なり

十三　（五丁ノウラ）藤大臣殿官位をも除目殊に望にも過てなされけり是は官打にせんため

官打といふ事聞なれす未詳文字書誤か若は官家より關東を打給ふといふ事歟然らは追伐征伐な

と丶云へき事なり

十四　十三丁オモテ　京極表は棟門平門にて大門なり高辻をもては土門にて小門なり

此門の製とも未詳按に棟門と云は門に外より向て棟木を竪さまに渡して正面を搏風作りにしたる歟平門と云は門に向て棟木を横に渡して正面に軒端の垂たるか土門は東鑑第二十七第三十一にも見えたり右大内裏の時土御門と云も是なるへし清少納言枕草紙に雨まことにふりぬなとか異御門のやうにはあらてうへもなくつくりそめけんとけふこそいたくにくけれ云々これ土御門の事をいへる文なりうへもなくとは屋根のなきを云雨やとりのならぬ故いたくにくけれと云なり左右より土居をつき出して其中間に屋根もなき門を立たるを土門といふ成へし庭訓往來に上土門とあるはまた別なり

十五　同ウラ　或は物具の毛につき亦は名對面に付て

我名を名のる事殿上の名對面と云事も名をなのる事なり

十六　十三丁オ　餘りにきふく射られて

きひしく射られたるなりびとぶと音相通なり　キフシクト云チシチ略シテキブクナリ

十七　十四丁オ　半官か持たりける弓の鳥打所をはたと射けり　今云鳥打ニヤ

常にいふ鳥打なり

十八　廿六丁オ　向の岸に黒革威の鎧に月毛なる馬に乗てくろつはの矢負

黒羽の矢なりつは助語なり天津風下つ岩ねなとのつに同し

十九　廿八丁オ　黒革威の鎧に蒜の母衣

蒜印本に文字の寫誤なるへし異本なけれは正すによしなしもし紫の字を誤るにや

廿　三十丁ウ　鞍の前輪鎧こめ尻輪に射付られ　尻輪トハアト輪ニヤ

尻輪古名しりつ輪ともしづ輪ともあと輪は今名なり尻つ輪のつも助語なり右に云黒つ輪の例也

廿一　同　波多野五郎尻もなき矢にて　根ノナキ矢ニヤ

やじりなき矢なり和名抄に鏃夜佐岐俗に云夜之利

廿二 三十二丁オ 甲の甲をつかんで甲ノテヘンニヤ甲トモ申ニヤ
甲のてへんなり。甲の一字はよろひかふとの惣
名なり甲冑とつゞけて用れは甲はよろひ冑はか
ふとなり東鏡には誤らず如此用ひたり平家物語
盛衰記太平記の類には冑をよろひ甲をかふとに
用ゆ誤れり序に此事示し候

同下巻

廿三 二丁ノオ 足立三郎鎧はよし橋けたに鎧うな羽ふきて居た
りける 同二丁ノウラニ打外ヤウニ鎧打羽フキテトモアリ
鳥の羽つくろひするをうち羽ふくと云武者の身
つくろひしたるを鳥にたとへて云たるなり
呉竹集長明 うち羽ふき今もなかなん郭公 卯の花月よさかりふけゆく

廿四 三十丁オ 山田次郎か川端に唐笠さゝせて軍の所知して居
たりけるに 下ノ文ニ大雨トアリ〇ハヘタテタルヤウナレハ雨凌カントテ傘サヽセシヤ唐笠ハ書誤リシヤ
日笠なるへし甲冑日にやけさる爲なり

廿五 同ウ 平井五郎鹿を射る條三段斗につめよせて思白毛
の本を鏑は此方へ
思ふはあの所を射んと思ふ矢つほなり白毛は鹿
の尻に白き毛あり

廿六 五丁オ 其中に不動こんからせいたか童子を笠しるしに
付たる旗とも 笠シルシニ付タル旗トハイカヽ
下文のカサシルシの所にて申へし

廿七 六丁ウ 額をゐられたりけるかみかんはかりはれたり
密柑程なり古語にはいか程といふをいかはかり
と云露ほとゝ云を露はかりと云曉程と云を曉は
かりと云類なり

廿八 六丁ウ 三番に平三家兵衛盛綱鎧はぬいて小具足に太刀
計帯て白母衣を懸
鎧に具したる小道具を小具足と云はいたて小手
すねあてして鎧をはきたるを小具足したるとい
ふなり

廿九 子息左衛門太郎とて十五になりけるかたふさき
に白帷子を着腰刀はかり捨
たふさぎは犢鼻褌とかきはだばかまとも云肌に
付てきる袴なり膝ふしにかゝる程の短き袴なり
今モ安房ノ國ノ土民フンドシノ事チタフサキト云同類ノ物ナル故誤稱スルナリサレ𪜈古名チ云傳ヘタリ

三十 十二丁ウ 三浦の笠しるしを弓のはつにつけて指上たり先
に渡る輩是を見てあはや次郎殿渡させ給けると

て弓ノハツニツケテ旗ノヤウニセシナルヘシ普通ニ大キ成ベシ大笠シルシナリヤ旗持ノ笠シルシチサシアケシヤウナリ

卅一　十三丁ウ 下文の笠しるしの間の所にて申へし

卅二　二十九丁オ 長覆輪の太刀帶て 此段先達テ伺申候

具足もちて木にのぼりて枯たる枝共トモ切おろし 其職分ノ道具モ具足ト云ニヤ。大工ニ鏁カナタカ取テ木ノ枝ナオロシタニヤ

具足とは惣して道具の事を云鎧にかきらぬ事也

應仁記 印本

卅三　下廿四丁ウ 政長の其日の出立は黒革威の腹卷にひろ袖つけて小泉甲の緒をしめ ヒロ袖ハ大袖ト云ニヤ 腹卷ハ袖ナキ物ニヤ

廣袖は即ち大袖の事なりつぼ袖に對して廣袖共云小袖に對して大袖ともいふ。小泉胃未詳小泉は地名なるか

卅四　廿六丁オ 敵の中に蟬小旗持つれたる

蟬とは蟬口の事敗古の手長旗は旗竿の蟬口に結付るなり大旗の如く小さ旗を竿の蟬口に付たるを蟬小旗といふなるへし

卅五　鑓の事所々にみえたり此比より始りしにや鎗の字にや 安間了願カ作始シト又神代矛鋒ノ遺製ニヤ軍器考ニテ大抵分明ナルヤウニ見ユ

鑓は阿間了願よりも前に太平記に有此事軍器考に詳なり鑓は古の手鉾の變なり後三年合戰の物かたりに手鉾見えたり其手鉾を飛驒守惟久か繪に書たる體今のすやりの如し穗はゞひろし柄長からすとみゆ太平記に城の土矢さまより鑓長刀を突出したる事有其比に至て手鉾の柄を長くして矢ざまより外まてつき出すやうにしたるとみゆ遠くへつきやるといふ事にてやりと名付文字も金編に遣の字を合せて鑓と字を作り替る成へし槍鑓なとの字を鑓の事に用ゆるは近世の事なり槍鑓共にほことよむ字なれは相違はなけれ共柄の長きをやりと云義によらは長槍又長鎗なと書鑓にはかなふへからむ

明德記 印本

卅六　九丁オ 相圖の螺を吹立て

貝螺の事を軍器考の說の如し上古は法螺を用る事なし大角小角を用たり軍防令に見えたり兵部

省の被接の官に皷吹司と云官有て軍の吹物の事を司とり常の時に皷吹を以て皷吹司を試み習はする事有貞觀儀式に見えたり皷とは太皷鉦等を打ならす事吹とは大角小角を吹く事皆軍事の號令の鳴物なり和名抄に大角はラノフエとあり角の圖は武備志に見えたり朝鮮人來聘の時行列の最前にあさかほの花の形の如く先の開きたる長き笛を吹く是角なり其音法螺を吹くに似たり此方にて上古は大角小角を用られけれとも後代は廢れたる故法螺を用ゆる事になれるなり

卅七 家僕御退治の御出なれはとて御着背をもめされす御烏帽子に長絹直垂をめされ 敵ニアタラザル敵ユヱニ長絹召タルニヤ 中卷四丁ノ表ニハ御小袖ハメサレスフスヘカハノ御複卷トアリ将軍モツヨク働玉ヒナンニヤ

初より鎧にても腹卷にても召るへきなれとも家僕退治の事なれは鎧腹卷めさす是にて其儀式濟たる故後には腹帶をそしたる成るへし

卅八 十八丁ウ義弘 赤地の錦母衣をかけ

錦なとの如くなる厚き物にて母衣作る事なき事なり明德記の記者制作の本意を知らすして猥りに麗にいはんとての文章なるへし用ゆへからす

異本にはあをぢのにしきと有是又同前なり

卅九 十九丁オ 同丸の○腹當に帽子甲にて 同丸ハ胴丸複當ハ腹當ニヤ

同丸の腹當の○ノ字衍文なり胴丸とも筒丸共書く筒宜歟

四十 廿丁ノオ 馬の胸懸かいつかみ二重皮四足平頸

馬の名所に書たる圖物を見るにふたえ皮と云は馬陰莖の事なり馬のまらの皮の二重に有所を云なり和名抄に陰脉俗に麻良佐夜とありまらの鞘なりまらさやは古名なり

四一 鎧をこして下立て二尺八寸の太刀のつはもとまて血になりたるを眞手持て大内介に打て懸る義弘は敵を小太刀とみたりけれは 承久記應仁記明德記共太刀ノ寸ノ普通ニ大キクナリシニヤ三尺ニタラヌ故小太刀ト云ニヤ

太刀かたなの寸尺定法なし人の體の大小腕の長短力量の强弱に隨ふへし其身に自由にぬかれ久敷ふりまはして腕の疲れさる位の長サ重サを以て其身相應の佩刀(ハキカタナ)の定尺とすへし至極長きは三尺を限りとすへし是佩刀のほとらひなり。大太刀は佩刀よりも甚た長く六七尺はかはりもあるへ

し是はくものにあらす戰場へ出るに背にはつそらに懸て負て出るなり。小太刀は佩太刀の短きなり右に云たる佩刀よりも甚短きなり是は時により所によりて上つまりひくき所せはき所なとは小太刀に利有或はかくして衣服の脇なとに指はさむなり脇指の太刀と云も是なり。中半太刀は佩太刀よりは長く大太刀よりは短きなり中間の物故中半と云是もはくものにあらす戰場に用るなり。

長太刀は及二三尺にて長刀の如く長き柄をすげたる物なり或書に柄の長さは其主人立て耳の下より足までの長サにすへしと云是野太刀とも長卷とも云柄を細き麻繩にて卷なり及を磨研に不及戰場にて人馬の足をなくり倒し打殺す具なり。

右の如く。佩太刀。大太刀。小太刀。中半太刀。長太刀と五品に心得へし明德記に二尺八寸を小太刀といへとも小太刀にあらす佩太刀の長きなりすへて軍記の類ひは文華有二尺八寸を小太刀といふは其人のこつからを大にせんとて文華なるへし和漢ともに文華あり大を記すには大に過し小を記すには小に過る事皆文華なりよむ者推察して其中をとるへし孟子も武成に於て二三策をとるといへり

四二　因幡脛楯のさね共に（同ウ）

因幡脛楯詳ならす因幡の國より作り出せし物かさねともにとあれは伊豫はいたてなとの製に似たる歟

同中卷

四三　御所の其日の御裝束には熊と小袖をはめされすふすへ革の御腹卷の中に通り黑革にて威したるをそめされたりける同し毛の五枚冑の緒をしめ累代の御重寶と聞へし篠作と云御帶刀に二ツ銘ト云御太刀を二振を添てぞはかせ給ひける藥研徹しと云御脇指をさゝせ玉て（御帶刀ハ御キセナガト云ニヒトシク敬シテ申言葉ナルニヤ此比ヨリ太刀二振ツヽ帶シニヤ今ノ大小ト並ヘテサス起ナトニスヘキニヤ）

小袖は足利家重代の鎧の名なり。御帶刀御はかしとよむ弓を御とらしたらしと云は（とらしの轉語）と云に同し。印本に御脇指とあるは誤りなり義滿公の時脇指をあらはしてさす事なし寫本の異本にはやけん

とをしと云御腰物とあり是を用ゆへし御腰物は御腰刀共さすりともいふ物なり太刀ニフリハキタルハ大小チサス初トスヘカラス

四四 一色左京大夫の裝束には赤地の錦子にてつゝみたる金同に白糸の鎧のつま取たるを二兩着重給て同し毛の五枚冑に五尺二寸の銀の鍬形打て猪頸に着て四尺三寸と聞へ泥丸に三尺八寸の黑鞘の太刀二振帶て白地の金襴の大笠符を内野の風に吹せて栗毛なる馬の八寸にはつれたるに白覆輪鞍をいて金鏁の馬鎧

かなとうは强力の兵士鎧の下にきる物なり鐵にて打て四枚胴にとぢたる物なりくさすりも付す胴はかりなる故かな胴と云袖も草摺もなき故から胴とも云太平記ニカラドウ此胴をどんすしゆす染革なとにて包みたるを包胴といふなり。白糸のつまとりたる鎧は白糸威の鎧の袖草すりの兩端を細くへりを取たる如く紅糸にて色取たるなり。白フクリンノ鞍は銀のふくりんかけたるなり。馬鎧を上古は具裝と云軍防令並に賊盜律に見えたり其製は詳ならす後代は革にて製たるもあるゆゑ金鏁のといへるなり愚老か同寮の家に革の馬鎧有しを繪圖に寫しぬ漢土の製よりも不便利ならむと思はる漢土の製は武備志講武全書なとに見えたり漢土の製に習て作らは宜からん

四五 笠標の義冑の後にもつけ左右の袖にもつけしこと軍器考にあり其制度も定れる式なきことにや又付所の定れることもなきよし承久記下五丁オモテノ向の岸に奈良法師熊野法師數千騎向たる其中に不動こんからせいたか童子笠符に著たる旗共打立てありけるか河風にふかれて靡けるは實におそろしくそみえたりける下略右の文をみれは四半指物など云ものゝ起しはしめともいひなんにや其名は信長記の前後におこりし由は軍器考には記されたれと名は異にして物は同しきにや笠標とはなへて味方といちしるしくみんためなるにも思はれぬにや又明德記中十六丁オ一色左京大夫の裝束には赤地の錦子にてつゝみたる金同に自白の鎧のつま取たるを二兩着重ね給て同し毛の五枚甲に五尺二寸の銀の鍬形打て猪首にきて

四尺三寸と聞へし泥丸に三尺八寸の黒鞘の太刀二振帯て白地の金襴の大笠符を内野の風に吹せて下略是も其身ひとりのしるしなるにや軍器考にしるされしは元弘帝の御袴を切或は白絹何程にきり或は青松葉さゝれしなと多くはとみに出来なんことなり奈良くまの法師原のかくむつかしき繪かきて五百も七百もたくはゝなんやうもなきにやなへての器の名のかへなんはかたくして其器の形の時にかはるはすへての習なるにや難太平記にある馬に著し幟をも云ふものにや承久記も其比の法師なとの作なしたるにや

笠驗と云は背の印を云事本なり笠印と云はかざし印の略語なりかざしとは頭さしなり禁中にて舞樂のとき舞人の頭に竹の枝花紅葉なとをさしはさむをかざしと云なり挿頭と書なり冠の巾子(コシ)の前にさすなり其如く甲にさす故かさししるしといふ笠驗と書は詞に付てあて字を用るなり扨凡物の名にも詞にも轉用傍通有たとへは墨は油煙を煉りかためて色は黒き物なり然るに朱をねりかためて色は赤き物なるを朱墨と云類ひなり是墨を轉し用て傍に通したるなり此類ひの事その例多し笠しるしと云は元は背の印の事なれとも轉用傍通してすべての物の目しるし皆笠しるしと云袖に付るを袖の笠しるし腰に付るを腰のかさしるしと云旗の紋をも旗の笠しるしと云ねさめの記に衣裝は富貴の第一の笠しるしなりとも見えたり此轉用傍通に心つかざれは不審有へき事なり是を以て能考へ見給へ。太平記に主上紅の御袴を切て賜りしといふ事のあるを軍器考には笠しるしにしたるよし記されたれとも太平記には笠しるしにしたる事見えす白石翁か推量にて書るなるへし太平記には士卒の志をいさめんか爲に忝くも十善の天子紅の御袴をぬかせ給ひ三寸つゝ切て所望の兵ともにそ下されけるとありて笠しるしにしたる事は見えす又所望の兵共にとあれは所望せぬ者も有しなるへし笠しるしにせんには所望不所望には依るへからす天子の御袴なれは申うけて身の守りにしたるなるへし

職人盡歌合 印本

一 三番とき歌につるき太刀みねなる日と詠り つるき太刀のみねにやみねともいふにやみねといふは本語なりむねは俗語なり

二 二番かへぬり腰に佩ぬるはさやまきにやさやまきにて候

三 四番こうかき 紺かきにや以前平家物語の問に答る如し

四 十番むまかはふ腰にさしぬるは打刀とみえたるに二十四番せんし物うりも同しものさしたり三十八番壚賣も同し四十六番暮露の帯ぬるも同しほろは燧に打刀と見ゆ十番二十四番三十八番四十六番は形は似たれとも圖の如く塗て柄は見え侍らす旦那家藏に平家物語の屛風ありいかさま二百年計にもや過にしとみゆる物なり筆者の名もなし印章一つはへる印中たしかにもみへねと興己とあるにや興之とも思はる其比は小篆なとも杜撰のみ多き比なれはさもありぬへしさて畫は土佐と申傳のみにてありあまりよしともみへす狩野の者のよき粉本にてやかきしともみゆ甲胄の粧其餘ふるき圖にてかきしものなるへくや其中に木曾か眞盛か首みる所に馬添の者の鎧も著す白き馬の口綱とりてあるか同し物帯ぬさかりし者は犬まねきの意にてやかきし

打刀に非す腰刀なり平家物語の問に委細答へ候へとも未打刀腰刀の差別會得不被成候と存候鞘尻にひれの様成物あるはさやに革帯をはめたるにて候其帯をぬく時の手かゝりの爲にさや尻にひれを付置なりよき人は如此せす皆下賤の者の腰刀此體なり。平家の繪屛風の事見不申候ては是非申かたく候

五 同し中に冑に今云赤熊と云なるものと見える物つけてさきちやうの鬼のかふり物のやうにみゆ頭に半は筋冑にて後のなかは赤熊かけしもあり又白熊かけしもあり赤熊の上に烏帽子つけしも見え候ぬ鎧の威には異やうなるもみえし是は別條伺候へく候

しやくまあやしく候信玄なとの諏訪法性の冑なとを似せたるにてはなきやいふかしく候かの繪

六 うたかはしく候

十六番つるし松坂つる關つると詠り伊勢の國に其地の名もありそれか所に出せしにや。ふせつるのきれぬともこれは塗弦にや

せきつるに二品あり伊勢國關の名物を云又一つは弦を糸にて卷て出しを坂弦といふ軍器考の餘に關弦坂弦の事あり見給へふせ弦も越中國射水郡布施と云所より出るを云か 京祇園ノ坂下ノ者弦サスモノアリ是チモ坂ツルト云ヨシ

七 十七番ひきれうり木ひき切うると云事にやいなはからしは因幡椀にや。麾下蜷川氏の家紋は二〇ガウシバシと天正紋盡にも見え候かうしはし合子箸にや

ひきれは引入合子なり段々に入子に重なる故木椀を引入合子といふ因幡合子は因幡より出しなるへし蜷川氏の紋合子箸なり

八 十九番さいすり右詞にいぬを物のいきめも候そと有犬追物にやさいのいりぬる事のあるにや

いぬを物のいきめ詳ならす犬追物古書多くあれともさいを用る事は見えす按犬追物を勝負に射る事品々あり賭物を出すなり相手と矢數同うして勝負分らさる時はさいのめをふりてそれにて勝負をわけたる事もあるは傳書にみえぬ事なれは如何なり

九 二十一番ゆわうはゝきとは何商にや

いわう付木の事はふきはみごはゝきと見ゆ

十 二十四番せんしものうりとは何にや繪に一ふく一錢とある人の腰に付し物なにゝや

風の藥なと賣にて有へく候腰にあるは腰刀のさや半分見ゆるなり

十一 二十七番いかけ地にせよとは歌になし地とも詠りちり地と云は是よりかみさまに申せしにや

いかけ地とちり地別にて候いかけ地の事以前平家物語の問に答し如くに候ちり地はなし地に候

十二 四十一番藏まはりは何にや

藏廻りは家々の藏より出す拂物を買ふ物なり

十三 五十七番てうさい詞にまんちうの事あり始にもまんちう賣あり

てうさいは今世菓子屋と云者なり古代菓子といふは木のうりの類ひなり古物かたりに御くだ物

四

といふなり今は菓子といふはまんちうやうかんの類ひを云

右書はいつの比にか出來しにや一番番匠の詞に相國寺と有京五山相國寺にやされは京都將軍の比にや

此書は甘露寺親長卿の歌合にて繪は土佐元信か書に候繪卷物なり板本は惡く候人形一つ書落し有親信卿は　後花園後土御門兩朝の間の人なり

職人歌合九品有

○建保職人歌合　○甘露寺　○觀近聖　○二條良基公　○一條兼良公　○烏丸光廣卿　○後水尾院　○近衞三邈院　○足はおろ覺也追て可申候相國寺は京都に有　○無名歌合以上九品有之愚老朱點の分四品所藏に候

右十四問答

古今著聞集 寫本

政道忠臣之章

一　後朱雀院の御時旬にまはりたりける上達部を御覽して次日資房卿の藏人の頭なりけるをめして昨日公卿の裝束を御覽せしかは以の外に袖人になりにたり○袖人なにゝや

袖人　袖大の寫誤なり續日本紀元明天皇和銅元年八月にも大なるを禁られし見えたり

二　光方廷尉佐にて着馱政につきて着馱何にや

著はツクル也馱は寫誤なり本字は鈦俗に作鈦字彙に大計切以鐵加足在頸曰鉗在足曰鈦タイノ音ナレトモ此方ニシテハタト唱是は罪人の足にくさりを付て置なり延喜式因獄式着鈦の事見えたり着鈦政と云は罪人の足に鎖を付置たるを五月と十二月と兩度に刑罰に行るゝ政なり事は江家次第公事根元なとに見えたり

公事之章

三　一條院御時束帶にて殿上の日給には逢へきよし起請日給とは起請も御定なと云事にや

起請は以前申候如く願事を起し上に請ひ奉るなり日給は以前申候如く殿上の御簡を日給の簡と申候此札に殿上ゆりたる人の姓名を記してあり臺盤所にて日給の食を給るに束帶にて給り度旨願申たるなり其以前には衣冠にて給りたるなり

四　後鳥羽院公事の道を深く中略院の御下重尻をたまはらせ給て御腰にゆいてもゝゆきはきて○モヽユキハ何ニヤ

もゝゆき不詳何そ誤字なるへし板本をくらへ見給へ

文學之章

五　爲憲朝臣土豪に頭をいれて○豪とは何なるや

豪詳ならす寫本ノ著聞ニテ問レショシ承候板本ト引合見給へ此方手元ニ無之候

和歌之章

六　源三位の天王寺にて尼に給ふ扇。件扇紵骨はかりゑりて其外は細骨にてなんはへると此文合點參不申事

おや骨を檜木にしてねこまをゑり外の骨は竹の細ほね歟

管絃歌舞之章

七 雅朝親王御船にて下略 御半臂をたまはせけれは親王行て拝舞し給けり此日勅有て親王舞劍をゆり。半臂といふは舞樂の裝束にや常さまにも着するにや舞劍とは如何

半臂は束帯の下にかさね着る服なり舞人なとのきるなり江戸の束帯に不用か。舞劍の舞は帶の字の誤なるへし

八 天曆元年正月内宴行はれけるに重明親王勅を受給りて琴を引給ひけり

校註云
琴トハイツコロ我國ニハ絶エハヘルニヤ既ニ上代モアレハコソ天王寺法隆寺等ニハ聖徳親王ノ琴アリ重明ノ彈タマヒシモ琴ナルヘシ末ノ詞ニ武絃タエタリトアリ疑フヘクモナク五絃ニ文武ノ二絃ヲ合テ七絃ナルヘシ又此章ノ内十三絃ハ箏トカケリ七絃ノ琴絶テ後十三絃箏ヲモナヘテ琴ト申ニヤ今アル七絃ノ琴ハ明僧心越カ持テ來レル也形ハ琴ナルモ有トモ法隆寺ニアル太子ノ御物ト云ニオホヒニ似タリ重明春鶯囀酒清司ヲ奏スト中ニ今傳ヘ來ル琴ハ微音ニテ管絃中ニクハヘナンモノニハ侍ラズ七絃ノ琴ノタエタルハイツノコロニハヘルニヤ

琴の始詳ならす古事記に大己貴命の天詔琴(アマノノリコトノ)見えたれとも琴の字コトゝよみてキンの音に非らされはキンの事共云かたき歟琴いつ頃より絶しといふ事知るへからす物事衰たる事絶たる事なといつ頃よりと云事は明ならぬなりいつともなしに衰もしつ絶もする物なり右欽明天皇十五年百濟國より樂人數人を貢る由日本紀に右樂人來るに空手にては來るまし必諸の樂器持來りしならむ其樂器の中には琴箏瑟なとも有しならむ琴の音の強弱なと今しるへからす是らの事樂工に問給ふにしかず

九 新羅三郎豊原時秋に大食調傳へし段、兄義家朝臣陸奥の難義なると聞て兵衛尉を辭申て陣につる袋かけて下ると是武士の官辭する作法にや兵衛尉を辭申てとあれは官辭するか文書を添てと云事にや

文武官ともに官職辭するに上表あるへし義光奥州に下りて義家朝臣に力を添んとおもひて御暇を申けれ共御ゆるしなかりけれは陣に弦袋かけて下りける由後三年物語に見えたり衛府の弦袋は上より給るよし盛衰記長谷部信連か語に見えたり御暇給らさるに奥州へくたる故給りたる弦袋をときて衛府の陣に返納してくたりたるなり

十 引入烏帽子とはいかなるにや

えほしを首にかふる事を引入ると云冠も同し元

服の時に冠をきせ給ふ大臣を引入れの大臣といふ源氏物語にも見えたり

武勇之章

十一　頼光鬼同丸を切の所に打刀をぬきて鞍のまへつはをつきたりと有。鞍の前輪にや其比前つはとも申にや

前つ輪しりつ輪古言なり前輪後輪の事なりつは助語なり

十二　瀧口大極殿にて賭弓の段に退紅の狩衣とあるは如何様のいろにや

退紅とは薄紅なり則挑色なりあら染とも云あら染は洗染といふ事にて紅色を洗ひ落して色のうすくなりたる意なり洗革といふも同意にて薄紅の革を云なり桃花染アラソメトヨム退ル紅ヲ色なり

馬藝の章

十三　寛治五年五月中段移を置て競馬六番あり小松内府佐伯國方番長になす段にくせもなき馬を移馬にひかれたり。移を置は鞍にや移馬はいかゝ移の字全體合點不参候

移鞍移馬の事以前平家物語歟盛衰記かの答に同し

十四　忠信大納言馬に乗る段。かやうの用意にや兼てたうさきをなんかゝれたり其比たうさきは常さまには着さずや

常には手ツナハダノオビノ事斗にてすそをまくり又は裸に成る事あるにはたふさきをはくなり古書をみるに此趣なり

書圖之章

十五　布障子。絹にて張たる唐紙にや

布障子は布にてはりたる襖障子なり古書に障子と有はふすま障子なり表裏ともに云今江戸にて云違あり

十六　渡殿にはね馬かけ馬の障子たてゝ。よせ馬を多く寄る

馬をおほくよせたるなるへし

十七　花山法皇書寫上人の段になゐのふり候なり地震にや　地震なり

十八　能通法師良親に屏風書する段坤元録屏風とあり坤元録書ノ名ニヤ

坤元録書の名なり坤元録の屏風は禁中に有坤元

錄の山河なとのさまを畫しなり枕草子にも此名あり

十九 永昌五年四月女御繪合に左かねのすき箱かねの透箱をうけにおきてとかねのすき箱は何にや

繪合の繪卷物を入る箱に文様(モヤウ)を彫りすかして金だみにしたるを云なるへし

蹴鞠之章

二十 宇治左府法成寺に參り禰宜成房に仰て切立せられて鞠の爲に家平めしと 校註云 四條院仁壽殿ノ御坪加茂神主久繼ニ仰切立チセラル、切立トハ鞠ノカヽリナド云ニヤ兩度共ニ神主禰宜ニ仰セシイハレハベルニヤ

切立は神職に拘りたる事にあらす京都將軍の比加茂の神職に松の下といふ家鞠の家にて有し今も有歟いさやしらす切立とは柳櫻松楓をは植すして竹を立るを云是近世の詞なり鞠かゝりには柳さくら松楓の根有を植る事なれともかねて植置さる庭にて鞠の遊ひある時は俄に木を切てかりに其木共をしるを切立といふなり根有に對して切立と云なり

宿執之章

廿一 助信種武くらへ馬して落て死けり祿をは移にそかけられけり。御褒美の品を移鞍にかけられしにや

主は落馬して死たる故其人の乘たる馬の移くら並たるに祿をかけられたるなり

廿二 後鳥羽帝御琵琶習ひ給ひし時既に寫瓶せさせ給ふへき。此寫瓶の字如何全體文章もはや其器に當らせ給ふといふやうなり一器の水を一器え殘りなくうつす事諸藝の師に弟子の同きに用ゆれはかめの水をうつすといふにや寫の字にては聞えぬにや

寫瓶の語は出所有へきにやいまたしらす移の字にては却てよろしからすや寫字は字彙に傾なり書なり小補韻會に同瀉とあれは瓶水に便あり移字は疎く候歟

興言利口之章

廿三 中納言家成くろ馬下毛野正武望段に武正かちかへしの狩衣。かちは紺色にやかへしとは

かち返しはかち色の古きを染かへしたるなるへし古人裝束を染返して着る事ありかちは紺にあ

らす紺の色の深くして黒く成たるなり

廿四 後鳥羽帝南部僧六人に風流棚をめされたりけれ。風流棚何そ其圖の傳ありや

すべて風流といふ事は正式にかゝはらす花美を盡すをいふなれは風流棚と云圖なとは無之候其定製なけれはなり厨子棚に意行をかえて新作せる成へし

追て申候第八の問に聖德太子を親王と記されしは誤にて候聖德太子の比いまた親王の號なし

源平盛衰記問答

全

源平盛衰記問答

卷一

平家繁榮並得長壽院の導師の事條下

一御布施には千石千貫砂金兩その外被物裏物庭上岡をなせる如し

裹の字は非也褁(ツヽム)の字也年中行事大概に云佛布施ヲハ舟裏トナツケテ鵝眼ヲ紙ニ包ミテ白木杖ニツケテ公卿以下次第ニ持參シテ佛前ニオクコト也此文松下見林カ公事根元集釋ニ引ク

同卷

五郎の夜鬪打五郎のはしめの事條下

一平の時信をめしてうつほ柱より內に布衣のもの丶候ぬるはなにものと事の體狠藉也

うつほはうつをとよむ空の字也柱の中を空にしたるをいふ今世箱トユと云物也屋上の雨水を此柱の中へうけて下の地へなかすなり夫木抄に信實

しのふわけてうつほ柱にかへる樋はもるてふ水の朽やなからん

同卷

清盛化鳥を捕條下

一南殿にぬゑのこゑして一のとりひめきわたりたり

ヒメキハヒビキノ字アヤマリナルヘシ片假名ノ本ニヒメキトアリヒヾキノビニアヤマリテノヲ加ヘテメトナリシナルヘシ

同條下

一よく〳〵見れはもうじゆうなりもうじゆうとはねすみのから名なり鼠のカラ名をもうじゆうといふ事しらす事物異名集云漢土の書に鼠の異名社君雜俎家鬼林事とありもうしうの事なし若本草綱目なとにもあるか

卷二

清盛息女事條下

一歌よみ連歌しゑかき花むすひあくまて御心になさけおはします人なり

花むすひと云は物の緒をはなやかに結ふ事なりあけまきあはひ結になる結ひかなふその外いろ〳〵さま〳〵の結ひあり手ばこ文はこその箱袋

なとの結を女の手わさにはなやかにむすふ事を云男なとはさる事をせす女は何事も花を事とする故結の結ひやうなといろ〳〵樣〳〵もてあそひならはせるなり

同卷

　清水寺緣起條下

一賴政は白きけんもんじやのすゝかん小はかまにあゐすりのかたひら着てもみゑほしに太刀はきてやなくゐをおはされはあさき沓をはけり

淺沓をあさくつといふ又あさい沓ともいへはあさきくつともいふへき事勿論也やなくひをおはされはあさきくつをはくといふ事心得かたしやなくゐおへは淺沓はかすといふ事諸の裝束抄ともに見及ばさる事也淺沓は常にはく物也雨雪深泥の時は深沓をはく例也やなくゐ負されはは淺沓はくと云事故ある事か考ふるによしなし

卷三

　澄憲雨をいのる事半より下

一販女の女御とはさればこれは。いの丹後の局の事かそもをけひつをいたゝきて物をは。よも。うらし

右句切を付候如し是は澄憲法師かいひし詞を淸盛かいひ出して詞とがめしたる事也澄憲法師か販女の女御といひしは誰か事をいふそもし丹後の局も桶櫃なとを手にさゝけいたゝきて物をはよもやうりありくましきと也販女はひさきめとよみて物を賣る女あき人なり

卷四

　加賀國溫阿燒失の事條下

一なたねの竹馬のむかしより生立たる友實としりなからむしものに合て腰絡し結殿かふら矢一はなち給へ

なたねとは幼少の時身のちいさかりし事をなたねの粒にたとへていふなり

物のちいさきをたとへいふとてけしつふほとゝ云たくひ也竹馬は小兒たはむれにする事也幼少にて竹馬のたはふれの友とせし時よりといふ事也むしものは今世にある者と云に同し合ては志を合する也腰からみて惡者の腰に取付て惡事をたすけ增也今世荷擔するを腰押するといふに同し皆昔の俗語なり

卷四

山門御輿振舞條下

一源の兵庫頭賴政は赤地のにしきのひたゝれにしなかわおとしの鎧きて

しな革といふ染革古ありて今はなしその染革を細く裁て威したるをしな革おとしと云盛衰記此奈革（印本ニ誤テ一字トナシ紫革トナシタルハ非リ）とは藍革に文に歯朶をそ付たりけるとあり歯朶は正月の祝物に用る草也江戸にてはうら白といふ此したを向ひ合せ形を丸くして白く染る也されはした革なれともいひにくき故しな革と云也此革にておとしたる鎧鞍馬寺に納れる古鎧の中にあり

同條下

一唱は小櫻を黄にかへしたる鎧にかふとをわさにはさみ

小櫻革といふ革古あり今はなし藍革に白し小き櫻花を染る也此革を細く裁ておとしたるを小櫻革威とも小櫻威ともいふその櫻革の上を黄の染汁にてそめかへせは櫻の花は黄になり藍の所はもえき色になる也此革を細く裁て威したるを小櫻を黄にかへしたる鎧といふ也此鎧も鞍馬寺に有後三年合戰の繪卷物にも見へたり

卷五

行綱中言の事條下

一うちとくへきにあらすとて子息しけひらを相具ししろかねにてひるまきしたる小長刀盛國に持せ

長刀の太刀打のところをかさるに所〳〵に銀の輪を入るその形ひるといふ虫のまきたることくなれは蛭卷といふ也

同卷

成親以下召とらるゝ事條下

一相國は素絹の衣を着しきれはき長念珠うしろ手に取て

しきれは尻切と書なめし革にて作りてたるそうり也

同條下末

一入道は帽子かふとにもえきのはらまきの袖つきたるをきて

帽子かふとは今世上にさる頭巾といふ物也はら

まきは元よろひの下に着へきものなるゆへ袖はなし鎧の代りに上にきる時は鎧のそてをとりてわたかみにゆひつけてきる也左は敵に向ふ方なる故左はかり付る事もあり

巻六

丹波少將召捕らる條下

一このほと風氣有之見參にいらすといへ㬢と出合れす

㬢とて借り字ありて書也ゑいとは人の物いひ遂たる時應答の詞也あらと云ゑいともいふ又をともいふいつれもこれを稱唯と云稱唯と書てさかさまにイシヤウとよむならひにて候

同巻

入道院參企事條下

一すゝしのかたひらのわきかきたるにある地のにしきの鎧ひたゝれに

昔は直垂はかり着る事なし下に大かたひらど云ものを重ねて着るなり

仕立かひたゝれの如く廣袖也白布を用此本文に云は生絹也白かるへしわきかきたるとは直垂のことく左右の腋ぬひつらねさる也

同條下

一入道は小具足取つけはらまき着て中門の廊に打立給へり主馬の判官もり國この有樣見てあなあさましと思ひけれは小松殿にはせ參らせすてにからと見へ侍り入道殿御きせなかをめされたり

鎧ははら卷どう丸なとにくらへて草すりなとなかく物體もゆたかなる物ゆへ着せ長と云也着背中と書く說有不用之大將のをばきせなかと云ただの人のをば鎧と云の俗說あり不用之大將には御の字付て云まて也兵士のもきせなかといふ事後三年物語にあり

同條下

一くま手薙鎌手々にさゝけかふとを前におきて

ないかまは薙鎌也草をなき苅る物なるゆへ古ないかまと云たゞ鎌の事也

同條下

一小松大臣は引かへえほし直衣に奴袴のそは取さやめき入られければ

奴袴は今も狩衣の時着るくゝりはかま也奴袴と

書てさしぬきとよむ古名狩袴といふ狩衣に具する故也狩衣も狩袴も元は御鷹飼の鷹狩のときに着る服にて元は布なれとも後に常も着る事になりて花美の服になり公卿も着給ふ也元はくゝりを高くあけて奴袴の歩行に便里あるためのものなり奴袴の文字をあてたる也

一源平盛衰記の作者葉室時長に御座候哉此書平家物語と同書の樣にまへかた被仰聞候樣に覺候左樣御座候哉

盛衰記は葉室大納言時長卿也時長卿の時代年卒詳ならされとも十四卷系圖を見れは葉室大辨行隆の甥也行隆は文治三年逝去なれは時長は平家の時代に近かるへし盛衰記も本は平家物語と云十四卷系圖時長の下に平家ものかたり其一人也と有又今平家ものかたりといふは信濃前司行長也は後鳥羽院御代の人也つれ〳〵草に見へたり是また平家時代ちかき人也頼の代也葉室大納言時長平家物語作者の隨一也と公卿補任にありと北村季吟段抄に記せり赤間關阿彌陀寺にある平家物語そ長門本と云

卷十

中宮御産の事條下半

一小松おとゝはまきゑのほそ太刀かもめしりにはき給ひ金錢九十九文御まくらの上におきて天をもつて父とし地を以て母とすと祈りたてまつられたりすなはち御ほそのをゝきり奉りて圍棊手に錢出されたり辨靭負のすけこれをうつ

金錢九十九文の事正き書に見えす候源氏物かたり紫式部日記榮花物語等に皇子皇女御誕生の事多見へ候へとも金錢の事なく候桑弓蓬矢をもつて天地四方を射る事もなく候これら物語の文花にて候哉圍棊手は圍棊のかけもの也この事も正しき書見及す候平家の比は朝廷の式もみたれて此如新法をも行われたるか

同條半

一すなはちいまくま野にて移花まいらせさせ給ひけり

うつし花とふいは鴨頭草の花也つき草と云（俗ニつゆこのと云）其花の汁を紙にうつし置て裝束を染る也然るも此段にては文義いかゝ候はんやもし移馬に

てはなく候やうつし馬とはうつしくらを置たる馬なりうつしくらとは馬具のかざり様の名也くらぼねはかりにうつしくらといふなに候

一皇子御たんしやう有掲焉なりし

けちえんと云とは古き物語にあまた有之候いちるしとよみしたしかにしるしのあらわれたる事に

巻十一

旋風の條下

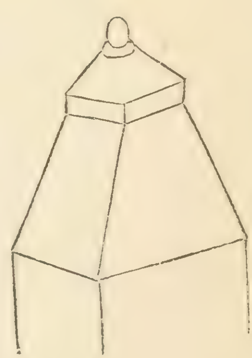
一平門むね門なとをふきはらつて四五丁十町もち行てなけうちおとしける

此門とも名詳ならず愚考の推量には門の正面をは風作りにしたるは棟門にて門の正面に軒のたれたるは平門にて候はんと存候たしかならす

同巻

育王山に金を送る事條下

一すなはち檜の木のさいもくをもつてほうきうつくりの御堂をたてて　五百町のほうきやうつくりなりきうは訛也左のことくなるをほうきやうつくりと云也



巻十一

静憲と入道と問答の事條下

一御随身清房か三黒といふ小馬を給はつて庭のりつかまつりけるほとに沛艾の馬にあしさまにのりつつおちてすなはち起けれは

沛艾（オドリアガルイサメル）能き馬の事也文選籍田賦にある文字なり

同條下

一大のわらはのみめよきを貳人しけめゆひたゝれに菊とぢして下腹巻に矢おひたり　目結は◉此文也是を四ッ連たるを四ッ目結といふ（今惣かのこといふなり）一面にすきまなく此文を付たるをしけめ結といふ下はらまきとはひたゝれにもあれかりきぬにてもあれ其下

はらまきをきるを下はらまきと云

同巻

金剛力士兄弟の事條下

一人のよはきか石のおもきかおほつかなしとてうらなしといふものをはきて庭におり　うらなしとはゐこんかうと云ざうりにて藺にて作りたるこんごうざうりなり

巻十二

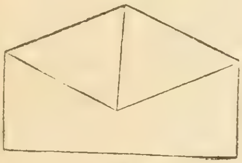
敦盛夢忠正爲義の事條下

一あかひはしゆちよう頭巾にはら巻着たりなんとして

出頭頭巾は法師武者なとのかふるもの也紺布に可縫候



前



後

如此形也
折様アリ

同巻

安德天皇御くらゐの事

一三后に准するせんじをかうふりて年官年爵をたまはりて上日のものをめしつかはれけれは繪かき花つけたるさふらひとも出入て院宮のことくにぞ有ける

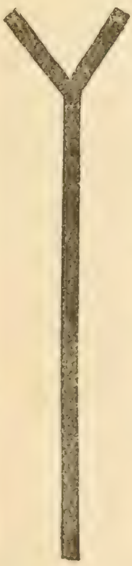
上日つかふる日とよむ武家にて當番と云に同し召仕者人數少き家にては當番非番なし大家にて人數多き家にては當番を立て召仕を上日のものを召仕ふと繪かき花付たるとは直垂水干なとに繪かき又はつくり花を付物にするなり

巻十三

入道藤島を信する事條下

一かせづえのふたまたなるさきにくろかね入たるをつき

かせはかせきの略語也かせきとは鹿の事なり鹿狩の勢子のつく杖なるゆへかせ杖といふ



如此

同巻

熊野新宮いくさの事條下末

一あをかりきぬの下にもえきの糸おとしのはらまき着てえほしのしりぼんのくぼにをし入てかりきぬの小袂より手をいだし衞府の太刀の身をば心得て作りたりけるをはいて

えほしのしりほんのくほにおし入てといふはえほしをふかくかしら迄引入たる也ほんのくほ迄引入たるなり衞府の官は上古は武勇の人を撰て任せる故に衞府の太刀もきれ物を用ひたりしに平家時代に至ては武勇の人を撰はす衞府の官に任せられしゆへ太刀も見かけ斗りにかさりこしらゆる習はしになりしを信連は武勇の人なるゆへきれ物を用し也

同巻

高倉宮信連たゝかひの事

一我朝に三種の神寶の内に内侍所と申事ありむかし天照大神の御時百王の末のみかと迄も我形を見まいらせんとてうつしとめおはします御鏡なりさてつるふくろと云は又うしろの内侍所の御すかたをかたとれりその故百官こと／＼く朝にめしつかはれ奉るといへとも衞府の官はあさき位なれは地下にして奉公いたす直人にまきるへきにより内侍所の御すかたをまなひてつるふくろをたまはつて左右の兵衞の尉赤皮左右の衞門尉あゐかわこれをもつてさふらひのしなもしり國主のさたからなれは非分の難をのかるへきかさしるしなれ

弦袋は今の弦巻といふ物也是をしらして織物なとにて袋をぬふは誤也古は弦袋染革にて包たる也

巻十四

三位入道入寺の事

一隨分ひさうし給ひたりけるにかすけといふ馬に貝鞍おき云々ほくそわらひてまかりかへり給

具鞍は青くら也ほくそ笑は歡ひ笑ひなり俗書に廿叟笑と書て塞翁か故事を引けり

同巻

南都山門牒狀等の事

一園城寺牒延暦寺の衞まらうとゐかまと

らまうとゐかまと不詳本書を見すしては申かた

し本書手元に無之

卷十五

宇治合戰付賴政最期の事

一六ヶ敷迄落馬あり御馬に合期せさせ給はぬゆへにや

今世の俗語に聞にあはぬといふ事を詞には合期せすと云也

同條下

一しかまのかちんの鎧直垂に紺の頭巾に黑糸おとしの大あらめのよろひの一枚ませなるをくさすりなかにゆかほし三まいかふとのをゝつよくしめて黑ぬりの太刀の三尺五寸あるにねりつば入て熊の皮の尻さやをさすほし毛色のつらぬきをそはきたりける黑塗のえひらにぬり篦にくろつ羽をもつてはきたる矢を二十四さしたるをかしらたかにおひなして七もちりなるま弓のしめぬりに塗たるにぬりかけて　中をとり

鎧直垂は鎧の下着るひたゝれ也紺の頭巾は出頭巾也大あらめ鎧は大荒間に毛引にせすして大に間をあらくあけて綴たるなり一枚ませは鐵と革と一枚交にして机にしたる也黑塗太刀は柄もさやも黑塗也ねりつばはねりかはを重ねてふくりんしたるつば也つらぬきは鎧着たる時はく毛皮のくつ也毛沓と別也つらぬきはたてあけなきもの也ぬりはかたくぬりしめだる也たゝぬりたるをいふ也

同條下

一しころをかたむけなかえをさし出したるつはものあり明まてこれを見ておもしろし東門五色の熟瓜そや

なかえは長刀手鉾熊手なとの類の柄のなかきもの也東門は地名五色瓜は瓜の色の五種かはりあるなり今も五色うり有黃にして少しつゝ色かはるなり熟瓜はうみつえたる瓜也熟瓜はおのれと蔕(ホソ)もろく落ものなり敵の首のもろくおちん事を熟瓜にたとへていふ也

同條下半

一源三位入道はうすはみ染の長絹のひたゝれにしなかはおとしの鎧き今日をかきりとや思ひけんわさとかふとは着さりけり紫革おとしとはあゐかはに

文にしだをそつけたりける
右長絹といふ絹あり古書に此名有長絹といふ絹にて縫たるひたゝれなり紫革おとしとは此七字はしなかはおとしの解也板本に紫革と書たるは誤也此奈革也此奈の二字を一にして誤て紫の字となしたるなりしだは正月の祝物に用る草也一名ウラシロといふしだ革なれともいひにくき故しな革といふ此革を細く裁ておどしたるをしな革威といふ

卷十六

遷都付將軍塚付司天臺の事條下

一法皇をは福原に三間なる板屋をつくりて四面波多板しまはして南にむきて口ひとつあけたるにてすへまいらせける
はた板は板塀の事に候

卷十七

始皇花丹事條下

一一說に二龍來て橋のすのこの如くのせてわたす家のまはりに細き板を横に並へて打たる緣を古記にすのこと申候竹簀の如く並へたる故なるへしこれに准して橋の板も横にならへて打付るゆへすのこと云なるへし

卷十八

文覺高雄勸進付仙洞管絃の事

一黒衣の裳みしかきに黒袴脛たかに着おなし色のけさかけて太刀を腰によこたへさしなわ緒のひらあしたははきて
よこたへさしなわ緒のひらあしたなり繩緒の平履也齒の高からぬをひらあしたと云なるへし

卷十九

文覺賴朝對面付白首付曹公父の骸を尋事

一佐殿のおはする所を黒脛からけゝはきて前うしろへとをり行事四五返して　黒脛からげげゞきて也
本文にけの字一ッたらぬ也げゞとはさう里の事也

同卷

義朝首獄より出る事條下

一かのくひは東のごくもんの前の樗木にかゝりけるを紺五郎といふ紺搔の有けるかいにしへ紺屋の事をこんかきといふ外の染物はせす藍染はかりするものなり職人歌合に紺かき有その繪を土佐光信か

畫ける體藍臺のそはにて女かゐゐ染する體也

同巻

佐々木馬を取下向の事條下

一あき人馬のくせなれはえた爪かたふしてなづまぎりけり

えたは肢の字也馬のあしをえだと云爪も馬のつめなり

同巻

一佐藤舘のうちへつと入佐藤は小具足つけてえんの上に小長刀つき立たまへり小具足とは鎧に添たる小道具の事也小具足つけてとは鎧をはきづしてわいたてをあかて小手すねあてしたるを云小長刀はたゝ短き長刀の刄の短きなり

同巻

石橋合戰の事條下

一與市かその日のしやうぞくにはあを地のにしきの直垂に赤おとしの肩白のよろひのすそかな物うつたるを着て妻黑の矢おひ長ぶくりんの太刀をはきけり折えほしを引立て弓ひらめひさまつきて將軍の前に平伏せり

赤おとしの肩白の鎧とは惣赤糸か赤革にておとして袖も草すりもおなしく赤き小袖の上のたんを白くおとしたるを赤おとし肩白と云肩白と書てわだ白とよむなり。長ふくりんをかけたる也折ゑほしは俗に云納豆えほし也古へはやはらかにうすき立ゑほしをおりてきる也やわらかなる故冑のににさる也冑をぬきて引立ゑほしにする也

同條下

一與市すてに打出ければ茂貞裝束毛早に見ゆ着替よかしとの給ふ

毛はやははなやかなるをいふ今江戸詞にけば〱しきと云に同しけは氣也けしきを云はやははえ也えとやと音相通はえは榮の字也歌に色はえて又花の夕はえなと云に同し毛早と書たるはあて字也

巻二十二

衣笠合戰の條下

一弓よく射るものともはかふと着されはら巻はら當筒丸なと着てやくらに上りて敵の鎧のむな板をさ

しつめて射よ又歩立のものともは角きわりをこしらへおきつえうちのやつはらは面のかたに竹の中にこもりゐよ

はら當は今小兒夏腹に當る具足はらかけといふもの丶かたちに似たりねりかはにて作り○胴丸は右の樣にて引合する物今制の具足に似たり○腹卷は背中にて引合するもの也右三品の圖は軍器考圖に見へたり文詞には盡しかたく○矢立は歩立の書誤也○角きはりはかなつかひちかひたりきわりとかくへし角きわりは矢の根の名也角にて先ほそに作り楯板に腹なとを射わるための根也人をも射させすへし義經記住吉大物貳ヶ所合戰の條に矢ひつ一合せかいの上にかしおきてふたを取てのけれはのをもためてふしの上をかきこそけて羽をはかはきにはきたる矢のいちゐと黑かしとつよけなる所をこしらへてまわり四寸長さ六寸に拵へてつのき割を五六寸入たりける是を以て主をいばこそ鎧うちか丶ぬともいはれぬ四國形のすき舟のはたうすなるに大勢はこみ乘て舟の足は入たり水きはを五寸はかりさしさけて矢めちかにいるならはのみを以てわる樣にこそあらんすらめ云々これはつのき割をかたきにて大にこしらへたる也。杖打の物とは捧を以て敵たゝき伏る役なるへし

卷二十四

南都合戰同燒矢付　河南輔の樂の事

一、又その上に法師の首をつくりてきつちやうの玉をうつかことく杖をもつてあちこち打けたりふんたりさま〳〵にしけり

きつちやうの玉とは球杖の玉也昔毬杖の戲有革の鞠を杖にてうつ也其のまりの事を玉といふ也

同卷

一おそらくは木をはなれたるさまのむかへやうけせよして

向合戰なるへしあふをやうと誤しならんけは氣にて氣色成へしむかひといふあふをやうと云は琵琶法師のかくかたるなるへし若は寫誤り歟

卷二十五

入道乙女をまいらせらる丶事

一義盛はむらさきの取そめのからあやひた丶れにも

えきにほひの鎧きて
紫のとり染古今著聞にも赤とりそめ水干見へたり古犬追物の射手素襖のとりそめそれを細筋をおしよせにくゝり染にするよし傳書に見たり然れは紫色に細筋をおしよせてしぼり染にしたるなり今世鶉しほりといふ物なるへし

巻二十九

新八幡願書の事

一かちんのよろひひたゝれにしゆちやう頭巾ふし縄目のよろひにくろつはの征矢おふて
鎧ひたゝれは鎧の下に着るひたゝれなり上は常のひたゝれの裁縫にかはらす但袖くゝりあり下は半袴にてすそくゝりあり上下共にきくとぢに菊のことくなるふさを貳ッ並へて付るむなひもも有。しゆちやうつきんは出頂頭巾にて紺布にて作るいたゞきのとがり出たる頭巾也剃髮の者法師武者のかふる物也○ふしなはめは染革の名也紺あさき白三色を重ねてつゝら折のかたに染たる革也その體幕の手縄の如し此革を細く切てくみて縅したるをふしなはめの鎧と申候

同巻

となみ山合戰の事

一木立林と申中に一の板堂ありかれにをやふつてなんは次郎あしたといふものにつくつてたい松をこしらへ
なんはは木曾か家臣難波次郎なるへしひくあした前にしるし候

巻三十

眞盛うたるゝ事の條

一あかちのにしきの鎧したゝれに黑糸おとしの鎧をき十八さいたるいしうちのそやおふて
赤地錦は大將の鎧したゝれに限る事と申は近世の軍家者流の作りたる私の制度にて用へからす古書には大將何色のにしきをも用ひられ候赤地に限らぬ事に候○いしうちの征矢はわしのいしうちの羽にてはきたる征矢の事に候いしうちの羽はわしの尾の最下に重りたる尾にて候いしうちを賞美し候事は敵をいしく打つと云名詮を用る也いしくとはうまくといふ事にて熟の字意也

三十三卷
　大神宮勅使付緒方三郎平家をせむる事
一平大納言晴忠の卿はひほくヽりのひたヽれに絲蘭のはかま着て野尻次郎に宣ひけるは
ひほくヽりはひをくヽりの誤なるへし宇治川に氷魚と云ふ魚有氷をならへたる如く細にくヽり染たるなるへし○絲蘭も寫誤也一本には糸葛の袴とあり今もある葛布の袴也葛の根の筋を糸にして織る故糸葛といふ
同卷
　賴朝征夷將軍の宣旨康定關東下向の事
一義澄はあかおとしの鎧にかふとをは着す右のひさをつき左のひさを立て累葛箱に入奉る所のせんしつヽら箱は小きつヽら箱也つヽらといふ草のつたにて組たるかぶせふたの箱也今も江州みな口といふ所にて作るはこにて候こヽにいへるつヽら箱は宣旨を入て外記か持來る覽箱の事也つヽら箱也
同卷
一兵衞佐は布衣に蘭袴を着せりさし出たるを見へしかは
蘭袴寫誤也一本には葛袴とあり前に申たる糸葛と同しものに候
卷三十四
　木曾追詞すへき由付木曾怠狀山門にあくる事
一木曾御返事をは申さすさしもの院宣の御使に小袴に直垂をかけゑほしにたつなうたせて
素襖きたるものヽかふる折ゑほしきて少かけ緒のゆるまりたる時物をいへはくちあきたりふさきたりするに隨てえほしのかたり〳〵とうごく事を古の諺にえほしにたつなうたせてと云なり馬にたとへていふ也馬のるに馬の頭の動くにつれて手つなのびちゞみてゆるヽを手つなうたせてのるといふより出たり
同卷
一此知康は究竟のしていの上手にて皷判官と異名によひけるを
前後の文又平家物語なとを考るにしていとは皷うつ事を云也知康手つヽみの上手なるよし見へたり東鑑にも見へたり皷とは革を張て打ならす

物の惣名也古羯皷の類は撥を以てうつ也小皷は手を以て打故手皷といふ成へし

同卷

八條宮人に打るゝ事

一兵杖を帶して參りこもり給へりしけ目結のしたゝれに黑糸おとしのはら卷をそ着られたりけり

秋の草はの字を用ゆへしかしけめ結とはめゆひしけく一面にしくる樣にかのこと云なり目結は[●]此如目の樣なる形を染るに絹を糸にて結て染る也四ッ目といふは四ッ寄せたる也

同條下條

一法橋行淸といふ者宮もうたれさせ給ひぬと聞てこきすみそめの衣につほみかさ着てたゝ笠のかたちのひらかすしてつほみたる成へし

同卷

公朝時成關東下向付知康藝能の事

一あの知康は重第一の手皷と一二ときくこれにてつゝみと壹貳と有へしといへとて云々兵衞佐も見給ひて誠に皷とひふとは名得たる物といふにあふて

手皷は手に持て打也今のは皷なるへし一二はひいふうとよむ是は手玉をとる事也手玉を取なからひいふうみいようとかそへなから取ゆへひいふうと云

同卷

東國の兵馬揃並佐々木いけ月を給ふ事

一是らはみな曲進退の逸物六鈴沛艾の駿馬つよき事は獅子象のことく　六鈴詳ならす沛艾はあら馬の事也

卷三十五

高綱宇治川を渡す事

一高綱は究竟の逸物にのりたれは宇治川はやしともふちせをいはすさゝめかしてかねにわたしむかひのきしちかく成て

かねは矩の字にてまかりかねの事也曲尺をあてたることく直に一文字にわたす事也

同條

一畠山か乘たりける鬼かけか吹荒をそ射通しける

吹荒はふきあらしとよむ吹嵐也馬の鼻のあなの事也荒の字あて字也

同也

一妻手のたつなをちとし丶めよ四ッ居にのりこ丶ほれておよかせよ

四ッ居はしりかいのつぢの事成へし

同巻

義經院參の事

一あか地の錦のしたたれにもえきのからあやをた丶みて座紅におとしたる鎧着てくわかたのかふと下人にもたせてうしろに有云々赤地の錦のした丶れに赤おとしの鎧を着備前作りのかうひら太刀はいたる武藏國の住人菊とちのした丶れにあかおとしの鎧は相模國の住人大將軍義經は熊の皮つらぬきをはき

もえきの唐あやをた丶みて座紅におとしたる鎧は萌黄の唐綾を細く裁てた丶みてからあやおとしにして袖草すりのすその方をは色をかへて紅の綾のいとにておとしたる也座の字すそとよむ○からひらは甲平にて重忠か重代の太刀也○きくとちのした丶れは鎧した丶れのきくとちに菊の花のことくふさをおとしひらめて一ッつ丶とち付る也此きくとちなきもあるゆへそれに對してきくとちあるをことはりたる也

○つらぬきは毛皮の沓也毛沓といふと不同差別はつらぬきはたてあけなし毛沓はたてあけ有

同巻

東使木曾と戰ふ事

一勅使河原權三郎有直はもくらんしのした丶れに黑糸おとしの鎧に白星方かふと二十四さいたる黑ほろの矢同四分有則はひるく丶りのした丶れに赤糸おとしの鎧同し色のかふとに

もくらん地は色也木蘭は梅の異名也梅染也梅染は梅谷澁(ウメヤシブ)にて染るその赤黄にて少し黑み有○黑ほろは鸛の鳥の羽の黑きほろ羽なりほろ羽は兩翼の下の長き羽なり○ひるく丶りは前の一册に記したるひをく丶りの寫誤也

同巻

巴關東下向の事

一巴は都を出けるときは紺村紅にちとりの鎧直垂を着たりけるか關守の合戰にはむらさきかうしをつけたるか直垂に菊とちしけるして○しけとうの弓

にせきつるかけれせんあしけの馬金ふくりんの鞍置てそ乘たりけるひたひに天くわんをあてゝ白打出のかさをきて眉目もかたちもゆふなりけり

紺村紅は紺村濃のあて字にて誤也紺村濃の事下にしるす○むらさきかうしを織付たるとは地の色は何かはしらねともかうしを紫に織たるなりかうしは今格子島といふ○せきつるは弦を上より下まで卷てうるしにてぬる也つるをせくといふは此事也○白打出の笠は銀を打のへたる笠なるへし宇治拾遺に打出の太刀所〳〵に見へたり職人歌合の繪の白かね細工の詞になんりやうにてうちいてわろきと有白とは銀の事也○天くわんは天冠にて猿樂の能の時天女のきる如くなる天冠額の方はかり作て笠の下に額にあてたる也

同卷

粟津合戰事

一木曾赤地の錦の直垂に薄金といふ鎧着て射のこしたる護田鳥尾の矢おひて

護田鳥和名抄にヌストリとあり田の畔の水口に居て小魚を食ふ鳥也動かすして田を護り居るが如し田舍にてみなくちまぶり又水口鳥ともいふうす墨色にて五位鷺に似たる故みぞ五位ともに鴫の羽の白くて本の方みな口鳥の如くうす墨色の文あるをヌスメヌと云也ヌスメ鳥の色のことくなる故也俗にウスベウといふはヌスメ尾の狀したるなり

卷三十七

景高景時城に入並景時秀句の事

一武藏國の住人篠とうに川原太郎高直同次郎盛直兄弟貳人はせ來り馬よりとひをり藁の下々をはき城戸口にせめよせて

篠黨はあて字也私黨也武藏國私市庄を領する武士也私市の七黨とて七家有し也○わらのげゞはわら草履也

同卷

義經鵯越を落す事並畠山馬を荷事

一うちのへて左出のきと口のよはからんときいくさせんとて鎧物の具ぬきおきて小具足はかりにてゐたる所へ

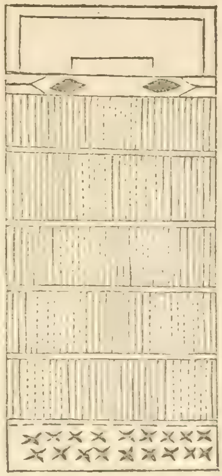
鎧物の具同し事なれとも此處にては鎧とはら卷どうまるの類と見るへし物の具といふは甲冑に限らぬ稱也公家にては裝束の事を物の具と申候

同卷

忠度通盛等心期の事

一越前の三信通盛はむらさき地のにしきのひたゝれにもえきにおもたかおとしたる鎧に

もえきおとしの鎧に別の色糸にておもたかおとしたるなり



如斯色をかへておもたかのはの形おとすをおもたかおとしといふこれをさかさまにしたをさかおもたかといふ

注意此圖の點線の部分は本文には同一の線にて朱書なり今印刷の都合にて朱書の部分を點線にて區別を明にせり

卷三十八

重國花方院宣を帶し西國へ下向の事

一平左衛門尉重國ゐんせんを帶して西國へ下向院よりは御つほにめしつきに花方といふ者をそへ下されけり

御つほにのにはのゝ字の誤也おつほのめしつきと云は職の名也地下の賤しきもの也御つほは御庭に祇候して人を召す時に云次なとするこまつかひする役なり

第三十九

重衡酒宴付千壽伊王の事

一したしき者とも五六人とりいたして止ぬ纐纈のふくろに入たるひは一めん

纐の字は字書になき字なれとも用來れり和名抄には夾纈の字を用カウケチと音によむ也花形なとを色〳〵の色にてくゝし染にしたる俗に纐纈の字きくとちとよむはあやまり也

卷四十二

金仙寺觀音講の事付六條北の政所の使義經に逢事

一それより八邊へうつほとに山路の道の末にさいみのしたゝれに立ゑぼしさいみまたさよみ又さゆみなとゝも云也皆相例通也今もさいみ布有麻糸をより合て織たるふとき布なり

同巻

屋島合戦付王むし扇を夏與市扇を射る事

一二月廿日の事なるにやなきの五かさねに紅のはかまきて袖笠かつける女房あり

袖笠は衣の袖を頭の上に打かくる也

同巻

一重忠はもくらんちのしたゝれにふしなはめの鎧きて大中黒の矢おひ　ふしなはめ前にしるす

同巻

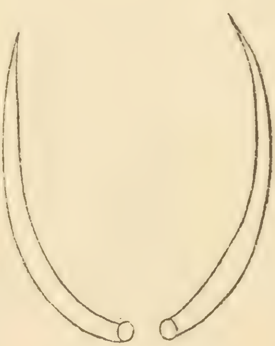
一あらい革の鎧にかたしろのかふと貳拾四さいたるしら羽の矢に

かたしろのかふとはかふとの鉢の鐵地なるを片一方銀のうすのへかねをきせたる也白といふ銀の事也

同巻

一その日しやうそくはこんむらこのしたゝれにひおとしの鎧鷹角反かふとゐくひになし

こんむらこは紺をむらこにしたる也むらことは地白き絹に所〳〵に紺色にむら雲の如く染る也紫むら濃なとも有むら雲の如し鷹角は高角也反は高つのゝそりたる也高つのそりたる甲とよむへしくははこのことくにてさきとかるなり

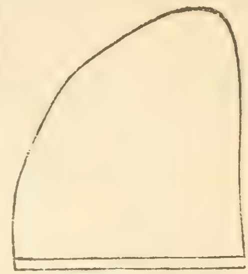


此如

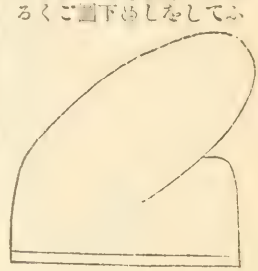
同巻

一與市まことにと思ひかふとはぬきわらはにもたせもみゑほし引立て　もみゑほしとは精好紗なとにてゑほしをぬひてうるしぬりてやはらかなるえほしかふとの下にきるなり

なし打えほし

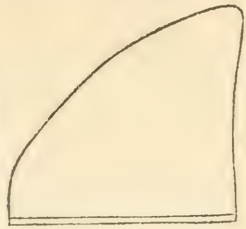


かふりてうしろをおしこめは下の圖のごとくなる



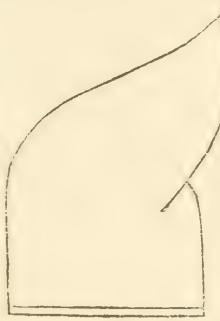
へり付ヌモアリ

引立名ほし



かふりて後を押込は下の圖のごとくなる

此所引立たるゆへ引立ゑほしと云



一名ヘリヌリ又ヘンヌリ

二品ともにやはらかなる故もみゑほしと云

同巻

一判官見給ひて尋き丶給へ候上くたんの子細は申付らうなれは思慮さはしとてわしつくりの太刀を給り

わし作り詳ならす烏くひの太刀 つるかしらに鷺の頭をつくる の如し鷲の頭を柄頭につくる歟又鳩作の太刀の如く惣の金具鍔等にわしを彫物にしたるか不詳

二位の禪尼入海并平家亡ひいけとりの人々の事

一女院はおくれたてまつらしと御焼石と御すゝりのはことを左右のたもとにやとし入

御焼石は温石なり御身を海に沈めんとておもりのために温石硯なとを袂に入玉ひし也されともおもからぬものをおもりの為とおほしめしける御こゝろのはかなきはけに上臈のさま也

巻四十七

北條上洛して平孫を尋る事

一一條西は平門小路とておもては兩結の戸に土門うすひはたの御所

土門は兩方より土居をつき出して其中門を門にしたる也その門木戸門にてあるを戸に金物をうたせて偏戸を兩所繩にて結付たる也

此書元本には何々の事如何に御座候哉または朱點の分如何に御座候哉と悉く問語あり今省畧して答文は本文より一字下けて答の字を省きぬ

天保三壬辰十月十一日寫了

大塔宮二王子小傳

南朝
正平孫御はらの雁

國學院大學出版部

大塔宮護良親王二王子小傳

陸　良　親　王

護良親王第一ノ王子陸良親王ハ元弘癸酉三月十四日北畠大納言源師重ノ女（准后從一位親房ノ妹）ノ腹ニ生レ給ヒテ大塔ノ若宮ト稱セラレ後醍醐天皇ノ寵遇ヲ得テ御猶子(ナ)ト爲リ親王ニ立ラレ常陸大守ニ任セラル世人ノ尊崇父親王ニ劣ラズ正平六年辛卯（觀應二年）陸良親王御年十九歳三月赤松律師則祐官軍ニ應ジ親王ヲ奉ジテ播磨ニ起ル正平七年壬辰（文和元年）四月則祐心變(ガハ)リシテ尊氏ニ屬シ親王ヲ擒(トリコ)ニシテ京都ニ入ル同八年癸巳（文和二年）二月本庄波多野一族等親王ヲ盜出シ奉リテ丹波ノ高山寺城ニ立籠ル丹波丹後但馬等ノ軍兵(カタウト)之ニ屬シテ威遠近ニ震フ三月赤松則祐足利方人トシテ甲山ノ麓ニ戰フ官軍利アラズ本庄兄弟戰ヒ死シ又則祐ノ弟彈正少弼氏範獨リ官軍ニ屬シ親王ニ供奉シテ河內天野行在ニ至リ親王征夷將軍ニ補セラル同十五年庚子（延文五年）四月畠山國淸入道道誓東國ノ軍勢數萬騎ヲ率テ河內和泉紀伊等ノ國々ニ討入リ天野金剛寺ノ堂舎ヲ燒ク後村上天皇ハ去十四年十二月廿三日檜尾山觀心寺ニ遷幸ナリシヲ知ラザリシナリケリ此時ニ當リテ陸良親王朝敵討征ノ事ヲ請(コハ)レシコヽニ赤松彈正少弼氏範ヲ差副ヘ吉野十八鄕ノ兵ヲ授ケテ賊軍ヲ征討セシメラル親王此勢力ヲ得テ忽ニ心傲(オゴ)リ賀名生ノ奥ナル銀嵩(シロカネタケ)ニ上(ノボ)リテ御旗ヲ擧ラレ先ヅ賀名生ノ內裏ニ火ヲ懸ケ其近傍ノ家々ヲモ燒拂ハル此暴擧ニ驚カセラレ一條前ノ關白師基入道ニ宇陀郡宇智郡ノ勢千餘騎ヲ附テ反軍ヲ討シメラレシカバ前ニ親王ニ附ラレタリシ十八鄕ノ兵ドモ親王ノ反逆ナル事ヲ覺(サト)リテ皆散々(チリ)ニ落失セタリケレバ反軍敗(ヤブ)レ氏範北方ニ遁(ノガ)ル師基入道北俣谷ニ逐迫リテ親王遂ニ自盡セラレヌ御年廿八維實ニ正平十五年四月廿六日ナリ嗚呼哀シキ哉只一時ノ非擧ニ依テ千載ニ佳名ヲ腐(クタ)ス惜ミテモ猶餘リ有ル者カ竊(カムガ)ニ按フルニ是功有テ罪無キ父護良親王ヲ讒者尊氏直義等ノ毒手ニ渡サレテ鎌倉土牢ニ戕害セラレ給ヒシ遺恨ヲ散(ハラ)シ奉ラレムノ主義ナリシナラムモ狂逆ノ名ハ遂ニ免レ叵(カタ)カラム當時親王足利義詮ニ內通シテ反ヲ謀レリト云ヘルガ如キ謬說ドモハ凉ニ皆取ルニ足ラズ大和國吉野郡北俣谷將軍家ハ大和志ニ將軍家在ニ十二村莊北俣村ニ石碑十三羅ニ列左右一里人以ニ每

歳十月十六日ニ薨ニ祭祀ニ未レ詳ニ誰氏ニ或曰ニ將軍陸良王ノ墓ニトアリ津久井尚重南朝紹運錄ニ或曰陸良親王四月廿六日被虜幽閉十月六日遇害ト今其是非ヲ知ラズ記シテ後人ノ討究ヲ竢ツ

日叡上人

鎌倉名越山松葉谷楞嚴山妙法寺開基日叡上人ハ大塔宮護良親王ノ次子ナリ母ハ南ノ御方藤原氏持明院中納言保藤ノ二女ナリ始ハ後醍醐天皇ニ侍シテ新按察使ノ典侍ト聞エシヲ後ハ大塔宮ニ侍シテ南御方ト稱セラル天皇譏リニ足利尊氏等ガ無實ノ讒言ヲ信ゼサセラレ建武元年甲戌五月三日（或云十一日）大塔親王ヲ足利直義ニ渡サレテ鎌倉ニ配謫セラルヽ時ニ此南御方唯一人ヲゾ近侍セサセラレタリケル直義數百騎ノ軍勢ヲ以テ路次ヲ警固シ鎌倉ニ下リ着キテハ二階堂ガ谷（藥師堂ガ谷ト云所ナリ）東光寺ノ空屋ニ土ノ牢ヲ塗リテ日月ノ光モ見エヌ闇室ト爲シテゾ押籠奉リケルニモ南ノ御方ノミコソハ朝夕近ク仕奉ラレタリケレ此南御方ハ去年ヨリ妊娠セラレタリシガ今玆建武元年甲戌何月頃ニヤ密々ニ王子ヲ土牢ノ傍ニ誕生セラレタリケリ是ゾ御成長ノ後ニ日叡上人トハ聞エケル翌ル建武二年乙亥七月廿三日足利直義鎌倉ヲ北條相模次郎時行ニ襲ハレム事ヲ恐レテ十二歳ナル征夷將軍成良親王ヲ供奉シ六歳ナル足利義詮ヲ伴ナヒテ都ニ逃上ラムト

山ノ内迄遁出タル時ニ淵邊伊賀守義博ヲ近付ケテ此次デニ兵部卿親王ヲ只刺殺セ奉レト申含メテ返シケレバ義博土牢ノ御所ニ馳參リテアヘナク宮ヲ戕害シ奉リ御首ヲカキ落シ持テ土牢ノ前ニ走出テ明キ所ニテ見奉レバ怒リ給ヘル御面相ノ恐ロシサニ直義ニモ見セアヘズ傍ナル藪ノ中ヘ投捨テコソ歸リケレ御年實ニ廿八歳御父天皇イマダ皇太子ニモ立給ハザリシ時ノ御子ニテ御母ハ民部卿三位ノ局源ノ親子北畠大納言師親ノ女ナリ此親王ダニ久シク世ニオハシマササマシカバ逆賊尊氏直義等ガ跋扈ノ患モ无クヲ龜山ノ皇統ハ永ク世ニ榮エオハシマサマシ者ヲ阿那悲慘ノ遠逝ヤナ嗚呼南朝ノ御盛衰ハ實ニ此親王ノ御在否ニ係レリ

南ノ御方ハアマリノ恐ロシサト悲シサトニ御身モ痙ミ手足モ立ズオハシケルガ遙ニ程ヘテ近隣ナル理致光院（四宗兼學京都東山泉涌寺末ナリ今ハ理智光寺ト稱ス寺ハ既ニ廢レタリ）ノ長老參リ來テ斯ル御事ト承及候御埋葬ノ事取營ミ奉ラムトテ尊骸ニ御首ヲ合セテ御棺ニ納メ此院ノ後ロノ山頂ニ土ヲ深ク掘セテ葬メ奉ラル其後正平二年丁亥（貞和二年）七月廿三日十三回御忌辰ニ當リテ東光禪寺ノ住持友桂實塔ヲ建立スト云フ是今ニ見存セル御石塔ナルベシ禪僧義堂ノ空華集ニ東光ニ弔フ大塔兵部卿親王ヲ義堂ノ詩アリ塔影稜々半入レ雲王孫曾此ニ洒レ啼痕獄中ノ劍氣衝レ天起門外ノ兵塵蔽レ日昏山烏乍驚ニ龍鳳ノ質ヲ野童那ツ識ニ帝王ノ尊ヲ興亡ハ不レ上ニ禪僧眼ニ只見靈光ノ歸トシテ獨存スルヲト云ヘリ王孫トハ蓋シ日叙上人ヲ指セルナラム

南ノ御方ハ量ラズモ理致光院長老ノ助成ニ依テ御埋葬ノ事終ヌレバ疾ク馳登リテ親王最後ノ御在樣ヲ奏上セバヤト思スニツケテ爰ニヒトツノ羈絆アリ左ヤ爲マシ右ヤ爲マシト女心ニ定メカネツヽ思ヒ煩ヒ給ヒケルハ斯ル土牢ノ内ニ誡メ置レシ親王ノ御子ヲバ京都ニ抱キ登リナバ若シ天皇ノ御耳ニ觸レテ何ナル憂目ニカ遭給ハムモ計叵シト悲シミ歎キ思サレシガ今ハ限リト思定メテ御身ヲシヅ山賤ト窶サレテ貴キ王子ヲ父ニ離レシ凡卑ノ孤子ニ僞セミツカラ抱キテ此御所ヲ忍出東方西方サマヨヒ行幸ツヽヤヽ程隔リタル名越山ノ松葉ガ谷ナル本國寺ニ日靜上人ニ逢テ此賤ノ孤子ノ爲ムカタ无キヲ爭テ憐愍ミ養育テ法師ニ爲シ給ヒテムヤト懇切ニ依頼レケレバ日靜上人此

子ノ珍ラカニ愛ラシキニ見メデテ容易ク請納ヤガテ楞嚴丸ト名ヲ付テ生サキ必ズ法師ニ成テムト約諾セラレシカバ此母人モ子ニ別ルヽノ悲哀ミヲ抑ヘナガラ斯ル奇縁ヲ結ビシ事ヲ且懌ビテゾ師ラレケル

豈圖ラムヤ此日靜ハ故親王ノ讐敵謀反ノ賊魁足利尊氏ガ妻平ノ登子ノ叔父ニシテ尊氏ノ外舅ナラムトハ南ノ御方ハ心哀シク惶急シキ際節唯本國寺ノ住持上人ナルコトヲ知リテ其俗姓ノ北條一族駿河守義宗ノ子赤橋武藏守久時ノ舍弟ナラムトハツユ知ラザリシナリケリ日靜モ亦此孤兒ヲ大塔親王ノ御子ナラムトハ身ヲ終ル迄思寄ラレザリシナリケリ

南ノ御方ハ辛苦ジテ二歳ノ王子ハ本國寺日靜上人ニ依托セラレシカバ急ギ京都ニ歸リ上リ泣々內裏ニ參ラレテ兵部卿親王ノ直義ガ爲ニ戕害セラレ給シヒ景況ヲ委曲ニ奏上セラレシカバ天皇甚ク激怒ラセ給ヒ且ガツ聞召レシ尊氏直義等ガ反逆ヲ今ハ慥ト知覺リ給ヘリシモ事既ニ過去リタレバ爲ムスベ无ク中務卿尊良親王ニ新田義貞ヲ差副テ反逆人尊氏直義等ヲ誅罰セシメラレタリシモ其功无ク反リテ賊勢ヲ助長スルニ過ザリシハ實ニ遺憾ノ至ミナリ後村上院天皇ノ御製ニ「ワガ末ノ代々ニ忘ルナ足柄ヤ箱根ノ雪ヲ分ケシ心ヲ」ト詠セ給ヒシハ當時ヲ追悔シミ給ヒシナリケリ

爾テモ日靜上人ハ思ヒモヨラズ二歳ノ弟子ヲ請受ケタレド乳无クシテハ生育マジキ事ナレバ宗門信徒ノ妻女ノ乳出ル人ニ預ケテゾ成長爲シメラレシナラムヲ興國六年乙酉（貞和元年）三月鎌倉ノ本國寺ヲ京都六條掘川ニ引移サレシカバ楞嚴丸ハ僅カニ十二歳師ニ從ヒテコソ京都ニ上ラレケメ十五歳ニモ成レシ後ハ日靜上人ハ楞嚴丸ノ頭髮ヲ剃落シテ弟子僧ト爲シ法名ヲ日叡トツケ妙法房トゾ稱セラレタリケル母南ノ御方ハ去シ建武ノ悲歎マギレニ尼ト成リテオハセシガ大光山本國寺ヲ京都ニ移シ建テタルコトヲ風聞カレ便宜ヲ覓メテ密カニ妙法房ニ逢ヒ父親王ノ御事ヤ理致光院後山御墓ノ事ヤ何ヤ此ヤト能々云含メ必ズ他ニ洩スナト口封メテゾ別レ給ヒケムカシナ之ニ依テ妙法房日叡モ鎌倉戀シク偲バシク年長ルニ隨ヒテ父親王御墓ノ慕ハシサ勝レリトハ口ニコソ出シ給ハネ往昔住馴シ鎌倉ニ住マ欲シト師ニ請申サレテ幼少ノ頃乳ヲ哺メシ信徒ノ家ニタドリ着テ鎌倉ニ止リ住セラ

レ專ラ宗法ヲ說弘メオハセシ間ニ信徒追々多クナリ淨財モヤヽ集リシカバ二十四歲ノ正平十二年丁酉（延文二年）宗祖日蓮小菴ノ舊跡本國寺ノ廢地ニ一寺ヲ建立セムト師日靜ニ京都ニ告遣レシカバ日靜大ニ感悅ビテ然ラバ汝ノ幼名ヲ取テ山號ト爲シ房名ヲ寺號ト爲ヨト返報セラレシコヽニ松葉ガ谷ノ舊蹟ヲ再興シテ精舍ヲ建立シ楞嚴山妙法寺ト號ケ京都本國寺末ト爲シ本堂ニハ釋迦佛立像ヲ安置シ祖師堂ニハ第一祖日蓮ノ坐像ヲ安置シ其脇ニ第二世日朗第三世日印ノ二像ヲ安置セラレタリ第四世日靜正平廿四年己酉（應安二年）六月二十七日七十二歲ニテ京都ニ入寂セラレシ後ニ至リテ松葉ガ谷ノ山頂大松（土人蛇松ト呼）ノ下ニ小祠ヲ建テ密カニ護良親王ノ木像ヲ自作リテ之ヲ安置シ日夕拜祭セラレケリ然レドモ母公ノ誡メヲ堅ク守リテ父親王ノ御名ハ終身口ヨリ出サレザリシト云フ第五世此妙法寺開基日叡上人ハ應永四年丁丑八月十三日法弟日榮ニ當寺ヲ讓渡サレ十一月九日六十四歲ニテ遂ニ圓寂セラレケリ後住日榮等相議リテ山頂小祠ノ後傍ニ葬ル母尼公ハ京都ニ示寂セラレケメド其年日ハ今詳ナラズ第六世大明房日榮ハ日叡上人ノ後資トシテ妙法寺ニ住持セラレ法兄日叡上人ノ木像ヲ作リテ釋迦堂本尊ノ脇ニ安置セラレキ斯皆日叡上人建立當時ノ狀況ニシテ今日ノ諸堂ノ建築影像ノ配置ハ大ニ同ジカラズト知ルベシ

上件ハ征夷大將軍一品兵部卿護良親王第二ノ王子日叡上人一代ノ概畧ナリ

斯テ此妙法寺ノ後住第六世日榮ハ住持ノ年月久シカラズ第七世日秀ニ妙法寺ヲ讓渡シテ故鄉三浦郡金村ニ歸リ日蓮ノ遺跡米ガ濱道場ヲ金谷村ニ移シ建テ金谷大明寺ト號ケテ永住セラレ一寺ノ中興開山ト稱セラレシト云フ

妙法寺見住三津日慧曰ク名越山松葉ガ谷ハモト的場ガ谷ト云シ地ナリ昔時武人ノ射術ヲ習練スル所ナリシヲ日蓮ソノ廢地ニ小菴ヲ結ビ建長五年八月的場ガ谷ノ舊名ヲ改テ松葉ガ谷ト爲ス日蓮ノ歌ニ「後ノ世ノ人ニ聞セム鎌倉ノ松葉ガヤツノ鶯ノコヱ」ト詠タリト代々ノ住僧余ニ口傳ヘニ云傳ヘタリト曰ヘリキ

明治三十五年十月三十一日　靖齋陳人谷森善臣識

正平皇兄弟

後龜山院長慶院御兄弟順次

應永三十三年ノ頃、西山內府滿季ト云フ人在リケリ、後龜山院法皇ノ崩御ナリシニ時ヲ得テ、已ガ能知ラヌ南朝ノ御系圖ヲ、猥リニ造リテ、後村上院天皇ヲ僞朝ト注シ、後龜山院天皇ヲ熙成王自ニ吉野ニ降ト書テ、長慶院ノ御弟ト爲シ、皇胤紹運錄後醍醐院ノ下ニ攙入セシ本、世ニ弘マリテヨリ、大概世ノ人ノ其僻錯ニ欺カレ、其謬系ニ誑ラレテ、山城守橘長俊ガ中古日本治亂記ヨリ、林某ノ續本朝通鑑、サテハ何史トカヤニ長慶天皇本紀ヲ立タルガ如キ、是皆南朝ノ御實蹟ヲ、博ク討ネズ精シク覈ヘザリケル編見ニコソ在ケレ、然レトキ大草公弼ノ南山巡狩錄成島讓ノ南山史、出テヨリ、滿季ノ狡猾ヲ、世人多クハ悟得タルモ、又希ニハ、昔時ノ夢ノ醒亘ナル人モ、世ニ在ゲナルハ、何ナル事ナラム、

往シヘノ西山主ノ狡猾ニ、惑ヘル人ノ多クモ在ルカナ、スメラギノ皇子ノ次第ヲ、次々ニ誤リ來ヌル年ゾ久シキ、

後龜山院天皇ハ、後村天皇ノ第一皇子ニシテ、旣ク皇太子ニ立給ヒ、正平二十三年三月十一日、父帝崩御ノ前ニ、禪ヲ受ケ寶祚ヲ踐給ヒシ後ニ、同胞ノ御弟、寬成親王ヲ立テ、皇太弟東宮ト定メ給ヒキ、此御二方ノ御母ハ、女御藤原勝子ト聞エキ、後ニ進テ中宮ト爲リ給ヒ、正平十五年ノ頃、泰成親王ヲ住吉行宮ニ生給ヘリ、後村上帝昇遐ノ後ニ、皇太后宮ト聞エシカ、御飾ヲ落サレテ後ニハ、嘉喜門院ト聞エキ、此門院ノ御詠ヲ、新葉集ノ料ニ宗良親王ノ請申サルヽニ依テ、天授三年七月、大納言實爲ニ仰セテ清書セシメラレシ一卷アリ、抑此門院ハ、近衞關白左大臣經忠ノ御女ニテ、福恩寺關白大臣經家ノ妹君、建德元中ノ國母ナリ、北方貞和三年公卿補任ニ依ルニ、右少將藤經家（年十六）十一月十六日叙ニ從三位、右少將如レ元、ト見エタルハ、是南朝ノ正平二年丁亥歲ノ事ナレバ、御妹勝子ハ、僅ニ十四歲許ノ御時ニテ、正平三年頃ヤ、女御ト召出サレ給ヒケム、同五年庚寅歲ニ、熙成親王ヲ降誕アリシハ、十七歲許ノ御時ナルベシ、今此嘉喜門院御歌卷ヲ按スルニ、正平二

十三年三月、先帝諒闇ノ中ニ、內ノ御方ト申サル、アリ、倚廬ノ御所ト申サルルアリ、此內ノ御方トハ、今上天皇ノ御事ナリ、倚廬御所トハ、實祚ヲ嗣給ヒシ新帝ノ、大喪ニ籠ラセラル、御所ノ名ナレバ、是亦同天皇ノ御事ナリ、此御歌卷ノ中ニ、內御方ノ御詠十首アリ、今之ヲ新葉集ニ對勘スルニ、後龜山天皇ノ御製ナリ、然レバ、此內御方ハ、後龜山天皇ナルコト明瞭ニ知ラレタリ、又同シ御歌卷ノ中ニ、正平二十三年八月、つねよりもあはれなりし夕暮に、春宮の御方より、ト云フ文アリ、水戸本此條ノ首書ニ春宮蓋後龜山帝也、新葉集春部有ニ福恩寺關白、今上未レ受レ禪時、上ニ梅花一之詠一歌中有ニ春宮之言一、而後龜山帝返歌、亦以ニ春宮一自稱、今與レ之合、ト云ヘレド、善臣攷フルニ、此說ハ年月ヲダニ辨ヘザル浮淺ノ謬說ナリ、此條ハ正平二十三年八月ノ春宮ニシテ、新葉集ナル春宮ハ、後村上帝御在位中關白經家ノ梅花ヲ上ラレシハ、皇太子熙成親王春宮ニイマシ、御時ナレバ、是即後龜山帝ノ御事ナレドモ、此條ハ、正平二十三年八月ノ事ナレバ、後龜山帝ハ此春三月既ニ帝位ニ即給ヒシ後ナリ、何ゾ春宮ト稱スルコトヲ得ムヤ、此春宮ハ必ズ他ノ親王ナリ、一條關白左大臣經嗣日記、荒曆ヲ按スルニ、後龜山院長慶院南御所ニ、ニ足利准后義滿拜謁ノ事ヲ記シテ、明德五年二月六日、丙子此日南主號ニ大覺寺殿一於ニ天龍寺長老坊一、與ニ准后一有ニ謁見事一爲ニ初度一云々、彼御舍弟於ニ南方一爲ニ東宮一同御對面、ト云ヘリ、是此御舍弟東宮コソ、正平二十三年八月ノ春宮ニテ、即寬成親王長慶院ノ御事ナリケレ、然レバ後龜山院ハ御兄ニシテ、長慶院ハ御弟ナルコト、確乎トシテ動スベカラズ、何ゾ西山內府滿季ノ意匠ニ出タル、臆測謬系ニ狐惑スルニ足ラムヤ、爾チ皇胤紹運錄ハ歷世ノ實錄ニシテ、信用スベキ良書ナレドモ、其中ニ就テ、南朝御系ノ如キハ、同書ノ例ニ似ズ、事實違ヒテ疎漏甚シキハ、應永三十三年五月、內府滿季ハ、南朝法皇ノ去三十一年四月崩御ナリシニ時ヲ得テ、妄リニ新作加入セル御系圖ナルコト、中山大納言定親ノ薩戒記ニ見エタレバ、是南朝ノ御實蹟ヲモ辨ヘ知ラザル滿季ノ、我意ニ任セテ書立タル暗推妄系ナレバナリ此故ニ定親亞相モ、予不レ知ニ其可否一ト記シ置レタリ、又殊ニ嘉喜門院御歌卷ノ實文ニ違背シテ、御弟ノ寬成親王長慶院ヲ

第一ニ系リテ、自立ト注シ、御兄ノ後龜山天皇ヲ第二ニ系リテ、熙成王ト書キ自二吉野一降ト注シタルハ、御兄弟ノ順次ヲ誤レルノミナラズ、帝位ノ正閏ヲモ辨ヘザル大妄說ナルガ上ニ神代以來代々天子相承傳統ノ三神器ヲ、先帝ヨリ受傳ヘラレタルヲ、又後小松院ニ授ケラレタル正統天皇ヲ、恐多クモ私ニ貶シテ諸王ト爲シタルハ、其諸王ノ神器ヲ受ケラレタル後小松院ヲモ亦諸王ト爲シタルナリ、是孰レニ付テモ、无禮最甚シトス、是正シキ紹運錄ノ正文ニアラズ、滿季ノ臆測謬系ナレバ、識者ノ採用スベキ文ニ非ズ、殊ニ南方記傳、櫻雲記等ニモ、太子熙成親王受レ禪、ト記シタル明文ノ在ル有リ、又後醍醐後村上、後龜山、三帝ノ戒師ト仰ガレシ、出雲國宇賀莊ナル雲樹禪寺、和泉國高石濱ナル大雄禪寺等ノ開基、國濟三光國師孤峰覺明ノ墓碑文ニ、新天子踐レ祚、尤留二神內典一、以三師爲二先帝所一レ敬、恩禮特厚、上與二皇后太子一、俱受二戒法一加二號三光國師一、復賜二法衣一、ト云ヘリ、此覺明ハ、正平十六年辛丑五月二十四日、得レ年九十一、法臈七十五ニテ、大雄寺ニ入寂シタリ、此碑文ニ先帝ト云ヘルハ、後醍醐帝ナリ、新天子トモ上トモ云ヘルハ後村上帝ナリ、皇后トハ藤原勝子嘉喜門院ナリ、太子トハ熙成親王後龜山帝ナリ、然レバ此熙成親王ハ、正平十六年以前ニ既ニ皇太子ニ立給ヒシナリ、何ゾ正平二十三年八月ノ東宮寬成親王長慶院ノ御弟ト爲スコトヲ得ムヤ、

大乘院日記目錄ニ應永元年八月一日大覺寺法皇崩五十二號二長慶院一ト云ヘルニ依テ推算スレバ、興國四年癸未歲ノ降誕ニ當ル、是御母勝子女御ハ關白內大臣經家未ダ十二歲其妹君ナレバ御年僅ニ十歲許ナラム、皇子ヲ誕生シ給フベキ御齡ニアラズ、殊ニ又御入內モ在ラザリシ前年ナルベシ、今意フニ此女御ハ、正平三年頃、十五歲許ニテ女御ニ參リ給ヒ正平五年庚寅歲ニ、十七歲許ニテ熙成親王ヲ產給ヒシナリ、然ラバ此正平五年前ニ寬成親王ヲ產給フベキ餘年アラジ、之ニ依テ長慶院ノ崩年五十二ハ、四十二ノ寫誤ナリトハ云ヘルナリ、崩年四十二ナレバ、正平八年癸巳歲ノ降誕ニ當ル、後龜山帝三歲ノ御弟ナレバ、嘉喜門院御歌卷ノ八月春宮ニモ、關白大臣經嗣荒曆ノ御舍弟爲二東宮一ニモ能合ヘリトス何ゾ誤寫五十二ヲ固守スベケムヤ、抑大乘院日記目錄ハ、予往年大

僧正尋尊自筆本ヲ熟覽セシニ、疎忽ニ書集メタル者ト見エテ、謬誤極メテ多シ、今南朝ニ關係アル非擧ヲ聊示シ置ムニ明德五年ノ條ニ、二月二十三日大覺寺殿尊號太上天皇ト記シタルモ、此書中ニハ後龜山院ト長慶院トヲ混同シタル條多ケレバ、此條モ兩院孰レニ屬スベキ義カ明斷ナラザレド、荒曆ノ文ニ依テ、後龜山帝ノ尊號ナルコトヲ辨ヘ得タレド、若シ荒曆ノ明文ヲ見ズバ、長慶院ノ御事トモ誤ルマジキニモ非ズ、又應永二年ノ條ニモ、南主尊號太上天皇ト記シ、又應永九年ノ條ニモ、南主尊號ト記シテ、尊號ノ事、三箇年ニ渉ル、豈輕擧ニ非ズト爲ムヤ、又至德二年ノ條ニ、月日南方改元、元仲元年ト記シタルモ、事實ニ合ハヌ誤文ニテ、其實ハ南方ノ弘和四年甲子、北方ノ永德四年ニ南朝ハ弘和四年ヲ改テ元中元年ト爲サレ、北方ハ永德四年ヲ至德元年ト改ラレシナリ、水戶人ノ吉野考纂ニハ、南朝改元詔、卯月廿八日爲二元中元年一ト云ヘリ、又明德三年閏十月三日、南方主行二幸大覺寺一、（長慶院殿法皇）則御出家、南北御合體、一天平安南方元仲八年也、ト記シタルモ、閏十月三日ハ、二日ノ寫誤ナリ、則御出家ハ、後龜山帝ニモ、長慶院ニモ、相當ラザル无稽ノ妄言ナリ、元仲八年ハ元中九年ノ寫誤ニテ元中ヲ元仲ト誤リ、九年ヲ八年ト誤リタルナリ、南朝ニ元仲ト云フ年號ハ有ルコト无シ、又旁書ノ長慶院殿法皇ノ六字ハ、甚心得難シ、當年ハイマダ御出家ノ事アラザルナリ、斯ク誤寫謬說ハ此外ニモ猶多々アレバ、長慶院ノ崩年五十二モ、實迹ニ相合ハザルコト前條既ニ辨明セルガ如クナレバ、事實ニ徵證シテ、五十二ハ、四十二ノ寫誤ナリト決定セシ所以ナリ、誤寫ハ此書ノ通例ナリ、何ゾ五四ノミナラムヤ、三二モ、九八モ、亦其誤ヲ襲ネタリ、四十二ハ是大乘院原本日記ノ實數ニシテ五十二ノ如キハ既ニ事實ニ合ハズ、尋尊目錄ノ誤寫ナルコト瞭然タレバナリ、

後龜山帝ノ御齡ハ、醍醐寺地藏院法印房玄御記ニ、觀應二年（〇正平六年事）卯月三日、皇子（御年二歲）御着袴御祝云々、トアルト、中園太政大臣公賢ノ園大曆ニ、觀應三年（〇正平七年也）五月廿五日、或云和州帝脫屣、三歲皇子踐祚之由也、合戰即自臨二戰場一可レ被レ添レ勢之料歟、トアルト、一條關白左大臣經嗣ノ荒曆ニ、明德五年二月廿三日、癸巳南方先主（大覺寺殿、御年四十五、）有二太上天皇尊號云

タ-トアルト、此三書ノ御年符節ヲ合セタルガ如クナレバ、明德五年ニ御年四十五ハ、是正確ナル實數ナリ、何ノ疑シキコトカ之有ム、之ニ據テ攷フレバ、實ニ正平五年庚寅歲ノ降誕ナリ、津久井尙重ノ南朝編年紀畧ニ、正平二年丁亥五月三日降誕、ト云ヘルハ、旣ニ三年ヲ誤違ヘタリ、今採用フベキニ非ズ、又醍醐寺三寶院大僧正滿濟日記ニ、應永三十一年四月十二日、〇丁巳也朝雨、夜陰雷鳴、中畧大覺寺法皇崩御雷鳴最中云々ト見エ、無二鈔ニ、應永卅一年四月十二日後龜山崩ト見エ、和漢合運圖ニモ應永卅一、四、十二、崩ト見エ、南方記傳ニ、應永三十一年夏四月十二日、小倉殿崩御、御おくりな後龜山院、ト見エタルヲ、前件三書ノ正平六年ニ二歲、同七年ニ三歲、明德五年〇應永元年也ニ四十五歲ノ南帝ハ、此應永卅一年ニハ御齡七十五歲ニテ崩御ナリシナリ、又後龜山帝異腹ノ御弟兵部卿師成親王、釋竺源與惠梵、應永卅二年ノ新葉集奧書ニ、斯集南朝慶壽院法皇御在位之時詔於予伯父中務卿宗良親王ニ而、所レ被レ令レ撰也、ト見エタル慶壽院ハ、後龜山帝御晩年御在世ノ間御座マシ、仙洞ノ御院號ナリ、後龜山院トハ、崩後ノ御追謚ナリ、此仙洞慶壽院ハ、應永卅三年丙午九月、臨川寺住持月溪中珊ノ寫傳ヘタル、嵯峨中諸寺院繪圖ニ勘フルニ、後醍醐天皇ノ皇子世良親王ノ御墓堂、三會院今ハ臨川寺内ノ北隅ニアリノ東側ヲ流ル、芹川副ノ小路ノ東地ニ在リ、川ニ向ヘル西面ニ門アリ、東隣ニ大雄寺アリ、是後龜山法皇御晩年御幽棲ノ仙洞御所ニテ、此慶壽院ニ崩御アリシナリ、小倉殿ハ、法皇モ暫シコソ、御座マシヽカ、後ハ弘和元中ノ皇太子良泰親王ノ御所ニテ、其王子王孫モ此ニ住給ヒテ、小倉宮ノ名ハ、世ニ名高ク聞エタリキ、仙洞慶壽院ハ、法皇登遐ノ後ハ、皇子ノ禪僧海門和尙承朝賜ハリテ、遂ニ禪寺ト化リ、天正年中迄ハ見存シタリシ事、京都諸司代前田玄以ノ、慶壽院ニ與ヘタリシ文書ヲ見テモ明瞭ナリ、

後龜山天皇ハ、御在位二十四年、建德、文中、天授、弘和、元中、ノ五年號ハ、是皆天皇御治世中ノ年號ニテ此廿四年間ニ、寶祚ハ動キ无カリシナリ、然ルニ足利氏ノ花營三代記ニ、應安六年〇文中二年也八月二日、南方奉レ讓ニ位於御舍弟宮ニ之間、相ニ副三種神器ニ沒ニ落吉野ニ、ト記シタルハ、是足利軍人一時ノ誤聞ヲ取テ

記シタル處文ニテ、南朝ニ讓位ノ實跡无シ、三條大納言實豐、今年ノ日記、八月十三日條ニ南方主上以下、去十日沒落云々、此間御座天野、河内國賊又云南方主上以下御在所不分明、多分說者吉野云々、ト見エ、又嶋嶺雜事記ニモ、應安六年八月十日、天野御所沒落了、合戰有之近習之僧俗奉供奉云々、トハ見エタレト並ニ讓位ノ義ヲ記サス、若シ實ニ御讓位ノ擧アラハ、足利氏ノ三代記ヨリモ、三條大納言ノ日記ニコソ、先ツ記サルヘキ事柄ナルニ、讓位ノ義ハ露記サレサリシハ、是足利軍人一時ノ誤聞ニ出テ、无實ノ謬傳ナリシコト、明瞭ナレ、何ソ文中二年ニ、御讓位ノ義アラムヤ、又實ニ御舍弟宮寬成親王ニ帝位ヲ讓リ給ヒシナラハ、三神器モ亦、讓リ渡サルヘキニ、後龜山帝御自ラ神器ヲ擁シテ、吉野山ニ遷幸ナリシハ、是正ニ御讓位アラサリシ確證ナリ、又其始、後村上帝ノ皇太子トシテ、御受禪ノ後、建德元年正月、十かへりの花さくまでと契るかなわが世の春に相おひの松、ト詠セ給ヒシ後龜山帝御製ハ新葉集ニ載ラレタレハ、建德文中天授等ハ、皆後龜山帝ノ御代ニシテ、長慶院ハ皇太弟東宮タリシ事、當時ノ古記實錄ニ據テ亦瞭然タリ、或ハ長慶院ヲ御兄トシ、後龜山帝ヲ御弟トシ、文中二年八月二日、後龜山帝ハ、長慶院ノ御讓ヲ受給ヒシガ如ク云ヘルハ、南朝御兄弟ノ順次ヲダニ能辨ヘサリシ、西山内府滿季ノ臆測謬系ニ註ラレタル、无稽ノ妄說ナリ、此文中二年ノ北方應安六年八月ノ事蹟ハ、八月二日、後龜山天皇ハ、天野ノ軍事ヲ、御弟東宮寬成親王ニ御委任アリテ、一時ノ難ヲ吉野ニ避給ヘルコトヲ、北方軍人ノ傳聞誤リテ、帝ヲ御弟ニ讓リ給ヒシコトノ如クニ云觸タル者ナリ、何ゾ此時ニ御讓位ノ事在ラムヤ、此後ノ文中三年、天授六年、弘和三年、元中九年モ、皆後龜山天皇ノ御治世ナリ、東宮長慶院ハ、弘和元中ニ太上天皇ノ尊號アレドモ、一日モ帝祚ヲ踐セラレシ實迹无シ、是後龜山天皇ハ、唯元弘三年十二月七日尊號詔書ノ前例ヲ遂行ハセラレシナリ、何ソ長慶院ニ踐祚ノ事實在ムヤ、此故ニ南北御和睦ノ後、足利義滿ニ初テ御對顏ノ時ニモ、彼御舍弟、於テ南方ニ爲リ東宮ト荒曆ニ記サレタルニアラスヤ

南朝御三代ノ天皇御謚號ハ、皆古前帝ノ御謚號ニ、後ノ字ヲ冠ラセテ、後醍醐、後村上、後龜山トソ、

御追謚アリケル、後龜山帝ノ如キハ、御在世中ニハ慶壽院ト稱セラレシカ、崩後ニハ後龜山院ト御追謚アリケリ、是南朝御一代ノ天皇ニ御座シマシ、ガ故ナリケリ、特リ長慶院ニハ斯ノ如キ御追謚无ク、唯御在世中ノ御院號ヲ永ク用ヒラレテ、三帝ノ如キ御謚號アラザリシハ、是御一代ノ寶祚ヲ践給ヘル天皇ニ非ザリシ確證ナリトス斯ク御謚无キ一事ニ就テモ眞實天皇ニ非ザリシコト明斷ナラズヤ、

皇年代私記、同略記等ノ、光嚴院ノ首書ニ傳ハリタル、元弘三年十二月七日ノ詔書中ニ、令避ニ儲位於青闈之月一、伴ニ仙遊於射幗之雲一、仍雖レ無ニ准的之舊蹤一、加以ニ禮制之崇敬一宜下上ニ尊號一爲中太上天皇上ト見エタル明文ヲ熟讀シ奉リテ、後醍醐天皇ノ、前東宮量仁親王ニ尊號ヲ授ケラレタル叡慮ヲ、伺知ルベキナリ、鎌倉ノ北條高時ガ暴威ヲ振テ、天皇ヲ遠島ニ遷シ奉リ、東宮ニ踐祚即位ヲ我儘ニ行ヒシハ、皆此東宮ノ御意ヨリ出タルニハ非ザルナリ、又足利氏ノ黒衣宰相タリシ三寶院大僧正滿濟自筆日記ヲ見ルニ、永享五年十月廿三日ノ條ニ、可ニ出京一之旨被レ仰間、押ニ目所勞一出レ京參ニ室町殿一御對面、條々仰子細在レ之、中略觀應年中、光嚴院、光明院、幷ニ時ノ國主院崇光、以上御三人、南方ヘ奉レ取、長御子孫可レ被レ斷ニ王位ノ御望一之由、及ニ御告文一トアリ、大乘院日記目錄ニハ、觀應三年○正平七年也閏二月十九日、八幡行幸 廿日四主御同車光嚴院、光明院、崇光院、東宮直仁御ニ幸南方一、義詮被レ責レ之京都沒落、江州ニ下ル、三月十一日自ニ江州四十九院一義詮進ニ發于京都一、十六日、遷ニ下京一 二十四日奉レ責ニ八幡御陣一、五月十一日、赤松、尊氏、奉レ責ニ八幡御陣一、主上御沒落、內侍所先爲行ニ幸河內東條一光嚴院以下四主、奉レ遷ニ吉野奥加名生一了、ナド見エテ、賀名生ニ五年許モ幽閉セラレ給ヒシカ、後村上帝ノ勅諭ニ應シテ、北方三院ノ御子孫ハ、長ク王位ノ御望ヲ斷ルベキ旨、御告文ヲ書テ、南朝ニ進セラレタル御事ニゾ在リケル、皇年代私記、同略記等、崇光院條ニ、觀應二年正平六年十一月七日奉レ廢レ之、武將和ニ睦賀名生君一、中ニ行之一、廢ニ觀應號一、爲ニ正平六年一、ト云ヘリ維斯辛卯歲ハ、天下一統シテ、正平六年ノ徽號ヲ遵奉シタルナリケリ、

足利尊氏ハ、朝敵ノ名ヲ蔽ハムガ爲ニ、院宣ヲ申下シテ、高大ノ御恩ヲ蒙リタル光嚴院、又光明院、崇

光院、三主ノ御難ヲ救助ケテ、吉野ノ奥ヨリ取返シ奉ラムトモ爲ズ、暫シ先主ナリシ京都ノ傍ヨリ、十五歳ナル諸王ヲ尋出シテ、尊氏ガ我意ニ任セ、强チニ藤原氏廣義門院ノ敎命トテ、僞ニ北主ト取立タルハ、先院ノ御讓ニモ非ズ、傳國ノ三神器モ无シ、彼後村上院ノ如キハ、先帝ヨリ御讓ヲ受テ、實祚ヲ踐給ヒ、三神器ヲ傳給ヘル正統天皇ヲサヘニ僞朝ト注シタル、西山内府滿季ハ、先主ノ御讓モ无キ、維斯御代ツ、何ト稱ムトスル者ゾ嗚呼。サレバ後崇光院ノ椿葉記ニモ、父の御讓りにもあらで、武將の計らひとして申行ふ、ト書セ給ヘリキ、斯壬辰歳ハ、天下統一ノ正平七年ニテ、後龜山院天皇降誕ノ後二年、長慶院上皇降誕ノ前年ナリケリ、

上件引用セル古記實錄ノ文義ヲ能々玩味シテ、當昔ノ時勢事情ニ通熟シテ、意ニ諒ニ會得スベキナリ、

明治三十六年十月九日　　靖齋陳人善臣謹識

室松岩雄
古内御千代
辻陳雄
保持照次
校

明治四拾一年四月五日印刷
明治四拾一年四月八日發行

定價金參圓也

校訂編輯者　室松岩雄
東京市麴町區飯田町五丁目八番地
發行者　目黑和三郎
東京市神田區錦町三丁目一番地
印刷者　長谷川辰二郎
東京市神田區錦町三丁目一番地
印刷所　神田印刷所
（電話本局一九五九）

東京市麴町區飯田町五丁目八番地
發行所　國學院大學出版部